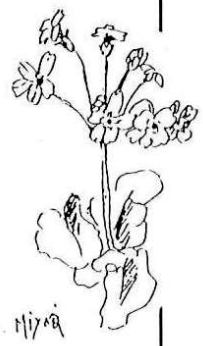
まんじ

No. 87

2003. 2 . 1

まんじ第八十七号　目　次

ダイドス論……新井　宏…4
まんちょさの銭湯にて……大和禎人…10
短歌行雲流水①……石黒修身…12
日本の金融システム再建への提言……隆　恵…14
桜人形（哀愁武士道のうち）……三戸岡道夫…25
霧の彼方に（一）……太田精一…32
和泉式部譚（二）……島津隆子…42



都市銀行「爆発物処理判」（四）……宅見勝弘…54
黒　船（五）……太田和貞…60
シナリオ龍化妖姫（完）
——周の幽王伝——……相原精次…69
体当り戦法を強制された
神風特別攻撃隊の人びと（十）……千坂精一…77
紙透家の人びと（十六）……紙透寛夫…85
漢詩　潮騒録（三十五）……鯨　游海…90
千篇萬律……編　集　子…95
表紙・カット……宮城正彦
カット……鈴木國男
……清水トム



ダイドス論

新井宏

かって研究開発を担当していた頃、盛んに提唱していたのが「ダイドス論」である。気取って「DIDOS論」などと書いたこともあるが、もちろん米語の「悪ふざけ」の意味ではない。語呂がディオス、ダイオスに通じ、何となく印欧語感があるが私の造語である。要は研究開発のノウハウを、①ダボハゼ、②イモヅル、③ドロナワ、④スッポンと唱え、その頭文字をつなげただけのものである。

いずれも日本語としてはあまり上品な語彙ではないが、続けると結構しゃれていて、社外でも受けた。研究開発という仕事には極めて個性的な部分があって、その心得とかノウハウを一般化して伝えようとすると、白けてしまうが、こんな簡単な形なら多少伝わるものがある。しかもこれを人生論として捉えてもある程度通じるところが面白い。私の人生のバターンそのもののような気さえする。

ダボハゼのごとく飛びつき
面白いことを見つけたら
イモヅル式に同類項を手繰り
焦点を定めたら
ドロナワ式に準備を整え
喰らいついたら
スッポンの如く離なさない

これだけで十分に通じる。だから「ダイドス論」などと称して、解説を加えるのはまったく野暮なことだ。しかしそれを承知しながら、やはり何かを書いて見たい。ますます粋な世界から遠ざかる。

ダボハゼ

ダボハゼ、すなわち何にでも手を出す野次馬根性、そしてもうすこし上品に言い替えれば旺盛な好奇心、それが若さの証拠である。この野次馬根性こそが、研究開発ばかりでなく、人生を謳歌する鍵だと思っているが、意外に賛同してもらえない。野次馬と言ってしまうと、どうもその裏側にある無責任さや尻馬に乗る性質ばかりが目について、評判が良くないのかも知れない。

しかし純真な子供は好奇心のかたまりである。それがいつの間にか大人になると衰えて、ダボハゼのごとく、やたら飛びついて、物笑いになるのを恐れ始める。それがばかりでなく、他の人のダボハゼ行為に冷や水をかけ、せっかく燃え上がり始めたフィーバーを鎮める側にまわってしまう。これが研究開発では最大の敵である。

好奇心を維持し続け、何事にもダボハゼのように喰いつく風土を作るにはどうしたらよいのだろうか。それは研究開発に携わる者の共通の課題で、そんなに容易なことではないのは承知している。妙案などあるはずもないが、経験によるとそのノウハウは、どうも無責任になることにあるらしい。

ところが無責任になると云うことがなかなか難しい。小さい時から他人との信頼関係を大切にするように育てられ、いつのまにか無責任になることには、生理的な嫌悪感を感じるようになっているからである。しかしものは考えようである。ひとつの考え方を示してみよう。

勝負事には賭率と云うものがある。賭率が同じなら誰でも本命を買うに決まっている。だから、何か新しいことをやろうとする時、賭率を同じにすると現状維持派が多数を占めるのは自然の成り行きだ。まじめに考えれば、今までにできていなかったことが、そう簡単にできるわけがないからである。

ところが賭率を十対一に設定すると、見える世界が変わって来る。百パーセントの可能性を前提にして問いかければ、責任を持ってイエスとは云いかねるが、十パーセントくらいの可能性で良ければ肯定的な答えが返ってくる。無責任になるとはこのようなことなのである。その見返りは十倍以上の果実である。

人生にはこのような形で無責任になることが許される分野がある。その代表が賭事の世界だ。いや賭事ばかりではない。趣味や研究もその世界に入る。いずれも人生で最高に楽しい遊びであることが共通点である。小説家や画家、作曲家それに研究者は、わずかな成功の可能性に人生をかけているからこそ魅力的なのだ。むかしは研究をすることなど貴族にだけ許された特権であった。

ところで、好奇心を育てるのにどうしたら良いかがしばしば話題になる。しかしこれは順序が逆で、好奇心を失わないのにどうしたら良いかと設問しなおさなければならないだろう。もともと子供は好奇心の塊なのだから。だから小学校の先生の役割はとても大きい。

小学校四年生の時、疎開先の小学校にピアノが運び込まれてきたことがあった。夏休みで誰もいないその薄暗

い教室にどうして入って行ったのか覚えていない。しかし黒塗りのピアノなのにその一部が桃色に映えているのがとても不思議であった。コスモスの花がぼんやりと反射していた。

黒塗りのピアノが桃色に変わって見える。その小さな発見に興奮して、しばらくの間あれこれと物を持ち込んでは実験を続けた。かぼちゃの葉はちゃんと緑色に映った。そのことを夏休みの宿題として書き上げて提出したのが私の人生初めての論文である。これを担任の新保先生がとてもほめてくれた。

このような出来事が、現在の自分とどう関係しているかわからない。しかし、この大人からみれば、馬鹿げた作文をほめてくれた新保先生がすばらしかった。

だから私もぜひ一度でいいから学校の先生をして見たかった。できれば小学校、それが無理なら、中学校か高校でも良い。それも駄目なら大学でも良い。そして今大学の先生の真似事をしながら、わがダボハゼ学を熱く語っている。

イモヅル

ダボハゼで飛びついてみた結果、何か面白いものに出会ったらどうするか。誰でも自分の発見に夢中になるはずである。それが全ての始まりであるが、ここで重要なノウハウは、そこでいきなり突き進むのではなく、そのまわりをいったんきょろきょろ見回して見ることである。縦横、斜め、前後、左右、上下と、とにかく類似項を探すと良い。

もし三戸岡道夫氏の『二宮金次郎』に感銘を受けたのなら、片っ端から氏の書き物を読み漁る。きっと最初に出会ったものと同じ位に、あるいはそれ以上に素晴らしいものが見つかるはずだから。それから他の人の書いた二宮金次郎を漁ってみるのも良いだろう。また手法に注目して、歴史上の人物に経済面などから新しい光を当てたものを探すのも一方法である。もし有名な人物でまだ誰も新たな光を当てていなかったら、それこそ何か出番があるかも知れない。

信じると良い。面白いものには必ず面白いものが連なっていると。それが法則である。良い人脈には良い人が連なっているのと同じだ。だからせっかく良いネタを見つけたら、これを何倍にも何十倍にもしない手はない。しかもこのイモズル式は特殊な才能を必要としなくて誰でもできる。これによって、何かの目的を達成できる確率が十倍にも百倍にもできるのに、このプロセスを省略している人が意外に多いのは残念である。

ところで、イモズル式に最も必要なのは、視点の異なる人とワイワイやって手繰るべき方向を早く見つけ出すことである。そして次は迅速な情報収集とアイディアの配列表の作成。

今はインターネットの時代で、キイワードが判れば、ある程度までは簡単に情報を入手できる。膨大な私設図書館をもっているようなものだ。そしてそれらの情報に順序をつけて並べて、欠けている点を探しだす。

人間には誰でも、順序や数にこだわる性格がある。完結性にこだわる性格がある。一、二、三、四、五と数えて、六がなく七に続くと、どうしても六をうめて見たくなる。初夏の花が美しい山に秋に登り、紅葉映える山に春に登って、ひたすら百名山のピークハントをしている中高年がたくさんいる。比叡山や大峰山の千日回行に見習い、地元の山を千回登った人たちも珍しくない。有名な谷川岳では三千回登頂目指し、すでに二千回を越えた人がいると聞く。イモヅル式の面白さはこの数へのこだわりと複合すると倍加される。

例えば普通、誕生日は年に一回である。しかし韓国では陰暦の誕生日もある。さあここからは縦横斜めの応用問題だ。一万日誕生日、二万日誕生日を祝ったらどうだろうか。実は私は二万日誕生日をドイツのジーゲンで妻と共に祝ったことがある。そして三万日の誕生日を無事に祝えたら人生最高だ。八十二歳とちょっとになるはずだ。

小学校の時の久米準先生もそのように数にこだわっている方である。小学校の教科書に出ている日本の山を片っ端から登った。それが済むと外国の山まで足を伸ばす。定年になったときには、さあこれから一億歩を歩くと宣言して、十三年七ヶ月かけ、ことしの十一月十五日にこれを達成した。一日平均二万歩以上である。尋常のこだわりではない。

私も万歩計と毎日格闘している。つけ始めて今年で九年、こんどの正月には五千万歩になる。地球ひとまわりには少し足りないが、このこだわりがあって健康を維持している。久米先生の影響のお陰かもしれない。

久米先生に出会ったのは、疎開から東京に帰った小学校六年生の時。先生はまだ二十歳だったのではなかろうか、よれよれの詰襟学生服を着ていた。授業ではしょっちゅう吉川英治の読み物を何時間も朗読してくれた。まだ世の中が固まらず規制のゆるい良き時代であった。その中で歴史好きの少年が何人も誕生した。

だから私もぜひ一度でいいから学校の先生をして見たかった。できれば小学校、それが無理なら、中学校か高校でも良い。それも駄目なら大学でも良い。そして今大学の先生の真似事をしながら、わがイモズル学を熱く語っている。

ドロナワ

最近ではドロナワと云う言葉は死語化しつつあるようで、若い人には通じない。泥棒を見てから縄をなうことから、事が起こってから慌てて準備すること……手遅れ

だ、と云うのが本来の意味であろう。しかしここで用いているドロナワはそんな意味ではなく、事が起こってから慌てて準備することを推奨することなのである。ドロナワ式で良いから急いで体制を作ろうと云っているのである。

もともとせっかく面白い事が見つかっても、それを煮たり焼いたりする道具が準備されていない方が普通である。そんな時にはなんでも良いから、在り合わせの物をかき集める。知識が足りなければ、付け刃で間に合わす。とにかく気が抜けてしまわない内に体制をつくり上げるスピード感が重要だ。その時のノウハウは目標だけを見つめて、徹底的に手抜きをするアプローチだ。

一般には、そんな日のために精緻な網を張って待っているのが高級で実力が高いと思われている。そう思っている人たちは、兎が飛び込んでくるのだけを待っていて、獲物が兎以外だと見向きもしない傾向がある。これでは物の成る確率は高くならない。鹿でも鴨でも猪でも、何でも良いから、獲物を見てからあわてて準備する。これが最も安上がりで、もっとも物が成就する確率が高い。

世の中には専門というのがあって、専門外の人が急に勉強してもとても追いつけるものではないと錯覚している人が多い。しかし局所戦なら三日間も勉強すれば、専門家と伍して行ける。すこし体系立った分野でも三ヶ月も勉強すればそれで十分である。

もちろんそんな程度では、専門家なら誰も陥ることのない間違いをたくさんおかすことにはなる。しかし、一方では専門家が思いも寄らない発想に至ることもしばしばある。研究や開発の視点から見れば、その方にむしろ分がある。

中学校時代の坂永先生がそうであった。英語の担当であったが、とにかく若さと情熱あふれる先生で、いつも走り回っていた。未熟さゆえに走りすぎては、生徒に迷惑をかけたと謝り、また走り出していた。失敗ばかりしていたが、リカバリーが早く、生徒には一番人気があり、結局一番実績をあげていた。校長先生で定年退職してからも、語学学校を経営したり、最近では中高年者の結婚紹介業まで手がけている。だからドロナワのできる人こそが実力者なのである。

その時の経験から先生は新米ほど良いと思っている。経験豊かになり、教え方がうまくなると、生徒に遠回りをさせまいとして、無意識の内に好奇心を制約し始める。それに対して、新米らしく失敗ばかりしている先生であっても、子供たちはその後姿を良く見て育つ。それが真の教育ではないだろうか。だから子供に経験不足の新米先生が付いたと心配する必要はない。むしろそれが最高の先生なのだから。

だから私もぜひ一度でいいから学校の先生をして見たかった。できれば小学校、それが無理なら、中学校か高校でも良い。それも駄目なら大学でも良い。そして今大学の先生の真似事をしながら、わがドロナワ学を熱く語っている。

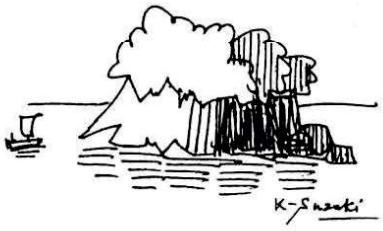
スッポン

この言葉は、もしかしたら野次馬根性とか好奇心とはなじまない面があるかも知れない。しかし野次馬になれる人は、何かに拘れる人でもある。ダボハゼをし、イモズルをたぐり、ドロナワ式に体制を調えても、思ったような成果が出てこないのが人生である。薄ぼんやりと先が見えているが、なかなか核心に迫まれない。そのもどかしさの中で、ともすればあきらめたくなるのが人情である。しかしそこで、スッポンの如く喰いついたら放さない。それが物の成就する最重要な過程である。

私も東アジアの古代計量史にのめりこんで三十年以上になる。その間とにかくスッポンのように喰いついたら離れなかった。そのお陰で、いま韓国での研究生活をおくることができ、期待以上の成果を挙げ続けている。

久米先生も定年後一億歩の目標を達成した後も、さらに三千万歩の目標に向かって歩み続けている。定年を迎えつつある多くの教え子たちに対してさえ、いまだにエールを送り続けている。

だから私もぜひ一度でいいから学校の先生をして見たかった。できれば小学校、それが無理なら、中学校か高校でも良い。それも駄目なら大学でも良い。そして今大学の先生の真似事をしながら、わがスッポン学を熱く語っている。



まんちょさの銭湯にて

大和禎人

（まんちょさ）という愛称で呼ばれる当のお人のフルネームは宮坂万治さんと言った。この地方独特の呼び方なのである。

「やい、万治さ」

相対して語りかけるにしても、こんなふうに（さ）がついた呼びかけになる。（やい）は少し乱暴のようだが親愛の響きがあって、決して相手に失礼にはならない。

「やい出会えや」

客が来て、家内のものを呼ぶ時にも、こんなふうに、（やい）が使われる。方言独特の味に思える。

ところで、（まんちょさ）では（ちょ）が余分に思えるが、独特の言い回しで余録がついたあんばいに思えるが、（ちょ）がなぜ加えられたものか、親愛度にいっそう愛敬を添えて聞こえるのだった。

その（まんちょさ）が村にたった一軒の銭湯を経営していた。芳川村村井町というのが正しい地名で、字名として言い古り、村の中に町がある案配は奇妙に思われるが、実際の地名だから仕方がない。松本市に通じる往還に両側一重の、家並みが続いていて、大方農家なのだが町の体裁を呈して、村であり、しかも町でもある実態をそなえていた。塩尻で中央線と別れ松本平に、広丘、村井、そして松本に達する篠ノ井線が町並の西を走っている。後に南松本の一駅を加え、やがて都市化し、今は住宅街一区画を西に加えるなど、もはや往時の村井ではないが、この挿話は戦争末期の一駒を写す掌編である。

その昔のありようでは川下呼んだ疎水が町並と畑地の間を流れていて、それは農具を洗い、よろず洗いものの用水として役割を果していた。この川下に添って隣家の裏手を通り抜けたところに（まんちょさ）の銭湯はあった。疎開者をこの村方でもかなりの人数を迎えていたはずで、わたしの家族もご他聞にもれず、そうした境遇であったから、この銭湯の存在はありがたかった。

わたしたちの家族は当初母屋に寄寓していたが、今は裏手の別棟、蚕室の建物に生活を移していた。母屋のもらい風呂をあてにするより、この銭湯があることで、気がねない入浴によるわずかな保養を許されていたのだ。

洗い場の中央に六角形の浴槽があるという変わった浴場であった。すでに燃料不足はこの地方にも及んでいて男女隔日の営業で、奇数日、偶数日を分けていた。

「出戻り娘だそうだ、奇麗な女なのに、色白でないのが惜しいけど、どうしてかねぇ」

そうした噂は母のものだったが、その女性が番台を勤めていた。兵隊帰りの、独身者のわたしはそれとない関心の眼をその女にむけたとしても当然であったろう。

年齢のほどは分からないが、多分、年上であろう。小麦色の肌の女であったが、たしかに鄙には稀れの美人に相違なかった。わたしはそれとなくその人を眼で追うようになった。昼湯一番はわたし、大方相客はなかった。

戦況はいまや、いよいよの窮迫を伝えていた。機銃掃射をうけ、車体に弾痕明らかな列車の通るのを見たという村人があった。機体をはるかな高度に光らせ、飛行機雲を曳いて飛来し、飛び去るB29の機影を仰ぐこともまれでなく、都市空襲は意のまま、蹂躙を許す深刻な様相を迎えていた。七月九日の甲府市空襲の夜は空を赤々と焦がし、この村からも地獄の火のように望めた。

たまたま同じ日にソ連の参戦、対日宣戦布告という事態が伝えられている。工場疎開で当時、畑中に工場のあった中外製薬の窓下の道で、たまたまラジオの報道するニュースを聞き慄然としている。さらに八月六日に広島、次いで九日長崎に原子爆弾が投下される。

それより早い七月中頃、通告は十七日であった事実から、その翌日と思われる新聞の片隅の小さな記事として伝える連合国によるポツダム対日宣言の内容をわたしは読み取っていた。信濃毎日の記事であったろう。主権に触れることを避け、四島に限り領土は保全されるという内容であった。銭湯の板場でそれを読んだ。

（この条件なら、良いのではないか）

本土決戦を唱え、波打ち際作戦を呼号する軍部の方針のお手前、非国民的な感想であった。

わたしはそうした記事を読んだ後に浴場に入った。例の六角形の浴槽に身を沈め、われとわが身の肩を抱きしめた。無慮幾百万を知れぬ国民犠牲にかかわらず、わたしは無事でいる冥化を抱きしめる思いなのであった。

視線を湯気で曇るガラス戸を通して番台の方に走らせた。あの女の姿があった。色恋ではない。関心がそちらへ向いた事実は認めなければならない。この年の男子平均寿命は23・9、女性は37・5であったという、酷薄な戦時下にかかわらず、それは哀しい人間の性であり、正常な心理によるものであった。

（H一四・一一・一四）

短歌

行雲流水（一）

石黒修身

いくばくの矜持もつらん車中にて
　慢画本読む壮年たちは

車中でよく見かける情景で、心ある人は眉を顰めるだろう。尤もこの言い方は慢画文化を唱える人からは批判を受けそうだ。これも年寄りの冷水かも知れない。

自省せよ矛振りかざし示威をする
　傲れる思想パクスアメリカーナ

近似米ブッシュ政権の独善振りが目立つ。十四年八月の広島、長崎両市長の訴えは日本から発した警告として世界中に響いて欲しい。

たぐいなき豪雨（あめ）に溢れり美しき
　調べを生みし碧き流れが

昨年八月中欧を百年に一度の豪雨が襲った。ヴルタヴァとその本流エルベ、そしてドナウの諸川が溢れた。これらの川をモチーフにした交響詩は多くその調べは何れも美しい。

恋唄に綴られし町の風の盆
　胡弓嫋々乙女らは舞う

作家高橋治の小説「風の盆恋唄」は越中八尾の風の盆を舞台にした中年の悲恋心中ものである。これに触発されて作詞家なかにし礼が同名の演歌を作り石川さゆりによりヒットした。小説のくだりと歌のイメージを抱き乍ら見る乙女らの舞は感興深かった。

「摩周湖を見て死ね」と云いし人あり
　一陣の霧晴れて澄みたり

この言葉を残したのは函館出身の作家八木義徳であったと記憶している。昨今の観光常識からは少々大仰な表現だが晴れた摩周湖を見るのは幸運と云ってよい。

スクリーンに周平の想いしみじみと
　「たそがれ清兵衛」映画となりて

故藤沢周平の時代小説はしみじみと心に沁みる。最近山田洋次の監督で「たそがれ清兵衛」が映画になった。小説で云う海坂藩の下級武士の生きざまがサラリーマン壮年層の共感を得ていると云う。

この汽車に乗りたかったと嬉しげに
　含羞の受賞者（ひと）はのぞみ号に座す

ノーベル賞の田中耕一さんがのぞみ号で移動する際、記者に対し「この汽車のグリーン車に乗るのは初めて」と応じたのは如何にも素朴で微笑ましい。

凡庸で有漏の身なりし来し方を
　いま愛しみ古稀を迎えん

今年で七十歳になりいわゆる古稀を迎える。平凡であり乍らそれなりの煩悩があった過去は必らずしも疎ましいものではない。辛かったこと苦しかったことも今は良い想い出である。

京洛の錦繍のときは束の間に
　紅葉の庭を如何に巡らん

この年の京都の紅葉は良いとのニュースを聞き、ピークの十一月中旬にまる二日観光タクシーに乗り紅葉の名所を駈け足でまわった。

深紅なる雲海のごとし洛南の
　古刹の庭を埋める紅葉は

東福寺の境内にかかる通天橋から見下ろす紅葉は絶景であった。翌朝のＮＨＫて紹介放映されていた。

日本の金融システム再建への提言

隆　恵

金融機関の不良債権処理が未了のため、充分なる自己資本の下の円滑なる企業金融が阻害され、結果として日本経済の景気回復およびデフレ経済からの脱却が出来ないと言う論調が近時横溢している。

特に竹中金融担当大臣の就任を機に、金融機関への信頼性回復と正常なマネーフローの回復を早期に実現すべく、ペイオフを二年延長する傍ら金融機関に厳格なる資産査定と欧米並みの会計基準に基づく適正な償却・引当計上を行わせ、その結果の公的資金の投入は思い切って行うという政策に転換した。

この政策の狙いは、金融機関の不良債権を産業再生機構にシフトして、金融機関を不良債権処理から完全に解放させて正常な資金供給を復活させる一方、再生不能な企業の整理淘汰を進めつつ、再生見込みのある企業を当該機構で救済・蘇生させ、もって日本の産業構造の大転換を行おうというものである。

この政策は理論としては正しいが、戦後約六〇年の日本の産業構造の大編成という遠大なる計画であり、相当長期間を必要とするので短期間での経済効果は期待できない。

従って、早期のデフレ経済からの脱却策については並行的な施策が必要である。

本来、デフレの最大の要因は需給のアンバランスにあるのであるから、その処方箋作成に当たっては国内だけでなく国際面での需給関係を冷静に分析した上で、諸政策を積極果敢に実施する必要がある。

この日本経済の再構築策については次稿で述べることとするが、仮に応急施策を採ったとしても経済活動の大前提となる正常な金融システムの再構築がなければ砂上の楼閣となる。これは過去一〇年の政策の失敗が実証している。

現在指摘されている金融機関の貸し渋り・貸し剥がしは確かに事実で、破綻寸前の企業への対応は当然であるも、生き残れるはずの中小零細企業が頓死を余儀なくされ、失業者の増加につながっているというオーバーキル現象は何とかしなければならない。

本稿では、正常な経済活動の前提である金融システムの現実とその再構築策について提言をしたい。

結論を先に述べると、現在の金融庁の「全金融機関一律」の「資産の自己査定制度」は改定し、大企業と中小企業の査定方法の分離と、国際的活動を行う大銀行と国内業務に特化している中小金融機関の査定基準の分別を行うべきと提言したい。

但し、後述するように大銀行を中心とした銀行の内部では弾力的な審査体制が消滅してしまい、企業の過去の業績如何で貸出の可否を決定する機械的な審査体制になってしまったので、この体制の立て直しには相当長期の期間が必要であり、仮にこの査定基準の改定を行ったとしても、今後数年貸し剥がし・貸し渋り現象は続くと覚悟する必要がある。

本論に入る前に、今日の金融機関の経営実態を理解するために、戦後以降の日本経済と金融の経過を再認識しておきたい。

(1) 戦後から高度成長期

戦後の復興期は、社会的インフラ整備のための公共投資主導経済に始まり、朝鮮動乱による鉄鋼・造船・石油化学・繊維等の民間設備投資および輸出振興経済、次に東京オリンピックを機とした高速道路・新幹線建設の公共投資及び自動車・バイク・電気製品等々の輸出主導経済により、完全雇用が実現され且つ給与水準向上による個人消費が旨く噛み合い、あの高度成長が達成出来た。

一方金融は、資本市場の未成熟と企業の自己資金の絶対的不足という背景から、公共投資の資金は郵貯を主体とする財政投融資が賄い、旺盛な民間の設備投資と運転資金のほとんどは金融機関が資金供給を行った。大銀行は預金だけでは資金不足につき、中小金融機関からのコールマネーに依存するという慢性的なオーバーローン体質になるほど資金需要が旺盛であった。

大企業の資金需要には政府系の開銀、興銀等の長期信用銀行、信託銀行、都市銀行および生命保険会社が対応し、一方日本の企業数の大半を占める中小企業に対しては、都市銀行、地方銀行、相互銀行、信用金庫、信用組合、政府系の商工中金・中小公庫等及び商社等が住み分けしつつ資金供給を行っていた。

この時期は、正に間接金融が絶対的地位を占め、大企業および銀行は相互の過小資本の是正のため株式の持合いを行い、銀行・企業間及び融資銀行間の相互のリスク分散のため、メインバンク制と各金融機関による協調融資制度が定着した。

(2) 高度成長期からバブル経済直前

日本の輸出主導型経済は、三六〇円の固定相場制による円安メリット、欧米先進国対比低賃金に起因する低廉価格によるものであったが、その結果は日本の貿易黒字の経常化による深刻な貿易摩擦を招き、輸出の自主規制を強いられる一方、一九七一年の円の大幅切り上げから始まった円高、及び毎年の大幅ベースアップによる人件費のアップが重なり、輸出偏重の経済政策から内需主導型経済への転換期を迎えた。

そこで、田中角栄の日本列島改造論に端を発した全国的な土建国家造りが開始され、全国的な用地買収による土地の値上がりと、数次のオイルショックによる石油・資材の高騰および人件費の高止まりからスタッグインフレーションが進行、傍ら変動相場制移行による急激な円の高騰、一方アジアの発展途上国による繊維・造船・鉄鋼等の急速な日本追い上げにより、輸出産業のダメージが徐々に進行していた。

この時期は総じて日本経済の低迷期であり、大量の国債発行による財政政策と金融緩和政策により、過剰流動性が内包されていた時期であった。

一方製造業の東南アジアへの生産基地シフトが始まり、米国の産業の空洞化を揶揄していた日本自身がその兆しを甘く見ていた時期でもあった。

金融は、設備投資の相対的減退、大蔵省による一企業に対する大口融資規制の実施、有力大企業の増資・起債による資本市場からの資金調達の多様化もあり、長期資金の専門銀行である長期信用銀行・信託銀行及び都市銀行は資金の運用難と利ざやの縮小に直面する状況が生じた。

一方に、金融業務のコンピュータリゼイションが本格化しその膨大な経費が負担となり、また多店舗戦略による物件費増と大量採用と高給与体系による人件費増が重なり、収益上極めて厳しい経営状態が現出しつつあった。

更に金融の自由化・国際化を目前に控え、金融機関の体質強化と整理統合が大蔵省の主要課題とされ、大銀行同士の水平合併及び大銀行と中小金融機関との業務提携が始まる。

こうした産業金融の変化による資金運用難と競争激化による利ざやの縮小化、一方来たる自由化と国際化に対応するための体質強化が急務となり、大半の大銀行はハイリスク・ハイリターンの専ら普通銀行と中小金融機関のマーケットであった中小零細企業・個人市場に殺到し始めるとともに、国際業務の拡充を図るべく大銀行はもちろん地方銀行・相互銀行までが競って海外進出し、低金利で世界中の非日系のソブリン・コーポレートにジャパンマネーとして貸しまくるのである。余談になるが、この採算度外視のジャパンマネーが国際決済銀行の自己

資本比率の制度化を誘発したそうであるから、今日の邦銀がこの自己資本比率の維持で悪戦苦闘している訳で、何とも皮肉な結果となっている。

(3) バブル経済

バブル経済は一九八六年から一九九一年にかけての約五年間であるが、その直前の経済・金融状況は低成長経済、過剰流動性、金融機関の資金運用難、土地の静かなる値上がりと諸要素が重なり正に発火点寸前であった。

大企業は、本業は低迷するも資金は潤沢という状況から、「財テク」で収益を補填し、「財テク」能力の有無こそ次代の成長企業だとされ、有能な財務部長が大いに持て囃されたのである。

資金の運用難に喘いでいた金融機関にとっては正に渡りに船であり、先ず大銀行が株式・土地を担保としたロット貸出を行い、これに乗り遅れまいとした中小金融機関が追従して、全国的な貸出競争が始まったのである。

一方庶民もＮＴＴ株の上場で株の妙味を味わい、兜町は毎日大商いの活況を呈し、土地・株・ゴルフ会員権・絵画・ワンルームマンションは買えば必ず儲かるという異常事態が現出する。

個人消費は、土地・株の実現益と含み益に浮かれて、高級外車・ゴルフ会員権・別荘・海外旅行にと大金を散財し、サラリーマンは潤沢な交際接待費で高級接待に酔いしれ、ゴルフ場とバー・ナイトクラブが活況を呈した。

この異常事態を、政府・経済学者・マスコミから企業・庶民に至るまで、日本経済の底力とか円の強さの象徴であるとか自画自賛していたのである。

金融機関は、このロットの短期資金融資で莫大な資金損益を獲得するだけでなく、系列の不動産会社・ノンバンクに直接融資だけでは満足せず、金融機関の系列会社同士へのクロス融資でこのぼろ儲けの投機にのめり込んで行く。

この過程で、金融機関は長年の経験則であった「他行横にらみ」が裏目に出て、投機資金の青天井の貸出競争を生み出し、短期間に相当数の金融機関が土地を担保に、不動産・建設・ノンバンクに大量の資金を貸し込むこととなる。

政府・日銀が融資の総量規制で沈静化に入ったときには、既に手遅れで一四〇兆円とも二〇〇兆円とも言われる資金が流れ込んでしまったのである。

(4) バブル経済の崩壊

日本経済は、バブル以前から低コスト・円安を武器とした輸出主導型経済が曲がり角を迎えて、需給アンバランスの経済下にあった上に、バブル崩壊後の一〇年余の間に台湾・韓国・東南アジア諸国更には近年の中国の国際市場への参画で、急速に製造業の海外シフトが加速化

することとなる。

経済の専門家でも、日本経済はバブルにより構造不況に陥ったとし、金融機関の不良債権問題を早期にクリアーすべきであると主張するが、確かにバブルにより金融機関と大半の企業・個人が資産デフレで体力を消耗したが、国内の需給アンバランスは「バブルに関係なく以前から」顕在化していたのである。

金融機関の経営は、系列の不動産会社・ノンバンクがバブル崩壊にはまる一方、大半の融資先である企業・個人が一斉に土地・株の下落による担保不足と返済不能に陥ったことから、過去に経験したことのない未曾有の経営危機に陥った。

勿論過去にも大型倒産は起こったが、興人・安宅産業等の例にしても散発的かつ一つの銀行に集中することなく、担保の土地の下落も少なく含み益の益出等により大過なく償却出来た。万一中小金融機関で経営の根幹に触れるような不良債権が発生したときは、大蔵省の行政指導・預金保険機構の活用で他行が支援乃至吸収合併するなどして信用不安を未然に防ぐことが出来た。

しかし、今回は一〇〇兆円以上とも言われる償却を実施し、この過程で大銀行から中小金融機関の二〇行余また大手証券会社・生命保険会社・火災保険会社が少なからず倒産したにも拘らず、未だに償却・引当不足が四〇兆円以上とも言われている。

次にバブル崩壊後の銀行経営の実態について述べる。

(1)メイン銀行制度の崩壊

長年のメインバンク制は、顧客の企業は勿論協調融資している金融機関にとっても、最終のリスクテイクをする銀行が存在するという信頼感が潜在的にあったが、今やどんな大銀行といえどもその余裕はなく、従って取引銀行のすべてが如何に己自身の不良債権を僅少化するかに専心し、顧客の経営状況と取引行の動向に疑心暗鬼になってしまい、既存貸出金の回収時期を窺っているのである。今や如何に先駆けて資金を回収するかが不良債権からの脱出策となっており、ましてや貸出増加には慎重になる。

(2)国際決済銀行(BIS)の自己資本比率規制

国際的に営業する大銀行は八%、国内のみで営業する金融機関で四%の自己資本比率の維持が必須条件とされ、未達成の金融機関の営業は認めないというルールである。

この比率維持は金融機関存続の生命線であり、現在の状況では増資など至難であるから、各金融機関は運用資産の圧縮で比率維持を目論むしかない。

結果として、貸し渋り・貸し剥がしの一因になっている。

(3)金融庁指導の貸出資産の自己査定制度

ペイオフの解禁、金融機関の経営の透明性確保即ち市場の適正評価観点から、全ての金融機関に一律の査定基準を課し、厳格な引当計上および償却を行わせ、その結果BIS比率を維持できない金融機関は市場から退場させるという制度である。

この制度は理論としては至極正当であるが、基本的な査定基準が過去三年の企業の決算実績に基づき、「赤字決算の有無」「繰越赤字の有無」「債務超過の有無」及び「担保の過不足」等で判断し、しかも大銀行も中小金融機関も一律同一基準であり、従前の個別金融機関ごとの独自の審査判断が排除されたため、基準外の企業にはどの種の金融機関も資金供給をしてくれない。従って倒産しかないという合成の誤謬が生じている。

結果として、これも貸し渋り・貸し剥がしの原因になっている。

従前は、金融機関が十分なる資金供給をしない企業には、取引のメーカー・商社がその商権を担保に決済の猶予乃至直接融資等色んな形態で必要資金を供給して金融機関の補完機能を果たしていたが、そのメーカー・商社自身が存続を掛けた厳しい経営を強いられている状況から、この資金ルートもほとんど機能しなくなった。

従って、金融機関から見放された企業は倒産しかない状況となっている。

(4)審査機能の本部集中化による個別審査の硬直化

バブル崩壊後の大量の不良債権処理と金融機関のリストラ推進の過程で、従前の営業店裁量の審査の存続は新たな不良債権の醸成につながるという恐怖、貸出資産の圧縮という経営方針、高コストにつく各営業店への審査マン配置の撤廃など、徹底した新規不良債権発生の水際作戦と営業店の経費削減策を実施している。

従って、支店長(大銀行は半数以上の支店に支店長を配置せず、副支店長に管理させている)を配置しているが、その権限を定型的な住宅ローンの受付業務のみに制限し、その審査は系列の保証会社に委託するという与信権限を最小限に押さえ込み、専ら受信業務だけに絞り込んでいる。

そもそも中央集権制は、組織の統制管理には最適である反面、中央の官僚・幹部エリートが権力を振るう一方本人達は保身と出世に専念するので、末端の組織と人間は活力を失うという最大の欠陥を持つ。

少なくとも企業経営においては、中央集権制は緊急避難的にやむを得ず短期間採る体制であるが、バブル後の金融機関は一〇年以上この体制を維持し更に徹底しようとしており、民間企業としての存続を放棄するに等しい

経営となっている。

必然の結果として、顧客知らずの書類・計数のみでの審査となり、営業目標もない審査部は債権保全優先の審査を行うこととなる。

これも貸し渋り・貸し剥がしの一因となっている。

(5)中小企業向け与信判断の審査マンの消滅

バブル期の五年間は、企業の信用力を見抜くという「職人芸」的審査はまったく無用であり、担保物権の有無だけが与信判断のファクターであったため、人材育成は全く行われなかった。

元来中小企業融資の有能な審査マンの育成は非常に難しく、過去営々と先輩から後輩へとその職人芸を伝授しつつ養成して来た貴重な「人財」であった。

中小零細企業の企業審査は、上場大企業の企業審査とは全く異なり、決算書・経営計画書・資金繰り表は粉飾が当たり前であり、これを見抜くにはオーナーの品性・人格・個人資産の有無、業界での評判・地位、定期的な本社・工場の状況視察・把握、仕入先・販売先の信用度の調査等、大変高度な感度と計数の裏を見抜く洞察力が要求されるため、その人材育成は甚だ難しく平時においてもその絶対数確保に苦労していたのである。

それが五年間人材養成を放棄したため、有能な先輩審査マンの高齢化と定年退職により、有能な審査マンのストック不足に陥り、しかもバブル期に中小企業審査の基本を教わらなかった人達が今の金融機関の本部・営業店の中堅幹部になっているのである。

この修復には今後五年から十年を必要とするであろう。

従って仮に不良債権処理を完了したとしても、従前の中小企業融資の弾力性を回復するには、先立つ審査マンが絶対的に不足しており、銀行経営者としてはその戦力がない以上その再出発には二の足を踏むし、これを敢えて強行すれば新たな不良債権を抱え込むこととなる。

この実例は、バブル時の興銀等の大銀行が実戦部隊を持たないにも拘わらず未経験のリテールマーケットに突き進み、惨敗したのは記憶に新しいところである。

この問題は、今後の銀行経営上の最大の欠陥となる事必定である。

(6)金融機関の収益の縮小と枯渇

金融業の収益の源泉は、何時の世も大黒柱は資金の利ざやであり、その添え柱として各種の手数料収入・ディリーング益等がある。

戦後の高度成長期は、資金需要が旺盛で貸し手に有利な高利ざやが確保されていたので、収益の大半を資金損益に依存し、手数料収入等を軽視していた。

その後は、資金需要の相対的減少と有力顧客の銀行離れにより、量的拡大の限界と利ざやの縮小、コンピューター投資と人件費の経費増が重なり収益の低下に悩むこととなる。

そこで、大銀行は量的拡大を目指して多店舗戦略による中小企業マーケットへの参戦を図る一方、大銀行同士の合併・中小金融機関の系列化競争が始まる。

資金需要旺盛期が終焉すると、大銀行といえども収益の大半は貸出金の七〇%程度を占める中小企業向け融資であって、上場大企業本体からの収益は貸出金の運用量には見合っていなかった。

バブル崩壊後、金融機関はひたすら不良債権の処理とBIS比率維持のためのリストラに取り組むわけであるが、元々低収益構造の上に株価の下落による保有株式の評価損というダブルパンチが加わり、各金融機関は償却財源不足に悩むこととなった。

その一方、資産の自己査定制度に基づく引当財源も捻出せねばならず、BIS比率維持のためには増資が至難である以上、即効性のある総資産の圧縮即ち運用資産の大半を占める貸出金の圧縮しか打つ手がなく、本来収益の源泉であると判りつつ貸倒引当計上のリスクのある中小企業向け貸出の圧縮に踏み込まざるを得なくなった。

従って今日の大銀行から中小金融機関にいたるまで、収益増強策として与信業務はローリスクで且つ安定収益が望める住宅ローンの拡販に専心し、投信の窓販・外貨預金の外為手数料・その他諸手数料の値上げ等で収益確保を目指すという、金融業を半ば放棄したコミッション商売に変化してしまったのである。

公的資金の支援を受けている大銀行が、金融庁の要請に応えて中小企業貸出の増強計画を策定・提出し、経営トップが行内で声高に督励したにも拘わらず、結果は大幅減少・未達となったが、この現実はシュリンクした経営体制の当然の帰結である。

(7)含み資産の払底

過去何十年に亘って上場企業の株式を保有・拡大し、それ自体は低採算であるも有力大企業との取引観点上の必要悪という位置付けであった。しかしその含み益は将来の万一の際の隠し財源として、その多寡が金融機関の信用の裏付けでもあった。

しかしこの隠し財源も、バブル崩壊後初期の償却財源として使い切っただけでなく、「売り切り」が相手企業との取引観点と相手企業の保有銀行株の市場放出による銀行株の暴落リスクを懸念し、「クロス取引」で益出を行ったため持株の簿価が上がり、時価会計制度の導入により株価の下落イコール評価損となり、今日では顧客の株式保有が低採算と評価損の二重苦となり銀行経営上の癌と化した。

もう一方の含み資産であった土地も大幅下落で含み益どころではなくなった。

「提言」

日本の金融機関は、バブル前から過当競争による利ざやの縮小と高コスト体質による低収益に悩んでいたところに、泣きっ面に蜂のバブル崩壊の決定的致命傷を受け、更にＢＩＳ比率クリアー、資産の自己査定による厳格な引当計上、時価会計制度の導入、ペイオフ解禁、更には税効果会計等の会計制度のグローバルスタンダード化、一方米国型のレイオフは禁止という日本的慣習の狭間で全く袋小路に追い込まれたのである。

この外的要因への対処策として、全金融機関が既述経営システムを大なり小なり採とっているので、不良債権の処理さえ完了すればとか、公的資金の投入も辞さず等の外科的手術だけでは、日本の金融システムの再生は不可能である。

換言すれば、金融機関は被害妄想症と自閉症という強度の心身症を患っており、この自然治癒を日本経済は待つ余裕はない。

その打開策としては「貸出資産の自己査定制度の緩和」により、中小零細企業への円滑なる資金供給の道筋を付けることが肝要である。

そもそも中小企業の七〇％が赤字決算だそうだが、この七〇％の企業を潰せという制度は日本経済を崩壊させよと言うのに等しい無謀な政策である。

そこであるべきスキームを例示すると、

① 対象企業は、グローバリゼイションの埒外にある非上場企業とするか、資本金一億円未満の中小企業とかに限定する。

② 対象金融機関は、ＢＩＳ比率四％適用の金融機関に限定する。

③ 融資限度額は、債務者の一金融機関からの借入限度額の設定、金融機関の資産査定の低ランク融資の限度設定を行う。

④ 債務超過先等の現行の「破綻懸念先」及び「破綻先」は、引続き対象外とする。

この制約の下、引当計上の軽減化を図り、シュリンクしている金融の資金流通を図る。

要は、黒字乃至一時的赤字で担保不足等もあって資金調達の道が閉ざされている中小企業に対して、円滑な資金供給の道筋を付けて倒産させずともよい企業を救済し、金融機関はそこから適正の利ざやを得るという本来の姿に戻すことが急がれる。

一方、経営状態が危険水域にある金融機関には公的資金を投入して下支えすることを原則とし、放漫経営の末期的症状の金融機関の廃業も視野に入れておくことは言うまでもない。公的資金の投入の条件として常に経営責任の追及が議論されるが、感情的な経営責任論を振りかざさない「政治と国民の鷹揚さ」が必要である。

この責任追及論は、国民の税金を投入するので真に尤もであるが、この経営責任をあまり声高に問うと金融機関の経営者は再度シュリンクして、リスクテイクを一切しない萎縮経営に舞い戻り、結局日本中倒産の嵐となってもっと多額の損をするのは国民なのである。

尚、銀行の国有化構想は、これまでの国営企業の郵政省・旧国鉄・道路公団等々枚挙に暇がないほどの無責任経営が示すように、ましてや難しい中小企業金融はお公家さん・お武家さんに出来るほど生易しいものではない。この私見には、国際信義上とか体の良い不良債権隠しとかの批判は十分想定するが、敢えてやらざるを得ないほど日本経済は崩壊の直前という非常事態であり、小田原評定は日本経済の傷を深くするだけで、事は急がねばならない。

そもそも日本人の特性として、完璧主義と全員の納得を得て事を決する慣わしがあり、予想外の緊急事態への決断力と果敢な実行力がない。攻めも守りも行き着くところまで行ってしまうという性行は過去の歴史が証明している。その代償は想定値以上に高くつくのである。

あのバブル最盛期の消火活動に先手を打たず且つ小出しの政策を採ったために日本経済の傷を深くしたし、崩壊直後の公的資金投入についても「金融機関の救済」であり不埒な金融機関は潰れたら良いという感情論で見送り、その後の住専問題処理の大幅の公的資金投入論も農林族の農協の不良債権負担回避という横槍で「たったの六，八五〇億円」で先送りにしてしまった。数年前の公的資金の投入にしても及び腰であった。政治も経済も金融も全て「人間の心理」が大きく作用する。

先安感・将来の不安感が定着してしまうと理論値以上に人間はシュリンクするし、集団化するとその症状は加速度化するのである。

結果して理論値以上に地価・株価が下落して、企業と個人が必要以上の資産デフレに直面し、不良債権が想定以上に膨らみ、経済活動が萎縮し、個人の財布の紐が絞まってしまった。

従って、事ここに至ったら倍付けする位の果敢な決断と行動が必要なのである。

なお、最後に金融機関の経営者の責任論について触れておきたい。

不良債権創出の首謀者であった当時の経営者は、その無定見と無節操さにおいて正に「斬首」に値するが、如何せん全員退職済みであり今更追求の手立てがない。

現経営者の大半は、その後の事後処理に当たっている訳で、高額の報酬・退職慰労金の受給を遠慮させ、手緩い経営については厳しく指弾するとして、「魔女狩り」的感情論は厳に戒めるべきである。「首」をとって解決する問題ではない。

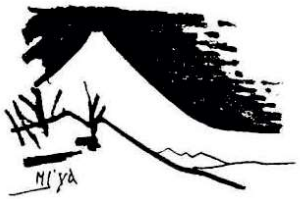
要は、行員への高額給与体系の是正を含む完全なリストラを実現せしめ、正常な金融業務復活の実践を励行させる事が肝要である。

その監視のために、中谷巌先生主張の新商法の「委員会等設置会社」に強制認定して、外部監査の強化を図るというアイデアに大いに賛同する。

尚、株主責任即ち減資問題は当然あって然るべきであるが、自己資本の減少となるので現在は禁じ手である。

本題から脱線するが、「首」を取らねばならぬ人種は七〇〇兆円もの借財を残してくれただけでなく、更に国庫から金を盗もうとしている大半の国会議員である。今の日本の優先緊急課題は「国会議員と地方議員」の大量解雇即ち定数半減ではなかろうか。

祝出版
石黒修身
歌集「時潮の波に」
栄光出版社



桜人形

(哀愁武士道のうち)

三戸岡道夫

(一)

綾は巻紙を手にとると、さらさらと、

(おなつかしき桜之介さま…)

と筆を走らせた。しかしまだ面識もない人へ出す手紙の冒頭に、おなつかしきはおかしいと思って、破り棄てた。

(どう書けばいいのかしら)

綾はちょっと考えていたが、思いきって、

(恋しい桜之介さま)

と書いてみた。

すると書いた瞬間、綾は自分でもわかるほど顔がほてって、恥かしさで全身がふるえた。(桜之介さま)と名前を書いただけでも、頭の芯がくらくらするほど切なく、胸が苦しくなってくるのに、その上に、

(恋しい)

などと書いてしまって、綾は心の秘密を誰かに垣間見られたように、恥かしさでいっぱいになった。

綾は大奥へ上る準備としていろいろな稽古をしてきていたから、字は上手だった。だが、

(恋しい桜之介さま…)

などと書いてしまうと、もう頭の芯がぼっとして、筆がその先へ進まなかった。綾はしばらくぼんやりと、(恋しい桜之介さま)という文字を眺めていた。

すると巻紙のその文字の中から、桜之介の姿が立ちのぼってきた。そして綾の前に立ちはだかった桜之介は、綾が手を伸せば触れんばかりであり、その幻の桜之介のさわやかな匂いに押しつつまれて、綾は気絶せんばかりだった。

巻紙を手にしたまま綾がぼっとしていると、その時部屋の外でばたばたと足音がして、

「上様のお成りです」

あわただしい声がした。それは綾と同じ女中部屋に勤める菊の声だった。綾があわてて紙巻と筆をしまおうとすると、

「あら、何をお書きになっているの」

「何でもないわ」

「恋文みたいね。誰に…？　わかったわ、桜之介さまでしょう」

「ほんとうに何でもないのよ」

綾の顔はまっ赤になり、(恋しい桜之介さま…)と書いたところだけをあわてて破ると、細かくたたんで懐ろの奥深くへ押し込んだ。

桜之介とは、本名を朝日桜之介。江戸城中奥に勤める奥右筆である。男振りがいい上に、頭が切れて、学識が深く、若いのに奥右筆組頭に抜擢されたというところから、大奥の女中たちに人気があった。人気というよりも、憧れの的といった方がよかったかもしれない。綾も菊も、もちろんその中の一人であった。

(上様のお成りです)

という菊の言葉で、綾は、上様が歩くお鈴廊下の様子を頭を浮かべた。

上様が政務を執る中奥と、綾たちの居る大奥とは、お鈴廊下で連っているのだが、男子禁制の大奥へ入れるのは、上様一人に限られていた。だが、そのお鈴廊下の入口であるお錠口が開くたびに、綾の気持がなぜかときめくのだった。

大奥には女の匂いばかりが、息苦しいほど立ちこめている。男の匂いはない。お錠口が開くと、その大奥へ、ちょうど澱んだ池の中へ清水が注ぎ込まれるように、中奥にいる男たちの匂いが流れこんでくるような気がするからだった。

江戸城の本丸御殿は大きく分けると、表と中奥と大奥の、三つに区分される。表は幕府の中央政庁であり、公式の儀式を行う広間や、諸大名、諸役人の詰所や、政務を執る諸座敷などがある。中奥は将軍の公邸に当るもので、将軍が政務を執ったり、日常起居する。大奥はいわば将軍の私邸に当る所で、御台所をはじめ、将軍の子女や、側室、彼女たちに仕える女中たちが生活している。

その大奥と中奥とは、お錠口で遮断されているわけで、わずかにお鈴廊下一本で連っているだけなのだった。そのお鈴廊下を通ることが出来るのは、将軍ただ一人なのである。すなわち大奥へは将軍以外は誰一人として男子は入ることが出来ない、いわば男子禁制の場所なのである。

しかし男子禁制といってもそれは体制上の建前だけであって、将軍以外に男子は誰一人として絶対入れないのかというと、そうではない。

たとえば大奥には御広敷という、大奥の守衛や雑務を勤める部署があるが、ここには御広敷御用人をはじめとする大勢の男子の役人が詰めていた。

また表や中奥に勤める役人でも、将軍と接触の深い老中とか、若年寄、側用人、近習小姓、あるいは書記役である奥右筆などは、急用がある場合には、例外として将軍に会うために、大奥へ入ってくることがあった。たとえば老中や側用人が内密に重大事件を緊急に、将軍に直接はからねばならない時などである。また大奥にいる将軍が何か自分の言うことを記録させたり、また代筆させたりする時、自分が中奥へ戻っていくのが面倒なので、奥右筆を大奥へ呼ぶのである。

現に綾は、そうして大奥へ呼ばれた桜之介の姿を、二、三度見かけたことがあり、一度は廊下ですれ違ったことさえあった。その時から綾の心は、桜之介によって一挙にわし握みにされてしまったといってよかった。だから綾は、

(上様のお成り)

という声を聞くと、綾の瞼の裏には、まずお鈴廊下を渡る将軍の姿が浮かび、その後に奥右筆の桜之介が従って一緒に大奥へ入ってくるような気がしてならないのだった。

そんな思にかられていると、菊が綾の顔をのぞきこんで、

「なにをぼんやりなさっているの」

「あら、いえ、別に…」

「また、桜之介さまのことを思っているのでしょう」

「あら、そんなこと…」

「隠しても駄目、顔に書いてある」

「だって、お菊さまだって桜之介さまにお熱でしょう」

「もちろんよ。でも、駄目、桜之介さまは大奥のお女中全部のものですもの」

そんな時、襖の外から、

「合羽屋さんがまいりましたわよ」

と呼ぶ声がした。合羽屋というのは、大奥へ出入りの小間物屋である。大奥の女中たちが喜びそうなものを、いろいろ揃えて売りにくるのである。

「さあ、行きましょうよ」

菊にさそわれて、綾も裏口の方へ駆け出した。上様のお成りといっても、関係のあるのは上の方の女たちだけで、綾たちのような下々の女中たちには関係がないのである。

(二)

綾と菊が駆けつけると、もう合羽屋は品物をひろげて、それに女中たちが群り集っていた。並べられている品物は、どれも女中たちの欲しいものばかりで、

だが桜之介へのご贔屓は若い女中ばかりでなく、御年寄とか御中臈、または表使いの老女など、身分の高い女性の中にも大勢いた。男子禁制の大奥で、彼女たちは一生男を断って仕えるのである。心の底によどんだ男への渇望がそんな形で現われたとしても、すこしも不思議ではない。いい年をして、などというのは酷というものであろう。

だが、いくら桜人形や桜手拭がほしいからといって、御年寄や御中臈ともあろう者が、若い女中たちに混って、このこ合羽屋の前などへ出るわけにはいかない。そこで手許で使っている若い女中たちに、その購入を命ずるのである。だから女中によっては自分の買物と、御年寄の買物との、両方をしなければならないから大変だった。

なんといっても女たちに人気絶大なのは、桜人形だった。大きさは二寸ぐらい（約六センチ）の小さなもので、桜之介に似せた、いわば大奥のマスコット人形である。

だが、それは一種類ではなかった。何種類もあるのである。といってもそのデザインは、ちょっと着物の色や柄を変えたり、手の仕ぐさや、髪型を少し変えたていどの工夫にすぎないのであるが、女中たちはそれをいくつも買って、集めるのがたのしみなのである。作る片はしから飛ぶように売れて、作るのが間に合わなかった。

今日合羽屋が持ってきた新作は、三味線桜之介という人形で、桜之介が頭に置手拭をのせ、三味線を抱えた粋な姿だった。奥右筆なるものが新内流しになってしまっているわけであるが、女中たちにはそんなことはどうでもよかった。要は目先が変っていて、かわいければそれでいいわけで、綾もその三味線桜之介には心が躍った。

三味線桜之介には、あっちからも、こっちからも手がのびて、合羽屋は対応に忙しい。三味線桜之介はあっというまに売れ切れて、綾が掴んだのは最後に残った一つであった。

だが綾がそれを掴んだ瞬間、同じ人形を掴んだもう一つの手があった。それは妙という、御中臈初島付きの女中だった。

綾と妙は一つの人形を掴んだまま睨みあい、

「わたしが先よ」

叫んだ妙の顔には必死の形相が現われていた。しかし綾も負けてはいず、

「うそ、わたしの方が先よ」

すかさず言い返した。だが妙は手を引かなかった。妙は上役の初島に言いつかって買いにきているのだった。買って帰らなければ、強い叱責を受ける。負けるわけにはいかないのだった。妙の眼はつり上り、

「わたしのものよ」

「わたしが先よ」

二人とも負けず、綾が人形の頭を持ち、妙が足の方を持って、一つの人形を取りあった。それを見た合羽屋は、

「あら、これがいいわ」

「これも欲しいわ」

「あっ、こっちの方がもっとすてき…」

目うつりして、選択に迷っていた。だが女たちには、その迷いの興奮がうれしいのだった。

いま大奥では、奥右筆の桜之介にあやかった、桜ものが大流行だった。桜にちなんだものなら、何でもよく売れた。桜かんざし、桜手拭、桜人形、桜根つけ、桜小箱…、何でも桜の花びらや、桜之介に似た武士の横顔が描いてあれば、飛ぶように売れた。桜之介の人気は、まるで中村座や猿若座の歌舞伎役者並みであった。

「さあ、さあ、お女中方、この手拭はいかがかな、今日の初荷でございますよ」

如才ない言葉で合羽屋が拡げる手拭に、女中たちの眼が集る。手拭の中央には、すらりと着流しの若侍が染め抜かれ、右の方には桜の花びらが、左の方には達筆で桜之介の三文字が書かれていた。その文字は一瞬、桜之介本人の自筆ではないかと錯覚をおこす、子供だましのたあいのないものなのだが、

「まあ、すてきねえ」

「わたし、これを買うわ」

「じゃあ、あたしも」

わたしも、わたしもと、いっせいに手が伸びて、手拭はあっという間に売りきれてしまった。

「ああ、人形がこわれてしまいますよ。そんなにしないでも、すぐ作って、後からお持ちいたしますから…」

その言葉が終るか終らないうちに、人形はとうとう二つにちぎれてしまった。

「あっ！」

「あら…」

綾も妙も悲鳴をあげたが、間にあわなかった。妙の顔は見る見る蒼ざめて、

「どうしてくれるのよ」

と凄い眼で綾を睨みつけると、とうとう泣き出してしまった。

そしてこれが、その後、とんだ事件を起こすことになるのだったが、この時の綾にそれが予知できようはずはなかった。

（三）

江戸城本丸御殿は、表、中奥、大奥の三つの部分に分かれ、将軍が執務する御座の間は中奥にあった。幕府の最高機関である老中と若年寄の御用部屋は、表でも将軍の御座の間に近い、中奥との境にあった。したがって事の性質上、奥右筆の部屋も、老中や若年寄の御用部屋の隣という位置にあった。それは老中や若年寄との連絡を、取りやすくするためである。また時には将軍や側用人から内々に呼ばれることもある。そんな時にもすばやく駆

けつけられなくては、ならないからである。
大奥の女中たちが桜人形を取りっことしてさわいでいるとき、桜之介は奥右筆の部屋の一隅で、熱心に書類を読んでいた。
部屋はかなりの広さだったが、ちょっと曲った変形の部屋だった。それは部屋の一角が文書の保存整理棚になっており、また、殿中各所へ通ずるのに便利な部屋の形に造ってあるからだった。
いま桜之介が眼を通しているのは、ある婚姻の内伺い書だった。
旗本の婚姻には老中の認可が必要である。その認可を受けるために、老中への申請が必要であり、その申請に先だって内々にその可否の内諾を得ておこうというのが、内伺い書だった。そのために、それに関する調査や可否決定の下請仕事が、奥右筆の方に廻ってくるのである。
いま桜之介が調べている婚姻内伺い書は、男の方は旗本染川民十郎の三男の銀之助、女の方は日本橋の紙問屋西川儀兵衛の娘、綾である。
（別に問題はないではないか）
一瞥しただけで桜之介はそう思った。銀之助は二十三歳、綾は十八歳。年恰好もちょうどいい。男の方は旗本の子息であるから、婚姻の相手の格が決められていて、直接商人の娘と結婚することは出来ないが、綾をいったんどこかの旗本の養女という形にすれば問題ない。世間でよく使われている手である。
日本橋の西川儀兵衛という紙問屋はよく繁昌し、裕福だと聞く、だから半分はその財産目当ての縁組であろうが、財産目当てというのも、別に悪いことではない。
（内伺いをするほどのこともなかろう）
と桜之介は思った。しかし念には念を入れよということがある。桜之介は隣に座っている朝倉宇右衛門という奥右筆に、書類を差し出して、
「これ、なにか問題がありますかな」
と意見を聞いてみた。朝倉宇右衛門は奥右筆の中でも、とくに情報通で知られていた。
奥右筆は情報通でないと勤まらない職種だったが、朝倉宇右衛門はこまめに情報を集め、桜之介が知らないことでも、実によく知っていた。武士の間のことだけでなく、商人や職人、下町のことなどにも通じている。だから桜之介は何でも宇右衛門に相談することにしていた。
宇右衛門は差出された内伺い書を手に取ってしばらく見ていたが、
「この綾という娘は大奥に勤めてはおりませんか…？」
「えっ、大奥に」
やはり宇右衛門は桜之介の知らないことを知っていた。
「大奥に勤めていると、なにか問題があるでしょうか」
「いや、ないでしょう」
宇右衛門は落着いてそう答えた。桜之介はその返事に安心して、内伺い書を『可』の箱に入れた。
するとその時、萩原千代蔵という奥右筆があわただしく駆け込んできて、
「いま大奥でこんなものが出廻っておりますよ」
そう言って、懐から小さなものをつまみ出して、桜之介の眼の前で振って見せた。千代蔵というのはちょっと陽気な、お調子者だった。
「何かな？」
桜之介がすこし撫然として聞くと、
「いま大奥で大人気の桜人形ですよ。桜之介殿はご存じないのですか」
「知らぬな」
「これは、これは、桜人形の見本の本人が知らぬとは、どうしたことでしょうか。なあ、宇右衛殿…」
と今度は宇右衛の方に話を鉾先を変え、
「宇右衛門殿ならご存知であろう。物知りの宇右衛門殿が知らぬはずはない」
「いや、うむ、む、む…」
宇右衛門は口ごもったが、もちろん知っているに違いない。千代蔵は、
「ああ、一度でよい、それがしも大奥のお女中たちから、このようにさわがれてみたい」
そう言って桜人形を桜之介の机の上に置くと、自分の席へ戻っていった。千代蔵は別に嫌味でやっているのではなかった。要するにたんなるお調子者なのである。桜之介は、
（どこからこんな人形を手に入れてきたのだろう）
どうせ、あのお調子者のことだから、ちょこまかどこかへ顔を出して、手に入れてきたのにちがいない。桜之介はにが笑いしながら桜人形を手に取ったが、しかし人形の横顔があまりに自分に似ているのに、どきりとした。
（つづく）

祝出版
瀧澤中（共著）
「ケネディはリーダーシップをどう語ったか」
中経出版　一、五〇〇円

霧の彼方に（一）

太田精一

ソコリニキ公園は雪に埋もれていた。葉を落とした白樺林に冷たい風が吹きつけ、枯枝を揺らしている。わずかに樅の木や糸杉だけが灰色の空に緑の潤いを与えていた。

矢吹陽一郎は、モスクワ日本産業見本市の会場となるソコリニキ公園内の四号館を訪れるところであった。彼は、菱友物産の派遣員として、本社から三ヶ月の出張を命じられ、三日前モスクワに着いたばかりである。モスクワは、矢吹にとって初めての海外経験であった。ロシア語も、ほんの片言程度しか話せない。ただ、大学で半年間、ロシア語を学んだお蔭で、キリル（ロシア）文字には、違和感はなかった。

矢吹は、除雪された雪が両脇に積み重なったトンネルのような道を早足に歩いて会場に向った。寒気が防寒靴を通して体の中に浸み込んで来た。耳が千切れるほど痛い。二月初旬のマロースは、寒さを通り越し、刺すような痛みをともなって襲って来る。マロースとは零下二十度にも三十度にもなる寒気を擬人化したものだ。ロシア民話に出て来る爺さんで、善人には優しいが、冷酷な悪人には厳しい。マロース爺さんの怒りに触れ、凍死した人も少なくないという。

見本市会場となる四号館は、ガランとしていた。まだ本格的な準備は始まっていない。二～三日前に、やっとソ連側の事務室ができ執務を始めたところだ。主催者のジェトロの事務所もまだ会場内にはできていなかった。

四号館の付近には、スケート場や集会場などがあり、この寒さにもかかわらず賑やかであった。ロシア人は、このマロースの冬を楽しんでいるようだ。

矢吹は、モスクワに到着してから、この見本市会場に辿り着くまでの三日間を振り返ってみた。すべてが新鮮であり、未知の世界であった。

矢吹がモスクワのシェレメチェボ国際空港に降り立ったのは三日前の二月三日午後三時半頃だった。空港バスに乗るため、わずか三十メートル歩いただけで寒気が腹の底から突き上げて来る。だが、空港ビル内に入るとまるで別世界のようであった。暖房が効き過ぎているためか暑いくらいである。検疫を済ませ、入国検査の係にパスポートと入国ビザを提出、インツーリスト（ソ連の国営旅行社）のカウンターでホテルの指定を受けた。当時のソ連では、自分の宿泊先がどこに割当てられるのか、到着の日まで、分らないことが多かった。矢吹は、インツーリストの指定する車に乗ってホテルに向った。車はレニングラードホテルの前で止まった。菱友物産のモスクワ支店森本雄二駐在員がホテルのロビーで待っていた。

「矢吹さんですね。モスクワ支店の森本です。ようこそモスクワへ。それから三ヶ月間の出張ご苦労さんです。寒かったでしょう」

「わざわざ有難うございます。海外出張は初めてで、ロシア語もほとんど駄目ですのでお役に立てるかどうか。よろしくお願いします」扱う品目によって部門別に分かれている商社では、自分の所属する部課の人間か同期入社の友人以外は、お互いに面識がない。

森本は、矢吹の三年先輩で三十才になる。手際よくチェックインの手続を済ませ、夕食に誘った。

「今日は、長旅でお疲れでしょうから、このホテルで夕食にしましょう。モスクワではあまり娯楽もないので、ホテルのレストランで食事をするのが、市民の楽しみの一つとなっています。バンドも入り、プロの歌手がロシア民謡やソ連の流行歌を歌い賑やかなものです。客はそれに合わせて手拍子を打ったり、ダンスをしたりします。矢吹さんも一緒に踊ってみませんか」矢吹は、森本の話を聞きながら睡魔に襲われ、夕食の時間までしばらく部屋で休みたいと思った。森本も矢吹の眠そうな顔を見て、気を利かせた。

「では、八時にまたロビーで会いましょう。レストランはすでに予約してありますから」矢吹は、森本のその言葉を待っていた。部屋番号の書いたカードをポーターに見せ、荷物を運ぶように指示し、エレベーターに乗った。部屋は九階の五号室である。九階のエレベーターを降りるとすぐ前に、カウンターがあり、中年の女性が座っていた。エタージナヤといって、その階の各部屋を管理する女性係員である。部屋に出入する場合、必らずその女性係員と鍵の受渡しをしなければならない。

勤務は交替制となっている。二十四時間いつでもエタージナヤのいない時はない。その席で誰れが外出し、誰れが在室しているかを常に監視しているのだ。共産主義体制下のソ連でホテル住いを快適に過すためには、このエタージナヤと親しくなることが大切であった。

矢吹は八時になってロビーに下りた。森本は、ロビーの椅子に腰を下ろし、スターリン時代の名残りを留める重厚な造りの高い天井を見上げていた。

「お待たせしました。このホテルはずいぶん厳めしいホテルですね。モスクワのホテルは全部こんな感じですか」

「そんなことはありませんよ。四、五年前にできたホテルミンスクなどは、近代的な大ホテルで収容人数も、千人を超えるといわれています」

森本は立ち上がって「それでは食事にまいりましょうか」と言って矢吹を、ホテル内のレストランに案内した。すでに、三十代の豊満な肉体をした女性がバンドに合わせロシア民謡を歌っていた。客席も騒がしく、レストランというより、照明を明るくしたキャバレーのような雰囲気だった。ホステスはいないが、勇気と自信さえあればダンスのパートナーを見付けることは容易だ。

二人は、ウエイトレスの案内に従ってテーブルに着き料理を注文した。ボルシチのスープにアントレコットのステーキ、食後はコーヒー、飲物はワインにした。料理が出るまでずいぶん待った。が、陽気で賑やかな雰囲気に巻き込まれ、気にならなかった。ボルシチは、かなりのボリュームがあり、思ったより美味しかった。だが次に出てきたアントレコットが難物だった。実に厚くて堅い。あごが痛くなるほど噛み、ワインの助けを借り胃に流し込んだ。

「あそこにいる女性を誘ってみませんか、ダンスの後に案外ロマンスが生まれる何んてこともあるかも知れませんよ。もっとも、そのために彼女に気に入られ、日本に帰れなくなってしまったら大変ですがね。何にせソ連では、第二次世界大戦で二千万人以上の犠牲者が出たといわれています。なかでも働き盛りの男性の多くが戦死しているので、四十才以上の女性の結婚難は相当深刻なようです」森本は話し終わるとテーブルを離れた。若い女性だけで食事をしているテーブルに近ずき、そのうちの一人の手を取って楽しげにダンスを始めた。それから次々とパートナーを変え見事な踊りを披露した。矢吹は、森本の行動に圧倒され、時々拍手を送り、ただ見ているだけであった。

翌日、支店長への挨拶と今後の仕事の打合せのため、モスクワ支店に出社した。

「やあ、良く来た。仕事がたまっていて一緒に食事をすることはできなかったが昨日はどうだったね。本社では、モスクワというと暗いイメージばかりがあるようだが、過し方によっては案外楽しい面もあるよ。これから三ヶ月間、いろいろなことがあると思うが、悲観的に考えず、仕事にも私生活にも積極的に取組んで何かを掴み、帰国して頂きたい。その点、森本君を見習ったらいい」村井支店長は、そう言って森本を呼んだ。

「どうも昨日は、失礼しました。君を楽しませるつもり

で自分が楽しんじゃった。申し訳けない。明日にでも見本市会場となるソコリニキ公園に行ってみるといい。支店も人手が足りないので、これから一人で行動して貰いたい」森本は、昨日とは違い打ち解けた口調で話しかけ、モスクワの地図を持ってきて、ソコリニキ公園の場所と地下鉄の乗り方を矢吹に教えた。

矢吹は四号館をひと巡りし、日・ソ双方の見本市関係者に挨拶した後、昼食を取るため公園内のカフェテリアに出掛けた。食事客は、長蛇の列をなしていた。三十分待ってやっと食事にありつけた。店は、セルフサービスシステムでスタンドの女性店員からスープ、鳥肉、パン、ピクルスをトレイの上の皿に乗せて貰い、空いた席についた。

「日本の方ですか。同席させていただいてもよろしいでしょうか。」若い男が話しかけてきた。男は、安藤商事の水野忠男と名乗った。丸顔で人の好さそうな人物である。年の頃は二十七、八。やや太り気味の男だ。矢吹は、日本語で話しのできる相手が欲しかったところだったので、言葉が口を突いて出た。

「いつ頃モスクワに着きましたか。モスクワは初めてですか。ロシア語は」次々と質問の矢を浴びせかけた。

「モスクワは初めてです。四月一日から始まる見本市の準備で東京から来ました。ソコリニキ公園もこの付近は、思ったより賑やかですね。ロシア語は、大学で二年ほど勉強しましたが、成績はいつも下の方でしたので、片言しか話せません」

矢吹は、ライバル会社の社員とはいえ、彼に親しみを感じた。話しているうちに二人は、たまたま同じホテルに宿泊していることが分った。二月八日の日曜日には、二人でモスクワの街を散策する約束をしてカフェテリアを出た。

矢吹にとって初めての日曜日が来た。二人は、ロビーで待ち合わせ、クレムリンと赤の広場を見学することにした。

コンソモリスカヤから革命広場まで、地下鉄に乗った。モスクワの地下鉄は、どこからどこまで乗っても五ペイカ（二十円）だった。五ペイカ銅貨を無人の改札口に投げ入れ、進めの信号に変ったら改札口を通る。すぐ前にエスカレーターがある。そのエスカレーターは、急傾斜で深く、地底に引き込まれるようだった。モスクワの地下鉄は、核戦争が起きた時に備えて巨大なシェルターの役割を果たすよう設計されているという。二分ほど待つと電車が来た。運転間隔は東京より短かいようだ。

クレムリンは、モスクワ川の岸に沿った高台にあった。もともとロシア語の城砦を意味する。従って、ロシアの各地にクレムリンはある。だが一九七〇年当時「クレム

リン」といえば、ソヴィエット政府または党の指導者を指す代名詞として使われ、世界の共産主義者の総本山であった。

モスクワはこのクレムリンから発祥した。十二世紀半ば、この地に木造の砦が造られ、その回りに住民が集まり、後にモスクワ候国の首都にまで発展した。十五世紀には、イタリア人の工匠を招致し、新たに城壁や塔を建て増して現在の姿になったという。総面積二十六ヘクタール、ややゆがんだ三角形をしている。周囲は銃眼を備えた石造りの壁で囲まれ、中には二十の塔がある。その塔のうちの五つの塔の頂上に赤い星が輝いていた。

クレムリンの壁の前に「赤の広場」が広がっている。面積は七万三千平方メートル、それほど広くは感ぜられなかった。この広場の一角に聖ヴアシリー寺院がある。一五五五年から一五六〇年にかけて、イヴアン雷帝がカザンの汗との戦勝記念に建造したものだ。九つの尖塔がアンサンブルとなって見事な調和を保っている。中心の塔は四七メートルあり、宝形の尾根が美しい。

矢吹と水野は、この寺院の中に入ってみた。内部は、数百本のローソクの光に照らされたフレスコ画が多数掛けてあった。社会主義政権下にあっても、多くのロシア正教徒が胸に十字を切ってフレスコ画の前に跪ずき、敬虔な祈りを捧げていた。

この寺院の近くに石柵で囲った円形の台があった。処刑場である。帝政時代ロシアのツアーが判決文を読み上げ、死刑を執行した場所だ。ステンカラージンもここで首を切られたという。

矢吹と水野は、「赤の広場」の中央正面にあってクレムリンの壁を背にしたレーニン廟を見学した。廟は、花崗岩で造られた荘重なものだった。入口には、二人の衛兵が直立不動の姿勢で警固している。零下二十度を超える寒さの中でも微動だにしない。内部には、レーニンの遺体を納めた石棺が安置されて、参詣人の行列が延々と続いていた。

引き続き二人は、広場にある著名な寺院を片端から見学した。ロシア帝国の国教寺院であったウスペンスキー寺院、歴代ロシア皇帝が戴冠式を行った寺院だ。また、歴代皇帝や遺族の遺体が安置されているアルハンゲルスキー寺院。そこには四八体の棺が置かれていた。イヴアン雷帝とその息子の棺も安置されている。この寺院の中の壁には、十六世紀、民族の独立闘争を画いたロシア人画家による壁画やイコン画などがあった。広場には、イヴアン雷帝の造った鐘楼や「大砲の王様」といわれる巨大な青銅製の大砲が置かれていた。

「赤の広場」周辺の建物は、十六世紀、帝政ロシアの興隆期にイタリアの技術者を招いて建てたものが多い。タタール（モンゴル人を中心としたトルコ系諸族の総称）の〝くびき〟から解放されたロシア人が当時の先進国であったイタリアの技術者を招き数々の寺院を建立した。だが、ビザンチンやタタール支配の影響も色濃く残している。クレムリンは、西欧とビザンチンとタタールの混合した独特の文化を持つロシアの縮図といえる。そのことを象徴するかのように「赤の広場」を行進する兵隊の顔も、北欧系、南欧系、モンゴル系、アラブ系と実に多種多様であった。

二人は、午後モスクワ銀座と呼ばれるゴーリキ通りに出た。芸術座、イズベェスチヤ新聞、映画劇場、コンサートホール、などがこの一角に立ち並んでいる。一軒の瀟洒な喫茶店を見つけ中に入った。ロシア風紅茶を飲みながら店内の様子を見渡すと、若い男女が楽しそうに話している。時折ちらちらと矢吹と水野を見ている二人の女性がいた。突然彼等のテーブルに来て、空いている席に座った。

「私の家に来て遊ばない。一人二〇ドル」たどたどしい英語で囁くように話しかけて来た。矢吹と水野は始めは何のことか分からなかった。

「二十ドルって何が二十ドルなの」矢吹は、金髪の背の高い女性に尋ねた。

「わからない。メークラブすること。あなたたち日本人でしょう」そう言って誘うような流し目を送ってきた。

「どうする水野さん。二人とも美人だけどちょっとまずいかな。もし秘密警察にバレたら国外退去させられるかもしれないからなあ」矢吹は、雪のような肌をした青い目のロシア美人の誘惑に目を逸らし、日本語で言った。

「何んだか圧到されそうですね。こんなグラマーなロシア美人では、逆にこっちが可愛がられてしまいそう。ぼくも遠慮します」水野も横に手を振った。

「ソ連には、売春するような女性はいないと聞いて来たが、こんな昼間から声を掛けられるなんて思いもしなかった。よほどドルが欲しいのか、それともぼくらが物欲しそうに見えたのかな」矢吹は、白人女性への肉体的な好奇心に蓋をしてしまったことを惜しむように、ぽつりと言った。

古代エジプト以来あったといわれている売春は、いつの時代でも、どんな体制にあっても、無くならない。矢吹は、またひとつ社会主義の理想の裏に潜む〝みにくい現実〟に触れ、その理想が色褪せて見えた。

三月一日の日曜日、矢吹は、水野と共にモスクワ大学を見学した。三月とはいえ、モスクワの春は遠く、雪が舞っている。二人はレーニンの丘に立ち、モスクワの街を見下した。ナポレオンがモスクワ遠征の時に登った丘だ。当時は雀ヶ丘と呼ばれていた。一八一二年九月、ナポレオンは、この丘に立ち全市を見下した。ヨーロッパ最強のフランス軍五〇万を超える大軍を率いて、ロシア

征服の大遠征を試みやっとこの丘に辿り着いた。恐らくナポレオンは、この丘に立って、得意満面の笑みを浮べ、ヨーロッパ全土を支配下に置いた喜びを噛みしめていたに違いない。

だが、ナポレオンが侵入したモスクワの街は、すでに廃墟となっていた。五十万を超える軍隊は、食糧も家もなく、冬将軍を迎えて、十月には撤退した。帰国の途中、ロシアの厳しい寒さと飢えに悩まされ、その上ロシア軍の猛反撃を受け、帰還した兵は、わずか三万人に過ぎなかった。

〝ロシアは、この戦いによって、ヨーロッパの強国となり、民族意識が高まった。加えて、外敵の侵入に対する警戒心と猜疑心が強まった。帝政から革命後の共産党独裁下にあってその伝統はますます強まっている〟

矢吹は、そんな思いを抱きながら、レーニンの丘を下り、水野と共にモスクワ大学に向った。大学の前は、広い整然とした公園となっていて、除雪作業も行き届いていた。

モスクワ大学は一七五五年モスクワ高等学校として創立された。一九七〇年当時で学生数は、三万人を超え、十四学部を数えるソ連の最高学府として、ソ連社会に多くの人材を輩出して来た。その伝統は、引き継がれ、ロシア共和国となった今日でも、エリートの養成機関であることには変りはない。

その後二人は、カリーニン通りに出た。肩を並べて歩いているといきなり一人の学生風の青年が二人の前に立ち塞がった。矢吹の左手を取って袖口をたくし上げ、何か小さな声で言っている。矢吹は一瞬ギョッとして身構えた。柔道二段の矢吹は、相手が刃物や拳銃さえ持っていなければ何んとか撃退できると思い、そこに踏み止まった。青年は、矢吹の左手を取ったまま「カイタイ、セイコー、カイタイセイコー」を連発している。落ち着きを取り戻し、よく聞いてみると、どうやらセイコー社製の時計を買いたいと言っているらしい。矢吹は、改めて自分の時計を見せた。

「これは、セイコー社製の時計ではない。シチズン製だ」矢吹が英語で答えた。すると

「シチズンでも何でもいい。日本の時計が欲しいのだ」相手も英語に切換えてきた。

「貴国でも時計は大量に生産し、輸出している筈だ。何故日本の時計が欲しいの」

「日本の時計は正確で壊れにくいとの評判だ。持っている人も少ないから、友達にも自慢できる」矢吹は、売るつもりはなかったが、どれほどの値段がするものか聞いてみようと思った。

「幾らなら買う」

「四百ルーブルでどう」四百ルーブルは、日本円にして

八万円にもなる。矢吹の時計は、日本で一万二千円位だから六倍以上の値段で売れることになる。矢吹は、売りたいという衝動に駆られた。だが、ソ連では、外国人が所持品を売却することは、固く禁じられている。特に、時計、衣類、電気製品の類いは厳しくチェックされる。もし売買の現場を押さえられれば、国外退去させられる恐れもある。矢吹は、入国前に注意されたことを想起し、思い止まった。水野も同じ思いであった。二人は、残念そうに時計をさすって、青年に答えた。

「この時計は、売ることはできない。入国の時に税関からそういわれている」学生風の青年は、あきらめきれない様子で、二人の立ち去る姿を見送っていた。

「あんな学生が、こんな時計に四百ルーブルも出してまで何故欲しがるのか。どうしても分らない」矢吹は呟いた。水野はそれを聞いて、矢吹に言った。

「彼は、買った時計を金持に転売しその金で本でも買おうとしているのかも知れない。ソ連では、常に物が不足しているから、金の価値よりも物の価値に重点が置かれ、貯金するよりもそのお金で、物を買ったほうが得だと考えている人が多い。だから相当高くても転売できるのだ」

「なるほど、だが、それに加えて社会主義のソ連では、病院、学校は無料で、幼稚園は費用の半分、託児所は四分の一を払えば済む。また、アパートや交通機関は安く押えれている。税金もほとんどの人が払わずに済んでいる。老後も年金で必要最低の暮らしはできる。だから、あまりお金を貯める必要を感じないのではないか。そのため消費性向がきわめて高いといわれている」矢吹は、滞在一ヶ月で体験した社会主義の光と影を反芻してみた。そして、他人より美味しいもの食べ、良い衣服を身につけ、立派な家に住みたいという人間の欲求は、たとえどんな体制下にあっても変らないものだと改めて感じた。

会期も迫ってきた。矢吹と水野は、日曜日にもかかわらずソコリニキ公園の四号館に出勤し、それぞれのブースの設営に当った。昼食時、二人は申し合わせて、公園内のカフェテリアで食事をすることにした。相変らず長い行列が続いている。待つこと三十分。熱気と喧騒の渦巻く店内に入った。水野が席を確保し、矢吹が料理と飲物をカウンターに取りに行った。矢吹は、塩の効いたベーコン、粒のままゆでたソバ、ジャガイモ、黒パンを二人分トレイの上に乗せ、運んできた。

「有難う。カフェテリアの食事は、どこもあまり変りばえがしないね」水野は、トレイの皿に乗っている料理を見て言った。

「ソバは、やはり日本のように麺に打ってざるで食べるのがいいなあ」粒状のゆでたソバをスプーンで掬って口に入れながら矢吹は、日本のソバの味を懐しむように呟いた。食事が終って席を立とうとした時、若い女性二人

に声をかけられた。
一人は年の頃二十七、八、ロシア人にしては珍しく小柄で、身長も百五十五、六センチ程度しかない。鼻はわずかに上向き加減で、額が少こし出ている。やや大き目の口もとに微笑を浮かべ、栗色の目がキラキラ輝いていた。茶色の髪を無造作に垂らし、理智的な感じであったが女性としての魅力を損うものではなかった。
もう一人の女性は、二十五、六才で、身長百六十センチ前後、均整のとれた身体をしている。目は鳶色。鼻筋が通り、ルージュを引いた口元が可愛らしい。金髪にウェーブを入れたやや長めの髪の毛を肩の辺まで垂らしていた。
「ニホンジンデスカ、ワタシノナマエハ、アリヨーシヤ・ワシリエヴナトイイマス。イマニホンゴヲベンキョウシテイマス」小柄なほうの女性が話し掛けてきた。矢吹と水野は思わず顔を見合せ、またその手の女性ではないかと疑い、身構えた。だが二人の様子は、肉体を〝売り物〟にしている人とは見えなかった。アリヨーシヤと名乗った女性は、化粧をほとんどしていない。茶色の厚手のスェータと焦茶の無地のスカートをバランス良く着こなして洗練された感じであった。
「どうして日本語を勉強する気になったのですか」矢吹はアリヨーシヤに尋ねた。
「ワタシ、デンキノエンジニアデス。ニホンノデンキノ〝テクノロジー〟が、スバラシイトキキマシタノデ、ベンキョウシヨウトオモイマシタ」
「そうですか。あなたもやはり日本語を勉強しているのですか」矢吹はアリヨーシヤの友達にも聞いた。しかし彼女は、矢吹の日本語の意味がわからなくて、キョトンとしていた。アリヨーシヤが彼女に代って、英語で答えた。彼女の名前は、タチヤーナ・アンドレェヴナ。アリヨーシヤの近所の友達で、国営の衣料品店に勤めている。今日は休日なので、ソコリニキ公園に遊びに来た。日本語はおろか英語もほとんど話せないとのことであった。
矢吹、水野、アリヨーシヤ、タチヤーナの四人は、公園内の除雪された道を散歩した。寒いモスクワでの散歩は、つい早足となる。早足で歩くことによって、血液の循環を良くし、体を温め、寒さを防ぐことができる。ソコリニキ公園もわずかに春の気配が感ぜられるようになった。白樺もその木肌に生命の温もりが宿って息ずいてきた。
「レニングラードホテルに宿泊しています。日本語の勉強に役立つかどうか分かりませんが、できれば電話をして下さい。今度、四人で食事でもしましょう」矢吹は、何んとなく、このまま別れるのか惜しい気がした。二人の住所と連絡先を聞いて置きたい気持に駆られた。だが思い止まった。外国人から電話があったり、訪ねて来られたりすれば二人に迷惑が掛かるのではないかと心配したからだ。
矢吹と水野は、アリヨーシヤとタチヤーナからの連絡を秘かに期待して、ソコリニキ公園の出口で別れた。すでに夕闇が迫り、雪がまた降り出した。ライオネル・バートの〝ロシアより愛を込めて〟の甘いメロディが公園内に流れていた。
ホテルに帰った矢吹と水野は、ソコリニキ公園での出来事を語り合った。ある程度ロシア語の話せる水野は、歩きながらの会話を通じタチヤーナと親しくなったようだ。
「矢吹さん、二人からの電話があると思うか。ぼくは、ないような気がする。この国では、外国人と親しくしたいと思っても、回りの目が気になって、なかなか行動に移すことができないのではないかなあ」
「そうかも知れないが、アリヨーシヤという女性は、よほど日本語の勉強をしたいようだったから、電話をかけて来ると思うよ。まあ来るか来ないか五分五分といったところだな」矢吹は、アリヨーシヤの笑顔と別れる時に握手した白く細い手の感触に、彼女の再会への想いが込められているという気がしてならなかった。
部屋に帰った矢吹は、アリヨーシヤの首を傾けて語る仕種、美人とはいえないが、均整のとれた小柄な体、理知的でそれでいて女性らしさを失わない表情や身振りに成熟した女を感じ、遅くまで寝付かれなかった。

三月二十日夜九時頃、矢吹は、ホテルでアリヨーシヤからの電話を受けた。何かを警戒するようなくぐもった英語の声が受話器を通して聞こえてきた。アリヨーシヤだと矢吹は直感した。盗聴機を警戒したのか肉声とずいぶん違っていたが、ロシア語なまりのたどたどしい口調は、まぎれもなく彼女のものだ。
「もしよかったら、明後日夜七時に会っていただけないかしら。タチヤーナも一緒ですから水野さんにも話して下さい。明日また電話しますので、その時ご返事下さい」
「わかりました。ぼくも是非お会いしたいと思います。ずっとあなたからの電話を待っていました」矢吹は喜びを噛みしめながら水野の部屋をノックした。
（つづく）



和泉式部譚（二）

島津隆子

四、帥宮（そちのみや）との恋

式部は七歳になる小式部と、八条大路の東の辺りの荒涼とした地で、世の無常を嘆きながら、貧しく暮らしていた。

すると、長保五年（一〇〇三）、為尊親王の一回忌も間近い陽春の四月十日、浅緑色の礼服に威儀を正した小童（こわっぱ）が訪れてきた。

「まぁ、おなつかしゅう……」

式部が思わず懐かしさを口にしたその小童は、かつて亡き親王に仕えていた小舎人童だった。小童も親しみを現わして式部を仰ぎ見た。そして、手にしている橘の枝に品よく結んだ文を、そっと差し出した。だが、式部は興に乗ずるふうもなく、

「いずれのお方かしら」

と呟いて、小枝を手にした。

「見ればおわかりになると申されました」

文使いは主から言われたとおりを伝える。

親王の崩御後、誘惑の手を延べる者は後を絶たないが、いずれまた、公家の〝軽がろな〟遊び人からであろうと思ったのだ。もちろん遊蕩に浸る気分など、とうにどこかに消し飛んでいる式部である。

しかし、文面をみた式部の顔色は一変した。

おなじ枝に鳴きつつをりしほととぎす
声はかわらぬものと知らずや

名前が記してなくても、小童が口にしなくても、相手がだれであるか、式部にはわかり過ぎるほどわかった。

「帥宮敦道親王さま……」

式部はそっとその名を心に呟いていた。と同時に、あの宮がどうしてこのようなことを……と、われとわが目を疑った。それから小童に向かい、

「そうでしたか。今は為尊親王さまの弟君、帥宮さまにお仕えですのね」

と言ったが、その時はもう、いそぎ返事を書かなければと、逸る気持に駆られていた。

「しばらくお待ち下され」

式部は部屋にもどり、もういちど流麗な筆跡のその歌を読み返した。

技巧を凝らしながら、さりげない感情の流露がある。恋歌にはちがいないが、それでいて故兄宮への惜別の情も織り込まれている。式部ははじめ、単なる戯れではないかと疑った。しかし、戯れにしては大胆にすぎる。帥宮ほどの人物が、いまだ兄宮為尊親王の一回忌も終えない喪中の禁を犯してまで、このような悪戯をするだろうか。

式部は橘の枝を手に持ってくるくると廻す仕草をした。すると、

さつきまつ花橘の香をかげば
昔の人の袖の香ぞする

という古歌が思わず口をついて出た。

そうだわ、これはきっと深い意味を持つ、帥宮の積極的な求愛にちがいない、と思えてきた。そして、そう心に決めると、式部の筆は走るように紙の上を流れた。

かをる香によそふるよりはほととぎす
きかばやおなじ声やしたると

小童に返歌を持ち帰らせてから式部は、改めて自分の大胆さに驚き、頬に羞恥の火照りを覚えた。求愛に答えようとする言外には、肉感的な欲求さえ訴えて、誘いかけている。ある人のいかなる作品も、その人の説明であるように、この返歌が今の自分の心情でないなどとどうしていえようか。式部は、筆の走りがいい加減なものでないことを率直に認めざるをえなかった。

為尊親王の死後、追い詰められた女人がとうぜん至る諦観の境地にいた自分が、弟宮に対して、なまめくような歌を詠むことができたのが不思議なくらいだ。それを世の人に多情多恨な女といわれようと、偽らぬ自分の真情であるかぎり、自身の蘇生を意味するにちがいないと、式部はしきりに自問自答を繰り返すのだった。

為尊親王の弟君帥宮敦道親王は、天元四年（九八一）、冷泉帝と藤原兼家の娘超子との間に生まれたが、二歳で母を喪い、兼家によって東三条院で育てられた。

式部は五歳年上である。

式部の家の前庭に一台の牛車が、轍（わだち）の音を軋ませて止った。

訪問者は側近の右近尉（うこんのじょう）を伴った帥宮（そちのみや）であった。かつて、病床にいた昌子内親王のもとを兄宮と連れ立って訪

れてきた姿を、式部は時折自邸で見かけたことがあった。今、こうして間近に仰ぐ宮は、鼻筋が通り、怖いほどの切れ長の眸をした気品あふれる容貌である。口元にはいかにも負けん気の強さを示す矜持が漂っている。

帥宮は二十二歳になっていた。

「ほんとうにお久しぶりでございまする。宮様のようなお方が、このようなむさ苦しい処においでくださるなんて」

式部は帥宮を家に招じ入れた。

「兄宮の一周忌も終わらない上、日ごろ、このような訪問は慣れていないゆえ」

「お立場はよく存じております。でも、それほどまでにしてお出ましくだされ、ほんとうに嬉しゅうございます」

こうして帥宮と現実に逢ってみると、式部はいずれこのような世界に足を踏み入れてゆく自分であったろうと実感する。恋する宿命にある者が求め合う時、どんな言葉も無用である。一目逢えば、隠しても隠しきれない恋の炎をお互いが看抜くだけである。その炎の前には、歌さえも一片の形式にすぎない。

人間とは厄介なものである。その日はどうという話もなく別れてはみたが、翌朝、さっそく宮から文使いが来た。

恋といえば世の常のとや思ふらん
けさの心は類だになし

それに答えて、式部は、

世の常のこととともさらに思ほえず
はじめてものを思う身なれば

と、恋路の形式を型どおりふまえて、素直に応じる姿勢をみせた。

だが、世のしきたり、まして皇子という身分に加えて、冷えた夫婦とはいえ、帥宮には〝北の方〟というれっきとした正室がいる。それに皇室の政務を執る帥宮には多くの取り巻きの存在もある。内大臣藤原公秀、病弱だが異母兄宮である春宮居貞親王、大納言藤原実資など〝反道長派〟にとっての中心人物たちである。この人たちの手前、帥宮の夜毎の外出はさすがにはばかられた。

二人は逢うこともできないままに、ただ歌のやりとりによって恋し合っていた。そこで愛はより濃密さを増し、歌も円熟の境地に達していった。

五月、雨が降り続いている。

お互いの身を案じながら、逢瀬もままならない。帥宮から見舞いの文が届くと、式部は頼りなく寂しい心情を伝える。

よもすがらなにごとをかはおもひつる
まどうつ雨のをとを聞きつつ

と。帥宮からは返歌が届いた。

われもさぞおもひやりつる雨のをとを
させるつまなきやどはいかにと

つまなき宿、つまり夫のいない宿で、ひたすら自分を慕う式部のわびしさを宮は思いやるのであった。

この時期の歌は真剣なうえに、絶妙な恋の駆け引きともいえる。このような場合、不満と焦燥を訴えるのはきまって女性の方であるが、式部も例外ではなかった。

今はよも来しもせかじと大水の
深き心はかはと見しかど

と、帥宮の心根の薄情さまで歌に託すしまつである。

帥宮はそれが式部の巧みな誘い水であることを承知の上で、その急流に身をゆだねる決心をする。

ある夜、薫物をさせていることから、帥宮の外出を察した侍従乳母は急ぎ参上して苦言を呈した。

「……そのような外出はすぐ宮中のお噂になりまする。相手の身分をお考え下されませ。たいして貴い女人でもないではござりませぬか。世の情勢が混沌としている時ゆえ、大殿（内大臣）のご心中もお考えくだされ。あのような女人の許へお出かけになるなど、お見苦しゅうございます」

大殿とは藤原道長のことである。乳母は身びいきからか、道長は次の春宮に帥宮を考えていると思っている。その道長の心中を慮って、身を謹んで欲しいと訴えるのだが、帥宮は苦笑して、

「気晴らしに真夏の夜の風情なりと、眺めるだけです。それほど大仰に騒ぐほどのことではありますまい」

とさりげなくかわした。それでも乳母は、

「どうしてもとおっしゃいますのなら、いっそこちらへ召抱えて、お使いなされたらよろしいかと存じます」

と帥宮の背に言葉を投げかけたが、宮は馬耳東風と聞き流して出かけてしまった。

乳母は帥宮の立場を思うと気が気ではなかったのだ。

一条帝と定子の間には五歳になる敦康親王がいる。春宮居貞親王と藤原済時の娘娍子との間には敦明親王が生まれて十歳になっていた。そして、冷泉帝の子、敦道親王、つまり帥宮がいる。この三人の親王のうち、次の春宮には誰がなるのか。乳母にすれば、帥宮が式部ごときと恋にうつつをぬかしている時ではない、という思いが強かった。

とっぷりと日が暮れるのを待っていたかのように、無灯火の牛車が式部の家の前で停まった。帥宮は辺りを見廻してから潜り戸を押して中へ入る。そして、突然のことに驚きの色を隠せない式部に向うと、

「さあ、参りましょう」
と急き立て、半ば強引に牛車に乗せてしまった。
どのくらいの時間を車に揺られたのか、式部には皆目わからなかったが、着いたのは人里離れた場所のようであった。
梅雨はあがっていたが、日暮れ前に夕立があったせいか、空気はしっとりと湿り、涼風が爽やかに渡ってゆく。二人は土手下の草原に出た。月の光が冴え冴えとあたりを照らして、せせらぎの音が聞こえる。水際の草むらに二、三の蛍が光っている。どこまでも森閑として、流れの音も静寂をさまたげはしない。
式部は体の芯まで甘酒に酔ったような、言葉にならない甘美さに満たされている。竹林の小路を通り抜けると、目の前に山荘風の建物があった。
玄関に出てきた老女が丁寧に腰を折って二人を招き入れる。磨きこまれた廊をとおり、いちばん奥の部屋に式部を誘い入れると、帥宮は襖を閉めた。
式部は帥宮の胸へ斜めにしなだれかかり、顔を埋める。
「心ならずも遠のいておりましたこと、悪くお思いなさいますな」
帥宮は式部の耳元に囁きかける。
「いえ、そのようなこと、少しも……」
式部のかすれる声に合わせるかのように、長襦袢の紅絹の裾が乱れる。脂肪がのった白い腿が、灯火の下で浮き立つ。だが、式部は帥宮の視線に恥じる様子もない。堪能な手つきで艶やかな膝や腿の感触を味わう風情の帥宮に応じ、ともに真新しい夜具の上に倒れた。
それからの式部はわれを忘れた。帥宮はその恋歌のように優美な言葉を囁きながら、いかにも巧みであった。二人の肌と肌が強く触れ合い、五歳の年齢差をこえた炎のような絡み合いは夜明けまでつづいた。その限りない陶酔の中で、式部は自身のこれからつづくであろう壮絶な人生を予感していた。

五、宮中、南院へ

帥宮の強い勧めで式部が宮中御殿の南院に入ったのは、長保五年（一〇〇三）、年の瀬の十二月十八日のことである。表向きは乳母の言葉どおり、宮中使いとして召し出されたのだが、二日後には帥宮が強引に〝北の対の屋〟に式部を移してしまわれたので、宮中はたいへんな騒ぎとなった。
「容色はそれとして、余程に閨が達者なのであろう。それで親王様もご執心されたのじゃ」
「噂に違わぬ相当な女人でございますね。男を喜ばせる手管など、とうに身についているのは明らかなこと。宮さまも魔がさされたのでございましょう」
このような時の他人の言葉は、常に勝手な想像を交えて辛辣を極めるものだ。しかし、冷泉帝や内大臣などよりも、物見高い高貴な人々の非難は、式部がかつて故為尊親王の恋人だったということにあった。だが、帥宮は、「故兄宮の一周忌からすでに半年を経ているのです。何ら宮中慣例の作法に欠けるものではありません」
と平然と突っぱねたが、治まらないのは北の方である。この妃は藤原道隆の三女である。二女の原子は居貞親王の春宮女御となっている。このように道隆は、天皇の外戚として磐石な態勢を築きつつある道長に対抗し、冷泉院の親王たちを身内として抱え込んでいたのだ。
しかし、帥宮の異母兄に当たる春宮居貞親王の妃城子はこの事態に激怒し、妹の北の方を南院から出して、小一条にある祖母の許に預けてしまわれた。
このような騒ぎの一部始終を見聞した式部は、北の方に対して慙愧の思いにかられ、苦しみ抜く。だが、迷った挙句とはいえ、こうして南院に入ってしまった以上、式部は帥宮に従って生きるより術がない。だが、それは反道長派が分裂の兆しを見せ始めたことを意味した。喜んだのはもちろん道長である。
しかし、帥宮はこのようなことは予期していた。
反道長派の集会の席上、多くを語らず人々の声を聞いていた帥宮は、心の中で、
（道長のことだ、この好機を逃さず、必ず図に乗るにちがいない。その時こそ、春宮居貞を天皇に戴き、やがて上皇に据えて、自分が玉座を占めるならば、天下万民の納得する布陣となろう。外戚に過ぎない藤原一門など一挙に抑え込むができる）
と、日頃の思いを反芻する。そしてなおも、
（式部を南院に入れるという大胆な振る舞いも単に自分の情愛からだけではない。暗躍する藤原一門との抗争劇に終止符を打つ機会を作るためでもあるのだ。それは、今にわかる）
帥宮は、自分の行為に非難と失望の目を向ける大殿や春宮、主だった廷臣たちに、侮蔑ともつかない輝きの一瞥をくれただけであった。
そして、今しも会議場から退出しようとする帥宮の、どことない不遜な態度に、春宮は、
「お待ち下され」
と声をかけた。帥宮を睨みながら、しばらくはただ唇をわなわなと震わせて、こめかみを引き攣らせていたが、甲高い声で、
「時節柄もわきまえず、かくも義妹を恥辱するとは！　そんなことで皇室の安泰はどうなりましょうや……」
と心にわだかまっていた鬱憤を吐き出すように言った。
（春宮の聞きしにまさる短慮さよ）
帥宮はそう心に呟くと、言葉に代えてにやりとしただけでその場を立ち去った。
南院の前庭には、玄輝門を隔てて内裏の、いわゆる後

宮十二殿が建ち並び、それぞれの庭園には藤、菊、紅葉、萩、山吹、梨、桐などの花や木が植えられている。

昇りはじめた月は眩しいほどの黄金色に輝いて、中天からの光の箭はそれら壮麗な建造物の甍に映え、草木は陰影を描いている。

式部はさきほどから玉簾垂の開いた格子から夢幻にも似た世界に見入っている。そこへ足早にやってきた帥宮は式部を奥座敷に招き入れた。

座敷にはすでに灯が入り、上膳が二つ据えられ、床には赤い実のついた万両に菊の花をあしらって、形よく活けられている。

膳を覗いた帥宮がさも驚いたふうに言う。

「これは豪勢なご馳走ですね」

「ご存知のくせに、わかっておりまする。帥宮さまが特別にご用意させたこと……私の好物ばかりですもの」

式部が甘い口調で応じる。二人はときどき柔らかな視線を交わしながら、遅い夕餉をとった。

夕餉の終わった奥の寝所には小袖姿の式部が夜具の上に正座して、帥宮の着替えを待っている。枕元には香が馥郁と薫り、物音ひとつしない。かすかに聞こえるのは庭園からの筧の音ぐらいである。帥宮が一つだけにした灯の細い光が流れ、寝所は海底のようにほの暗くなった。目が馴れてくると、そのか細い光が冴えて、部屋中が銀箔を溶かしたようなきらめきを帯びてきた。

その仄白い光沢の下、紅絹の布団に横たわった式部の妖しい姿態を鑑賞するかのように、じっと瞳を凝らす帥宮。式部は帥宮が傍にいるだけで心も肉体も豊饒さを増していくようだ。そして、帥宮の背に腕を絡めると、

「ああ、帥宮……」

とはじめて年上の女の情感をこめて言葉した。

この世のものならぬ何という美しい裸像であろうと、帥宮は息をつめる。

そして、恥溺させてやまないこの白い裸身に密戯のかぎりをつくすのだった。

正月一日。御所で行われた恒例の拝賀の儀式に北の方が参列した。

それが北の方の最後の抵抗でもあり、せめてもの女の意地でもあるかのように、わざと帥宮に寄り添って文武百官への顔見世を行った。

そんな中、まだ官職もないまま、はるか遠方にうつむいて控える式部を一目見ようと、局や後宮の女官たちが覗き見をしていた。

やがて参賀の儀式が終わり、帥宮が官邸に戻ろうとすると、北の方はそこにもついてきた。帥宮は別に困惑する様子もなく、むしろ正月気分に浸るかのように、にこやかである。

帥宮に従っている多くの公卿、殿上人が官邸に残り、管弦を奏でる宴が催される。

それらの人々のいつになく賑やかな声や、曲が流れてくる祝宴の様を、式部は小式部とともに奥の部屋で耳にしていたが、その夜、帥宮はやはり北の方を遠ざけて式部の許へやってきた。この時、北の方ははっきりと南院を出る決心をしたのだった。

翌日、帥宮が局を訪れたとき、北の方は側近の女房たちに囲まれて、実家に帰る準備をすっかり終えたところであった。不機嫌さを満面に現わしてそっぽを向く北の方をよそに、帥宮は平然と女房たちに言った。

「しかるべき物など取り片付けて、むさ苦しい処々などの掃除、大儀であった」

皇妃の自分が、政変や病気でもないのに、宮を横取りされ、正室の座を追われるなどと、夢想だにしなかった北の方の口惜しさは、とても言語に表わせるものではなかった。

六、小式部　内侍に

寛弘元年（一〇〇四）の三月、桜の花が咲き乱れる、ある日のことである。

久しぶりに外出した式部は、道貞の後を追って陸奥国に旅立ってゆく左京命婦に出逢った。旅装を整えた命婦は可憐な子供まで連れている。

ああ、やっぱり……

式部は安堵とも動揺ともつかない複雑な気持で会釈をした。命婦はやや浅黒い顔の目許に、軽い微笑を含んで挨拶を返した。式部は去ってゆく命婦とその子の姿を、なぜか感慨深げにいつまでも見送っていた。

宮中に宵闇が迫ると、諸殿舎のあちらこちらに灯が点じられて、その灯が長くくねった廊に沿った遣水に映えてさらさらと流れる。岸の周りの樹木が篝火に照らされて池に影を落す。

式部は帥宮に寄り添って酌をしている。

「どうしました。妙な顔をして」

帥宮が盃を受けながら言う。

「ごめんなさいまし、ちょっとしたことがございまして」

式部は言葉を濁そうとする。

「また女御たちの噂話でも聞いたのでしょう。気にしないことです」

帥宮はいささか的外れなことを言う。その時、ゆらめいた行灯の火にかきたてられるように式部は思わず、

「小式部のことが……」

と口走っていた。

はて？　と帥宮はいぶかしげな視線を式部に向けたが、すぐに元の表情に戻って式部に問うた。

「小式部は何歳になりましたか？」

「九歳になりまする」
「まだ若すぎるが……」
帥宮は思案する風だったが、
「小式部を内侍司に致そう」
と一言、はっきりと言った。
不意な言葉に、式部は一瞬、ええっ と困惑の色を隠せない。
「どうかしましたか」
「あんまり突然なので……私、そ、そのようなこと、ついぞ思ってもみませんでしたので」
内侍司と言えば後宮十二司の女官の筆頭職である。常に温明殿に内侍していて、天皇のご移動の際は神剣御剣を捧持する尊い役柄なのだ。まして、小式部の祖父大江雅致や実父橘道貞の官位である「従六位上」より一階級上の「五位」に相当する。
式部は思わず心の中で、
「勝った！」
と叫んでいた。実家との断絶、離縁、為尊親王の死から受けた屈辱と悲哀、それがいったい何であったというのか。式部の脳裏は、すべてがものの見事に大逆転してしまった勝利感で満たされ、目には薄っすらと涙さえ浮かべていた。
式部のように宮中入りした女人で、なにほどかの野望を抱かない者はいない。しかし、自分の年齢を考える式部は、ただ、高貴な男に愛されるだけでいいと、野望などとうの昔に捨て去った心境であつた。だが、今日はからずも左京命婦とその子をみたことが、願ってもない小式部の昇進につながったことの意外さに、内心、式部は驚いた。やがて、少し落ち着いてくると、あるいはそんな野望が心のどこかに眠っていたのかもしれないと式部は思った。
そして、冷泉帝の皇子帥宮が三条帝のあと春宮になり、帝になられたなら、もしかして、皇妃にも……という夢のような思いが式部の内奥をかすめたことも事実である。
帥宮は式部の膝にある手を自分の膝の上に置きかえて、穏やかに言った。
「小式部内侍、おお、何と愛らしい名ではありませんか。生涯その名のままで置きたいようですね」
興じるように笑う帥宮の心遣いがたまらなく嬉しくて、式部は言葉も見つからず、泣き笑いの表情で頷くだけであった。

数日後、内侍の官職が正式に下り、小式部はそれらしく女院の服装をまとった。
まだ幼さを残しているが、母親譲りの麗質な風姿は、
「ほほう なるほど」
という感じで、すぐに殿上人や貴公子の目に留まった。
それらの男たちと廊などですれ違うときなど、

「名はなんと申す？」
と問われると、
「小式部内侍と申しまする」
と甘えた口調だが、はっきりとした声で答える。
こうして小式部の宮中賢所での生活が始まった。
しかし、母親と京の八条通り辺りの侘住居に暮らしていた、元大進の出に過ぎない九歳の少女が、内侍の中の掌侍になるなど、異例の事柄に属する。それはつまり、式部に対する帥宮の愛欲の溺れからととられても仕方がなかつた。
「これで母親か、成長した連れ子が、賢い赤子でも産めば、れっきとした皇子のご生母になるのも夢ではあるまい」
嘲笑を交えた侮蔑や羨望の入り混じった陰口がさかんに囁かれた。

七、賀茂祭

「今日こそは小式部とともに、人々の目をひくように、思いきり盛装して御覧なさい」
帥宮はいつになく気色ばんでいった。その言葉に従って式部は藍と紅花とで染め上げた薄紫色の表着を身にまとい、小式部も葡萄色の汗衫で着飾った。
側仕えの老女二人が、院の正面で履物を揃えて待っていた。一人が式部の手を、他の一人が小式部の手をとる。
小式部は折からの生暖かい薫風に昂揚した表情で、着慣れない長い裳裾を、及び腰の浮いた足元にからめ、時々よろめいては老女の腕にすがる有様である。式部の手をとっている老女まで手を差し延べて、すかさず左右から小式部を支えるのであった。
この日のために用意されたような燦々とした陽射しが、陽気な大小の渦を描いて、式部母娘を彩る。二人は思い切った白塗りで眉墨も濃くひき、唇は深紅に輝いている。賀茂祭は京の都第一の祭りである。その行列の壮観さは見る者の目を奪い、上は上皇女院から一庶民に至るまで、行列に加わらない京中の貴賤男女までも、この行列見物のため先を競って順路に桟敷を構えるのだ。
見物車も路上に溢れ、大路の両側は往来することもままならない。小式部にとっては、車に同乗させてくれるという帥宮の申し出は、願ってもない喜びであった。
今日こそはかくばかり着飾って、晴れがましく大勢の人々の前にでるのだ……小式部は自分がかぐや姫になったような心地であった。
牛車は全部で十五輌。半蔀車には各大臣やその女房たちが。青糸・紫糸などで車箱を飾った糸毛車には中宮、春宮、各摂関家などの女院が乗っている。この日、特別に皇族用として、屋根が唐棟の破風に似た大きな唐車が用意されていた。それには竹を緋の糸で編み、赤地の錦で縁どった簾がさげられている。

先頭の車にはこの祭りの主催者である大斎院が数人の側室と。次いで一条天皇と皇后が。三番目の牛車には春宮とその皇妃姨子が一子敦明親王を抱くようにして乗っている。だが、妹北の方の姿はどこにも見あたらない。

四番目が帥宮の牛車である。どうしたわけか車が動き出したのに、帥宮の前だけ真ん中を縦に切った簾を巻き上げて、式部の方の簾は下ろしたままだった。したがって式部と小式部は狭い物見窓からしか外を眺めることができないでいる。

「どうしてこんなことをなされますの?」

と問いたげな二人の視線にもかかわらず、帥宮は端然と威儀を正して周りの喧騒を眺めやるばかりである。しかも、その形のよい唇には時々微笑さえ浮かべている。

やがて大路も半ばを過ぎた頃、帥宮の車をひく黒牛が急に立ち止まると糞をした。この珍事に並いる群衆から大きな笑い声が起こった。そして、再び車が動き出した頃合をみた帥宮は、式部には袖口と裳の褄を、小式部には袴と汗衫を簾の下から垂れさせたのである。それはいずれも地面を引きずるほどの長さであった。

普通ではない大げさな様子(パフォーマンス)に、群衆の目は完全に帥宮の牛車に釘づけになり、そして、口々に囁いた。

「ああ、あれが帥宮敦道親王さま……」

「それにしても、簾の半分には、いずれのお方が乗っておられるんじゃ」

帥宮は人々の声に答えるかのように、式部たちの前の簾を上げさせた。一瞬、息を呑んだように群衆が静まり、ややあって、どっと歓声が上がる。

「斎院さまご帰還の行列より見事じゃ」

「あれが和泉式部とか申すお方か。なんて美しい女人なのじゃ。まるで天女のようだ」

しかし、牛車とともに歩む人々の中から、こんな声も聞こえる。

「あれが小式部といわれるお方じゃそうな。ほぅれ前夫の捨て子であったという」

ともあれ、帥宮の演出が効を奏したものか、一段と群衆のざわめきを誘って、祭りらしい華やいだ雰囲気を盛り上げてゆく。

賀茂神社の境内に入ると、帥宮の牛車の周りを人々が取り囲んで群れる。

「日の出の勢いの道長様じゃが、皇室もたいしたものよな。このような宮様がおられて祭りの気分も一入(ひとしお)と申すもの」

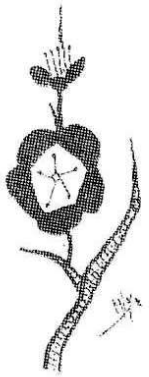
「日ごろ羽振りのいい道長様も、面目丸潰れじゃて」

人々の声はいよいよ調子を上げてゆく。式部はそれらに耳を澄ませ、帥宮の横顔をじっとみつめる。帥宮はさりげなく小声で呟いた。

「こんなご時世ゆえ、いつ、何が起こるかわからない。せめて祭りぐらい楽しく行わなくては……」

(いいえわかっております、お心の内は。宮のように聡明で覇気に満ちたお方が、そんなことだけで派手に振舞われたのではないことぐらい。わたしたち母娘の存在を誰の目にも認めさせ、道長様より皇室を強く印象づけるための演出であることは……)

式部は心の中で帥宮に語りかけていた。



社告(内規)

☆ 同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の(ひろば)として季刊発行しております。

同人は同人費として月額一、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆ 維持会会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ケ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇ー〇ー六四五九二

加入者名　まんじ

都市銀行『爆発物処理班』（四）

宅見勝弘

本作品は、作者の体験に基づいていますが、登場する人物・企業等についてはフィクションです。
【前号までのあらすじ】東西銀行に勤める武神優一は、暴力団組長の射殺事件のニュースを聞いて、担当先のトーキョーファイナンスとの関連を疑っていた。その事件から一ヶ月後、優一に脅迫電話が架かってきた。

八、脅迫電話

「殺す」
電話の相手は、殺すという言葉を繰り返した。優一は突然の脅迫電話に戸惑って、受話器を抱えるように持ち直した。
「誰だ」
優一の質問に、相手は無視して続けた。
「必ずお前を殺す」
優一が言いかけようとすると、唐突に電話が切れた。
（とても悪戯電話とは思えない。一体、誰が電話を架けてきたのか）
相手の声は、外国人が日本語を話しているような不自然なイントネーションであった。
（電話の声に聞き覚えが無いな）
優一が考え込んでいると、再び電話が鳴り出した。電話に出る気が無く、ただ電話を見つめていた。
七回目のコールが鳴っているとき、電話機に繋がっているコードを引き抜いた。
（相手は正常でなさそうだ。警察に届けた方が良い）
受話器を取り上げて、一一〇番を押したところで、自分でコードを抜いていたことに気付いた。しかし、またコードを繋げようとは思わなかった。
（ここは大丈夫だろうか）
部屋の中に爆弾か毒ガスが仕掛けられているような気がした。

独身寮の部屋から出ようとしたが、ドアは開かなかった。内鍵が閉まっているに気付いて、鍵を外して出ようとしたが、それでも開かなかった。
（何をやっているんだ。ドアは内開きだ）
二年以上も毎日出入りしていながら、内開きのドアを外へ開こうとしていたのだった。
漸く廊下に出てから、また不安に襲われた。廊下は上半分が窓になっている。優一の部屋は三階建て独身寮の最上階の奥で階段から七部屋分離れていた。寮の周りには独身寮よりも高い建物が立ち並んでいる。
優一は外からライフル銃で狙われているように感じた。窓の外から体が見えないように廊下を四つん這いになって、階段へ向かって這っていた。
階段を転がるように下りると、二階の山名係長の部屋が見えた。
ドアを荒々しくノックして、そのまま飛び込んだ。
「今、殺してやる、という脅迫電話が…」
優一が突然、部屋に入ってきたが、山名は驚いた様子も無く、読みかけの本を置いた。
「落ち着け」
優一は大きく息を吐いて、脅迫電話のことを整理しないまま山名に説明した。
「脅迫電話の犯人としては、三つ可能性があるな。一つ目は個人的に恨みを持っている人。二つ目は暴力団抗争で武神組と対立する暴力団員。三つ目は不良債権回収の相手だ」
山名は仕事の時と同じように順序立てて話した。
「個人的に何か恨まれている覚えは無いか」
「殺すなんて言われるほど、人に恨まれる事は有りませんよ」
「身に覚えは無くても恨みは買っているものだよ。とりあえず申告通り、この可能性は低いとしようか」
山名は状況を楽しんでいるような口調であった。
「次の可能性は、一連の暴力団抗争でお前のことを武神組関係者と間違えて、対立する暴力団の殺し屋が電話を架けてきた」
「殺し屋が事前に予告電話を架ける訳は有りませんよ」
「前もって予告したのは、死の恐怖を充分に味あわせてから殺すためかもしれないぞ」
「殺し屋なら人違いに気付く筈でしょう」
「ヤクザであれば、いきなりお前を殺してから、後で人違いに気付くよ」
山名が冷静に話していたが、優一は小刻みに膝を揺すりながら聞いていた。
「最後の可能性は、不良債権回収に絡んで逆恨みした顧客が架けてきた」
江頭不動産の社長のことを優一は考えた。自殺する前に道連れに銀行員を殺す、と言った人物である。

「山三証券部長刺殺事件を覚えているか」
「株で損した犯人が顧客サービス部の部長を白昼路上で刺し殺した事件ですね」
「犯人が惨殺した証券マンは、実際に株で損をさせた営業の担当者では無く、苦情処理を引き受けた人だよ。部長は、自分が直接に損をさせていないのに、たまたま組織のその立場にいただけで、惨たらしく殺された訳だ」
山名が何を言いたいのか、優一は分からなかった。
「もしも、銀行に恨みを持っている人が銀行員を殺そうとしたら、融資した時の担当者でなく、今の担当者、つまり、俺達を殺すよ」
他人事のように山名は言った。
「自宅の電話番号を知っている先は何処だ」
「NTTに登録してないので」
指折り数えながら、優一は十三社の名前を挙げた。
「なぜ教えた」
自宅の電話番号を教えてはいけないことは優一にも分かっていた。
「手形決済資金が当日になって足りないと言われたことが有ったので、その会社には、真夜中でも土日でも良いから早く連絡をして欲しい、と言って教えました。土日に稟議書を書いていて、寮に折り返し電話をもらったことも有ります」
「名前の挙がった梅田建設は先月、破産を申し立てたな。破産申立理由に、東西銀行が融資しないから、と書いていた筈だ」
優一は、二ヶ月前に自分の父親よりも年上の梅田社長が融資を申し込みに来たことを思い出した。応接のテーブルに額を擦りつけて、「助けて下さい」と言ったのであった。
テーブルが無ければ土下座をしそうな様子に、「お願いですから、頭を下げないで下さい」と言って抱え起こした記憶が甦った。
翌週に「融資できない」と伝えた時の梅田社長の恨めしそうな眼つきが優一の頭の中に焼きついていた。
「誰が犯人か分かりませんが、警察に通報しますよ」
優一は山名の電話に手を伸ばした。
「待て。いきなり銀行の外部に話を持っていくな。先ずは銀行内の連絡が先だ」
山名は制して、そのまま伊馬副長の自宅へ電話した。
脅迫電話の件について簡単に説明をしていたが、山名は受話器を差し出した。
「電話を替るから、直接聞いてくれ」
優一が受話器を取ると、伊馬副長の罵声が突き刺さるように聞こえてきた。
「そんな下らないことを報告するな。警察沙汰にでもなったら、二度と支店で働けないぞ。分かっているのか」
叩きつけるように電話が切れた。

九、社長死亡

「本日、社長が死亡しました」
一九九八年三月九日月曜日午後五時過ぎ、トーキョーファイナンスの畑山部長から、銀行で報告書を書いていた優一宛に電話があった。
脅迫電話から五ヶ月が経過していた。優一はNTTへ連絡して自宅の電話番号を変更した。電話は必ず留守番電話をセットして、直接は受けないようにした。
無言電話が何十回とあったが、脅迫電話が録音されていることは無かった。
脅迫電話の件は警察には届けなかった。銀行の中でも伊馬副長が握りつぶしたので、支店長へも報告されていなかった。
「今年度、就任されたばかりの上岡社長が死亡したのですか」
社長死亡という連絡に、聞き間違いかと思い、優一は尋ねた。
最初に電話を受けた時は、別件で電話があったと優一は勘違いした。別件とは、一週間前にトーキョーファイナンスの取締役が暴行罪で逮捕されており、マスコミで報道されていたからである。この事件ではイトマル事件の京英宗の弟も同時に逮捕されていた。
「そうです。御行との取引上は特に何も問題は無いと思いますが、何か手続きが必要でしょうか」
部長の話し方は、まるでゴルフコンペの組合せを質問しているように聞こえた。
(社長が死んで、問題無い、と言い切るところが凄いな)
優一は思いながら、答えた。
「御社とは、南会長が代表取締役名で取引して頂いております。上岡社長には個人保証は頂いていません。事務手続上は特にお届けは必要ありません」
十年以上前は、トーキョーファイナンスは新東京信用金庫一〇〇%出資子会社であった。当初貸出時は新東京信用金庫の出向者が代表者になっており、その後も代表者が変更になっても代表者個人保証を免除していた。
「それでは、特に問題は無いということで、宜しいですね」
畑山部長は特に死因が何か言わなかったし、優一も死因を訊くのを躊躇った。
畑山部長は慌しく電話を切った。おそらく取引金融機関五十数社に連絡するのであろうと優一は思った。
優一は、死んだ上岡社長が社長就任の挨拶で来店した時のことを思い出した。十一ヶ月前のことであった。

△　△　△

一九九七年四月八日火曜日に畑山部長から優一に電話があった。

「今般、当社の社長が交替しまして、本日午後二時過ぎに、新社長と新任のご挨拶にお伺いしたいのですが、ご都合はいかがでしょうか」

優一は応諾して、山名に報告した。

「俺は別件で外出の予定が有るから同席はできないが。当行グループの貸出金が百八十億円を越える先の社長が来店するのだから、支店長に報告した方が良いな」

優一は、鬼束支店長の隣にいた伊馬副長に報告した。

「今日の午後二時過ぎにトーキョーファイナンスの新社長が来店しますが、支店長と副長は同席されますか」

伊馬副長が答える前に鬼束支店長が遮るように答えた。

「なんで、俺がそんな先に会う必要が有るんだ」

伊馬は胡麻を擦る手つきをして続けた。

「こんな先に支店長を合わせるなんて、何を考えているんだ。お前だけ会えばいいだろう」

(報告する必要は無かったな)

優一は舌打ちをして、自席へと戻った。

午後二時の約束であったが、午後一時四十五分に優一達の居る二階営業室に、トーキョーファイナンスの社員が現れた。畑山部長ともう一人の人物であった。

約束の時間よりも早く来たことに驚き、鬼束支店長と伊馬副長は机の上を放置したまま、トイレのドアへ向かって突進した。

二人はドアの前でお互いに頭をぶつけると、頭を抱えて呻き声を上げた。

優一は二人の様子を呆れて見ていたが、気を取り直して、トーキョーファイナンスの部長達を応接へ入れた。

(この人は前に見た気がするな)

相手の顔を見て優一は思った。

「新社長の上岡です。社長と言っても形だけですので、どうか宜しくお願いいたします」

相手は長身を折り曲げて、深々と頭を下げて挨拶をした。優一は軽く頭を下げて名刺交換をした。

(初対面の挨拶で、形だけです、と言うのは変だな)

相手は優一の名刺を見ると、のけ反るように椅子に座り、大きく足を組んだ。

(謙虚なのか傲慢なのか、よく分からない人だ)

畑山部長が新社長の紹介を始めた。

「上岡社長は一九六〇年に東京大学法学部を卒業しまして、大蔵省主計局に入省しました」

(元大蔵官僚か。ヒラ行員相手では態度も大きくなるかもしれないな)

優一は三十歳になったが、かなり年下に見られることが多かったので、相手の態度には慣れていた。

「大蔵省では、大曽根内閣・竹上内閣時代に官房審議官を務めました。一九八九年に横浜税関長を最後に大蔵省を退官しました。その後、会社を経営していましたが、この度、弊社の社長に就任することになりました」

部長の紹介を聞いて、優一は眼前の人物について思い出した。

(この人は半年前の衆議院地方区選挙に立候補していた人だ。たしか、僅差で次点になって落選した筈だ)

一九九六年十月二十日に第四十一回衆議院選挙が行われた。小選挙区・比例代表制並立制で行われた初めての選挙である。与党の民自党が多く議席を確保し、橋木内閣の続投が確定した選挙であった。

目の前の人物は、優一の住んでいた東京第十七選挙区で竹上派の推薦で民自党から立候補していた。

(大蔵省出身というのに抵抗があって、この人には投票しなかったな)

優一は選挙のことには一切触れずに他の話をしていた。

しばらく、景気が悪いという会話が続いた後に、上岡社長が切り出した。

「私は形式的に社長に就任するわけですので、代表者個人保証をするのではありません。その点は宜しくお願いいたします」

畑山部長は上岡社長の言葉を受けて、優一に同意を求めるように続けた。

「弊社は昔から銀行に対して代表者個人保証はしていません。今後も前社長の南が引き続き代表取締役として会長になりまして、銀行取引は南の名前で致します。もちろん南も個人保証はしていません」

上岡社長は大げさに腕時計を見た。

「それでは次に行かないと。何しろ取引金融機関が五十社もあるので」

のけ反る様に座っていた上岡社長が立ち上がって、深々と頭を下げた。

畑山部長に先導される様に、上岡社長が応接を出て行った。

優一が上岡社長と会ったのは、その時が最初で最後であった。

▽　▽　▽

優一は十一ヶ月前の回想から現実に戻った。

山名係長が外出中だったので、鬼束支店長と伊馬副長に口頭で社長死亡の報告をした。からくり人形の様に、二人とも書類に印鑑を押し続けたままで、顔を挙げようともしなかった。

「殺されたんじゃないの」

優一の報告を受けた鬼束は呟いた。

鬼束の言葉を聞いて、伊馬は大声で笑い出した。伊馬は豪放さを見せつけるような大笑いをする癖があった。

「お前も下手なことをすると、殺されるかもな」

可笑しくて堪らないという様子で、伊馬は机を叩きながら大声で笑い続けていた。

「もし殺されたら、殉職扱いで退職金を弾んでやるから、安心しろ」

黒船（五）

太田和貞

戦争ごっこ

しもざまのよるもさわるも打払ひ
　早半鐘のいまか、いまかと

この落首は、当時の江戸庶民の戦々恐々とした様子をよくあらわしている。江戸の町は、緊迫した異様な空気につつまれて、まるで戦争状態であった。

ところが、黒船は突如として、六月十二日の朝、

「明春、再び大艦隊を率いて来航する」

と言い残して、江戸湾から退帆した。

　さわがしてやったとペリー舌を出し

極度の緊張感から解放された江戸の町人たちは、黒船来航に周章狼狽した幕府の無能振りをこのように、揶揄した。

その夏、江戸名物の両国隅田川の川開きが盛大に行われた。川に浮べた屋形舟から、墨堤に陣取った見物客たちは夜空に開く花火に、大歓声をあげて、心にたまった鬱憤を一気に発散させた。

なんにちも夜鍋仕事をして納めた明俵の代銭支払いの通知が三郎右衛門のところに届いた。

代金は、三郎右衛門が心づもりしていた半分以下であった。

「明俵の直段の儀、不相当の儀、これなきようつかまるべし」と明俵を供出せよとの文言の中に書かれていたので、三郎右衛門は当てにはしていなかったが、はじめて、

「壱俵二付、弐拾文」の文字を見て、がっかりした。

しかし、壱俵につき五文の舟賃がつけられていたので、壱俵弐拾五文にはなったが、高輪、如来寺まで持参せよとのお達しであった。

如来寺は泉岳寺の隣で、黒鍬組組屋敷の海岸寄りにあった。

（正木進之助様にお目に掛かるのも、いいな）

三郎右衛門は一瞬そう思ったが、三回目に会ったときの正木進之助の困惑顔を思い出して、

（これ以上、お会いしてはご迷惑）

と思った。

「まだ、お上よりおゆるしが出ておらんのでな」

三郎右衛門が土産物を持って、正木進之助を訪ねたとき、正木進之助のことばは歯切れが悪かった。

八月二十四日、老中阿部正弘は品川砲台築造の位置を検分し、やがて工事が着手された。

その総指揮は江川太郎左衛門がとり、その師、高島秋帆がこれを助け、昼夜兼行の突貫作業で、その完成を急いだ。

まず、第一・第二・第三・第五・第六の御台場に着手した。築造費は一御台場あたり五〇〇〇両から一万二〇〇〇両が見積もまれていた。

幕府の財政が逼迫し、江戸、大坂の町人や幕領の村々の富農たちに上納金を出させた。

御台場御普請着手の噂は三郎右衛門の耳にも入ってきたが、肝心の池田播磨守様からの御差図は何もなかった。

三郎右衛門は儀兵衛、甚八を連れて、池田播磨守様の御屋敷に御機嫌伺いにあがった。

御用人の佐藤孫兵衛様に儀兵衛と甚八をひきあわせたあと、

「このふたりの者が葛西領の村々のまとめを行ない、一日に五〇〇人の人足の手当てもできます」

と言い添えた。

三郎右衛門は平伏していた顔をキッとあげ、

（あとは、池田播磨守様の御差図次第）

と腹の中で思った。

「いや、いや。近い内に工事に着手せよとのよい知らせもあろうぞ、黒船を撃退するには、御台場が必要。されど、お上の御内所も物入りでな。それ、昨年の五月に、江戸城西の丸が全焼したのを覚えているであろう。その再建に御金蔵の千両箱があらかた消えたとも言われておる。西の丸の全焼と黒船来航とがあべこべであったら、よかったと今になって言っておる馬鹿者がおるそうだが、この世の中も、われらの人生も思い通りにならぬのが常だ。五番、六番の御普請が始まったことは、そのうち十番、十一番の御普請が始まることを意味している」

佐藤孫太夫のことばは言い訳じみていると三郎右衛門の耳には聞えた。

（儀兵衛と甚八との顔を覚えていただいた）

帰り道、三郎右衛門はそう割り切ることにした。

しかし、あの品川沖で御台場御普請が進んでいるというのに、池田播磨守様の御推挙を得て、御台場御普請の請負人になった三郎右衛門が池田播磨守様の御屋敷からトボトボと村へ帰っていくのは、むなしかった。

下之割の村々の名主たちから御台場御普請の同意を得るのも並大抵ではなかった。
同意を得るための会合も、三郎右衛門の名主屋敷で開いた。
前日から江戸で有名な八百膳の料理人を呼び、料理をつくらせた。
当日、囲炉裏のまわりで雑談していた名主たちが三郎右衛門の「そろそろ始めましょうか」とのことばに、何気なく黒光りしている重い板戸を開けて、「あッ」と声を挙げた。
座敷に、本膳、二の膳、三の膳までがととのえられた料理が整然と並べられていた。
「これは、……」
と尻込みする名主たちを三郎右衛門と儀兵衛たちが膳につくようにすすめた。
「なんのお祝いでしょうか、……」
「池田播磨守様から御羽織をいただいたと聞いておりますが、……」
きょうの名主の会合がなんのために集められたのか、聞かされていなかった名主たちは小声で隣どうしで話し合ったので、座敷はすこしざわついていた。
末席に座った三郎右衛門が立ちあがった。
「お忙しいところをお集りいただきまして、まことにありがとうございます」
と一礼したので、名主たちも礼を返した。
「床の間の御羽織をごらんください」
そう言いながら三郎右衛門は右手で床の間をさした。
三郎右衛門を見詰めていた顔が一斉に床の間に向いた。
「この度、この三郎右衛門、黒船撃退の御台場御普請を願い出しましたところ、池田播磨守様から御羽織を頂戴いたしました。丸に揚羽蝶は池田家重代の家紋、心して御台場御普請に励めよとのおことばも頂戴いたしました」
ここで三郎右衛門はことばを切った。
「御台場御普請がなるか、ならぬかは本日、ここにお集りのみなさまのご協力があるか、ないかにかかっております。ぜひともご協力くださいますよう心からお願い申しあげます。これで本日の堅苦しい挨拶は終りとして、あとはパァッと賑やかにやってください。儀兵衛、仇吉を呼んでおくれ」
三郎右衛門は、そう言いながら手を鳴らした。
「はーい」と嬌声が響いて、華やかな色彩が座敷に流れ込んできた。着物の裾をたくみにさばいて、
「あーら、おひさしぶり、このごろおみかぎりですね。梅吉姐さん、泣いてましたよ」
十人ほどの芸者がそれぞれの馴染みの名主をみつけて、
「おひとつ、どうぞ」
と酌を始めた。
座敷が、いっぺんに華やいだ。

三郎右衛門は銚子を持って名主たちに酒を注いでまわった。
(反対する口には、酒をそそぎ込め)
これが三郎右衛門が体験から得た信念であった。酒を呑ませ、馳走をすれば、強く反対していた者も態度を軟化させた。
はじめから賛成していた者は、まわりに賛成の輪をひろげてくれた。
「わしでできることは、なんでもお手伝いします」
そう言ってくれた名主の名前を三郎右衛門は心の帳面に書きしるした。
「あら、旦那。きょうはありがとうございます」
仇吉とすれ違ったとき、仇吉は三郎右衛門の耳許でそう囁いた。
「仁兵衛さんを頼むよ。床柱を背にしているお人だ。わしは今から酒を注ぎにいく。仇吉もあとからきて、助けておくれ」
三郎右衛門の小さな声に、仇吉は「わかりました」と胸を押えた。
東小松川村の名主仁兵衛は、つねづね、
「わしの村はなんでも一番だ」
と自慢していた。
村高二三八三石、戸数三九四戸は下之割の村々の中でもぬきんでていた。
その村高と戸数をバックに仁兵衛は三期目の触次役にいすわろうとした。
しかし、名主たちは、
「触次役は年番でおこなうのが順当。二期目は目をつぶりましたが、三期もと言われては、わしらも本音をいわしていただきます」
と反旗をひるがえした。
仁兵衛を触次役からひきずりおろして、その後釜に三郎右衛門をすえた。
仁兵衛が事あるごとに、三郎右衛門につっかかるのは触次役の恨みがあったからだった。
「仁兵衛さん、きょうはありがとうございます」
三郎右衛門が丁重な挨拶をすると、仁兵衛は鷹揚に盃を前に出した。その盃に酒を満たしながら、
「仁兵衛さんのご協力なしには、この御普請、手も足も出ません」
そう言って、三郎右衛門は仁兵衛の顔を見た。
鼻の頭が赤くなっていた。
「三郎右衛門さん、今度の御普請のねらいはなんだね。金か、それとも苗字帯刀のお許しか。まさか、お国のためというんじゃないでしょうな」
仁兵衛のうすい唇のあたりに、さげすみの笑いが浮んでいた。
「まあ、東小松川村の旦那、目を三角にしてどうしたん

です。めじりをさげて、わたしを抱いたときは、そんなこわい顔じゃありませんでしたよ」

仇吉と情を通じたことをバラされて仁兵衛は仕方なしに笑った。

「旦那、きょうはわたしがきているんですよ。もう、こわい顔はなしにしましょう。おひとつ、どうぞ」

仁兵衛に酒を注ぎ、三郎右衛門の盃にも酒を満たした。

「さぁ、ぐっとやっておくんなさいまし。これで、これまでのいざこざは、なしといたしましょう」

仇吉は、そう言ってパンとひとつ手を打った。

黒船がきてから村の子どもたちの戦争ごっこも様変わりした。

これまでは勤皇だ、佐幕だと二手に分かれて、ただ棒切れを振り回していたものが、黒船勢と徳川勢に分かれるようになった。

その戦争ごっこに使われる小道具も大型化し、用水路に浮ぶ田舟が黒船になった。

黒船勢を迎える徳川勢は小山に松の丸太を寝かせて大筒とした。

対峙した両軍は、しばらく泥団子をつくるのに余念がなかった。

東小松川村の名主仁兵衛の子、仁吉はいつも徳川勢の大将だった。

黒船勢の大将は平井村の百姓の子、伝七だった。

やがて、大将の「かかれ！」の号令で両軍の泥団子が乱れ飛んだ。最初は両軍の距離が遠く離れていたので、拠物線を描いた泥団子は途中で落下し、ビシャッとぶざまな姿を見せた。

泥団子か命中しないのに、いらだった仁吉は、「前に進め」と号令を掛けた。泥団子が残りすくなくなった徳川勢は前進するのをすこしためらった。

それを「おれの命令にそむく奴」ととった仁吉は、「かかれ！。かかれ！」と、わめいた。

伝七は仁吉のいらだちから泥団子がすくないと見てとった。

伝七は両手をひろげて、みなに田舟の舟板に身を沈ませて、泥団子を投げないように指示した。

黒船勢の静寂を仁吉は、

（敵は臆した）

と勘違いした。

「進め！。進め！」

仁吉は大声でわめきながら手にした棒を頭上で振り回した。

「撃て！」

伝七は立ち上がって、号令を掛けた。

田舟から急に立った黒船勢に、徳川勢は手にした泥団子を投げつけたが、一発も当たらなかった。

「顔を狙え！」

伝七には敵の顔を狙わせる余裕があった。

右手の泥団子を力一杯、投げつけ、さらに左手で握っていた泥団子を素早く右手に持ちかえて、敵の顔面めがけて投げつけた。

四、五発、徳川勢の子どもの顔面に当たって、ひっくり返る者が続出した。

「ワーン！」

顔に泥団子をぶつけられて泣き出す子どもも出てきた。

「退却！」

仁吉の声に、徳川勢が総くずれとなった。

三人の子どもが逃げおくれて、捕虜となった。

「腹を切れ！」

砲台の小山の上から仁吉は、捕虜になった子どもに罵声を浴びせた。

この日は、仁吉たちの惨敗であった。

（あしたは、決して負けない）

いつもより肩を怒らせて、仁吉は大股で村に帰った。

大将の不機嫌に気付いた子どもたちは、黙って仁吉のあとについてきた。

長屋門の入口で振り返った仁吉は、

「あすは、絶対に勝つ！」

そう訓示してから部下を解散させた。

物置から鉈を持ち出した仁吉は、裏の竹藪の中に入っていった。

広い敷地のまわりは用水堀がめぐらされていた。その用水堀に沿って、竹が密生していた。風に吹かれて、竹の葉がカサカサと音を立て、竹がユラユラとゆれていた。

（これだ！）と思ってつかんだ竹も、空を見上げて竹全体の姿を見渡すと、仁吉の心を満足させなかった。

四、五回、空を見上げてから、ようやく気に入った竹をみつけることができた仁吉は鉈を振った。

見事に斜めに切られた竹は、ゆっくり、ゆっくり傾いていった。

しかし、まわりの竹に支えられて、竹は倒れなかった。

仁吉は竹の切口の近くを両手で持って、一気にひっぱった。竹は意外なほど、びくともしなかった。

「おのれ！。大将のわしにさからうのか、……」

仁吉は顔を真っ赤にして竹をグイグイとひっぱった。

小枝と小枝とのからみあいがなくなると、竹はすーうと地上に倒れてきた。

「最初から大将の言うことをきいていればよかったのに、……」

地上に倒れた竹を睨みつけてから、竹をひきずって竹藪を抜け出した。

物置小屋の前で、鉈で竹の小枝をおとしてから、何度も竹を握り直して好みの太さをさぐって、鋸で竹を切り落した。

四尺ほどの竹と鉈を持って、仁吉は自分の部屋に戻っていった。

「三郎右衛門さん。後生だ。わしの息子を助けてやってください」

いつも不遜な態度の仁兵衛がオロオロして、三郎右衛門にすがりついてきた。

「ですから、事情をわかりやすく説明してください。事情が分からぬでは、わしにも打つてだてがみつかりません」

三郎右衛門は仁兵衛の両手を握って、仁兵衛の目を見た。両の目は血走り、視線も定まっていなかった。

けさ早く、代官所の役人が来て、「伝七殺しの一件で仁吉を召し捕る」と仁吉の寝ていた部屋に踏み込んで、仁吉をまたたくまに縛りあげてしまった。

「おれは、伝七を殺しては、いねえ」

後ろ手に縛られた仁吉は身をよじってわめいた。

「なにかのお間違えではありませんか」と、仁兵衛も役人の腰にすがりついた。

「仁吉に胸を突かれた伝七が昨夜遅く亡くなり、息子を殺されたと怒った父親の伝左衛門が代官所に訴えたので、仁吉を召し捕りに参った」

「そりゃちがう。おれはただ、伝七をおどそうと思って竹の杖を突いただけだ」

「竹の杖の先は、どうした、……」

「……」

「いずれお白洲でお調べがあるから、じっくり考えておくことだな」

「おとといおれたちが戦争ごっこで負けたから、おれは黒船のペリーをやっつけようと胸を突いただけだ」

「そのひとさしが伝七の命を奪った。父親から息子殺しと訴えられても仕方あるまい」

「……」

「このような大事件を親御は何も聞いておらんのか」

仁兵衛は、ことばも無かった。

「おらあ、礫になるのは、嫌だ！。おやじ、助けてくれ！」

仁吉は無理に顔をねじまげて、わめいた。

「おッおう。助けるとも、きっと助けてみせる。安心しているがいい」

仁兵衛はそう言って、仁吉を長屋門まで追っていった。さすがに、長屋門の外までは追っていけず、長屋門のところで立ちつくして、縄付きの仁吉を見送った。

長屋門から台所に戻る間に、仁兵衛は裸足なのに気付いた。台所に腰をおろして、女房のお勝に足を洗わしている間に、やっと落着きを取り戻した。

（伝左衛門さんに詫びを入れて、訴えを取り下げて貰おう）

そう思った途端、

「お勝、紋付きを出してくれ！。お勝、お前も着替えて、ふたりで伝七さんにお線香をあげて、伝左衛門さんに詫びを入れるのだ」

「お勝！。早くしろ！」

仁兵衛はマゴマゴしているお勝を叱った。

「せめてお線香だけでも、あげさせてください」

仁兵衛の懇願を伝左衛門は、はねつけた。集ってきた親類たちが仁兵衛とお勝を狭い庭から外に押し出した。

背中を押されながら仁兵衛は、（すがれる人、頼れる人）を探していた。

仁兵衛は、「あッ」と声を出した。

仇吉の白い顔が浮んできた。その白い顔の向うに、黒い御羽織があった。

丸に揚羽蝶の紋が大きく、仁兵衛の頭の中に映し出された。

（丸に揚羽蝶は御奉行池田播磨守様の御定紋。池田播磨守様は仁吉を裁く御奉行）

回り灯籠のように、仁兵衛の頭の中に映し出されて、仁兵衛は足が前に出なかった。

仁兵衛は頭を抱えて、しゃがみこんでしまった。

「お前さん、どうしたんですか、……」

お勝が心配して、仁兵衛の顔をのぞき込んだ。

（仇吉がいなかったら、わしは三郎右衛門さんにもっと噛み付いていた）

お勝には言えない後悔のことばを仁兵衛は心の中で吐いていた。

「御奉行様から御羽織を頂戴した三郎右衛門さんを今、思い出したのだ」

三郎右衛門には不義理ばかりで、頼めるすじでは無かったが、頼み込むしかないと仁兵衛は思った。

池田播磨守は、やさしく仁吉に聞いた。

「仁吉、そちは徳川勢の中で、どんなお役目についておったのか、……」

「はい。わしは大将でした。亡くなった伝七さんは黒船勢の大将です」

「当日の徳川勢と黒船勢の兵力を覚えておるか？」

「はい。徳川勢は七名。黒船勢は二十六名でした」

「兵力に大分ひらきがあるが、どうしたのだ」

「はい。その前日、徳川勢が負けましたので、負けるのは嫌だと十人の兵が黒船勢に寝返りしました」

「徳川勢が七名。黒船勢が二十六名。これでは、徳川勢が負けるのが目に見えておるな」

「いいえ、違います。わしら七名が奮戦すれば必ず勝てると、わしは思っておりました」

「四倍以上の兵力のちがいがあってもか、……」

「はい。わしら、この胸の奥に大和魂がたぎっておりま

すので、黒船勢なんぞに負ける訳がありません」
「大和魂、久方振りに聞く美しいことばだ。心が洗われる思いがいたす。仁吉、そちのように大和魂を持った武士、町人がもう少しおれば、黒船でこれほど大騒ぎすることはなかったのう」
「……」
「ところで、仁吉、これに見覚えがあるか」
「はい。わしが指揮をとった竹です」
「先がとがっておるが、なぜだ」
「はい。わしらが勝つには黒船勢の大将の伝七を泣かすのが一番と考えたので、竹の先をとがらせました」
「誰がつくったのだ」
「はい。わしです。負けた日の夕方、裏の竹薮からわしが伐り出しました。竹をいじっているうちに、先をとがらせることを思いつきました」
「この竹で、伝七を殺生しようと思ったのか?」
「いいえ。思いませんでした。伝七の腕を狙って突きを入れたのですが、それが胸にささってしまったのです。伝七には、本当に申し訳なかったと思っております」
「さきほど、そちは大和魂と申したが、伝七の死によって大和魂が崩れることはなかったのか?」
「はい。ありません。断じてありません」
「さようか。力強いことばを聞いて、余は満足じゃ。それでは裁決を申し渡す。一同、心して承れ」
御奉行池田播磨守様のよく響き渡る声に、伝吉たちは、
「へ、へーッ」と平伏した。
「徳川勢大将仁吉、そちは四倍以上の黒船勢にもひるまず、数すくない手勢をひきつれ、黒船勢の大将を討ち果したること、まことに天晴れである。よって生涯二人扶持を差し遣わすものなり、……」
お白洲全体に驚きの声が挙がった。
まかりまちがえば磔、運がよくても八丈島か、佐渡への島流しと覚悟をきめていた仁吉には、御奉行様の声がよく耳に入らなかった。
「天晴れである」
「二人扶持を差し遣わすものなり」
この二つのことばが仁吉の頭でグルグル回っていた。
(つづく)

シナリオ〔大人の見るアニメーション映画の試み〕

龍化妖姫(六)

―周の幽王伝―

相原精次

94 褒姒の居室

幽王　褒姒よ。いよいよ王子の誕生を祝っての祝宴が始まるぞ。瀧にも間もなく水が落ちるだろう。褒姒もその祝宴の席に出て行けるか?
褒姒　まだ体の具合が十分ではありません。
幽王　それは残念なことだが、瀧の水が落ちる音はここまで響いてくるはずだ。では今から水路の門を開けさせることにする。
褒姒　王様、もう一度烽火の煙が上がるのを見とうございます。この窓から、私はそれを見とうございます。
幽王　そうか。煙が見たいか。よし、水門を開ける合図と共に、烽火を上げさせよう。これが、祝宴の合図だ。

95 王宮の庭

宮殿を圧するような築山が出来ており、その麓に祝宴の準備が整っている。幽王の登場に虢石父、あわてて近づく。
虢石父　幽王様、ごらんの通り、全ての準備が整いました。合図一つで瀧には水が落ちることになっています。
幽王　そうか。そして、もう一つの大事な例の件の手はずは?
虢石父　はい、城下で、水門を開けたその瞬間、申侯義は捕らえることになっております。宴も始まった頃、ことを遂げた知らせが入るはずでございます。
幽王　よし、虢石父、水門を開ける合図と共に烽火も上げ

ることにした。その件も取り急ぎ準備せよ。これが全ての合図となるぞ。

96　庭の中の築山

宮中の庭には華やかな宴席。美しい舞い手たちが既に華やかな舞を舞っている。
築山の向こうに烽火の煙が空に立ち上る。同時にゴーッ、という響きと共に瀧が流れ落ちる。
宴会の会場に驚きの声が挙がる。
幽王、杯を上げながら満足そうに瀧に見入る。
そのとき、一人の兵士があわててやって来る。

兵士　大変でございます。鎬京の街の中で民、農民どもが武器を手にわめいております。穀倉が襲われている模様です。
幽王　な、何だと？　虢石父、知らせる内容が違うではないか。
虢石父　ははッ、確認させます。
兵士　申侯様も、申の国の兵を鎬京の街に入れた模様です。
虢石父　申侯が、兵を？
幽王　虢石父、それはどういうことだ。
虢石父　な、何かの間違いのはずです。
幽王　（虢石父を殴り倒す）何をぐずぐずしているのだ。事実を確認しろ。うん、むしろ都合がいい、口実が本物になったのだ。すぐ、兵たちに命じて申侯を殺させろ。見つけ次第、その場で斬ってよい。さァ、すぐに行け。
虢石父　承知致しました。（立ち上がってあわててその場を去る）
幽王　皆の者、気遣いはいらぬ。宴を続けろ。愉快にやれ！

97　鎬京の街の中

民衆側の勢力と、王城の兵士と、激しく渡り合う。
民衆側、次第に王城の兵士を圧倒して行く。

民衆　幽王を殺せ！　倉の中にある食い物を奪え！　王城を焼き討ちしろ！　幽王を殺せ！

98　王宮の中

幽王　虢石父よ。その後の街の中はどうなっている。
虢石父　はッ、思ったより民衆どもの数が多いようです。
幽王　何をぐずぐずしておるのだ。かまわぬ、兵をどんどん繰り出して、暴動に参加している者全員殺してしまえ。王に刃向かう者がどんな恐ろしい目にあうかを思い知らせてやれ。

99　鎬京の街の中

王宮側の兵士が増して、多くの民衆が倒れて行く。

100　王宮の中

なお宴会は続いている

虢石父　王様、ほぼ、暴動を鎮め終わりました。
幽王　義はどうしておる？
虢石父　八方手を尽くしているのですが……
幽王　何だ、まだ捕らえておらぬのか。怨麗と宜臼はどうなった。
虢石父　はい、それがどうも、今日のことを予知してか、数日前から王宮内から姿を消しているようでございます。
幽王　お前がそれを知ったのは、今日が初めてか？
虢石父　はァ。
幽王　重大な手落ちだ。ことが予定通り進行しなかったら、お前がどうなるかは承知しているな？
虢石父　は、はァ。
幽王　お前の命に代えても、義と怨麗と宜臼の命を奪え！　何が何でも、この三日以内にそれがかなわなかったとき、お前はこの世にいられないと思え！
虢石父　はい！　必ず御意に添えるように致します。
幽王　祝宴だ。お前からのよい知らせが届くまで、宴会を続けるぞ。

101　褒姒の居室

床の中で、生まれたばかりの伯服を抱いている。
幽王が入ってくる。

幽王　褒姒よ、気分はいいか？
褒姒　はい、王様。
幽王　宴はもう一昼夜も続いている。皆がこの伯服の生を喜んでおるのだ。
褒姒　嬉しく思っています。でも、ちょっと気になります。
幽王　何が気になる。
褒姒　王様、宮中の宴の騒ぎの他に、何かしら鎬京の街の中が騒がしかったようですが。
幽王　街の中の声がの城の中まで届くはずがないではないか。お前は夢でも見たのであろう。

褒姒　そうでしょうか。
幽王　鎬京の街の中は至って静かだ。ところで、褒姒よ。ワシはこの伯服の立太子の式を急ぐことにした。
褒姒　嬉しゅうございます。ただ、王様、なぜでしょう、この数日来、わたくしは妙に胸騒ぎを感じてなりません。
幽王　どうしたというのだ、褒姒よ。
褒姒　王様、ちょっと耳をすませてください。
幽王　何か聞こえるのか？
褒姒　はい。何の音でしょう、私の耳の底に妙な響きが聞こえます。かすかな、地響きのようでございます。
幽王　（耳をそばだて）ワシには何も聞こえぬが。
褒姒　いいえ、私には聞こえます。体中に響き渡ります。
幽王　いいや、ワシには何も聞こえぬ。
褒姒　水がたぎり落ちる音でしょうか。
幽王　ワハハハッ、そうであった、あの音のことか、お前はまだ見ていなかったな。庭に出来た大瀧を。
褒姒　いいえ、その音とは別に、私は音を聞いているのです。こうしている間にも、その音はだんだん大きくなっています。これは、おびただしい、馬の蹄の音でございます。蹄の音が、この鎬京にどんどん迫っております。
幽王　お前は何という鋭い耳をしているのだ。ワシには何も聞こえぬ。もしそうだとすれば、それはきっと烽火を見て諸侯の兵どもが、この鎬京に向かって馳せ参じて来る音だろう。もうそろそろ来る頃だ。一番近い国の兵がな。
褒姒　そうでございましょうか。今までに聞いたことのない響きのようでございます。
幽王　褒姒よ、体の調子のせいだ。子供を産んだばかりで、褒姒の心の興奮がおさまっていないのだよ。もし諸侯の兵士が鎬京にまで来たら、祝宴に加わってもらうことにしよう。まだ当分はこの祝宴は続くであろう。

102　岐山の上

鎬京の街の様子を見下ろせる岐山の上。西戎の軍勢が山上にそろう。

戎軍の指揮官　行け！　一気に攻め立てろ！

関の声と共に騎馬軍団が次々に坂を下る。

103　鎬京の街の門外

鎬京城の門外に戎の軍が迫る。門の衛兵はうろたえる。

104　王宮の庭

宴はなお続き、舞い手たちが舞っている。幽王、杯を手にしている。そこへ虢石父が飛び込んでくる。

虢石父　西の戎の軍隊が鎬京の街の門外に攻め寄せてきました。
幽王　何！　戎の軍が？
虢石父　はい、城壁の外は既に戎の軍が何重にも取り囲んでおるようです。
幽王　我が軍を、非常事態の体制につかせろ。そして、烽火をどんどん上げさせろ！　それにしても、近い諸侯の兵士はもう到着している頃ではないか。
虢石父　それが、今回は、どうしたわけか一向に、どこの国からも兵はやって参りません。
幽王　何とたわけたことだ。非常時に集まらぬ諸侯の兵など何になるのだ！　この不始末がどんな痛い目にあうのか諸侯に知らせてやる必要がある。とりあえず、鎬京城の兵士で戎の兵を蹴散らしてしまえ！
虢石父　は、はい。

戎軍の指揮官　一気に鎬京の城を攻め滅ぼせ。幽王を殺せ。財宝を手当たり次第奪い取れ！

兵士たち、門を破り、鎬京の城内になだれ込む。

106　王宮の門前

王宮の門前で申侯の兵と王宮の兵が渡り合っている。そこへ戎の軍勢が加わる。
鎬京の街の中の至る所で兵士たちぶつかり合う。

107　王宮の庭

虢石父　幽王様、もうこの宮殿の中は危険です。七名の精鋭を選びました。この城内を抜け出し、驪山を目指して逃げ延びてください。
幽王　褒姒と伯服はどうなる。
虢石父　別の兵士たちが守っております。私もそこへ参ります。逃げてください。褒姒様とは驪山で落ち合うことに致しましょう。私が守ってそこへお連れします。さァ、一刻も早く御退去を。
幽王　きっとだぞ。きっと二人を守れよ。

幽王、七名の兵士に守られ、物陰を伝い、秘密の道から城外の驪山へ向かって逃げる。

108

王宮の中

宮門の前に陣を張る義のもとに兵士が褒姒を連れてやって来る。褒姒は申の兵士に取り囲まれ、怯えた様子ながらしっかり子供を抱えている。

兵士　褒姒と、その子を捕えました。

義　幽王はどうした?

兵士　行方がわかりません。

義　ちょっと遅かったか。行方は知れている。驪山に違いない。(一人の兵士に命じる)驪山周辺に兵を集め、そのあたりを隈無く捜せ!　私もすぐそちらへ行く。

そこへ虢石父が登場

虢石父　(申の兵士数名を斬り、褒姒のところへ進む)褒姒様、私と一緒に……(手を引き、周辺の兵士を斬り、行く手を開けようとする)

虢石父、たちまち周囲の兵によって斬り殺される。再び兵士に捕らえられかかったとき褒姒は突然炎に包まれ、たちまち龍の姿に変わる。大きな口から火焔が吹き出し、周辺の兵士はその火焔で焼かれる。

兵士　龍だ!　女が龍になった!

火焔はあたりの建物に移り、建物は燃え上がる。周辺、大騒ぎとなる。

義　褒姒が、とうとうその姿を現した。やはり、龍の化身だったのだ。もう王宮はこれで滅びたも同然だ!　あとは幽王だ。皆の者、驪山へ向かえ!

109

驪山・幽王一行

幽王は坂道で呼吸も苦しそうである。兵士たちに励まされるが、ほとんど力は尽きている。

幽王　あっ、あの火の手は何だ?

兵士Ⅰ　宮殿が焼けているようです。

幽王　ワシの城が焼けているのか。ワシはこれからどうなるのだ。褒姒は、伯服はどうした。虢石父は何も知らせてこないか?

兵士Ⅱ　姿を見ません。きっと、間もなくやって来るこ

と存じます。

幽王　そうだな。その通りなのだな。ワシは、虢石父を信じていいのだな?　(一人の兵士の胸ぐらをつかむ)

110

驪山・義と追っ手一行

あたりは夜の闇に包まれている。義は兵士たちに囲まれて野営の陣を張っている。遠くから「幽王を見つけたぞ!」の声が聞こえる。

義　よし、皆の者、あの声の方に急げ。

111

幽王と義の対面

幽王と幽王を守る七人の兵士たち、申侯義の兵たちに囲まれている。義、幽王の前に進み出る。

幽王　ウーン。お前は申侯の義。

義　そうです。周室存続のため、やむなくあなたの御命をいただきます。

幽王　お前は、西の戎の手引きをしたな。

義　確かに、戎の手を借りました。

幽王　おぬし、ワシに手向かいする者がどんな目にあうか、知っての謀反か。

義　もはや、そのような強がりは通用いたしません。あなたはもう周室の王様ではありません。

幽王　何をとぼけたことを。

義　いいえ、既に周王室は東の雒邑へ移りました。諸侯の全てが認める平王・宜臼が既に王の座についております。あなたにはこの場で死んでいただきます。

幽王　何をバカな。ワシが王であり、ワシのあとを継ぐのは褒姒の子供伯服だ。

義　褒姒はあなたを滅びに導く天の遣い。龍の精でした。

幽王　何だと。褒姒が龍の精だと?

義　はい。つい先ほど、火となり、龍と化して空高く昇っていきました。

幽王　空へ?

義　なお赤く燃え盛っているあの王宮の炎こそ、褒姒の空へ昇ってゆく姿なのです。

幽王　あの炎が褒姒の姿だというのか。

義　宮涅、ここであなたの命をいただきます。

申侯義の兵たち、たちまち幽王を守る七人の兵を切り捨てる。申侯義、孤立した幽王に近づき剣を振り上げる。

そのとき、あたりに光が走り、帯となった火焔が幽王を包み込む。

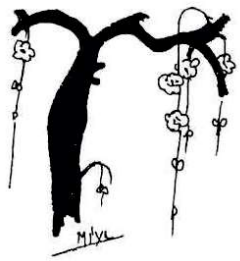
幽王、火焔の中に溶けて同化するように姿を消す。
同時に義とその兵士たちその場に倒れ込む。

112

龍、幽王を連れて昇天

火焔は幽王を包み込むと、たちまち龍の姿となり、
くねりながら闇の夜空高く消えてゆく。
義とその兵士たち次第に我に返り、声も立てずに
昇ってゆく龍をふり仰ぐ。

「完」の赤い文字画面に大きく広がる。



予　告

90号記念

“まんじ”傑作集　刊行予定

発行日　平成15年11月1日

お蔭様で“まんじ”も今年11月の刊行で90号となります。これを記念して各同人の渾身の力作を集めた傑作集の刊行を予定しております。

ハードカバー320～420頁を予定

ご期待下さい！

体当たり戦法を強制された
神風特別攻撃隊の人びと（十）

千坂精一

特攻第一号は久納好孚中尉

この日、セブ基地からも三機出撃していた。法政大学出身の久納好孚中尉を指揮官とする大和隊である。

昨日夕刻、中島飛行長とともにマバラカット西飛行場から移動してきたのは零戦八機で、久納中尉と宮川、中瀬、塩田の大和隊員のほか三人であった。

セブ基地での士官住居は、空屋になっている民家が当てられた。

白い二階建洋館で、一階のピアノが置いてある広い床の区画（フロア）が士官室、その奥が士官食堂、二階は、作戦室を兼ねた飛行長室ということになった。

隊員たちを仮宿舎に割り振っておいて、中島飛行長が二階の作戦室兼自室へ入ったところへ、まだ飛行服のままの久納中尉が追い掛けてきて、突然、

「私を特攻隊から除外されることはないでしょうね」

そう噛みつくように念を押した。

中島は、久納が生還することのない特別攻撃隊の編成を知れば、自分がその選に漏れたことを口惜しがり、強引に志願してくるだろうと思っていたので、昨日移動するときに爆装可能な零戦を自分で操縦してきていた。

中島は、久納の問い質（ただ）しにそらきたとばかり頷いて、

「君の乗る特攻隊は、私がちゃんと持ってきているよ」

微笑しながらそう伝えると、久納は納得して相好を崩し、無言で敬礼すると足取りも軽く去っていった。

夕食後、大和隊三人の指揮官に久納中尉が任命された。

その夜、久納は士官室で独り静かにピアノを弾いた。

ベートーベンのピアノソナタ『月光』だったという。

翌二十一日午後、作戦室の電話がけたたましく鳴った。

中島飛行長が受話器をとると、

「空母六隻を基幹とする敵機動部隊、スルアン島東方六〇

浬付近にあり」

緊急情報を伝える急き込んだ声が飛び込んできた。

「よし」

中島は、待ってましたとばかり素早く進撃針路と基点を航空図に記入して、搭乗員待機所へ駆けつけた。

中島が、直掩一人を加えた五人の航空図に進撃針路と目標位置を記入させて、水盃を交わしているところへ、

「発進準備完了」

の報告が届いた。

中島ら六人が早駆けで飛行場に到着した恰度そのとき、敵空母から発進したグラマン戦闘機の一群が、突如西側の山を越えて来襲してきた。

爆装して列線に並んでいる零戦五機を退避させる余裕はなかった。

勇敢な整備兵たちが、敏捷に担当機に飛び乗って、ともかく発動機を停止させた。

突っ込んできたグラマン戦闘機が、機銃を乱射した。

飛行機が離着陸する滑走路周辺には、身を隠すものなどなにひとつないから、ただその場に伏せて、無抵抗に凝と猛襲の過ぎ去るのを待つより仕方がなかった。

生死を分ける極限状態に立たされたときの恐怖感は、私にも覚えがある。

非番で上陸（外出）中に空襲警報が発令され、急ぎ基地へ戻る途中グラマンに追いつかれて銃撃されたのだ。

咄嗟に道路脇の煙草畠に飛び込んで難を避けたが、こんどは至近弾の音が無気味で、葉叢に隠れて見えないだけに、いつ被弾するか恐怖で生きた心地がなかった。

セブ基地には、さいわい滑走路の脇に飛行機を収納する掩体区画があったようで、誰も彼もがその駐機場の間仕切りの堤を楯にして身を伏せた。

こんなときは、なんであろうと躰の一部でも隠せるものがあれば地獄に仏である。

だが、退避出来なかった零戦五機は餌食になり、機銃掃射で燃え上がると誘爆を起こして吹き飛んでしまった。

「予備機用意、準備急げ」

中島飛行長は、空襲の合間に出撃させようと焦った。

三機しかない予備機が引き出された。

「回せ、回せッ」

久納隊長が飛び出すと、中瀬一飛曹がそれにつづいた。

久納が急いたのは、帰投するグラマンを追尾すれば、容易に敵空母群に到達出来ると判断したからであった。

久納隊長と中瀬一飛曹の爆装零戦二機と、大坪一飛曹の直掩零戦が緊急発進すると、上空で編隊を組むこともなく、そのまま急ぎグラマンを追跡していった。

たった三機だけの忙しい出撃であった。

昨日マバラカットから出撃した関行男大尉を指揮官とする敷島、朝日両隊は、最初の特攻とあって報道班員やニュースカメラマンが取材に飛び廻り、基地にいる全員の盛大な見送りを受けての大々的な出撃であったが、セブ基地では勿体振った儀式や報道陣の取材もなく、しかも出鼻を挫かれて搭乗機を喪い、急遽予備機を駆って飛び立ったという、なんとも呆気ない出撃であった。

しかし、この出撃は敷島、朝日両隊同様、悪天候に阻まれ、急整備のための発動機不調もあって中瀬機と大坪機が反転帰投したが、久納指揮官機は還ってこなかった。

「どこかの基地に不時着したのではないか」

誰もがそう楽観視したが、それは希望的観測であった。

ともに出撃した二機が途中反転して単独行になったために、真相は闇に包まれてしまったが、久納中尉は昨夜大和隊の隊長を命ぜられたとき、中島飛行長に、

「私は、もし空母を発見出来なかったらレイテへ行きます。レイテへ行けば目標はかならずありますから、決して引き返してくることはありません」

そう言明していたというから、部下たちに特攻への決断を迫り、みずからもその使命を全うしようとする責任感と、率先して指揮官を申し出た熱意から推察して、単機で体当たりを敢行したに違いない。

久納中尉は、昨夜身辺を整理し、私物以外の衣服は自分で洗濯して、今朝衣糧倉庫に返却していったという。

アメリカ側の発表では、この十月二十一日は特攻機の攻撃を受けた艦船はいないというから、未発表の輸送船などに体当たりした公算が大きい。

久納中尉の戦果は確認出来ないが、体当たりを決行したに違いなく、特攻第一号は海兵出身の関行男大尉ではなく、法政大学時代に二級滑空士の資格を取得し、昭和十八年一一期飛行予備学生を志願した愛知県出身の久納好孚中尉であることは間違いない。享年二十三歳だった。

だが、海軍省は特攻第一号を海兵出身の指揮官に拘り、四日後の関大尉の突入を待って発表したので、久納中尉が第一号に認知されなかったのは残念であるが、しかし、久納中尉はそんなことより特攻という使命を全うし悠久の大義に殉じたことで満足しているであろう。

四たび死線を彷徨う

久納好孚中尉が散華した翌日、レガスピー基地に不時着していた関大尉らは、マバラカット基地に帰投した。

玉井副長の前に立って、

「申し訳ありません」

泪を溜め、深く頭を垂れて謝罪した関大尉だったが、それから地獄の責め苦がはじまった。

敷島隊は、二十二日、二十三日、二十四日と連日出撃したが、いずれも途中で天候が悪化したり、予定地点に到達したものの敵機動部隊を発見出来なかったりして目的を果たせず、虚しく引き返す無念を繰り返していた。

関大尉は、帰投するたびに、玉井副長に、

「申し訳ありません」

と謝る屈辱に耐えねばならなかった。

居心地の悪い士官室では、

「燃料ぎりぎりまで索敵したのだが」

とか、

「情報が正確なら、発見出来たはずなのだが」

誰にともなく頻りに言い訳がましい愚痴をこぼして、肩身の狭い立場を振り払う弁解につとめた。

この間の二十三日に、大和隊の丙飛一二期佐藤馨上飛曹がスルアン島沖で艦船に突入散華していた。

久納中尉につづく特攻第二号はまたも大和隊で、佐藤もまた関と同じ二十三歳であった。

このときも、直掩機の石岡義人一飛曹が途中発動機不調で引き返したために、戦果は確認されなかった。

関大尉は、指揮官として焦り、かなり精神的に参っていたようで、玉井副長や指宿、横山両飛行隊長、関と同期の平田分隊長らは、声をかけるのを憚られたという。

労りが却って逆効果になることを虞(おそれ)たのであろう。

この、四たびも空振りをつづけた敷島、朝日両隊員の残酷な苦痛の日々は、察するに余りある。

戦闘隊の通常任務は掃討、邀撃(ようげき)で、格闘戦だから生死は五分五分、つまり雌雄を決する相手の伎倆(うで)次第という運否天賦(うんぷてんぷ)であるから、出撃命令が下っても極限状態に立つ悲壮感はないが、十死零生、生還の余地の全くない出撃を命ぜられて、懊悩しない者などいるはずはない。

それも、直ちに出撃ならいくら悩んでも刻限が妄念を断ち切ってくれるが、無理矢理懊悩を振り払い、旅立っては戻ることを繰り返していたのでは生きた心地がなく、散華のときが長引けば長引くほど、生還のたびに頭を擡げてくる生への執着が抑え切れなくなって、地獄の日々に耐えつづけねばならず、余程強靭な意志を持たぬかぎり意識が混濁して精神錯乱(アメンチア)状態に陥ってしまう。

そんな最中(さなか)の二十三日に、S三一一飛行隊長横山岳夫大尉が、朝日隊の上野敬一、崎田清、山桜隊の宮原田賢、瀧澤光男、藤本壽の五人を率いて、群島最南端のミンダナオ島ダバオ第一基地に移動したので、神風特別攻撃隊四隊は、群島の北、中、南の三基地に分散となった。

いっぽう、レイテ湾に殴り込む栗田艦隊は二十三日ブルネーを出撃してシブヤン海を進撃、西村、志摩艦隊はスル海を東進、小澤艦隊は台湾東方沖を南下していた。

早く敵空母を一掃しなければ、栗田艦隊が心配だった。

果たして、二十三日にパラワン沖で栗田艦隊の旗艦重巡愛宕(あたご)と摩耶(まや)が敵潜水艦に撃沈され、二十四日にはシブヤン海で旗艦になった戦艦武蔵も撃沈されてしまった。

十月二十五日の総攻撃

栗田艦隊と西村艦隊は、二十五日早朝同時にレイテ湾に突入し、アメリカ軍上陸部隊を攻撃する手筈を整えた。

そして、もしこの作戦が難航したときは、太平洋側か

ら小澤機動部隊が援護することになっていたが、機数も熟練操縦員(ベテランパイロット)も少数なので、基地航空隊が頼りであった。

しかし、戦闘員揚陸援護に当たっているアメリカ機動部隊は、一航艦司令部偵察機の報告によると、空母七、戦艦七、その他一二、輸送船四〇の大規模で、その東方洋上には戦艦数隻を含む機動部隊が五群に分かれて、二つの輸送船団を護衛するかたちで待機しているという。

その空母数から、千機は搭載していると推定された。

これに対して、我が方は、全島の陸海軍機を合わせても、一〇〇機に満たない心細い状態であった。

早朝、神風特別攻撃隊の各隊に、総出撃が発令された。

〇六三〇、第一ダバオから朝日隊上野敬一、山桜隊宮原田賢、瀧澤光雄、第二ダバオから菊水隊加藤豊文、宮川正と直掩四機が発進し、セブからは大和隊國原千里少尉と大西春雄飛曹長組(ペア)の九九式艦爆を含めた大坪一男と荒木外義飛長の三機、若桜隊中瀬清久、彗星隊浅尾弘上飛曹と須内則男二飛曹組の彗星艦爆がそれぞれ発進した。

マバラカットでは、敷島隊の関行男大尉、中野盤雄、谷暢夫一飛曹、永峰肇飛長、大黒繁男上飛五人と、歴戦の強者(つわもの)西澤廣義飛曹長をはじめ本田愼吾上飛曹、菅川操、馬場良治飛長の直掩隊四人が、出撃準備を急いだ。

昨日、マニラの海軍病院を退院したばかりの二〇一空司令山本榮大佐が、骨折を石膏で固めて繃帯(ほうたい)を巻きつけた右足を松葉杖で庇って指揮所に現れると、激励の言葉をかけて、一人一人と固い握手を交わした。

玉井副長が、関大尉に、

「かならず成果を挙げるように」

念を押すと、関は敷島隊を率いる指揮官として、

「敷島隊は、東方海面を索敵南下して、もし目標の機動部隊を発見出来なかったときは、レイテ湾に突入して、そこにいるはずの上陸援護艦艇に体当たりします」

四日間耐えてきた屈辱感をいっきに撥ね返すように、きっぱりと言い切った。

五度目の出撃なので盛大ではなかったが、山本司令、玉井副長、副島軍医長ら幹部将校と、整備員が見送った。

関大尉は、副島大尉に気づくと近寄って、

「今日はかならずやりますよ」

そう約束すると、副島に握手を求めた。

副島は、関の真剣な表情と、強い握力の感触から、

(断じて決行するつもりだな)

と確信したという。

〇七二五、先頭を切って関大尉の指揮官機が発進した。

副島大尉は、関機を追って走り出し、右手で力の限り軍帽を振って別れを告げた。

敷島隊のあとに直掩隊が離陸したが、両隊とも編隊を組むことなく、順次東の空の雲の彼方に消えていった。

このとき、スプレーグ少将指揮のアメリカ機動部隊は、護衛空母一六隻を四群に分けて、一群はルソン島とサ

マール島のあいだのサンベルナジノ海峡東方海上に、あとの三群はレイテ島沖にいて、早朝から飛行機を発艦させて上陸作戦に協力していた。

ダバオ基地とセブ基地から発進した各隊が、目標上空に到達して雲量五〇の切れ間から敵空母群を発見したとき、各空母は恰度帰投した機を収容中だったので、電波探知機（レーダー）に写った数多くの機影を味方機と見誤っていた。

急降下（ヘルダイブ）する特攻機の金属音に気づいたときはすでにおそく、一番機が空母サンテイ目掛けて突入していた。

サンテイの四〇ミリ機銃が火を吐いたが、特攻機は飛行甲板前部昇降機（エレベーター）の前方に命中して大爆発を起こし、飛行甲板前部は火の海になって、黒煙と焔（ほのお）が高く上った。

つづいて一機が空母サンガモン、もう一機がペトロフ・ベイに突入する態勢に入ったが、防禦砲火に阻止されて二機とも両艦の舷側近くの海中に突っ込んでしまった。

他の特攻機は、対空砲火に屈して空中で火を噴いたり、真っ直ぐ海中に墜落していった。

最後の一機が、熾烈な砲火を掻い潜って、空母スワニーの飛行甲板に体当たりした。

体当たりされたサンテイとスワニーの両艦は、懸命の消火作業で一時間後と二時間後にそれぞれ鎮火復旧した。

関大尉の敷島隊は、一〇四〇レイテ島タクロバン沖東方海上でついに空母四隻を含む機動部隊を捕捉した。

関指揮官は、翼を振って列機に突撃の合図を送ると、艦爆乗りらしく素早く空母ホワイト、ブレーンズ目掛けて突入していったので、二番機が慌てて後を追った。

ホワイト、ブレーンズの機銃が一斉に火を吐き、連射の弾道が関機目掛けて吸い込まれてゆく。

被弾した関機から、黒煙が噴き出した。

関機は急旋回すると、別の空母セント・ロー目掛けて突入し、一〇五二その飛行甲板の中程に激突した。

機体は、甲板で大きく跳ね返って海中に落ちたが、二五番は見事飛行甲板を貫通して格納庫で爆発した。

さらに燃料に引火して火の海になると、爆弾や機銃弾がつぎつぎに誘爆して弾薬庫に至り、一一二三ついに大爆発して真っ二つに折れ、艦尾から沈没していった。

関機につづいた二番機は、ホワイト・ブレーンズの甲板に激突、三番機は、空母キトカン・ベイの艦首を掠めて急上昇し、反転して艦橋に体当たりしようとしたが、目測を誤って飛び越し飛行甲板外側の通路に激突した。

あとの三機は、空母カリニン・ベイに向かった。

この空母は、早朝の栗田艦隊との海戦で、一五発被弾した手負いの獅子であった。

二機は、前後して飛行甲板に体当たりして大火災を起こさせたが、一機は惜しくも右舷の海中に墜落した。

この三機のうちの一機は、上空で被弾炎上したため、そのまま体当たりして散華した直掩隊の菅川機であった。

敷島隊は、空母四群中の一群四隻を屠る戦果を挙げた。

この詳細は、一二二〇セブ基地に帰投した直掩隊長の西澤廣義飛曹長によって中島飛行長に報告された。

中島飛行長は、欣喜雀躍して、マニラの一航艦司令部に緊急電を打った。

その電文は、

「神風特別攻撃隊敷島隊は、一〇四五スルアン島の北東三〇浬にて空母四を基幹とする敵機動部隊に対し奇襲に成功、空母一に二機命中撃沈確実、空母一に一機命中大火災、巡洋艦一に一機命中撃沈」

であった。

これが、西澤飛曹長の報告そのものであるとすれば、彼我の発表にかなりの相違がある。

アメリカ側は、セント・ロー沈没、カリニン・ベイ、キトカン・ベイ、ホワイトブレインズ損傷の四隻で、しかもすべて空母である。

これまでの日本側発表は、戦果誇大、損害僅少であるはずなのに、この場合は日本側の戦果がアメリカ側の被害より尠（すくな）いから、西澤飛曹長の見誤りだったのだろう。

だからといって、その誤認を責めるわけにはいかない。

戦果確認任務が課せられているといっても、上空でのんびり攻撃の様子を見物しているわけにはいかないのだ。

機動部隊の上空には、グラマン戦闘機が警戒している。

そこへ到達すれば、交戦は必至である。

特攻機を無事突入させるために、グラマン戦闘機を排除しながらの戦果確認であり、しかも攻撃は同時併行なのだから、誤認が生じても仕方ないのだ。

ともあれ、大本営海軍部は、海兵出身関行男大尉の敷島隊をはじめ七隊一八名の特攻散華を大々的に報じた。

軍人は国の藩屏（はんぺい）であるから、当然ながらその使命は、

「国家防衛に生命を賭ける」

ことに尽きるが、具体的な思いは区々（まちまち）であった。

国家ぐるみの精神統制（マインドコントロール）で軍国少年に育てられ、国際情勢に疎（うと）く、批判能力も持たぬ私たち少年兵は、敗勢になってから参加したこともあって、『白虎隊』よろしく、

「負けてはならぬ」

気迫と熱意に満ちて、

「国家に殉ずる」

ことを一途に思い詰めていた。

だが、関行男大尉は、同盟通信の小野田政特派員に、

「報道班員、日本もおしまいだよ。僕のような優秀な搭乗員（パイロット）を殺すなんて、僕なら体当たりせずとも敵空母の飛行甲板に五〇番を命中させる自信がある」

と忿懣（ふんまん）遣る方ない思いをぶちまけたあとで、

「僕は天皇陛下とか、日本帝国のためとかで逝（ゆ）くんじゃない。最愛の妻のために逝くんだ。命令とあればやむを得

ない。僕は彼女を護るために死ぬんだ。最愛の者のために死ぬ。どうだ、素晴らしいだろう」

そう冗談口を敲くようにして、心境を漏らしたという。

彼我の物量差を知悉しているはずの関大尉だから、内心では必死の体当たりで数隻の空母を撃沈したぐらいで、妻満里子を護れるとは思っていなかったに違いない。

「日本もおしまいだよ」

と敗戦を歎いていたことからして、愛妻に先立たねばならぬのがどんなに辛く、心残りだったことであろう。

海軍魂に撤した眼光鋭い獰猛な教官と恐れられた関行男大尉だったが、最期に本音を吐いて人間性を露にした。

このとき、ともに死地に赴くまだ成人まえの四人の隊員についても、

「ぼくは短い生涯だったが、とにかく幸福だった。しかし、列機の若い搭乗員たちは、芸者遊びもしなければ女も知らないで死んでゆく。恋人もいるだろうに…」

と語尾を詰まらせて、同情の念いを寄せていたという。

（つづく）

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切日）〔注〕

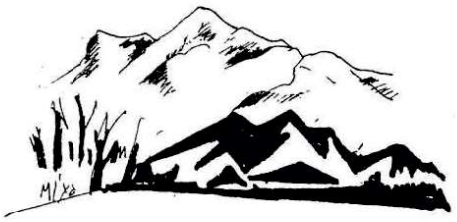
春季号……二月一日……十二月三十一日

夏季号……五月一日……三月三十一日

秋季号……八月一日……六月三十日

冬季号……十一月一日……九月三十日

〔注〕円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。



紙透家の人びと（十六）

第六章　第五野戦憲兵隊（父紙透小太郎の手記より）

紙透寛夫

一　出陣

昭和十八年一月十五日、朝、東京第十五部隊に行く。第五、第六野戦憲兵隊編成部隊だけに、なかなか大変だ。将校は全国から、准尉以下は内地隊から、要員は続々と集合している。

第五は隊長中村通則中佐、副官の赤穂稔少尉、油谷清少佐、荒金顕三大尉、大塚安正・沼田英隆中尉、山口亘利・小松為次・田中一馬・高橋各少尉、矢澤主計中尉、山田良敦軍医中尉の面々。准士官以下では知っている者はいない。山口君だけが昔の知り人、小松が後からだれかの代りにやって来た。部隊に知り人がいないのは寂しい限りだ。第五、第六両隊で計六百名。

第六には粟野梅藏少尉が副官で、剣持三郎氏が准尉で召集で来ていた。珍しい人に遭うものだ。

十五日は、ごった返しの騒ぎのうちに終った。

明日から本格的に取り掛かるようだ。その夜は青山の青年会館に宿泊することになり、午後七時、宿舎に入り大広間で雑魚寝だ。准士官以下は営内である。

十六日から、僕は兵器委員となり、中村勇中尉の補助で大した責任はない。皆は、それぞれ多忙な役を仰せ付かって、ずい分忙しそうだが、僕はさほどに感じない。大部分の者は、殊に中村隊長以下幹部の大部が初めての動員で、てんてこ舞である。編成も追い追い進み、中村隊長が変な編成を考えて中隊編成にしたのだ。第一、二、三の三個中隊で、第一油谷中隊、第二荒金中隊、第三沼田中隊、僕は新参のため第三沼田中隊の第二少尉長、高橋少尉が第一少尉長、たしか二十五日に編成が終ったと思う。

編成担任部隊長の第十五部隊長が親切な人で、十六日からは、在京に身寄りのある人は外泊を許可することで、

ほとんど全員が引き揚げてしまった。僕は早速、末男宅へ厄介になることにして、部隊出発までは約半月はある様子だったので、山梨（妻茂登子）へ電報して、すぐ上京するようにした。

二十一日ごろか、久代、幹郎、忠を連れて、茂登子は上京した。約一週間して、二十八日、茂登子たちを連れ、永田へ送り届け、永田からは老母（紙透ソメ）が山梨まで送ってくれたので、茂登子たちの方は片が付いた。この間、永田へは前後三回、日曜を利用して行った。その他、二十八日に永田から引き返して、下谷の阿部の兄さん宅を訪ねたら、姉さんもいて大変喜んでくれた。姉さんの取って置きのビールを出してくれたが、このうまかったこと、今でも忘れることは出来ない。

それから埼玉へ行き、兄さん（父小太郎の長姉なつの夫）に会い、正勝（甥）と酒を飲んだ。兄は中風で余り飲めなかった。帰りに蕨駅前で、正勝と井上ガ谷の娘（父小太郎の五姉なかの娘）と三人で、記念写真を撮った。その写真は山梨へ送ってくれたそうだが、まだ見ていない。埼玉の兄もあの時が最後となったのだ。下谷の兄さん達はどうしているだろう。

末男宅には本当にお世話になった。十四日以来ずっと泊まり込みで、しかも家族多勢で、とくに僕のすきな酒を毎夜準備してご馳走してくれたし、なにかと迷惑をかけて相済まない、食糧事情も相当行き詰っていた当時だったのに。

茂登子たちが十五日帰る時、靖国神社社頭で撮ってくれた写真は、後から南方へ送ってきたが、終戦の時、全部焼却してしまった。現地で集めた珍しい得難いニューギニアの写真までも。

部隊では、編成完結の二十五日以後、駒沢方面への行軍、営庭前演習場での訓練で日を過していた。

そして、一月二十九日、広島へ向け出陣の一歩を踏み出すこととなった。東京東部第十五部隊営庭で出陣式を行う。当日、出陣にふさわしく降雪あり。貨車で品川駅へ、品川駅午前九時発の予定、同駅で小憩中、在京家族達の面会も非公式に許され、いよいよ出発。当日、僕は日直であった。

品川駅を出発して、浜松駅に停車すると、深見の姉（奥野山かつ）、茂登子、幹郎、忠の四人が来ていた。通過の時刻は末男が電報で知らせてくれた由。

名古屋まではそうでもなかったが、名古屋から京都、大阪と各隊の人達が見送りに出ていた。すべてこのように、当時、防諜防諜と言う声の高い時であったので、奇異の感に打たれた。東京品川では在京家族の面会の如きも、幹部の家族は、これを黙認したような不徹底さと、ずるさが上級幹部にあることを見て取った。既にその当時から日本軍隊の中に、何か明朗でないものがあったのだ。

三十日未明、広島着。兵站関係の世話で宿屋に宿泊、僕達は高橋氏と下士官以下約十名の者で、二流旅館ではあったが、割合親切な宿屋で、二日出港の日までお世話になった。なんら、なすこともなく三日間過ごした。この間、宿屋付近を何回散歩したことか。

二月一日の夜、広島憲兵隊の招宴があったが、下っ端の我々には面白くもなかった。帰りに小松君と二人で脱線して飲んだ、これが内地で酒を飲んだ最後であった。

二月二日、いよいよ日本本土を離れる日だ、宇品港へ行くと、我等の乗船安藝丸の巨体が見えた。行く先は濠北というだけで、どこをどう行くか分からない。我等の部隊ばかりでなく、部隊号の分からない兵員が続々乗船している。話によると、この安藝丸はなかなかの優秀船で、時速十七ノット、一万トンだそうだ。なるほど大きな船で悪くない感じだが、幹部連中は上等の船室に納まったが、我々は船倉で頭も上がらない狭い暗い急造の部屋だ。食事だけは将校以上はサロンでするのだそうだ、このサロンの『しきたり』が、上衣をきちんと着ているのだと思うと、ぞっとする。

果たして台湾近くなると、急に暑くなってきた。船は一路台湾に向かっているのだ。汗はだくだく出る、それでも皆しかつめらしく上衣を着て食堂に行くのだ、食事のうまくないのは、もちろんだ。形式的ばかりやかましくて、なんになるか。輸送指揮官は中村隊長で糞真面目で皆、煙たがる。

六日、台湾の高雄に入港した。敵潜水艦の出没の情報が入る。高雄に入港したけれども、一般的に上陸は許されない。それでも勾配の早い連中は、なんやかやと上陸したらしい。七日夜中、高雄出港昭南へ向かう。だんだん暑くなってきた。

二月十一日の紀元節（現在の建国記念の日）は昭南（大東亜戦争中、日本軍が占領したシンガポールに対してつけた名称）へ着く前々日であったか?、船の中で遥拝式をやった。

二月十三日、昭南港着。初めて見るシンガポール、英国の東進拠点シンガポール、今、日本の手に帰しているのだ。

暑い、暑い。大小の艦艇が港内に一杯だ。戦争が、どこにあるやの感だ。上陸すると、体躯の素晴らしい原住民?が仕事をしている。後で分かったことだが、彼等は印度人で捕虜になって働いているのだった。我等は幾台かの自動車に分乗し、大塚中尉先駆のオートバイに付いて行ったが、先駆が道を間違えたのか、街中を廻り廻って、漸く旅館に着いた。立派な洋館で、夜遅く到着したので外出も出来ず、その夜は平凡に寝た。

翌日、昭南隊海上分隊付きであった山口阿久利氏が一

番に訪ねてくれた。そして村野や大西君その他羅南出身の人達の状況を聞知す。山口氏に敷布を頼んだら早速二枚木綿ものを見付けて来てくれた。一枚只の四円だった。

（山口阿久利。横浜市出身。元憲兵少尉。英国の戦犯裁判で、昭和二十一年六月十八日、シンガポール・チャンギーにおいて絞首刑）

昭南に三日滞在と決まった。まず、部隊で昭南付近を見学させることとなった。ブキテマ高地に登る（シンガポール攻略の一つのヤマであったブキテマ高地は、一年前の攻防戦で日本軍の手により陥落した）。次いでジョホールに行き、渡河作戦の状況を聞く。ジョホールは破壊した箇所に橋が架けてあった。まだ充分修理してなかった。ジョホールの王様の屋敷を見る。素晴らしいものだ。南方独特の真っ赤な花、道路の良さ、みんな舗装道路だ。だが一般原住民は貧相で、どこも同じ。貧乏人はどこまでも貧乏人だ。この見学中、いつも貨物自動車の故障ばかりだ、あきれ果てたものだ。豊田自動車の新車を編成当時、貰ったのだが、国産の劣悪品にはあきれた。

この見学の日、帰って夜、昭南隊大石正幸大佐の招待で、一席設けられた。我等も末席を汚した次第。会場は日本間で、話によると、元学校か教会の跡かだ。大石隊長の乱痴気騒ぎを一見して驚いた。未だかって、憲兵になって、これほどのバカ騒ぎを見たことがない。頭に上がっておったのだろう。あれで平素、部下にはとても、やかましい男だと聞いた（大石正幸。栃木県出身。元憲兵大佐。陸軍士官学校卒業。英国の戦犯裁判で、昭和二十二年六月二十六日、シンガポール・チャンギーにおいて銃殺刑。五十歳）。

二月十五日、大西覚、村野晋、小高兼司、山口阿久利の諸氏が、僕と山口亘利氏の両名を偕行社（陸軍将校および同相当官の親睦団体）酒保で会食してくれた。その夜、野村君から自動車が来て、ジョホールの村野の宿舎に行く。すごく良い自動車だ。村野の宿舎に着く。車回しの道路を上がると玄関にぴたりと着車。二階へ行く。広壮で、見晴らしのよい家だ。隣は病院の宿舎であるとか。大きな冷蔵庫もあり、早速、冷やしビールが出た。海老フライ（海老はジョホールで取れる大きな奴）で、二人で三年振りの会合だ。村野は関特演で、出てから初めてだ。

（関特演とは、『関東軍特種演習』の略で、一九四一年昭和十六年七月、旧日本軍が、独ソ開戦に乗じて、極東ソ連領の占領を計画した際に用いた隠語。兵約七十万、馬匹約十四万が動員されたが、八月中止。三省堂・大辞林より引用）

何時に変わらぬ、さっぱりした男だ。二人で飲めるだけ飲んだが、僕はあまり暑いので、あんまり飲めなかったが、愉快この上なしだった。行く先は、濠北だと、大体『チモール』か『アンボン』だそうだが、とても、ひどい所らしいとの話。しかし誰も『チモール』がどんな土地か、『アンボン』がどういう所か、具体的に知っている人は一人もいなかった。

その夜、村野が泊まれといったが、僕は帰った。これが南方での、村野とのたゞ一回の会合だった。あれから十年、また会う時は何時の日か。

昭南に三泊滞在。いよいよジャワに向け出港することとなった。船は変って貨物船の老朽船、四千トン級の七ノットという情けない船になってしまった。ジャワのジャカルタに上陸予定で入港したが、風浪のため、上陸出来ず、二度スラバヤに向け出港した。スラバヤはジャワ島の東部にある要港で、当時、チモール、アンボン、ニューギニア方面への輸送基地であった。昭和十八年二月二十二日着港した。

（この昭和十八年二月二十二日という時点は、大東亜戦争が勃発して、一年二か月が経っていた。

緒戦から半年後の、昭和十七年五月七日、日本軍がコレヒドール島を占領して、東南アジア全域を制覇した。しかし、そのひと月後の昭和十七年六月五日には、ミッドウェー海戦で、日本機動部隊は四隻の空母と多くの搭乗員を失い、致命的損害を受けて、戦局悪化の転機が忍び寄ってきた。

さらに、父小太郎がスラバヤに上陸したころ、餓島と呼ばれたガダルカナル島から、日本軍は撤退していたのである。）

つづく



漢詩

潮騒錄（卅五）

鯨游海

賀癸未春　　平成十五年元旦

儒佛百工幾往還
牛羊亦歷白頭山
可思絹路通羅馬
度矣春光一水間

押韻・還山間

〈癸未の春を賀す〉

儒仏百工　幾たり往還せしか
牛羊も亦　白頭山を歷たり
思うべし絹路の　羅馬にも通じたるを
渡れや春光よ　一水の間なれば

〔注　解〕

儒仏＝儒者と四書（論語、孟子、大學、中庸）五經（詩經、書經、易經、禮記、春秋）及び僧侶と仏教典をいう。百工＝多くの職人、各種の技術者を指す。

白頭山＝高麗の名山。

一水間＝一衣帶水の間＝姚思廉・陳書「豈可限一衣帶水不拯之乎」より。帶のような細長い流れで、ここでは日朝間の日本海をいう。

結句の「度矣春光…」は王之渙・涼州詞「春光不度玉門關」を意識する。

日本と高麗の交流は絶えて久しいが、昔は儒者やその教典の論語や千字文等、また僧侶や仏典の数々が荒海を越えて幾多の人々によってわが国にもたらされた。

牛や羊等家畜も亦遥々と彼の国の名山、白頭山を越えてやって来たのだ。

改めて思うべきであろう。シルクロードはローマにも通じていたことを。

今後は再び国交が開かれ、愈々交流が復活する。待望の春光よ渡れかし。唯一水の間と短かい距離なのだ。あの王之渙は玉門関に春光の来ない悲しみを歌ったが。

☆閉ざされし牛羊の故里白頭山
今こそ照らせ春の光よ

上州四萬溫泉投征夷大將軍坂上田村麻呂
癒傷湯治客館口號

壬午・戊月

雲烟靄靄匂山水
霧露泉鄉無一塵
誰奏溪聲千古律
酒琴未有醉騷人

押韻・塵人

〈上州四万温泉にて征夷大将軍坂上田村麻呂が傷を癒やせし湯治の客館に投じて口号す〉

雲烟あい〳〵として　山水を包み
霧露の泉郷　一塵なし
誰か奏す渓声　千古の律を
酒琴未だ有らざるに　騒人を酔わしむ

〔注　解〕

群馬県（上野州）の名湯四万温泉郷に遊んだ。歴史上の人物、征夷大将軍であった坂上田村麻呂に由緒ある湯という。

口號す、は即興に詩を作り口ずさむ事。卽事と同じ。

戊月は中国古典語で九月の意。日本語の長月。因みに一月より寅月、卯月、辰月、巳月、午月、未月、申月、酉月、戌月、亥月、子月（黄鐘）、丑月（臘月）と呼ぶ。

靄靄は靄霞等が立ち籠めているさま。

律は陽のリズム。陰のそれを呂といい律呂と熟す。

騒人＝詩人。憂うる人の意。

雲であろうか。湯煙であろうか。靄が重く辺りに立ち籠めて山水を包んでいる。

ここ四万温泉郷は霧や露に覆われて清々しく、しっとりと一片の塵もなく静謐の底に沈んでいる。

一体誰が奏でているのであろうか。あの渓川の流れの太古からの軽やかなリズムは。

酒も琴も未だ楽しんでいないのに既に詩人であるこの私はすっかり酔って了った。

☆湯けむりの底よりひびくせせらぎの
千古の調べ何を告ぐるや

聞新生瑞穂銀行發足日業務混亂憂詠

平成十四年四月

嚴正無比大銀行
發足朝來誤簇生
天下囂囂要路嘯
容量超過莫規程

押韻・行生程

〈新生瑞穂銀行発足の日業務混乱すと聞き憂えて詠む〉

厳正無比なる　大銀行
発足朝来　誤り簇生す
天下ごう〳〵たるに　要路うそぶく
「容量の超過は　規程に莫し」と

〔注　解〕

平成十四年四月一日、名門の興銀、富士、第一勧銀の三行が合併し、みずほ銀行として新発足した。

所がスタート直後ＡＴＭが誤作動しまた振替や送金が不能となったり二重引落としがあったり等混乱、数ヶ月に亘って社会を震憾させた。ニュースは世界を駆け巡った。祝福さるべき新銀行の誕生が不測の事態に陥った。固よりエイプリル・フールではなかった。頭取は「顧客に実損をかけた訳ではない」と発言、失笑と指弾を浴びた。諸々の悪条件が重なった為であろうが、一言にしていえば想定事務量をオーバーしシステムがダウンしたことである。二十一世紀の新らしい形の危機勃発といえる。

不謹慎を承知でいうなら、何処かユーモラスで苦笑させられる事件である。それは三行の主導権争いと不協和、経営の事務部門軽視等極めて人間臭い側面が垣間見えるからである。

簇生は群生、むらがり起こる。嘯ぶくは空とぼけて豪語する。囂囂は人が騒がしく批難するさま。荘子・駢拇「天下何其囂囂也」より。

また短歌の「岐路で泣く」は楊子が別れ道で何れに進むべきかで迷い泣いたという故事より。淮南子・説林「楊朱泣岐　墨子泣糸」。　データが行き場を失った意。

☆雑踏に我何処にか行くべきや
　迷路さ迷い岐路で泣き濡る

新西蘭土次孫誕生卽事

平成十四年四月

電鈴雀躍破春眠
若玉孫生萬里傳
對面卽今雖不得
却留後樂獨欣然

押韻・眠傳然

〈新西蘭土にて次孫誕生す即事〉

電鈴雀躍して　春眠破らる
「玉の若き孫生まる」と　万里より伝う
対面すること即今　得わざると雖ども
却って後に楽しみを留めて　独り欣然たり

〔注　解〕

結句の後楽は范仲淹・嶽陽樓記「後天下之樂而樂」より。即ち、天下の人々を先に楽しませ自分はあとで楽しむ。先憂後楽とも熟す。後楽亦不楽也。

☆珠生まる疾く逢わめやと人いうも
　後の楽しみあるは嬉しき

四度詠新茶

平成十四年五月

薫風好日賜茶瓶
可怪未開芳氣馨
懇煮徐含肌骨癭
香雲漂漂滿閑亭

押韻・瓶馨亭

〈四度新茶を詠む〉

薫風の好日　茶瓶を賜わる
怪しむ可し未だ開けざるに　芳気馨ばし
懇に煮て徐に含めば　肌骨癭れ
香雲漂々として　閑亭に満つ

〔注　解〕

例年この季節に新茶を贈ってトさる方がいる。折々お礼の詩を詠んで来たがこれで四作目となる。

芳気は馥郁たる馨り。癭れる＝痲痺。痺を「しびれる」に俗用するが本来は誤り。亭は簡素な庵。あずまや。肌骨癭れる、は中唐の盧仝の茶の詩より借りた。即ち「一椀喉吻潤　兩椀破孤悶　三椀搜枯腸　唯有文字五千卷　四椀發輕汗　平生不平事　盡向毛孔散　五椀肌骨清　六椀通仙靈　七椀喫不得也　唯覺兩腋習習清風生」とある。最后は仙人となって天に上ったと歌う。

このように中唐以降、茶の詩が登場して来る。崔道融も東甌山人と号する程茶好きだった。他に皮日休もいる。わが国では江戸時代の賣茶翁が有名。僧名月海。京都で通仙亭と称する庵を営み茶を売って文人と交わったという。この通仙停は前出盧仝の詩より借りたらしい。後世の茶人に祖として仰がれた僧。

☆茶の馨り肌骨に染みて清々し
　青き畳の方丈に満つ

《漢詩の流れ26》晩唐③——溫庭筠…早熟の天才

紅灯緑酒の間に沈湎して放蕩無頼の生活を送った天才詩人。詩は綺靡艶麗、脂粉の香り高い。明治の漢詩人をして「一種の風流吾れ最も愛す、南朝の人物晩唐の詩」といわしめた張本人の一人である。

彼は詞（填詞、詩余、倚声ともいわれる）の大成者でもある。

盛唐、玄宗皇帝の頃、西域開拓が進みインド、ペルシア、アラビア等から「胡楽」が大量に中国に輸入された。民衆が聴いて判り易く、俗語を用いて楽しんで唱うことの出来る長句短句の入り雑った歌謡である。女人の柔情嬌態を唱う耽美的な作品群は、後来の伝統ともなった。

商山早行（商山を早に行く）
晨起動征鐸　晨に起きて　征鐸（駅馬車の鈴）を動かす
客行悲故郷　客行　故郷を悲しむ
鶏聲茅店月　鶏声　茅店の月
人迹板橋霜　人迹　板橋の霜
槲葉落山路　槲葉　山路に落ち
枳花明驛牆　枳花　駅牆に明らかなり
因思杜陵夢　因って思う　杜陵（長安の行楽地）の夢
鳧雁滿回塘　鳧雁　回塘に満つ

瑤瑟怨　（ようしつえん＝閨怨の詩）

冰簟銀床夢不成　冰簟　銀床　夢成なず
碧天如水夜雲輕　碧天水の如く　夜雲軽し
雁聲遠過瀟湘去　雁声　遠く瀟湘へ過って去る
十二樓中月自明　十二楼中　月おのずから明らかなり

※十二樓＝神話にある崑崙山の閬風苑の仙人の住むという十二層の玉楼。ここでは女主人の住む高楼。

夢江南
梳洗罷　梳洗し罷って
獨倚望江樓　独り倚る　望江楼
過盡千帆皆不是　過ぎ尽くす　千帆　皆是れならず
斜暉脈脈水悠悠　斜暉は脈々たり　水は悠々たり
腸斷白蘋洲　腸は断つ　白蘋の洲

菩薩蠻（ぼさつばん＝空閨を嘆く美女の朝）
小山重疊金明滅　小山重畳し　金明滅す
鬢雲欲度香腮雪　鬢雲度らんと欲す　香腮の雪
懶起畫蛾眉　起きて　蛾眉を画くに懶うし
弄妝梳洗遲　弄妝　梳洗すること遅し
照花前後鏡　花を照らす　前後の鏡
花面交相映　花面　こもごも相映ず
新帖繡羅襦　新たに帖く繍羅の襦
雙雙金鷓鴣　双々　金の鷓鴣（が妬ましい）



千篇萬律

☆お読みになられた方も多いと思うが文芸春秋新年号。白川静と宮城谷昌光の対談。題して「東洋的教養こそ国の基」。とにかく面白い。含蓄が深い。

☆後漢の大学者許慎。その「説文解字」三十巻は後世漢字研究の根源と為っているが、わが白川はこの漢字研究の祖許慎を批判し独自の解釈を試みた。例えば阝を「小山であり縦にした」との説に対し白川は「阝という天に昇る神梯」とする。岐阜のフである。この梯を使い神様が天から下りて来る。そこでは祭りが開かれる。神と人の接点が際だと。

☆又説く。「告げる」は「牛が口を寄せ訴える」意と許慎は云うが、白川は「木の枝を手で持ち祝詞を捧げて祭る」意という。木が大きくなると史となり、これも祭る意だという。更に人が持って山や川に出かけて祭るのを使とする。これに旗をなびかせて行くと事となる。「国に大事あり」とは「国家的大祭をいう」と。合点だ。全く納得する。

☆許慎の時代は甲骨文も金文も出土が稀だったのに対し、二十世紀になり甲骨文や金文が大量に発見されたお蔭だと白川は許慎を庇う。二千年を経て学問が一歩前進した。積学の字統を繙てみたい（く）

まんじ　第87号

平成15年2月1日発行（非売）

発行人　三戸岡道夫（みとおか　みちお）
編集長　鯨　游海（くじら　ゆうかい）
事務局長　鍋屋次郎（なべや　じろう）

（事務局）〒223-0056　横浜市港北区新吉田町2477－3　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）No.00270-0-64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）大和印刷株式会社
〒332-0031　川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について　宮城正彦画
仲間、継続、積年等をイメージして描いた（宮城）。限りない空想の世界に遊ばせてくれる作品（く）。

まんじ

No. 88

2003.5.1

まんじ第八十八号　目次

遠い町……森　実与子…4
藩主脱藩……大和禎人…19
催致遠の碑文……新井　宏…22
七人の代議士（一）―「代議士誕生」―……瀧澤　中…31
日出る国の落日（一）……隆　恵…67
短歌行雲流水（二）……石黒修身…72
霧の彼方に（二）……太田精一…75
桜人形（完）……三戸岡道夫…85

和泉式部譚（三）……島津隆子…96
悪流修羅（四）―リストラの虚構―……中司州俊…107
都市銀行「爆発物処理班」（五）……宅見勝弘…114
黒船（六）……太田和貞…122
体当り戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと（十一）……千坂精一…128
紙透家の人びと（十七）……紙透寛夫…139
漢詩潮騒録（三十六）……鯨游海…143
千篇萬律……編集子…148



表紙・カット……宮城正彦
カット……鈴木國男
カット……清水トム

遠い町

森　実与子

もう日が暮れていた。

金沢から乗り込んだ列車は、海に面した町を目指して走っていたが、窓から海は見えず、ただ単調な稜線と田畑が広がるばかりだ。次第にそんな風景も薄闇に包まれ、目をこらさないと見えなくなっている。時折、車のライトがキラッと光るだけだった。

男は迎えに来ているだろうか。半年前、はじめてS市を訪れた時は、もっと軽い気持ちだったのに……。

田沢朝子は不安な思いを抱きながら、座席の固い背にもたれた。

半年前の三月末、朝子は金沢駅で男——谷口史朗と落ち合った。

ショッピングセンターと直結した駅の改札口周辺は、週末のせいか人混みでごった返し、地方都市の活気がみなぎっている。

人込みのなかに立っていた史朗は、朝子を見つけるとニコッとしながら近寄り、

「やあ、どうしたの。今日はいつもと違ってスーツなんか着込んじゃって」

ガムを噛みながら、冗談まじりに言う。

史朗はまるで制服みたいに、決まって白いシャツにグレーのズボン姿だ。もちろんその上に茶色い皮のブルゾンを着ているが、年季の入った質素な服装は、定職もお金もない風来坊のようないでたちである。そんなみすぼらしさも貴公子然とした風貌がカバーしていると、朝子は好意的にとらえていた。

朝子が金沢に来たのは、もう数回目になる。生まれも育ちも東京の朝子にとって、遠く離れたこの北国の街は縁もゆかりもない土地だったが、何度か足を運んでいるうちに、いつのまにか街の景観も見慣れたものとなり、微かな愛着さえ抱いていた。

二人は繁華街の雑踏を掻き分け、近くのコーヒー店でひと休みした。

「なんだか、今週は患者さんが多くて忙しかったよ」

一ヶ月ぶりに会った史朗は、かなり疲れた顔をしている。

「春が近づいてきたから、みんな歯をきれいにしたくなるのよ……おしゃれをしたくなるのね。私も今日は、着なれないスーツなんて着てきたわ」

「うちの親に会うから、正装してきたの？」

「初対面ですもの、悪い印象は持たれたくないわ」

「そう気を揉まなくても、二人とも普通の田舎の年寄りだよ」

いつもは金沢止まりなのに、今回、朝子はS市にある史朗の実家を訪ね、はじめて彼の両親に会う。夜までに家に着けばいいと史朗が言うので、金沢の街をブラブラしてから帰ることにして、駅からバスに乗って中心街に向かった。

やがて、街のシンボルである金沢城の石川門とが見えてきた。二層の瓦屋根を抱いたどっしりとした門と、それに続く石垣とナマコ塀は、城下町らしい荘厳さと落ち着きを漂わせている。さらに、兼六園の広大な庭がしっとりとした風情を添え、目にも優しい。この眺めは悪くない。この街なら暮してもいいかもしれないと、朝子は密かに思っていた。

兼六園に足を踏み入れると、空気は冷たいものの、春の柔らかな陽射しに誘われてか、散策する人の波は途絶えることがない。樹木や池、燈篭が整然と続く、手入れの行き届いた庭園の中をあてもなく歩いているうちに、梅園に行きついた。ピンクと白の可憐な花はまさに満開で、淡い香りが鼻腔をくすぐる。二人は梅の木の前で写真を撮った。

それから繁華街へ出て夕食を済ませ、S市へ向かう列車に乗り込んだ頃には日も落ちていた。

「緊張しているの？」

座席に並んで腰掛ける朝子に、史朗が聞く。

「……はじめての土地に行くんだもの、少しは緊張しているわ。どんな町なのか、あなたのお父さんとお母さんはどういう人なのか、何もわからないもの」

「そんなに固く考えなくていいさ」

朝子のぎこちなさとは裏腹に、史朗はすっかりリラックスしている。

「それにしても不思議だねえ、君の方が先になったんだから。……明後日の回覧板にはもう僕たちのことが出てるかもね」

史朗は笑いながらそう言うと、朝子の脇腹を指でつねった。

朝子の体をつねったりくすぐったり、ツンツンするのが史朗の癖だった。こんな子供っぽいじゃれあいのせい

か、朝子は史朗と一緒にいると弟といるような気がしてしまうが、実際には、史朗は朝子より四歳年上の三二歳だった。

史朗のしぐさに、一瞬、朝子の緊張感はほぐれたが、再び体が強張ってくる。彼は、朝子がS市へ嫁ぐ覚悟ができたと思っているのだ。親に会いに行くのだからそう思うのも当然かもしれないけれど、朝子の心はまだ揺れている。史朗の住む町を見て、親と会ってから決断しても遅くはないだろう。そう思ってS市へ行ってみる気になったのだった。

駅からタクシーに乗り、家に着いた時にはもう十時を回っていた。

「遠くてたいへんだったでしょう。部屋を暖かくしてありますから」

すぐに母親が二階の広間に通してくれた。十畳ほどの広間にはきちんと蒲団が敷かれ、電気ストーブが回っている。挨拶もそこそこに、朝子は母親に促されて風呂に入り、慌しく蒲団に入った。史朗は階下の自分の部屋で眠りについたらしかった。

翌朝、朝食の席で、朝子は改めて史朗の母親と顔を会わせた。想像していたのとはまるきり違う母親の容姿に、張り詰めていた神経が一挙にゆるみ、朝子は笑いを押し殺した。どちらかというと華奢な史朗の外見から、きっと痩せて神経質そうな女性だと勝手に思いこんでいたのに、アマゾネスのように太っている。まじまじと母親の顔を見つめると、ちょっと垂れた目と小さな口元といった愛嬌ある顔は、確かに史朗とそっくりだが、体にはたっぷりと贅肉がつき、樽のように丸い。

父親はもう朝食を済ませたらしく、ちらりと顔を覗かせただけで姿を消した。史朗と朝子の二人で、トーストと目玉焼きの簡単な朝食を済ませると、早速、史朗は家のなかを案内してくれた。夕べは暗くてわからなかったが、広い敷地の入口はレンガとガラス張りのモダンな歯科医院で、その奥が住まいになっている。歯科医院の中は、床と天井がモスグリーン、機材や家具類は白で統一され、まだ新しいせいか、

「なんだかエステのサロンにでもいるような感じがする」

思わず朝子は口走っていた。

「歯医者っていうと、みんな〝痛い〟という先入観しか持っていないだろう。だから、少しでも心地良い環境にしたくてね」

「設計にもかなり注文をつけたんでしょう」

「自分の仕事場だもの」

「東京の歯医者さんとは比べ物にならない広さね。市内で一番広いんじゃなくて」

史朗の満更でもなさそうな顔つきから、自分の城をいかに大切に思っているかが伝わってくる。

一方の自宅は、一階に家族三人の部屋があり、二階は普段は使わない客間になっている。ほとんどの部屋は畳張りで、床の間や掛け軸、置物など和風の装飾が目を引く。

「確か、日本で一番、家の間取りが広いのは、富山県か福井県だと聞いたわ。この地方ってやっぱり家が広いのね。まるで旅館みたいだわ」

洋風の医院と日本家屋をミックスさせた建物は、全体の敷地もそれぞれの部屋も広く、田舎らしい素朴さは、コンクリートの塊のような都会の建物とはまったく異質である。

一通り家の中の見て回ると、

「町を案内するよ。といっても、たいしたものはないけどね」

そう史朗に促され、二人は外に出かけた。

日曜日のせいか、近所の商店も軒並みシャッターを閉め、人通りもまばらだ。静まり返った通りを歩いていくと、ほどなく海が見えてきた。港の桟橋には小さな舟が並んで横付けにされ、その向こうにはうっすらと陸地が広がる。初めて見る風景に、朝子は好奇心いっぱいになっている。

「海っていうより、湖みたいに穏やかね」

「十分くらい行くと、有名な温泉地があるんだ。あそこは観光バスで温泉客が来るほど賑やかだけど、ここは小さな漁港だからね。でも最近では、観光にも力を入れているよ」

史朗の言う通り、港近くに田舎の漁港には不釣合いな、現代的な建築物が建っている。倉庫をイメージしたような建物は、観光客を呼び込むためのレストランと土産物屋らしいが、客は数えるほどしかいない。

「海の向こうの島には、キャンプ村とか観光施設があるけど、この辺はやっぱり普通の住宅地だからね」

客が少ないことの言い訳でもしているみたいに、史朗はいう。

それから今度はバスに乗って、海と反対側の小高い丘の上の公園へ行った。鬱蒼とした森のなかの小さな公園は、空気も凛としている。広場では、相撲大会が開かれていた。小さな相撲場で、小学生くらいの子供たちが白いマワシをつけて取組み、子供や親たちの歓声が響き渡る。そういえば、この地方が相撲発祥の地で、日本最古の相撲場もあるらしい。

ベンチに座っていると薄曇の空から微かに日が射し込み、穏やかな風景のなか、時間が止まったような感覚になってくる。

「どう、この町を気に入った?」

史朗の問いに、朝子はすぐには、どう答えていいかわからなかった。

「のどかで、いいところね……あなたがのんびり屋さん

たり、旅行に行ったり、自分の自由な時間を持ちたいと、気楽な仕事に就いたのだった。いわば流行りのフリーターみたいなものである。しかも親の持つアパートの一室に住み、家賃を払わなくていい一人暮しという気ままな身分の、食うには困らない生活を送っていた。

人と同じことはやりたくないというのが、子供の頃からの朝子のモットーだった。だから、結婚して子供を生んで平凡な主婦におさまるのはいやだったし、かといってバリバリと仕事をこなすキャリアウーマンも柄に合わない。朝子には、一人で夢を見ているような、どこか現実離れしているところがあった。

男性に対しても、普通の感覚と違う。小柄でちょっと男好きのする甘い容姿から、朝子はボーイフレンドには事欠かなかった。高校時代には一流大学卒のエリート公務員と付き合っていたが、大学に入ると早々に別れ、演劇サークルで知り合った同級生と付き合い出した。演出家としての才能を見越して選んだ男だったのに、彼は就職を前に、当たり前の男に豹変して大手の広告代理店に就職した。おおいに失望した朝子は、その後は、男性に対しても少し引いてしまっていた。

しかし、自ら好んで選んだフリーター生活はたいして面白味もなく、怠惰に流されている生活から足を洗い、好きなフランスに留学してもう一度勉強し直そうかと、将来に対しての展望を朝子なりに考えはじめていた。そのわけがよくわかったわ」

「どういう意味？」

「こういう土地に生まれ育ったから、気が長いんだなって」

「都会の慌しさとは時間の流れ違うかもしれないね。都会はせかせかしすぎているもの。僕はちょっと苦手だな。ここは緑も多いし、海もあるし、ゆったりと生活できるよ」

朝子は、常日頃感じている史朗との〝時差〟を思った。電話がかかって来なかったり、史朗が上京できなくなって会えなくなる度に、朝子は一人でイライラし、電話で史朗に当たった。もしかしたら、地元の看護婦とでも一緒にいるのではないか。朝子とのことは東京での気まぐれだろうとか、不信感が頭をもたげてくる。だが史朗は、一向に気にかける様子がないのだ。実際にS市に来てみて、海あり山ありの、おっとりとした田舎で生活しているからそうなんだと、朝子はやっと納得できた。朝子が東京で考えることは取り越し苦労であり、史朗が生活しているリズムは全然違うのだ。

朝子は、中高生向けの学習塾の教師をしていた。大学の先輩に勧められるままに、学生時代のアルバイトの延長のような形から、そのまま仕事についていた。どこか醒めた朝子は、就職活動に血まなこになっている同級生を尻目に、仕事に縛られずに好きな時に映画や演劇を見

の矢先、史朗と出会ったことで、すべてが停滞していた。

夕方、史朗の家に帰ると、母親がたくさんの手料理でもてなしてくれた。食卓には刺身、カレイの煮付け、とんかつ、ジャガイモのサラダ、味噌汁……、御馳走がたくさん並んでいる。食卓を囲む父親と史朗と朝子の三人の傍らに母親が立ち、お茶を入れたりして、あれこれと世話を焼く。腹が空いたのか、史朗はニコリともせずに黙々と食べはじめている。

朝子は、父親の顔を観察した。痩せ型で、面長の端正な顔立ちの父親は、寡黙な雰囲気がなかなか渋い。史朗は、顔は母親似だが、全体の雰囲気は父親似なのかもしれないと、一人で勝手に思いをめぐらしていると、

「この地方の珍味ですよ。どうぞ、食べてくださいな」

父親が、小皿に出されたおかずを指して口を開いた。箸をつけてみると、かなり塩辛い。朝子が不思議そうな顔をしていると、

「クチコといって、ナマコの卵巣なんです」

「この辺の海はナマコが獲れるの」

母親も口をはさむ。

「ナマコ？……はじめて食べました。さすが漁港ですねえ」

「ごはんのおかずというより、お酒のオツマミですよ」

「ナマコの卵巣はクチコで、はらわたを塩辛にしたのはこのわたっていうの。高級品なのよ」

「お酒のおつまみによさそうですね。……お父さんは、お酒は飲まれるんですか」

「好きですけどね。年だから自重して、週に2回ぐらいですね」

父親はニコッと笑った。間をとりもつため、朝子が両親と懸命に会話をしているというのに、史朗は我関せずといった体で無言のままだ。会話が途切れると、「テレビつけて」。ぞんざいに言う。

朝食の時もそうだったが、なぜか母親は一緒に食べず、横で見ているだけだ。食べているところを観察されているようであまり気分は良くないが、三人で黙々と食事を続けた。やがて食べ終わると、史朗はプイと席を立って、ダイニングルームから出ていった。父親も席を立ち、母親と二人きりになった朝子は、どうしていいかわからなくなっていた。

「いつも、あんなんですよ。息子は話をしないのよ」

「史朗さんは無口ですよね」

「あなたとも、あんな感じ？……困った子ねえ」

もともと史朗は無口な方だが、朝子が来たことで親の手前、恥かしいのだろう。だから普段よりなおさら、ぶっきら棒な態度をとり、逆に、両親は息子に遠慮してぎこちないのだ。それにしてもこの一家は、会話のない家族なのだと朝子は感じた。

茶の間へ行くと、史朗は炬燵にあたって、お茶を飲みながら一人でぼんやりテレビに見入っている。
「私がいるから、あんなにぶっきら棒なんでしょう」
「いや、いつもと同じだよ」
「そうかしら。何か変な感じだわ。あなたの家族って、会話がないのね」
炬燵の中で、史朗は裸足の指で朝子の足をつねってくる。家族のことを指摘されて、弁解したり説明するのが億劫でお茶を濁しているつもりなのだろうが、なんだかはぐらかされているみたいだ。
「お母さん、お料理上手ね。一人で用意するの、たいへんだったでしょうね」
「いや、今夜は特別だよ。サービスしたんだね」
そう言うと、史朗はズルッと音をたててお茶をすすった。そしてまた、炬燵のなかで朝子の足を触ってくる。こんな甘ったれたようなニュアンスが、史朗は何より好きなのだ。もちろん朝子も。
しばらくくつろいでから、二人は診療室に行った。
「先生、歯のチェックをしてください」
朝子が診察椅子に座ると、
「朝、眠い時なんか、ついうっかり、注射針が歯茎の向こうに突き出ちゃうことがあるんだよ」
史朗はおどかすようなことを言う。
「えっ、信じられない。そんなこともあるの～」
「冗談だよ。そんなわけないじゃん」
明日に備えて床にモップをかけて、部屋の掃除をしたり、史朗は深夜までせかせかと動き回っている。結婚したらきっと、こういう毎日の連続なのだろう。そう思うと、朝子はちょっと甘酸っぱい思いにかられた。
受付の引出しのファイルケースの中には、たくさんのバースディカードが入っていた。患者獲得のために、誕生月ごとにハガキを送るなど、史朗はたゆまない努力をしているのだ。親の跡を継いだわけではなく、自分一人で開業するため、資金も含めていろいろなことで苦労してここまでこぎつけたことを、朝子は彼の生活ぶりを見てはじめて理解した。
この日は一日かけて、史朗は朝子に家や町を案内してくれた。それが今の史朗にできる精一杯のことなのだと、朝子は強く感じた。

翌日、朝子が目を覚ました時には、史朗はもう仕事に入っていた。遅く起きた朝子が一人で朝食を食べていると、
「息子は何も言ってくれないの。あなたの名前と誕生日をここに書いてちょうだい」
母親が紙と鉛筆を差し出した。史朗は朝子のことを、どういう風に話してあるのだろう。母親にしてみれば、聞きたいことは山ほどあるはずだ。

「田舎でびっくりしたでしょう」
朝子の顔を覗き込むようにして言う。
「……静かでいいところですね」
「海辺だから魚はおいしいし、暮しやすいところよ。冬は、雪が降っても積もるほどではないけど、去年は雪が多くてたいへんだったわ。年によって違うの」
「お母さんは、いつも一緒にごはんを食べないんですか?」
疑問に思っていたことを聞いてみた。
「つわりの時以来、何十年、肉も魚も食べられなくなっちゃって、野菜とごはんしか食べないから、みんなの食事が終わった後で残飯整理をするのよ。……息子は姉二人の末っ子だから、女の子みたいに繊細な子なの。小さい頃から、砂場で遊んでいても泣き出してしまうみたいな子だったのよ。でもその分、気立てはやさしいの」
さりげない息子のPRに、朝子は笑って答えた。
「うちはこの辺で一番新しい歯医者なの。市内で一番広いのよ」
それが母親の自慢の種であることがよくわかった。父親も史朗も思いは同じだろう。それに対して、朝子はどう答えるのか。答を出すのは自分自身しかないのだ。

その日、朝子は一人で電車に乗って半島の先の町へ行ったが、着いた時には、有名な朝市はもう店じまいの時間で、後片付けをするモンペ姿のおばさんの姿がチラホラと目に入るだけたった。
海沿い国道は、車の往来はあるものの歩く人の姿は絶え、沿道にはドライバー向けのレストランやガソリンスタンドが点在するだけだ。……こんな時、拉致されても誰も気づかないだろう。そう思うと、急に恐くなってきた。鉛色の空と日本海のうねりは、まさに荒涼とした眺めであり、日本の果てへ来てしまったような錯覚に陥った。と突然、このまま一人で歩いているのが恐ろしくなってきて、朝子は来た道をUターンして走り出し、近くにあった博物館に足を踏み入れた。
そこでは、この地方の祭りの道具を展示していた。高い天井まで届きそうな巨大な神輿や山車、精密なからくり人形、キリコと呼ばれる奉灯……。華やかな祭りを彷彿とさせる展示物が、ズラリ並んでいる。そういえば、史朗は祭りが好きだ。祭りの話をよくするし、祭りの寄り合いがしょっちゅうあって忙しいといっている。伝統ある祭りは、この地方では日常の行事なのかもしれないが、朝子にはまったくピンとこない。
夕方S市に戻り、朝子は、駅前のファーストフード店に入ってみた。店は地元の高校生たちの溜まり場らしく、学校帰りの制服姿の高校生たちが、ハンバーガーをほおばりながら大きな声でだべっている。携帯片手に会話している子やトイレへ行って私服に着替える子など、勝手

きままに振舞う食欲旺盛な茶髪の若者たちは、全国どこへ行っても共通らしかった。

駅前広場には、客待ちのタクシーやバスが止まり、近くには大きなスーパーもある。そこそこ人出もあるが、駅を離れるにつれて開店休業のような商店が目につき、みるみるうちに閑散としていく。人口五万人弱の地方都市は、朝子にとって、寂しい町に違いなかった。

（知っている人は誰もいなくて、頼みの綱は史朗だけ。でも史朗は、私の味方になってくれるだろうか。父親は優しそうだけど、あの母親は手恐そうだし……）

そう思うと、胸がしめつけられてくる。

朝子と史朗が付き合いはじめてから、二年近くが経過していた。

共通の友人――史朗の予備校時代の親友、を通して知り合ったのだが、東京の大学で学び、卒業後も都心の歯科医に勤務していたというのに、皮肉なことに、二人が出会った時には、史朗はすでに故郷の町にUターンしていた。

年に数回、学生時代から行きつけの東京の美容院へパーマをかけにやってきて、友人宅へ泊まるというのが、史朗のお決まりのパターンだった。

「美容院へ来るのは、東京に来るための口実でしょ？わざわざ東京に来なくたってお気に入りの美容院くらいあるでしょ」

見つかると思うけど」

「もちろん、都会の空気を吸いたいからだけど、田舎には、いい美容院なんてないんだよ」

「おしゃれなのね」

なるほど、パーマをかけたばかりのウェーブのかかった茶色い髪は、彼の甘いマスクによく似合っている。スタンドカラーの白いシャツにブランド物のボストンバッグを持つ定番スタイルも、地味だが、よく見るとおしゃれに気を使っているのがよくわかる。

史朗が上京する度に、親しい仲間数人で居酒屋へ行って飲み食いするという付き合いが何回か続いたが、あくまでも史朗はグループの中の一人だった。そのなかに必ず、東京の歯科医に勤める技工士の由美がいたから、彼女が史朗の東京の恋人ではないかと、朝子は想像していた。

夏のお盆休みに東京に来た史朗を交え、いつものように食事をしていた席でのことだった。

「今年はまだ夏休みをとっていないの。どこに行くというあてもなくて……」

「だったら、金沢の方まで来ない？」

史朗の何気ない一言に、朝子の心は動いた。

「週末だったら、案内できるよ。連絡をくれれば、僕のとっておきの場所を紹介するよ」

気安く答える史朗に、朝子は急に、まだ訪れたことのない金沢という街に行ってみようかという気になっていた。

二週間後の土曜日の夜、朝子が宿をとったホテルのラウンジへ史朗はやってきた。上京する時と同じように、ボストンバック片手にした姿を見て、朝子は一瞬、目を疑った。

（この男は、いきなり私の部屋に泊まりこむつもりなの!?）

史朗は金沢に住んでいるとばかり思っていた。だが、実は住まいは金沢からさらに二時間余り離れたS市であり、彼も泊まりがけでやって来たのだった。

よくよく考えてみると、朝子は史朗のことはほとんど何も知らなかったし、もちろん、二人きりで会うのははじめてだった。

夕食後、香林坊にあるホテルの最上階のバーのカウンターに並んで座り、夜景を見ながらカクテルを飲んだ。一週間の仕事の疲れで、史朗の目は充血し、欠伸の連続だ。アルコールが入って、色白の肌がほんのり赤く染まっている。そのハンサムな横顔が妙に朝子の心をくすぐった。それに、疲れを押して、わざわざ朝子のために泊まりがけで来てくれたことがうれしかった。

「近くに住んでいるのだとばかり思っていたから、びっくりしたわ。せっかくの土、日をつぶしてしまって、悪かったわね」

「いや、いいんだ。たまには息抜きも必要だから」

「今日はどこに泊まるの？」

「いきつけのビジネスホテルがあるんだ。……今日は時間がなかったけど、明日、僕の好きな場所を案内するから、楽しみにして」

夜中の一時過ぎに別れ、翌朝、ホテルのティールームで共に遅い朝食をとった。

「朝食を一緒に食べているところ、誰かに見られたらまずくないの？」

「別に……」

「患者さんの目が光っているかもしれないわ」

史朗は朝子の言葉を気にする風もなく、朝食後タクシーに乗りこむと、犀川のほとりに出た。

あいにくの台風の到来で、雨は降ったり止んだりだし、時たま強い風が吹きつける。その分、暑さは遠のき、夏の終わりを思わせるさわやかさが心地良い。川原の緑は雨に濡れ、鮮やかさが冴えている。

「学生時代、よくここで昼寝をしたものさ。何時間も、一人でボーッとしていたな」

史朗は遠くを見つめながらポツリという。青春を過ごした思い出の場所なのだろう。

それから金沢城跡や兼六園など、お決まりの観光コースを回り、史朗は手際よくガイドしてくれた。〝ニコニコして感じのいい人〟――それが一日一緒に過ごした後

の、史朗に対する朝子の率直な印象だった。
それから半年ほど後、朝子の誕生日に東京にやってきた史朗は、自分で彫金した指輪を朝子にプレゼントした。
「金沢で別々のホテルに泊まった時には、夜中に電話しようと、何度も思ったよ。だから一睡もできなかった。初めて会った時から、ピーンとくるものがあったんだ」
突然の告白に、朝子は戸惑った。
「いつも来る技工士の由美さんが、あなたの彼女なのかと思っていたわ」
「違うよ、ただの友達さ。君こそ、付き合っている男がいるんじゃない？」
「友達はいるけれど……」
「じゃあ、おあいこだね。今まで、とにかく開業のことだけしか考えてなかったから、結婚しようと思ったことはなかったんだ。君がはじめてだよ」
「この指輪、してていいの？」
その手作りの指輪は、形はいびつたし、決して高価そうには見えなかったけれども、史朗の体温がこもっているような感じがした。これは婚約指輪を意味するものなのか。
「本当に、指輪はめてていいの？」
もう一度、朝子が念押しすると、
「……でも、一生独身かもしれないよ」
一瞬、言葉が出なかった。

「ゴメン。今の言葉は、取り消すよ。これから試験を受ける人に、落ちるかもしれないよって言っているようなもんだね。……冗談だよ」
史朗が東京に来るか、朝子が金沢に行く。もしくは途中のスキー場で会うなどして、付き合いが続いた。しかし距離の開きは想像以上に辛く、遠距離恋愛は疲れた。会っている時は楽しいけれども、当然のことながら会っていない時間の方が長すぎた。やれ、風邪をひいた。保険の計算で忙しい。祭りがあってこられない。次第に間延びしていく史朗との関係は、精神的な疲労が増すばかりだった。連絡が途絶えがちになると、朝子はいつも癇癪を起こし、別れようと何度も史朗に告げた。
ある時、ふさぎがちな朝子の様子に、塾の講師仲間の小野が声をかけてきた。
「最近、元気がないね。恋の悩み？」
「たいした問題じゃないんだけど……」
三年先輩で仏文科の大学院生の小野は、大学時代からの付き合いだ。朝子は気軽さから、史朗のことを話していた。
「君は田舎に引っ込む人間じゃないと思うけど。都会育ちの朝子さんが、そういうところで生活するのは無理なんじゃない。やめとけよ、そんな結婚。……僕じゃだめかい？」
小野の銀ブチのメガネの奥の目が、一瞬、キラリと

光った。
「私をからかっているんでしょ」
「いや、僕はずっと君のことを見続けてきたんだもの」
そういえば、ゼミの合宿に、二人で一緒に行ったこともあるし、彼の車で伊豆にドライブに出かけたこともある。今の仕事も、小野が声をかけてくれたのだし、気がつけばいつも小野は朝子の近くにいる。確かにいい人には違いない。だが、恋愛とか結婚の相手として、踏み出すことができなかった。
「君とはもう五年ぐらいの付き合いになるけど、僕は本気だよ。でも君は僕のことなんか、眼中にないんだから。……その彼氏に、ジェラシーを感じるな」
こんな身近に求婚者がいるというのに、どうしてよりによってあんな田舎の男を好きになってしまったのか。年齢的な焦りから……？堂々巡りの末、行きつく先はいつも同じだった。史朗のことが好きなのに、結婚相手としては条件が悪すぎる。逆に身近にいる男は、条件は悪くないが少しも心がはずまないのだ。東京から遥か遠く、S市に住む史朗のどこがいいのか、いくら考えてもよくわからないけれど、なぜだか別れることができなかった。
朝子のアパートにはじめてやって来た時、史朗は部屋を見回すと、開口一番「安心したよ」と言った。
「どうして？」
「いや、思ったより簡素な住まいだなと思って……」
それから、神妙な顔をして続けた。
「……大学前の浪人生活が長かったせいか、卒業を目前にした時、国家試験に落ちたらどうしようと思ったら、いてもたってもいられなくなったんだ。そしてどんなに努力しても、人間の力には限界があると思った。その限られた世界のなかでしか、人間は幸せを見出すことができない。それ以外に僕はどうにも生きようがないんだってね。……でも君は、もっとそういう範疇を越えたことを考えている気がして」
史朗が心情を吐露したのは、はじめてのことだった。
「君は今、自分の仕事を持っているし、一人で自由に生活している。きっとこの先、いろんな夢があるんじゃないかなって。僕の人生観とはちょっと違うかもしれないなって、ふっと思うことがある」
「価値観が違うってこと？」
「そうかもしれない」
「……でも、私たち会っている時は楽しいし、安心できる」
「うん、会えて良かった。会うとほっとするよ。……やっぱり、一ヶ月に一度は会わないとダメだねえ」
そう言いながら、史朗は朝子の手を力をこめて握りしめた。
確かに、二人は生まれも育ちも違うし、考え方も一致しているわけではなかったが、一緒にいるだけで楽しく、

暖かい気持ちになれた。二人にとって、お互いを好きという気持ちが、再優先のことだと思えたのだ。

しかしS市に行ってから半年たっても、二人の関係は進展しなかった。史朗はゴールデンウィークと夏休みの二回、上京したが、朝子は自分の両親に会わせる勇気もなく、心を決めかねていた。史朗以外、誰も知る人のいない北国の未知の土地に単身乗り込んで行くことを思うと、踏み出せなかった。

ならば、史朗が東京に来ればいいではないか。金沢でもいい。それとも、はじめは別居結婚の形をとったらどうか。いろいろな提案もしてみたが、借金をして建設した医院と両親は男の肩に重く食い込み、すべてを捨てるには、抱えているものが多すぎた。

電撃結婚した若い女の歌手が、「女は決断する度に幸せになる……」と告白していた。朝子はその歌手より一〇歳近くも年上なのに、意気地がなくて何も決断できないでいる。だから幸せになれないのかと、ぼんやりと考えたりした。

史朗の母親が、金沢郊外の病院に入院していると聞かされたのは、三日前のことだった。

「朝食はおやじがパンを焼いてくれて、昼は仕出し弁当を頼んで、夕食は姉が作りにきてくれるんだ。……看護婦も一人辞めちゃって、人出は足りないし、踏んだりけったりさ」

いつもの鷹揚とした口調とは違う、苛立った言い方に、史朗が窮地に立たされていることを察して、朝子は矢も盾もたまらなくなっていた。

「それなら、私がごはんを作りに行くわ」

「深刻に考えなくていいよ。次の週末は祭りだから、また軽い気持で遊びに来てよ」

男と女が平行線でいるなんてありえない。交わるか、消滅するか、ついにその決断の時が来たのだと、朝子は自分に言い聞かせた。

ようやくS市に着いた。

電車のドアから掃き出された人の姿はまばらだった。重い足取りでホームから階段を上り改札口へ向かうと、明るい照明の下にはっぴ姿の史朗が立っていた。体に貼りついたようなはっぴは、小柄な体型によく似合っていたが、深刻めいた顔をしている。

「僕はまだ祭りの打ち合わせがあるんだ。……だから悪いけど、父と姉夫婦と一緒に食事に行ってくれないかな」

史朗にそういわれて、家に着くなり、朝子は史朗の家族と一緒に近くの割烹料理屋に出かけた。

「実は、僕も学生時代は東京にいたんです。でも実家がこの町なので、泣く泣く帰ってきましたよ」

姉の夫は朝子に気さくに話しかけてくるが、その隣に座る母親に似て太り気味の姉は、横柄な態度で朝子を睨んでいる。朝子がビールをつごうとすると、

「結構ですわ」

ピシャリと拒否する。食事がはじまると、朝子の仕草をなめるような目で見つめ、

「あら、お箸の持ち方がへんだわ」

大事なことでも発見したみたいに、言う。

「お恥かしい。私、うまく持てないんです」

「きっと、親のしつけが悪いのねえ……」

初めて会う史朗の姉は、朝子に対して最初から敵意を持っているらしい。小姑根性丸だしの姉にむっとしながらも、そんなことより、まるで祭りが一大事でもあるかのように出かけて行った史朗に対して、朝子は腹を立てていた。

それでも東京を懐かしむ姉の夫と父親のとりなしで、夕食は何事もなく終わった。

「ちょっと、祭りを見て行きましょう。中世から続く、年に一度の大祭なんですよ」

父親の提案で、食後、港へ繰り出した。

海に向かって歩いて行くと、潮風とともに徐々に祭りらしい賑わいと活気が伝わってくる。気がつくと、太鼓と笛の音、威勢のいいかけ声が、一定のリズムで旋律を奏でていた。やがて闇のなかに松明や提灯の灯が灯り、辺り一面、昼間のような明るさになったかと思うと、巨大な山車が繰り出しているではないか。

赤や朱色、黄色の派手な布と端正なからくり人形で華麗に飾られたゆうに十メートルは越える巨大な山車が、はっぴ姿の大勢の男たちに支えられながら、まるで生きもののようにうごめいている。頭にはちまきを巻き汗にまみれた男たちが、山車を引っ張ったり押したりしながら、ゆっくりと移動させているのだ。バランスを崩せば、巨体はたちまち総崩れになってしまうから、町を練り歩くには、男たちの息の合ったリズムが必要なのだろう。

異様な熱気のなか、揺れ動く巨体の幻想的な姿は、まさに祭りのクライマックスの瞬間だ。この中に史朗はいるのだろうか。朝子は目をこらして探したが、見つけることができない。

突如、朝子は、押しつぶされそうな重圧感にかられた。山車の舞台が、大きな車輪が、人の群れが、敵意を剥き出しにして自分に覆い被さってくるような恐怖に、息苦しくなってきた。なじもうとしてもなじめなくて、よそよそしく、拒絶されてしまう、朝子が今まで生きてきた世界とはまるで違う、閉ざされた世界。母親と姉の意地悪そうな笑い顔、そして史朗と父親のどうしていいかわからないような困惑気な顔が、幻影となって朝子の回りを取り巻いている。

とその時、朝子は頭に激しい衝撃を受け、閃光が走った。そして、体を支えていた重しがはずれたように闇の

なかへ落ちていった。

……闇が一転して明るくなり、青く、深く、冷たい海の底に、一人で漂っていた。体も心も砕け散り、海の藻屑となってゆらゆらと水のなかを舞っているような、奇妙な感覚にとらわれている。自分が跡形もなくなってしまえば、かえって心地良いいのだと感じながらしばらく水に身をまかせていると、目の前に史朗が来ていた。彼のもとに行こうと手足に力を入れて踏み出すが、あと一歩のところで水圧に阻まれ、流されてしまう。何回やっても同じことの繰り返しで、どうしても行きつくことができない。すぐそこに史朗がいるというのに、お互いが差し出した手は、届きそうで届かない。

胸をかきむしりもがき苦しみながら、

「私はここにいるのよ。どうして届かないの！史朗、私を一人にしないで！」

朝子は声にならない悲鳴をあげていた。

気がつくと、朝子は史朗の家のリビングのソファに寝かされていた。

「大丈夫ですか？」

義姉の夫が心配そうに朝子の顔を覗き込む。と同時に、電話のベルが鳴った。

「史朗さんだわ」

朝子がふらふらとした足取りで立ち上がるよりも早く、姉が受話器を取った。そしてひそひそ声で話した後、

「入院中の母親からよ」

ぞんざいに、朝子に受話器を渡す。

「ああ、朝子さん。あなた、何しに来たのかしら。……まだ何も決まっていないのに、私の留守中に家に泊まれては困るの！近所で評判になりますからね。今晩は姉の嫁ぎ先か、駅前のビジネステルに泊まってもらえないかしら」

受話器の向こうで、母親ががなりたてている。

一瞬、朝子の頭の中は真っ白になり、意識が遠のいた。しかし母親の図太い声は、朝子とは無縁の遠い世界での咆哮のように聞こえ、朝子は無表情のまま受話器を置いた。

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）	（原稿締切日）〔注〕
春季号……	二月一日……十二月三十一日
夏季号……	五月一日……三月三十一日
秋季号……	八月一日……六月　三十日
冬季号……	十一月一日……九月　三十日

〔注〕円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

藩主脱藩

大和禎人（おおわよしと）

林家

家紋　三つ頭左巴に一文字　三階菱　五七桐　○出典（○大武芸）

一藩の君主が決意の脱藩を敢行した。あろうことか、紛れもなくそれは事実であり、戊辰戦争に際し、自ら下した決断であった。一郷士の坂本龍馬が土佐藩を脱藩したのとはわけが違って、ことは重大であった。

請西（じょうざい）藩の林昌之助忠崇（ただたか）がまさにその当人である。知行地は上総望陀郡（後に廃藩置県により木更津県）の請西、陣屋を木更津に置いて、禄高一万石、席次は菊間詰、小名とはいえ、れっきとして大名の列にあった人物である。

藩主が脱藩することは藩を捨てることを意味する。その立場上、そう解釈されたとしても不思議ではない。ただし、忠崇が自らそこまで覚悟していたかどうかは疑問が残る。

だが、新政府の所断は容赦がなかった。戊辰戦争後、請西藩は朝命に抗した理由で明治元年十二月七日、その所領すべてを没収抹殺されてしまった。三〇〇諸侯中、なにもかも失ったケースはこの藩以外にその例がない。

ちなみに同様処断の例をあげれば仙台伊達藩が六十二万石から二十八万石に、南部盛岡藩は二十万石から十三万石、二本松藩は十万石から五万石、庄内藩は十七万石から十二万石、米沢藩は十八万石から十四万石、長岡藩は七万四千石から二万四千石へ、そして会津藩に対してはもっとも厳しく十八万石からただの三万石へなど、奥羽列藩以外では桑名藩の十一万石から六万石、小田原藩の十一万三千石から七万五千石などと枚挙できる。

請西藩は参勤交代のない定府の身分で、嘉永三年播磨守忠旭（ただあきら）の時、同じ上総の貝淵より入封、二代忠交（ただかた）は大番頭、さらに伏見奉行を勤めている。上屋敷は日本橋蛎殻（かきがら）町、下屋敷を本所菊川町に置いていた。

忠崇は忠旭の末子、忠交の養子として三代を襲っている。かれは慶応四年三月八日まで上屋敷にいて、俄（にわ）かに請西へ帰藩している。上屋敷は墨田川の舟運に便利な新

大橋に近く、小藩とても大荷足（おおにたり）ほどの船は抱えていて、陸路より早く江戸湾内を船路の帰藩が可能であった。

あたかも一月には鳥羽伏見に幕軍が薩・長・土の三藩を主流とする西軍と交戦、戦況の非を見ると将軍慶喜は海路を逃れて東帰する。この際にも忠崇は海路を上坂、救援を志しながら、その途次敗報を聞き、また将軍のすでに歸府という事実を知り、空しく江戸に戻っている。

すでに二月三日には天皇親征の詔が下される事態を迎えていた。忠崇は時に血気の二十一歳である。青年藩主はついに脱藩を敢行するに至った。

（徳川家が賊名をうけ、滅亡に向かうのは見るに忍びない、われらは将軍家にご迷惑をかけぬよう、脱藩し一浮浪人の存念をもって戦おうと思った。）

忠崇が後に自ら語った脱藩理由である。

四月十一日、木更津へ脱走してきた幕府撤兵隊頭福田道直、追って伊庭八郎、人見勝太郎らが加わり、徳川宗家回復の意見を交わしたが、不一致のあげく、人見とのみ合体して忠崇は行動を起こし、まず房総諸藩に檄し、次いで渡海して豆相に侵攻、小田原藩と提携、箱根を擁して西軍増援部隊を迎撃しようという作戦を立てた。

閏四月三日、藩兵七十、遊撃隊三十六名とともに寡兵を免れないながら、壮気に満ちた出陣を果たしている。

（一騎当千の意気でことに当たろうぞ）

まず富津にいたり、砲台を落とし、歩卒と武器を徴発し、飯野藩に出兵を強要、次いで佐貫藩から兵器と軍資金をうけ、勝山藩にも出兵を強要し、館山に向かった。

長須賀村に宿営の上、館山藩に対しては榎本武揚に通じて、軍艦大江丸による艦砲による援護をうけ、功を奏し、同地柏崎の浜から、十二日、相州真鶴へむけ和船を仕立て出発、同地に達している。

上陸後は踵（きびす）を返し、かねての計略どおり小田原にいたり藩を説得して箱根の険を擁し、西軍の増援を阻止しようという戦略を彼は実行したのであった。それは幕府方の主戦論者幕閣の小栗上野介忠順や、歩兵奉行大鳥圭介らの企図した戦略に同じ発想であった。小藩の非力を補うためまず布石として小田原藩の抱き込みを意図したのである。着眼とその意気を壮とすべきであろう。

小藩請西の士道を物語るここに一つの挿話がある。

藩士諏訪数馬が病弱のため出陣できなかった己を責め藩主一行が館山より進発の同日、自害して果てた一事がそれである。館山市来福寺に同人の墓石が現存する。

忠崇は小田原、韮山、御殿場、沼津と奔走し合力を説き、一時は箱根の関を掌握したが、小田原藩の離反、これを盾とした官軍に押し立てられ、やがて敗北を余儀なくした。箱根を退き、網代に至り大船三隻を雇い、一時

二〇〇に達していた兵員を分乗させて、五月二十八日、いったん館山に帰投している。

降伏と引き渡しを拒み、江戸湾内にあった幕府艦隊は江戸城に入った陸兵のみの官軍にとって脅威を与えていた。上野に拠った彰義隊は約二〇〇〇、皇弟輪王寺宮を奉じたが、五月十五日には敗退、宮は幕府艦隊の総帥榎本武揚に援けられ、幕艦長鯨により東北へ逃れられた。榎本は観音崎まで旗艦開陽で追尾し見送っている。彰義隊援護のためには海上からついに一発の砲撃も加えず、江戸市街の損傷を心して避けてきた榎本だが、宮を見送ったこの時、その胸の内にこの宮を奉じて北方政府樹立も可能ではという夢を描いていたと憶測することは必ずしも不当とは言えないであろう。

林忠崇は館山帰投の翌二十八日には再び決起し、かねて榎本武揚に依頼してあって、咸臨丸により請西・遊撃隊の連合を率い北航、六月一日小名浜に到着している。

奥羽越の諸藩が仙台、米沢の二藩を盟主として会津を援護し官軍に抗戦する機運を知ったからである。忠崇は平、相馬中村、と転戦、死闘を演じ、会津を目指したが挫折の連続であった。ついに忠崇に従うもの六十九名、相馬関田宿の戦闘では討ち死にを決意したが、老臣北爪貢に諫められ、さらに新田坂の戦闘にも加わっている。かくする間に米沢、ついで仙台の降伏があり、失意を激しくした。

一方、榎本艦隊は八月十九日、仙台を目指し江戸湾から忽然として去り、仙台に拠っていた。陸兵を率い大鳥圭介も来たり会し、新選組の土方歳三も同席、仙台藩の恭順に傾く藩論を覆そうとする論議が行われたが、その努力空しく、榎本らは蝦夷地を指向する趨勢に、忠崇もまたこれに加わる意向をもったが、仙台藩主の親書をもっての恭順の勧めをうけ、すでに傷つき困憊（こんぱい）の状況のもと兵員の多くを失い、かつ九月二十三日には会津落城の報を聞くにおよんで、十月三日ついに仙台で家臣十九名とともに降伏を決意した。小藩非力の悔しさである。

江戸へ護送され唐津藩小笠原長国の屋敷におしこめの身となったが、明治五年正月に禁固を解かれている。

明治二年弟忠弘が家督相続を許され、三〇〇石を与えられることがあり、忠崇自らも同二十七年に男爵の礼をうけた。明治政府のせめて一掬、贖罪（しょくざい）的な施（ほどこ）しであったろうか。三十七年七月、東照宮神職となったが三年後に辞している。

すべては「恩讐の彼方へ」であった。昭和十六年一月最後の大名としてかれは長生きの生涯を閉じた。九十四歳であった。東京都港区芝愛宕下の青松寺に葬られた。

（H一五・一一・八）

崔致遠の碑文

新井宏

良港にはかならず島と山がある。釜山は島と山に取り囲まれた超過密都市である。その西側には、金井山から九徳山まで断続する南北の山脈が連なり、洛東江が釜山に流れ込むのを峻拒している。標高七百メートルにも満たない山々ばかりであるが、岩山なので天然の要害である。一方、東側にも機帳から萇山に続く南北の山なみがあり、そのふたつの山脈にはさまれ細長く広がっているのが釜山の市街地である。

しかもその市街地にも、島のような小山が散在しているので、平坦な土地はほとんどない。だから四周の山々の中腹まで超高層アパート群が立ち並ぶことになる。

そんな釜山を地図も持たずに、一日中歩き回ることがある。北の東萊から南の釜山港まで歩いても三時間くらいしかかからないから、市街地はもうあらかた歩き尽くしてしまった。残るのはふたつの山脈の外側に広がる広域市街地である。

海雲台は釜山の中心地から東部にやや離れた萇山の南海岸にある名勝地である。昨年末のある日、思い立って釜山の海岸線を歩いて見ようと、いつものように東萊のバスターミナルから歩き始めた。鉄道が見え隠れする幹線道路を二時間あまり歩くと海雲台に着く。韓国の鉄道は完全に時代から取り残されていて、めったに列車は通らない。鉄道輸送を増強する前に、いきなり自動車社会に突入してしまったからである。

かっての海雲台は海辺特有の飲食店街が雑然と立ち並び、その周りに屋台がひしめいていたように記憶しているが、今は完全に再開発され、周辺には大型の観光ホテルが林立している。ワールドカップに向けて整備したのであろうか、道路も広く、屋台等はテント村に集約されていて、国際観光地の風情である。

その海岸のはずれに、チョ・ヨンビルが「釜山港へ帰れ」の中で、

花咲く冬栢島に春は来たれど
兄弟が発った釜山港には
かもめだけが悲しく鳴いている

と唄った冬栢島がある。もとは独立した島であったが、今は陸続きになっていて、その頂上に統一新羅末期の大学者崔致遠の銅像が建ち、周辺には彼の事績や漢詩が刻まれている。

わが畏友、漢詩人の鯨游海氏との酒肴にでもなればと思い、漢詩を読むがやはり歯が立たない。しかし事績についてはハングルなので何とか判る。

それによれば、崔致遠は十三歳で唐に入り、十八歳で科挙に合格、詩人として名を挙げ、役人として出世し、黄巣の乱では「討黄巣檄文」を書いて大功を挙げたという。まるで阿部仲麻呂のような経歴であるが、異なるのは二十九歳の時、故郷に錦を飾り、新羅の王朝に仕えたことである。

しかし当時の新羅は既に朽ち落ちる寸前であった。彼の意見に耳を傾けなかったばかりでなく、迫害さえ加えるありさまで、彼は結局すべてに絶望して伽耶山海印寺に引きこもってしまったという。

冬栢島に崔致遠の銅像が残るのは、彼が伽耶山に入る途中、ここを通り風景の美しさに感動して、島の南端の岩に「海雲」と刻んだとのいわれによる。海雲は崔致遠の号のひとつである。

崔致遠の事績を読んでいる内に思った。菅原道真と全く同時代に生きているし、阿部仲麻呂よりも百年ほど後の人物であるが、経歴が実に良く似ている。これは『まんじ』のテーマになりそうだ。さっそく大学の図書館で調べてみようと。

それが私の研究に大幸運をもたらすことになった。崔致遠の記した「崇福寺碑文」に出会ったのである。そこには、大変なことが書かれていた。

……ついている……ついている……本当についている……。

人生にはつきがある。そしてつきを意識するとまた次のつきを呼びこむ。崔致遠の崇福寺碑文に出会ったのも、そのつきの連鎖の一環にちがいない。

思うに、今度のつきの連鎖を辿って行くと、どうもすべてが初めての韓国旅行に行き着くようである。

妻と初めて韓国を訪れたのはもう十年以上も前になる。五十代半ばのサラリーマンしては最多忙な時期に、やっとの想いで纏め上げた「古韓尺」の研究結果が、幸運にも吉川弘文館から出版されることになった。それを機会に、文献だけで知る韓国の遺跡、特に慶州の皇龍寺址は

ぜひ見ておきたかった。五月の連休を利用してのあわただしいツアー旅行、たしかひとり当たり二十万円以上かかったように記憶している。今思えば随分割高な旅行であったが、それが私たちで一緒に出かける初めての海外旅行であった。

世の中には不思議なことがたくさんある。この韓国旅行がそうであった。わずか六日間の日程に過ぎなかったのに、その時の出会いが古韓尺の研究にいつも不思議に絡んでくる。この海雲台の崔致遠もそうであった。とにかくすべての出来事が不思議な糸で結ばれ、私の研究を後押ししてくれている。

私は永年にわたって、古代の朝鮮半島と日本に共通する古韓尺と名づける二十六・七センチの尺度が存在していたことを主張し続けている。研究論文も多数書き、その結果を研究書として出版もしている。その結果、一部の学者には積極的に認められ、韓国ではその本の海賊版が出ているほどであるが、世の中の常で従来学説とぶつかるところもあるため、無視し続けている学者も多い。それは、私の学説が主として考古学的な遺構とか遺物などの間接的な状況証拠に依存していて、古文献の裏づけなど直接的な証拠に乏しいためでもある。

……決定的な証拠がない限り、従来学説に忠実にしていれば間違いはない……第一いままでに従来学説に則って多くの論文を書いてしまっている……アマチュアの学説にうっかり乗っかって笑いものになったら大変だ……。そんな蔭の声が聞えて来るようであった。

なんとか古韓尺の決定的な認証を得たい。そのための作戦はふたつあった。ひとつは、発掘資料や文献の探索である。これで決定的な証拠が見つかればまったく文句ない。しかしそれほど甘くはないのも十分に承知していた。次善の策はアマとしての発言からプロとしての発言に切り換え、専門家入りすることだ。そのためには大学教授という肩書が好都合だ。さいわい金属工学では多少の勲章もある。これを利用しない手はない。

その結果、歴史と考古学の研究を優先して良いという恵まれた条件で、いま韓国の国立慶尚大学にいる。所属は金属工学科、しかし名刺には工学部とは書かない。

そして二年が経過した今日、崔致遠の崇福寺碑文に出会ったお蔭で当初の目的を二百パーセント達成した気分でいる。とにかくついていた。いやつき過ぎていた。出るはずのない牌を次々に引いてきて連続して九連宝灯で上がった気分である。

それがすべて最初の韓国旅行と関連しているように思えるのである。こんな具合である。

初めての韓国旅行、第一日目は公州や扶余の観光拠点

となる儒城温泉に泊った。韓国最大のこの温泉地は、その翌年に開かれる大田科学万博の工事で殺気立っていて、道路を渡るにも決死の思いであった。あちらこちらにまだ貧しい家々が残っていたが、それを飲み込むかのように、すべてが激しく変貌していた。

そんな雑踏をさけながら、朝早く妻と散歩をしている内に、たまたま大学らしいところに行き当たった。それが百済文化研究の名門、国立忠南大学であった。もちろん大学の名前はよく知っていたが、宿のすぐ近くにあることなどまったく予期せぬことであった。

……ああ、きっとこの大学に何か縁がある……

そんなぼんやりとした予感がその後に次々と実現して行く。

まず忠南大学の百済研究所から古代製鉄技術についての講演の依頼が舞い込んできた。それは、韓国での生活を始めてから一年ほどたった一昨年末のことであった。会社を卒業してから書き始めた金属考古学関係の論文が目に留まったらしい。私の講演のために、一日の日程を準備してくれるという。

韓国の考古学や古代史の関係者と知り合う絶好な機会である。講演時間も十分にある。それならば古韓尺の研究についてもぜひ紹介したいと申し出たところ快く受入れてくれた。

講演企画者は私をたんに金属考古学の研究者としか知らなかったようであるが、講演会場には、古韓尺の研究を通じて知り合った関係者が多数やってきていた。その関係で、今度は古代計量史についての講演会や討論会等にも誘われるようになり、忠南大学の百済研究所との繋がりが深まって行く。そして昨年夏には論文「∧三国史記・遺事∨記事による新羅王京の復元と古韓尺」を『百済研究』に載せてもらうことになった。

この論文が古韓尺研究の決定打になるだろうということは、私には良くわかっていた。とにかく十分過ぎるほどの手応えであった。これで永年の夢が百パーセント達成できる。それを『百済研究』に紹介できるのも、最初の韓国旅行の奇縁のように思える。

また、その論文の主舞台となった新羅王京すなわち慶州には第三日目に泊っている。奈良に似通う静かな古都で、その東側に念願の皇龍寺址がある。奈良東大寺をしのぐ巨大寺院で、その詳細な発掘調査結果が発表されたことによって、古韓尺説がどれほど強力な支持を得たか計り知れない。その皇龍寺址をぜひ見てみたいというのが、旅行の主目的であったが、もちろん観光コースには入っていない。

翌日の朝早くタクシーの運転手に皇龍寺址と告げて目的地に向かうが、場所が良く分からないらしい。世界的

に有名な遺跡でさえ、観光名所でもなければ現地の人々は関心がないのであろう。それでもなんとか地図を頼りに広大な発掘現場に辿り着いた時には、もう太陽が昇り九重塔址の礎石群が朝露で光り輝やいていた。あこがれの地を踏むことができたという思いで、金堂址、講堂址、回廊址、そして中門址とむやみに歩き回った記憶がある。

その皇龍寺址の発掘調査は今も続いていて、皇龍寺周辺の王京條坊の様子が次第に明らかにされ、従来から有力であった條坊百六十メートル方格説がますます確実なものになって来ている。この方格地割と『三国史記』や『三国遺事』の記事を対照すれば、一方格が百歩であることが明らかであり、そこから一歩は百六十センチすなわち一尺は二十六・七センチと計算される。ここに古韓尺が待望の文献資料によって裏付けられることになったのである。

かくして皇龍寺址訪問もその後の古韓尺の研究と奇縁で結ばれる。

そして第四日目には釜山に入り海雲台に泊った。宿の朝鮮ホテルはちょうど冬柏島の入口付近にあり、いつものように妻と朝の散歩で冬柏島の上まで登った。そこで出会ったのが、崔致遠の銅像である。

崔致遠といっても、その当時は名前を知っている程度で、特に関心があった訳ではない。ただ新羅の歴史に登場する大学者に、朝の散歩で出会えたのが嬉しく、妻との会話も弾んだ。そしてその思い出が私を再び海雲台に向かわせ、崔致遠の崇福寺碑文に巡り合うきっかけとなったのである。日韓の古代土地制度を読み解く貴重な記録を発見する端緒であった。

日本では大化前代に代制という土地制度が行われていた。しかし、その起源については高麗尺によるとする学説が有力ではあったものの、疑問点を提出している学者も多く、いわば良く分かっていない状態であった。それが崔致遠の崇福寺碑を解析することによって、代制と朝鮮半島の結負制が完全に同じシステムであると明らかになったのである。そして、その基礎に古韓尺があったのはいうまでもない。それは日本と朝鮮半島の土地制度が同時に解明された瞬間でもあった。

私はもともと「新羅王京」の論文を書けたことで十分に満足していた。そのことによって、古韓尺が状況証拠ばかりではなく、文献的にも裏付けられ、学説としての確固たる基盤を築くことができたからである。しかし、日本の代制と朝鮮半島の結負制が同じシステムにあったことが判明したことは、古韓尺の認知を求める立場を超えて、日本の古代史に大きな影響をもたらすはずである。大化の改新をめぐる歴史論争のひとつの焦点である代制

から町段歩制への移行についても、新たな観点からの論議を呼ぶことであろう。

私は古韓尺の研究を進めるためには、朝鮮半島の土地制度史の研究が不可欠だと考えてきた。しかし朝鮮半島の土地制度については、高麗末期から以降については、かなり詳細にわかっているが、高麗以前の制度については、むしろ日本よりも判っていなかった。

わかっていたことといえば、朝鮮半島では、土地の実面積を示す頃畝制と、同一収量を基準とする結負制が並行して行われており、新羅時代には結と頃の面積かほぼ同一であったことぐらいで、肝心の頃や結の実面積については諸説あるものの、まったく定見が得られていなかった。

それは、高麗時代の土地制度を記述した『高麗史』文宗量田法（一〇六九年）の記述に誤りがあり、その復元をめぐって諸説が提出されていたからである。

文宗量田法というのは、量田尺の三十三歩の方格すなわち千八十九平方歩を一結とする全く奇妙な制度であった。ただし、それが間違いでないことは、金石文の記録などから明らかにされていた。問題はそこに記載された量田尺がどんなものであったかである。そこにはこう書いてあった。

六寸為一分 十分為一尺 六尺為一歩

これをそのまま素直に読めば、基準尺の三十六尺が一歩になる。しかしそれではどんな基準尺を持ち出しても、一結の面積があまりにも広くなり過ぎて実状にあわない。

そのため多くの学者達は「十分為一尺」の、分か一か尺の部分に誤りがあると考えた。そうするといずれの場合でも結局は六尺で一歩になる。しかし六尺一歩なら通常の制度そのものであり注記を必要としないし、文章的にも冗長すぎる。その上、六尺一歩であれば、どんな基準尺を持ち出しても、同時代の宋人徐兢が、宣和五年(一一二三年)に書いた『宣和奉使高麗図経』の記録に合致しない。

そのような状況から、高麗中期の結の面積でさえ定見が得られず、ましてや新羅時代の面積については、議論を深めることができなかった。

ところが私には私だけが知っている貴重な情報があった。古韓尺の研究を通じてである。

頃畝制とは古代中国の制度で方百歩すなわち一萬平方歩を一頃とする制であった。これを古韓尺で計算すると二万五千七百平米になる。一方、朝鮮時代前期の世宗代に定められた頃の面積も二万五千七百平米で完全に一致するのである。しかも古韓尺の百歩を方格とする古代地割遺構は新羅王京をはじめとして、南原小京や尚州邑城にも残っているし、文献的にも方百歩をもって頃あるい

は結と伝える事例がいくつもある。だから朝鮮半島では頃の面積は長い間変わらなかったのである。

この事実を知ると、見えるものが変わってくる。文宗量田法の錯誤は「十分為一尺」の部分ではなく最初の部分の「六寸為一分」にあったのではないか。そう気づけばあとは一本道である。六の部分が二、三、四、五のいずれかの誤りであったとするならば、文章としての意味も十分に通る。

これを徐兢の記録に照らしてみれば、周尺を基準として

四寸為一分 十分為一尺 六尺為一歩

と読むのが最も合理的である。すなわち量田用の一歩は周尺の二十四尺になる。ところで周尺の八尺が一歩であるから、二十四尺は通常の歩で云えば三歩のことである。しかも周尺の一歩と古韓尺の一歩は実長が等しいから、文宗量田法を古韓尺の歩で示せば、三歩×三十三すなわち方九十九歩になる。何の事はない結は方百歩のことなのである。

しかしそれならばなぜ量田尺による方三十三歩などというややこしい制度を持ち出す必要があったのであろうか。この疑問を解く鍵が崔致遠の崇福寺碑文の中にあったのである。そこにはこのように書いてあった。

東俗 以五畝減百弓為結

これは、東俗（新羅）では方百弓すなわち一万平方歩の面積から五畝すなわち千二百平方歩の面積を差し引いたものが結であると解説した文章である。計算して見れば八千八百平方歩が結の面積になる。しかしこれは頃や結の面積を方百歩すなわち一万平方歩としていたことと異なるではないか。結と頃の面積が等しかったとする定説に誤りがあるのであろうか。

そこで重大なことに気がついた。もともとは、結は頃と同じ一万平方歩ではなく、九千平方歩すなわち〇・九頃だったのではないか。なぜならば、面積の里は九頃であり、十結が一里であったとすれば、結が〇・九頃と簡単に導き出せるからである。もともとは結と頃は異なった単位だったのではないか。

そう気がつくとすべてが見えてきた。三国時代に、百済では結負制が行われ、新羅では頃畝制が行われていたのではないか。結は百負、一負は十束であるから、基本単位の束は九平方歩すなわち方三歩になる。だからこそ、三歩を量田歩にすればその一平方歩が束であり計算が容易になる。ここになぜ三歩を量田歩とする奇妙な制度が始まった理由があるに違いない。

しかも統一新羅の時代になると、当然のこととして、新羅、百済、高句麗の土地制度がバラバラであっては不便である。そこで結を頃に合わせてしまったのではないか。そうであれば、方三十三歩すなわち千八十九平方歩を一結とする制度がなぜ始まったかについても明快な説

明を与えることができる。

すべてがひとつに収斂した。美的とも云うべき結果である。煩わしいのでいちいち示さなかったが、この分野の研究者達を納得させるための傍証も豊富にある。心が躍る。これで高麗時代以前の土地制度研究が大きく進展するし、古韓尺も万全になる。

しかし本当に喜ぶのはその後の結論を導いた時であった。百済の結負制の面積を計算してみると、その一結は二万三千百平米であり、一束は二十三・一平米である。一方、大化前代に日本で行われていた代制ではその五百束代が後の一町歩であり、そこから一束代を計算すれば、二十三・一平米になるではないか。日本と朝鮮半島の土地基本単位が名称も面積も完全に一致している。しかも束の下位単位の把も共通である。こんなことが偶然に起こるはずがない。日本の代制は百済の結負制に源があるに違いない。

今までの学者達は代制の起源を高麗尺に求めていた。しかし実際は古韓尺による結負制に起源があった。

……勝った、勝った、勝った……完勝だ……。

古韓尺のライバル高麗尺については、多くの研究者達がその存在を前提にして数多くの論文を書いている。しかし厳密に言えば、その存在には極めて疑わしい点が多くある。そのことについては、古韓尺の存在を主張する過程でどうしても触れざるを得なかった。論拠は山ほどある。それは、かって高麗尺の根拠として引用されていた資料が、その後の研究の進展や発掘調査の結果によって、ほとんどすべて証拠能力を失ってしまったからである。例示して見よう。

① 高麗尺の起源とされていた東魏尺の長さが、『隋書』律歴志の記載の誤りであり、『宋書』にあるように約三十センチが正しいとされたこと

② 高麗尺の証拠とされていた四天王寺、皇龍寺、定林寺の柱間間隔がその後の発掘調査で、無意味なものになってしまったこと

③ したがって、高麗尺によって建てられたと確認される建築物が未だひとつもないこと(法隆寺のように、高麗尺の〇・七五尺を一支とする建物はあるが、その一支は古韓尺である)

④ 高麗尺の五尺一歩は、天平尺の六尺一歩と同長であり、高麗尺の実存を裏付ける理由にはならないこと

⑤ 尺度史の流れの中で見ると、高麗尺だけが異様に長いこと

だから現在では、高麗尺が実存したことを証する最大の証拠はむしろ代制の束代が高麗尺の六尺一歩の五平方歩に一致するということにあった。

それが代制の起源が百済の結負制にあり、その基本尺が古韓尺であったとなると、どうなるのであろうか。高麗尺説は完全に破綻するはずだ。

……みんなで渡れば怖くない……。

みんな高麗尺に乗っかって大合唱をしていた。誰かが、ある遺跡について高麗尺で設計されたと報告すると、詳細な検討もなく次の研究者はそれを引用する。みんなが引用するから、おそらく正しいのだろうと次の研究者もまた引用する。それに異を唱える者には冷笑を浴びせる。

誰かが言ったという。軍隊と研究は多数決がなじまないと。私も想う。研究は最も高尚な遊びだと。いうなればアルバイトをしながら、売れない小説や絵画を書いているようなところに研究の醍醐味がある。だから職業的な研究者は自戒すべきだ。本来は高尚な遊びなのだから、研究費も自弁すべきものなのに、給与さえ貰っていると。それがアマチュアの研究に冷笑を浴びせるとは何事かと。

いつか職業的な研究者に向かって、こんな文章を書いて見たいと思っていた。しかしよほど幸運に恵まれないかぎり、それが現実になるとは思ってもいなかった。とにかくついていた。

そして学んだ。とりとめもない偶然の出来事に心が弾む時、つきが生まれ、つきがつきを呼ぶことを。山歩きの知人に、成田空港でばったり出会ったりする。東欧旅行で一緒だった方を、ナイル河のクルーズ船上に見つけたりする。どうしても見つからなかった資料を、たまたま手にした本の裏表紙に発見したりする。そんな時には心が弾む。そして偶然の出来事を楽しんでいるとまた次の偶然がやってくる。それがつきだ。

崔致遠の崇福寺碑文がもたらした成果については、「結負制の復元と代制の起源」と題して一気に論文として書き上げた。いまそれを韓国語に翻訳している最中である。願望としては、日本と韓国で同時に発表したいが、プライオリティを優先する学術誌にあっては、それは許されまい。さあ、どうしようか。

いずれにしてもまた来週にでも釜山の海雲台を訪れてみよう。まだまだつきが続くような気がしている。これを逃してなるものか。



七人の代議士　第一回

「代議士誕生」

瀧澤中

「代議士」とは、衆議院議員のみを指す言葉である。それは、かつて衆議院議員のみが民から選ばれ、民の声を代弁してくれる存在であったからである。

1

篠ノ井雪枝の自慢は、今年の「東洋航空スチュワーデスカレンダー」にモデルとして出ることが決まった、ということだ。

このカレンダーは東洋航空の現役スチュワーデスがモデルになって登場するもので、有名カメラマンが撮影し、出来映えも評価も高く、当然人気がある。売り出しから数週間で完売するほどだ。

しかも、このカレンダーのモデルになったスチュワーデスは「玉の輿」を射止める可能性が高い、という伝説まであって、モデル志願のスチュワーデスは多い。

東洋航空では毎年、自薦・他薦含めて応募者を募り、きちんと面接をしてモデルを決める。

篠ノ井雪枝は毎年、友人に頼んで「他薦」という形で応募しているが、採用されたのは今回が初めてだ。

（うーん、苦節八年。やっと報われるわ）

当年三〇歳の大台に乗り、ボツボツ「寿退職」を真剣に考え始めている身としては、カレンダーモデル採用は正に福音であった。

そんな雪枝が旅客機のギャレーで、後輩たちが自分の噂話をしているのを立ち聞きしてしまった。

「篠ノ井センパイ、カレンダーに出るらしいわよ」

「うっそー、じゃあ、『地上枠』？」

「そうねぇ。もうお歳だしねぇ」

（「地上枠」？）

つまり、年をとって見栄えの悪くなったスチュワーデスを客室乗務から下ろして、地上のデスクワークにする

ために、最後の「記念」でスチュワーデス・カレンダーに載せてやろう、という意味である。
もちろん、そんなことは労働契約上成り立つものではない。が、多かれ少なかれ、接客を主とする業種ではよくある話である。特に航空会社では、どこも暗黙の了解のようになっている。
(ま・さ・か)
篠ノ井雪枝の背筋に、冷たいものが流れた。
そして次の瞬間には、怒りで頭に血が昇った。
「ちょっとッ、あんたたちッ」
「ひっ」
「何してるのッ!、さっさと仕事なさいッ!」
ギャレーの中で雪枝の噂話をしていた若いスチュワーデスたちは、引きつった顔で客室に走り出した。
(私は違うわ。何言ってるのッ。まだ三〇よ、三〇)
自分で自分の年を心の中でつぶやきながら、走り出して行った若いスチュワーデスのピチピチとした肌を思いつつ、思わず溜め息をつく雪枝だった。
(フン、見てなさいよ。私これでも、写真映り、いいんだから)
カレンダー撮影は間近に迫っていた。
「だいたいねぇ、男なんてぇものはねぇ」
行きつけの居酒屋で、篠ノ井雪枝は同僚の向井登久子と呑みながら、くだを巻いていた。
「ちょっとぉ、あんた、そんなに酒癖悪かったっけ?」「大きなお世話よ」
「でも、撮影はうまく行ったんでしょ?」
撮影、という言葉を聞いて、さらに荒れ出した雪枝。
話は、きょうのお昼のこと。
カレンダーの発売は毎年十一月なのだが、その撮影は春から夏にかけて行なう。
四月の連休前、第一弾として雪枝たちの撮影が決まった。
前月からダイエットと、普段は結婚資金用に貯めていた預金を下ろして、「黄金エステ」というものに通った。
顔やお腹に金箔を貼って、肌に艶をだす、というのだが、もちろん効果のほどは「?」である。が、雪枝が黄金エステを選んだ理由は、それがファッション雑誌の中に出ているエステの中で、一番高かったからだ。
つまり、自分で自分に、「全力を尽くしているぞ~」という気持ちを出したいため、なのだ。
制服は、会社の購買部で新しく頼んで、一着を新調した。しかも、ウエストはワン・サイズ縮めて、である。
撮影当日である今朝。雪枝は颯爽と、撮影が行なわれる羽田空港の、まだ使用されていない建設途中のターミナルに向かった。
「おはようございます」

「おはようございます」
「あら、おはよう」
声をかけてくるのは、ほとんどが自分の後輩たちである。
(うーん、さすがにキレイどころを揃えているわ)
雪枝もうなるほど、美形のそれも若いスチュワーデスたちが集まっていた。
「それでは、始めますのでお集まり下さい」
カメラマンの助手らしき若者が、スチュワーデスたちに声をかけた。
まだ建材が所々に置かれているターミナルの中央に、アゴヒゲを生やした老カメラマンが、よく映画監督が座っているディレクター・チェアにふんぞり返っていた。
そこに集まったスチュワーデスたち。
老カメラマンは、座ったまま挨拶を始めた。
「アー、私が毛呂山です。いい画を撮りたいので、ご協力願いたい。では、佐々木クン」
というと、脇に立っていた、趣味の悪い薔薇の花柄のネクタイを締めた中年の男に目配せした。
「それでは始めます」
どうやら、この男が仕切るらしい。
佐々木という男の説明では、ドラマのオープニングシーンのように空港のロビーを闊歩するスチュワーデスたち、という設定で撮影をするという。
「ええと、じゃ、横一列に並んでもらえますか」
十人のスチュワーデスは、みな遠慮をして中央に来ようとしない。
(あら、それじゃ)
と、雪枝が真ん中に立つと、
「おい、佐々木君」
と、ディレクター・チェアから毛呂山が佐々木に声をかけた。佐々木が毛呂山に駆け寄って、何事かささやきあっている。佐々木は大袈裟に何度もうなずくと、小走りに雪枝たちの所に戻った。
「ええと、あなたとあなた、それからあなた」
そう言いながら配置換えをする佐々木。
佐々木の指示が、雪枝にも来た。
「あなたは、この右側にお願いできますか」
雪枝は、一番右手に追いやられた。
雪枝のかわりに真ん中に立ったスチュワーデスは、化粧をしなくても艶やかであろう頬をメイクで一層輝かせて、まっすぐカメラを向くよう指示された。
二、三人ずつまとまって、談笑をしている、という形をとらせた。
「あの、右側の方」
「あ、わたし?」
佐々木が雪枝に言った。
「ええ、手帳か何かお持ちですか?」

雪枝はバックの中から手帳をとり出した。
「これでいいかしら?」
佐々木は、事務的にうなずいた。
「はい結構ですよ。それを開いて、何か書き込んで下さい」
「は?」
「いえ、書いている風でいいんです」
雪枝は、真ん中の女の子がカメラを真っ正面から見て微笑んでいるのは仕方がない、と思った。が、残りの九人のうち、自分以外は悪くても顔半分はカメラに向かって談笑している中で、どうして自分だけが手帳に書き込むしぐさをしなければならないのか、と思った。
(これじゃ、どうしたって顔が写らないじゃないッ)
顔を写してもらおうとすれば、手帳を立てなければならない。しかし「名探偵ホームズ」ではあるまいし、余計おかしなポーズになる。
「それじゃあ、一枚いきます」
パシャっ、という発光音と共にフラッシュがたかれ、一瞬目をつぶって、
(しまった、つぶっちゃった)
と雪枝は思ったが、すぐに、
(あ、どうせ顔は写らないんだ)
と思ってほっとした。
(なにホッとしてるのよッ)
あわててもう一人の自分が声をかけたが、何回もたかれるフラッシュを浴びながら、雪枝は次第に何も考えなくなっていた。そして目線の先の手帳には、先月からのエステやダイエットの予定がびっしり書き込まれていた。
「エー、そんなのありぃ?」
向井登久子が怒りながら言うと、
「ありかナシかしらないけど、とにかくそれで終わり、よ」
と、やけ気味に雪枝は答えた。
「ア、ちょっとお兄さん、焼酎。レモンハイ。生レモン、たっぷり入れてよ」
雪枝は飲み干したジョッキをブラブラさせながら、バイトの学生にお代りを頼んだ。
向井登久子は、ホッケの干物に器用に箸を入れて、白身を雪枝の皿に取り分けてやった。
登久子は雪枝と同年だが、性格的に世話好きなのか、雪枝の姉のようなところがある。
「でもねぇ雪枝、私だって何度か応募したのに、一度も声はかからなかったのよ。とにかく、カレンダーに載るだけでいいじゃない。それに、一人だけ顔がわからないッていうのも、何かナゾめいていて、男心をくすぐるわよ」
取り分けられたホッケを口に入れながら、雪枝は
(こやつ、面白い事を言う)

と、アルコールの回りきった頭で感心した。
「たしかに、それは言える」
一度もカレンダーに出ていないスチュワーデスの方が圧倒的に多い。それに、見えそうで見えない、というのが、エロチシズムの淵源だと言うではないか。
となれば、これまで待ちに待った「王子さま」との出会いも、これがきっかけで起きる可能性は大、ということか。
「へぃ、お待ちッ」
頼んでいたレモンハイを、若いバイト君が持ってきてくれた。
「うーん、待ってたわよぉ」
雪枝は一体何を待っていたのか。王子さまかレモンハイか。いまこの瞬間はレモンハイの方がうれしい雪枝であった。

2

「俺を組織委員長なんぞにするから、いけねぇんだ」
早島伴次郎は、七十四歳にしては艶やかな面長の顔を民自党党本部・組織委員長室の天井に向けた。そしてタバコの煙を「プィー」と吹き出した。
医者から「自殺行為」とまで言われている喫煙だが、やめる気はさらさらない。死なば死ね、くらいにしか思っていない。それでも、きょうのような話し合いの場では、時折心臓が痛むのが気にはなる。
民自党の代議士として、当選十回。普通ならばとっくの昔に大臣になっているはずの早島伴次郎だが、大臣目前の当選六回、六十二歳の時に疑獄事件に巻き込まれ、無罪にはなったものの、ダーティーなイメージはその後の内閣に嫌われ、ついに今日まで一度も「大臣のイス」には座ったことがない。
「早耳伴次郎」、「寝業師伴次郎」と言われたのも今は昔。ポストにも、政局の表舞台からも遠ざかってずいぶんと年月が経った。
それが、たまたま党組織委員長の前任者急死を受けて、その前任者と親しかった早島伴次郎が組織委員長に押された。
組織委員長というのは、全国の党組織の管理や、党員拡張、それに選挙の際の候補者選定まで、やらねばならない仕事は多い。が、各都道府県の党組織の金や党員が払う党費は財務局、総裁選で大いに活用できる党員の名簿管理は総務局、派閥の力を拡大するのに一役買う党公認候補者選定などは幹事長室と、権限はすべて他の部署が握っている。
組織委員会は、単にそれらの下請け事務仕事で、面倒なだけの役職とされた。
そのため、誰もなり手がいない。

たいがいは、引退間近の議員の閑職で、実際には党の職員がすべてを切り回すというのがこれまでの慣例だった。

早島伴次郎も、次の選挙に出るかどうか、決めかねていた。それに、急死した組織委員長の遺言だ、と言われ、「それなら」と引き受けた。

ところが、ある事件をきっかけに、組織委員長はとんでもなく多忙になった。

民自党所属の参議院議員が、自分の票欲しさに党員獲得を各種団体に強制的に割り振り、そのための金を汚職で作っていたことが判明。

その、汚い金を出していた企業が、民自党内閣が鳴り物入りで議会に提出していた「国土新開発法案」で潤う大手ゼネコン四社であったために、上を下への大騒ぎ。

建設大臣更迭、党幹事長辞任、党の総務局長も財務局長も事実上の解任になって、早島伴次郎の組織委員会が実質的に党の運営を任される事になった。

それは、一度は権力の座を目指した早島伴次郎にとって棚からぼた餅の出来事だったが、困ったのは半年後に迫った衆議院選挙である。

民自党の岡邦男内閣はギリギリまで解散ナシで、衆議院選挙を行なうつもりでいた。それはそうだろう。いま解散すれば、国民から信を失った民自党は間違いなく支持を失い、悪くすれば与野党逆転にもなりかねない。

そんな空気を察してか、民自党の公認候補だった新人たちが、次々に公認を返上してきた。

このままでは、選挙が始まる前に民自党は崩壊してしまう。

そこで、なんとか有力な、選挙に勝つ候補者を探さなければならず、その実務責任者が、組織委員長の早島伴次郎ということになったのだ。

「だいたいよぅ、前の組織委員長が急死で、その遺言で俺を組織委員長に、てぇのは、おかしかねぇか」

早島伴次郎は、党首であり内閣総理大臣である岡邦男の側近議員たちを前に、文句を言った。

「いえ、それはおかしくありません。早島先生を信頼なさっていたから、遺言に書かれたんでしょう」

若い議員が言うと、

「おい、どうして急に心臓の動きがパッタリ止まった奴が、遺言を残せるンだ」

そんなことは、いまさら言っても始まらない。早島伴次郎も、自分が組織委員長になったのが前任者の遺言ではないことくらい、とっくに気がついている。しかし、今はそんなことでも文句を言いたくなるのだ。

「とにかく岡総裁は、次の選挙には『勝てる候補を』とおっしゃっています。民自党政権を継続する、つまり日本を繁栄させ続け得るかどうかは、早島先生の腕一つにかかっているのですッ」

半年後の衆議院選挙で、勝つための候補者を選定する責任をほとんど一身に背負わされたのが早島伴次郎だった。

実のところ、岡総裁も他の所属議員も、民自党が勝てるとは思っていない。もちろん早島伴次郎も思っていない。しかし、選挙で負ければ、その責任は誰かがとらなければならない。

一応、辞めた幹事長の後釜も決まったが、なんとこれが次期総選挙には立候補しない、引退議員という噴飯モノの人事なのだ。

党総裁は総理大臣で、これをクビにするのが一番手っとり早いが、権力者というのはどうしたものか、その地位をどんなことがあっても維持するという特性がある。

そこで岡総裁やその側近が考え出したのは、「選挙に負けたのは党が悪い、その責任者は幹事長だ」としたいが、肝心の幹事長は選挙に出ないから、実質的な次席者として組織委員長の早島伴次郎に責任を負わせ、自分は延命しようというのである。

「じゃあ聞くが、どっかに票を集めてくれる候補者がいるかぃ？。長島茂雄とか、高倉健とか、誰か首に縄でもつけて持ってきてくれるのかぃ？」

衆議院の選挙は、小選挙区で３００名、比例代表選挙で２００名の計５００名。

比例選挙では、個人の名前を書いてもその党の得票になるので、有名人を立てれば党の得票が増え、配分される議席も増える。各政党とも名の通った学者や芸能人を立候補させようと躍起になっているが、有名人とて判断力はある。人気のない、あるいはイメージの悪い政党から立候補して、落選でもしたら恥である。

スキャンダル続きの民自党から出たい、などという有名人はほとんど無に等しかった。

「とにかくここは、早島先生の腕の見せ所です。一つ、宜しくお願いしますよ」

岡総裁派閥の議員たちは、これで役目が終わった、と言わんばかりに、そそくさと組織委員長室を後にした。

灰皿に山盛りになった吸殻の上に、さらにタバコを押しつけてから、早島伴次郎は立ち上がった。

（俺も今度の選挙には出ないでおこう、と思ったが、あんな若造どもにバカにされたままで引き下がるのは、どうにも腹の虫が治まらん。一丁、やってみるか）

3

「ただいま、座席ベルト着用サインが点灯致しました。誠に恐れ入りますが、座席を元の位置に戻し、シートベルトをしっかりおしめ下さい」

篠ノ井雪枝が乗務する、札幌発羽田行き・東洋航空二〇三便は、出発から一時間ほどして乱気流に見舞われた。
（うん、きょうのはなかなかネ）
雪枝はスチュワーデス専用の座席でベルトを締めながら乱気流を楽しんでいた。
だいたい、遊園地でジェット・コースターを好むのは男性より女性が多いという。乗務歴も八年になる雪枝は、楽しみといえば乗客の中に好みの男性を見つけることか、乱気流でジェット・コースター気分を味わうくらいしかない。
（あら、きょうのは意外と長いわ）
もう十五分以上は揺れ続けている。
あまり揺れが続くと、乗客の中に嘔吐を催す人が出てくる。もちろん座席前のポケットの中に対応すべき耐水袋は備えつけてあるが、こうも揺れていると隣の座席の乗客にひっかけることも多い。
雪枝は反対側のドア付近に座っている後輩スチュワーデスに目で合図して、揺れが少し収まったところで立ち上がった。
と。
「すみません、ちょっと」
小声で雪枝に話しかけてきた男性がいた。
（まあ、いい男）
年の頃なら三〇半ば。清潔感あふれる長身の知的スポーツマン、つまり雪枝のタイプ。雪枝の営業スマイルにも力が入る。
「はい、何でございましょうか」
まだベルト着用のサインが消えていないのだから、勝手に立ち歩かないよう注意すべき所であったが、現金なものである。
「ちょっと、よろしいでしょうか」
と男は手招きして、ギャレーの中に雪枝を入れた。
どうやら、ジュースが欲しい、というたぐいのことではないらしい。
「私は、民自党の早島伴次郎議員の秘書をしております小野寺と申します。実は早島代議士もこの飛行機に乗っておりまして・・・」
それは承知している。前方の「グランド・クラス」という、国際線で言うところのファースト・クラスに、一人国会議員が乗る、ということを、搭乗前のブリーフィングで聞いていた。
「その議員が、ちょっと容体を悪くしまして」
小野寺の話では、たまに発作で呼吸困難になる時があるという。
いまもその症状なのだが、このところ全く健康そのもので、たまたま今回の出張には薬を携行していなかったのだと、小野寺は言った。
「で、出来れば手当てをしたいのですが、あまり騒ぎを大

きくしたくないので、なんとかなりませんか」
そういうことなら、と、雪枝はすぐにチーフ・パーサーに話をし、自分もグランド・クラスの客室に入って行った。
気圧の差で心臓に負担がかかる、ということはよく起きる。状態がひどくなければ、備えつけの薬を飲んでもらって、それで一件落着。
が、雪枝が早島伴次郎を見た時、そんな甘い処置ではどうしようもないというのがすぐに見てとれた。
すでに痙攣が始まり、泡を吹いている。
「あ、これは・・・」
雪枝はまっすぐ一般客室に戻ると、大声で叫んだ。
「ただいま急病人が出ました。お客様の中で、お医者さまはいらっしゃいますかっ。どなたか、お医者さまはいらっしゃいますでしょうかっ」
すぐに周りのスチュワーデスたちも手分けをして呼びかけたが、誰も返事が無い。
三〇〇人ほども乗っていれば、一人くらいは医者がいるものだ。が、今日に限って医者がいない。
雪枝は駆け足で早島伴次郎の元に戻ったが、容体は先程より悪化している様子である。
そして、「アー」という短い叫び声の後で、早島伴次郎は急に動かなくなってしまった。
「あ、先生、センセイッ」
「どいてッ」
雪枝は咄嗟に、早島伴次郎の上にまたがると、マウス・ツー・マウスで人工呼吸を始めた。
「スー、ハー、スー、ハー」
続いて心臓マッサージ。
「イチ、ニッ、サンッ、イチッ、ニッ、サンッ」
訓練でやったことは何度もあるが、実地は初めてである。どれくらい続けたであろうか。
「うぐッ」
と言って、白目を剥いていた瞳に生気が戻り、早島伴次郎は息を再開し始めた。
「センセイッ」
秘書の呼びかけに、キョトンとしながら眼前のスチュワーデスを見つめる早島伴次郎。
必死の形相でそれを見つめる篠ノ井雪枝。
テレビドラマの一場面なら、老政治家に跨がったスチュワーデス、という図は単に滑稽なだけだったろうが、この場に居合わせた誰もが、ただ呆然と、そして徐々にほっとした空気が流れた。
「よかったですわ」
早島伴次郎はまだ口はきけなかったが、軽くうなずいてみせた。
周りが冷静さを取り戻す中で、雪枝は我に返って
（こんなジイさんに人工呼吸をしてしまった・・・）

と、息を吹き返してくれたといううれしさの反面、妙に悲しい気分にさせられた。
これも仕事のうち、と思えばいいのだが、カレンダー・ショックから未だ完全に立ち直っていない身としては、何とも言えない心持ちであった。
一方の早島伴次郎は、意識が朦朧としている時、つまり雪枝が伴次郎にまたがって心臓マッサージをしていたあたりで、目の前に女神が降臨してきたような錯覚に襲われた。
(あ、女神様だ。おれもいよいよ召されていくのか)
しかしその女神様の動きが激しい。優しく手をとってあの世に、という雰囲気ではとてもない。
よく顔を見てみると、恐ろしい形相だ。
(やや、これは鬼か悪魔か)
地獄なんぞに連れて行かれてはかなわん、と思った瞬間に意識が戻った。
「うぐッ」
と言ったのは、目の前に夢のはずの鬼の形相がまだいて、自分を押さえつけていたからである。
羽田までの二時間ほどは、安静にしていた。
一時間ほど横になったら、疲労感はまだあったものの、大分楽になった。
間もなく羽田に到着、という機内アナウンスが流れて、早島伴次郎は秘書の小野寺眞に支えられながら、雪枝の所に来た。
「さきほどは、本当にありがとう。まだお名前を伺っておりませなんだ」
雪枝もすでにショック状態から抜け出していて、普通に営業スマイルを振りまきながら対応した。
「篠ノ井雪枝と申します」
どちらかと言うと、秘書の小野寺の方に向かって言ったのだが、小野寺はどうもそのあたりは鈍い作りであるようだ。
「そうか、しののい、ゆきえさんか。ふーむ。またご連絡をさせて戴きます。本当にありがとう」
いえ、大したことではございません、と言って雪枝は早島伴次郎に席に戻ってもらった。
雪枝も新聞は読む。
早島伴次郎というのが、かつて汚職事件に関係して逮捕されたことも、またダーティーな政治家らしいという噂も聞いたことがある。しかし自分がいま目にしている老人は、いくら命の恩人とはいえ、まだ辛い身体を無理して運びながら慇懃に礼を言いに来る、律儀で真面目な政治家にしか見えなかった。
よさそうにしか見えない、というのが、政治家の政治家たるゆえんなのかもしれないが、それにしても八年間もスチュワーデスをしていれば色々な業種の有名人に出会う。たいがいは世評とは裏腹の、傲慢で我が儘な人間

が多い、というのが、雪枝の経験上言えることだ。
しかし、早島伴次郎は、そうではなかった。
(ま、一お客様よね。そう気にする事はないわ)
と思いつつ、どこか気持ちに引っかかるものがあった。
雪枝が二ヶ月後の人事異動で、地上勤務を言い渡されたのは、早島伴次郎との出会いがあった翌日のことである。
いいことをした時というのは、何も報われなくても何となくうれしいものだ。まして人の命を救ったとなればなおさらである。
その日、乗務前のブリーフィングを終え、しばしの休息をとっていた雪枝は、運航管理部長に呼ばれた。
(お、これはやはり国会議員の命を救ったということで、臨時ボーナスでも出るかな?)
と、ウハウハ気分で部長室に入った。
運行管理部長は、開口一番、
「いやー、昨日の件、聞いたよ。よくやってくれた。早島先生からウチの社長にも直接電話があって、よくお礼を言っておいてほしい、ということだった」
雪枝は、
(ほれ来た!)
と、次の言葉を待った。
「で、まあ今回の件も含めて、君と人事異動の件で相談をしたいと思ってね」
(は?、異動?)
雪枝が首を傾げると、
「いやなに、君のような優秀な人材は、これから人を育てる側に回ってもらいたいと、これは人事本部から特にご指名でね。いいポストを用意させてもらおうと思うのだがね」
いいポスト?。つまり、
「地上勤務ということですか?」
「そう。まあまだ二カ月後のことだけどな」
と言いながら運行管理部長は、何か不服か、という顔で雪枝を見た。
「あのー、出来れば乗務を続けたいのですが・・・」
と言うと、すかさず、
「おう、結構だよ。それじゃ、第三国際旅客部に回ってもらう」
(第三国際旅客部!)
国際線でも、先進国ではなく、中東やアフリカなど、途上国線を主とした路線で、英語だけではなく第二外国語としてフランス語が必須になる職場だ。
ただでさえ英語が苦手で国際旅客部に配属にならなかった雪枝が、いまさら、それも二カ月後にフランス語まで必須の職場になど、行ける訳がない。
「し、しばらく考えさせて下さい」

と答えるのが精一杯だった。
その夜、向井登久子を相手に、またしてもやけ酒を飲む雪枝である。
「冗談じゃないッてのよ、なんで私がいまさら『ボンジュール』なのよッ。ふざけんじゃないわよッ」
向井登久子は相変わらず、焼き魚の肉をキレイに取り分けながら、
「でもさあ、新人教育っていうのも、やり甲斐があるんじゃない？。あんた、意外と後輩から慕われているじゃない」
確かにそれは事実だが、別に慕われている訳ではない。自分が先輩たちにいびられたのが嫌で、同じ思いはさせないように、普通に振る舞っているだけだ。
「実はね、」
登久子が言った。
「私も、来月から『東洋楽園観光』に出向だって」
「え、『オバ捨て山』？」
「そう。私もリ・ス・ト・ラ」
東洋楽園観光は、東洋航空と楽園ホテルグループが共同で設立した観光会社だが、別名・「オバ捨て山」と言われている。スチュワーデスを引退した者が、観光ガイドとして大量に再雇用されていることで有名な会社なのである。
「雪枝は教育指導の会社に行くんだから、まだマシよ。それにさあ、雪枝には『カレンダー』があるじゃない。あれを見た男が、玉の輿でお迎えに来てくれるわよ」
雪枝はふと、早島伴次郎の秘書・小野寺眞を思い出した。行動よりも頭が先に行く感じではあったが、頭より行動が先に行く雪枝としては、魅力を感じる。
（小野寺さんが、あのカレンダーを見たら、何て言うかしら）
「あっりゃあ？、誰かのこと、考えてるなあ？」
向井登久子に冷やかされて、「そんなことない」と必死に言い訳する雪枝であった。
（そうだ、カレンダー。あれがあれば、また私の道も開ける）
雪枝は、カラになったジョッキをいつものように振り回して、
「そこのお兄ちゃん、レモンハイ、生レモンたっぷりでお願いよっ」
と叫んでいた。
どうも頭のつくりが単純にできているらしい。
翌朝。
平日ではあったが、久しぶりのオフで、お昼まで寝ていようと決め込んでいたのだが、電話が鳴り響いて起こされた。
「ふぁい、篠ノ井れす。はい？、どなた？」

電話は、運行管理部の担当課長からだった。
（とにかくすぐに集合してくれ）
いえ、きょうはオフです、と言ったら、
（緊急事態だから、すぐに来い）
と言われて「ガチャン」と電話を切られた。
まったく何だ、という気分で二日酔いの頭を掻きむしりながら、時計がわりのテレビをつけた。
「ん？」
見慣れた風景が映っている。
羽田空港だ。
テレビの音を大きくした。
「本日未明、過激派と見られる数名の者が、羽田空港に建設中の新・ターミナルビルに爆発物を仕掛け、爆破した模様です。それでは現場から伝えてもらいます」
「なに？」
なんと、羽田空港で爆発騒ぎがあったというのだ。
とにかく雪枝は急いで支度をし、羽田に向かった。
東洋航空の運行本部では、情報がだいぶ集まり始めていて、いづれもが過激派の犯行を裏付けるものばかりだった。
「いいか、不審物、不審人物について、これまで以上の注意が必要になる。各自十分注意して業務に当たるように」
運行管理部長の訓示が終わり、解散になった。
緊迫した雰囲気の中ではあったが、業務は淡々と進んで数日が経った。
雪枝は乗務を終え、運行管理部を出ようとした時、広報のカレンダー担当の女性から電話をもらった。
嫌な予感がした。
「実はね、先日の新・ターミナル爆破。あれは、たしか篠ノ井さんたちがカレンダーの撮影に使った場所でしょ。でね、爆破された場所をカレンダーに載せるのはどうか、っていう話が出て、残念だけど、今年はあのシーンだけは抜く事にしたの」
えっ、と思いながらも、かわりに新たな撮影をするのか、と尋ねると、
「それがね、毛呂山先生、相当撮り溜めしていたらしくて、『その必要はない』って言うのよ。だからどのシーンが使われるのかわからないけど、あなたが載る時はお知らせするわね」
と言われて電話は切られた。
（カレンダーに載らない）
雪枝はすぐにそのことを理解した。なぜなら、少なくとも雪枝はターミナル以外で撮影はされなかったからである。
電話を切り終えると、待ちかねたように運行管理部長から内線がかかってきた。
（どうだね、決心はついたかね）

もう少し待って欲しいと言って、雪枝は受話器を置いた。

（運行管理部長は、私を自殺に追い込みたいの？）

異動までの猶予はあと一カ月ちょっと。

雪枝は、何とも言えない敗北感に打ちひしがれていた。

4

「つまり何か。岡総理は、アメリカと航空取引をしたってことか」

早島伴次郎は、自分より六つ年上で、戦時中は陸軍中尉だった民自党代議士の影山平八郎に言った。

「間違いない。私の情報では、そういうことだ」

影山は戦時中、情報将校としてスイスで活動し、戦後は情報機関再建のため、ＧＨＱと交渉をし続けた男である。それゆえか、影山の情報網は米ソ冷戦時代は随分役に立ったが、今ではほとんどの情報源が現役を退き、あまり情報が入らなくなった。

それでも、今度の話は真実味があった。

経済状況が悪化の一途をたどる日本。

岡総理は緊縮と財政再建を掲げた大海内閣の後を受けて組閣をしたが、その政策は「アンチ・大海」で、公共事業で大型飛行場の建設などをブチ上げて、内閣成立直後は五〇％代の支持率を得ていた。

しかし、結局経済は活性化されず、アジアのハブ空港を目指した羽田拡張も、先日の過激派によるターミナル爆破で頓挫しそうになっている。

が、ここにアメリカの陰がちらついてきた。

アメリカは、いつまでたっても経済再建の出来ない日本を見限って、中国と韓国を中心にしたアジア・太平洋貿易圏構想に踏み出し、手始めに日本の航空会社をアメリカが買収をする、というのだ。

「しかもだ。買収すると言ったって、要は日本の航空会社が持っている国際路線の枠だけを頂戴して、日本の従業員なんぞ使わずに、全部自前でやるつもりだ」

「なぜそれを岡は了承したんだ。取引材料は何だ」

「再選だよ。アメリカはもし岡がこいつを呑めば、つまりアメリカ企業による日本の航空会社買収を邪魔しないと約束すれば、１０００億ドル、十兆円規模の経済支援を行なう、と言ってきやがった。いま十兆もあれば、景気刺激と買収にはもってこいだ。岡は濡れ手に粟で、金と票をアメリカからもらえる、という寸法だ」

真珠湾奇襲作戦の時には、諜報戦の最前線にいた影山の話だから、アメリカを悪く言うのは割り引いて聞かねばならない。しかし、事実だけとり出してみても、これは半端なことではない。

「影さんよォ、おそらくアメリカはそれだけでは済まさねぇだろうよ。もっと日本に食い込む気があるはずだ。

そうでなけりゃ、十兆円はデカ過ぎる」

おそらくな、と影山も相槌を打った。そして

「しかし伴ちゃんよ。十兆円でなるほど公共事業にばらまく金は出来るが、それで国民の支持を得て選挙に勝てると思うかね」

と尋ねた。早島伴次郎は、

「まず、あり得ねぇな」

と言った。

仮に、航空会社がアメリカに買収されたとする。

次に、日本政府がそれについて、何ら抵抗を示さなかったとする。

そして、アメリカから十兆円の資金援助。

「ガキにでもわかる筋書きだ。あんまり国民をバカにしちゃいけねぇな」

それに、半年後の衆議院選挙までに出来る仕掛けではない。

それじゃあアメリカの狙いは。

「おそらく、次の選挙で岡内閣は潰れ、民自党は空中分解、と読んでやがるんだろう。次に、手垢の付いていない新党を、官僚と野党と民自党の一部を取り込んでつくる。政権基盤は脆弱で、経済も弱り切っている。新党はアメリカに頼るしか手がない。海千山千の民自党議員を片っ端から落選させて、自分の言いなりになる若造どもを政権の座に就かせる、という線じゃねぇか」

なるほど、と影山はうなずいた。

「だいたい伴ちゃんよぉ、国民は年寄を目の敵にして、何かと言やあ『若い指導者』と来る。そんなに若いのがいいんなら、いっそのこと、小学生にでもやらせりゃいいんだ」

老人がいつまでも最前線にいることは伴次郎も是としないが、アメリカがそういう若さを求める日本国民の心情を逆手にとって、ベテラン議員の追い落としを考えるというのはあり得る話だった。

（役者が上だなあ）

おそるべきシナリオは、国民の知らない間に進められようとしていた。

篠ノ井雪枝は、客室乗務員を諦めて、人事部へ行くことを承諾した。

「それじゃ、早い方がいいなあ」

と、正式辞令が出る前に、一週間ほど研修の名目で、人事部に派遣された。

別に何をするというのでもない。

人材教育に関する本を与えられ、それを朝から晩まで読み続ける毎日。

最終日が近くなってから、人事部長に呼ばれた雪枝は、驚くべきことを言われた。

「教育部門を別会社として独立させる」

というのだ。
雪枝が人事部に移ると、自動的に独立した教育部門に出向させられ、一年後には転籍になる、というのである。
「はあ?」
つまり、黙っていても一年後には東洋航空にいられなくなる、というのだ。
航空会社はどこも、隠密裏にリストラを開始していた。アメリカの資本が日本の航空会社を乗っ取る、という噂が立ち、どうやらそれが本当らしいということで、各社とも業績アップと負債圧縮を目指して、極端なリストラを始めたのである。
もちろんそんな内情は雪枝の知る所ではない。
(もう、やってられんわ)
上と戦う気力も失せて、雪枝は最後一カ月の乗務に就いた。

「おい、小野寺クン」
早島伴次郎が秘書の小野寺に「クン」を付ける時は、だいたい疲れて機嫌の悪い時である。
「はい、何でしょうか」
「腹が減った。メシを食うぞ」
羽田空港のロビーで伴次郎はしかめっ面をしながら言った。伴次郎には子どもっぽいところがあって、空腹になると機嫌が悪くなる。
「代議士、それでは党本部に遅れる旨、電話をしてきます」
「おう、そうしてくれ」
座敷に座った伴次郎は、手拭きで顔をぬぐいながら溜め息をついた。
「篠ノ井さん、篠ノ井さんですよね?」
羽田空港で乗務を終え、帰宅するところを後ろから呼びかけられた。振り向くと小野寺眞が立っていた。
「制服の時と、全然雰囲気が違うんですね」
「あら、どっちが素敵かしら?」
何だかスレた言い方だわ、と少し後悔したが、小野寺が「どっちも素敵です」と間髪入れずに言ってくれたので、雪枝はうれしくなった。
「よかったらお食事でも如何ですか?」
と更にうれしい一言。「よろこんで」と申し出を受けて小野寺の後をついていくと、羽田空港の中でも一番高い和食の店に入って行った。そして座敷の方に小野寺が向かっていくと、その先には早島伴次郎が、「やあ」と言って手を上げていた。
(アッチャー、おじいちゃん付きかあ)
まあ、嫌いなタイプじゃないし、一人で食べるより小野寺さんもいるし、と自分に納得させて、伴次郎の前に座った。

「でも、代議士。急ぎませんと『候補者選定会議』に間に合いませんが」
「いいッ、構わんッ」
党役員が集まって、各々が探してきた候補者について報告する会議なのだが、次の選挙には出馬しない幹事長や議席を持たない総務局長などがメンバーである。ベテランの人脈豊富な自分が靴をすり減らして候補を探しても見当たらないのに、どうしてあんなボンクラ連中に、という思いが伴次郎にはある。
「でも代議士、候補者の件は、」
「うるさいッ」
怒鳴ってから伴次郎は、ちょっと言い過ぎた、と反省をした。小野寺も伴次郎と一緒に日本中を駆けずり回っているのだ。伴次郎が候補者選定で手間取れば、伴次郎自身の選挙準備も遅れる。悪くすれば落選して失職もあり得る。そうなれば小野寺も職を失うのだ。小野寺も必死なのだ。
「いや、ちょっと言い過ぎた。すまん」
素直に謝られて、小野寺の方が恐縮した。こういう所が、伴次郎の魅力ではある。
(代議士、よほど腹が減ってるんだなあ)
「わかりました」
と言って、二人はターミナルビルの中にある和食屋に入った。
「たまたま篠ノ井さんが通られたので、お声をかけました」
小野寺が伴次郎に言った。
「早島先生、ご無沙汰してます。その後お加減は如何ですか?」
「お蔭で、大分いいよ。いや、命の恩人にお礼するにはちとシケておるが、まあ勘弁だ。さあ、楽にして」
思わぬ来客に、伴次郎も機嫌がいい。
このところ、民自党の衆議院候補選定には頭を痛めていて、とにかく機嫌が悪かった。
頭を痛めている、というより、「どうにもならない」と言った方が正しいであろう。
有名人、芸能人はもとより、財界、二世、地方議員、もう手当たり次第に口説きまくった。が、収穫はほとんどゼロ。
負けると判っているいくさに出て行くほど、最近の日本人はバカではない、ということらしい。
しかし。
もしこのまま新人の候補者ナシで現職の居残り議員だけで戦うとしたら。そんなことは考えたくもないがしかし、もしそうなれば、公示と同時に民自党の衆議院における過半数割れが確定する。
政権基盤は脆弱、不安定な連立政権で思い切った政策は打てず。それより何より、選挙責任者としての早島伴

次郎のクビがとぶ。
こうなればなりふり構わず、過去に汚職事件に関係したとされる県会の議長に出馬を要請したが、そんなダーティーな議員からも断られた。
引退したかつての議員仲間を誘った時には、こう言われた。
(伴ちゃん、政治をちょっとでも知ってる人間なら、今の民自党からは出んよ。まあ民自党から出てくれて、しかも当選する可能性があるとすりゃ、多少見栄えのする若い素人の女だな)
かつての仲間からそう言われた時は、新規オープンする安手のキャバレーじゃあるまいし、素人の見栄えのする若い女なんて、と思った。
が。伴次郎は小野寺が雪枝を連れて来た時、「ハッ」としてこの話を思い出した。
(多少見栄えがする、若い政治素人の女・・・)
伴次郎は雪枝と他愛もない世間話をしながら、雪枝を品定めした。
(顔は十人並み以上、か。年も、まあ政治家とすりゃあ十分若い部類だ。しかも政治はシロウト。ふむ、もしかしたら)
伴次郎は、刺身をつつきながらさりげなく、
「時に篠ノ井さん。あなた、政党はどこを支持しておるね?」
と尋ねてきた。
伴次郎にすればもちろん別の思惑があったが、雪枝は単に世間話の延長のつもりで、軽く答えた。
「早島さんには悪いけど、わたし、衆議院選挙の時は久瀬俊太郎に投票しているの」
「クゼ?。ああ、立憲クラブか」
立憲クラブは、かつて民自党にいた一部の議員が民自党を出て作った保守系の小政党である。
「だって、私の選挙区って、民自党は水城洋一なのよ。キャバレー王の」
都心の選挙区で、東京を中心に30店舗のキャバレーや飲食店を経営する水城洋一は、民自党の中でも異色の代議士で、選挙運動の時にウグイス嬢はキャバレーのホステスを使っていると噂されている。
「それって、本当なんですか?」
「いや、選挙には使っておらんよ。ただ、秘書にはそういう出身のモノがおるがね。しかし奴はなかなか男前だろう。どうして女性に人気がないのかのう」
「それは当然よ。だって、水城さんて、なんか戦前のハンサム男優みたいで、気持ち悪いじゃない」
「『戦前のハンサム男優』か。こりゃ傑作だな、ハハハハハ」
横で神妙にやりとりを聞いていた小野寺まで笑い出した。

「まあ、小野寺のような男の方が、現代女性にはモテるんだろうな。ところで」
早島伴次郎は、雪枝が典型的な保守系の無党派で、しかも選挙には行っていることを聞き、(合格だ)と心の中でハンコを押した。そして今度は真剣な眼差しで雪枝に再び問いかけた。
「あなた、政治家になるつもりはないかね」
「は?」
ポカン、と口を開けている雪枝だったが、そんなことはお構いなく、伴次郎は続けた。
「次期衆議院選挙で、我が民自党は、一般から候補者を募集することにした。もちろん選挙にかかる金は用意する。選挙は比例代表で出てもらう。選挙活動と言っても、テレビでしゃべったり、選挙区の候補を応援したりする程度で、まあいっぺん、人生経験を積むという意味でも、面白いと思うのだが」
候補者公募の話はでっち上げである。
が、この際そんなことはどうでもいい。組織委員長が公募をする、と言えば、その瞬間に公募が決まるのだ。
言われた雪枝の方は、藪から棒に、いきなり選挙に出ろと言われても、と困惑を隠さなかった。
「そりゃそうだろうよ。だが、もしいま社会や職場に不満があって、何とかそれを直したいと思うのなら、ちゃちな小細工をしても人生は変わらんさ。もっと大きいところから変えなければ、何も変化はせんし前進もせん、ということだ」
こういう時に、「国家の政治」などという言葉を使うと、だいたいシロウトは逃げ出す。そこで伴次郎は「社会や職場」という言葉を持ち出した。
三〇前後の女性が、事の是非は別にして、職場や社会に不満を持っていない道理がない。もちろん、雪枝が直面している状況を、伴次郎はこの時点では何も知らない。
「でも、専門知識や経験が」
「そんなもの、役に立つかい。要はバランスだ。いま民自党がおかしくなっているのも、経験や知識の豊富な連中ばかりが集まったおかげで、世間との常識が乖離しちまったことによるんだ」
「カイリ?」
「つまり、ギャップが生まれちまった、ということだ。経験や知識は大切だ。だが、政治には勘と見通しと純粋さが必要だ。特に変革を求める時というのは、こいつが揃っていないとダメなんだ。それには、色に染まっていない方がいい。どうだ、やってみんかね」
伴次郎にしてみれば、「政治は経験がモノを言う」という原則に変更を加える気はサラサラ無い。だが、経験が豊富になればなるほど、純粋さを失うのも事実だ。だから雪枝のような人間を党に入れて、活性化を図りたいというのは、嘘ではなかった。

「はあ」
雪枝にしてみても、最近の出来事は、生まれて始めて自分の人生が正しかったのかどうか、振り返るきっかけになった。会社のリストラ対象者になって、はじめてわかった組織の理不尽さ。新ターミナルが爆破されて、それがどんなに正当な理由があるにせよ、絶対に納得できない暴挙だということ。もちろん、それによって雪枝のカレンダー掲載が消えた件は大きいが。
とにかくここ数カ月間だけをとってみても、早島伴次郎が言っていることが身に沁みる。
会社の中で、小利口に動いても何の解決にもならない。もっと根本から変えなくては。
(いやいや、ちょっと待ってよ。私、何考えてるの?)
雪枝は我に返ったように首を横に振った。
「や、やっぱり私じゃ」
と言いかけたところで、隣でやりとりを聞いていた小野寺も、
「篠ノ井さんなら、絶対に適任です。どうか、お願いできませんでしょうか」
と、真正面から雪枝を見つめて言った。
(み、見つめられても・・・)
意識している男性から熱い視線を送られて、ついドキマギしてしまう雪枝。それを見てさらに小野寺は畳みかけた。
「私たちと一緒に、戦って戴けませんか」
(た、戦う? 小野寺さんと一緒に? ずっと? いや、わたし、何考えてるんだろ)
伴次郎は、どうせダメもとだ、と思いながらも、一縷の望みを託した。
「返事は急がんよ。今月一杯が候補者選定の申し込み締切りだ。それまでに声をかけてくれ」
そう言って、席を立った。
(今月一杯・・・)
雪枝の客室乗務員としての勤めも今月一杯。
来月には、関連の別会社に事実上の再就職ということになる。
伴次郎は、「じゃ、よろしく」と言って雪枝と握手をし、ターミナルを後にした。
雪枝は空港からの帰り道、歩きながら考えた。
(私の未来に何が待っているの?。社員教育?。一日中教育関連の本を読んで、気がついたら四〇歳?。たぶんその前にクビだわね。それじゃ、寿退社?。誰と?。確かにお見合いの話は来たけれど、三〇になったらパッタリ。たまにある話は四〇過ぎのバツイチとか五〇で初婚とか。五〇で初婚の方がちょっと恐いわね。いや、そうじゃなくて)
雪枝は、政治家になった自分を思い浮かべてみた。

スーツをビシッっと着こなして、颯爽と赤絨毯を踏む姿。と、ここまではOK。
でも、
「篠ノ井議員、行政改革についてどうお考えですか?」
マスコミからマイクを向けられて、
(うーん、わからん)
と立ち往生する姿。
やっぱりダメか、と思いつつ、自分の部屋にたどり着いた。そうだ、登久子に電話してみよう。
(はい、もしもし、向井です)
「あ、わたし、雪枝。寝てた?」
(うんにゃ、夜九時に寝るほど健全じゃないわ)
「あのさあ」
と言って、雪枝はきょうの出来事を話した。
(あんた、バッカじゃない!)
「そうだよね、政治家なんてね」
(じゃなくてさ、選挙に出たって、当選する訳ないじゃん)
ん、そうか。確かに言えてる。
(だいたい早島伴次郎が、何であんたみたいな政治音痴を候補にするのよ。かつがれてるのよ)
「そうだよね。そうそう。じゃ、明日断るわ」
(ちょっと待って。どうせなら、驚かしてやりなさいよ。向こうは冗談のつもりで言ってるんだから、こっちが本気で「出ます」なんて言ったら、ぶったまげるんじゃない?)
それもそうだ。担がれてこんなに悩まされたのだから、お返しに向こうをギャフンと言わせてやろう。
「登久子、ありがとネ」
担がれたのは腹が立ったが、しかし「やります」と言った時の早島伴次郎の顔を思い浮かべると、自然に笑いがこみ上げてきた。
(ヒヒヒ、見てなさいよ。三〇女をバカにすると、恐いんだから)
その夜、雪枝は自分が政治家になった時の夢を見てうなされた。
「うーん、ウーン」
お蔭で翌日はオフだというのに、ずいぶん早く目覚めてしまった。
(ああ、寝起きの気分の悪いこと)
まあいいや、早く早島伴次郎の仰天した声を聞きたいわ、と思いなおして、午前九時に議員会館に電話を入れた。
「早島伴次郎センセイの所、お願いします」
お待ち下さい、という交換の声からすぐに、早島事務所につながった。
(ハイ、早島伴次郎事務所でございます)
男の声だった。

「あのー、私、篠ノ井雪枝と申します。東洋航空の」（あ、ハイッ、小野寺です。どうも昨日は）
「いえ。あのー、その昨日の件なんですが、」
（代議士おりますので、ちょっとお待ち下さい）
ヒヒヒ、ジィさん、びっくりするぞお。
（もしもし、早島です）
「あ、篠ノ井でございます。昨日はごちそうになりまして、ありがとうございました」
（いえなに。それで、ご決心はつきましたかな？）
「ハイ。喜んで候補者選定に応募させて戴きます」
少し間があった。ジィさん驚いてる、驚いてる！
（ナニッ、）
やった、仰天してる！
（いやー、ありがとう！。さっそく今日にでもどこかでお会いしたいのですが）
なに？
「え、いま何と」
（詳しいお話しをしたいので、宜しければお時間を。そうだ、できればご足労でも事務所に来て戴けると助かるのですが）
どういうことだ。
敵（？）は驚いている。が、喜びに興奮している、という風だ。もしかして、私を担いだのではなく、本気だった、ということ？

雪枝は、思わず「はい」と返事をして電話を切った。（どうする？、まだ間に合うかもよ。「いまのは冗談でした。ゴメンナサイ」って言えば、何とかなるかも）すぐに再び受話器をとって電話をかけたが、小野寺も早島も出かけてしまったという。
（どうせ今日会うのだから、その時に謝ればいいや）
そう思って、受話器を置いた。

雪枝は議員会館の受付で面会票に記入をしてから、エレベーターで七階に上がった。
奥から二番目が早島伴次郎の部屋だ。
代議士によっては、部屋からお客があふれていて、入りきらずに廊下に並んでいる所もあったが、早島伴次郎の部屋に来客はおらず、静かなものだった。
（あら、意外ね）
雪枝はそう思ったが、早島伴次郎が赤坂に個人事務所を持っていて、お客のほとんどがそちらに行くということを知らなかった。議員会館は面会票を記入するから、誰がいつ会いに来たのか全部わかる。それでは具合が悪い場合もあるので、熟練した議員たちはみな、外に事務所を構えるのである。
「お邪魔します」
入って右手に小野寺眞のデスクがあり、さわやかな笑顔で迎えてくれた。

「お待ちしておりました」
左手には、学生らしき男性一人と、中年の感じのいい女性が一人、立ち上がって頭を下げてくれた。
「篠ノ井でございます」
雪枝は仕事がら、挨拶には慣れている。丁寧に頭をさげると、
「さすがに、お美しいですわ。代議士がお目をつける訳ですわ」
中年の女性秘書は草地陽子。
何だか殿さまに見初められて大奥に入る町娘のように言われて、多少気分は悪かったが、草地陽子の厭味のない笑顔で讃えられると、何となく素直になってしまう。
その隣で、
「よろしくお願いいたします」
ペコリ、と頭を下げた学生風の男は早島太郎。伴次郎の孫だという。
自己紹介の声が聞こえたのか、奥の部屋から早島伴次郎が出てきた。
「さあ、どうぞ」
早島伴次郎は手招きして、雪枝を部屋に入れた。
ニコニコしていると、早島伴次郎は好々爺のように良い人に見える。何となく心が痛んだが、仕方がない。
ソファーに腰掛けて、雪枝は開口一番、
「ゴメンナサイッ」

と言って頭を下げた。
「まさか、早島先生が本気で私を候補者にするおつもりがあるとは思わずに、冗談で承諾してしまいました。お許し下さい」
怒鳴られる、と思った。
が、早島伴次郎は、タバコに火をつけて「プィー」と煙を天上に吹き上げると、
「あなた、来月から人事異動だと聞きましたが」
と意外なことを口にした。どうしてそれを、という顔で雪枝は早島伴次郎を見た。
「私は東洋航空の稲垣社長とは、ちょっと因縁がありましてね。昔一度だけ、稲垣クンの手伝いをしたことがあるんです」
伴次郎は、面長の顔をペロリ、と右手でなでながら続けた。
「かつて稲垣君は運輸交通省で航空課長をしておった。その時、彼の部下がAという航空会社から賄賂を受け取ってね。運輸交通省としては内々に処分しようとした。つまり依願退職だ。ところがこの男、何を思ったか上司である稲垣君を脅してね。『自分をクビにするなら、航空課の内情を暴露してやる』と。稲垣君は困ってね。というのも、部下が金をもらったAという航空会社とはライバル関係にあった東洋航空から、稲垣君も金を受け取っておった」

そんなことがあったのか、と雪枝は驚いた。
「でもね、すぐに解決したんだ」
思わず、「どうしてですか?」と雪枝は尋ねた。
雪枝の頭には一瞬、ギャング映画の一場面が浮かんだ。言う事を聞かないバンドマスターに、マフィアの親分がピストルを突きつける、という所だ。
「簡単さ。部下には運輸交通省を辞めてもらった。ただし、交通管理財団という特殊法人に、向こう十年間の理事長就任を条件にしてやった。彼は賄賂で戴いた金と退職金と、ひまな役職を手に入れた、ということだ」
その後、稲垣は航空課長から航空局長になり、審議官を最後に運輸交通省を退職して東洋航空に天下り、東洋航空の社長になった、ということである。
つまり、東洋航空現・社長の稲垣徳郎の官僚時代、その苦境を救ったのが早島伴次郎ということだ。文脈から言って、稲垣が東洋航空社長になったのも、もしかしたら早島伴次郎の力かもしれない。
だから、東洋航空の内情は伴次郎に筒抜け。
一スチュワーデスの異動情報くらいは朝飯前、ということらしい。
伴次郎にしても、立候補を誘った以上、候補者を調べておく必要はある。たまたま知り合いだった稲垣徳郎を通じて情報を入手したのだ。
「そこでだ。君に聞きたいのだが、なぜ君は地上勤務、それも別会社に転籍になると思うかね」
ずいぶん答えにくいことを聞く、と雪枝は思ったが、
「それは会社が私を必要としていない、ということでしょう」
と思い切って言った。こんなところで格好をつけても仕方がないのだ。
「違うな」
早島伴次郎はタバコを灰皿に押しつけて、続けた。
「おかしいと思わんかね。君の同期で残っている諸君は、いまどうしておるかね」
あっ、そういえば、と雪枝は思った。
向井登久子は、「オバ捨て山」、じゃなくて、東洋楽園観光に出向だが、いずれ転籍になるのは目に見えている。同期の何人かも、同じような話を耳にしていた。雪枝はそれが単に、年を取った者に対する会社のリストラだろうと思っていたが、確かに腑に落ちない点がある。こんな一時期に集中して、しかも異動ではなく事実上の退社をさせるのは異常な事態だと思った。
「おかしいだろう。日本の組織は民間だろうが官庁だろうが、昔からの慣習というのをありがたく守るクセがある。あんたの年で地上勤務はあり得るとしても、何の落ち度もない人間を、そう簡単に慣例を破って別会社に転籍させるかどうか、だ」
「それじゃあ、一体どんな理由があるというのですか」

早島伴次郎は、再びプィー、とタバコの煙を天井に吹き上げてから、
「アメリカは、赤字で悲鳴を上げている日本の航空会社を買収しようとしておる」
早島伴次郎は、影山平八郎や稲垣徳郎からの情報、あるいは経済省の役人からの話を分析して、そう結論づけていた。
「かつて金融機関をまんまと買収したのと同じ手で、日本の航空路線を、安い今のうちに買い取っておこうという腹だ。不景気でどの航空会社も赤字続き。負債を抱えて、これを何とかしなければ、アメちゃんが安く買いたたいてくる、という訳だ。昔のように日本国家には金が無いから、国も助けてくれない。
そこで各航空会社は、躍起になって赤字解消、負債圧縮をやろうとする。異動時期の来た社員の転籍なら、目立たず騒がれずにやれる。だから、地上勤務候補者が狙い撃ちされておる、ということだ」
雪枝が半信半疑、という顔で早島伴次郎を見つめている。
「もちろん、わしの話を信じるか信じないかは、君の自由だ。ただ一つだけ言っておきたい。
今までの日本国民は、政治というのは上の方で特殊な人間が、国民とは関わり無く適当にやっている、と思っておった。それは投票率を見ればわかる。投票率の低い国は、総じて幸せな国だと言える。政治が身近でないということは、それだけ生活に不満が少ない、ということだ。だがね、お嬢さん」
伴次郎は力を込めて言った。
「あんたは現実にリストラに遭遇しておる。そしてそれは、一民間企業の都合ではなく、実は大きな政治の中の出来事に関わるのだ、としたら、それでも自分は政治と関係ない、と言い切れるかね?。同じ境遇にある人間を救いたいとは、微塵も思わんかね」
雪枝は、伴次郎の言葉に打たれた。こんなに真摯な言葉を聞いたのは、学校を卒業して以来だった。
そして感激屋の雪枝は、
「わかりました。でも、色々相談をしなくてはなりませんから、もう少しだけ時間を下さい」
と、話を前向きに考えると言ってしまった。
「一つだけ教えて戴けますか」
雪枝は、姿勢を正して早島伴次郎に尋ねた。
「なぜ、私なんですか。他にも有名人とか、議員になりたい人はたくさんいると思うのですが」
伴次郎は、一つうなずいてから、
「勘だよ」
と言った。
まさか、「他にいねぇんだ」とは言えない。
だが、早島伴次郎は一見おっちょこちょいな篠ノ井雪

枝の中に、何か「おや」というものを感じていた。ただし、この時点ではまだそれが何なのか、彼自身にも判らなかった。

5

衆議院の総選挙も公示間近となっていた。

篠ノ井雪枝は、民自党の関東ブロックから、比例代表候補として立候補することになった。

雪枝の両親も、友人たちも、学校の恩師も、最初は誰も信じてはくれなかった。が、どうやら本気だとわかると、みんな驚きあきれ、誰一人として賛成してくれる者はいなかった。

雪枝は当初、何度も（やっぱりやめよう）と思ったが、「やめた方がいい、やれる訳がない」と人から言われるたびに、（何よ、なんにもわからないクセにッ）とムキになっていく自分を感じていた。

そしてついに、正式に候補者として名乗りを挙げた雪枝。民自党の組織委員長室に来る前、雪枝は東洋航空の運行管理部長に、辞表を提出した。

「おう、そうかね」

と言って、タヌキ顔の運行管理部長は、すんなり辞表を受理した。

（義理でもいいから、一言ぐらい「まあ、待ちたまえ」と

か言えないのッ）

と思ったが、客室乗務員として働けない会社に未練はない。

「では失礼」

と澄まして会社を後にした。

その日から、雪枝の選挙戦は始まった。

知らない世界に知らない出来事、知らない人たちに知らない話。

こうもわからない事が集中すると、逆にへんな度胸が出る。

中でも一番困ったのは、演説だった。

演説は一応、党の遊説局が特訓をしてくれる、ということだったのだが、若手の遊説局員はすべて出払っていて、仕方がないので早島伴次郎が声をかけて、彼の顔見知りの議員が手ほどきをしてくれることになった。

行ってびっくり。出てきたのは骨董品みたいなオジイチャン。

「副島強、と申す。以後、お見知り置きを」

当年とって八五歳。元・新聞記者で、吉田茂の番記者をしていた、というのだから、年をとっている訳である。

「よろしいか。そもそも演説とは、」

最初の一日目は演説についての講義で終わり。

「では、これを」

次の日渡された練習用の演説原稿には、

『月給倍増のはなし』

と書かれていた。

「それじゃ、目の前に有権者がいると思って、しゃべってみて」

「えーと。みなさん。これから皆さんの月給が倍になるお話しをします」

「ダメダメ」

副島は、もっと感情を込めて熱く語って、と注文をつけた。仕方がないので雪枝も思い切り力を入れた。

「皆さんッ、私は野党が言うように、三つの卵を四人で分けるのではなく、三つの卵を六つに増やして、四人で分けたら二つ余る、余った二つを貯金して、また卵を増やす、ということをやりたいッ。なに、コレ?」

「いいから続けて」

「・・・月給を倍にするには、経済を倍にすればいい。つまり、どんどん経済を良くして、国が投資をして、輸出をして、経済を成長させる。これが経済政策というものですッ」

「そうそう、いいねぇ」

雪枝は後で知ったが、これが池田勇人という総理大臣が昭和三〇年代に行なった「所得倍増」という政策の、選挙向け演説原稿だったのだ。なんと、副島は当時、池田勇人の番記者で、このスピーチを頼まれて書いたらしい。

演説内容はともかく、特訓の甲斐あって、雪枝は人前で話すことに慣れてはきた。

特に、公示後に行なわれたテレビでの政見放送用の収録では、大勢の前で演説するよりも遥かに落ち着いてしゃべれた。これはスチュワーデスで鍛えた会話術や営業スマイルが大いに役に立った。

比例選挙でも、個人ポスターは作る。個人名での投票も許されているからだ。

党公認候補者のポスターは、党が指定した写真家が党本部で撮影をしてくれて、その中からいいものを選ぶことになっていた。ところが。

ちょっとした手違いで、篠ノ井雪枝の写真撮影の日、地方遊説に彼女を組み入れたために、写真が撮れない。そこで、誰か知り合いの写真家に頼めないか、と党の選挙広報部が言ってきた。

「そうねぇ」

篠ノ井雪枝・秘書の肩書を持つ向井登久子が、

「それなら、毛呂山健介に頼むわ」

と言って、勝手に毛呂山のスタジオに予約を入れた。

向井登久子は、「オバ捨て山」の東洋楽園観光への出向を拒否して東洋航空を退社。篠ノ井雪枝の秘書として雪枝を助力することになった。

年齢は雪枝と同じだが、性格的に「世話女房」のようなところがあり、おっちょこちょいな雪枝にはまるで母

親か姉のような存在ではあった。
議員には有権者向けの顔、同僚向け、議会向けの顔など、公の顔がいくつも必要になる。
例えば、よほど大きな会社の役員でも、近所の八百屋で買い物をしている時に他の客や店員から、「あ、○○会社の専務さんよ」と言われることはほとんどない。
しかし、マスコミに露出し、また選挙活動や政治活動で地元を回る機会の多い議員は、プライベートな時間も「議員」という顔を外す事が出来ない。
そのストレスは半端ではなく、いつもの顔を見せて文句を言ったり甘えられるは家族と秘書くらいである。
夫も子どももおらず、昨日までただのOLだった雪枝にとって、甘えて文句の言える登久子の存在は大きかった。
「ちょっと、登久子、何で毛呂山なのよぉ」
雪枝が文句を言うと、
「だって、スチュワーデス・カレンダーで嫌な思い出があるんでしょ?。だったら、こっちは衆議院議員候補にったんだ、どうだッて感じで、ギャフンと言わせてやるのよ」
どうも登久子は、ギャフンと言わせるのが好きらしい。
しかし、ポートレートでは毛呂山は日本屈指のカメラマンでもあるし、登久子がせっかく言ってくれているのだから、まあ仕方ないか、という感じで雪枝は毛呂山のスタジオに向かった。
「いやー、これは驚いたなあ」
毛呂山は雪枝を覚えていたらしい。
「まさかターミナルが爆破されるとはねぇ」
(何だその話か。アンタが爆破されるとはねぇ)
と喉元まで出かかった言葉を呑み込んで、
「今度は、選挙のポスター用ですから、正面からお願いしますネッ」
と、精一杯の皮肉を言ってやった。
が、毛呂山は意に介していないようだった。
「おい、佐々木君」
またしてもアシスタントの薔薇柄ネクタイ中年男が出てきた。やはりこの男が撮るらしい。
「どうもご無沙汰致しております。先日は、ターミナルが、」
と言いかけたところで、
「時間がないのッ。早くお願いします」
と雪枝は腹立たしげに早口で言った。
(ターミナル、ターミナルって、何だっていうのよ、まったく)
それでも、レンズに顔を向けると別人のように笑顔になる雪枝。さすがに、鍛えられた営業スマイル。
撮影は何事もなく終了。
ホッとしながら、出来上がりを楽しみにするあたりは、

まだ普通のOLの雰囲気が抜けていない。
さて、選挙戦は告示前から事実上の激しい運動が繰り広げられていた。それも通常の選挙の比ではない。
それはそうだろう。
まず、民自党は党存亡の危機にあって、全員が悲壮な覚悟で選挙戦に臨んでいる。必死である。
野党はどの党も異様に活気づいていた。
野党第一党の国民連合は、元気が過ぎて、もはや政権獲得をしたような騒ぎ。しかも、政権獲得後のポストをめぐって権力争いが表面化し、これが逆にイメージを悪くした。だが、民自党にとっての福音は、ここまで。
かつて民自党から離脱した議員でつくる立憲クラブ、そして今回新たに民自党から分離した新民自クラブ、労働組合がバックにある社会労働党、そして最左派の国際共和党、いずれも支持率を大幅に上げてきていた。
さらに。
立憲クラブと新民自クラブは、元々民自党に所属していた議員が中心になって作った政党だから、ほとんど政策的に違いがない。そこで両党は選挙直前に合併を画策し、その党名を「ガンバレ日本」とした。
この「ガンバレ日本」が、マスコミに積極的に取り上げられ、ブームのようになりつつあった。
早島伴次郎にしてみれば、面白くない。
「何が『ガンバレ日本』だっ。くっだらねぇマスコミ受けの党名付けやがってッ。オリンピックじゃねェってんだッ」
伴次郎は党の組織委員長室で、各マスコミが、発表はしないが極秘に調査している選挙状況についての報告書を睨みつけながら言った。
「おやおや、ご機嫌斜めだね」
ポマードで七三に固めた顔を出したのは、「キャバレー王」で民自党代議士の水城洋一だった。
「なんだマスター、こんなことろで油売っててていいのかい」
マスター、というのは、水城洋一のあだ名である。
「いいんだよ。ウチの選挙区じゃ、立憲クラブ、じゃない、『ガンバレ日本』の久瀬俊太郎先生が、ムダな大声張り上げていらっしゃる」
久瀬俊太郎と水城洋一は、「囚縁の東京二〇区」と言われるほど激しい戦いを毎度繰り広げていた。久瀬はまだ四〇歳。水城は六十四歳。このところ二回連続で水城洋一が当選しているが、その前は久瀬が一度だけ当選したことがある。
何が起きてもうろたえない、というのか、楽観主義というのか。水城洋一はいつも余裕綽々というスタイルを崩さない。それがどうやら水城洋一が自分で決めている「ダンディズム」らしいのだが、いずれにせよ、この点だ

けは早島伴次郎も買っていた。
「で、どうです、我が党は」
水城洋一のポマードの香を手で払いながら、早島伴次郎は、
「そうさな。二週間後にはこの臭いポマードの匂いを議員会館で嗅がなくて済むようになるだろうよ」
そんな意地悪言いなさんな、と水城が言うと、早島伴次郎は「まあ、見ろ」と言って、マスコミからの報告書を見せた。
「え、ホントかね」
さすがの水城洋一も、驚いて報告書を掴みあげた。
支持率で、「ガンバレ日本」が民自党を抜いている。
さらに、「どの党に投票するか」という質問にも、まだ未定という無党派に続いて、政党ではガンバレ日本が一位を占めている。
各選挙区で見ても、小選挙区でガンバレ日本が候補者を立てているところは、ほとんどで民自党が敗れている。
「でもまあ、奴さんたちは300選挙区のうち半分の150にしか候補者を立てておらんし、比例も最大で50は行かんだろ。つまり、過半数には届かん」
そう言う早島伴次郎の目はしかし、うつろだった。
「伴ちゃん・・・」
「マスターよ、あとは党首が死んでくれるぐらいしか、勝つ見込みはねぇな」
プィー、とタバコの煙を吐き捨てる伴次郎であった。
選挙戦に突入して、雪枝に関係する大きな出来事が三つ起きた。
一つは、選挙ポスター事件。
民自党は、議員ばかりでなく職員も「ガンバレ日本」に大勢引き抜かれて行く始末で、一人の職員が三つ四つの業務を同時に兼任するのは当たり前、という状況になった。
そして、専従で選挙公報やポスターを担当する職員がいない、という異常事態。
刷り上がった選挙広報、選挙ポスターは、ほぼノー・チェックで世に出た。
街頭演説に向かう車の中から、壁に貼り出された自分のポスターを見た雪枝は、そのまま気絶するかと思った。
あの写真。
制服姿でうつむいて、手帳に何か書いている、つまり顔がまるで見えていない、スチュワーデス・カレンダー用に撮られた、あの写真の胸から上のアップだった。
どうやら毛呂山は、一応あの集合写真に出たスチュワーデス全員を、個人別に撮影していたようだ。
(なんで、どうして)
頭の中が真っ白になり、続いて目の前が真っ暗になり、そして耳鳴りがした。

「ちょっと、雪枝、どうしたの?」
信号で止まった車の中から、雪枝は最後の力を振り絞ってポスターを指さした。
「ヒッ」
向井登久子は、一瞬息を止め、そして喉の奥にしまい込んであった悪霊を吐き出すような声で、
「も、も、モロヤマのヤロー、ブチ殺してやるッ」
選挙活動を一緒にやっていくうちに、向井登久子は篠ノ井雪枝と一心同体になったような錯覚を覚えた。最初は自分をお払い箱にした会社への当てつけぐらいの気持ちで雪枝を手助けしていた登久子は、雪枝のひたむきな努力や選挙特有のお祭騒ぎの中で、いい意味で自分を見失っていた。そしてこのポスター。
カメラマンを毛呂山に指定したのは自分だ。
自分が雪枝の足を引っぱった・・・。
「車ッ、止めてッ」
登久子は運転手の首を締めながら言った。
「いいこと、雪枝。私いまからモロのヤローのところに行って、いえその前に党本部に行って広報の大バカヤローにヤキ入れて、そのあとでモロのヤローをあの世に送ってやるッ」
なんだか物騒な話だが、雪枝は呆然としたまま、
(向井登久子って、小学校からお嬢さま学校を登ってきた子よね。ずいぶん乱暴なことを言うものだわ)
と、あまり問題の本質と関係のないことを思った。
人間はどうしようもない困難にぶちあたると、現実を直視しないで思考が停止する、その典型のようなものだ。
「はい、気をつけて行ってきてね」
間の抜けた声で雪枝が言うと、向井登久子は脱兎のごとく車から駆け降りて走って行った。
その後、向井登久子がどうしたか、ということは、あとから本人や目撃者から雪枝は聞いた。
まず党本部に行った向井登久子は、広報のポスター担当者をつかまえようとしたが、そもそも担当者が存在しないのだからつかまえようがない。登久子は仕方なしに、白ボードに貼ってあった、東洋航空の運航管理部長に似ているタヌキ顔の岡邦男民自党党首のポスターに向かって、
「テイッ」
と拳をぶつけた。
ボリッ、という鈍い音と共に、岡党首の顔面中心部が消えて、貼ってあったホワイト・ボードのかけらと共に、床に落ちた。ホワイト・ボードは見事に、壁までくり抜かれた。怒りの力は大きい。
続いて毛呂山のスタジオに行った登久子は、留守の毛呂山にかわってアシスタントの佐々木の、趣味の悪い薔薇の花柄ネクタイを締め上げ、理由を質した。
答えは簡単だった。

撮影したフィルムではなく、廃棄用の封筒に入っていたフィルムを間違えて党本部に届けたこと。それに気づいたのが、今日だったこと。

話を聞くあいだ、登久子が佐々木のネクタイを伸ばしたり締め上げたりしたので、プリントしてあった薔薇はまるで、しおれたヒマワリのようになってしまった。

これが第一の出来事。

第二の出来事はこの直後に起きる。

事前の、もちろん公職選挙法に違反しない範囲での運動では、篠ノ井雪枝は単なる無名の泡沫候補にすぎなかった。

だが。

選挙の公示後、つまりポスターが町に貼り出されて後、雪枝の行く演説会場はどこも満員御礼。

「やっぱり、一所懸命やれば報われるってことよ」

そう言って喜んでいたのも束の間、事実はすぐに判明した。

あの中途半端な、顔の見えないポスターのお蔭で、

「一体これはどんな候補者だ」

と話題になった。そのうちに、ついこの間まで現役のスチュワーデスだったということがわかり、男性の中から「どんな顔をしているのか見てみたい」と、ある意味自然な欲求が有権者の間に噴出した訳である。

また、変なオタクが勝手に「篠ノ井雪枝・ファンサイト」なるものをインターネットのホームページとして開設。そんなこともあって、多少異様ではあったが、徐々に個人後援会に入会する人々が増えた。

「なんか、でも、ちょっと、ねぇ」

と雪枝が言ったのは、後援会に入ってくれる人のほとんどが、四〇過ぎの男性で、しかも署名が一人ということは、家族がいない、ということでもある。

「ゼイタク言わないの。『有権者は神様』なんだから」登久子は、自分が対象ではないから随分気楽なことを言っていたが、実のところ、毛呂山の写真が逆効果で支持者を増やした事に、ほっとしているのだ。

これが第二の出来事。

第三の出来事は、雪枝にとってだけではなく、日本の政治にとって大きな出来事であった。

雪枝と早島伴次郎は、選挙公示後はお互いに忙しすぎて会う機会がなかった。が、この日、たまたま党本部に来た雪枝が、「どうせだから早島さんに会って行くわ」と言って、登久子を連れて組織委員長室を訪ねた。

「おう、やってるねぇ。噂は聞いとるよ」

伴次郎は雪枝の意外とも言える善戦に気を良くしていた。が、まだ雪枝自身も当選ラインには程遠い。

「いかがですか、状況は」

雪枝が尋ねると、ちょっと顔をしかめて、

「まあ、ね。オレも選挙区に帰っておらんからなあ」

早島伴次郎は北関東の群馬に選挙区がある。

伴次郎はしかし、選挙には強い。普段から選挙民の陳情にはよく耳を傾けていたし、それなりのカリスマ性もあったから、選挙区に張り付いていなくても当選はする。が、一度も帰らない、というのはマズイ。

「どうせだから、ウチも『ガンバレ民自党』とか党名を変えるか。ハハハハ」

と言って三人で笑った。

と、そこへ。

「委員長ッ、大変ですッ委員長！」

組織委員会の事務局長が大声で駆け込んできた。

「なんだよ、うるせえな。耳はまだ聞こえらあ」

「と、と、と、」

「ニワトリか、てめえは」

「いえ、と、党首、岡党首が倒れられて、いま救急車で病院に」

一瞬の間を置いてから、

「どこの病院だ」

と伴次郎は聞いた。

「帝国商工病院です」

伴次郎はすぐに受話器をとって、手帳を見ながらどこかに電話をかけた。

雪枝と登久子はただ呆然と事態を見守っていた。

「あー、早島伴次郎です、民自党の。ええ。杉野理事長はおいでですか。はい。ええ、このまま待ちます」

相手が出るまでの間、伴次郎は右手の人指し指を立てて唇に当てた。「黙ってろよ」という合図である。

「あー、どうもお久しぶりです。早島伴次郎です。ウチの岡党首がそちらに担ぎ込まれたと聞きましてね、ええ。ご存知のように、いま党務はすべて私がやっておりまして、党首の容体をお聞きしようと。ええ、わかってます。誰にも漏らしません。はい。はい。ほほー、なるほど。ふむふむ。わかりました。ありがとうございました」受話器を置いた早島伴次郎に、雪枝が聞いた。

「党首のご容体は？」

伴次郎はそのことには直接答えずに言った。

「政治家が嘘をついていいことが二つだけある。一つは、総理大臣が解散の時期を言う時。もう一つは政治家の病状。どちらもそれだけ重大なことだ、という意味。だから言えない」

雪枝と登久子は仕方なさそうに「そうですか」と言った。

「が、もうわかっていることは隠す必要はない」

と伴次郎が続けた。

「は？」

雪枝が伴次郎をみつめると、

「岡邦男・民自党党首、内閣総理大臣は、さきほど亡くなった」

と言った。
雪枝も登久子も声が出ない。いくらほとんど知らない人間とはいえ、自分の党の党首であり、内閣総理大臣である。その人間が突然死んだのだ。
「済まんが、一人にしてくれないか」
伴次郎はそう言って、二人に背を向けると、窓際から外を見つめた。
雪枝も登久子も静かに委員長室を出た。
党本部を出る頃には、二人ともショックから立ち直っていた。
「どうなるのかしらねぇ」
「ほんと。どうなるのかなあ」
二人は自分たちのこと、そして今までは考えもしなかった国や政治の将来について、漠然と考えた。そして先程の早島伴次郎の後ろ姿を思い出した。
「ねぇ登久子、さすがねぇ、早島伴次郎って。岡党首とは仲が悪いって言われてたじゃない」
「うん」
「でも、政敵だとしても、その死を悼むのねぇ」
「そうねぇ、男の世界だわねぇ」
二人は任侠映画に出てくる高倉健か何かを想像していた。
一方の早島伴次郎。
二人が出て行き、委員長室のドアが閉じられた瞬間、心の中で「勝った！」と叫んだ。
党首の死。
それがたとえ支持率の低かった党首だったとしても、これは選挙に大きく影響をする。
（何というタイミングの良さだ。これで「弔い合戦」と称して戦えるぞ）
伴次郎の頭の中では、すでに戦術が練られていた。
岡党首を裏切って、民自党を出て行った「ガンバレ日本」の議員たち。彼らの心ない行動が、純粋で正直者だった岡党首を悩ませ、そして脳溢血で帰らぬ人にしてしまった・・・。
（さて、世論はどちらを支持するかな）
岡党首急死後、伴次郎の手元に届く選挙状況は、日に日に民自党に有利なものになっていった。
選挙前から岡邦男の批判で売り出していた、水城洋一と同じ選挙区の「ガンバレ日本」の久瀬俊太郎は、選挙前の絶対優勢の予想に反して、水城洋一とほぼ伯仲状態となった。
関東ブロックの民自党の支持も確実に増えており、その牽引車として篠ノ井雪枝は大きな役割を果たしていた。
選挙公報にも例の写真を使い、ますます篠ノ井雪枝の人気は上がった。関東の候補者ばかりでなく、地方からも応援演説の依頼が来るほどで、これには雪枝自身も驚

いてしまった。
しかし、人気が出るのに比例して、批判や妨害も盛んになる。
演説会場やパネル・ディスカッションで、野次や意地悪な質問など、容赦なく雪枝に浴びせられることが多くなった。
雪枝の選挙公約は主として教育と環境だった。
経済や安全保障についてはズブの素人で、しかも女性候補としてウケがよくないだろうと、あまり積極的に経済・防衛関係には言及してこなかった。
敵はそこを衝いてきた。
ある公開座談会で、一般有権者を装ったガンバレ日本の職員が、会場の方からの質問、ということで雪枝に次々と防衛や経済問題を質問してきたのである。
雪枝も慣れたもので、
「国の防衛が大切なのは言うまでもありません。近隣諸国に誤解を与えないよう、また国民生活に多大の負担にならぬよう配慮しながら、効率のよい安全保障をつくっていくべきだと考えます」
党が作ったマニュアルをうまく加工して、その場は切り抜けた、と思ったが。
「どうも篠ノ井候補の話には、具体性が無い。特に経済問題に対しての考えが、私たち一般庶民にはうまく理解できないのです」
と質問者が言った。
経済に関する党のマニュアルは、確かにわかりにくい。行財政改革を進め、経済活性化も図る、と言うのだが、行財政改革というのはムダを無くし、緊縮財政でいく、要はサイフのヒモを締めてくぞ、ということ。一方で経済活性化は、国がじゃんじゃん金を出して、景気を浮揚するということ。ブレーキを踏みながらアクセルも踏む、これでは一般国民どころか議員すら理解できない。
雪枝は窮地に立った。
党のマニュアルに他の回答は載っていない。
（ウーン、大学で真面目に経済学をやっておけばよかった）
今頃言っても遅いのである。
壇上で立ち往生している雪枝に、会場がざわつき始めた。頼みの向井登久子は、質問者を睨みつけているだけである。
（そうだッ）
雪枝は「ゴホンッ」と咳払いをしてから、右手に拳をつくり、前に出した。
「皆さんッ」
気合が入っていたのか、マイク直撃の大音声になった。
「わたくしは、野党の諸君が言うように、三つの卵を四人で分ける、という考え方ではイカンッ、と思います。三つの卵を六つに増やすッ。この六つの卵を四人で分けて、

余った二つを貯金するッ。コーレーガッ、経済でありますッ」

篠ノ井雪枝の後援会を中心に、ドッと会場は沸いた。

演説の内容というより、そのあまりの迫力で全員が圧倒された、という方が正しいであろう。

雪枝は拳を握ったまま、質問者に微笑み返した。

投票日当日。

雪枝の事務所は羽田空港近くの、小さな出版社の倉庫にあった。幼なじみの子の実家で、雪枝も小さい頃よく遊びに来ていた。そんな関係で快く、ほとんどタダ同然で倉庫を貸してくれた。

選挙戦の最中は候補者本人はほとんど事務所にいなかったが、この日は朝から事務所に詰めていた。

「候補者っていうのは、当選か落選が決まってから事務所に現われるものよ」

登久子が言ったが、自宅で一人でいるのは寂しいし、かと言ってホテルに泊まる気にもならない。それに事務所には、東洋航空時代の同僚たちがたくさん応援に来てくれて、ここにいるのが雪枝にとって一番落ち着くのだ。

夜八時。

「それでは、選挙の開票速報をお知らせします」

テレビで選挙の開票速報が始まった。

各党の実力者たちの当選が次々に伝えられる。

午後十時を回って、比例代表の当選者も出始めた。

「宮津隆利・ガンバ前、当選。遠山欣三・国民前、当選確実」

「群馬九区の票が開き始めました。塩田昌男・国民新、一万とんで五〇〇票。早島伴次郎・民自前、八千二〇〇票。民自党組織委員長の早島さん、苦戦です」

「えっ」

雪枝は、何としても早島伴次郎には当選してもらいたかった。自分をこの世界に引きずり込んだ張本人である。最後まで責任をとってもらわねば、と思った。

「ここで新たに当確が出ました。民自前職の水城洋一さん、当選確実です」

ふーん、という空気が篠ノ井事務所に流れた。やはりスチュワーデス仲間にも人気のない議員らしい。

新しい当確者が続々と誕生する中で、早島伴次郎と篠ノ井雪枝の当選は見えて来ない。

テレビで各党の党本部を中継する中に、民自党本部でイヤホーンを耳に付けながらタバコをプカプカ吸っている伴次郎の姿が映っている。

間もなく時刻は午前〇時。日付が変わる。

運命の時は、刻々と迫っていた。

日出る国の落日（一）

隆　恵

（はじめに）

近年のわが国は、政治・経済・社会・個人の全般に亘って「液状化現象」が目立ち、亡国の念に駆られるのは私だけであろうか。

戦後の日本を総括すると、大戦による焼け野原・全国民が貧乏という無一文からスタートし、戦勝国の米国から唐突に民主主義を拝領し、政府による国家統制経済を今日に至るまで持続し、徹底した富の再配分による国民全員の中産階級化政策を頑なに推進し、大量・高級消費社会の出現による拝金主義がはびこり、その一方戦前の価値観・道徳・諸制度は全て悪として否定し、自由・権利を責任・義務より最優先の不可侵項目と偏重しすぎた等々の六〇年であった。

問題は、国家の基本ビジョンを定めずに「時の流れに身を任せ」、原点を見つめず常に現象面の補正・補正という対処療法のみで対応してきたところにある。

その結果、経済の破綻に端を発して今日の政治・経済・社会の液状化現象が発生したと考える。

要するに、二十世紀の「社会主義政治大国」の旧ソ連に続いて、「社会主義経済大国」の日本が崩壊しつつあるということである。

昨今の政治・経済・社会の症状は、旧ソ連崩壊直後のロシアの状況と酷似していると言ったら、誇大妄想・自虐趣味と非難されるかもしれないが、今日の全般にわたる混乱状況は、異常としか言いようがない。

まず社会であるが、最近の各種の事件は特に酷く目を覆い耳を塞ぎたくなるほどである。

仏教の教えの「末法の世界」とはこれなのかと思うほ

どである。

看過できない例を挙げると切りがないが、親殺し・子供の虐待・親父殺し・老人虐待・強盗殺人・放火殺人・ストーカー・親の扶養拒否・交番の窃盗被害・自殺者の多さ等々公衆道徳以前の、まったく人間社会とは思えない現象が多すぎる。

長年世界にも名を馳せた「ヤクザ」が、仁義を弁えない極道者となり世間から恐れられたが、今や無軌道な若者の陰で存在感が薄くなった感さえある。

最近高齢者特に女性から聞く話であるが、町の中とか電車の中では若者を避けていないと、何をされるか分からなくて怖いと言う。

正に近年の日本は「野犬社会」と化してしまった。

そもそも、わが国は動物の三大本能である「食欲・性欲・物欲」を自由放任してきた。これらへの規制は、一部の人たちの憲法が保証する自由の侵害という「錦の御旗」をいつも振りかざされて、政治家と国民が怯んでこれは難問だからと先送りし、確たる日本民族としての価値観・基準を確立してこなかったことに起因する。

こうした荒んだ社会風潮に対して、教育に問題があるとか、若者や加害者の行動背景も理解すべきであるとか、若年層の就職難等長年の不況を解決できない大人の世界に問題がある等、社会評論家およびマスコミがしたり顔で論評している。

また不良外国人の問題も多々報じられているが、象徴的な事件として密入国して強盗で逮捕された中国人が故国の刑罰は重くて「採算が合わない」が、日本は軽いので「最悪捕まっても採算が取れるので出稼ぎに来た」と豪語していたのを目にした。

こうした事件に対しても、「えせ社会評論家・マスコミ」はこれが世界の当たり前の状況であり、日本人の無防備が時代遅れと言っているようだ。

話題を変えて、政治と経済の現況を見てみる。

政治は、政治家と役人の堕落も真に地に落ちた感が強い。

その源はすべて「カネ」にあり、この傾向は約二五年前の田中角栄から症状が酷くなったように思う。

政治にはカネが付き物であり、約十年前に政党助成金を毎年三百億円以上我々の税金で支援してやっているにも拘わらず、段々悪質化している。

一昔前までは、贈収賄事件のカネの使途は選挙民への供応等であるとか、派閥拡大のための陣笠議員へのもち代が主であって、つい魔が射して「寸借」してしまったという類でまだ同情余地もあった。しかし昨今のそれは

私腹を肥やすための計画的「強盗」の類であり、政治家のモラルを遥かに超越した全般的な現象の感が強い。

その格好の「獲物」が公共事業であり、その範囲は政府・地方自治体の予算だけではなく、官が行政介入できるもの即ち特殊法人・第三セクター等広範囲の団体・企業が彼らのマーケットとなっており、正に「ハイエナ」「ヒル」みたいな存在である。

役人も同様で、下っ端役人のこそ泥はいつの世も必要経費みたいなものであるが、高級官僚のそれは政治家も負けるほどの悪辣な私腹肥やしで、世も末である。

一方経済は、十年余の長期不況と金融システム不安で、倒産とリストラによる大量の失業者と新卒者の就職難もあり、更に構造改革の進捗により約三百六十万人の失業者予備軍も予測されており、まったく出口が見えない長いトンネルの中にある。

社会保障も、年金・健康保険も財政破綻で国民負担増を求めることとなった。

消費税の増額もタイムスケジュールに載っており、現役たちはその負担増と将来の受益の疑問を抱え、年金生活者はここ数年のゼロ金利によるストックの取り崩しと老後の医療費負担で、国民全体が将来の不安に怯えている。

これらに対して国民は、政治家が悪いとか行政が悪いとか他人を詰るばかりで、唯一の意見の反映の場である選挙には棄権するし、まったく主権者意識を欠いている。

日本人は、欧米人に比べてタックスペイヤー意識が極めて薄く、何事もお上が何とかしてくれる、お上が悪いという性癖がある。

この原因は、各論で詳述するが、欧米と違って「自分たちの血を流して勝ち取った市民権」ではなく、これも米国というお上から頂戴したことと、有権者の大半が源泉徴収制度を通じた納税のため納税意識が希薄であることにある。

為政者にとっては、徴税がこれほど楽で且つ歳出内容にも文句を言わない国民は、有り難い存在である。江戸時代から大正時代は、百姓一揆・打毀し・逃散・米騒動等の暴動・反抗が多発していたわけだから、いかに戦後の富の均衡政策が政情の安定に成功していたとはいえ、「納税すれど文句言わず」の統治政策の成功でもある。

話題を変えて、近年のわが国の無国籍状態の氾濫を見せられると、「民族とは、国家とは」という原点を考えずにはおれない。

如何に今世紀がボーダーレス・インターナショナルの時代とはいえ、「故国」・「故郷」がこの世の中から消滅しつつある状況を放置しておいて、果たして良いのであろうか。

この状況はおそらく更に加速すると予想するので、二十年後の仮想日本社会を漫画チックに示してみる。

（昔はこの列島には日本という国があったが、今住んでいる人は肌色・顔立ちはどうもアジア人らしいが、街中いたるところ英語と中国語の看板ばかりで、新聞・雑誌・テレビ・話し言葉はすべて英語であり、首相は元韓国人で日本語はまったく駄目であり、裁判官も元日本人は少なく、通貨は米ドルと元しか通用せず、神社仏閣は荒れ果てあちこちにはモスクがあり、お正月風景・盆踊り・演歌・歌舞伎などは一切なくなっている。国は誰が守るのと聞くと世界中がお友達だから攻めて来る国などないよと言う。）

極端な例を上げてしまったが、現在のように何事も自由という名目の下に個人・社会の生き方を流れに任すというわが国の価値観・仕組みでは、いずれこのような社会が出現しないとも限らない。

新奇なものを取り入れる者こそ時代の先駆者と考えるジが定着してしまった。

勿論戦前の軍国主義復活論は絶対に容認してはならない。

抑々民族が独立国家を建設した理由は、自分たちの生命と財産の守護だけでなく、自分たちの固有文化を保持し、自分たちの意思で統治をしたいからであった。

他民族から収奪されて、言語・伝統等の異文化を強制されないためでもあった筈である。

今日においても、世界中の少数民族が民族自決を求めて、独立運動で多数の人たちが戦っているが、この事は「同種が群れる」という人間の動物的習性によるのではなかろうか。

私は将来の日本民族の理想像を次のように考えたい。

民族自決を貫き、民族の誇りと固有の伝統文化を心の底にきっちり持って、適度にグローバリゼイションを受容し、「ほどの良い」物質文明と「豊かな」教養と文化を持ち、他人の尊厳を尊重し、異民族に対してもその異文化と異なる価値観を許容する。

ついては、他民族との融和を常に念頭において、わが民族の真の幸福の永続性を願って、新しい「国家ビジョン」を探ってみたいと思う。

「えせ知識人」は、これこそ今世紀のコスモポリタンであると言うのであろうか。

果たして、そのような国家・民族でよしとして良いのかどうか大いに疑問である。

司馬遼太郎は、その壮大な実験がアメリカ合衆国だと言い、暗にモザイク国家に留まると予言していた。

やはり古典派と笑われようとも、「ふるさと」が残っているから「遠くにありて想うもの」だとの考えは捨てきれない。

最近の北朝鮮の脅威論で、いざとなれば同盟国の米国民が血を流して、わが国を守ってくれるから、資金の負担だけを考えておけばよいという意識は、民族国家を放棄しているのではないかと思う。

これでは古代ギリシャ・ローマが外国人の傭兵に国を守らせて、結局傭兵に統治される結果となったのと同じ轍を踏むのではないか。

それでもよしとするなら、いっその事外貨保有高世界一を手土産に、米国の第五十二の州として統合してもらったほうがスッキリし、余計なことを心配しないで済む。

この国防問題というテーマは、戦後の風潮として右翼団体の専門用語化し、善良なる一般市民は禁句のイメー

次回以降、下記論点とキーワードでアプローチすることとする。

① 全般の現状（政治、経済、社会）
液状化現象、拝金主義、私権と公益

② 構造的問題
デフレ経済、国家財政、過剰雇用、既得権、独善主義、少子化

③ 基本イデオロギー
富の均衡と中産階級、権利と自由、村社会、全国の都市化

④ 政治・行政システム
中央集権制、組織・権限の肥大化、富の再配分、利権

⑤ 経済システム
管理統制経済、国民皆雇用、都市への集中

⑥ 国民の市民権意識
与えられた市民権、タックスペイヤー意識、選挙制度、裁判所

⑦ 政治家の意識
世襲化、ブローカー業、村会議員

⑧ 社会モラル
公徳心、教育、

⑨ 都市と地方
統合、独自文化

⑩ 国家ビジョンの提言

以上

短歌

行雲流水（二）

石黒修身

今年の二月にＮＨＫで、七回連続してシルクロードの紀行記録の再放送を見た。

中国側の協力があったとのことで、仲々見ごたえがあった。連綿と古代の東西交易を偲ばせるシルクロードへの憧憬は絶ち難い。

若きより睦み来たりし四夫婦
　老いの旅終へ再会約す

新婚当時に同じアパートで過した四組の夫婦が今も親しく付き合ってある。

過日も揃って一泊の旅行を楽しんだが、夫々七十才前後の年令となり、再会を約束する気持にも百パーセントの自信はない。

老い来たりやすらぎの日々をこい希う
　放将のとき過ぎ去りし今

壮年期所謂働き盛りの時期には仕事にこと借りて家庭を顧みず、自からの心身を酷使したことが思い出される。

老境に入り、平穏な日常を希む昨今その頃の事がほろ苦く思い出される。

吾が短歌にいまひときわの深みなし
　たゞ黙然と名歌集繰る（アンソロジー）

自作の短歌に、風雅、陰翳、深さ、を感じられず、未達感に悩む事が多い。

専門歌人の名歌集等を拾い読み、何等かのヒントを得たいものである。

末期がん告げられし友は淡々と
　吾に語れり須臾の命を

ある部位のがん切除を終えた友は、安心して数ヵ月を

雪像が闇に浮びて耀えり
　こゝ札幌の夜は幽かに（ひそ）

札幌の雪まつりは既に五十年の実績を持つが、所謂歴史的価値の乏しい単なる観光行事として軽視する人もある。

然し誰がどのようにして制作するのかその技術と造形美には感嘆せざるを得ない。夜に見る雪像群には幽玄の気配さへ感じられる。

西方に絹を運びし絲綢路は
　浄土求めて僧も辿りき

いま生れしみどり児は四肢のびやかに
　産声高く生を告げたり

長男の嫁に遅ればせ乍ら男児が生れた。

日赤産院で出産間もない赤子と対面し、生まれ出ずる逞しさと神秘さを実感した。

離齬ひとつ胸に残して帰る道
　堆りし落葉かさこそと踏む

会合や、人と会った帰路何か割り切れぬ思いが胸に残ることがある。楽しい筈の出会いなのだが。

明日葉（あしたば）とうその名あかるき菜を食む
　こゝ早春の椿の島で

椿の咲く伊豆大島に遊んだ。明日葉なる葉ものが食膳に出される。セリ科の多年草だが、今日摘み取っても明日は葉が出る意と言う。希望の持てる明るい名が嬉しい。

過したが、その間に他への転移が進み、もはや手術不能、抗がん剤の投与も無意味と医師に告げられた。

彼は夫人や子供達の居る入院病室で、淡々と事の経過を語ったが、「死」とか「悔い」の言葉はなかった。達観なのか、感情の抑制なのか、つらい思いで聞いた。

中高年が身につまされて涙する
時代劇あり人気呼ぶとう

昨今リストラの嵐が吹く企業社会で、自分なりの生き方を模索している中高年のサラリーマンは多いだろう。

それらの人々の間で人気を呼んでいる時代劇映画がある。

たそがれ清兵衛（藤沢周平）と壬生義士伝（浅田次郎）で、主人公の生きざまを我が身に写し身につまされるのだろう。



社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数カ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇ー〇ー六四五九二

加入者名　まんじ

霧の彼方に（二）

太田精一

水野は、パジャマのままドアーを開けた。石鹸のほのかな匂いが、彼の身体の周りに漂っていた。

「本当に電話があったの。ぼくは期待していなかった。彼女たちまさか秘密警察の手先ではないと思うが、大丈夫かな」

慎重な水野は、ソ連の女性が日本人に近寄るのは何か魂胆があってのことではないかと疑った。

「少なくとも彼女たちは、コールガールでないことは確かだと思う。ぼくもそんなに女性を見る目があるわけじゃぁないが、真面目で純朴な様子からして、とてもその手の女性には見えない。秘密警察との係わりは無いと断定は出来ないけれど、電話の声からするとむしろ秘密警察を恐れているような感じだった。水野さんの警戒は取越し苦労だよ。もし何かおかしな態度が見られたら、さっさと引き上げればいいじゃないか」

矢吹は、この機会を逃したくなかった。モスクワで一般の市民と接触し、親しく話が出来るなんてめったにないことである。また、彼女との交際を通じて、（学生の頃学んだ社会主義社会の理想が現実の社会で、どのように生かされているかを知ることが出来るのではないか）と期待した。

だが、何よりもアリヨーシヤへのほのかな想いが知らず知らずのうちに、矢吹の心に芽生えていた。

「わかった。矢吹さんと一緒に彼女たちと会おう。一人よりも二人のほうが心強い。正直言ってぼくもタチヤーナと会いたいし、ロシア語の勉強にもなるからな」

水野は、矢吹の熱意に動かされ同意した。

翌日、アリヨーシヤから電話があった。明日の夜七時に、ホテルの入口で会いたいとの連絡だった。当時のモスクワのホテルは、一般の市民が気楽に入れるような雰囲気ではなかった。入口のドアーボーイは、監視と警備を兼ねていて不審な人物を入口でチェックする。ことに

若い女性は、コール・ガールの疑いを掛けられることが多いので、ホテル内への立入りは、出来るだけ避けようとする傾向が強かった。

約束の日、小雪のちらつくレニングラードホテルの前で、アリヨーシヤとタチヤーナが足踏みしながら待っていた。道路は凍てついて、滑り易くなっていた。春分の日が過ぎてもモスクワは、まだ冬である。

アリヨーシヤとタチヤーナの案内で、地下鉄に乗りアルバーツカヤ駅で下りた。広場に出て、ゴーゴリの像と彼の住んでいた「家」を見学した。七時を過ぎていたので中に入ることはできなかった。次いで、外国とソ連の芸術家や文化人たちの交流の場である「友好の家」の周りを散策した。この「友好の家」は、一九世紀末、豪商モロゾフがスペインの城を模して自宅として建てたもので、戦前まで日本大使公邸として使用されていた。

この辺りは外国人が多い。ベトナム人、北朝鮮人などもいる。そのため矢吹や水野もあまり目立たなかった。

アリヨーシヤは、近くのレストランに矢吹たちを案内した。モスクワの一般市民の利用する中級のレストランで、サラリーマン風の若い男女で賑っていた。すでに予約してあったのか、席に着くと間もなく、ウエイターが白パンと黒パンを盛った籠を持って来て、飲物の注文を聞いた。

グルジア産のワインで乾杯した後、ボルシチのスープを口に運んでみた。コンソメに近く、思ったより淡白な味だ。牛肉、玉ねぎ、つぶしたゆで玉子入りのピロシキがアントレとして運ばれてきた。メインは、鳥の手羽肉を使ったキェフ風カツレツである。それにえんどう豆とフライドポテトが添えてあった。最後は、サモワールで沸かしたレモンティーを飲んだ。典型的なロシア料理である。ソースに頼らず材料の自然を生かした東洋的な味わいの料理であった。

矢吹と水野は、二人の暖たかいもてなしに感謝し、アリヨーシヤとタチヤーナに、それぞれ日本製の絹のスカーフをプレゼントした。

「スパシーバ・ボリショイ。ヤブキサン、ミズノサンアリガトウゴザイマス」

二人は、頬を紅潮させ、手を取り合って喜んだ。タチヤーナも、アリヨーシヤが日本語で話す〝アリガトウゴザイマス〟の意味を理解したようで、〝アリガトウゴザイマス〟を繰り返した。

「たかがスカーフをプレゼントしただけで、こんなに喜ばれるなんて、思ってもみなかった」

水野は、二人に聞こえないように、そっと矢吹に囁いた。この二人の表情や仕種から暗い秘密警察の陰など微塵も感じられなかった。

（秘密警察の手先である筈はない）

頭の片隅に澱のように溜っていた疑念を晴らすことができたと矢吹は秘かに思った。だが、それでもなお、不安は残った。その不安は、独裁国家の持つ暗い陰が人の心の襞に忍び込み猜疑心を呼び起こすことによって生ずるものであろう。矢吹のモスクワ滞在中、常にこの不安は心の片隅から離れなかった。

アリヨーシヤとタチヤーナは、レストランを出ると早速スカーフを頭に被った。アリヨーシヤは、矢吹の肩に手を掛け、頬に口付けをした。矢吹の頬は、熱く燃え、アリヨーシヤを抱きしめたい衝動に駆られた。だが、人通りもあり、水野もいたので、かろうじて踏み止まった。横目で、チラッと水野を見た。タチヤーナが水野の頬に接吻しているところだった。水野は照れ笑いをしながら恥ずかしそうに身を捩っていた。

「矢吹さん、日本語を教えて下さいね。その代りにロシア語を教えてあげる。でもどこで勉強しようかしら。ホテルには行きたくないし……」

「今、見本市の始まる直前で、準備に追われている。だから教えてあげたくても時間がない。だが、開幕すれば、夜には、ある程度の時間がとれるから、四月一日以後にしよう」

「四月になったら一週間に一～二度は教えて下さる」

「うん、大丈夫だと思う。場所は、あなたと始めて会ったソコリニキ公園のカフェテリアがいいね。いつからにするか、また電話して欲しい」

「わかったわ。今度会う時にテキストを持って来る」

「どんなテキストか知らないけれどやってみよう。そう見本市の招待券を持っていたのを忘れていた。一枚上げるから見に来て。水野さんも持っていたら一枚タチヤーナに上げたらどうですか」

矢吹は、アリヨーシヤに招待券を渡しながら握手を求めた。アリヨーシヤは、柔らかな可愛い手を差し出し、矢吹の手を強く握り締め、しばらく離さなかった。

水野も招待券をタチヤーナにプレゼントした。アリヨーシヤとタチヤーナは、急ぎ足で、粉雪の舞い散る街角に消えて行った。時計の針は既に十一時を指していた。

見本市開幕直前の三日間は、多忙を極めた。日本から送られてきた出品物が、梱包のまま置かれ、会場を埋め尽くしている。参加者は、出来るだけ早く装飾を終え、出品物を小間に並べようとして通関を急いだ。

税関吏は、インボイス（送り状）を見ながら、出品物をランダムに検査する。展示物は、持ち帰ることを条件に無税扱いとなっている。が、もしインボイスに記載された品物がなかったり、記載漏れの出品物や展示装飾資材が発見されたら大変である。始末書を書かされるだけではなく、多額の税金が掛けられ、記載漏れの出品物などは展示出来なくなることもあり得る。

菱友物産では、取引先や政府要人への贈答用として、

電子ライターを五十個用意し、出品物の梱包の中に混載していた。単価の安い贈答品の場合、基本的には無税である。だが、ソ連では電子ライターは高価で、安価な贈答品とは認められず課税の対象とされそうになった。

矢吹は、ライターは贈答用で、売却を目的としたものではない。メーカーからの大量仕入れ価格は、ソ連税関の調査をはるかに下回っている。などの理由をあげ、担当の女性税関吏に、非課税とするよう申し入れた。彼女は太った体をかがめ、ライターをじっと見て考え込んでいた。

「このライターを一個私にくれない。夫に上げようと思うの」

彼女は、体に似合わず愛敬のある目で矢吹を見つめ、冗談とも取れる口振りでライターを要求した。矢吹は、直接税関吏から物品の提供を迫られるとは思ってもみなかったので、一瞬息を飲んだ。閉鎖された社会での物不足は、人間の誇りをも傷つけるのか。社会主義を支える官僚たちの裏側に潜む暗部を垣間見る思いがした。

とはいえ、矢吹も利に聡い商社マンである。ライター一個プレゼントすることによって、残りの四十九個が無税扱いとされるならば、そのほうが得であると咄嗟に判断した。

「ご主人のプレゼント用にどうぞ。それからカレンダーもあるから上げる」

「有難う」

彼女は、ライターを素早くポケットに入れ、何食わぬ顔でインボイスに目を通し、すぐに通関書類にサインした。

開催二日前になって事件が起きた。出品物として会場に運び込まれ、既に通関の済んでいる釣竿二十本が、展示する段階になって一本も見当らない。

それだけではない。ある出品者は、ガラスケースの中に展示品の万年筆を百本入れ、鍵を掛けて会場を出た。ところが翌日会場に来てみると、その中の十本が紛失し鍵は元のまま掛けられていたという。

日本側主催者は、会場警備員を疑った。ソ連では、見本市会場の警備員は、ソ連側受入機関が配置することになっていた。そこで日本側は、これら一連の事件を警察を介入させ、盗難事故として処理するよう要求した。

「ソ連には泥棒はいない」

一言で簡単に片付けられ捜査は行われなかった。それどころか「出品物を勝手に持出し、親しい人にでも上げてしまったのではないか」として出品者の管理責任が問われる始末であった。

「出品物を展示する前に、会場から持ち出す筈はない。それでは何のために見本市に参加するのか分からなくなってしまう」と日本側は反論した。

「人類の理想社会を実現するための社会主義を実践し、世界の模範となるべきわが国に、泥棒などいる筈がない」

ソ連側は、そう繰り返すだけであった。そればかりか失った出品物に課税すると通告してきた。数回の交渉を重ねた結果、紛失物に対する課税は免除されたが、無くなった出品物や装飾資材は出て来なかった。ましてや犯人は見付からなかった。

菱友物産の出品物は、プラント模型であったため被害はなく、無事展示することができた。

四月一日、いよいよ開幕の日を迎えた。開会式には、ノビコフ副首相、パトリチェフ貿易大臣、ドエニン食品工業大臣、フルツェワ文化大臣などソ連の要人が多数参列し、会場内を詳さに見て回った。

娯楽の少ないソ連では、見本市への人気はきわめて高かった。鉄のカーテンに閉ざされ外の世界の情報を渇望していたソ連の人々にとって、見本市は外国の消費生活や高度な技術を知る上で、大切な機会でもあったのだ。このため、会場はいつも溢れんばかりの人で埋め尽されていた。

開幕して三日目に、アリヨーシヤとタチヤーナが連れ立って会場を訪れた。ひとわたり会場内を見学した後、アリヨーシヤは、矢吹に感想を語った。

「日本の工業力はすごいわね。ソ連は、宇宙開発や軍事産業の分野では、アメリカと肩を並べる程だけど、生活用品や電気製品など、日常生活に必要なものは後回しにされ、遅れている。配電盤を製造している私の工場も部品が不足したりして大変なの」

矢吹は、豊かな消費生活を送っている日本と社会保障は充実しているが慢性的な物不足に悩む大国ソ連を比較して一般市民は、どちらが幸福なのか改めて考えさせられた。

「ところで、見本市も開幕したから、毎日夜遅くまで残る必要はなくなった。日本語の勉強も週一、二回なら大丈夫だ。いつどこで始めるか決めよう」

「うれしい。助かるわ。じゃあ火曜日と金曜日の夕方六時、ソコリニキ公園のカフェテリアにしましょう。一時間待って来なかったら帰ります」

アリヨーシヤは、そっと矢吹の耳元で囁いて、タチヤーナと共に人混みの中に消えた。

矢吹は、約束通り火曜日にカフェテリアに行った。アリヨーシヤは、隅の席で本を拡げ、一人で待っていた。満席に近かったが昼間ほど混雑はしていない。

「オマタセシマシタ。ナニカラハジメマショウカ」

矢吹は、日本語で語り掛けた。アリヨーシヤは、配電盤の仕組みを解説した日本語の本を取り出し、その説明文をわかり易い日本語で言い換えるか、英語に訳してほしいという。矢吹は、経済学部出身で、理数系の学科は苦手であった。日本語で読んでみたが、内容を十分理解

することは出来なかった。

「アリヨーシヤ、ボクハニホンジンダケド、コノホンノナイヨウヲリカイデキナイ。ダカラ、コノホンノテキストデハキミニ、ニホンゴヲオシエラレナイ」

矢吹は悔しそうにその本を伏せた。片言の日本語しか話せないのに、辞書を引きながらでも、電気に関する日本の文献を読みこなそうとするアリヨーシヤの努力に感服し、少しでも彼女の役に立ちたいと思った。

「まずは、日本の童話や小説をテキストに使って始めたいのだが、生憎ソ連には持って来なかった」

矢吹は、済まなそうに、アリヨーシヤに英語で告げた。

「今、自分の勉強している日本語のテキストの中で、分からないところを矢吹さんに聞くことにしたらどうかしら」

アリヨーシヤもつられて英語で答え、お互いに顔を見合わせて笑った。

矢吹は、言葉の勉強のためだと言い聞かせて、会っているうちに、アリヨーシヤが独身で、アパートに一人で暮らしていることが分った。矢吹は、次第にアリヨーシヤの中の〝女〟を意識するようになった。アリヨーシヤも矢吹を単に日本語の先生としてだけではなく、いつも会って語り合い、身近に感じたいという想いが強まった。手が触れただけで、胸の高鳴りを押えることが出来ない程、二人は相手を意識するようになった。

見本市も終った。四月も半ばを過ぎ、ソコリニキ公園にも春の気配が萌し始めた。白樺の芽もふくらみ、雪もほとんど消えている。カフェテリアを出た二人は、早春の冷たい風に吹かれながら、公園内を散歩した。パブロヴィッチの〝モスクワの夜は耽けて〟の甘いメロディーが流れている。

矢吹は、アリヨーシヤの肩を引き寄せ、口唇に触れた。アリヨーシヤの冷たい口唇から熱い吐息が洩れ、矢吹の首を抱え込むように腕を巻き付けて来た。二人は、白樺の木の陰で、長い間抱き合って、激しく波打つ胸の鼓動を確かめ合い、何も語らなかった。北斗七星が、澄み切った夜空に輝いていた。

矢吹とアリヨーシヤは、公園を出て地下鉄のクールスカヤ駅まで歩いた。人影はまばらだった。前方の闇の中に街燈の明りが一列に浮かんで見えた。しばらくすると、後から二人の歩調に合わせるような靴音が聞こえてきた。振向くと靴音はぴたりと止まり、人影がビルの角に消えた。アリヨーシヤは、立ち止まり辺りを見回してから、矢吹を誘って素早くビルの影に隠れた。

「秘密警察の人かも知れない」

怯えるように呟きながら、じっと耳を澄ませ周囲を窺った。音がしなくなったのを確かめて、急ぎ足でクールスカヤ駅まで歩いた。

矢吹は、甘い夢が一瞬のうちに醒め、現実に引き戻されたような気がした。クールスカヤ駅で別かれる時、矢吹はアリヨーシヤに聞いてみた。

「君のアパートに一度訪ねてもいい」

「いいわ、何もない殺風景な部屋だけど、一人で住んでいるから誰にも気を使わなくてもいい。ただ、外国人のあなたが、部屋に入ってくるところを近所の人に見られると困ったことになるかもしれない」

アリヨーシヤは、そう言いながらも、矢吹と二人だけで過ごすことのできる場所が欲しかった。矢吹は、アリヨーシヤが、危険を冒してまで、自分を部屋に招じ入れる気持になってくれたことが嬉しかった。それが、二人にとってどんな意味を持つことになるのか、後で分かった。

メーデーが近付くにつれ、モスクワにも本格的な春がやって来た。白樺の木は日一日と緑が濃くなって行く。五月に入ると太陽の光が増し、気の早いモスクワっ子は半裸で、日なたぼっこをしている。

矢吹の帰国も迫ってきた。アリヨーシヤの日本語の読み書きは、それほど上達はしていなかった。だが、会話は、矢吹への愛の証しであるかのように、見る見る上達した。それでもまだ、複雑な会話は、英語に頼らざるを得なかった。

最後の学習の日のことであった。

「ヤブキサン、ミジカイアイダデシタケド、ニホンゴヲオシエテクレテ、アリガトウ。キヨウデサイゴニナルトオモイマスノデ、ドウゾワタシノアパートニ、キテクダサイ」

アリヨーシヤは、矢吹の手を取って、地下鉄のコンソモリツカヤ駅に向かって歩き始めた。彼女のアパートは次のクールスカヤ駅から歩いて五分程の所にあった。霧の深い夜だった。街燈が、ぼんやりと灯っている。人通りの少ない薄暗い道路を二人は腕を組み、無言で歩いていた。暗闇の中にじっと潜んでいる何か得体の知れないものが、突然襲って来るような恐怖感に怯えながら、ただひたすら歩いた。長い五分間だった。

アリヨーシヤのアパートは、七階建のビルの三階にあった。忍び足で階段を昇り、そっとドアの鍵を開けた。九時を過ぎたばかりであったが、周囲は静まり返っていた。ドアーを開け、中に入ると、右側は洗面所、左側はダイニィング、キッチンとなっている。キッチンの隅には、ささやかな調理台と流しが取付けられていた。小さなテーブルと二脚の椅子がダイニングの真中に置いてある。

アリヨーシヤは、洗面所で顔を洗った。サモワールでお茶を沸かし、ガラスのコップに入れ、ピロシキを添えてテーブルに置いた。食事は、すでにカフェテリアで済

ませてきたので、二人共空腹は感じなかった。
「ヤブキサン、ニホンヘノオミヤゲハ、カイマシタカ」
「うん、キャビアの瓶詰をベリョースカ（外貨支払の店）で、三つ買った」
「キャビア、ソレナニ」
矢吹は、蝶鮫の卵だといいたかったが、蝶鮫を英語で何というか分らなかった。
「カスピ海にいて、蝶のような形をした固い鱗を持っている魚の卵だよ」
「アア、イクラノコト」
「ニホンゴノ、イクラハサケノタマゴノコトダヨ」
「ソウ、ロシアゴデハ、サカナノタマゴハ、イクラトイウノ、デモ、カスピカイノイクラハ、タカクテタベタコトガナイ、ホトンドゼンブユシュツシテシマウカラ」
キャビアは、世界の三大珍味として、珍重されている。日本でも、高価で一般の家庭の食卓に出されることは、ほとんどない。
ダイニングを抜け、二人は奥の部屋に入った。居間と寝室を兼ねている。そこには、小さな洋服ダンスとシングルベッドがそれぞれ正面と左手の壁を背にして置いてあった。正面の洋服ダンスの上には、両親と一緒に撮った子供の頃の写真が飾ってあった。左手のベットの上の壁には、ロシアの田園風景を描いた絵が掛けてある。
「ヤブキサン、オクサンイナイノ、スキナヒトハ」
ベッドに腰を下ろしながら、アリヨーシヤは、これまで、何んとなく聞きそびれていたことを言葉に出した。
「ウン、ツマハイナイ。スキナヒトハイタケド。アリヨーシヤハ、ドウナノ」
「スキナヒトハイタケド、イマハイナイ」
そこまで日本語で言って、突然英語に変った。
「いたらあなたを私のアパートには連れてこないわ」
「両親はモスクワにいるの」
矢吹もまた英語に切換えた。
「両親はシベリア。父はモスクワの近くのコルホーズ農民でした。第二次世界大戦の時には、兵隊としてドイツとの戦いに参加し、終戦後はまた元のコルフォーズ農場で働いていたの。十五年前のことだった。コルホーズ農民の生活向上を共産党地区委員に訴えたら反スターリン主義者とされて、シベリヤに送られてしまったの。母も一緒だった。私は幼なかったので、モスクワにいる伯父夫婦に引取られ、育てられたの」
「じゃあ、ずいぶん苦労したんだね。外国人のぼくが、アリヨーシヤの国のことをとやかく言うべきではないかも知れないけれど、最近になって何か変化があった」
「フルシチヨフ政権の時に少こし変るかと思った。でもブレジネフ政権になってまた元に戻ったみたい」
「しかし、経済はずいぶん良くなっているようだし、GNPはアメリカの半分だといわれている。フルシチヨフは一九七〇年代でアメリカに追いつき、追い越すのだといってたけど」
「それは無理じゃないかしら。私は技術者だから分るけど、アメリカとのテクノロジーギャップはすごく大きいと思う。見本市を見たけど、日本と較べても、多くの分野で後れているのではないかしら」

確かにソ連は、一九七〇年のこの頃から、西側先進国との技術競争に水を開けられつつあった。そればかりではない。競争がないため、合理化や技術革新への意欲が乏しく、恐ろしく無駄の多い社会システムが出来上ってしまっていた。重化学工業を優先するあまり国民生活は犠牲にされ、一部の食料品は配給制で、日常生活用品は慢性的な不足状態にあった。このため、買物をするのに何時間も並んで待つことは、ごく当り前のことと思われていた。その例としてこんな話しがある。
停留所でもないのに、バスが突然止まり、運転手がバスから飛び出して行った。乗客はバスが故障でもしたのかと思ってじっと待っていた。ところが、運転手は買物客の列の後に並んで戻らない。乗客がいらいらし始めた頃、くだんの運転手は買物を済ませ、ニコニコしながら悠然とバスに乗り込み、運転を再開したという。
市民の多くは、特権を与えられている高級官僚への不満を募らせていた。彼等だけが買える食料品店があった。そこでは、高級食材が売られ、キャビアさえ入手することが出来る。また、書籍や劇場、映画館のチケットも容易に購入出来、恵まれた環境の高級住宅、国有の別荘などの割当てもあった。
当時のソ連は、現在の北朝鮮に似た状況下にあったといえる。矢吹は、学生の頃学んだ社会主義の理想が、大いなる幻影であったことを実感した。
アリヨーシヤは、スターリン主義に対する不満とソ連経済の将来への不安を持っていたようであったが、あえてそれを語らなかった。ただ、両親と引き離された時のことを想い出したのか、涙を浮かべ、ベットの上に顔を伏せた。
しばらくしてアリヨーシヤは、顔を上げ笑顔を作った。
「政治や社会の話は止めましょう。それよりも今日はお別れの日。矢吹さんが日本に帰ったら、もうお会いすることは出来ないと思うわ。私のことをいつまでも忘れないでね」
「住所をここに書いてくれない。日本に帰ったら必ず手紙を出す。君とはもう会えないかもしれないが、ぼくのことも、いつまでも心に留めておいて欲しい」
矢吹は、アリヨーシヤの住所を書いた大切なメモを畳んで、ポケットに入れた。
「楽しい三ヶ月だったわ。あなたのことは死ぬまで忘れない。これからどんなことが起きても、あなたとの想い

出を大切に生きて行く」

何か恐ろしいことを予感するようなアリヨーシヤの言葉であった。

矢吹は、激情を押さえ切れなくなった。アリヨーシヤの肩を引き寄せ、強く抱き締めた。アリヨーシヤは全身を矢吹に預け、潤んだ瞳で彼を見た。濡れた口唇から熱い吐息が漏れ、激しい心臓の鼓動がアリヨーシヤの胸から伝わって来た。矢吹は、狂しいほど愛しく思った。アリヨーシヤと口唇を重ね、そのまま彼女を抱き上げベッドに運んだ。

二人は、ベッドに倒れ込み、衣服を脱ぐ間ももどかしく、激しく愛し合った。アリヨーシヤの身体はすぐに反応し、悦びを隠そうとはしなかった。

激情の去った後、二人はしばらく裸のまま抱き合い、余韻に浸っていた。その時、突然ドアーを強く叩く音がした。アリヨーシヤは素早くガウンを纏い戸口に出た。一人の中年の女が中に入って来て、アリヨーシヤと何か声高に喋っていた。女が出て行った後、アリヨーシヤは沈痛な面持で、涙を浮かべ矢吹に告げた。

「矢吹さん、急いで帰って下さい。送って行けないけれどこれでお別れです」

矢吹は、何か悪い予感がした。すぐに服を着て、三階の廊下に出た。

アリヨーシヤは、ドアーの外に立ち、矢吹が階段を下りて行く姿を見送り、突然足を踏み鳴らし大声で叫んだ。

「サヨウナラ、ダ・スベダーニヤ」

日本語とロシアで、叫ぶアリヨーシヤの悲痛な声は、アパート中に響き渡った。矢吹は、アパートの出口の扉の前まで来て三階を見上げた。アリヨーシヤは、日頃の慎しみと理性を失い、髪を乱し、足を踏み鳴らして手摺を揺さぶっていた。

「ダ・スベダーニヤ、アリヨーシヤ　サヨウナラ」

矢吹は、重い扉を開け戸外に出た。霧が深く垂れ込め、アリヨーシヤのいるアパートを包み込んでいた。

アリヨーシヤの部屋の明りが、ぼんやりと霧の中に霞んで見えた。

帰国してすぐ矢吹は、アリヨーシヤに手紙を書いた。返事はなかった。手紙が彼女に届いたのか、届かなかったのか、それさえ分らない。

矢吹は、あの最後の夜、部屋に入ってきた女性が、アリヨーシヤの友人だったのか、あるいは秘密警察への密告者だったのか、その後ずっと考え続けている。

ベルリンの壁が破れ、民主化が進み、ソ連邦が崩壊した。国家権力が個人の自由を束縛した時代は終った。

だが、あの日のことは、霧の彼方に霞んだまま、矢吹の心の中に、いつまでも晴れることなく残っている。

（完）

桜人形（二）

（哀愁武士道のうち）

三戸岡道夫

（四）

旗本染川民十郎の三男坊銀之助との婚姻を、綾はべつに嫌っているわけではなかった。しかし、はっきり、

（いい）

と返事をしているわけでもなかった。

これまで綾は銀之助という若者を一度見たきりで、よく知らないのだった。いつか宿下りして実家へ帰ったとき、母親といっしょに飛鳥山へお花見に出掛けたことがあった。そのとき母親に言われて、ちらと眼を走らせただけであり、言葉を交わしたわけでもなく、そのまま通りすぎてしまっただけだった。

銀之助は背丈は普通で、色が浅黒く、一瞬の綾の感じでは、ずんぐりといった印象だった。だから綾があこがれている、色白ですらりと背の高い桜之介とは比較にならなかった。ただ人柄はよさそうに見えた。

江戸時代の婚姻は本人の意思よりも、家の意思で行われる。家と家との縁組みである。だから話は本人の知らないところでどんどん進み、内伺い書がすでに奥右筆の手許にまで届いている。だが綾はそんなことはつゆ知らず、ひたすら桜之介に恋いこがれているのだった。

だから桜之介への思いがつのるにつれて、綾の気持はますます銀之助からは遠ざかり、両親を、

（困ったものだ）

と手こずらせていた。

もちろん綾とても、桜之介といっしょになるなんてことが出来るとは思っていない。桜之介は江戸城でも名高い俊英で、奥右筆組頭というエリートであり、すでに

れっきとした奥方もいる。紙問屋の娘などの手のとどく存在ではない。それに大奥の中でも桜之介に思いを寄せている女中は、綾のほかにも大勢いるのである。

しかし頭ではそうわかっていても、いったん桜之介のことを思いはじめると、綾の胸は火のようになって、前後の見境いがなくなってしまうのだった。憧れは憧れ、結婚は結婚と、割り切った判断がまだ綾には出来ないのだった。

（おなつかしい桜之介さま）

と書いては消し、

（恋しい桜之介さま…）

と書いては消した手紙を、綾は三日がかりでやっと書き上げた。読み直してみると、自分でも恥かしさで顔が赤くなるほどだった。だが桜之介への綾の手紙は、これで五通目になる。

（今度は返事がいただけるかしら）

という淡い期待と、なにがなんでも今度こそ返事をもらわなければという執念とが、もつれあって綾の心を混乱させていた。数多い女中たちの中には、すでに桜之介から返事を受取っている者もいるのである。いつかその一通を、綾はちらっと見せてもらったことがある。

それは桜の花びらのすかしの入った巻紙に、二、三行書かれた簡単なもので、とても恋文の返事などというものではなかった。現代で言えばスターのサイン程度のものにすぎなかったが、しかし『桜之介』というサインは、奥女中たちの心を狂喜させるのに十分だった。

（わたしだって負けてはいられないわ）

綾は手紙をうす紫の袱紗（ふくさ）につつみ、ふところに深くしまうと、そっと部屋を抜け出した。

奥女中たちの恋文の取り次ぎをひそかにやってくれるのに、御広敷役人の篠川作兵衛という男がいた。そろそろ五十歳に手の届こうという風采の上がらない、目立たない、出世のことはとうに諦めた人間だった。ただ御広敷の仕事が長いので、城内のことは何でもよく知っていた。出世を諦めた作兵衛の生甲斐は、金を貯めることだった。奥女中たちが桜之介への恋文を依頼するとき持ってくる謝礼が馬鹿にならなかった。その謝礼目当てに作兵衛は恋の取りもちをしているのであり、そんなことをしていても風采が上らない男だから、誰からも怪しまれなかった。

そんな作兵衛がどうして桜之介といったエリートと接触できるのか。それは謎だった。しかし奥女中たちにとっては、そんなことはどうでもいいことで、要は恋文が無事に桜之介の手許に届き、そしてあわよくば返事がもらえれば、それで十分だったのである。

綾は恋文と、謝礼の入った紙包みをしっかり胸に抱きしめると、廊下を御広敷の方へ向った。しかし御広敷は綾のいる長局とは遠かった。長局の長い廊下を曲りくねって歩き、大奥御殿の中をあちこち歩くうちに、綾は道に迷いそうになってしまった。こんなところをもし誰かに見とがめられたら、一大事である。

（やはり、いつもの手で渡すしかないか）

綾は直接作兵衛へ恋文を渡すのをあきらめて、部屋へ戻った。

奥女中の中に、「表使い」という、御広敷役人との連絡に当る職種があった。その中の一人に東雲（しののめ）という老女がいた。彼女がいつも奥女中と作兵衛の間に立って、労を取ってくれるのである。もちろんこれも内密の取次ぎで、謝礼目当ての陰の仕事だった。

だから恋文は綾の手から東雲へ、そして作兵衛、桜之介という、面倒な経路を経て渡っていくのだが、それしか途がないとすれば仕方がなかった。そこで作兵衛が自分で直接桜之介へ渡すのか、それともその間にもう一人誰かが介在しているのか、それも不明だったが、そんなことは綾にとってどうでもいい、たまには作兵衛へ直接渡して、そのついでに桜之介の最近の様子などを聞けたらいいなと綾は思ったのである。しかしそれは結局あきらめて、部屋へ戻ると、もう一つ、東雲あての謝礼包みを作り、表使いの部屋へと向った。

表使いへ行くのなら、誰にとがめられても言い訳がたつ。それに東雲の存在は、知る者は知っていたから、たとえ見られても、

（あらご熱心ね）

などと軽く声をかけられるだけですんでしまうのだった。

東雲は幸い部屋にいた。綾が東雲に恋文を渡すのはこれで五度目であるから、もちろん東雲は綾の顔を知っていて、すっと立ち上ると、するすると寄ってきた。綾が恋文と謝礼の包みを差出すと、すばやく受取ってふところに押し込むと、また何事もなかったように、元の位置に戻った。手慣れた動作である。そしてその間いっさい無言だった。

綾は深々と東雲へ頭を下げると、自分の部屋へ戻った。すると一挙に緊張がとけて、ぺたりと畳にすわり、しばらくぼんやりと、

（いつ返事がくるかしら）

と桜之介の面影を追った。

その綾の背中を、同僚の菊がぽんと叩いた。

「あなたまた恋文を出してきたのね」

綾ははっと我に返って、

「あら、いやだ」

「隠さなくてもいいわよ。ちゃーんと顔に書いてある」

「うそ、そんなこと」

「でも、あなた、さっき御広敷の方へ行ったでしょう。見た人がそう言っていたわよ」

「……」

「こういうことは拡まるのが早いの。御広敷の方へは近寄らない方がいいわよ。もし見つかったら大変。なにしろ不義はお家のご法度なんだから」

「あら、不義だなんて、たんなる憧れよ」

「憧れも不義も、同じようなものよ、この大奥では」

「あら、そうね」

二人は声をたてて笑った。

綾は恋文を出してしまうと、しばらくの間、甘く切ないような桜之介への思慕の情と、返事がほしいという願望とで、身をさいなまれるようだった。

綾はこれまでに四回も恋文を作兵衛に頼んでいるのだが、まだ一度も返事をもらっていなかった。返事をもらうのは大変だということはわかっている。いつか菊が、

「桜之介さまからは一度や二度でご返事がいただけるものですか。わたしなど五度目にやっと……」

と自慢げにそう言いながら、桜之介からの手紙を見せてくれたことがあった。だから綾も、二回、三回、四回と、辛抱強く恋文を出しているのである。

(わたしだって今度は五度目だわ)

菊が五回目で返事がもらえたのだから、わたしだって、という期待が、綾の心に強い現実感となって頭をもたげていた。

そして綾のその願いが実現したのは、それから半月ほどたったある日だった。

表使いの東雲に廊下ですれ違うと、東雲が綾の着物の袂に桜之介からの手紙をすばやく投げこんで、

「来たわよ、ご馳走さま」

そう言って、そ知らぬ顔で通りすぎていったのである。

綾は胸がおどった。あまりのうれしさに、その場に座りこんで、泣き叫びたいような、踊り狂いたいような気持だった。急いで部屋に戻り、そっと開いてみると、

弥生の空は澄みわたり　桜之介

それだけしか書いてなかった。これが恋文の返事であろうか。しかし綾は満足だった。

(五)

そんな頃であった。ある日、綾は、

「初島さまがお話があるそうですから、ちょっと来てください」

という連絡を妙から受けた。

妙は、いつか綾が合羽屋から桜人形を買うとき、互いに奪いあって、桜人形を二つにちぎってしまった女中である。だが妙は上司の初島に言いつかって人形を買いにきいてたのである。ということは、綾は初島と桜人形を奪いあったことになるのである。

しかし綾はそんなことは、桜之介から返事をもらったうれしさで、すっかり忘れてしまっていた。それに人形を取りあった翌日、合羽屋はまた同じ桜人形を持ってきてくれたので、綾も妙も桜人形を買うことが出来、それですっかり事は解決したものと綾は思っていた。

「何のご用かしら?」

綾はちょっと眉をひそめた。

「あら、とぼけないで。ご存じのくせに」

(あっ、あの時の桜人形のことか)

綾の心に一瞬の暗い不安が走った。事は決して解決してはいなかったのである。妙はともかくとして、初島の方が深く根に持っていたのである。

綾は妙の後について、初島の部屋へ行った。

初島は大奥での勤務が十年になるというキャリアを持ち、権勢をふるっていた。厚化粧の奥に光った二つの眼で見すえられると、綾は身がちぢみ上った。綾は恐ろしさのあまりだまって座っていると、妙が、

「初島さまにお詫びを申し上げるのじゃ」

と催促した。

「お詫びって言われても、わたし別に、お詫びをしなければならないようなことは、しておりません」

綾も負けずに言い返した。そして綾と妙の間で、二、三、口論があったが、それではらちがあかぬと見ると、初島が身を乗り出すようにして、

「わたしの買物の邪魔をしたのは、いかなる魂胆があってのことか、申してみよ」

底意地悪く詰問してきた。

「いいえ、邪魔などいたした覚えはありません。わたしが先に持った桜人形を、後から妙さまがお取りになったのです」

すると妙は眼尻を吊り上げて、

「嘘おっしゃい。先に持ったのは、わたしの方ですよ。それをあなたが横取りしたのですよ」

「まあ、横取りだなんて、ひどい……」

綾はくやしさであふれる涙を袖で拭いた。

「泣いたって駄目ですよ」

妙がにくにくしげにそう言った。初島もそれに口を合せて、

「ほんとうにこ憎らしい娘だこと。どう、その高慢ちきな顔は…」

こうして綾は、初島と妙を相手にはげしく言い争っていたが、最後に綾は金切声をあげて、

「桜之介さまはわたしのものです」

と言い切ってしまった。そして、

「とくにご用がなければ、これで失礼いたします」

立ち上って帰ろうとした。すると妙が立ち上って、綾の前に立ちふさがった。

（六）

綾と妙との争いは、たちまち噂になって大奥の中にひろがった。とくに綾が狂乱の態で裏庭をはだしで走り、井戸へとび込もうという派手な立ち廻りを見せたので、噂はいやが上にも尾ひれがついて、大きくなった。

大奥取締のお年寄松浦は、捨ててはおけず、さっそく取調べをはじめた。すると原因は大奥にわき上っている桜之介ブームにあり、その中にお広敷役人が介在していることもわかったのである。

（これはうかつには動けぬわい）

松浦は慎重に考えた。

（とにかく噂を外に洩らさないことだ）

松浦はきつく箝口令をしくと同時に、老中の石川忠成に連絡を取った。

石川忠成は老中の中位にあったが、実力者であり、松浦が常に昵懇にしている老中である。松浦は、

「すでにそなたの耳にも入っているかもしれないが、ちょっと困ったことが起きましてのう」

「さて、何でございましょう」

松浦は先日、綾と妙の起した事件をかいつまんで話した。石川忠成はじっと聞いていたが、

「うーむ」

とうなって、容易に口を開こうとしなかった。さすがに石川忠成にも簡単に判断できなかったのである。

江戸城内でいろいろ起る事件の中でも、大奥の事件が一番処理に困るのである。困るというよりも、厄介というべきか。事件の裏に必ず女の感情的なものがからんでいるので、理屈では解決できず、また彼女たちの中には将軍をはじめとして、幕府高級の官職にある者と密接な関係を持っている者も多いので、その力を背景に、圧力をかけてくるからだった。大奥の事件に下手に手を出すと、必ず大火傷をする。だから誰もが、

（大奥の事件）

と聞くと、手を出したがらないのである。

それに今回は大奥の女中だけでなく、大奥に勤めるお広敷役人までが介入し、また桜人形などという、奥右筆桜之介の名前などもちらちらしてくるとなると、いっそう厄介なものになってくる。

「お広敷の役人までもが介入しているということになると…」

「われらもそれを案じておるのです」

松浦も美しい眉をひそめて、

「それに奥右筆の朝日桜之介さまも渦中にあるということになりますと…」

「うむ、それじゃ、それじゃ」

と石川忠成も深くうなずいて、

「渦中といっても、桜之介殿が別に直接かかわっているわけでもなく、ただ奥女中たちが勝手にさわいでいるにすぎないのだが、もし事件が表面化すると、それだけではすまなくなってくる。奥右筆の立場にある者がそのようなことになっては、絶対まずい」

「わらわもそのように思います」

二人はしばらく沈黙していたが、石川忠成はすばやく決意した。その証拠に顳顬がぴくりと動くと、

「内済にしてしまう外にありますまいな」

内済とは、ひそかに処理すること、すなわち闇に葬り、もみ消してしまうことである。

奥右筆を巻きこんだスキャンダルなどに拡れば、幕府の組織問題にも発展しかねない。また、具体的には何のかかわりあいもない桜之介をそんなふうに処理したとすれば、石川忠成が桜之介から恨まれることになる。老中が奥右筆を敵に廻すことは、得策でない。

だが、さて、その内済をどのような方法でやったらいいのかということになると、名案が浮ばず、松浦が帰った後、石川忠成はしばらく考えていた。が、

（やはり奥右筆を使う手しかないか）

と低くつぶやいた。なにか事件が起きると、老中の手足となって陰で処理してくれるのは奥右筆である。しかし今回は、

（その奥右筆組頭の桜之介に関係がある）

「いいえ、帰しません」

「どいて下さいったら…」

綾はもう一度金切声をあげた。

「帰れるものなら、帰ってごらんなさい」

妙の声につられて他の女中たちもいっせいに立ち上って、綾の行手をふさいだ。

綾がそれを押し分けて進もうとする。すると人垣がそれを押し戻す。その人垣を突破しようとして、綾の手が相手の胸を押すと、

「あら、やったわね」

相手も綾の身体を押し戻し、押しあい、もみあいしているうちに、どちらともなく手が出て、叩いたり、引っかいたりする修羅場となってしまった。

「畜生め！」

「痛い……」

しかし多勢に無勢で、綾に勝ち目はない。やにわに綾は、

「死んでやるわ！」

そう悲鳴をあげると、廊下へ逃れ出た。

そしてそのまま庭へ下りると、裏庭の井戸へむかって走ったのである。井戸へとび込まれて、自殺でもされたら大変である。妙たち三、四人が必死にその後を追って、たちまち中局の一角は大騒動になってしまった。

という点が、ちょっとひっかかるのである。しかし、

（関係があるといっても、なにも直接関係しているわけではない。ただ女たちが勝手に騒いでいるだけなのだ。だから、かえって迷惑をこうむっているのは桜之介の方なのだ）

そう考えると、話を奥右筆へ持っていくにしても、桜之介を避けずに、むしろ桜之介へ直接話をした方がいいのかもしれないと思った。その方が桜之介も、陰でこそこそやられるよりも、かえって気分的にすっきりするであろう。

そう考えると石川忠成はさっそく桜之介を呼んだ。そして桜之介がやってくると、二人は小部屋へ入って、声をひそめた。

「綾というお女中の井戸への身投げ騒ぎ、貴殿のお耳へもお届きのことと思うが……」

「はい、いささか」

「それなら話は早い。桜人形とかいうものまで出廻って、貴殿も迷惑していることと思われるが、実はその件について、さきほどお年寄の松浦さまが見えられましてな、内済にと決めたのだ」

それだけ言っただけで、桜之介にはすべてが呑みこめた。

「かしこまりました。すべてわたくしにお任せください」

桜之介は自信に満ちた態度でそう答えると、頭を下げた。

（七）

事件の処理の核心は、お広敷役人の作兵衛の始末である。

お広敷役人もある意味においては、出世コースと言えた。というのは、職種としては特にエリートコースというのではないが、しかし出世の糸口を掴むチャンスが多くあるという意味である。

というのはお広敷役人というのは、表と大奥の連絡窓口の役であり、その詰部屋も大奥の中にあった。したがって大奥の実力者であるお年寄や、時によっては御台所や、お中臈たちに接近する機会もあり、そうなれば出世の大なる後楯になるわけである。大奥は表に対して、陰に陽に絶大な力を持っている。現にそうした後楯によって出世コースの糸口を掴んだ者も少くなかった。

だがその出世コースに乗るのに、一つ用心せねばならぬことがあった。それは女たちからの誘惑に陥らないことである。お広敷役人は大勢の女たちに取り囲まれて仕事をしているわけであるが、彼女たちは男の匂いに飢えている。だから女たちは、男であればどんな男へでも、誘惑の手を伸してくるのである。とくに若い男は狙われる。

狙われたら、その誘惑の手から逃れることは出来なかった。だから誘惑に陥ったら最後である。その誘惑を逃げ切ってこそ、出世の途が開けるのである。

しかし篠川作兵衛はそういうことには無関係であった。出世はとうに諦めていたからである。そして女たちも作兵衛へはほとんど色目を使わなかった。作兵衛の関心は、一にかかって金を貯めることに向っていた。

折りしも奥女中たちは、美男の奥右筆朝日桜之介に熱をあげていた。手紙の取り次ぎをやれば、なにがしかの謝礼が入る。作兵衛はその恋文の取り次ぎを始めたのである。恋に眼のくらんだ若い女中たちは、謝礼の額に糸目をつけなかった。

（謝礼の金額が多ければ多いほど、はやく返事がもらえる）

という噂を流せば、女中たちは互いに謝礼の金額をつり上げてくるのだった。作兵衛の手へは面白いように金が入ってきた。

だが作兵衛は桜之介と面識があるわけでもなく、また桜之介への伝を持っているわけでもなかった。ということは、女中たちの手紙は一通も桜之介の手許へ届いてはいないのだった。作兵衛は、

（たしかにお預かりしました）

と手紙を受取り、しばらくすると、

（桜之介さまは大変およろこびになっておられました）

と報告してくる。しかしすべての手紙は作兵衛の手で破りすてられ、一通も桜之介の手許などへは届いていないのだった。しかし誰も直接桜之介へ、

（本当にわたしの手紙が届きましたか）

などと確める者などいないのであるから、作兵衛が届けたといえば、女中たちは届いたと信じて、その都度胸をときめかしていたのである。詐欺だといえばそうかもしれないが、

（でもそれで女中たちが喜んでいるのだから、いいではないか。そして、それが男子禁制の大奥の欲求不満解消に役立っているのだ）

と作兵衛は割り切っていた。いわば作兵衛は大奥の女中たちに、夢を売っていたのである。

だから桜之介からきた返事というのも、もちろん本物ではなく、にせ物の返事だった。手紙の回数が多くて、謝礼の金額が多い女中には、いつまでも放っておくわけにはいかないので、適当なタイミングを見ながら、

（あなたの熱意がやっと通じて、ご返事がまいりましたよ）

と、簡単な手紙のようなものを作兵衛が書いて、その女中に返してやるのである。簡単なうれしがらせの文句の末尾に、〝桜之介〟と署名でもしておけば、女中たちは有頂天で、まさか作兵衛の偽せ物などとはつゆ疑わなかった。そしてひそかに物入れ箱の底にしまったり、着

物の襟に縫いこんだりして、宝のように愛撫していた。
その返事の手紙が本物かどうかを確かめたり、また直接桜之介に礼を言ったりする者などはいなかったから、返事が偽せ物だと露見する心配などまったくなかったのである。

桜之介が考えたのは、作兵衛を大奥から追放することだった。害虫を大奥から摘出すれば、それでよいのである。だが、その追放を、不自然でないようにする工夫が必要である。

（人事異動をやって、その中にまぜてしまうことだ）

そうすれば作兵衛の追放が目立たなくてすむわけである。

それから一日おいた次の日、小規模な臨時の人事異動が行われた。五、六人ばかりの簡単な係替えで、その中に作兵衛の異動も入っていた。作兵衛はお広敷勤務から、裏庭警備という閑職への左遷であった。だがそれを不思議に思う人間は誰もいなかった。

もう一人は事件の張本人である奥女中の綾だった。しかし綾は事件の翌日から、すでに病気ということで実家へ宿下りさせてあった。だから、それをそのままにしておいて、二度と大奥へ呼び戻さなければ、それでよいのである。その点は大奥取締の松浦の方で、ぬかりなく手を打ってあった。

そして大奥へ出入りの小間物屋へは、桜人形をはじめとする、いわゆる〝桜もの〟の持ち込みを禁止した。本来であれば合羽屋へは、出入り禁止のきびしい処置をすべきなのであるが、それではかえって事件の処置を荒立てる結果になりかねなかった。合羽屋を厳罰に処すると、その反動で、今度は大奥へ売る代わりに桜人形を町で売って、町娘の桜人形ブームに火でもついたら、収拾つかないことになる。合羽屋が瓦版などと手を組んで、わけのわからぬ町娘たちを煽動などしたら、かえって大変なことになる。それをさせないためにも、合羽屋への制裁をその程度にとどめたのは、賢明なさじ加減といわねばならなかった。

こうして事件の処理は無事終了した。

そんなある日、詰部屋の机の前に座った桜之介は、

（やれやれ、これで一件落着だ）

と、大ぶりの茶椀で茶をぐっと飲みながら、

（とんだ人さわがせをしてくれたわい）

と、硯箱の隅にころがった桜人形を手にして、眼の前で軽くゆすりながら、

（なるほど、よく似ているわい）

と、自分の人形姿に苦笑した。商売とはいえ、よく似せて作るものだ。桜之介はその人形をそのまま捨ててしまおうかと思ったが、ふと気が変わって、もう一度硯箱の隅に戻した。

それは、ふと桜之介は、宿下りした綾という女中のことを思い出したからだった。もちろん桜之介は綾という女中の顔など、知りはしない。ただ少し前に、

（旗本染川民十郎の三男坊との婚姻の内伺いが出ていた娘だったな）

と思い出したからだった。

（あんな事件を起して、あの婚姻はどうなったのだろう）

自分が内伺いに裁可を下していただけに、桜之介はちょっと気になった。

それから半年ほどたった頃だった。桜之介がもう忘れてしまっている頃、旗本染川民十郎の三男坊銀之助と、綾との婚姻届が上ってきた。

（そうか、うまくいったのだ）

桜之介はほっとした。

綾が桜之介に恋こがれていたといっても、それはちょうど歌舞伎役者に一方的に熱をあげるような、一時の遊びだったのである。少し落着けば、すぐ平常に戻るのである。

桜之介はその婚姻届けを見ながら、硯箱の隅から桜人形をつまみ上げると、眼の前で二、三度、振ってみた。

予　告

90号記念

“まんじ”傑作集　刊行予定

発行日　平成15年11月1日

お蔭様で“まんじ”も今年11月の刊行で90号となります。これを記念して各同人の渾身の力作を集めた傑作集の刊行を予定しております。

ハードカバー320～420頁を予定

ご期待下さい！

和泉式部譚（三）

島津隆子

八、東三条南院、謎の焼失

寛弘三年（一〇〇六）、秋も深まった十月五日夜半のことである。式部は何度も寝返りを打ちながら、眠れない夜を悶々と過ごしていた。

そのうちどこからともなく焦げ臭い匂いが漂ってきて、それは次第に生臭い風に変わった。と思う間もなく、パチパチという音とともに赤みを帯びた煙が次の間の天井から這ってきていた。

同時に人々の悲鳴と、警鐘の音が式部の耳朶を震わせた。式部は傍らに寝入っている帥宮を激しく揺り動かした。熟睡していた帥宮は、昏睡から醒めたようにぼんやりと目を見開いたが、ただならぬ気配に飛退くように跳ね起きた。

だが、すでに真っ赤な火の舌は三方の壁代から几帳を舐めにかかっていた。

「これは大事！　しっかりするのですぞ」

帥宮は御厨子棚の唐櫃から数着の衣服を手につかむと、式部の頭に被せ、自らも被った。

「火の廻りが早い。一刻も早く南庭の池の方へ参ろう」

そう言いながら式部の手を取り、燃えている襖や障子を蹴り、火煙の中、階隠の間から妻戸を蹴り破って、素足のまま南庭へ飛び降りた。一瞬のちがいで、南院は猛火に包まれていた。

「助かったのだ！」

しかし安堵感と同時に、小式部の安否を思うと式部の胸はしめつけられ、激しい動悸がしていた。

人々の蠢く中を、式部は遣り水に沿って大池の方に移動した。池の面は炎が反射し、まるで陽が差しているように赤々と明るい。そして、池の中央に架かる反り橋の傍らに呆然と佇む式部の着物や、項にまとう長く乱れた髪を、水面からの色が赤く染めている。

式部はふと、帥宮の姿がどこにもないことに気づいた。小式部の新たな寝所となった内裏の賢所の方角に目を移すと、淑景北舎をはじめ、各御殿の檜皮葺の大屋根の所々にまで煙が渦巻き、焔が高く上がっていた。

女官たちが白着のまま、広場のある右近衛の方へ逃れてゆく姿を、式部はまだ夢の境地にいるように眺めた。

「綾綺殿にも火が移った。紫宸殿も危ういぞ」

と叫ぶ声がする。

「綾綺殿に？　賢所と隣り合わせだ。小式部はどうしたろう。ああ、どうしょう」

式部は躯中が強張るのを感じた。そして、逃げ惑う人々を突き除けながら、綾綺殿の方角に夢中で走った。熱風のなか、眼を血走らせ、全力で走る式部の視界にふっと小式部の姿が写った。

まだ童のような少年に手を引かれ、大きな包みをしっかりと小脇に抱えて、賢所前の宣陽門から陽明門へ逃れようとしている。

式部は人渦の中で突き飛ばされ押し返され、幾度となく転倒しそうになりながら、やっとの思いで追いすがり、

「小式部！」

と声をかけた。二人は足を止め、振り返った。

「あっ、お母さま」

小式部は蒼白な顔を崩して泣き出した。式部は駆け寄って、その骨細な肩を抱きしめながら、

「生きていてくれてよかった」

と両の眸に涙を滲らせた。母娘の傍らに動揺の翳りを漂わせて佇む少年を、人々は容赦なく突き飛ばして走ってゆく。

命の恩人を見て、小式部は言った。

「この方のお蔭です。ちょうど廊を通りかかられた教通さまに助けられて……」

「ああ、道長さまの……」

式部は、しばらくは後の言葉がつづかない。わが子が無事であった安堵感と、その娘が左大臣道長公の子息と連れ立っていることへの意外な思いに駆られ、ただ教通を見つめるだけであった。

「よかったですね内侍どの、母上にお会いできて」

火の粉で焼けた袖を払う小式部を見やりながら、教通は言葉を続けた。

「着物の火負いなど、どうということもありますまい。命を救われただけでも拾い物です」

小式部より二、三歳年上とはいいながら、鼻筋の通った、見るからに利発そうな教通は、こんな場でも父親譲りの如才なさで大人びた言葉をかける。

「お蔭様で助かりました。心より感謝申しまする……」

式部が途切れがちな言葉で礼を述べると、教通は、

「では、お気をつけて」

と言葉を残して、人ごみに姿を消した。

左大臣道長の三男の教通は、母は左大臣であった源雅信の娘倫子である。摂政として実権を握った父道長によって姉の彰子は一条帝の中宮となり、皇室と強力な外戚関係を結びつつある絢爛な係累の中の男子である。

後に小式部の夫となり一子を儲けるのだが、小式部にとれば、この出逢いが女としての悲劇の始めとなるのだ。式部母娘がほっとしている処に帥宮が姿をみせた。

「ああ、よかった、小式部。逢いたかった」

「ほんとうに……」

小式部は甘えるように帥宮の傍に駆け寄り、無事な再会を喜んだ。

その夜の簡単な合議で、女院、殿上人はもとより宮中生活者のほとんどは、運よく焼け残った八省院以下の大内裏に入り、仮住居ではあったが従前通りの生活に戻ることとなった。

だが、一条天皇と皇后は即刻、上御門の道長邸に移るという報告が帥宮の許に届いた。

「帝がそう決心なされたのか?」

帥宮はいつになく厳しい語調で側近に問いかけたが、急に気を取り直したように、穏やかな口調に戻って言った。

「とにかく車をやってください」

「どちらへ……でございますか」

「そうよな……」

側近の問いかけに帥宮は思案するふうだったが、

「河原の別邸へ」

式部は、そこが帥宮と初めて契った竹林の里の邸宅だと直感した。だが、側近の

「六条大路でございますか?」

という言葉に、帥宮は苛立つように、

「ちがう!」

と声を荒げた。それから、側仕えの老女二人と、警護の衛兵数人が一まとめの荷を引いて、帥宮たちを乗せた牛車の後に従ったのである。

この夜の大火で大内裏のほぼ半分が灰塵に帰した。建物の復興は、中一日置いた翌々日早朝から始まった。その総指揮者に任じられたのは、道長である。

大火の原因は、何者かによる放火だった。その日の夜半丑の刻の終り頃、安寿門近く、大蔵の一隅に火がつけられ、火の手は激しく山風を呼んで燃え上がったのだ。その時、どんな用事があったのか、右近衛に居合わせた道長が真っ先に火の手を見つけ、天皇、皇后の「夜の御殿(おとど)」である清涼殿に駆けつけたのである。

そして、先ず三種の神器を、次いで、大饗宴の朱器類、書斎の文書書籍などを持ち出させ、それらが紛失しないよう、自身の上御門邸へと運ばせた。こうした道長の迅速な処理のおかげで、天皇ご自身、道長邸へ移動せざるを得なくなったのだ。つまり、この夜を境に、道長の自邸は臨時の皇居となったわけである。

焼け出されたとはいえ、宮中南院を出てしまった帥宮は、河原の離れ家で、道長父子に対する憤懣と、諦観、そして式部母子への愛着と、さまざまに錯綜した懊悩の日々を送ることとなった。

大火の夜、ちょうどあのような時刻に、道長が大内裏に居合わせ、真っ先に清涼殿に駆けつけられたのはなぜか。さらに同じ刻、男子禁制である賢所の廊(わたり)を教通が通りかかったというのは、偶然にしては出来過ぎていまいか?

帥宮が疑えば疑うほどその理屈は正当性を帯びてくるのだ。総ては巧妙に仕組まれた謀(はかりごと)ではなかったのか。

道長の権勢にも屈しない剛直な藤原実資らと語らって、あわよくば純然たる皇室の再興を目論んでいた帥宮である。だが、あの夜の内に天皇を道長邸に招き、小式部までが生死の恩を蒙るとあっては、自身の志が大きく挫折したことを認めざるを得ない帥宮の心境である。

そのような非常手段を講じ、命を賭してまで天下をわが一門の掌中にしようとする、鬼気迫る道長の執念と権謀に比べれば、あの賀茂の祭りでの演出など、まるで子供だましのようなものではなかったか。

帥宮は一切の世情から盲(めし)いた者のように自嘲的な表情を浮かべるのだった。

一方、南院を出てからの式部の生活は、帥宮とだけ向き合えることが喜びであった。

小式部が宮中に出仕し、帥宮が政務で留守のある日、式部は父雅致から贈られた銀製の硯箱と巻紙を文机の上に並べ、躊躇(ためら)うことなく筆を起していた。

自分が死んだ後、こんな女のことなど誰が思い出してくれようか。せめて生きた証にものを書くことの意味を想い、今こそ情熱を傾けて書くことだと、式部は実感したのだ。

未だ自愛の気持はあるが、いつ突然の死を迎えても不思議のない世情と年齢である。

ならば帥宮との起伏に富んだこの事実を、新鮮な気持の失せぬ間に書き綴らねば……。豊饒さを老後に待つなどという悠長な気持にはなれない。書くことで帥宮は永遠に私独りのものになる。

一切の過去をこの日記ふうの綴りに収めてから、帥宮に正室の座を願うことにしよう。

式部はまるで熱病を患ったように日記ふうの物語を書き進めるのだった。

九、帥宮の死

〝帥宮急変〟の知らせが式部の許に届いたのは、翌寛弘四年十月一日夜半の刻である。

式部は取るものも取り敢えず、二条大路の神泉苑に駆

けつけた。一体何が起こったのか？

宮中さし廻しの輦車の中で、式部は不吉な予感に脅えつづけた。歴代天皇の広大な遊園庭園である乾臨閣に入ったとき、内部はすでに多くの人々で混乱していた。

帥宮の臥す部屋に案内された式部は、一目見るなり帥宮の変り果てた顔色に驚愕した。青く黒ずんだ顔はまるで蝋人形のようだ。

ああ……この人の生命が奪われてゆく……

と式部は直感した。次第に生気を失って黒ずむ瞼を時に引き攣らせ、色褪せてゆく唇をわずかに開いて昏睡している帥宮に顔を近づけながら、式部は全身に絶望の色を浮かべた。

典薬寮から駆けつけて帥宮の枕辺に並ぶ和気・丹波といった名医も、なす術なく見守るばかりだ。

式部は帥宮の顔をじっと見ていることに耐えられず、それら高名な医師たちに訴えるような、縋るような眼差しを向けたが、ただ諭すように、そっと首を左右に振るだけであった。

だが、この場の沈鬱な空気は、帥宮の胸元にどっと崩れ折れた式部の慟哭によって破られた。

「孤独を耐え忍び、いまひとたびの夢を見た女に、再び闇の世界へ帰れとおっしゃいますのか。それは……嫌でございまする」

式部は誰憚ることなく肩を震わせて、呻吟しつづける。周りの人々は、情を交わすべきでなかった君に縋り、その恋に浮身を捧げなければ生きられない女の、絶望に身悶えする嗚咽を黙って聞いていた。

そのとき、閉じていた帥宮の目が微かに開いて、一筋の光を含んで燃え盛るのを式部は見た。

「ああ……帥宮、どうしてこんなことに……」

痛切な思いに喉が詰まって言葉にならない。だが、帥宮は露に取り乱す式部に応えるかのように、一瞬、全く精気の失せた唇に懐かしげな微笑を浮かべてみせた。それから取りすがる式部の肩を、あらん限りの力を振り絞って抱き留める仕草をしたが、その力も瞬時に尽きて、静かに永遠の眠りに落ちて逝った。

帥宮の亡骸は大内裏本殿に安置された。直ちに道長からは入棺に用いられる絹が届けられた。

遺体は北を枕に臥し、純白の絹衣を着せられ、その上に各皇族方や近親者の衣をかけたが、もとよりそのようなことは、式部に許されるはずもなかった。

死因は皆目わからずに、

「遊宴の席上突如嘔吐し、容態が急変」と一言公表されただけであった。

この時を境に、宮中における式部の立場は無に等しいものとなった。

厳粛をきわめた葬儀の末席で、肩を寄せ合っている式部と小式部の姿は憔悴の極みであった。

冷たい秋風が立っている。

鳥野辺の寺院での法要後、帥宮は荼毘に付された。そして、三方を土塁で築いた塚に宮の棺は静かに埋葬されていった。まるで挽歌のように粛条と秋雨が降り始める。

空はどこまでも薄い灰色に覆われて、辺りに漂う凍えるような冷気と雨滴の流れが、夕暮れ近い大地に溶け合う頃、会葬者は一人二人と去って行った。

だが、式部は塚の前にいつまでも佇んだまま動こうとしない。ほつれた長い髪が両頬に散り、風にそよぐのを小式部は見ている。黙祷というには余りにも呪いに満ちて、幽鬼迫る母式部の相貌である。

時折、一陣の強い風が吹くと、雨は霧となって横なぐりに舞うが、黄昏ゆく空も、泥濘んでゆく地表も、残り葉の少い杜の紅葉も、奈落の底に沈んでいる風景に小式部には見えている。

「因果は応報となって現れるとか。現証はげに恐ろしきものよな……」

真新しい卒塔婆に合掌している式部の背中に、帥宮の北の方が憎悪に満ちた言葉を投げて過ぎる。しかし、長旅に疲れ果てた旅人のような式部の耳には、何の感情も与えはしない。

まるで蒼い氷の面にも似た式部の横顔をみつめる小式部の唇からは、深い吐息がもれるばかりだ。

頭を垂れる式部の肩に銀糸のような雨が滲み、香を焚く覆いに煙が縷々と縋る。

ようやく腰を起した式部は、すっかり濡れてしまった卒塔婆を泣き腫らした目で眺めやり、別れを惜しんで合掌する。

橘の枝に文を結んで、にこやかに西の京の荒家を訪れた、帥宮との出逢いの場面が、涙に濡れた式部の双眸に懐かしく浮かんでは消えるのだった。

二日の帥宮の崩御、七日の葬儀後しばらくして、小式部の内侍役が解任された。当然のことといえば当然だが、式部には非情な仕打ちに思われた。それでも亡き宮の女人として一年間の喪に服すため、式部は小式部を連れて、京の外れ八条辺りの元の家に戻る身となった。

身を清め心を慎み仏事に専念するようにとの通達を受け、母子はそのような生活に明け暮れた。

喪中の室内には鈍色の縁をつけた簾が垂らされ、同色の畳と几帳を用い、調度品は黒色と定められるほどの厳しさであった。

十、貴公子に見初められた小式部

鶯色の平服を着た少年貴公子が雨眉車から式部の住いに降り立った。道長の三男藤原教通である。その表情

にはあの大火で別れて以来の親近の情が溢れている。
教通の突然の訪れに懐かしさよりも驚きを隠せない式部であったが、小式部は含羞の愛らしい風情をみせた。
ああ、やっぱりこの娘も、そのような歳に……
式部は閉ざされた心の片隅に、仄かな灯が点ったような感慨を抱いた。
「何をお持ちになったのでございますか？」
小式部は教通が持つ包みをみて尋ねた。
「当ててごらんなされ」
そう言いながら教通が包みを解くと、桜と橘の枝が現れ、花弁が二人の足許に散った。
「そ、それは左近の桜と右近の橘……」
と言葉して、小式部の頬はみるみる紅潮する。それは紫宸殿を正殿とする皇居を表徴する銘木として、御殿前の左右に植えられている木の枝にちがいなかった。
「その枝々には小鳥たちがやってきて、可愛らしい乙女を遠くにやっておくのは嫌だと、啼いております」
「私はもういちど、その小鳥たちの仲間になれるのでしょうか」
小式部の必死の問いかけに、
「父上からの、たっての伝言ですよ」
と教通は笑って答えたが、小式部の、
「でも、母はどうなるのでしょうか」
という不安げな言葉に、教通はつづけた。
「右近の橘ですよ」
「ええっ！　それでは二人揃ってということでございますか？」
流れる涙に、いつの間にか小式部の頬は濡れている。
板簾の陰で二人の会話をじっと聞いていた式部は、車に乗るとき教通が、
「かわいそうな小式部。予の小鳥にしてあげようか」
と囁くのを聞き漏らさなかった。
教通がもたらした道長からの伝言は、落魄と孤独の式部母娘にとって、恩恵の歌のようにも聞こえた。嬉々としてその日のくるのを待ち暮らした小式部は、当日、浄めた髪を式部に梳してもらった。
今のこの娘にとっては羞恥や道徳といった世の中のことなどどうでもいいのだ。
故宮の生々しい憶い出すらも問題ではない。過去のじめじめとした感傷などおかまいなく振り切って、教通の言葉に応じ、相手の気持に合わせようと喜色を満面にたたえている……。それでいいのだ。
鏡の中の小式部を見やりながら、未だ醒めやらぬ過ぎ去った日々の記憶のこちら側に、嬉しさが宿り始めていることを感じた式部は、現実的な自分に狼狽を覚えるのだった。
そして、正室への夢もあっけなく葬り去られ、女流歌人として名を成すことも、今は大して意味のないことに

思えていた。
式部はただ余生を静かに暮らすことで、自らを慰め安んじようと密かに覚悟していたのだ。
だが、再び訪れた宮中伺候の沙汰は、小式部にとっては必要な教育の機会でもあるだろう。十二歳とはいえ、花の蕾の咲き初めにも似た、蠱惑的な容姿に加えて、背中まで豊かに流れている香ぐわしい柔らかな黒髪。この美しさがあれば、教通に限らずどんな高貴な子息たちだって、心の琴線を揺り動かされずにはいないだろう。
自分がどれほど過去に恋々としたところで、決してこの娘のために過去は動きはしないのだ。娘の現実を見つめることで、追憶はどんどん胸の奥深くに追いやられるのだと、式部はしみじみと思うのであった。

十一、中宮彰子に仕える

左大臣・内覧として今をときめく藤原道長の薦めで、式部と小式部が揃って中宮彰子の宮仕えに上ったのは、寛弘六年（一〇〇九）の桜花が爛漫と咲き匂う季節であった。
焼失した大内裏は、二年余経った今日ことごとく再建されていたし、後宮の内部も大きく変貌していた。その中でも「藤壺」と呼ばれて飛香舎に住む中宮彰子の御殿は、父道長の後ろ盾によって、断然他を圧倒していた。
そこには紫式部、赤染衛門、伊勢大輔などの他に大斎院から鞍替えした馬内侍など才女たちが、色とりどりの華やかさで文才を競っている。
そこにもう一輪の花、和泉式部が加えられたのである。すでに歌人として名声が高かった式部は、中宮彰子からも歓迎され、喜んで女流歌人たちとの宮仕えに入った。これら色彩豊かな才女の群の中で、彰子は〝輝く藤壺〟と謳われている。この藤壺では殿上人の琵琶、六琴絃、そして、舞姫による藤花の宴が、他を睥睨するように夜毎催されているのだ。
その雅びは見る者の目には痛いほどの夢幻美に溢れて映り、精緻を極めた華麗さは、とてもこの世のものとは思えない雰囲気を漂わせている。
置かれた環境が女をいっそう美しく磨き、造り変えてゆくのであろうか。
早くも何人かの殿上人や公家たちが、何かにこと寄せては、年甲斐もなく小式部に誘いの触手を伸ばし始めていた。
だが、遊び慣れた男たちに限って、柔らかな言葉と礼儀正しい装いが身に備わっているが、かえって油断がならないと、さすが小式部にもわかってきている。
反面、艶聞家への道を歩みはじめた若い貴公子たちは、男の典型として、女になる前の娘よりも、年嵩の人妻や正室になりそこねた側室や、それに未亡人などを好む傾向があった。そして、その焦点は和泉式部だと噂されは

じめている。

ある日の宵のことである。

恒例の弘徽殿女御十番歌合に、五歌仙を代表して式部が出席することになった。

長い廊下の曲り角には燈籠の灯が点り、庭園の所々に篝火が焚かれて、季節の花々が仄かに浮かんでいる。

式部は麗景殿を過ぎるとき、飛んできた蛾を袖で払うはずみに、小さな匂い袋を落したが、気づかずにいた。

しばらく行くと背後から足早に近づく人の気配があった。

「匂い溢れるお方でも、このような可憐なものをお持ちなのですか？」

と声をかける男がいた。振り返ると道長の兄右大将藤原道綱であった。

「あらっ」

と式部が小さく声をあげる。

「宵の廊での拾い物、捨てようかと思いましたが、余りに愛らしいので、つい……」

道綱は金糸と銀糸で織られた小袋を見せながら、親しみある口調で言う。式部は思わず袖を口に当てて、くすっと忍び笑いをする。

歌合の会場で隣り同士になった道綱が、競詠の最中、式部の耳元に口を寄せて、

「橘の香は未だ消えませぬか」

と囁いたことの意味を考えていた。

式部母娘の宮中伺候の遣い役になった教通が、小式部だけの意で桜の小枝を携えたとき、その場に立ち会っていた道綱が、

「宮中の守りは左近の桜、右近の橘でありますぞ。一方だけでは片手落ちと申すものじゃ」

と庭に降り立ち、自ら花をつけた橘の小枝を手折り、教通に渡した。そして、

「意味はわかっていような」

と教通に念を押したという話を、式部は後で女官から聞いて知っていた。

故帥宮は橘の花と共に、今なお式部の胸に生きている。おそらく生涯消えることはあるまい。そんな痛ましい魂を、道綱は橘の花で愛惜してくれたにちがいない。

翌日、式部は心の沈黙を破るように道綱宛に筆を執った。

さめる見て世にあらじとや思ふらん
あはれを知れる人の問はぬは

数日後、道綱は式部を室町の自邸に招いた。東の総門をくぐり、中門から邸内に入ると、今をときめく道長の兄の屋敷にしては侘びて古めかしいが、これがあの噂に

名高い『蜻蛉日記』の作者の住まいなのだと思うと、総檜造りの建物はえもいわれぬ典雅さにも写る。

式部は幾分夢みがちな心地で、西の対から透渡殿を通り、釣殿に案内された。

道綱は式部に唐菓子を勧める。珍しそうに指でつまむと、袂で隠すようにして、そっと食べる式部をみると、道綱は眼に涼しい微笑を浮かべ、静かに話し出した。

「女人がどのような身分になられましょうと、真に幸せか不幸かは誰にもわからないものです。女人にはもともと位や血筋などはないのです。その女の持つ外面的な魅力や内面的な気高さこそが、家門や血統に優る役割を果たすからにちがいありませぬ。女人の生涯にとってはそれだけが唯一無二の財産であり、幸せというもののようですね」

語るにつれ、道綱の言葉は式部の心を柔らかい歓びで満たしはじめていた。そして、自ら感傷に浸るように、式部の目は涙でいっぱいになった。

青みがかった眸の奥に光る何とない悲哀の色が、常に冷静さを失わない道綱の心を不思議にゆり動かしていた。

あの宮中にも、衆人環視の的として選び抜かれた麗しい女人は何人もいよう。いや、この屋敷にだって。だから美貌は必ずしも道綱にとって珍しいものではない。

しかし、それは歪むことのない円を描いたように、ただ欠点のない美に過ぎない。竹筒の中を風が吹きぬけるように、感動すべき何ものもその胸に刻みはしない。今、道綱が目にする悲しみの眸は、憂愁な憶い出を秘めて濡れている。それどころか感傷の果になお行き着くところをまさぐる魂の輝きさえ窺わせている。

だが、道綱はこれ以上自分の感情が深入りする危険を察知して、保身の本能を働かせてもいた。

道綱は話題を変えた。

「式部さまのように文筆に長けた女人たちは、夫との離縁、死別などの薄幸を因として、それぞれの珠玉の作品を生んだようでございますな。それに比べ、私の母は一受領の出でしたが、ともかく名家である藤原一門の総帥格である父に嫁ぎ、妻として一生その場を離れることはありませんでしたよ。しかし、やはり身分の差は厳然としたもので、正室になることは生涯叶わなかった」

道綱は遠くを眺めるように、白い蓮の花が浮いている眼下の池へ目を移した。そして、さらにつづける。

「今でもありありと浮かぶのは……今夜、夫兼家は訪れるであろうかと、不安な気持で待ち侘びながら、やっぱり来てはくれなかったという、もの哀しげな母の姿です」

道綱の言葉を聞きながら、式部はその物語の中で、この男の母が、夫が来て門戸を叩くのを、息を潜めて待っている場面や、車の近づく気配に心躍らせるが、轍の音を軋ませて去ってしまう場面などを思い描いていた。

「……時に母は思い余って、夫の正室に文使いをやり、

屈辱も顧みず、苛まれる心底の苦悩を訴えもしたのでした。太政大臣として位人臣を極めた父と共に、京極にいる異母兄の道隆や道長、それに妹たちと、室町で母と共に侘しく暮らす私とを比べて、時には思い余って、幼い私の手を引いて山寺に籠ってしまうこともございましたよ。そんな母と子の幾歳月の流れの中で、さまざまに屈折した影を落して今日の私があるのですな」

式部はその〝物語〟の作者名が「道綱の母」となっているところからも、母がその子の不憫を思い、後世に永く記憶されるよう、祈りにも似た心でその名を書き留めた気持もわかるような気がした。

翌日の夜遅く、研ぎ澄まされたもの思いに耽る式部に一通の文が届いた。

「昨日は思いがけず楽しい語らいのときを過ごさせていただきました。式部さまを前に、汲めども尽きぬ美酒を独りで飲んでしまったような一方的なものでしたが、愉しさは心を奥底から酔わせてやみませんでした。だが、醒めてみれば、その愉しさを思い出として受け止めるのも、世の人の常と申すものでしょう。

であるならば、初めから醒めていることこそ、放心と悲哀から逃れ得る唯一の途と思われます……」

文を持つ式部の手が微かに震えて、空虚な嘆息を洩らした。

この人もまた世の掟の中で、自己の保身に生きてゆく人ではないか。女の切実な生きざまを、繊細な傍観者として眺めるだけの男。初めから醒めているなら、その母のような忍従の生き方を美徳とするのも肯けようが、この文からは、決して母を越えることのできない独りの男の独白を読み取るばかりである。

雲ひとつない夜であった。

式部は静かな庭園に落ちている月影を見つめながら、すべては遠い夢になってしまった、あの純粋で情熱迸る帥宮の面影と、交わした愛を想い、ひたぶるに宮が恋しかった。

捨てはてむと思ふさえこそ悲しけれ
君に馴れにしわが身と思へば

悪流修羅

リストラの虚構（第4回）

中泉聖司

（七）

ゴールドコーストのそと海からパラダイスポイントに沿った海溝を進入すると、羊歯のように切り込まれた内陸を海水が埋めている。

ベニスのようなスケールの大きい水郷のように見える所や、場所によってはスペインのリアス海岸のようにも見える、が内陸に広大に広がる海はサンクチュアリコーブからジャコブスウェルに至るまで船を走らせても終わりを見ることが出来ないほど複雑に入り組んでいる。

広田は去年の夏、ヘリをチャーターして空から山野社長と見た風景を思い出していた。

ヘリを飛ばして上空から眺めると、水辺の陸地は人手の指のように内海に突き出して、その陸上には色とりどりの豪奢な別荘が立ち並んでいる。

この別荘群は海からクルーザーで接岸する訪問者を受け入れることも出来るし、陸地伝いに車で遊びにくるゲストを迎えるための車寄せ、両方の入り口を備えている。

グレッグ、ホーソンの屋敷もこの内海に面して、サンクチュアリコーブの南東区域にある。

ホーソン氏専用の白と青を基調に塗られた豪華なクルーザーが静かに停泊していた。

その他に大型のヨットとモーターボートが寄り添うように繋留されている。

当然、なにもおこらなければ山野社長とホーソン家の家族が平穏に生活をしているはずであった。

車寄せにタクシーを付けて車を降りると、ホーソン夫妻は悲しそうな表情で広田を迎えた。

「ミスター山野を、思いも寄らないことで失ってしまった。言葉もありません」

「お嬢様やミセス菊枝はさぞかし悲しみに暮れていらっしゃることでしょう・・・今ごろどうしていらっしゃる

のかしら」
ホーソン夫人は涙を流した。
「マスコミがいつものように騒いでいるために機密を守ってくれるホテルに移りました。いま、親族の到着を密かに待っています・・・」
「お可愛そうに・・・あれだけたくさんのカメラが構えていましたから」
「家族には何の責任はないのですが、家族が悲嘆に暮れる姿を追いかけるのです。日本のマスコミは」
「日本を逃げてきた社長が自殺をしたという報道が当地の新聞にでていました」
「自殺はしません！山野社長は・・・絶対にそうですよね！」
広田は秘密を知った二人の顔に同意を求めた。
二人は暗い表情をして頷いて、
「わたしも間もなくお会いしに行くでしょう・・・あんなにお元気だった・・・ミスター山野が・・・」
レースのハンカチーフを目に当てる。ほのかに香水が漂い、風にながれる。
「あの楽しかった夜のパーテーは何だったのかしら・・・悪い夢を見ているようだわ、でも、わたしがお伺いしてマナーを知らないマスコミに知れては・・・ご迷惑をかけられないわね・・・」

計画では山野悦治が、あの夜ホーソン氏の友人の船を標よわせて二人の男に誘導され、船にはアクアラングを運ばせて、それを着込むと月明かりの海を三人で潜水しながらホーソン家の別荘に泳ぎ着き、深夜にはホーソン氏から広田の携帯電話に連絡がくる予定であった。
娘の紀子と探索をしたあのビーチで不信に思いながらホーソン邸に何回も電話をいれた記憶が蘇える。
不在のためなのか、受話器をコールする着信音が耳の奥に残っている。
今となっては、ホーソンの友人が所有する大型のクルーザーは予定通りに登録地、シーワールドの船着場に何の疑念もなく繋留されていたからホーソンとの関連や失踪した日本人社長の関連に触れる機関や人間もいない。
この第一幕目の計画が、挫折した。今になって見れば秘密裏に計画したことが事実の解明に一番の障害になってくる。
このからくりを誰かが利用したのではないのか。
誰が、どのように、この計画を察知して、狂気の犯罪を実行したのか。
余りにも広大な外地で、情報のない事件をどのように現地の刑事たちが捜索しているのだろうか、広田は、いま、なにから手をつけたら良いのかがわからなかった。
「山野社長がお願いしていたガイドの二人はどうしていますか」

当然、ホーソン氏が紹介したガイドにはホーソン邸まで海から案内する義務がある筈だった。アクアラングのつけ方を教え、海中散歩の技術をトレーニングされたと山野は言っていた。子供じみた芝居を楽しんでいるかのような山野の楽しそうな表情が浮んでくる。
「・・・・」
ホーソン氏は困惑した表情で両手を振った。
「彼らはキャンセルされた、と怒っていたのです。あの夜の計画は中止された、と電話を受けたのです」
「だれからですか?」
「最初はガイドのマロン、そのすぐ後でミスター山野の声でかかってきました。わたしがライオンズクラブの会合から家に帰還したとき電話がかかってきたのです」
「わたしもミセス、キクエとお別れしてすぐに戻りました、わたしが電話を取りましたから、間違いはないわ」
ホーソン夫人が同調した。
「どこからかけたのだろう・・・」
広田は山野が海に消えていく様子を思い出しながら聴いた。何時間後に掛けたのか?
「何時ごろでしょうか」
「ミスター山野のコンドーミニアムから二〇分くらいで帰りましたから、多分十時過ぎでしたわ」
「どこから電話をかけたのだろう?」
山野社長が計画的に失踪したあとで必要な生活用品はホーソン邸に運んでいたが、あの夜、広田が山野を海に送った時には携帯電話は所持していないはずだ。
「あなたのクルーザー、あの船からの電話をしたのかもしれない・・・船には電話がありますね」
ホーソン氏は怪訝な表情で両手を広げて否定した。
「それは私の船ではありません。私の友人の船でもなかったから、わたしの部下のガイドは何も知らないのです。当然、わたしのクルーザーを出すことは最初から計画にはなかった、と、いうことです。」
確信をするように、頭を揺すっている。
「わからない・・・」
山野にアクアラングを着けたスタッフが入れ替わったと言っているのか。
「誰かが、擬装して、私の部下に計画の中止を告げたらしい、ですからわたしの部下は受け取るべきギャラのロスを償えとバーで飲みながら私を待っていたといっているのです。クルーザーを出した二人は別人だった、と考えるほかはありません。」
広田は愕然とした。
「わたしは、いま、すぐに警察に通報して真実を報告すべき立場なのです。しかし・・・」
内海の反射を受けてホーソン氏の瞳孔が碧く翳った。
「今は、この件には関わりたくない・・・」
「なぜです!今から私と警察に行って、全てを話して、

捜査員に協力を頼んでくれませんか?私も擬装工作に関わっていたので罪になるでしょう・・・が、覚悟をしています。真実を話すべきです。」

ホーソン氏の目に訴えながら広田は覚悟を決めていた。

景色が白ばんで両足から血が抜けていくような不安を覚えた。

指示を受けて擬装をしたことだと言っても、今になってみれば未熟な不正だと笑ってすませる問題ではないだろう。国と国との国際問題に発展するに違いない。マスコミを避け、国会で証言をすることから逃れるためだけで国内を脱出させたこの行為は更にマスコミを刺激し、非難を浴びて両国民の顰蹙を買うことは疑う余地も無く、これに秘書として加担してきたことが、重い重い後悔の波となって胸に広がりはじめていた。

「私は、今度クイーンズランド州の州知事に立つことが決まっている。とても困ります!この事件に私は関係ありません。巻き込まないでほしい・・・ミスター広田!スキャンダルは日本もこの国でも有権者の投票に莫大な影響を与えるのです。」

「秘密にして欲しいの・・・お願い」

ホーソン夫人がまた香水の染み込んだハンカチで眼を拭っている。

人間の死に対してこの人たちはどう考えているのか、自分の立場の不利益に結びつくことからは逃げようとする考え方に、広田は衝撃を受けていた。

「今回は、私はこの計画を受けるべきではなかったのかもしれない、ミスター山野はゴルフの友人でジェントルマンだったから・・日本で政界疑獄に巻き込まれて、しばらく姿を隠したい、と、言う話はブラックなジョークだと考えていましたが、日本のマスコミを見たときから少し無理があるように思えていた・・・」

夫人に向かって同調を求めた。

「わたしも楽しいゲームのように考えていましたの・・・ミスター山野もミセス、キクエもお遊びの達人だったしね」

広田はだまってホーソン家をあとにした。

今日はこれ以上話したくはなかった。このまま話を進めれば、口の奥まで溜まっている怒りの言葉がでるだろう!怒れば、不正を共有した自分がみじめになり、人の心は動かすことはできないだろう!

警察は新しい事実が判明しない限りは自殺扱いで捜査は打ち切られる。

とりあえずは、死者の弔いをしなければならない。

(八)

一時帰国をした広田は役員会に呼ばれた。事実を報告した後で江本秘書室長とともに、他の役員の質問に答える予定で部屋の隅の椅子に待機をさせられていた。

「報告を受けて、今後の様々な処置を決定するわけですが、そのために前提として役員会で審議していただきたい事項があります。」

突然、坂口専務が議題を変えた。今は当然のように社長席にどっかりと着いている。

「二人を退席させますか。」総務部長が坂口専務にきいた。

「いいだろう、そのままで。すぐに彼らの処分をしなければなりません。役員会の総意であることを判ってもらいましょう、続けなさい!」

「ただいまから当社の社長を選任したいと思います。坂口専務を新代表取締役に、役員の総意で推挙させていただくことをわたしから提案させていただきます!」

何人かの役員が頷きながら坂口を注視した。

「そうやね!まあ先先代の大利根さんの後継者としてそもそも選任されるべき社長でしたなあ。坂口さんが山野さんに、あの時社長の椅子を譲らねば今日の不祥事は起きなかったなあ・・・」

島野常務が愚痴っぽい言いかたで賛同の言葉を投げかけて、役員の動静を鑑みた。

口々に同意の意向を役員らが呟き始めた。

島野常務が発言したその内容、山野を社長に選任した経緯には島野の虚偽が含まれていたが、大勢は真実が判っていても反論をしない。

坂口専務が就任の挨拶をするために立ち上がって手に持った眼鏡をかけ直した。

「ずいぶん荒っぽいやり方だ!独善的だ!」

「誰だね、今の発言は!」この時、役員室の雑談は静止した。

沈黙を破って山本取締役が立ち上がった。

「商法上の規定では、取締役の互選で選任できることになっていますが、当座の業務の処理は会社の内規定があり、すなわち代表取締役に事故があったときは専務取締役がその任務に当たる、で良いのではありませんか・・・」

静かな空気の中に、立ったままの坂口専務の顔が白く血の気が引いていく。

部屋の隅で注視をしていた広田には専務の過敏なプライドに亀裂を起こしている症状が読み取れた。

山本取締役は広田の父親と大学のラグビー部を通して師弟関係にある。この事実を専務は知らない。

「今日の世界不況のなかで当社の経営基盤はしっかりしています。しばらくは山野社長の敷かれた分業責任体制で出来ます。これまでと何ら変ることはありません、もう、しばらく次期の社長の選任は待つべきだと考えます。すぐに新体制を敷き経営手法を変えることは会社全体に対して利益にならないことも出てきます。時期尚早ではあるまいか、と存じます」

坂口専務の非人情的、画一的な技術的手法に対して山

本は対抗している。
実際、社内は混乱し始めていた。
坂口が社長になると計数管理のアメリカ的経営手法を導入して、これによって人事は一新される。
山野は時流に遅れている、世間並みの改革を山野はやらなかった、今度こそ社内の大改革を大義名分にして、坂口は長期在社の社員をリストラしていくに違いない、と社員が囁いているのを広田は知っていた。
事実、これまでの専務や、その親派の役員らの発言は山野のやり方を否定し、逆流を目指しているように思えた。
広田は彼らを評価できなかった。実際、坂口流のやり方の流れの中では現在のポジションを追われることは間違いなく、覚悟をしていたし、うんざりしていたのだった。
広田の責任追及は当然のことだが、坂口専務は代表権を満場の役員から請われて公式に社長の権限を取得し、今まで山野に尽くしてきた人情派の部課長をリストラして自分の体制を敷いてスタートできるものだと決め付けていたようだが、山本取締役の発言に不快感をあらわにして、
「山本君は、わたしが社長になることに不満らしい、その他の役員の中に、同様のお考えの方がいますか」
誰も口を開かない。山本の顔が、今度は赤く染まった。
今は堪えているに違いない。
坂口専務は無言の山本を斜に見ながら続けた。
「役員会にも計らず、また誰に連絡も無く、この会社の責任を逃避したとも考えられる山野社長は、失礼ながら更迭されても仕方が無い、と考えますがね・・・」
振られた言葉に山本は静かに答えた。
「そう申されても、山野社長のご功績は認めてあげるべきです。もちろん現体制を創業された今は亡き大利根会長の体制を引継がれ発展させた山野社長の経営手腕は業界の認めるところであります。今は故人を誹謗する時ではないと存じます。このような事故に遭われたのもS議員に迷惑をかけられない・・・と、考えられて、国会での証人尋問だけは・・・と考えられたのではありますまいか」
「どこに、その証拠があるのだね」
「証拠と言われましても、そのような次元の問題ではなかろうと存じます。いまの、大方のマスコミと国民感情は、一過性の次元でしかありません。今、みすみす政敵の罠に落ちるほど馬鹿げたことはない、とお考えになったのではありませんか」
「キミこそ馬鹿げた考えです。経営者が今の世論に逆らって国会から逃避したり、会社を放棄してどこが良いのか！経営を放棄して、会社の信用を失墜させ、やがて従業員を路頭に迷わせておいて、どこのどこに功績を称えられましょうか！あとはどうするつもりですか！」
「会社は信用を失っているわけではありません、山野社長に同情的な株主さんもたくさんいらっしゃいます。あくまで、日常の業務は現行体制で、全社的改革問題は役員会の総意を求める、と言うことで申しあげました。次回の株主総会の意見も聴き、今は全社員が一丸になって、運営を考えることが大切だと考えます・・・」
広田は、一瞬脳裏に明かりが差し込んできたような気がした。
山野は山本取締役に計画の一部を話していたのだろうか。現体制、経営計画を維持して総会を待てとはどういう意味なのだろうか。
山野社長が描いていた計画を、自分と同じように知っている人間が役員の中にいる筈だと漠然と考えていたことが、事実として判明したように思った。
山野が事故にあった事実、いや、殺人の謎があるかもしれない、と、考えていた。
（つづく）

祝出版
相原精次著
「天平の母 天平の子」
定価二〇〇〇円 彩流社

都市銀行『爆発物処理班』（五）

宅見勝弘

本作品は、作者の体験に基づいていますが、登場する人物・企業等についてはフィクションです。

【前号までのあらすじ】東西銀行に勤める武神優一に、暴力団組長の射殺事件の一ヶ月後に脅迫電話が架かってきた。さらに半年後に、射殺事件と関係が有るのでないかと疑っていたトーキョーファイナンスから社長死亡の連絡があった。

十、貸し剥し？

「お前のところの銀行は、俺の会社を潰す気かっ」

東西銀行大手町支店の一階応接室で、優一に向かって林田社長は大声で叫んだ。ヤニで黄色くなった歯の間から唾が優一のスーツに飛んできた。

午後二時過ぎでロビーが預金や振込の個人客で混雑する時間帯であった。林田社長の声はロビーで待っている顧客に聞こえている筈であった。

一九九八年三月十日火曜日、決算期も終りに近づいて忙しい日が続いていた。

「この金が無ければ、ウチの会社は潰れるんだ。銀行は俺に死ねと言ってるのか」

唾を飛ばしながら話すと、長い舌で唇を舐め回した。

林田社長は五年前に中堅商社から独立して、美術品販売会社アールオンを設立した。創業以来の連続赤字で、常に資金繰りが厳しかった。

十五日期日の手形決済資金が無いということで、融資の申込に来店したのであった。十五日は日曜日のため、実際に手形決済資金が必要なのは一六日になる。

「銀行の都合の良い時ばかり貸して、会社が本当に必要な時には貸さないし、卑怯な銀行だな。晴れた日に傘を売りつけて、雨が降ったら傘を取り上げるというのか」

下手に反論すると、火に油を注ぐだけだ、と思い、優一は黙って聞いていた。

「貸し渋りか。いや、貸し剥しだ。先月は五百万円を無

理やり返済させたからな」

期日完済を条件で五百万円の融資をしていた。社長から期日延長の申出があったが、絵画代金の振込で返済する条件で融資しており、その代金で返済させていた。

「銀行がそうやって貸さないで返済ばかり進めるから、俺達中小企業が苦しんでいるんだ。お前らは分かっているのか」

（社長は資金繰りが厳しくて苦しんでいるのだから、怒鳴られるとか唾を架けられるくらいは耐えないといけないな）

優一は自分に言い聞かせるようにして、口を噤んだ。午前中も資金繰りの厳しい会社と同じような交渉をしていた。

「俺がどれだけ銀行に協力したと思っているんだ。それなのに恩を仇で返す気か」

社長は既に七本目の煙草に火を点けていた。優一は煙草の煙が苦手であったが、そのような素振りを見せないように抑えていた。

林田社長の言葉が途切れたところで、優一は話を切り出した。

「新しい決算の内容が、かなり悪くなっています」

東西銀行では取引先企業の決算書を分析して、財務内容を「A」から「H」までの八段階で格付を判定していた。

「F」先つまり六段階目以下の決算内容の先には、原則として新規の融資をすることができなかった。

林田社長のアールオンの格付は、前年度までの「E」から新しい決算で「F」に下がっていた。

財務内容が「E」の時は、急な案件であっても融資に応じていた。しかし、格付が「F」になったため、追加融資はできない、というのが銀行の判断であった。

「それに、現在お借入している分の毎月のご返済が遅れています」

格付以前の問題で、アールオンは毎月百万円の二月末分の返済が遅れていた。延滞中に新規の貸出は東西銀行で認められていなかった。

「一千万融資してくれれば、その内の百万円で遅れている分は返すと言っているだろ」

「遅れている分の返済資金を融資することはできません」

「返済日の前に融資をしていれば、そもそも延滞なんか発生しなかった筈だ」

「他にも、当座預金の残高不足が多すぎます。小切手や手形が交換所に回った当日に、私の方から連絡して、やっと入金しているのでは、困ります」

当座預金の残高不足が午後三時近くまで消えないことが、平均して週に二回以上も発生していた。

「美術品の仕入れは、その場で支払ができれば、安く買い叩ける。一千万円で買って、一千五百万円で売ったこ

とも有る。手形や小切手が回ってきたら、銀行から必ず連絡が来るのだから、いちいち管理してられない。三時までに入金しているのだから、銀行に迷惑はかけていないだろ」

「この前は三時を過ぎていました。銀行としては、御社が小切手や手形の決済が来る都度、ご連絡するということはできません」

残高不足になると、朝九時から入金になるまで、四、五回は電話していた。

「決算内容の悪化、延滞の発生、預金の残高不足、このような状態で新規のご融資はできません。申し訳ございませんが、月末の約定返済分も含めて、資金繰りの再考をお願いします」

二年前に二千万円を運転資金として融資したときに、林田社長はその資金で株を買ったことを、優一は決算書で知った。その株は半値まで下がっていたが、売却すれば資金繰りできる筈であった。

「五年も取引をして、このような『貸し剥し』をされるとは思わなかった。いちど金融監督庁と相談して、対応を考えるからな」

林田社長は煙草の火も消さずに、そのまま出て行った。

その日から一週間が経過し、三月十六日を迎えた。

アールオンの一千万円の手形が回ってきたが、残高不足で引落しができなかった。

優一は当座預金係に依頼して、手形のコピーを取り寄せた。受取人を調べてみると、同業の絵画販売業者であった。

（ついに不渡りか）

社長とは連絡が取れず、午後二時五十分になった。いつも三時直前にしか入金しないが、金額から考えて、今回の決済はできない、と優一は考えていた。

しかし、二時五十五分になって、一千万円の振込があって、残高不足は解消した。

（今日の不渡りを出さなくて良かった。しかし、どうやって金を集めたのか）

優一は疑問に思ったが、期末の慌しさで、それ以上追究しなかった。

さらに、十日が経過し、二十六日になった。

二十六日の手形金額は千百万円と前回より百万円多かった。優一は前回と同様に手形のコピーを取り寄せた。手形の受取人を銀行の企業情報で調べると、『マチ金』と呼ばれる金融業者であることが分かった。

（マチ金に手を出すようになったら、終りだ）

優一は林田社長に連絡したが、繋がらなかった。今度こそ不渡りかと思ったが、また午後二時五十五分頃に入金があった。

（次の手形が来ると、もう決済はできないだろう）

不安を抱えたまま、三月の決算期末を迎えた。

三月末はアールオンの八百万円の融資が返済期日となっていたが、期日返済はできず、延滞となった。

優一は朝から会社と社長自宅、携帯電話と電話を入れ続けたが、一度も繋がらなかった。

店舗を兼ねる事務所まで行ってみたが、事務員が二名いるだけで、社長は不在であった。当社が営業をしていることを優一は確認して、倒産はしていないと安心した。

決算期も越えて、四月五日の日曜の夜になった。

林田社長から独身寮の優一の部屋に電話が架かってきた。

「色々と東西銀行さんにお世話になりました。五洋信組から借入して、明日付で全額返済します。今までお世話になったお礼にお電話させていただきました」

今までになく低姿勢の口調であった。

（お礼の電話だったら、銀行にすればよい。何も銀行員の自宅に架ける必要は無い）

優一は不愉快な感情が声に出ないように注意して答えた。

「金融機関によって融資方針は違ってきますので、当行は無理でも、地元の五洋信組さんであれば可能な融資が有ると思います」

五洋信用組合は破綻の噂の絶えない小規模の信用組合である。

（五洋信組は、当行の融資が延滞中ということもマチ金で借りていることも知らないのか。決算月なので、リスクを負って貸出を増やしたのか）

「特に武神さんには大変お世話になりました」

「あまりお役に立てなくて申し訳ございませんでした。返済期日は過ぎていますので、お口座への振込金をそのままご返済に充てます」

（自宅の電話番号は脅迫電話以来、取引先に教えていない。どうやって調べたのだろう）

優一の受話器を持つ手が汗ばんだ。優一が電話を切ろうとすると、相手は何気ない口調で話し続けた。

「ところで、支店長さんの自宅の住所と電話番号を教えてくれませんか。お礼状を出したいので」

「すみません。支店長は最近、引越したので、私は新しい住所を控えてないのです」

自分でも白々しい咄嗟の嘘であった。

「前の住所と電話番号でもいいですよ」

「もし葉書でも出されるのでしたら、大手町支店宛で宜しいかと思います。お電話ありがとうございました」

優一は相手が答える前に電話を切った。そのまま、受話器を置いて、しばらく胃の辺りを擦り続けた。

翌日の四月六日にアールオンの口座に振込が有り、延滞していた融資は全額回収した。

十一、二百三億円株式詐欺事件

「二百三億円で売却予定だった新川建設の株式千百二十万株が詐取されました」

四月六日午後二時、トーキョーファイナンスの畑山部長が来店した。上岡社長の死亡の連絡から一ヵ月が経過していた。

トーキョーファイナンスはノンバンクとして個人向けの融資もしていたので、その個人融資の返済金で、金融機関からの借入を毎月返済していた。

返済方法はプロラタ方式といって、各金融機関の借入金残高に比例して按分返済するものであった。

「三月までのご報告では、新川建設の担保株式を二百三億円で売却して、その売却代金をプロラタで銀行に返済するという話でしたね」

山名係長は相手に確認するように尋ねた。山名が質問して、優一は記録係として、余計なことを言わないようにしていた。

四月入って直ぐ、返済計画に変更があったという電話連絡が畑山部長からあった。変更内容の説明のために、畑山部長が六日に来店したのであった。

「弊社の監査役が株式の名義を融資先から弊社に書き換えするために、株券を持ち出しました。今回の株式売買契約の仲介者である弁護士に渡したのですが、株券が戻ってこないと言うのです」

二百億円もの株券が行方不明と聞いて、優一は呆れていたが、山名は平然と質問を投げかけた。

「その弁護士というのは、信頼できる方ですか」

「中口和樹弁護士という人です」

「中口弁護士というと、イトマル事件で警察に逮捕された弁護士ですね」

山名はまた確認するように言った。

別の詐欺事件で警察に逮捕され、現在裁判中であるという弁護士に二百億円もの取引を依頼することが、優一は信じられなかった。

(イトマル事件の中口弁護士が関係していると、行方不明中の京英宗が、この事件の黒幕なのだろうか)

優一は京英宗の坊主頭と巨体を思い浮かべた。

「事態が複雑でよく分かりませんので、最初の経緯から説明してくれませんか」

「まず、弊社の最大の融資先は明治総合開発という会社です」

(明治総合開発は武神組のフロント企業と言われている。社長はイトマル事件の被告の末光氏だ。暴力団絡みの相手と最初から分かっていて貸したのだろうか)

トーキョーファイナンスは、かつて新東京信金一〇〇%出資子会社であり、独立系のノンバンクでない。以前

の東西銀行のように新東京信金とほぼ同一と見做していた金融機関もあった。そのノンバンクの最大の融資先が暴力団関係の会社ということである。

(二百億もの株式詐取事件と武神組長射殺事件とが同時期に発生しているのは、実は互いに関係しているのでないか)

優一の頭の中では、今回の詐欺事件とイトマル事件、暴力団組長射殺事件が結びついていた。

「弊社では明治総合開発には四百七十億円の融資をしています。これは全て東証一部上場の新川建設株式千百二十万株の購入資金で、株式を担保に貸付したものです」

(一社の株式の購入資金で四百七十億円も貸し付けるなんて、常軌を逸しているな)

融資先だけでなく、融資資金使途も問題であると優一は考えていた。

(この担保になっている株式だけで新川建設の上場株式全体の三分の一を超える筈だ)

新川建設は東証一部上場といえ、あまり流通している銘柄ではなかった。全部の株式の時価で千数百億円程度である。

「この貸付金の回収が困難になったため、担保権を行使して弊社に所有権を移転し、返済金に充当することにしました。

本件の株式については、購入を希望する会社がございまして、既に弊社はその会社と売買契約を取り交しました。一株当り一八一三円、総額二百三億円になります」

(約二七〇億円の損失か。それでも回収できれば、幸運だな)

新川建設の株式は、一株一八〇〇円前後で推移していた。

(二百億円もの株式を購入するのは、どんな企業なのだろうか)

「株式の売却先は、どちらの企業なのですか」

優一と同様に、山名も疑問に感じた様子で質問した。

「売買契約の相手方は、石林総業という会社です」

「待って下さい。石林総業というと、御社の前会長の石林博氏の会社ですね」

先月死亡した上岡社長が就任する前に、トーキョーファイナンスの代表取締役会長を務めていた人物が、石林博であった。

石林氏が代表取締役に就任した際に、上岡氏と違って東西銀行に来ていなかったので、優一自身も特に面識は無かった。

「石林総業というと、石林化学等の一部上場企業を抱える企業ですね」

石林グループは、石林総業を頂点として、傘下に化学・繊維・建設分野で上場企業三社を含めて、合計二十社を持つ企業グループである。

「石林グループには、海洋土木で大手の石林建設が有りますが。石林総業が石林建設との合併を考えて、新川建設の株式を購入したいと考えたのでしょうか」
以前にゼネコンを担当したことのある山名は建設業界に詳しかった。
「私共では、その辺の事情は存じ上げません」
畑山部長の言い方で、優一は官僚の国会答弁を連想した。
「石林前会長は御社に代表取締役会長として入社しましたが、わずか五ヶ月で退任しましたね。御社と石林総業の売買契約は石林さんが辞めてからも有効なのですか」
「契約自体は有効です。弊社では石林総業振出で四月末期日の額面二百三億円の手形を預かっています」
そう言うと、畑山部長は二百三億円の手形のコピーを見せた。
十一桁の数字が手形の金額欄を右にはみ出す様に並んでいた。銀行員でも二百億円もの金額の手形を目にする機会はほとんど無い。
支払場所は東西銀行渋谷支店になっていた。
(偽造でないか。いや、偽造手形を金融機関に見せることはしないだろう)
手形のコピーを見た瞬間、優一は考えた。
(石林総業がトーキョーファインナンス相手に二百三億円の手形を振り出すのは理解できないな)
優一は手品でも見るように、手形のコピーを見ていた。
「実は、この二百三億円の手形ですが、石林総業が詐取されたものとして訴えています」
今回の詐欺事件は、さらに複雑な事態に発展しそうであった。
「二百億円もの売買契約で、売り手が株式を、買い手が支払手形を騙し取られたと主張している訳ですか」
山名は鼻を鳴らした。
「このような状況では弊社としても株式の引渡しが出来ず、石林総業としても手形の決済できません。弊社としては、三ヶ月ジャンプする方針で対応することになりました」
ジャンプとは手形期日を延長することである。
(期日延長したところで、根本的な解決ができるのか)
「ジャンプしても意味が無いでしょう。このまま石林総業の手形を交換に回せばいいじゃないですか」
(無理難題を言っている。株式も無いのに手形を交換に回したら残高不足と契約不履行で不渡りになる。不渡りになったら、石林グループに信用不安が起って、会社が倒産するかもしれない)
優一は山名の意図が分からないでいた。相手の部長も冗談を言われたと思って、笑い声を上げていた。
「今回の株式詐取は、実は御社でも石林総業でも最初から承知していたのではないですか」
続く山名の発言を聞いて、優一は山名の真意を理解し

た。
(今回の詐欺事件は最初から仕組まれたものと考えているのだな)
部長はそれまで頭を何度も下げながら説明をしていたが、しばらく黙り込んだ。
(最初から詐欺を知っていたなんて、事実の有無に関係なく、相手は否定するだろう)
優一が考えている間に、部長の顔は徐々に紅潮してきた。部長はそのまま、勢いよく立ち上がると、椅子を後に倒した。
「山名係長は弊社のことを何もご存知ないようですな」
部長は、優一たちを見下ろすようにして、声を震わせて言った。
「これ以上、お話しても意味が無さそうですので、今日はここで失礼します」
倒れた椅子をそのままにして、部長は応接室を出て行った。
山名は肩をすくめて、部長の後姿を見ていた。優一は倒れた椅子を起こしながら、今回の経緯をどのように報告するか考えていた。
畑山部長が大手町支店を出て行ってから、三十分後のことであった。
いつも鷹揚に話をする鬼束支店長が受話器に頬ずりしそうな様子で電話器に向かって謝っていた。
鬼束は電話を切ると、眉間の皺をいつもより深くして、山名と優一を呼んだ。
「不良債権担当の役員から電話があった」
(なぜ、役員からの電話が自分たちと関係があるのだろうか)
呼ばれた理由が分からず、優一は面談内容をどのように報告しようか、と考えていた。
「お前たちのトーキョーファイナンスとの交渉の仕方に問題が有るのでないか、という話だ」
三十分前の面談の内容がトーキョーファイナンスの側から、既に何らかの形で本部の役員まで伝わったようである。
優一は落ち着かない気持ちになったが、山名は何も気にしていない様子であった。
「あくまで債権者として正当な主張をしたつもりです」
全く悪びれる様子も無く山名は答えた。鬼束の顔が引きつった。
「もっと上手くやれ、と言っているんだ」
鬼束は手にした書類を机に叩き付けた。
「何か面倒なことがありましたか」
山名は平然として尋ねた。
「お前らが殺されようが別に構わんが、俺を巻き込むような真似をするな」
鬼束はもう一度、書類を机に叩き付けた。

黒　船（六）

太田和貞

生涯二人扶持

東葛西領と西葛西領との合同触次役の会合がようやく終った。

御奉行様から上納米を上納せよとの内示に応えるための会合であったから、三郎右衛門は簡単に終わると思っていたが、いろいろと意見が出て、ふたとき（四時間）も掛ってしまった。

仁兵衛は伜の仁吉を助けて貰った恩義を感じていたため、三郎右衛門の意に副うように発言していた。

その会合で太兵衛はなかなか、うんと言わなかった。

「太兵衛さん、それでは、うかがいます」

最後まで反対している太兵衛に、仁兵衛は紋切り型で、こう切り出した。

「黒船が攻めてきたとき、太兵衛さんは布団をかぶってかくれているおつもりですか、……。やわな借金取りなら帰ってもくれますが、黒船はそんなに、やわではありませんよ。この度の上納米は黒船からお国を守るための御台場御普請の費用にあてると聞いております。米は出さん、わしの家族と財産は守って欲しいと願うのは、ちと虫がよすぎませんか、……」

「わかった。わかった。わしはわしの村の貧しい農民のことを考えて言ったまでで決して上納に反対している訳ではない」

太兵衛は両手を振って、仁兵衛の怒りを鎮めるように言った。

「太兵衛さんにも、ご納得いただいたので、ここらで役員会で話し合いました御請書を読み上げたいと思います。お気付きの点がありましたら、遠慮なくおっしゃってください」

三郎右衛門はそうまとめて、先日の役員会でまとめた御請書の文言をゆっくり読み始めた。

三郎右衛門は御請書を読みながら、池田播磨守様から第十番御台場御普請着手の指示が出ない理由が分かったような気がした。

風聞によれば、拾壱ヶ所の御台場の構築費は約七十五万両と聞いている。

富裕商人、豪農、農民から上納金や上納米をいくら上納させたとしても、七十五万両に達するはずはなかった。

「いかがでしょうか、……。御承諾いただけますでしょうか？、……」

御請書を読み終った三郎右衛門は、すぐに聞いた。

「異議ありません」

仁兵衛が真っ先に手を挙げて、そう発言して、手を拍いた。

「御承認いただきまして、ありがとうございます。明日、私共、役員が御奉行様にこの御請書を提出いたしますので、達筆な仁兵衛さんに清書していただきます」

突然の指名で、仁兵衛は「なんで、このわしが」と照れたが、内心、嬉しそうであった。

「あーら、お羽織の旦那」

仇吉は部屋に入ってくるなり、三郎右衛門に気付いて嬌声をあげた。

形ばかりの三つ指をつくなり、裾をさばいて足早やに三郎右衛門の隣に寄ってきて、体ごと三郎右衛門にぶっけた。

「これ、これ。あぶないではないか」

仁兵衛は仇吉をたしなめた。

「仁兵衛の旦那、いらっしゃってたんですか」

「いらっしゃってたんですかはないだろう。いや、わしは仇吉に礼を言わなければならない。三郎右衛門さんの御屋敷でお祝いごとがあったとき、わしが嫌味を並べ立てて、三郎右衛門さんに喧嘩を売ろうとしたとき、仇吉がとめてくれなければ、どうなっていたか、わからなかった。伜の仁吉があなったとき、頼める筋ではなかったが、わしは思い切って三郎右衛門さんにお願いしてみた。礫か、遠島と半分は諦めていた仁吉が生涯二人扶持のおほめにあずかり、これは夢ではないかと疑ったくらいだった。仁吉のことでは、三郎右衛門さんと仇吉

に本当にお世話になりました」
仁兵衛の顔が涙で濡れていた。
「あら、仁兵衛の旦那は泣き上戸だったんですか、わたし、ちっとも知らなかった。怒り上戸より泣き上戸の方がかわいくて、いいですけどもね」
仇吉は銚子を持って、仁兵衛に差そうとしたが、
「いや。三郎右衛門さんに差しあげてください」
仁兵衛は固辞して受けなかった。
「まわし銚子は縁起がわるいといいますから、お銚子を変えましょう」
仇吉は三郎右衛門の膳の銚子をとって、酒を注いだ。
「泣き上戸の仁兵衛の旦那も、おひとつどうぞ」
仇吉は仁兵衛の心をひき立てるように、明るく言った。
仁兵衛は三郎右衛門の顔をじっと見てから、
「いただきます」
と一気に呑んだ。
「そう、そう。そうでなくちゃ」
仇吉は弾んだ声を張り上げて、仁兵衛の肩をポンと叩いた。
「お羽織の旦那、こんでのことでは、たいへんなご苦労でしたねえ」
「そのお羽織の旦那はやめてくれないか、言われる度に、わしはこそばゆくなる、……」
「でも、お羽織の旦那、こんどのことは池田播磨守様のお羽織のおかげだと江戸中の人たちが言っておりますよ」
「そう言われても、わしは何もしてはおらん。ただ、御用人の佐藤孫太夫様にお願いにいっただけだ」
仁兵衛に泣きつかれて、仕方なしに池田播磨守様の御屋敷にうかがったものの三郎右衛門にも、どのように切り出していいのか見当もつかなかった。
「人を殺し候もの　下手人（斬首）」
と、御定書百箇条で定められていることを知っていたから、どのようにいいつくろっても、ただの虚言に過ぎないと三郎右衛門には思えた。
「難しいのう。人ひとり死んでおるからのう。それに、父親が訴えていることでもあるし、……。ところで、仁吉は何歳にあいなるか、……」
佐藤孫太夫も三郎右衛門と同じことを考えていた。御定書では十五歳以下ならば十五歳になるまで親族に預けられ、それから遠島の御仕置を受けることになっていた。
「御台場御普請を願い出た三郎右衛門の頼みでもあるので、御殿様もなにか考えてくださるであろう。わしが今、考えておるのは亡くなった子供が黒船勢の大将だということだ」
佐藤孫太夫にそう言われても、三郎右衛門には何も思いつかなかった。
ところが、池田播磨守様は、
「黒船勢の大将を討ち果したること、まことに天晴れである」
とお褒めになり、
「生涯二人扶持を差し遣すものなり」
との御沙汰を下された。
子供の遊びとは言いながら、黒船の大将をひと突きにしたのは、「日本の吉相」であるとみなしたからであろうと江戸中の大評判となった。
物価高、盗賊の横行、黒船の脅威の中にあって、明るい話題として日本列島を駆け巡った。
そのおかげで、三郎右衛門は、「お羽織の旦那」と渾名され、誰からも一目おかれるようになった。
「いや、わしはなにもしておらんのだ」
と、いくら言っても、
「ご謙遜なさるとは、誠におくゆかしい」
と却って褒めそやされるので、三郎右衛門は仁吉のことでは黙るしかなかった。
きょうも触次会の会合が終ったあとで、仁兵衛に誘われた。御請書の清書のこともあるので、三郎右衛門は仁兵衛についてきた。
「お助けいただいた三郎右衛門さんに御挨拶もさせずに、申し訳ありませんでしたが、御放免いただいた翌日に、仁吉を中山の法華経寺にいかせました。亡くなった伝七さんの霊を弔いながら法華経寺で自分を見詰めなおしてこいと、家から追い出しました」
ここで仁兵衛はこられきれなくなって、両手で顔を覆った。
「女房は泣きながら、わしにくってかかってきました。しかし、伝七さんを殺された伝左衛門さんの気持ちを考えますと、御放免になったとは言え、仁吉をこのまま家にいさせることは、わしには到底できませんでした。それに生涯二人扶持を黙っていただくことはできないと、わしは思いました。一人扶持は一日に玄米五合、二人扶持は玄米一升、ひとつきで三斗になります。それにわしの気持ちの一斗を加えて、一俵の米俵をわしは伝左衛門さんに贈ることに決めました。毎月の晦日、朝早くその一俵の米俵をわしは背負って、伝左衛門さんの家まで運びました」
「仁兵衛の旦那があの重い米俵を運んだのですか？」
「重い。たしかに重かった。でも、自分で運ばねば受け取って貰えぬとわしは思いました。伝左衛門さんの悲しみに較べれば、肩の痛みはなんでもなかった」
「下男に運ばせないで、ご自分で運ぶなんて粋だわ。お羽織の旦那、そう思いません」
「わしもそう思う。なかなか、できることではない」
「そうでしょ。わたし見直しちゃいましたよ」
「仇吉に褒めて貰えるとは、思ってもみなかった。しかし、伝左衛門さんは違った。子沢山の家だから、米俵を貰ってもらえるだろうと思ったのは、わしの間違いだっ

た。翌月、米俵を背負っていくと、縁側に米俵がそのまま残っていました。わしは伝左衛門さんの怒りの大きさをみせつけられた思いでした。その米俵の脇に、背負ってきた米俵をそっと置いて帰ってきました。そのとき、親というものは悲しいものだなと、つくづく思いました。米俵を拒絶するのも親心、重い米俵を背負って運んできたのも親心。仁吉のあのひと突きさえなければ、道で会ったとき笑いながら挨拶ができたのにと、残念でした。先月の晦日は雨が降っておりました。米俵を背負ったわしは米俵が濡れるのを心配して、米俵に蓑を着せました。女房が雨にわしが足をとられるのを心配して、ついてきました。縁側に並んでいる二俵の米俵を見て女房は『あッ』と悲鳴をあげました。背負ってきた米俵を縁側に並べて、わしと女房は米俵が雨に濡れないようにと蓑を掛けました。家の中は、コソッとも音はしませんでした。わしは帰りかけて思わず米俵を見ました。縁側に伝左衛門さん一家に無視され続けている米俵がありました。

（あの米俵をなんとしても、貰ってもらわねば）

わしは土下座して、心の中で必死に頼みました。女房も同じ思いだったのでしょう。わしといっしょに土下座していました。雨に濡れた着物と髪が重くなったのを覚えています。そのうち、あたりが明るくなってきたので、わしらは、そーっと帰ってきました。それから三日して、伝左衛門さんの女房のお里さんがわしの家にきてくれました。

『正直言って、お名主さんを殺してしまいたいほど、わしらは恨んでいました。けれども、雨の中で土下座されたお名主さんご夫婦を見て、恨みも消えました。お届けいただいた三俵の米俵はありがたくいただいて置きますが、これからは、どうぞ御無用になさってください』

そう言って帰っていきました。矢張り、わしら夫婦を家の中から見ていたのですね」

そう言って、仁兵衛は涙を流した。

「あら、あら。仁兵衛の旦那は、今晩は本当に泣き上戸ですこと」

そうからかった仇吉の頬にも涙が流れていた。

「余が池田播磨守である。本日は、そちたちに頼みがあって参った。黒船の再来航に備えて、この度、品川沖に御台場を十一ヶ所御普請することに相成った。そのための上納米の献納を所望する。これ、この通りだ」

池田播磨守様は、そう言って軽く頭を下げられた。

長屋門から玄関までの長い通路に、びっしり集っていた興之宮村の農民たちは、びっくりして、あわてて頭を下げた。

「ハーッ」

農民たちは一斉に溜息をついた。池田播磨守様のお姿が拝めて、そのお声も聞けた大満足の溜息だった。

「せめて御茶なりと」

小走りに急ぐ池田播磨守様の後ろ姿に、三郎右衛門はそう声を掛けた。

「茶ばかり飲んでいては、馬にゆられて困るでな」

池田播磨守様は三郎右衛門を振り返って、にやりと笑った。

（きさくなお殿様だ。このお殿様なら、あの生涯二人扶持の御裁決を下されても不思議ではなかった）

三郎右衛門は笑い返しながら、そう思った。

「名主にして置くには惜しい面構えをしておるのう。この度の御上納、力を尽くしてくれい！」

長屋門の前で、馬に乗った池田播磨守様は馬上から、そう言い捨てると馬に鞭を当てた。

「ハ、ハーッ」

三郎右衛門は深々と頭を下げた。

馬の蹄の音と、そのあとを追う侍たちの足音が遠ざかっていった。

（御苦労なことだ）

これから松本村、鹿骨村、笹ヶ崎村と三か村も回らねばならぬ池田播磨守様の体の疲れを思って、三郎右衛門は小さな吐息をついた。

「生涯二人扶持」の逆転判決を下した名奉行だけに、どの村でも農民の集りはいいはずだった。

しかし、その集りが上納米とどう結び付くか、三郎右衛門にも疑問だった。

池田播磨守様が、どんなに村々を駆け巡っても、上納米の上限が三郎右衛門には予想がついた。

それから、二、三日して触次役の三郎右衛門のもとに、各村の上納米の集計が集ってきた。

その集計は、三郎右衛門の予想をはるかに超えていた。

各村の名主たちは挙って、二十俵、三十俵を献納し、なかには四十五俵という名主もいた。

農民たちも十俵を供出する者が多く、名主なみに三十俵を供出する者もいた。

その集計を眺めていて、池田播磨守様の人気の凄さを三郎右衛門は感じた。

三郎右衛門は最初、三十俵を上納するつもりでいた。

しかし、「お羽織の旦那」と呼ばれている手前、名主なみの三十俵では三郎右衛門の名前が泣いた。

集計に書き込んでしまった三十俵を五十俵にしようと三郎右衛門は思った。

三に手を加えて、五に直す手順を二、三度文机の上でなぞってから三郎右衛門は筆に墨をふくませた。

（池田播磨守様は、こうなることを見越されて、生涯二人扶持の御沙汰を下された）

こんな確信めいたものが、三郎右衛門の頭をよぎったので、思わず筆の穂先が震えた。

（つづく）

体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと（十一）

千坂精一

大西長官、特攻拡大を図る

台湾高雄（カオシュン）に司令部をおく二航艦が、一航艦と協同して捷一号作戦に当たるよう命ぜられて、マニラに進出したのは航空決戦二日まえの十月二十二日であった。

一航艦司令部に同居することになった二航艦の福留長官は、二階の長官個室で大西長官と起居をともにした。

福留と大西は海兵の同期生、三航艦の寺岡長官とともに花の四〇期生三人組（トリオ）で、気心の知れた仲であった。

大西は、待っていましたとばかり福留に、「戦況は捗々しくなく、この戦局を打開し挽回する方法は航空部隊の特別攻撃以外にない。二航艦も特攻に踏み切ってほしい」

同期の誼で心底を率直に述べて、強硬に申し入れた。

だが、福留は在来方式の大編隊による爆撃、雷撃戦法を固執して譲らず、

「二航艦は、編隊攻撃以外は訓練していないから、あくまで正攻法でゆく」

そう言って、頑として賛同しなかった。

連合艦隊の参謀長だった福留は、山本長官が生還の余地のない作戦は許さなかったことから、

（山本長官がご存命だったならば、大西のやろうとしている特攻戦法など決して許さないであろう）

そう固く信じて、正攻法を枉（ま）げようとしなかった。

軍令部畑出身の福留が正攻法、航空畑出身の大西が奇襲戦法を執るのは逆のようにとれるが、福留は航空攻撃の限界を知らず、大西は専門家だけに限界を察して打破しようとした戦法だったのだろう。

しかし、二航艦は主力として育成したT部隊を台湾沖航空戦で損耗してしまい、九州と台湾を掻き集めてフィリピンに集結させた可動機数は僅か二〇〇機であった。

関大尉指揮の敷島、朝日両隊が三度目の出撃をした二

十三日、マニラ北方のクラーク基地群散在の二航艦各隊は、〇七〇〇から〇七三〇のあいだに全機出撃した。

けれども、敷島、朝日両隊と同様、天候不良で敵機動部隊を発見出来ず、各隊指揮官は大編隊による攻撃行動は不可能と判断して司令部に打電、全機を引き返させた。

翌二十四日も、一航艦の敷島、朝日両特攻隊と、二航艦の大編隊正攻法の総攻撃が不成功に終わると、大西長官は重大な決意をした。

マバラカットの指宿正信大尉、セブの中島正少佐、第一、第二ダバオの横山岳夫大尉の各指揮官に、

「明二十五日早朝、栗田艦隊のレイテ湾突入に呼応して、すでに編成されている神風特別攻撃隊敷島隊、大和隊、朝日隊、山桜隊、菊水隊、若桜隊、彗星隊の全機を発進させよ」

と命じたのである。

二航艦も、正攻法が失敗に終わったからには一航艦に同調してくれるだろうと、大西は再度懇願したが、

「こちらはあくまでも正攻法でゆく」

福留は、大編隊の集団攻撃に固執して承知しなかった。

だが、二十五日に敷島隊五機と直掩一機で在来方式の大編隊攻撃に匹敵する空母一隻撃沈、三隻損傷の戦果を挙げた特攻の威力は、海軍航空隊が合言葉（スローガン）にしている、

「最小の労力（ミニマム エネルギー）で、最大の効果（マキシマム エフェクト）を挙げる」

合理性そのものであり、悪天候に不向きな正攻法で戦果を挙げられなかった福留にとって大衝撃（ショック）であった。

そこへまた大西から体当たり攻撃の採用を執拗に説得されて、参謀長、先任参謀と熟慮を重ねた結果、一航艦に同調のやむなきに至り、ついに福留は断行を決断した。

こうして、二航艦は独特の大編隊攻撃戦法を捨てて、一航艦の特攻に参加することになった。

翌朝、一、二航艦司令部幕僚全員が作戦室に集められ、大西長官から、両航艦を合体して第一連合基地航空部隊を編成し、福留長官が指揮を執り、大西長官は幕僚長をつとめることが発表された。

そして、二航艦先任参謀柴田文三大佐が作戦参謀、一航艦先任参謀猪口力平大佐が実施指導担当に任命された。

さきに触れたように、大西と福留は海兵同期であったが、大西は暴れ者で、あるとき新橋の料亭で芸者を殴ったことから品行不良の評価（レッテル）を貼られ海大受験不適格になったのに対して、福留は海大一四期の優等生であった。

二人は同時に少将に進級したが、中将には福留のほうが半年早かったので、大西は先任に指揮官を譲ったのだろうが、実質的には幕僚長の大西がこれまでどおり特攻推進の主導権を握ったまま二航艦を巻き込んで拡大してゆくことになり、以後は一航艦を第一神風特別攻撃隊、二航艦を第二神風特別攻撃隊と呼称することになった。

大西は、二五〇キロ爆弾搭載に改造した爆装零戦より、五〇〇キロ爆弾を搭載している艦爆をそのまま特攻にし

地航空部隊として四ヵ月まえの六月に新設され、司令長官に福留繁中将、参謀長に杉本丑衛少将、先任参謀に柴田文三大佐、航空参謀に嶋崎重和中佐がそれぞれ就任した。

移動基地としての空母を大半喪ったことで、航空隊のほうから陸上基地へ進出して行くことになったのである。

七〇一空は、一式陸攻中攻隊の豊橋空が、二月に再編成されて数字空に改称されたばかりの航空隊であった。

六月に新設された二航艦の麾下に入り、千歳に移動して対潜哨戒にあたっていた十月にK七〇二陸攻隊をはずして、千歳、松輪、美幌のK一〇二、K一〇三艦爆隊とK二五二艦攻隊を組み入れ艦爆、艦攻隊に様変わりした。

まもなく、二航艦の台湾進出が開始されると、関東進出を命ぜられて香取に移動し、ついで国分に移って一部を残すと、台東に進出して司令部に合流したのである。

七〇一空の三役は、司令が木田達彦大佐、副長が宮内七三中佐で、飛行長は江間保少佐であった。

江間飛行長は、大正二年静岡県の生まれで海兵六三期の三十一歳。六尺豊かの偉丈夫で野性味に溢れ、その大力は殴られたら立っていられないほど強烈だったという。

眉毛濃く、目鼻立ちの整った顔は軍人に不似合いと思ってか、揉み上げを顎まで伸ばし、口の周りにも鬚を蓄えた豪傑型の面貌に変身した急降下爆撃の名手であった。

たほうが効果が挙がると判断したのであろう。

二航艦は、台湾沖航空戦で主力の奇襲攻撃隊T特殊部隊を損耗してしまい、急遽再建のため除外していたので、替わっての主力部隊は七〇一空艦爆隊であった。

零戦は単座であるが、艦爆は複座である。

その艦爆機を特攻機に使うということは、機数に倍する戦死者を出すことになる。

通常任務の爆撃行なら偵察員は必要であるが、特攻は零戦が一人なのだから艦爆も一人でよかったはずなのだが、生死をともにしてきた組の絆は条理を超越していた。

第七〇一航空隊

七〇一空は、私が三ヵ月後の昭和二十年一月に練習生教程を卒えて最初に配属された実施部隊なので、特別の思い入れがあり、概要からすこし述べてみることにする。

海軍航空隊は、三桁の数字によって判別されていた。

一〇〇位は機種で、七は一式陸攻であるから、もとは陸攻隊だったことになる。

一〇位は管轄鎮守府で、〇は横須賀。

一位は奇数が常設、偶数が特設。

であるから、七〇一空は、

〈横須賀鎮守府所属の常設陸攻隊〉

ということになる。

二航艦は、戦況の変化に応じて移動し対応する機動基

開戦時は、空母瑞鶴艦爆隊の先任分隊長として真珠湾攻撃に参加、その後は珊瑚海、ルンガ泊地攻撃とつねに第一線で活躍してきた熟練搭乗員であると同時に、陣頭指揮を執りつづけてきた勇猛果敢な殴り込み隊長だった。

幾多の死線を乗り越えてきた歴戦の勇士だから、烈しい性格の持ち主には違いないが、といっても血気に逸って猪突猛進することはなく、これまでつねに冷静な判断で艦爆隊を指揮し、統率してきていた。

「閻魔」

という綽名をつけられていたが、大王の化身だと恐れられていたのではなく、江間の姓から転じた愛称だったのであろう。

率直に判然り物を言う人だというが、命令する立場の指揮官としては当然で、発言だけ聴くと人柄まで冷淡に思われがちだが、実際は部下思いの人情家であった。

以下、江間飛行長について、さらに触れる。

七〇一空の主力は、開戦の二年前に採用され、真珠湾、ミッドウェー、珊瑚海、南太平洋戦線で活躍してきた九九式艦爆であったが、固定脚だったためいまでは引込脚の彗星にとってかわられ、九九棺桶といわれていた。

江間飛行長は、新鋭機の彗星に替えてくれるよう強硬に主張したが、生産が間に合わないという理由でたった十数機しか補充されなかった。

(性能の異なる機種では同一行動が難しい)

歴戦の指揮官としてそう判断した江間は、咽喉から手が出るほど欲しい彗星を諦めて、九九式だけに絞った。

そして、台湾高雄でのフィリピン航空作戦研究会の席で、直掩戦闘機の指揮官に、

「七〇一空の艦爆隊は九九棺桶であるから、攻撃隊の成否は掩護隊如何で決まる。よろしく頼む」

と言ったあとで、

「旧式艦爆で敵の防衛戦闘機網を突破するのは至難だ」

そう本音を吐いて歎いた。

それを聴いた同席の二航艦先任参謀柴田文三大佐は、

「神霊の加護を信じて、敵空母を殲滅せよ」

と威丈高に叱咤した。

海軍では、『史記・李斯列伝』にある、

〈断じて行えば、鬼神もこれを避く〉

がよく使われたが、司令部参謀の発言は同類の精神論であるのに対して、現場指揮官は現状を適格に把握しての現実論であり、その較差は埋めようがない。

台湾高雄からフィリピンマニラへ進出した翌二十三日の総攻撃が、天候不良で失敗に終わった二航艦司令部は、その夜九七式飛行艇三機を索敵に出した。

〇〇五〇、待望の第一電が入った。

「電探により敵大部隊を探知」

これを受けた福留長官は、早朝出撃を決定した。

江間飛行長は、彗星の一三四〇馬力に較べて一二〇〇

馬力しかなく、最高時速も五五二キロに対して四二八キロと遅い九九式艦爆の昼間集団攻撃は、目標到達以前に敵の防衛戦闘機網の餌食になる自殺行為と考えていたので、作戦会議で力説したのだが、受け入れられなかった。

江間飛行長は、今暁の出撃が最期と覚悟を決めた。

この日の出撃は、小林實少佐率いる制空隊の零戦、紫電が先発して敵機動部隊防衛の戦闘機群を掃討撃破する。

つづいて、鴛淵孝大尉の直掩零戦隊に護られた江間少佐指揮の九九艦爆隊三八機が出撃し、目標に到達して急降下爆撃で空母群を屠ることになっていた。

だが、司令部の机上構想どおりにことは運ばなかった。

制空隊七五機、直掩隊五一機、本隊の攻撃隊三八機の大航空部隊が、統一行動をとるのは至難の業であった。

各隊指揮官は、自分の隊を纏めるのに精一杯で、他隊と連繋をとる余裕はまったくなかった。

そのため、江間攻撃隊はいつか孤立してしまい、単独行動をとらざるを得ない危険な状態に陥ってしまった。

江間隊長の危惧が現実のものとなり、待ち伏せていたグラマン戦闘機が後方上空から襲いかかってきた。

馬場助治飛長が発見したのだが、列機の偵察員たちは前方に神経を集中していて、報らせに気づかなかった。

グラマンの襲撃を受けて、一機また一機と墜ちてゆく。

江間隊長機も被弾した。燃料容器を打ち貫かれて火を噴き、錐揉み状態になって墜ちていった。

必死の回復操作で復元させ水平飛行に戻ったときは、高度九〇〇メートルまで落ちていて、危うく助かった。

火は墜落の強力な風圧で消えたが、噴出した燃料が後部座席に横殴りに吹きつけて、偵察員の吉川啓次郎少尉が多量に吸い込み、呼吸困難に陥って昏睡状態になったために、基地との交信がとれなくなってしまった。

なんとか帰投出来たが、固定脚の車輪が破損していて着陸と同時に転覆してしまった。

整備兵が総掛かりで引き起こしたとき、操縦席と偵察席とのあいだに二〇ミリ機銃の不発弾が突き刺さっているのが発見された。まさに危機一髪のところであった。

それだけではない。点検した整備分隊長は、

「理論上は飛行不能の状態であり、どうして錐揉みがなおって水平飛行が出来たのか解らない」

と不審顔だったという。

歴戦の勇士、熟練搭乗員は単に伎倆だけではなく、運も呼び込むし、天女も惚れて支えてくれるのだろう。

この日戦果はなく、第二中隊長松井大尉機をはじめ九機が未帰還となり、九九艦爆による昼間大部隊攻撃は江間飛行長のいうとおり惨憺たる結果に終わってしまった。

しかし、二航艦司令部は帰投した残存機を至急整備させると、再度の攻撃を敢行した。

江間飛行長は、多量の燃料を吸って絶対安静のため、第二次攻撃隊二五機の指揮官に深堀直治大尉を命じ、鴛

淵孝大尉が引き続き零戦二二機で直掩することになった。

第二次攻撃隊は、逐次発進してマニラ東方海上の敵機動部隊に向かったが、雲量一〇に近い曇天でたちまち厚い雲に行く手を阻まれ、僅かの雲間を縫うようにして進んだが、ついに視界不良により攻撃を断念して帰投した。

こうして、福留司令長官が計画した大編隊による昼間集中攻撃は、一次、二次とも失敗に終わってしまった。

司令部の机上計画者より戦闘経験豊富な現場指揮官の判断のほうが正しかった。

いっぽう海上部隊は、小澤機動部隊が二回攻撃隊を発進させたが、第一次三二機は敵を発見出来ず、第二次一八機が辛うじて軽空母プリンストンを攻撃して火災誘爆を起こさせたものの、沈没させるまでには至らなかった。

ほかは、駆逐艦ルーツ、上陸用舟艇五五二号を沈没させ、油送船アシュタビュラを損傷させた程度であった。

七〇一空特攻隊長深堀直治大尉

十月二十六日に一航艦と二航艦が合体して第一連合基地航空部隊が新設されると、大西瀧治郎長官から二航艦の主力部隊七〇一空木田司令に艦爆特攻隊編成が命ぜられた。

作戦会議から戻った木田司令は、宮内副長と江間飛行長を呼んで特攻隊編成を命ぜられたことを伝えると、

「特攻隊は指揮官が大切であるから、その人選には特に留意するように言われた。ことに最初は重要であると思うが、誰にしたらいいだろう。飛行長はどう思うか」

鋒先を向けられた江間飛行長は、躊躇することなく、

「深堀大尉が最適任です。ほかには考えられません」

と答えた。

深堀大尉とは、ラバウル以来一年半南方前線で生死をともにしてきた仲であった。

このごろの出撃は、零戦隊の掩護も薄くなっていて、かならずしも生還が期待出来る状況ではなくなっていたので、未帰還で処理されるよりは特攻の指揮官として死に花を咲かせてやりたい、と咄嗟に思ったのだった。

このとき、深堀大尉はマバラカットにいなかった。

二十三日と二十四日の両日江間飛行長指揮下の第三中隊長として出撃。二十五日は絶対安静の江間飛行長に代わって指揮を執り、ルソン島最南端のレガスビーに帰投して再出撃し、またレガスビーに戻っていたのだ。

深堀大尉が、マバラカットへ帰ったのは二十六日だった。

まだ飛行場にいるうちに、江間飛行長から呼び出された。

飛行服のまま司令室に行くと、そこに木田司令もいた。

「レガスビーで耳にしたのですが、七〇一空も特攻隊になるというのは本当ですか」

深堀大尉が、二人の直属上官にずばり切り出した。

たとえ噂にしろ、聴いていれば話が早い。

「本当だ」
江間飛行長が率直に答えた。
「では、先任の私をぜひ第一回の指揮官にして下さい」
「よし。俺に委せろ」
江間飛行長の即答に、深堀大尉は緊張顔を綻ばせた。
そのあと、木田司令と江間飛行長は、こんど新しく指揮下に入ったK五彗星艦爆隊へ行き、深堀大尉と同期の分隊長山田恭司大尉に会って、特攻隊の編成を告げた。
そして、七〇一空特攻隊は夕刻までに編成を終えた。

〈純忠隊〉（K一〇二）九九艦爆三機
松本　賢飛曹長　深堀　直治大　尉
横田　政幸飛　長　上妻　英樹上飛曹
宮本　孝一飛曹　米森　義治一飛曹
〈誠忠隊〉（K一〇三）九九艦爆三機
五島智勇喜中　尉　蒲田末次郎一飛曹
辻　幸三飛　長　佐藤　早生一飛曹
三上　良作飛　長　安永　晃三二飛曹
〈至誠隊〉（K一〇二）九九艦爆三機
佐々　安則飛　長　團野　功雄中　尉
中嶋　直一飛曹　津久井武男一飛曹
前田　文夫飛　長　松元　巖上飛曹
〈神武隊〉（K一〇三）九九艦爆三機
山崎　武男飛曹長　柏井　宏大　尉
吉元　武盛一飛曹　坂田　馨上飛曹
吉村　正飛　長　池田　亘一飛曹
〈神兵隊〉（K一〇三）九九艦爆三機
藤本　勇中　尉　伊藤　立政上飛曹
塚本　貞雄飛　長　加藤　荘一二飛曹
正木　廣飛　長　相田　展生二飛曹
〈天兵隊〉（K一〇二）九九艦爆三機
江口　源七上飛曹　土屋　和夫中　尉
兒玉　雄光上飛曹　遠藤　博文一飛曹
有馬　敬二飛曹　伊達　喬上飛曹
〈忠勇隊〉（K五）彗星艦爆四機
茂木　利夫飛曹長　山田　恭司大　尉
玉森　武次二飛曹　竹尾　要一飛曹
岩下營太郎二飛曹　山野　登一飛曹
野々山　尚一飛曹　小林　裕吉一飛曹
〈義烈隊〉（K五）彗星艦爆三機
近藤　壽男中　尉　作田　一實上飛曹
松尾　勲一飛曹　戸村　三郎一飛曹
大塚　克己上飛曹　山崎　幸營一飛曹

の八隊であった。
選抜された深堀直治大尉以下五十名の隊員たちは、夕刻までに逐次マバラカットからニコルス飛行場に移動すると、マニラの司令部に集合した。

前庭に整列して各隊の命名式があり、そのあと市内のホテルで出陣の壮行会があった。
木田司令が杯を捧げたあと、江間飛行長が口を挟んだ。
「酒はいくら飲んでもいいが、今日は決して乱れてはいけない。われわれ搭乗員は飲めば騒ぐのは当たりまえのように思っているが、しかし、今晩はいけない。ほかの者が見て、特攻隊員が自暴自棄になっているのだと思われたくないからだ」
いつになく不粋なこの発言は、国家防衛の魁として悠久の大義に殉じさせるためにやむなく死地に赴かせる若者たちを、誤解されたくないと庇う上官のせめてもの親心だったのであろう。
その夜は、全員をこのホテルに泊めて、休養をとらせた。
これまで戦場転々で息衝く暇もなく、人間らしい生活など程遠かった搭乗員たちに、この世の名残りに寛ぎの一刻を与えてやろうとする、木田司令の配慮であった。
木田司令と江間飛行長も同宿した。
翌日午後、深堀直治大尉の純忠隊、五島知勇喜中尉の誠忠隊、山田恭司大尉の忠勇隊、近藤壽男中尉の義烈隊に出撃命令が下った。危険を回避しての薄暮攻撃だった。
一五〇〇、指名された四隊と直掩隊員が指揮所前に整列した。福留長官の壮行の訓示が終わると、深堀大尉の号令で全隊員が一斉に挙手の礼をして訣れを告げた。
大西中将以下司令部幕僚の全員と、七〇一空の木田司令、宮内副長、江間飛行長が見送るなかを、報道の取材班、写真班、映写班がこの艦爆隊初めての特攻出撃場面を記録しようと駆け回り、静寂のなかの張り詰めた緊張感が一転して慌ただしい雰囲気に包み込まれていった。
一五三〇、まず山田大尉の忠勇隊彗星四機と直掩隊の零戦六機が飛び立ち、つづいて義烈隊の彗星三機と直掩隊の零戦八機が離陸して、一路ラモン湾東方へ向かった。
一六〇〇、こんどは九九艦爆が動き出した。
まず深堀大尉の純忠隊三機と直掩の零戦二機が発進すると、つづいて誠忠隊三機と直掩の零戦二機がレイテ湾を目指した。
深堀大尉が、後部座席の風防窓を一杯に開けて白い襟巻（マフラー）を靡かせ、挙手の礼で最後の訣れをしながら飛び立ってゆくと、列機の偵察員たちもそれに倣った。
K一〇二分隊長深堀直治大尉は、大正九年長崎県生まれの二十四歳。敷島隊を率いて突入した関行男大尉より一歳年長で、海兵も一期先輩の六九期であった。
純忠隊の三機は、レイテ湾上空に達したところで深堀隊長機の風車止引上装置（爆弾の安全解除装置）故障で全機引き返し、途中のレガスピー基地に不時着した。
通常爆撃の場合は、投下した爆弾が目標に到達するあいだに風車によって信管の安全装置が解除されるのだが、特攻機は爆弾を抱いたまま体当たりするので、風車の廻

るときがないため、機上であらかじめ風車止めをはずして、安全装置を解除する応急装置が取り付けてあった。

これが故障では、抱いた爆弾が不発弾になってしまう。修理して再出撃したが、既に日没後で目標視認が困難だったため、深堀隊長は再々出撃を期して反転し、近くのセブ基地に不時着したが、列機は逸れてしまっていた。

列機の横田飛長と上妻上飛曹組の二番機は、防禦砲火目掛けて体当たりしたと思われるが戦果は不明。宮本一飛曹と米森一飛曹組の三番機はレイテ海岸に不時着していて、十一月十七日に無事マバラカットに帰投した。

深堀大尉が不時着したセブ基地には、六日前久納中尉の大和隊を出撃させた二〇一空飛行長中島正中佐がいた。その日、中島飛行長は夕食後作戦室で休息していた。

遠くで爆音が聴こえてきたので、急いで戸外へ出てみると、航空燈を点けた単機が飛来して、上空を横切るとき識別信号を明滅させていたので味方機だと判明した。

爆音を聴いて指揮所へ駆けつけた搭乗員たちに、着陸用照明の準備をさせると、信号所から合図を送った。

旋回して着陸順路に入った飛行機は、無事降着した。

搭乗機から降りた深堀大尉は、指揮所へ上がっていって中島飛行長に前記の事情を要領よく報告した。

深堀大尉の態度は実に淡々としていて、いま死地から戻ってきた人とはとても思えない平静さであったそうだ。

中島飛行長は、その悠揚迫らぬ態度にうたれ、豪邁な指揮官を単身で突入させるのは惜しいと考えて、一宿一飯を頼み明朝また出撃して行くつもりの深堀大尉に、

「単機で征くより一度原隊に帰り、次の機会に列機を率いて大いに成果を挙げたらどうだ。急ぐこともあるまい」

と意見した。

深堀大尉は、上官の温情溢れる言葉に感激して瞑目沈思していたが、やがて顔を上げると、穏やかな口調で、

「それもそうですが、列機がもう決行しておりますからなあ――。やはり明朝を期して出撃したいと思います」

そう判然り答えたという。

四たび帰投を繰り返した関大尉の場合は、全機行動をともにしたのだからともかく、列機が突入していて隊長機だけ帰投するわけにゆかぬことを言外に匂わせている深堀大尉の毅然たる態度のまえに中島飛行長は沈黙した。

翌朝、まだ暗いうちに指揮所へ行ってみると、深堀大尉はもう椅子に腰掛けて整備の終わるのを待っていた。

「朝飯はすんだか」

中島飛行長が、挨拶代わりに訊くと、

「弁当を貰いました」

有難うございました、と礼を言うつもりで頭を下げた。

そこへ操縦員の松本飛曹長がやってきた。

すると、こんどは深堀大尉が、

「朝食は？」

と気遣った。

松本飛曹長は恐縮して、すませたことを告げた。

やがて、整備完了の報告が届いた。

深堀大尉は、中島飛行長にあらためて礼を述べると、

「征きます」

と挨拶して、お茶代わりに貰った一本のサイダーを松本飛曹長と二人で飲み合い、にっこり微笑って九九艦爆に搭乗すると、従容として出撃していった。

このとき、深堀大尉は昨夜ニコルスの木田司令とマバラカットの江間飛行長宛に書いた手紙を託していった。

絶筆となったその内容を、平易にするとこうである。

昭和十九年十月廿七日

ニコルス飛行場　マバラカット東飛行場

七〇一空司令殿

江間少佐殿

於セブ飛行場　深堀　大尉

本日私の飛行機は風車止引き上げ装置不良のため「レガスビー」飛行場に着陸し、風車を廻転して直ちに離陸、同飛行場上空にて純忠隊のみ集合「レイテ」湾に進出しました（直掩機及び誠忠隊は先行しました）。純忠隊の戦場到達は一八五〇で、既に日没後でありました。高度一〇〇〇メートルにて約三〇分捜索しましたが、防禦砲火によって敵艦船数隻の存在を知るのみで、艦種の識別不能、輸送船に体当たりする公算極めて大でありましたので攻撃を断念、「セブ」飛行場に向かいました。二番機は戦場上空にて解散後不明ですが、体当たりをやったものと思われます。雲並びに視界不良のため成果は私も見ておりません。三番機は防禦砲火により被害を受けたものの如く、運動不規則で「セブ」飛行場に向かうまで一緒でありましたが、途中から再び戦場に引き返したのではないかと思われます。捜索するも見つけることは出来ませんでした。二〇三〇私のみ「セブ」飛行場に降着致しました。明朝黎明を期し体当たりを決行致します。本日教訓となりましたことを御参考までに記して戦闘機に託します。

一、風車止引き上げ装置は出発前必ず慎重なる試験をして見る必要あり。

二、二五番×一（二五〇瓩一個）六番×四（六〇瓩四個）にては巡航計器一二五節程度なるゆえ、これを考慮し、出発時刻を定むる必要あり。薄暮は遅くとも一八二〇頃までに到達せざれば艦種識別並びに照準困難なり。月は出ていても下は極めて見え難い。

三、薄暮夜間攻撃となりたるため飛行機を見失ない、本日戦果確認困難なりと思わるるも、九九艦爆をもってしても大丈夫戦果を挙げ得たと確信せり。後続人にお伝え願いたい。

四、「セブ」を中継として黎明体当たりを行なわれては如何と思考す。斯くすれば燃料残量多きゆえ更に効果あ

りと思われる。

なお戦闘機につかれることも少ない。

五、断じて焦らず、無理な状況の時は再挙をはかり、これはと思う奴に体当たりをやるよう、後続の人にお伝え願いたい。一般に焦り勝ちとなり、目標を誤る虞あり。

追記

列機は本当に可愛いものです。今日も戦場突入時各人きちんと敬礼して「ニコッ」と笑って解散しました。私は涙が出て仕方がありませんでした。これで皇運の隆盛断じて疑いなしと確信致しました。

年は若年でも列機の人々の態度の実に立派であったことは、今の私の目に残って離れません。特攻隊員の人選は頭を悩まさずとも大丈夫であると信じます。

ではお別れ致します。御健闘を切にお祈り致します。

末期の時刻が切迫していて、極限状態に追い込まれている人の文章とは思えぬ平静さで、特攻出撃体験者としての希望や反省をこと細かに列記している。

体当たり攻撃をかけて帰還した人はいないから、司令部にとってこれは貴重な献言であったろう。

動揺の気配は微塵もなく、最大の効果を期する現場指揮官として沈着冷静な判断のもとに、適切な意見を遺した深堀大尉は、余程剛胆な人だったに違いない。

こういう沈着冷静な性格の人物こそ、指揮官として最適である。

アメリカ側の記録は、

「十月二十八日、軽巡洋艦デンバーがレイテ海域において特攻機による損害を受けた」

となっている。

この日は、ほかに特攻機の出撃はなかったから、デンバーに体当たりしたのは、黎明にセブ基地を発進した深堀大尉と松本飛曹長組の九九式艦爆機だったに違いない。

私が七〇一空に赴任したのは翌年一月だがら、深堀大尉を知っているはずはないのだが、なぜか一緒にいたような錯覚に囚われつづけているのには理由がある。

そのことをつぎに述べる。

（つづく）



紙透家の人びと（十七）

第六章　第五野戦憲兵隊（父紙透小太郎の手記より）

紙透寛夫

二　スラバヤに上陸

船中生活二十余日、すっかり疲れてしまったが、珍しい土地ではあり皆張り切っている。揚陸作業が開始される。内地から物資豊富な南方へ行くのに、豊田の自動車（乗用、貨車とも）、米、味噌、醤油、油類など、内地の欠乏物資を二か月分も持って行くのだ。南方には米、自動車、油類は腐る程あるのに、他の部隊では建築資材さえ持って行った。まだ他に重要資材は幾らでもあるのに。揚陸作業の乱暴さには驚き入ったものだ。我等のように初めての体験者には、どうしても納得がいかない。こんな乱暴な取り扱いをして、一体、現地に到着する時には、全部が乱梱になってしまうではないか。しかし誰一人注意する者はなし。乱梱が後から後から出て、中には、米のような物は、ほとんど空袋となってしまったのもあるさまだ。大体、梱包も悪い。米にせよ他の味噌醤油の如きも、これでは乱梱一〇〇%出るのも無理はない、野戦に慣れない部隊の故かも知れない。とにかく全部の揚陸も終了して宿舎に着く。

宿舎は和蘭当時の医大跡だ。広壮なる素晴らしい建物だがずいぶん汚くなっている。兵站宿舎として永く使って、手入れもしないからだろう。この兵站宿舎はやゝ郊外近くにあり、すぐ前に野戦病院があり、ちょっと出ると水田が広々とあり、内地の夏の郊外を思わせる。宿舎に入ってまず一番に感じたことは、便所の不潔さだ。大便をする方法がないまで、汚物があたり一面ふき出ている。もちろん水洗式であるが塵紙の使用を出鱈目にしたのだ。まったくあきれ果てたざまだ。これは我等以前に泊まった部隊のやったことではあるが、野戦ずれのした連中には困ったものだ。

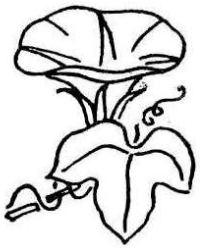
早速部屋割りをして、僕は高橋、田中少尉と同室になる。

まんじ

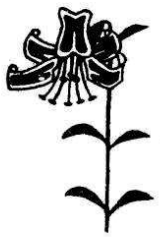
No. 89

2003.8.1

まんじ第八十九号　目次



妖　星（一）……三戸岡道夫…4
踏　絵（一）……鍋屋次郎…14
俳句しの笛……大澤鷹雪…21
晋州城……新井宏…23
遥かなるカメルーン（一）……太田精一…33
モロッコ幻想……大和禎人…41
短歌行雲流水（三）……石黒修身…46
和泉式部譚（四）……島津隆子…49
都市銀行「爆発物処理班」（六）……宅見勝弘…63
黒　船（完）……太田和貞…69
体当り戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと（十二）……千坂精一…76
紙透家の人びと（十八）……紙透寛夫…85
漢詩潮騒録（三十七）……鯨游海…88
千篇萬律……編集子…93
表紙・カット……宮城正彦
カット……鈴木國男
カット……清水トム



妖星

三戸岡道夫

（一）大悪人

時は永禄十三年（一五七〇）の正月、織田信長の岐阜城で年賀の集りがあった。この時の織田信長はすでに京へ入り、半ば天下を手に入れたも同然であったから、あまたの武将が陸続と集った。

松永久秀もすでに二年前から、やむをえず信長に服従していたから、当然といおうか、仕方なくといおうか、祝賀の席に参上していた。

その席上であった。突然、信長が大勢の武将を前にして、

「徳川殿、徳川殿……」

と、徳川家康に呼びかけたのである。家康は何事ならんと、

「はっ、なにか……」

と顔をむけると、信長は、近くに座っている松永久秀を指さして、

「この爺はな、天下の大悪人でござるよ」

と久秀を紹介したのである。

三河と遠州を統治する徳川家康は、信長とは同盟者の関係にあり、信長の家臣ではない。そのため久秀と面識のない家康へそう紹介したのであろうが、しかし最初の紹介の言葉が『大悪人』では、穏当とはいい難い。しかし信長のことであるから、なにか狙いがあるのであろう。

爺といわれた久秀は、この時六十一歳。しかしまだ野心満々の久秀は、自分がそれほどの老人とは思っていなかった。

久秀を指さした信長の右手は、久秀の心臓を刺すようにまっすぐに突き出され、久秀を見る両眼は射るような鋭さで、それは一瞬、信長と久秀との白刃での対決を思わせた。しかし、

（天下の大悪人でござるよ）

と言い終った信長の顔は、すぐ、またいつもの表情に戻っていた。

（ふん、なにが大悪人だ。そういう自分こそ、もっと大悪人じゃないか）

久秀は内心ではそう叫んだが、しかしそんな気配いは毛ほども見せず、

にやり

と不敵な笑みを口許に浮かべただけで、若い信長と家康の顔を等分に眺めていた。この時の信長は三十七歳、家康は二十九歳、久秀から見ればほんの若僧にすぎず、

（ふん、こんな若僧に何がわかるものか）

と、家康をじろりと一瞥した。

しかし家康の方は信長から呼びかけられているのだから、黙っているわけにもいかず、

「…と申しますと、どのような悪事を仕でかしましたので……」

と、信長の次の発言を促す形となった。

畿内におけるこれまでの松永久秀の悪事の数々は有名である。たとえ遠州という遠隔地にいるとはいえ、家康が知らない筈はない。だがその久秀の悪事を、信長はことさらに大勢の武将の前で言いたがっているのだと察した家康は、

（どのような悪事を…？）

と、如才なく、とぼけて答えてみせたのである。

「では教えてつかわそう」

信長はまるで自分の手柄話でもするように語り出した。

信長の話す狙いは、家康へ話すという口実のもとに、大勢の前で、『お前は大悪人だ』ということを、久秀本人に言うことにあるのは、明々白々だった。

だから信長はいたぶるような視線を久秀の方にちらちら送りながら、

「まず第一の大悪事は、自分の主家である三好長慶を謀略で殺害し、主家を乗っ取ったことだ」

と断定的に言った。だが久秀はそっぽを向いたまま、知らぬ顔をしていた。

「大悪事の二つめは、将軍を攻め殺したことだ。将軍を討ち奉ること以上の大悪事があるであろうか」

信長はよほど久秀が大悪人であることを、並いる武将の頭に印象づけたいらしい。信長の、大悪人、大悪人という連呼に、久秀は、

「うぐっ……」

と泡を吹くような声を出しかけたが、すぐ、

（ここで怒ったら負けだ）

と怒りを押えて、いつもの古沼のような顔に戻った。

「三つめの大悪事は、なんと、奈良の東大寺の大仏殿を焼き払ったことだ。これこそ神仏を恐れぬ大悪人と言わねばならぬ」

言い終ると、久秀や武将たちの反応を見るように、信長はからからと打ち笑った。

徳川家康はどのように対応していいのかわからずに、眼を瞠り、驚いた様子をするばかりだった。

しかし久秀の方は肚の中で、

（なぜ大悪人、大悪人と、わめき散らすのだ。そんなに大悪人が好きなのなら、お気に召すように第四の大悪事も起こしてやろうじゃないか。その四番目の大悪事こそ、信長よ、お前の命を狙っているのだ）

とせせら笑っていた。

久秀の三大悪事は、ここに集った武将たちの間には周知の事実である。それをなぜ信長は、わざわざ喋ったのか。それは久秀の大悪人ぶりを、大勢の武将の前で話し、（ただしこのような大悪事は、この信長に対しては絶対やるな）

と久秀に釘を刺したかったからである。

たしかに久秀は、現在のところは信長に服従している。しかしそれは表面上だけで、心の中では何を考えているか、わからない人間だった。主人を殺し、将軍を殺し、東大寺まで焼き払って、畿内のトップに躍り出た久秀である。そうやすやすと信長に臣服するとは思われない。いつ信長の許からとび出して、謀反の牙をむくか、わかったものではない。将軍さえ殺した男である。信長を殺すことぐらい、何とも思っていないであろう。その久秀の野心を、大勢の武将の前で大悪人呼ばりすることによって、事前に防止しようとしたのである。

それと同時に信長は、久秀を例えにして、家康や家臣の武将たちにも、

（久秀のような大悪事をこの信長にするでないぞ）

と牽制したのである。

信長はいちおう将軍足利義昭を奉じて京都へ入ったけれども、まだ完全に畿内を平定しているわけではなかった。降服させなくてはならない敵は多くいる。天下布武の正念場はこれからである。同盟者である徳川家康との連合や、家臣の武将たちの結束強化は、一段と強めねばならぬ時にきていた。そこで年賀の場を利用し、久秀をだしに使って、家臣団結束のパフォーマンスを行ったのである。

しかし信長の意図がどのようなものであったにせよ、今日の年賀の集会は、久秀にとって愉快なものではなかった。

（ちえっ、新年そうそう縁起でもない、わしを大悪人にしくさって……）

久秀はもう一刻もこんな岐阜城にとどまっている気はなかった。

集会が終ると久秀は馬に乗り、一日散に京都の自邸に駆け戻った。途中、長浜に一泊しただけで京都まで走りに走ったが、馬上でも信長への怒りに燃え狂っていたので、強行軍の疲れはほとんど感じなかった。

邸に着いても、久秀の怒りはまだ治まらなかった。なまじ岐阜城において怒りを爆発させずに押え込んでいたので、その反動で、尾を引いた怒りがいつまでも静まらないのだった。

しかし、やっと邸に着いたときには、さすがに疲れがどっと出て、久秀は玄関の式台にくずれ落ちるようにへたりこんでしまった。

「お帰りなさいませ」

「はやくお部屋の方へ……」

近習や側女たちが抱きかかえるようにして部屋へ運びこむと、

「酒だ、酒だ、酒を持ってこい」

着がえもせずに、わめきたてて、酒をぐいぐい呑みはじめた。岐阜城で押さえて飲んでいた反動で、久秀は浴びるように飲みまくり、

「少しゆっくりお休みなさりませ」

と側女が久秀の肩に手をふれようとすると、

「うるさい、あっちへ行け」

と邪険に追っぱらった。

久秀は一人で飲みつづけた。飲むほどに、酔うほどに、久秀の意識の中では、岐阜城でのことは次第に朦朧となり、忘れられていった。しかし、それが、とある段階を越すと、今度は逆にそれが鮮明に甦ってきて、

（この爺は天下の大悪人でござるよ）

信長の声が、久秀の中で割れ鐘の音のようにひびきはじめたのである。

「畜生め！よくも大勢の前でこのわしに、恥をかかせてくれたな」

叫んで、久秀がはったと宙の一点を睨みつけると、そこに信長の顔が幻のように浮かんで見えた。やにわに久秀は、

「おのれ、信長め！」

持っていた茶碗を、信長にむかって投げつけた。

茶碗はすさまじい勢いで宙を飛ぶと、幻の信長は消え、茶碗は床の間の柱に当って、砕け散った。

と、その瞬間、

「ニヤーッ！」

鋭い叫び声をあげて、小猫が床の間から、ころがるように走り出てきた。久秀がかわいがって飼っている、紅丸と名づけた小猫だった。

「む、どうした？」

床の間で背を丸めて休んでいた小猫の身体に、久秀の投げつけた茶碗の破片が当ったのである。

突然の衝撃に驚いて久秀を見上げた小猫の両眼が、その瞬間、久秀には、信長の眼に見えた。久秀は小猫にかけ寄ると、

「うぬ、この信長め！」

その首筋をわし掴みにし、

「この信長め、おぬしは死ね！」

襖にむかって力一杯に小猫を投げつけた。小猫は一声、

「ニヤーッ……」

鋭い一声をあげて宙を飛んだ。そして襖に音を立てて激突すると、どさりと床の上に落ちた。

昨日まではあれほど可愛がられていたのに、急激なこの乱暴は何事なのかと、わけのわからぬ小猫はもう一声、

「ニヤー」

と鳴くと、さらに久秀はもう一度小猫を捉えて、

「信長め、死ね！」

と投げつけた。

小猫はふたたび宙を飛んで、襖へ激突した。

こうして久秀は何回も何回も、

「この信長め！」

「信長、死ね！」

と気が狂ったように小猫を投げつけた。小猫はいつまでも久秀の虐待に堪えてはいられない。やがて、

「ニヤーッ」

と最後の一声を残すと、部屋から逃げ去った。するとその後を、久秀の茶碗がもう一度飛んだ。

（二）　生いたち

戦国時代にはいわゆる三悪人とよばれる武将がいた。北条早雲と、斉藤道三と、それにこの松永久秀である。

この三人はどこがいったい悪人だったのか。たしかにこの三人は悪人と呼ばれるにふさわしい悪事をした。しかしこの三人を悪人というのなら、戦国時代の悪人は他にもたくさんいる。さしずめ織田信長などはその最たる者であろう。織田一族の支配権を握るために、伯父や弟を謀殺したり、比叡山を焼き打ちにしたり、長島一向一揆を皆殺しにしたり、将軍を追放したり、その悪事の数々は久秀の域をはるかに超えている。しかし信長は日本の歴史では三悪人どころか、英雄のナンバーワンに祭り上げられている。

日本人は、三大美人とか、三聖人とか、三悪人、御三家などと、三人揃えるのが好きである。その人数揃えのために、久秀は三悪人の仲間に入れられてしまったのであろう。

さて、その久秀の生い立ちと、その三大悪事の内容を、ここでちょっと振り返ってみよう。

久秀の出生については、阿波の生れとか、京都西ヶ岡の商人の子とか諸説があって、はっきりしない。久秀の

名前が歴史の中に出てくるのは二十歳をすぎた頃からであり、それ以前のことは不明である。そして久秀も自分の出生については、生涯ひた隠しにして語らなかった。

当時は家柄や肩書きが大きく物を言う時代だったから、久秀の出生は人に語れないほどのものだったのか、それとも恥ずべき出生だったのか、それはわからないが、久秀はそれを明かすことの不利を計算して、わざと秘密にしておいたのではあるまいか。

いや考えようによっては、その逆効果を狙って、わざと不明にしておいたのかもしれないのである。というのは、つまらない出生を話して軽蔑を買うよりも、かえって隠しておいた方が、その出生の神秘性が高まるからである。

出生不明ということになれば、あるいは公卿や将軍の隠し子などという、高貴な血を引いた人間であるかもしれないという想像力を、人々にかき立てさせることもできる。そうなれば出生の価値がぐんとはね上ってくる。現に久秀の築城術における独創性や、茶道具の審美眼には、貴種の血を思わせる鋭さが光っている。

また逆にその出生が、大盗賊とか、海賊の血を引くなどということにでもなれば、それはそれでまた久秀の悪事の迫力にも一段と凄みが増し、悪事を重ねて世の階段をかけ昇る、戦国武将の悪の能力への恐怖感が強まり、久秀の悪事への神秘性が高まる期待もあるわけである。

久秀の出生不明説には、そうした久秀の計算が多分に働いていた可能性があり、また久秀ほどの悪知恵の働く者なら、当然考えられることである。

このようにして出生不明の久秀は、享禄二年（一五二九）、二十歳のとき、三好長慶に仕えた。

三好家は阿波の国の名門細川家の家老であったが、長慶の時代になると、三好家の勢力は細川家を凌ぎ、室町幕府の実権を握るまでになっていた。

もっとも久秀が三好家に仕えたときには、長慶はまだ七歳の少年にすぎなかった。久秀は頭脳明敏で、才智は無類、それに事務能力が抜群であったので、三好家の右筆として重用されると同時に、少年である長慶の養育掛りも兼務した。そして長慶が長じても引つづき身近かに仕えたので、長慶からの信頼は非常に厚かった。

そのため久秀は四十歳を越すころには、三好家の一族に準ずる『内者（ウチモノ）』にのし上っていた。しかし並行して長慶の方も、久秀の奸智、軍略の力を借りて、室町幕府の実質執権にまでのし上っていったのであるから、二人の主従関係は、持ちつ持たれつ、といえばよかった。

やがて久秀は京都守護職に任命されると、いよいよ本領を発揮して、人頭税や通行税を思いのままに取って私腹を肥やし、その金で朝廷や公卿に贈物をし、要路に取り入るという辣腕ぶりを発揮した。

こうして永禄二年（一五五九）、五十歳になった久秀

は、長慶の河内平定作戦に従って大和に入ると、信貴山城を修理して居城とした。そして翌永禄三年には、その本丸に四階櫓を設けて、天守閣を築いた。

またこの永禄三年に、久秀は弾正少弼に昇任した。そのため世人は久秀のことを、松永霜台と呼んだ。霜台とは弾正台の唐名である。また永禄四年には従四位下に昇叙せられて、将軍義輝の相伴衆となるなど、久秀は三好家の家臣の中で、重鎮に成り上っていった。

なお、この頃の世の中の動きを見ると、永禄二年には織田信長と上杉謙信が入京して、将軍義輝に謁しており、やがて京都に何事かが起らんとする気配いを見せていた。

また永禄三年には織田信長が桶狭間の戦いで今川義元を討ち破り、また永禄四年には武田信玄と上杉謙信が川中島での合戦を起すなど、天下の動乱の予兆があちこちで始っていた。

こうして久秀は、出生不明の男が昇り得る最高の座に辿り着いたのである。しかし久秀はここで立ち止っているような人間ではなかった。久秀の胸の中には、

（ここまで来たのだから、自分が長慶に代って幕府の実権を握ってやろう）

という主家乗っ取りの野望が、牙をむいてきたのだった。

（二）　三大悪事

こうして久秀の第一の大悪事が起こるのである。主家三好家の乗っ取りである。

三好家は四国の阿波の出身で、同じく阿波出身である管領細川家の家老をつとめる家である。その関係から阿波から近畿へと進出し、細川家の衰退につれて、自分から勢力を伸ばした。そして三好長慶の時代になると、その勢力は管領細川家に取って代わるまでになっていた。したがって形の上では細川家が管領であるが、実質的には三好長慶が管領であるといってよかった。

久秀はそうした三好家の家臣のトップに躍り出たのである。野心満々の久秀の食指が、その、

（実質的な管領）

の座へ動いたのは、当然すぎるほど当然といってよかった。

三好家は、長慶の兄弟たちや、近親者によって、強力な組織に固められていた。久秀はまず、長慶の周辺の切り崩しから手をつけたのである。

長慶には、義賢、冬康、一存という三人の弟があったが、最初の犠牲者になったのは、次弟の義賢だった。義賢は阿波を治めていたが、久秀はことあるごとに義賢のことを長慶に讒言して、兄弟の間を引き裂き、反目させた。その結果義賢は次第に失脚し、戦いで戦死してしまった。これで長慶を支える三人の弟の、一人が消えたわけである。

次に長慶の末弟の一存が、有馬温泉で怪奇な死をとげ、これも久秀の策謀だと噂された。そして最後に残った冬康も、久秀は長慶に讒言して、怒った長慶がこれも殺してしまうという惨劇となった。こうして久秀の陰謀によって、長慶が力と頼む三人の弟はすべてこの世から消えたのである。

最後に久秀が狙ったのは、長慶の嫡子の義興である。そして久秀はこの義興も毒殺してしまった。

長慶の心の最後の拠りどころは、この嫡子の義興だったが、その義興にも先立たれてしまうと、長慶は落胆のあまり、永禄七年（一五六四）、四十二歳で死亡した。しかしこの長慶の死にも、久秀の毒殺であるという噂が流れた。久秀ならば、ありえないことではない。

こうして主家乗取りの野心に取りつかれた久秀は、三、四年の間に、三好一族の中心をなす人物の五人を、この世から消してしまったのである。それが完了したとき、久秀は五十五歳になっていた。

今や三好政権は久秀の掌中にあった。主家毒殺の噂がひろまっても、誰も久秀に表だって楯つく者はなかった。久秀は望み通り、長慶に代わって京、大和、和泉の三国をそっくり手に入れ、畿内を握り、細川家をあやつって、実質管領として君臨したのである。

こうして実質的に管領となった久秀の前には、もう立ちはだかる者は誰もいなかった。いるのは、ただ将軍一人だけである。

当時の室町幕府は、衰退期というよりも、むしろ滅亡期に入っていたといった方がよく、将軍といってもそれはただ形だけのものにすぎなくなっていた。したがって幕政は管領の思いのままだった。

しかしこの時の将軍は十三代足利義輝であり、彼は、足利歴代将軍の中でも英明で覇気のある人物だった。だから新実力者である久秀の、思いのままにならなかった。

久秀は、

（これは当てが外れたわい。なんとかしなくては…）

とあせり始めた。

一方、将軍義輝の方もある思惑にかられていた。それは将軍の権威の復活だった。

というのは、長慶の死は久秀にとっては好都合であったが、それによって三好一族自体としては、衰退の兆をあらわしはじめたのである。そこで義輝はこの機会を幸いと、三好政権を排除して、将軍の権威を復活させようとしたのである。

しかし三好一族はこの義輝の動きをいち早く察し、危機感を抱いた。

三好長慶父子とその兄弟が死んでも、三好一族には、三好長逸、三好政康、岩成友通という、三好三人衆と称する武将がいて、三好政権を支えていた。

そこで久秀は三好三人衆と共謀して、

（将軍が三好一族を滅亡させようというのなら、先手をとって、こちらから将軍を殺ってしまおう）

と将軍殺しの陰謀を立てたのである。

永禄八年（一五六五）五月、久秀と三好三人衆は、清水詣りと称して一万の軍兵を集めて、将軍の御所二条館へ乱入し、将軍義輝を殺害した。

そして、それと同時に久秀は、義輝の従兄弟にあたる阿波公方の足利義栄を新将軍（十四代）に擁立したのである。すなわち久秀は、将軍までもわが手の中に納めたわけである。もはや久秀には恐れるものは何もない。久秀は五十六歳になっていた。

それから二年たった永禄十年（一五六七）。久秀は五十八歳のとき。

前途に何の障害もないと思われていた久秀政権の前にも、突如、障害物が現われた。

それは久秀の独裁制が強まるにしたがって、これまで協調してきた三好三人衆との間に、対立が生まれてきたのである。

そもそも三好政権での久秀のポストは、出生のさだかでない他人者が三好家へ入りこみ、陰謀と悪事の積み重ねの中から、掴み取ったものである。三好一族にとっては面白かろう筈がない。なんとしてでも三好政権内の主導権を、三好一族の手に取り戻さなくてはならない。この久秀と三好三人衆との対立は、

（来るべきものがついに来た）

といえばよかろう。

将軍義輝が殺害された二年後の永禄十年（一五六七）十月十日、両者は奈良において対決した。久秀は五十八歳になっていた。

両者の対決は半年におよぶ激しい攻防戦だったが、容易に決着がつかず、三好三人衆が陣取った東大寺の大仏殿を、久秀は焼き払った。大仏殿とともに、大仏の首も焼け落ち、人々の崇拝していた東大寺は全焼した。かつて治承四年（一一八〇）に平重衡によって焼かれた大仏殿は、源頼朝の再建から三百七十年余後に、ふたたび戦火で焼かれたのである。

人々は久秀を非難し、信長も久秀を、

（神仏を恐れぬ大悪人だ）

と、ののしった。しかし久秀は世の非難に対して、

（木や銅で作られた大仏殿が焼けたって、なんの罰が当るものか。わしは仏罰などは信じない。そもそもこの世は、正法などでは救えはしない。この世は外法によって救うしかないのだ）

と、うそぶいていた。久秀は、

（この世は力の論理によって生きる）

という合理主義者であり、無神論者であった。神や仏を信じなかった。神の摂理とか、仏道の因果応報というものを信じない。もし神や仏があるのなら、なぜこの世に悪事が横行し、貧しい者が苦しむのか。神や仏はそうしたものを救えはしない。それを救えるものは、力である。力がなくては、何もできない。これが久秀の無神論である。

しかしその久秀を、信長が、

（神仏を恐れぬ大悪人だ）

と非難しながらも、その信長自身が久秀以上に神や仏を信じぬ無神論者だった。信長が、久秀の大仏殿焼打ちなどの比でない、比叡山延暦寺を全焼し、何千人の僧徒を焼き殺したのは、久秀の大仏殿焼打ちからわずか四年後のことだった。

（つづく）

社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数カ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　ま　ん　じ

踏　絵（一）

鍋屋次郎

寛永一七年（一六四〇）五月、島原の乱から二年経過している。ここ玄海灘に浮かぶ波頭島では、何処までも青い空と海、狭い丘陵地に耕された段々畑、爽やかな風を受け、初夏の日差しの下で働く農民の姿が彼方此方に見える。

海に囲まれたこの島では、農民の多くは漁業を兼ね、地引き網か一本釣り漁法を行い、また製塩業に携わる農民もあって、その人達は竈百姓と言われていた。これは七十五人が一組となって海水を竈で炊くので、大量の燃料（伐採樹木）を必要としていた。

村に駐在する役人達が、福江城から小船でやってくる上司達を迎えるために、船着場に来ているが、到着が予定の時間よりも遅れているらしく、先ほどから丘に上って遠くの海を眺めたりして、せわしく動いている。福江城から到着したのは、赤く大きな太陽が西の海に沈もうとする頃だった。

小舟から下りた一行は足早に村役人詰所に向かって歩いて行った。村役人詰所は船着場から五十メートル程東に行った平地にあって、船の乗り降りが一目で監視でき、村人は代官所と呼んでいた。

福江城からやってきたのは福江城管轄の島嶼総取締りの役職にある槍田彦野丞以下三名である。

槍田は役人詰所に入るや否や村役人総員八名を下座に据え

「良く聞け。お殿様からの御諚である。我が藩は文禄元年（一五九二）年から慶長三年（一五九八）までの朝鮮出兵と、加えて島原の乱による出兵、それだけでなく島原の乱では他藩の弾薬・食料調達や運搬などの後方支援を命ぜられ、その結果、藩財政は逼迫し今に至るも立ち直っていない。そのため、今後、村民の年貢滞納は絶対に許してはならない。万一年貢滞納者が発生した場合、担当役人も連帯責任として、翌年正月の年賀登城は辞退、その上蟄居し、ご家老のお達しを待て、との殿の仰せである。お前達は心して忠勤に励め」

ここまで言って、湯飲み茶碗に注がれていた白湯をおもむろに一口のみ、村役人達を見渡した。

村役人一同は「大変なことになった」という思いで鎗田の顔を見つめている。鎗田はさらに続けて

「お前達も知っておろう。二年前に起こった島原の乱のことを。あの時、この波頭島からもキリシタン三十五名が加わって、誰一人戻ってこない。皆死んだのだろう。その後、村内のキリシタンは全員改宗して、村のただ一つの寺松雲寺に檀家として登録された。お上もポルトガル船の長崎への来航を禁止した。そのようにキリシタンご禁制は従来以上に厳しさを増している。昨年は松前で百人以上のキリシタンが処刑されたそうだ。当島内百姓どもが心底改心の上改宗したとは思えない。気を許さず日常の監視に忠誠を尽くせ」

一息入れて、村役人を見渡した後、村役人頭の宋助衛門を見つめて

「宋助衛門、この年貢に関するお達しは相分かったな。お前達八人が連帯して、百姓の一人でも年貢滞納者が出ないように事に当たれ。それから毎年一回行うことに定められているキリシタンの踏絵、松雲寺に村民全員集めて実行しているか。助衛門」

助衛門はその場に平伏して

「年貢滞納者をただ一人も出さないようにすることのご命令、謹んで拝受致しました。我々八名、ご命令に服し、誓ってお上にご迷惑のかかることはいたしません。それから松雲寺での年一回の踏絵は、十五歳以上の村民全員に行っておりますのでご安心ください」

そこまで言うと、鎗田は

「そうか。忠誠を尽くせ。殿も期待しておるぞ。何か願い事があれば遠慮なく申せ」

と満足そうに村役人八人全員を見渡した。

宋助衛門は平伏したまま

「お言葉に甘えてお願いが一つございますがお聞きいただけますでしょうか」

と言って、微かに頭を上げて槍田の顔を見ると、鎗田は

「何なりと申せ。聞けることは聞き届けよう」

「はい。実は製塩用の薪のことでございます。既に村民が出入りを許されている山林では伐採をし尽くして、その後植えた木はまだ生長しておりません。そのため製塩が滞ることもございます。従って伐り出すことが許されていない山からの伐り出しをお許しくださいますようお願い申し上げます」

助衛門がそこまで言うと、槍田は福江城内での波頭島

担当役人の鍋田清衛門に回答を促した。鍋田は
「薪がなくて塩が作れないと言うのだな。百姓どもの無計画な伐採を許しているお前達が悪い。何故もっと計画的に事に当たらないのか」
そこまで言って、島嶼総取締りの鎗田のほうへ顔を向け
「如何でございましょう。某の考えといたしましては島の西側奥灘地区五町歩の山林からの伐り出しを許し、自今は計画的植林を実行させ、その代わり、現在当島全体の窯百姓に塩十俵の年貢を課していますが、それを倍の二十俵に致したいと存じます。鎗田総取締様のご決済をお願い申し上げます」
島の西側、奥灘地区は北傾斜で風が強く植物の生育は悪い。今生えている生育が悪く、這っているような木を伐り出しても後の植林はおぼつかない。その地域の海岸は岩場が多く、常に荒波に洗われて船をつけることも出来ず、住民一人生活していない地域である。伐り出すとすれば、山に道をつけるしかない。宋助衛門としては住民の住んでいる近くで南傾斜の泉部落の伐採の許しを得たがったが、逆らうことは出来ない。
槍田は、鍋田の後を続けて
「流石鍋田氏、それならばお上も村民も共に喜ぶであろう。助衛門、予も同意見ぞ。異存なかろう」
助衛門は平伏したまま
「早速お聞き届け下さり有難く、村民にもよく言って聞かせ、必ずやお上のご意向通り年貢を納めさせるでありましょう」
と礼を述べた。
当時の波頭島では、島の奥に伸びている道は耕してある畑までで、それから更に奥に通ずる道はない。島内の他部落への交通は、全て小船で海岸周りによってなされていた。
波頭島には七つの部落があり、一つの部落は軒数で四十前後、人口で二百人近くが生活している。年貢などは村役人が集落毎に、戸別に割り当て管理をしていた。
八人の村役人の担当は、現代風で言えば、宋助衛門が統括の立場にいて、後の七人が部落一つ宛を担当している。
泉部落のキリシタン達はもう十年ほどバテレンには会っていない。十年前の深夜、警戒態勢が厳しい中を、灯りも持たず小舟でやってきて、二日間潜伏して告悔を受け、生まれた子に洗礼を授け、深夜再び小舟で戻っていった時以来この島には来ていない。その後は、罪を許してもらうための告悔も、生まれた子供への洗礼（パプテスマ）も、勿論、年中行事のクリスマスもなければイースター（復活祭）もペンテコステ（聖霊降臨節）も、バテレンの手によるものは何一つ行われていない。
しかし、島原の乱が勃発するまでは、部落毎にキリシタンの長老が、子供の生まれた家を訪問して「祝祷」を行い、また「キリシタン暦」での行事については、公の集いは禁じられていたので、部落毎にそこの長老が「キリシタン暦」を口頭で伝え、キリシタン歴行事を家庭毎に密かに守らせていた。
島原の乱直後、波頭島では、全戸所持品の厳重な探索が行われ、ロザリオ、十字架、その他キリシタンの関係品をすべて没収、その上で改めてキリシタン禁教を命令した。この時は、キリシタン関係品が出てきた家から「転ぶ」ことの確認書としての「転び証文」はとらなかった。
これは規模の大小は別として、キリシタンが存在していることを表向きにしたくなかったことによる。特に、時の長崎奉行所は近隣諸藩のキリシタン禁制の動向に目を光らせ、「転ばない者」を目こぼししていた藩が発覚すれば、その藩の存立そのものが危険になることから、現地役人も無事平穏に過ごすためには、「表向きキリシタンがいなければよし」とせざるを得なかったのだろう。
福江城下では長崎奉行所からの命令で、島原の乱が終息して一年後、今から丁度一年前から、部落毎に、全村民の寺への檀家登録と十五歳以上の全村民を対象とした「踏絵」を実施していた。泉部落からは六キロ程離れた松雲寺で、年一回、寺の境内の一隅で、八人の役人監視の中で踏絵が行われていた。
「踏絵」を命じられた日は、泉部落から松雲寺までゆっくりと歩いて往復約三時間、誰と何を話していても怪しむ役人の目はない。
泉部落の中で最も人望がある留吉が、その往復の途上、過去に熱心なキリシタン生活を送っていた丑松にそっとささやいた。
「丑松、俺は以前バードレに聞いたことがあるのだが、バードレの生まれ故郷でも、その昔キリシタン信徒を指導するバードレがいないときは、その村の年寄りがバードレに代わって、キリシタンの暦を作ってみんなに知らせ、また生まれた子にパプテスマを授けたり、葬式をしたりしていたそうだ」
ここまで言った留吉は
「丑松、一寸そこの松の根元で一息入れながら話そう」
と松の木の下にある大きな石に腰を下ろした。
「丑松、俺が一番恐れているのは、俺たちが死んだ後パライソへ行くことができるゼウス様への信仰を、村のみんなが忘れてしまうのではないかと言うことだ」
「丑松、お前も妻も子供もいる。稼いだ物は殆どが年貢

でとられ、その日その日の命を繋ぐのが精一杯で、俺たちには先の楽しみも希望もない。子供達に残してやれる物も何一つない。バテレンさんは違った。人の身分にかかわらず大切に扱ってくれた。あれがパライソの世界だろう。俺たち一人一人を見つめる目が温かい。役人や坊さんなどのように、俺たちを動物扱いには絶対にしない。だから、どんなことがあっても、せめて死んだ後はパライソで過ごしたい。女房や子供と誰にも気兼ねしないで楽しく過ごしたい。俺たちがこの世で流した涙を優しく拭ってくださるゼウス様のもとで過ごしたい」

（神は自ら人と共にいて・・・・彼らの目の涙をことごとく拭い取ってくださる・・新約聖書黙示録21・3～4）

そこまで留吉が言うと、丑松は大きな目を丸くして

「爺様、よく俺に話してくれた。俺、今爺様の話したこと、部落の皆に話をしたい。爺様、俺毎晩でも灯りを持たないで爺様のところへ行くから、どうすれば村の皆がキリシタンの生活を密かに守り続けることができるのか、そのために爺様と俺がどうすればよいか教えてくれ」

「丑松、お前は俺が見込んだ通りだった。これは大変難しいことだ。途中で一人でも反対が出れば、もうその後は動けないどころかこちらの命がないだろう。今晩からでも毎晩俺の家に来い」

それから一年がたった。今では、泉部落では生まれた子に洗礼を授ける役目を「じいさま」、キリシタン暦を管理する者を「おやじ」として、留吉が「じいさま」役、丑松が「おやじ」役を担当、村役人には

「塩焼きの薪の伐り出し、畑への水路引等の打ち合わせ」

と称して毎月一回、夜、留吉宅で会合を開いていた。

その会合では、留吉の家に隠されていた「マリアが幼子イエス・キリストを抱いている聖画」を床の間に掛け、留吉と丑松が前に進み出て、バテレンの祈りを口述筆記した「祈祷書」を読み上げるように祈りを捧げた。

生まれたばかりの子供には、泉部落の奥にある沢の岩の裂け目から流れ出る水を「お聖水」として、その日に切ったばかりの汚れのない竹筒に汲んで持ち帰り、それを「授け」と称して「じいさま」役の留吉が竹筒から子供の頭に注ぎ、「洗礼」の儀式として執り行っていた。

泉部落では幸いなことに全戸が元キリシタンであり、留吉と丑松の呼びかけには全戸集まってきていた。そして、各家庭では守ることのできない「キリシタン歴」行事をこのように集まって守っていた。

今年も踏み絵が始まった。泉部落の十五歳以上の男女全員が集められた。歩行困難な年寄りは留守番を許されている。

場所は昨年と同じ松雲寺の境内。「マリアが幼子イエス・キリストを胸に抱いた」絵が彫り込んである「踏絵」は境内の雨に濡れた土の上に、下には何も引かず、何か不浄な物を放置したように置いてある。雨はその上に遠慮なく降り注いでいる。

昨年までとは違うことは、昨年までは村役人が全員少し離れた木陰に置かれた椅子に座って、村人が踏むのをのんびりと退屈そうに眺めていたのが、今年は福江城から派遣されてきた見馴れない役人が一人「踏絵」の横に立って、踏む村人の顔を見つめている。村役人もその後ろに控え、名前を呼ばれた順に踏むのを見届けている。

前日からの雨で、藁草履が雨と泥にまみれているので、村人は足指はもとより足首まで泥だらけになっている。

役人は、藁草履を脱いで、泥だらけの足で勢いよく踏みつけることを命じていた。踏む前に持っていた手拭いで足を拭くことも許されなかった。

そして、昨年と違ったことは、昨年までは踏み終わった順に帰宅を許されていたが、今年は全員が踏み終わるまで残されていた。

全員が踏み終わった時、「踏絵」の横に立っていた役人が

「今から名を呼ぶ者はここに残れ。他の者は下がってよろしい」

と言ってから名前を読み上げた。

「丑松
丑松女房おとき
徳三
徳治女房おしの
彦次
彦次女房おうめ
以上六名はここに残れ」

六名が怪訝な表情で雨の中に立っていると、その役人は、一旦は境内の出口までは帰りかけたものの、何事かと不安な面もちで立ち止まって見つめている他の者達に聞こえるように言った。

「福江城キリシタン取締の井上禮之助である。お前達を残したのは踏絵の踏み方に不審の廉がある。長崎奉行所では、先般臼杵地方で内々隠れてキリシタン信仰を続けていた不届きな者達を一斉に捕縛し糾明している」

ここまで言った後、その場に立たされている六人に対して

「丑松、その方は踏むときに何度もためらっていた。丑松女房おとき、その方は踏むときに息遣いが荒くなり、目をつむって踏んだ。

徳三、その方も目をつむって首をあらぬ方向に向け踏

んだ。

徳治女房おしの、その方は踏むことに何度もためらっていた。

彦次、彦次女房おうめ、その方達も踏むときに息遣いが荒くなり、その上踏むことをためらっていた。

従って、その方達はキリシタン信仰に相変わらず惹かれていると思われる廉により、今から直ちにその方達の家の中を隅々まで改める。同道致せ」

今年の踏絵が突然厳しくなったことには、恐ろしい背景があった。

寛永一七年（一六四〇）八月三日、ポルトガル船船長以下乗員六十一人・・・・二十九人の下僕・奴隷も含めて・・・が長崎で処刑された。理由はキリシタン禁制にもかかわらず、貿易を表向きとして実体はキリシタン布教にやってきたと判断され、船は焼かれて沈められた。（レオンパジェス　日本切支丹宗門史）

先月のこと、井上禮之助は長崎奉行所から直々に呼び出しを受け

「ポルトガルが攻め寄せてくる噂がある。その時、我が国のキリシタン達が内応する危険が十分考えられる。福江城下での元キリシタン達を厳しく見張り、万が一にもそのようなことが起きないようにせよ」

と厳命を受けていた。

八名の役人に前後を囲まれて泉部落の我が家に向かう六名は、夫婦であっても言葉を交わすことは禁ぜられた。丑松の頭の中では、漸く毎月一回集まることができるようになった会合が露見することの不安で一杯であった。露見すれば留吉は殺されるだろう。勿論自分たち夫婦も。泉部落の皆はどうなるのだろう。加えて女房おときは六ヶ月の身重である。募る不安で足が前に出ない。

「丑松、さっさと歩け」

と役人の怒声が飛んでくる。

一方、先に松雲寺を出た留吉達は、不安のあまり我先にと飛ぶように帰っていった。



俳句

しの笛

大澤鷹雪（おおさわようせつ）

青空に笛の音澄みて初稽古

年酒を控へる歳となりにけり

不景気もどこ吹く風と初高座

花房の音色聞きたき馬酔木かな

雪解光入口暗き裁判所

春宵や狐忠信菊五郎

笛の音に郭公声を張りにけり

鞦韆や漕ぎて越えたき一線も

下手だねと陰口多き初音かな

笛太鼓吾も一節雛の宴

紫蘇もみの灰汁で仕上げを占へり

夏木立犬も出づるを厭ひけり

わが巣箱思はぬ鳥が愛しけり

秘してなほ悟られし恋藍微塵

花冷えに笛を抱きて寝ねにけり

散る桜惜しむや遠き笛の音

水中花満開のまま捨てらるる

涼み舟光の海を脱しけり

軽鳧の子の泳ぎて水の重さかな

色恋は不老の秘薬業平忌

晋州城

新井宏

韓国南部中央にそびえる最大の山塊智異山に水源を持つ南江は、晋州市近辺まで南下してくると、もう大河の風格を示し始める。二百メートルに近い川幅いっぱいに水をたたえて蛇行する様は、遠目にはライン河のようであり、右岸にそそり立つ岩山はローレライを思わせる。このままあとまっすぐ十キロも南に下れば晋州湾に注ぎ込む。晋州市を流れる南江が晋州湾に注ぎ込むのに何の不思議もない。

ところが南江は突然ここで大きく東に向きを変えてしまう。大河をさえぎるほどの山地があるわけでもないのに、いったん東に向かった南江は更に延々と小さな山間を蛇行しながら二百キロも流れつづけ、洛東江と合流して半島の東南端、釜山の手前でやっと海に出る。

壬辰倭乱(文禄の役)の時、晋州が悲劇の激戦地となったのも、このような地勢と無関係ではない。日本側にとって、海にも近く、また穀倉地帯の全羅道(韓国南西部)を制圧するには不可欠の要衝であった。

小西行長の率いる第一軍が釜山に上陸したのは文禄元年(一五九二)四月十三日である。以下、第二軍の加藤清正、第三軍の黒田長政、そして第九軍まであわせて十五万八千七百名が相次いで上陸している間に、二手に分かれて北上していた小西行長と加藤清正は早くも二十日目の五月三日には首都漢陽を陥落させ、六月十五日には小西行長が平壌を占拠している。

それは戦乱に明け暮れていた日本と二百年も大きな戦争を経験していなかった朝鮮、周到な準備をしてきた日本と不意打ちを受けた朝鮮の違いであったが、もうひとつの要因に李朝支配者階級に対する朝鮮の民衆の離反もあった。上層の役人たちの多くは、住民たちを放置したまま、真っ先に安全地帯に逃げ帰ってしまった。王も大臣も都を逃げ出した。残された一般庶民たちの中には、

暴徒化したり、日本側についた者さえあったという。

しかし状況は間もなく変化する。各地に続々と義兵が起こる。それらの義兵将はほとんどが官界から疎外された儒学者や文官、僧侶、下級武士など地域に密着した人物であった。いったん占拠した各地の邑城がゲリラ戦で奪い返され、前線への補給が途絶え始める。しかも七月九日の閑山島・安骨浦の戦いで日本水軍は李舜臣の率いる朝鮮水軍に大敗を喫し制海権を奪われてしまった。そのため名護屋に控えていた第十軍から第十六軍までの十一万八千三百名を小西行長の待つ平穣に投入し、明に向かわせる計画は完全に挫折してしまう。

そして七月になると逆に明からの救援軍が鴨緑江を渡って来るようになる。

このような状況の中で、日本側はなによりも兵站補給のため、穀倉地帯の全羅道を抑える必要があった。しかし全羅道攻略を担当する第六軍の小早川隆景は郭再祐などが率いる義兵等のため、南江の西にでることさえ出来ずにいた。わずかに南海岸沿いに確保していた固城や泗川さえも、制海権を奪われた状態では、義兵に脅かされ次々に敗退してしまった。

小兵力を分散展開して、支配地域を広げて行くやり方では、あきらかに義兵側に利があった。かっての伽耶の故地を抜いて、早急に全羅道にでるには、大兵力を集中して、本拠地である晋州を制圧するのが急務であった。釜山の西、金海城内にいた加藤光泰、長岡(細川)忠興、長谷川秀一などの諸将は合議の上、二万の兵力を率いて晋州に向けて九月二十四日に出発する。

晋州城は南江の北側に隆起した傾斜岩帯の上に築かれた州城で、周囲が千六百メートルくらいある。南江側は切り立った岩壁で天然の要害であり、他の三面も斜度のある台地の上にあり、石築の城壁で囲まれていて、朝鮮の城としてはめずらしく強固な構えである。

この時晋州城を守っていたのは晋州牧使の金時敏である。前の晋州牧使は、他の上級役人と同様、判官の金時敏を伴って、さっさと智異山の麓まで逃げてしまっていた。そこにかけつけてきたのが慶尚右道招論使の金誠一である。彼は名誉挽回をかけて金時敏を晋州城に連れ戻すのに成功する。

そもそも緒戦から朝鮮側が負け続けたのには、前々年に通信副使として日本に派遣された金誠一の楽観論のせいもあった。時の正使、西人派の黄允吉が、日本は必ず侵攻してくるだろうと復命したのに、東人派の彼は侵略の気配が見られないと述べ国を誤らせた。李朝は政争の国、通信使出発の時は西人派の天下であったが、その間に政変があり東人派の柳成龍が右議政の地位についていた。冷静な情勢分析よりも派閥の論理が優先した。

その金誠一は壬辰倭乱（文禄の役）が始まる直前、ま

さに直接進攻を受ける慶尚右兵使の地位にあった。当然責任を取らされ罷免送還される。しかしここでも柳成龍の弁護で処罰を免れ、慶尚右道招論使に起用される。いわば義兵を組織し官軍との調和を図るための責任者であった。

金誠一はさすがに期するものがあり、よく義兵を集め、義兵将たちへの支援に奔走し任務を果たす。特に紅衣将軍として有名になる宜寧の郭再祐が挙兵した時、それを反乱と見なし、処刑しようとした慶尚右道監司に対して強力に反対し、宣祖に訴えてでて、これを救ったのが大きかった。その結果、監司が罷免送還されると同時に、事態も正確に朝廷に伝わり、義兵活動に対する評価も高まり、義兵に対しても武器軍糧の供給も行われるようになった。義兵活動が、この地方で最も盛んであったのには、金誠一の役割が極めておおきかったと言えよう。

その金誠一が、晋州牧使に従って智異山麓まで逃避していた判官の金時敏をつれもどすのに成功する。そして牧使の職責を代行させて、募兵や武器の整備、城池の修復を行わせ、晋州城を死守するように命ずる。金時敏も期待に応え、義兵を助け固城や泗川を奪い返し、八月七日には正式に晋州牧使に任命される。

そのような状況の中で十月五日から第一次晋州城攻防戦がはじまる。この時、城を守っていたのは三千七百名、ただし大部分は寄せ集めで、とても精兵とは言えなかったが、地域に展開する義兵たちの熱烈な要請を受けて、城を死守する決心をする。やはり晋州城あっての義兵活動であった。

この時、たまたま慶尚右道兵使の柳崇仁が近郊の戦いで敗れ、手勢と共に晋州城に逃げ込もうとする。しかし金時敏は固く城門閉ざして、これを許さなかった。城門を開くのに乗じられることを恐れたこともあったが、せっかく守城体制を築き上げたのに、格上の兵使が入城したのでは指揮系統に乱れがでることを恐れたためだというのが通説である。しかし、それよりも城外に展開する義兵などの戦力があってこそ意味のある籠城であり、牧使金時敏の戦略的な判断であったとする方が妥当であろう。

結局、柳崇仁は泗川県監の鄭得悦らと共に、城外で戦死してしまうが、これを城外で伝え聞いた義兵将、紅衣将軍の郭再祐は金時敏の処置を褒め称えている。

かくして第一次晋州城の攻防戦がはじまるが、状況を簡単に整理して置くと、攻城側の日本は、加藤光泰、長岡(細川)忠興、長谷川秀一など二万の兵を晋州城の北側すなわち南江と反対側に集中して展開させたのに対して、守城側は金時敏以下三千七百名が晋州城に入ったほかに、晋州を取巻く周囲の飛鳳山、石甲山や南江の対岸にある望晋山などに義兵四千名程度が次々に集まり、分散して

対峙する。

戦闘第一日目の十月五日は、「一箭一丸たりとも無駄にせず塁を守り敵の状況を監視して静かに待機せよ」と言う金時敏の命令のもとで、城内巡察を強化し、老弱男女たちには全員男服を着せて兵士のように見せかけ、手薄な兵力を悟られないようにして、戦闘準備を整えた。

実際の戦闘は六日早朝から始まる。日本側は、三隊の縦列に分かれて一気に攻撃に出る。記録によると、あるいは騎馬で横走りする者、あるいは円形の金扇を長い台の上に差し立て振り回す者、あるいは金の光を出す雲形の扇を背負う者、あるいは鶏羽冠を被る者、あるいは被髪仮面を付けた者、あるいは角の付いた金仮面を被った者たちが、いろいろな旗印を風に靡かせ、青藍や紅蓋の日傘を担ぎ、剣光を日の光で七色の虹に輝かせるなど、奇形異状な軍容であったという。このような色とりどりのいでたちが当時の実態であったとも思えないので、おそらく異民族に対する心理戦の意味が含まれていたのであろう。

かくして、攻撃側は示威行動を繰り返しながら、岩石で堀を埋め、足場を築き城に近づく。その一方で、付近の小山から銃の一斉射撃をしたり、全軍がいっぺんに大音声を挙げたりして、守城側を脅かすが、城兵たちは金時敏の命令を良く守り、静まりかえっていて、動揺した様子を見せない。

攻撃側の主武器はもちろん新式の鉄砲である。それに対して守城側は一部大砲も備えていたが、やはり主力は旧式の弓矢であった。装備面では比較にならない。もともと攻城側を十分に引き付けてから戦闘を始めるしか方法が無かったのであるが、威嚇に屈せず、冷静に対処して、攻城側の弾薬を消耗させる作戦が徐々に功を奏する。

この日の夕刻には、義兵将の郭再祐が攻城側の後ろの飛鳳山で烽火を上げ、「紅衣将軍が大軍を率いて救援にやってくる」と大声で叫ぶと、攻城側は非常に驚き、警戒のため一晩中眠れない状況を生じてしまった。それと同時に、固城から援軍を率いてやってきた義兵たちも晋州城の南、南江を挟んでそそり立つ望晋山に陣を敷き、多数の篝火を焚き、太鼓を打ち鳴らして、城内の兵士たちを鼓舞した。

翌七日になると、攻城側は終日、鉄砲を打ちかける一方で、近隣の民家を略奪し、焼き尽くし、捕虜にした子供たちをつかって、「八道すべてが既に平定された」と叫ばせ、降伏を強要する作戦にでる。これに対して、金時敏は門楼の上で楽工たちに琴笛を演奏させ、余裕のある模様を演出する。まさに心理戦である。

しかし心理戦で決着がつく訳がないのが、異民族間の戦争である。日本側は各種の攻城用の装置を準備し始める。そのひとつは大竹と板材で骨格を組み立てた後に石と土で補強した土塁のようなもので、上から大筒や鉄砲で攻撃できるようになっている。また数多くの竹梯子や三層になった台車型攻城装置も次々と作り出した。

これに対して、守城側も玄字銃筒という鋳鉄砲や火薬・薪そして大石を準備し、竹梯子や三層台車に対しては、長い柄に斧や鎌を取り付けて対抗する。大砲は通常なら攻城側にとって有効な武器であるが、この場合、日本にはあまりない武器であったこともあって威力を発揮する。一気に攻め落とす計画であった日本側にとってはまったく予想外の苦戦となった。その上、城外には義兵団が次々に集結してゲリラ戦を繰り広げ背後を脅かす。

攻める方も良く攻めたが、守る方がもっと良く守ったというのが実際であった。激しい戦闘が続くが決着がつかない。日本側はいったん退却すると見せかける詭計まで用いて城兵を誘い出そうとするが、これもうまく行かない。

そして十日になる頃には、義兵たちが次々と増強されるなかで、日本側は早々に決着をつけざるを得ない状況においこまれてしまった。

この日の総攻撃は夜明けとともに始まる。日本側は兵力をふたつに分け、一万が東門を、残りの一万が北門を攻める。特に城壁が低い北門では、いったん攻め込むことに成功したが、副将格の前万戸崔徳良などの活躍により体勢を立て直すことに成功する。しかし、その中で総指揮官の金時敏は流れ弾にあたり戦死してしまう。日本側も長岡忠興の弟玄蕃之允が戦死するほどの激戦であった。

結局、十時頃になっても城内へ突入することができず、折から雷雨がひどくなったこともあり、日本側は多くの死体を遺棄したまま引き上げを開始する。このままとどまり、攻撃を続けることは危険であった。一方、守城側はもとより、外部に展開していた義兵たちにも本格的に追撃する力は残されていなかった。

この戦闘を韓国では壬辰倭乱の三大戦捷のひとつに上げている。とにかく陸戦における最初の勝利であった。

勝因は、何といっても義兵たちの活躍にあった。特に紅衣将軍の郭再祐が南江を抑えていて、日本側が南江沿いに進むことが出来ず、山越えで晋州に向かわざるを得なかったことが、長期戦を困難なものにしてしまった。それから攻城戦でありながら、攻める側を取り囲むかのように義兵が展開していて、周囲を制圧することができず、ゲリラ戦で消耗してしまった。退却したのは正しい選択であった。

これによって、日本側は穀倉地帯の全羅道に入ることができなくなったばかりでなく、慶尚右道さえも支配し

得なくなってしまった。しかしこのことが後の大悲劇を生む。

ちょうどこの頃、明はやっと本格的な参戦を決意する。既に七月頃から五千人規模の援軍を送り、朝鮮軍と合流して平壌城の小西行長を攻めるなどしていたが、大敗してしまっていた。その報告に衝撃を受けた明は十二月になると必勝を期して、李如松を提督とする正規軍の精鋭四万八千名を送ってくる。

まず李如松は翌年一月八日、朝鮮官軍一万名と共に、小西行長以下八千名が守る平壌城を総攻撃する。兵力に大差があったが、日本側は守城の利と鉄砲の威力によって良く戦い、かえって明・朝連合軍側に負傷者が続出する。

そこで李如松はいったん兵を引き、退路を保障して開城を勧告する。明としては日本軍を追い払えば勝利であった。兵糧不足に悩んでいた小西行長軍もここまでが限界であった。日本側は他に展開していた黒田長政や小早川隆景を含め、一月十七日には漢陽の漢城まで撤退して、明・朝連合軍との決戦に備え、総兵力の四万千名を再編する。

明・朝連合軍は一月二十三日には既に開城まで進撃してきていた。日本側にとって戦場をどこに選ぶかが大問題であった。漢城で籠城するには兵糧に不安があった。結局、短期決戦を選んで、碧蹄館渓谷で迎え撃つことにした。広大な原野での騎馬戦を得意とする明軍を狭い土地に誘い込む戦略であった。

明軍の主力を誘い込み、伏兵で左右から攻撃しながら、鉄砲隊が中央を突破する作戦が功を奏し、本営を衝かれた明軍は四散し、開城まで撤退する。日本側は追撃はできながったが完勝であった。これにより李如松らは戦意を喪失してしまう。一方の日本側も消耗が著しく、兵糧も乏しくなっていた。引けば追撃を受けるのが必至で、甚大な被害をこうむる。さりとてこのまま留まるのも補給面では不可能であった。

講和の機運が高まり、日本と明は朝鮮の頭越しに現地での交渉をまとめる。そして日本は四月になると明軍の了解のもとで残りの食料を携え無事に釜山近くまで撤退する。明から見れば兵力の損耗なく、日本軍を漢城から駆逐したことで、明の安泰は確保したことになる。日本は戦闘に勝って戦争に負けた。

そして五月十五日には明の使節が名護屋に到着し、秀吉と会見し本格的な講和交渉が始まる。この時示した秀吉の要求は、当時の状況から見れば現実ばなれしたもので、ゼロ回答が不可避であった。それを避けるためには、既成事実をつくることが何よりも重要であった。せめて慶尚道だけでも実効支配をして、戦果としなければ豊臣

政権の存続さえ危うくなる。

そこで出された方針は、慶尚道の各地に日本式の城を築き、支配の実態を整えることと、晋州城を抜いて、全羅道を支配化に置くことであった。特に、第一次晋州戦で敗退したことを秀吉が激怒しており、晋州城攻撃問題はすでに戦略的な次元を越えてしまっていた。

日本側は第二次晋州城攻撃に総力を注ぐ。これには、やっとの想いで南下撤退してきたばかりの小西行長、加藤清正、黒田長政、毛利吉成、小早川隆景ら五万五千名が主力として加わる。明や朝鮮側から見ればまさに背信行為とさえ映ったであろう。その他、前回の第一次攻撃の主力となった長谷川秀一、長岡忠興や福島正則、蜂須賀家政、宇喜多秀家らの有力大名も加わり、直接攻撃隊だけでも九万余名、これに補給路の確保の三万余名が加わり、総勢は十二万余名。まさに総力をあげての攻撃態勢であった。

日本側は六月十五日に金海と昌寧をでて、途中の咸安、班城、宜寧を占領しながら、六月十九日には早くも晋州城を囲む。

一方の守る側の態勢は複雑であった。南下する日本軍を追ってきた明軍は、小西行長を通じて、講和交渉に障害になるからと攻撃を回避するように働きかけるが、日本側の態勢は既に固まっていた。講和によって日本を追い払うことに期待をかけている明軍は、朝鮮側に、いったん城を明け渡した方が得策であると伝えたまま、傍観者のごとくまったく動こうとしない。

明軍と一緒に南下してきていた朝鮮側の官兵も晋州城の近くまできていたが、その多くも動かなかった。一方、在地の義兵たちも、戦術論をめぐって意見が対立し、第一次戦で活躍した紅衣将軍の郭再祐も城に入るのを拒否する。また当の晋州城主ともいうべき牧使の徐礼元は大軍におののき、城内にとどまるのさえやっとの状態であった。

その中で、推されて指揮とることになったのが義兵司令官ともいうべき倡義使の金千鎰である。副将にはこの時、慶尚右兵使に上っていた義兵将の崔慶会がつく。いずれも全羅道の出身であった。このことが示しているように、第二次戦の主力は前回と異なり地元の晋州勢というよりは、むしろ全羅道の兵士たちであった。晋州城が落ちればもはや全羅道は守れないという危機感のためでもあったろうがやはり異常であった。それでも、第一次戦の倍、すなわち七千名程度の兵士を確保することに成功する。そこまでは良かった。

しかしもっと異様だったのは、非戦闘員が次から次へと城に逃げ込んできたことである。柳成龍の『懲　録』によれば六万余とある。そもそも朝鮮半島の城は逃げ込むためのものであるから当然とも言えるが、やはり第一次

戦で日本側を撃退させた経験が大きく影響した。

賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶという。在地の義兵たちが動かない中で、一般の民衆で城内は膨れ上がった。もちろんこれらの民衆の中にも戦闘に耐え得る者も含まれていたに違いないが、これが悲劇を大きくしてしまった。

結果論かも知れないが、明軍が言うように城を空にするか、あるいは郭再祐などが唱えたように守るにしても城の周辺に義兵たちを展開させ、攻めてくれば退き、退けば攻めるのが正解であった。晋州城の重要性は疑いないが、義兵が展開しているかぎり、晋州城を陥としても日本軍はやすやすと全羅道には入れなかったはずである。

戦闘の経過は凄惨であった。秀吉の命は「最前せめそこない候城にて候條、一人も不洩やうに悉可討果事」とあった。この対象に非戦闘員が含まれていたか否かはもう問題ではなかった。攻撃に参加した大名たちは良く知っていた。もうどこにも褒賞の財源がないことを。ゼロサムの世界で、手柄を立てなければ取り潰されるかも知れないという恐怖感が諸将を走らせた。告げ口を極度に恐れた。だからきそって秀吉の命令に忠実であろうとした。

十九日に始まった包囲戦は二十二日から本格化し二十九日まで十一日間に渡って続く。前回の二倍にも達する攻防戦であった。しかも攻める側が前回の五倍にも達する大軍を動員し、歴戦の武将、加藤清正、小西行長、宇喜多秀家を投じる中で、守城側が良く守ったというのが評価であろう。しかし救援の望みや背後からのかく乱のない孤立した城は落ちるのが運命であった。

日本側は前回苦戦した経験を生かして、背後をかく乱されないように、まず周辺の山地を抑える。そして城攻めの基本にしたがって、城の西北側の濠の水を抜いて南江に流し、そこを埋め立てる大土木工事を始めると同時に、城壁の下を掘り、大石を抜いて城壁を崩し落とす工事に取り掛かった。

また、加藤清正と黒田長政は亀甲車と称するタンクのような新攻城兵器を登場させる。これは敵の攻撃を防ぎながら城壁まで近づき、危険時には綱を引いて自在に引き返すことができるようになっていて、やはり城壁を崩壊させるのに用いられた。

連日激しい攻防が続き、双方に多くの犠牲がでるが、結局は六月二十九日の城壁の崩壊が城の運命を決める。黒田長政配下の後藤基次と加藤清正配下の森本儀大が先陣を争って城内に入る。両将はほっとしたであろう。

この時までに、既に守城側は多くの将士を失っていたが、最後まで残って戦った金千鎰や崔慶会らは南江を臨む矗石楼で慌しく宴を催し南江に投身して果てる。

この時、秀吉の命令がどれだけ忠実に守られたか判らないが、城内では、生き残った者は「司倉大庫に入れば死は免れる」と言って集められ、焼き殺されてしまったという。事実か否かは判らないが、残虐行為はいつでもどこでも類似した形態で起こる。人間の性であろうか。

かくして城内では、人はもとより、牛、馬、鶏、犬に至るまで悉く殺され、南江に投じた者等を合わせると死者は六万余人にのぼったという。死者数については八万余名、あるいは三万余名との言い伝えもあり、定かではないが、水量豊かな南江に死体が上になり下になりぎっしりつまっていたとの記録もある。戦の後、周辺の人口急減により、行政単位を変更せざるを得なかったともいう。

まさにミスマッチであった。

秀吉の意図が一般庶民までも含めて「一人も不洩やうに悉可討果事」であったとはかぎらない。日本の常識では、城に立てこもって抵抗するのは戦闘員だけであった。しかも第二次晋州戦の前までは、その常識が朝鮮でも通用していた。だから朝鮮に「逃げ込み城」の歴史があることなど知るよしもなく、出された命令であった。

朝鮮側にとってまことに不幸であったのは、第一次晋州戦で勝利を収めてしまったことであった。このことが、戦略的には放棄すべき晋州城を死守するという誤った判断につながった。しかもその上、周辺の住民に「逃げ込み城」の潜在意識を目覚めさせてしまい、地元の義兵たちが戦略的な見地から入城を拒否する中で、逆にこぞって入城するという状況を生じてしまった。

一方、日本側の諸将も秀吉の評価に戦々兢々としていた。もしここで秀吉の命令に忠実でなかったとでも告げ口されたら、家臣一同が路頭に迷いかねない。諸将が相互監視するなかで独自の判断で行動することなどできる雰囲気になかった。そして悲劇が起こった。

かくして第二次晋州城戦は終わるが、その後日本側は結局この城を維持することができずに放棄してしまう。戦闘には勝ったが、実効的な支配はできず、海岸沿いに日本式城郭いわゆる倭城を築いて、拠点を維持しながら講和交渉に臨むしかなかった。しかも日本も明も共に勝者の立場で臨むこの講和交渉では、秀吉の現実離れした要求が通るはずがなかった。

戦闘に勝てば戦争に勝ったことになる日本。第二次晋州城戦の結果は、日本に妥協の機会を失わせる方向に働いてしまう。これでは講和がまとまるわけが無い。現地では明側も日本側も本国政府を偽って講和をまとめるしかなかった。そして四年後に、この虚偽の講和交渉に激怒した秀吉が再び兵を送り、丁酉再乱(慶長の役)という無益な戦争をもたらすことになってしまった。

いま晋州城は市の公園として整備され、市民の憩いの場となっている。南江の流れに映える崖上の矗石楼は観光写真としても秀逸で、悲劇の歴史とともに韓国人なら誰でも知っている。矗石楼の後方には、第二次晋州城戦後の祝宴で、日本の武将を抱かかえて南江に飛び込んだ女性・論介の祠がある。韓国では史上二番目に有名な女性で、韓国のジャンヌ・ダルクと称されている。

また城内には国立晋州博物館もあって、壬辰倭乱・丁酉再乱(文禄・慶長の役)関係資料がすべて集められている。いわば晋州城は、韓国の人たちにとって、悲惨な歴史を語り継ぐひとつの中心地なのである。

ところが不思議なことに、晋州の人たちが反日的かというとまったく逆である。親日と言う言葉が裏切り者を意味していた時代に、韓国で初めて正式に日本語講座を開いたのがここ晋州市の国立慶尚大学であり、いまも日本語教育のメッカである。私が歴史と考古学の研究の合間に、ここ慶尚大学で金属工学を教えるようになってから、既にあしかけ三年になるが、その間一度も反日的なことに出会ったことがない。純朴で心豊かな人たちが晋州人である。

緑豊かな晋州城、南江は今日も豊かに流れている。

お知らせ

第90記念特別号

まんじ傑作選　発刊迫る!

20人畢生の作品が全篇読み切りで整揃い。
小説伝記等14篇、論考4篇、詩歌4篇、計22篇の構成で制作中。読書の秋にお届けします。

出版記念パーティー

11月22日（土）正午より　　学士会館にて
維持会員の皆様、多数の参加を期待しています。
（別途ご案内送付）

遥かなるカメルーン（一）

太田精一

（一）

「やっと中津江村歓喜」

桂木裕介は、夕食後読売新聞の夕刊の見出しを見て、胸を撫で下した。二〇〇二年サッカーワールドカップに出場するカメルーン代表団が、五月二十四日大分県中津江村にやっと到着したのだ。テレビでも、村内のスポーツセンターでの歓迎式の模様を放映している。

中津江村は、村民こぞって歓迎ムードを高め、カメルーン代表団はキャンプインを待っていた。だが、来日予定の十九日になっても代表団は到着せず、ヨーロッパに留まってなかなか動こうとしなかった。

ワールドカップ出場の報償金問題で、一部選手が不満を唱え、出場を渋ったために遅れているという。中津江村では、予定していたイベントや練習試合を中止したり延期したりして対応に追われていた。九州のこの小さな村が"待ちぼうけの村"として日本国中の注目を集めていた。

桂木裕介は、カメルーンを知る数少ない日本人の一人として、代表団の到着の遅れを憂慮していた。このことによって日本人のカメルーン感が悪い方向に流れるのではないかと秘かに心配した。

だが、その心配は杞憂に過ぎなかった。中津江村は、歓迎ムード一色で、和やかな交流風景が画面に映し出されている。まるで待ち焦れた恋人がやって来たような雰囲気だ。

桂木は、居間でその映像を見て、内心ほっとすると同時に、三十年前の一九七二年八月から七六年一月まで、三年余り過したカメルーンのドアラでのさまざまな出来事を思い出していた。

機上から眺めるドアラの街は、密林の中を流れるウー

リー河の河筋に沿ってあった。緑の原生林に取り囲まれ、市街地とその周辺の農地だけが赤土の素肌を剥出しにしている。赤土の土地に白いトタン屋根の小屋が点在し、街の中心には、三、四階の低いビルが、道路沿いに間隔を置いて並んでいる。街の北側に沿って流れるウーリー河の先には、大西洋が光って見えた。

飛行機が着陸態勢に入った。アフリカでの生活の第一歩が始まる。

桂木裕介は、やや緊張した面持ちで、妻と二人の子供に着陸の準備をするように告げた。一九七二年八月二十日夕闇迫る頃であった。

桂木は、一九四〇年にジエトロに入会した。入会当初から名古屋勤務で、貿易情報の提供サービスを行っていた。日本経済も高度成長期を迎え、輸出も年間一〇〇億ドルを突破"伸ばせ輸出、豊かな暮し"のキャッチフレーズのもとに輸出振興全盛の時代であった。名古屋だけでも中小の輸出商社が三五〇社余りもあり、輸出メーカーを併せると輸出関連業者は五〇〇社を超えていた。

中小輸出企業の多くは、相手国の市場も知らないままバイヤーの注文に応じて唯闇雲に輸出するだけであった。桂木は商社、ジエトロの海外駐在経験者や輸出に成功した経営者などを招いて講演会やセミナーを開催する仕事を主に担当していた。また、時には、海外の優れた商品を集めた展示会を開催したり取引の斡旋を行ったりすることもあった。

「桂木君、お茶でも飲まないか」

上司の山木省二は、何か重要な話でもあるらしく同じビルの喫茶店に桂木を誘った。

「実は、君にカメルーン赴任の話があるのだが、どうかね」

桂木は、頭の中にアフリカの地図を描いてみた。カメルーンは（西アフリカのギニア湾の奥のくびれた処にある）という程度の知識しか持ち合わせていなかった。

「カメルーンですか。あそこはかつてフランスの植民地だったと記憶しています。一般的にはフランス語が使われているのでしょう。フランス語は、大学の教養部の時に、第二外国語として二年間やっただけで、既に十年以上過ぎていますから自信ありません」

フランス語にまつわる苦い思い出が、桂木の脳裏を掠めた。教養部の二年間寮生活をしていた桂木は、第二外国語に、フランス語を選択した。選択の動機は、シャンソンを原語で歌いたいというごく単純なものである。寮生活の楽しさとアルバイトに追われた桂木は、授業のほとんどを欠席し、たまにしか学校に行かなかった。

「やあ、今日は珍しい人が出席していますね」

久し振りにフランス語講読の授業に出席した桂木に担任の須藤助教授は言った。モーパッサンの"初雪"をテキストに使っている。

「桂木君、ちょっとこの個所を訳してみてくれませんか」

桂木は一瞬戸惑った。机の下にある訳本を開いて、指摘された原文と訳文との位置を確かめ、わざとたどたどしく読んだ。

「名訳ですねえ。普段授業に出ないにしては、なかなか立派なものです。ところで、この単語はどんな意味ですか。また、この動詞は半過去ですが、作者は何故半過去を使ったんでしょう」

桂木は、その単語の意味も、モーパッサンが何故半過去で表現したかも分らなかった。真赤になって俯いているとすかさず須藤助教授は言った。

「ほう。単語の意味が分らなくて、また動詞の変化の持つ意味も分らなくて良くそれだけの名訳ができますね。桂木君は言葉に対して、天才的な感が働くようですね」

一言の弁解の余地もなかった。その時以来桂木は、汚名挽回のため、気を入れて勉強しようとしたが、友人との楽しい語らいに加え、アルバイトや寮活動に追われ不本意な成績でやっとフランス語の単位を取得出来た。第二外国語でも単位を落せば、学部に進級できない。実際寮生の中で、単位を取得出来ず留年する者も少なくなかった。卒業後十年経って、またフランス語の脅威に晒されると思うと何か宿命のようなものを桂木は感じた。

「カメルーンは、フランス語だけではなく英語も公用語として使われているから、何んとかなるのではないか」

上司の山木は、こともなげに言った。好奇心が旺盛で積極的な性格の桂木は、英語にもそれほど自信はなかったが、持ち前のチャレンジ精神が首をもたげ、フランス語に対する苦手意識を払拭する良い機会だと考え直し、赴任の決意を固めた。

（なんとかなるだろう）

そう思ったが、海外への転勤は家族全員に係わることなので、桂木は即答を避けた。

「家族も一緒に連れて行きたいと思いますので、一両日中返事を待って下さい」

一九七二年当時カメルーンは独立後十二年経っただけで混沌としており、情報もきわめて限られていた。日本から遠く、瘴癘の地として旅行者にも敬遠されがちである。赴任の話があるとさまざまな理由を挙げて赴任を回避しようとする人も少なくなかった。

妻の由美も、夫に劣らず好奇心が強く、環境適応能力に優れ、生活の変化を楽しむタイプであったため桂木の赴任に同行することに何の抵抗もなかった。むしろ、未知の国カメルーンへの赴任を喜んでいるようだ。

ただ、桂木夫妻の気懸りは、四才の長女摩耶と三才の長男登である。二人ともまだ幼稚園にも入っていない。

気候も、言葉も、生活習慣も異なるアフリカで、病気もせず、無事育ってくれるかどうか心配だった。

（現地の子供達の中で、フランス語の教育を受けたら、日本語を話せなくなってしまうのではないか。帰国した後、日本の学校に直ぐには適応できないのではないか）

桂木夫妻にとって教育も大きな問題であった。

桂木のチャレンジ精神と由美の好奇心は、こうした不安や懸念を超克する程強いものであった。

（たとえどんなに過酷な条件の処でも、そこに人間が住んで社会生活を営んでいる限り、家族を連れて行ってもなんとかなる）

そう考えた桂木は、翌日上司の山木に赴任の意志のあることを告げた。

赴任が決定した後、桂木は、カメルーンに関するあらゆる情報の入手に務めた。前任者はもとより、外務省、フランス領事館（カメルーンの領事事務を代行していた）などにも問い合わせてみた。

当時は、在日カメルーン大使館はなく、日本もカメルーンに大使館を設置していなかったので、カメルーンの生活関連情報は皆無に近かった。

中津江村のカメルーン代表選手団の到着遅れとその後の村民と選手団の交流は、カメルーンの日本での知名度を上げる大きなきっかけとなった。災い転じて福となったのである。

当時の日本で、カメルーンは地球上のどの辺にあるのか正確に言い当てることのできる人は限られていた。

それでも桂木夫妻は、子供の環境への順応性の高さに期待した。また、今後の対外交流の拡大を予見して、多少のリスクを伴っても子供の頃から外国生活を体験させることは決して無駄ではないと判断し赴任を決意した。

（二）

ドアラ空港に桂木の家族が到着したのは午後五時頃だった。タラップを降り、空港ビルまで歩く数分の間に汗みどろとなった。ねっとりと湿気を含んだ風が夕靄の空港に吹いて熱さを運んで来る。

入国管理局の窓口の前は、人で溢れ独特の臭いと熱気が渦巻いていた。前島勇駐在員が入国管理局の窓口で待っていた。入国審査は、前島駐在員の流暢なフランス語のお蔭で、短時間で済み、桂木の家族は空港を出た。

「想像以上に熱いですね。湿気が多く、大変だったでしょう。四年間もご苦労様でした」

桂木は、前任者の前島に挨拶かたがた入国の印象を話した。

「いや、慣れると気にならなくなるものだ。ねっとりとした空気が肌を潤す。これがまたいいんだなあ。パリに出張し、ドアラに帰って来るとほっとするね。ぼくなんかこのアフリカの気候に合っているのかも知れない」

独身の前島は、よほどドアラが気に入ったのか、三年の駐在期間が過ぎても、帰国を希望しないで四年いた。

「まずホテルに案内しよう。長旅で奥さんもお子さんも疲れたでしょう。シャワーでも浴びて、ベトナム料理でも食べに行こう」

前島は、車を運転し、ドアラの中心街にあるアクア・パラスホテルに案内した。ヨーロッパでは恐らく中級程度のホテルであろうが、ここでは一流だ。バス・タブも付いている。アフリカには、シャワーだけのホテルも少なくない。バス・タブがあるということは、設備の整ったホテルの証しでもあるのだ。

二時間程して、前島がホテルに来た。桂木たちは、前島の運転する車に乗って、ベトナム料理店ローティスに向かった。途中、自分の住んでいる家に立寄り、その所在地を桂木に教えた。前島の借りている家は、ホテルから近く、徒歩でわずか四・五分の距離にある。

ドアラは、当時人口二八万人程度の街で、中華料理店は一軒もなく、東洋的なレストランと言えば、ベトナム料理店が二軒、カンボジア料理店が一軒あるだけだった。ベトナム料理もカンボジア料理も広東料理に近く味もそれほど変らない。春雨のスープ、春巻、海老のチリソース、酢豚、豆腐とひき肉の炒め、焼きそばを注文した。醤油の代わりに魚醤を使っている。少こし辛くて臭味があるが、東洋的な味を欲していた桂木は満足した。

夕食後、ホテルに帰ってしばらく休んだ桂木は、前島の家を訪ねてみようと思い立った。引続き住むことになる前島の家を引越し前に見て置きたかったからである。九時を回っていた。だが、街は思ったより賑やかである。住民があちこちでたむろし、ラジオの音楽を聞きながら歌ったり、踊ったりしている。

前島の家は、ホテルの前の大通りを東へ三百メートル程歩き、右に曲って直ぐのところにあった。門燈は薄ぼんやりと灯っているが、辺りは暗く何処が入口か分からない。ほとんど手探りの状態だった。

桂木は、ドアーを探り当て、ノックしようとした。その時、何か柔らかい物体を踏み付けた。その物体は闇の中で蠢めきむくむくと起き上った。桂木は咄嗟に飛び退き身構えた。大きな犬を踏んだような気がした。それにしては、うなり声も襲って来る気配もない。

暗闇に目が慣れるに従い、その物体が何んであるか次第に分って来た。ガードマンが入口のドアーの前で寝ていたのを知らずに踏み付けてしまったのだ。暗闇の中での黒い体は、さながら黒装束の忍者のように見分けが付かない。もし、暗闇の中で襲われたら防ぎようがないであろう。また、運転中に前に飛び出して来られたら避けようがない。桂木は、夜の外出には細心の注意が必要であることを実感した。

ガードマンの案内に従い二階の前島の居間に入るなり桂木は言った。

「やあ、驚いた。いきなり黒い何か得体の知れない物体が動き出したので、犬かと思った。せめて白いシャツでも着ていて呉れれば踏み付けることはなかったのに。後で謝っておいて下さい」

「わかった。でも寝ているガードマンも悪い。本来夜通し起きていて、警戒していなければならないはずだ。ここでは、ガードマンがいたからと言ってそれほど安心出来ない。強盗が入ったら逃げてしまったという例もある」

「やはり自分の身は、自分で守らなければならないということでしょうか。しかし力では勝てそうもないし…」

「ここでは、何が起るかわからないから、常に警戒を怠ってはいけない。外のベランダには、泥棒が入りにくいように割れたビール瓶やガラスの破片を敷き詰めて置いた。また、常に金槌と懐中電燈を枕元に置いている。金槌は泥棒が来た時にぶんなぐるためのもので、懐中電燈は頻繁に起る停電に備えたものだ」

前島は、こともなげに言ってビールを冷蔵庫から取り出し、飲みながら、この地での四年間のさまざまな生活体験と治安上の注意点について実例を挙げながら語った。

（二）

十日間の引継期間を終えて前島は帰国した。桂木一家は、前島の借りていた家を引継いだ。

前島の家の様子は、日本で聞いていたので、相当覚悟はしていたが、想像以上に凄じいものだった。コンクリート二階建ての建物で、一階は、洗濯場、物置、ガレージとなっている。二階部分が居住空間で、二つのベッドルーム、居間、ダイニングキッチン、浴室がある。

居間には、天井に取付けられた大きな扇風機が回っている。クーラーはない。浴室には、浴槽はなくシャワーだけだ。トイレの便器は、便座が壊れていた。腰を下ろすとそのままお尻が便器の中にすぽっと入り込んでしまうので、便座に二枚の板を渡たし、落下を防いだ。便器の水洗が正常に作動しているのは、桂木の家族にとってせめてもの救いであった。

夜になるとマラリア蚊が襲って来た。二つのベットを寄せ、日本から持ち込んだ蚊帳を吊り、蚊取線香を両隅に立て、子供を真中にして寝た。

外ではラジオからアフリカンリズムの音楽が流れている。それに合わせ、打楽器を打ち鳴らし、手拍子を取る音が夜中まで続いていた。桂木は、毎夜ベッドでこの音楽を聞きながらアフリカにいる実感を味わっていた。

前島の住んでいた家は、手を入れればまだ十分住める家である。だが、彼は、独身で住宅や家具調度品に関しては無頓着であったため、荒れ放題となっていた。

隣には、フランス人家族が住んでいた。同じような造

りの家屋であるが小綺麗にしており前島の家とは対象的だ。中庭はそのフランス人家族と共有している。

（ベランダに撒き散らしたガラスの破片や枕元に置いた金槌では、コソ泥は防げても強盗を撃退することはとても無理だ。）と桂木は思った。

ガードマンもそれほど当てに出来ない。そこで、桂木は、ドアラで最も治安が良く、安全度の高い地域を探した。そして、せめてクーラーのある家に引越そうと考えた。前島から引継いだ家は、事務所から近く、歩いても通勤できる距離であったが、一ヶ月住んでみて、流石の由美も音を上げた。

「このまま三年もいるのは耐えられない。いくら蚊帳を吊っても、やっぱり蚊に刺されている。子供達も何時マラリアにやられるか分らないから出来るだけ早く引越すようにして下さい」

「ぼくもここを引継いだ時から近いうちに適当な家を見付け引越そうと思っていた。住宅手当は少し位赤字になってもかまわないからせめてクーラーのある家を借りることにしよう」

桂木は、フランス人の秘書のマダム・ベルトランに、不動産屋に問い合わせ適当な物件を探し出すよう頼んだ。ベルトランは、早速不動産屋に当り、条件に合った三軒の物件を桂木に示した。

「この三つの物件全部を不動産屋に案内して貰うことにしよう。あなたも一緒に行って呉れますね」

桂木は、フランス語に自信がなかったので、マダム・ベルトランの助けを借りることにした。

「分かりました。でもその時は、マダム桂木も一緒に行ったほうが良いと思います。マダムのほうが家にいる時間が長いですから。それから台所など水回りについても料理をするマダムに見て貰ったほうが良いでしょう」

翌日、桂木は、不動産屋の案内で、ベルトラン、由美と共に三件の物件を見た。いずれも十分満足出来るものではなかったが、引越を急ぐ桂木には、その中の一件に決めざるを得ない。中心街から空港に向う閑静な住宅の中にまずまずの物件があった。南向きの四軒入居できるコンクリートブロック二階建アパートの一階の西側の一角が空いていた。一階の東側はフランス人、二階の東側はカメルーン人、西側にはフランス人が住んでいた。

「ここに決めよう」

桂木は、由美の決断を促した。

二ベットルーム、一サロン、台所、トイレ兼シャワールームの簡素な造りで浴槽はない。全体で百四平方メートルの家である。クーラーはサロンとベッドルームにそれぞれ一つずつ付いていた。そのクーラーの回りには、全て鉄格子が嵌っている。クーラーを外して外部から侵入する泥棒を防ぐためだ。

玄関のドアーには、クーラーの鉄格子よりも更に頑丈な鉄格子が嵌めてあった。

アパートの周りは鉄柵で囲まれている。その鉄柵の中の通路は広く砂利が敷いてある。前庭には芝生が植わっている。その庭に、一本の大きなマンゴの木がある。裏の敷地にも、砂利が一面に敷かれていて、駐車場と物干し場があった。

鉄柵の外の通りは、舗装されているが、車はほとんど通らない。人通りも少なく静かな雰囲気が感じられた。(ここなら安心して子供たちを遊ばせることも出来る。また幼稚園も近い)

運転手を雇っていない桂木は、何処に行くにも自分で車を運転していた。幼稚園の送り迎えもする覚悟でいた。その意味でも新しく借りる家から幼稚園が近いことは桂木にとって有難かった。

十月一日、桂木の家族は新しい家に引越した。

「クーラーがあるから、もう蚊に悩まされることはないだろう。建物全体の造りも比較的頑丈に出来ている。これなら強盗も容易に侵入出来ない。唯一不満をあげるとすれば、浴槽がない事位かな」

桂木は、引越荷物を片付けている妻の由美に言った。

「そうね。でも、シャワーのお湯のタンクはわりと大きいようだから、家族四人が次々とシャワーを使ってもお湯が冷たくなってしまうことはないと思う。だからバスタブはないけど満足しなくちゃあ」

由美は、天井や周囲の壁を見回し、明るい顔で言った。天井には守宮が張りついて、桂木夫妻が視線を向けるともうこの家の住人は、自分ではないと気が付いたのかこそこそと居間から逃げ出した。

夜になった。屈強な一人のガードマンが出勤してきて門扉の手前に腰掛け、外の様子を窺っている。アパートの所有者が入居者の安全を守るために雇ったようだ。弓を携えている。このガードマンを見て桂木は思った。

(ピストルや鉄砲で武装した強盗には到底太刀打ち出来ないだろうが、凶悪犯罪よりコソ泥の多いカメルーンでは、弓も有効な手段なのかも知れない)

街燈が灯った。その螢光灯の光はまるで誘蛾燈のようにいろいろな虫を集めている。多種多様な虫の飛び交う光の下に、多数の学生が本を抱えて集まり、思い思いに勉強を始めた。電気のある家がきわめて少ないためであろう。

街燈は回りの景色を照らすだけではなく、未来の社会を切り拓く道も照らしているのだ。

街燈の明りで勉強する学生の姿は、終戦直後の日本を彷彿とさせ、その時代に育った桂木には、カメルーンの未来がまぶしく輝いて見えた。

(つづく)



モロッコ幻想

大和禎人

ハイヒールを脱ぎ捨てて、熱砂のサハラ砂漠を戦線に向かう愛人の兵士を追うというラストシーン、なんともせつない画面が印象的であった。それは「モロッコ」というアメリカ映画なのだが、マレーネ・ディートリヒという人気女優の熱演が観客の心をうった。相手役がやはり人気のゲイリー・クーパーだったから、もうたまらないのだ。

いまそのモロッコに旅しようとする彼女の年齢からいうと、この映画に血を沸かす過去があったとするには少しく時代のズレがあるのだが、ハイヒールを脱ぎ捨てたディートリヒの映像を鮮明に脳裏に結ぶことがあるからには、やはりどこかで、リバイバル上映のスクリーンを見ていて、乙女心の胸に焼きつけていたに相違ない。

五つ星評価のシェラトンホテルに泊まれるというふれこみのツアーがあって心動かされ、彼女はとうとうモロッコ周遊九日間の旅を申し込んだ。外国旅行はすでに五大陸にあまねく、喜望峰にも足跡を印しており、とくにこのたびは北アフリカのスエズ、モロッコに特別な青春の夢を追ってみたい、そんな気持にそそのかされての選択だった。エコノミークラスなら二十万ちょっとという手ごろさにもひかれたのである。成田発は十時近く、パリで乗り継ぐ機内泊を経て翌午前に目的地に着くと、ただちに旅程二日目としてラバトの市内観光、次いで世界遺産の古都メクネスに立ち寄って、最初の泊地スエズのシェラトンホテルに夜を迎えている。期待のサハラ砂漠のメルスーカの大砂丘の観光は五日目のはずであった。

「奥様、おいくつですか」

こんどの旅でもそれを聞かれた。老境を自覚していても聞かれたくない言葉だ。無躾に問いかけるほうではそれが労りのつもりでも、聞かれたほうは少なからずうん

ざりする。

「はい、もうじき八十です」

心ない問いに腹立ちを抑えてそう答える。

「奥さん張り切っていますね」

これは添乗員の女性だった。好みの旅行社でかねてからの顔なじみであった。

彼女のTシャツの胸にディトリッヒの顔写真が縫いつけられているのを目聡く見てそう言ったものだ。

実は出立の前夜、大切に保存してあったブラウスのプリントを切り抜いてミシンで縫いつけたものだった。今度の旅行への思い入れを胸に飾る、彼女のこの稚気は大真面目なもので、決して笑えないのであった。

娘時代に住んだ地方都市の映画館の売店でブラウスは売っていたのだ。ひそかにそれを求めていた乙女心はいじらしい体のものだった。さすがに気恥ずかしく、身につけ着ることはついになかったものなのだ。

戦後の洋画解禁の波にのって、「モロッコ」は甦り上映された映画の一つだったのだ。女学校を出たばかりの乙女が、戦後の暗い記憶の中に、この映画を見た感動は、はるか戦前、同じ映画が当時の青年男女の共感を呼び、迎えられた人気に通じる感動だった。戦線に向かう兵士を追う必死の恋が乙女の心を握り絞めたのである。

同じモロッコを舞台に一九四二年（昭和十八年）、やはり米国映画でアカデミー賞の「カサブランカ」の女優バーグマンもため息の出ほどの美しさに輝いて見えたが、ストーリーとしては彼女の感動を呼ばなかった。むしろ一九三六年（昭和十一年）のやはり米国映画、興業成績No1の超大作「桑港」で歌姫を演じたジャネット・マクドナルドが桑港大地震に際会し、その最中を健気にステージの歌声を止めなかった壮絶なシーンが、別の場合では強い印象を刻んでいた。ともあれ堰を切ったように米国映画のラッシュを見た時代があったのだった。

マレーネ・ディートリヒがハイヒールを脱ぎ捨てながら、フランス軍の傭兵外人部隊を追いかけるラストシーンは、絶望的な愛をあざやかに捉える名場面として強い印象を刻んだのだ。彼女の記憶ではいったん脱ぎ捨てた靴をディートリヒが拾いあげ、女らしく無意識のうちに砂を払い落して砂上に揃えるというリアルで見事な演出があったように思う。そして部隊の行進とともに鼓笛隊のメロデーが流れ、幕切れを見事に盛り上げる……。

米国ハリウッド制作の映画であった。監督ジョセフ・フォン・スタンバーグ、一九三〇年（昭和五年）の作品である。この映画が輸入され、洋画ファン空前の人気をはくしたのは翌昭和六年のことである。往時の若い世代に迎えられて人気沸騰し、当時のキネマ旬報洋画部門ベストテンの第一位を占めるにいたった。

満州事変、世界恐慌の重なる暗い時代にかかわらずこの年、昭和五年の師走には浅草オペラ館が開場、エノケンこと榎本健一が旗揚げし、新宿にムーランルージュが開場、風刺の利いたナンセンスコメディを売り物に人気を得た。その俳優陣は左卜全、外崎恵美子、アイドル的人気の明日待千といったメンバーで人気を呼んだ。

洋画のメッカとして同じ新宿に武蔵野館が存在した。モロッコの本邦初公開は同館あたりを皮切りにしたはずである。

「明日待子バンザイ」

をムーランの客席から叫んで戦地に向かう一群の兵士があったという出来事があり、世情は険しい時代への傾斜を早めつつあった頃のことだ。しかし国民意識の一方には潜在する何かがあり、その何かをわからないまま焦燥にかりたてられ、反動的な側面を育て、世相はこのような複雑な断面を示していたのだった。

戦争中、男子校では木銃だったが、女子校の校庭では薙刀を必修とし、稽古薙刀を振りかざし、エイ、エイ声のうちに励んでた高等女学校の生活にピリオドがうたれると、ようやく乙女らしさを取り戻し、解き放たれて青春の血の滾りを迎えた。堰を切ったような戦後急造のルネサンスの奔流を漂ううちに、彼女は外国映画に耽溺する時代を迎えたのだった。ディートリヒのブラウスはそんな時代の形見だった。それを切り抜きTシャツに移し縫いつけた行為は、平成時代の今を生きて、せめて青春夢想の世界をとりもどそうと思いついた、まさしく一種の老春行為だった。

三日目、モロッコ人の家庭を訪問し、名物ミントティを嗜むコースが組まれた。砂糖を多量に加える民族嗜好には閉口した。時には日本で禁制のコカインを薄めて飲用するという、そのため添乗員から土産物についてとくに注意があった。

四日目、専用車でモロッコのスイスと呼ばれるイフランの街を経て、アトラス山脈を越えてサハラ砂漠の入口エルフードに達する。この途中ダラーの渓谷やオアシスの点在する景観を楽しんだ。泊地はエルフードだった。

五日目の早朝、四輪駆動車でサハラ砂漠メルスーカ大砂丘に向かう。砂漠の日の出見るためであった。

「奥さんは車内に残られたほうが、砂嵐でひどい目に合わないほうが良いでしょう」

たしかに風鳴りがすさまじく、車の幌を叩いていた。老齢をいたわる添乗員の言葉に従わざるを得なかった。少壮の観光客たちが頭髪を砂だらけにして、観光後を車に駈け戻っている。ホテルへ戻る途中ベルベル人のテン

トに立ち寄り、ミントティで喉を潤し、ホテルへ帰って朝食だった。さらに午前中強行して専用車でトドラ渓谷に向かう、高さ二〇〇mの断崖が続く景観を観光し、カスバ街道をひた走りに走る。この街道は今、かつての羊腸蛇行の道を串刺すように、側溝もない簡易舗装で一直線に走る道路がひらけている。かつてはラクダを連ねた隊商が地中海とアフリカ世界を結び物資を運んでいた歴史の道である。ワルザザードに向かい、途中大小さまざまの日干しレンガ造り赤っぽい要塞カスバ（土の城）を見て通る。

涙じゃないのよ、浮気の雨に
ちょっぴりこの頬を濡らしただけさ

「カスバの女」

という今はナツメロの唄があった。大高ひさを詩、そして作曲者久我山明は本名孫牧人、先ごろ八十余歳で亡くなっている。日本の植民地時代に苦労をした人に相違なく、この唄の投げやりで、少しく虚無的なムードがかえって人気を呼んだようだ。

あなたもわたしも買われた身
そして彼女の気になるような末尾に次の詞句がある。
明日はチュニスかモロッコか　泣いて手をふるうしろ影

外人部隊の白い服

だが、あのクーパー扮する外人部隊兵士のトムは口紅で別れの言葉を鏡に書きなぐって残し、ディートリヒのアミーはハイヒールを脱ぎ捨てて必死の後追いをする。二人の恋路は嘘、偽りのない真実さに満ちていた。その真剣なシーンが感動を呼んだのである。

退廃的な「カスバの女」の歌詞に漂う哀れとは違う。ムキになって彼女は手をTシャツの胸に、そう思うのだった。夕刻ワルザザードのホテルに入った。

六日目は世界遺産アイト・ヘン・ハットウの集落、大道芸人の広場ジャマ・エル・フナなど、テントタイプのレストランでの名物料理の食事があって、マラケシュの五つ星シェラトンホテル泊。

七日目、マラシュ旧市街を含む市内観光、クトウビアの塔、メナラ離宮、サーディンの墓塔見学があって再度マラケシュ泊。

八日目、深夜専用車でカサブランカへ。もし映画の舞台にならなければ、知られることもなかった都市だ。イングリッド・バークマンとハンフリー・ボガードという組み合わせの人気俳優が演じた出会いと別れのドラマはマイケル・カーティス監督のもと一九四三年（昭和十八年）製作されて公開、アカデミー賞の作品賞、監督賞、脚色賞の三部門受賞という栄誉に輝いてから六十年を経た今も、多くのファンをこの街に引き寄せる。

ところが、映画にまつわる場所や旧跡は何もないのだった。映画は全編、米国ハリウッドで撮影されたものだからである。

かろうじてホテル・ハイアットの中に映画「カサブランカ」の主舞台、ボガードが経営者役を演じた「リックス・カフェ・アメリカン」を模したバーがあるだけなのである。大方の印象に刻まれる華やかな男女が夜な夜な集う「リックス・カフェ」は幻の世界だった。再現模擬舞台を承知の上観客は参観するのである。

「君の瞳に乾杯」という名セリフ、バーの一隅でナチスの将校達がドイツ国歌を斉唱しはじめると、フランス人客がこれを打ち消すように「ラ・マルセイーズ」を歌いだす感動的な場面が想起される。

さすがにここでは土産物としてバーグマングッズが圧倒的人気を呼んでいた。

「奥さんのTシャツのディートリヒさんがなんだか可哀想」

「いいの、ここはカサブランカですもの、ディートリヒはわたしの胸に生きて、モロッコを堪能させてもらいました、いいんですよ」

添乗員と交わした会話だった。

「それよりも、ビンボウプライスって言うのが傑作でした、面白く悲しいユーモァでしたね」

絶対に言い値でものを買ってはいけないという鉄則を注意されて、港町カサブランカや古都フェズなど、観光客を見ると寄ってきて革製品などを突きつけられる。値切ったあげく、ラストプライスが決まると、その人達は、「ビンボウプライス」と片言日本語に交えて言うのだった。

「ハウ、マッチ」からはじまって、指を立てて示すなり、手のひらに指を乗せるかする、中にはボールペンの用意があって紙片に数字と、さまざまの方法でやりとりのあげく、（ビンボウプライス）に到達するのだ。

それは卑屈の言葉として聞こえ、自嘲の響きをともなって値切り交渉顛末の最後に吐き出されるのだった。

（悲しいユーモァ）として彼女はそれをうけとったのだ。どの町であったか、鞣革工場の密集する一角があり、猛烈な異臭の中を駈けて通り過ぎた覚えがあった。

彼女は一九二四年（大正十三年）甲子の生まれ。姓は稲葉、名は吉野。大正デモクラシーの風をわずかにうけて、昭和の変転に弄ばれ、戦禍の苦験をも当然甜めてきた人だ。戦争中なら敵性を指弾されかねない米国映画に心酔し、乙女心の蘇生を促され、平成の平穏に誘われるかに、老春果敢の外国旅行に出てきた。帰路の行程はカサブランカ飛行場発十八時、パリ乗り継ぎの機中一泊、長途を帰国の旅だった。（H十五・六・十四）

短歌

行雲流水（三）

石黒修身

鯨遊海氏に誘われ、港の見える丘公園にある、近代文学館で早乙女貢氏の講演を聴いた。

近辺はさつきが咲き五月の風が心地良かった。行きは、前の歌の無料パスによったのだが、休日の渋滞で二十分位遅刻した。

タクト振り交響樂団（オケ）を率いるますらおは
孤高なれども孤独にあらず

去る五月サントリーホールで、日本フィルによる、ブルックナー交響曲八番を聴いた。若い指揮者（小林研一郎）の熱意ある指揮振りと、樂団員に対する気遣いが印

象深かった。

後日ある歌会で披露したところ、講師の島田修二に、指揮者が女性だったらどうかと問われた。実感が湧かないと答えた。

また、結句が「孤独なれども孤高にあらず」ではどうか、との問には、尤もと肯けるものがあった。

荘内の殿の裔（すえ）なる歌びとが
訪ね来よとの文を賜びし

今年の宮中歌会始の召人である酒井忠明さんは、荘内藩主の後裔であるが、筆者の属する歌誌「泉会」に、かつて在籍された御縁から、荘内藩と藤沢周平に係った雑文と拙歌集を送った。一度荘内にいらっしゃいとの懇篤な返信を貰い感激した。

台湾の万葉集は胸を打つ
素朴率直真実を詠む

かねてから、その存在が気になっていた、「台湾万葉集」を取り寄せた。編者の孤蓬万里（呉建堂）は、日本統治下で旧制台北高校に於て万葉学者犬養孝の万葉集講義を受けた機縁で、以後医学者、剣道家の傍ら日本語短歌を詠み続けた。

主宰する「台北歌壇」から多くの歌人の作品を収め、自から歌人等の紹介と歌の背景等を註記した大作である。これらの歌は日本の教育を受けた一群の台湾人が、万葉調の短歌の形式を借り生活の息吹を吐露したもので、極めて味わいの深いものがある。

古稀迎え世界の屋根を制したる
朋友よ汝は世代の星だ

三浦雄一郎は、大学の同期である。学部は違い個人的な付き合いは無いが、間接的な友人は多い。

往時はキャンパスで良くその姿を見かけたものである。今回のエベレスト最年長登山は、吾々の世代の者にも勇気を与えて呉れたと思う。彼がかつて、「昭和ヒトケタ族の遺書」の中で書いた、〝野性の生命力を持ち、ホモサピエンスを呼び戻せ〟のテーゼは今も変っていないようだ。

ためらいつつ出す初めての無料パス
どうぞの声にホッとして乗る

七十才に達したところで、横浜市から無料パスが与えられた。使わなければ勿体ないとの妻の言葉に押されて、横浜駅西口から港の見える丘公園までのバスに乗った。パスを示した際の運転手の「どうぞ」の声は響き良く、何かホッとしたものである。

（六月八日朝日歌壇馬場あき子選に入選した）

さつき咲くここ横浜の丘の館（いえ）
文士講（かた）れり鞍馬天狗を

残雪が斑れるあわいに水芭蕉
朝光（あさかげ）に映ゆ尾瀬の早春

六月初旬、尾瀬の湿原を、夜明けから七時間程かけて歩いた。木道を辿るお決まりのハイキングだが、好天に恵まれ、郭公と鶯の声を聞き乍ら水芭蕉を追った。

文盲の祖母が語りし山形の
民話懐かし幼き日々に

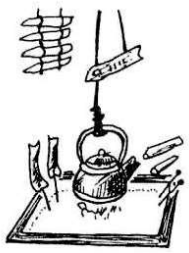
母方の祖母は、山形からの〝松前〟への移民であった。両親が共働きであったため、幼時は祖母に育てられた。方言で語る日常語や昔ばなしが、幼ない者にもそれなりに理解出来たものらしい。

亡母も来よここ多摩川の桜土手
うから集いてバーベキュ焼く

息子一家が大田区多摩川べりのマンションに住んで居ることから、娘一家と共に河原でバーベキュをした。孫達と犬が駈けまわり楽しいひと時であった。

悼亡の歌を詠めども吾れいまだ
人の心を癒すかなわず

身近かな者の死に接し、時折悼亡の短歌を詠むことがある。一方日常周囲の現し身の人々に接し乍ら、必ずしも癒しを与えてはいない自分を識ることが多い。



和泉式部譚（四）

島津隆子

十二、保昌との結婚、丹後へ

侍女たちの何人かは側室に懐柔されていて、些細な日常のことごとくが洩れてゆく。式部が道綱に文使いをしたことや、道綱邸に誘われたことまで、いつの間にか後宮全体に知れていた。またしても式部はあらぬ噂の渦中に置かれた。

そんな時のこと、道長から突然の呼び出しを受けた式部は土御門邸に参上したのである。

式部をみると道長は、

「おお、浮かれ女（め）、久し振りじゃ」

と大仰に頷いてみせた。

「近頃また派手な浮名を流しておるようじゃのう。もっともそなたほどの美人では致しかたあるまいが。今日も御殿の女房奴が、豚のような顔をしてなにやら噂してゆきおった。まぁ、噂が立てばたつほどそちの美貌が引き立つというものよな」

式部を従えて長い廊を渡りながら、道長は屈託のない大声で話しかけていたが、急に足の運びを鈍らせると、

「時に、今日呼び出したのは他でもない。和泉の縁談のことじゃ」

と言った。

「えぇっ？　私の……」

式部は訝しげな視線を道長の背に向けたが、すぐに袖を口に当てて笑い出した。

「まさか……でございましょう？」

「本当のことじゃ。和泉は気楽かもしれぬが、そなたのような麗人に、四十路にさしかかって独り身でいられては、後宮全体が安眠できぬというものよ。小式部内侍も困り果てているようじゃ。三男坊との噂まで混ぜ合わされて、何だかだとかしましいかぎりじゃ。……まぁよい。このわしに任せておけ」

道長はそう言いながら奥の一室に入った。

「そう神妙に畏まらんでもよい」

と道長が声をかけた先客は、直垂姿の武将藤原安昌であった。

引き締まった顔つきは、分別盛りの五十代半ばをとうに過ぎた男にみえる。偉丈夫な体格が特に目立つ。保昌は両の手を拡げたしかつめらしい挨拶の姿勢を崩さない。

「いずれ大江山の鬼退治や、大盗袴垂がその方の叱咤にちじみ上がって引っ捕らえられた武勇伝など、この臍たけた女人に聞かせてやるがよい……。和泉も聞きたいであろうな」

道長は語尾に力を込めると、こんどは式部に向かい、畳みかけるように言った。

「ええ、まぁ……、聞きとうございまする」

余り突然のことに細い声で答える式部を、保昌はちらりと盗み見る。やや緊張しているもののそこは後宮女御の落着きが備わっていて、女盛りの凝脂が昼下がりの光になまめかしく映えている。道長は二人の盃になみなみと酒を注ぎながら、

「貴公のごとき武辺者には、これほどの美女は難物とみえるのう。鬼退治や大盗捕縛のようにはゆかぬかな」

と言うと、大声で笑った。保昌もつられて笑ってみせたが、その強ばった表情は一向になごみそうにない。

「のう、和泉よ。女御彰子も帝の覚えすこぶるめでたく、懐妊とのことじゃ」

「まぁ、それは、それは。まことにおめでとうございまする」

保昌と式部は同時に同じ言葉を発して、思わずお互いに顔を見合わせて微笑した。保昌の顔にやっと寛ぎが戻ったようだ。そんな二人の様子を素早く見て取った道長は、

「めでたい話のついでに、もう一つめでたいことを申そう。これからは小式部内侍や教通、それに生まれてくる彰子の子の時代じゃ。教通は将来の正室に小式部を考えておる。そうなれば和泉は藤原一門の女となる」

道長は酒に酔っている。

「さらにじゃ……」

と急に声の調子を落してつづける。

「彰子の子は紛れもなく帝の子。いずれ玉座に昇る身、さすれば小式部内侍は皇室とも繋がるのじゃ。だが、これはここだけの話にせよ。絶対に他言はならぬ。そこでじゃ、二人にここで秘密を誓ってもらわねばならぬ。そのためにはどうすればよいか、わかっておろうな。よいなっ！」

この道長の言葉は式部にとって留めのようなものであった。そこには道長一流の有無を言わさぬ一気呵成の見事さがある。式部は改めて道長の圧倒的な巨魁ぶりをみせつけられたことに気づいた。

そして、自分は後、たかだか生きて十年にすぎまい。小式部のために……という諦観にも似た感情が式部を満たしていったのだ。

道長は式部からこの縁談の肯きを見届けると、満足げに言葉の調子を変え、保昌に向かってけしかけた。

「後宮第一の美女がその無骨な掌中に入るのじゃ。酒ばかり飲まず、さぁ何か申してみよ」

保昌はまだ信じられぬという表情を浮かべながら、膝の上の重ねた手に視線を落している式部にみとれているばかりであった。

熱心に同行を求めた保昌だったが、何かと口実をもうけて引き延ばす式部の意向を真に受けて、一足早く丹後国へ赴任していった。しかし、宮中に残る式部も道長や彰子の手前、そう長く京に止まっているわけにもゆかなかった。

事の成り行きの一部始終を聞いた小式部は少しの動揺も見せずに、

「私はかまいませぬ。お母さまの問題なのですから……」

とすっかり成人した口調で言った。それでも寂しげに眉を寄せると、

「お相手の方はどのような男なのですか」

「いいのよ、心配しなくて。それこそ私の問題なのですから」

と返す式部の言葉には自嘲の響きさえ感じられるのである。

小式部が問いたげな藤原保昌なる人物は、文章博士藤原菅根の曾孫であり、祖父は大納言元方である。その子息右京大夫致忠と、醍醐天皇の皇子である元明親王の娘との間に生まれたのが保昌である。系譜がよいわりには不遇な一門であったが、保昌は丹後、摂津、大和守を歴任し、道長に気に入られて道長、頼通父子の家司をつとめるようになっていた。このころ、道長によって二人は引き合わされたのだ。

保昌は〝勇士武略の長〟と称えられながらも、和歌にも優れ、「後拾遺集」の撰者でもあるところが、わずかでも式部と重なる部分であろうか。

秋風もいちだんと冷たさを増す十月半ば、強い木枯らしが吹く中、二人の侍女と衛士を伴って四十四歳の式部は丹後国へ旅立っていった。

その前夜、式部と小式部は眠れぬ夜を明かした。

やがて、東の空が白む頃、小式部は式部が部屋を出る秘めた足音を聞いた。式部はそうすることで溢れる感傷を抑えて小式部にそっと決別をしたかったのだ。だが、耐え難い別離の思いに廊の途中で振り返ると、部屋の戸口に小式部が夜着のまま立っていた。

「……行きますよ。寒いからそこまでいいのよ」

式部の制止も聞かず小式部は小走りに来て、片時も離れまいとするように腕を取って式部に寄り添い、足の運びをわざと遅らせる仕草をする。

「もういいのよ、元気でね、小式部」

笑顔をつくろうとする式部の表情も心残りに沈んでいる。

「あなたがもっと大人になる頃には帰れるかもしれない……」

俯いた小式部は唇を噛んだままである。

「道長さまにお願いして、一日も早く京に帰していただきましょうね」

小式部は頷いたが、顔を上げた眸には涙が滲んでいる。

自分の寂しさよりも残される小式部の悲しみのほうがはるかに大きいのかもしれない、と式部は思った。

「どんなに辛いことがあっても生き抜くのよ」

そう言う式部を見上げる小式部の目からはとうとう涙がこぼれ落ちる。

「どんな辛いときも、いつも一緒でしたのに……私が必要ならいつでも飛んで行きますから」

小式部の涙声に式部も忍び泣きの声を洩らした。

「ありがとう。遠く離れていてもいつまでも一緒よ……さようなら小式部」

逃れるように立ち去って行く式部のあとを、小式部は引かれるようにとぼとぼと歩いたが観念したように立ち止った。

京の大路を一歩外へ踏み出すとき、式部はもう一度振り返ってみた。

宮中の黒ずむ壮大な屋根屋根が遠く薄闇の中に浮かぶ。凄愴な風に吹かれて晩秋の空に舞う枯葉が、それらの屋根の上を駆け巡っている。式部にはその乱舞する枯葉は、娘とも引き裂かれたわが身にも思えるのだった。

丹後へは、幾重にも重なり合って奥山に通じる細い道がつづいていた。

峠の頂には冬の気配が深まりはじめ、辺りの木々はすでに色彩を失っていた。折から降り始めた小雨がそんな光景と溶け合い、いっそう落魄の心象にかられる。

もう、引き返すことはできない……。

式部の脳裏には都でのさまざまな思い出が甦る。すべての感情を凍らせたように、山襞に沿って黙々と歩む一行の姿に、荒ぶれた風が樹海を唸らせて渡る。

やがて、伝説と幽鬼漂う大江山の坂道を過ぎると、あとは一路丹後への道がつづくばかりだ。

式部はふと立ち止って、まるで墨を流したような空を眺めた。

暗々たる密雲に覆われているさまが、これからの自分の行く末を暗示しているように思えて、切々とした諦観が心を締め付けるのだった。

一方、宮中に一人残された小式部に同情が集まってか、ある歌合せ会の詠み手に選ばれた。もう二十五歳になっているが、頬を紅潮させながら、会の進行を熱心に見守る妖精のような愛らしさを残す小式部に、中納言定頼が思わず言葉をかけた。

「丹後国の母上からお便りはありますか。日ごろから歌のご指導を受けていたとか。今回もお教えいただいたのでしょうね」

冗談半分とはいえ、衆人環視の中での聞き捨てならぬこの言葉に、小式部はいたたまれない心境であったが、じっと我慢した。

やがて歌合せが終了し、定頼が何食わぬ顔で小式部の部屋の前を通りかかった。その時、御簾を上げ身を乗り出して定頼の直衣の袖をつかんだ小式部は、

「しばしお待ちを」と言うや、

大江山いくのの道の遠ければ
まだふみもみずあまのはしだて

と詠んだのである。

つまり、大江山や生野や天橋立のある丹後国ははるかに遠くて、まだ見たこともなければ、母上からの文も届いておりませぬ。どうして助力を頼むことができましょうか、というのだ。

こうもみごとな和歌を即興で詠まれては、さすがの定頼も返歌が思い浮かばない。小式部に袖をつかまれ睨まれているので焦るばかりの定頼は、とうとう袖を振り切り、その場を逃げだしてしまった。

しかもこの噂はたちまち宮中にひろがって、小式部の歌人としての評判もあがった。

この歌はのちに百人一首に選ばれ、文学史上に小式部の名を留めることになるのだ。とすれば、冗談まじりにからかった定頼こそ、小式部の名声を高めた最大の功労者といえるかもしれない。

寛弘八年（一〇一一）、中宮彰子は一条天皇の一子を無事出産して、名は敦成親王と命名された。道長が土御門の自邸で保昌と式部に言った言葉は実現したのだ。

宮中では産養とか対面の儀などが盛大に行われ、天皇と道長とは赤子を代わる代わる抱いた。藤原一門や家司たちの位も上がった。

名目上、道長とその長男・頼道の家司である保昌もその恩恵に預った一人で、従四位に叙せられた。

だが、道長の本当に望むところは、この孫の敦成親王が一日も早く天皇の座に座ること以外にないのだ。一条天皇には実子敦康親王がおられ、皇太子の春宮居貞親王には皇妃娍子との間に敦明親王も生まれていた。道長は居貞親王を次期天皇に推戴することを条件に、次女の妍

子を親王の女御として嫁がせたのである。

さらに一条天皇が病気になると、居貞親王を三条天皇として即位させ、皇太子には孫の敦成親王を擁立したのだ。

今や三条天皇をめぐって皇后娍子と中宮妍子を対立させるという道長独特の図式を現出させたのである。

しかし、最も哀れを留めたのは天皇ご自身であった。もともと病弱な上に眼病を患われると、当然のように道長から譲位をせまられた。天皇は今更のように帥宮亡き後、自身がいかに孤立無援の立場に追いやられ、道長の意のままに繰られていたかを思い知らされるのであった。

ある冬の夜、三条天皇は見えなくなってしまった目で満月を仰がれると、

心にもあらで憂き世を永らへば
恋しかるべき夜半の月かな

と嘆息された。

長和五年（一〇一六）正月、三条天皇は道長の巨大な圧力に屈して退かれ、敦成親王が即位して後一条天皇となられた。当然、三条帝の皇后娍子も退位して皇子敦明親王が皇太子の後釜に据えられはしたが、母子ともにこの扱いにいたたまれず、皇太子の地位もなげだしてしまわれた。

翌年、彰子が生んだ御子を敦良親王と名付けて皇太子とした道長は、九歳の天皇と零歳の皇太子である孫を両手に抱いたのである。その上、長女彰子が太后太后、次女妍子が皇太后、三女の威子を九歳の天皇の中宮にしたのだ。また、息子たちに対しても摂政を長男頼道に譲り、三男教通を内大臣とした。さしもの道長ももうこれ以上望むべきことは何もなかった。

自らは正一位太政大臣の位を頂いたが、翌日にはさっさと返上して、もっぱら信仰の道へ隠退してしまった。空前絶後の権勢の鬼にしては、余りの引き際の見事さに、世人は形容し難い人間像を目の当たりにして驚嘆した。

道長未だ五十歳の時のことである。

十三、小式部の死

まだ本堂からは微かな読経がつづいている。

広い境内を夏風が静かに流れ、その風に乗って経典を誦する声が伝わる。式部は寺の本堂に通じる苔むした石段を一つ一つ踏みしめるように登る。その緑色の苔はすべての物音を吸い取っているように思える。

本堂を抜けた墓地の片隅に小さな墓石がひっそりと立っている。傍らに彼岸花が咲き薄が揺れる。手にした花を供え柄杓で水を注ぐ。暑い日差しに熱した墓石は、吸い込むように水を含むがすぐに乾いて、手向けたばかりの草花にかかった水滴が透明な玉を結んで光る。

揺らいで昇る線香の煙を目で追いながら、式部の脳裏には忘れ得ぬ情景が浮かぶのだ。

小式部が教通の子を身ごもったと知ったとき、これでやっと道長が約束したとおり、内大臣藤原教通の正室に迎えられるものと、式部は安堵の胸を撫で下ろした。しかし、教通は彼を取り巻く多くの女御の間を泳ぐように渡り歩き、小式部を倦み、顧みなくなっていった。そして、挙句の果に、さる高貴名門の姫を正室に迎えてしまったのである。

そのあまりの仕打ちに小式部は教通の子を出家させた。

それから、頭中将藤原公成の慰めを得て、再び正室の座を夢みた小式部は公成の子を身ごもった。だが、産後の患いから三十歳を一期に、儚く侘しかった生涯を閉じてしまったのである。

娘を見送った式部は四十九歳になっていた。

…あの時、小式部の容態は宮中の者にすら秘められた。高熱にうなされる小さな唇は微かに母・式部の名を呼んでいたが、後宮の奥の間に隠蔽されたままであった。保昌の新任地大和から駆けつけた式部だったが、どのような理由からか小式部に逢うことさえ叶わなかったのだ。

女人に対して放埒な振舞いの多い教通に醒めた小式部が、大和国で式部と共に暮らしたいと切々と訴えてきた手紙から、その気持は痛いほどわかっていた。だが、保昌と藤原家の手前、それは叶わぬことという式部からの返事に、小式部は自分の運命を黙々と甘受したようであった。

その時はすでに上東門院の法号を冠せられていた彰子から、小式部が常に持っていた手箱が届けられたのは、死の翌日の夕刻のことであった……

と式部は記憶をたどりながら、墓石の前で、小式部の形見となった小さな鈴を懐から取り出して打った。消え入るような鈴の音の響きは、過ぎた日の余韻を伝えるかのようである。

恋ひわぶと聞きにだに聞け鐘の音に
うち忘らるる時の間ぞなき

式部はふと空を見上げる。

親子だろうか、二羽の雀が戯れるように高く低く飛びかっている。その楽しそうな鳴き声を聞くと、得体のしれない寂寥感が胸の底から湧いてきて、式部は思わず肩を落して慟哭した。

小式部の死の衝撃から十年の歳月が流れたというのに、悲哀は際限なく式部を泣かせるのだ。

その時、背後に人の気配を感じてそっと振り返りながら式部が立ち上がると、薄墨色の衣をまとった一人の僧侶が立っていた。髭剃りあとの青い口元に微かな笑みを

浮かべているが、暗い相貌が印象的である。
「式部さまご記憶でしょうか。この私めを……」
眩しいものを見るように式部をみて、僧侶が言葉した。
だが、一向に憶い出せないような式部の様子を察すると、
「下毛野美可母の山の小楢のす、ま麗し児ろは誰が笥か持たむ……」
と和歌を口ずさんだ。
式部はわが耳を疑ったが、ある定まった印象がしだいに形作られてきた。
「ああ、あの少女だった時の……」
「おわかりでしょうか」
僧はこみあげてくる懐かしさを隠そうともせず、喜びの表情を浮かべた。
「おお、まこと、あの時の少年が……お懐かしゅうございます。それにしても、そのお姿と、あの閙市の龍丸どのの面影とは、あまりにかけ離れておいでで」
そう言って式部は思わず袖を口に当てて含み笑いをもらした。
そのあどけない仕草から、僧は昔と変わらない悪戯っぽい式部の面影を汲み取っていた。
僧は〝行懐〟といい、何年か前、比叡山を下り、さる寺院から、この天台宗寺院の住職になったことなどを簡単に式部に話した。
それから行懐は本堂に連なる客間に式部を案内した。
庭に面して開け放っている戸板の向こうの庭石と樹木の辺りに、二、三羽の黒い蝶が戯れているのが見える。濃い緑がむせ返るようだ。
「ほんとうに静かなお寺ですこと。娘の小式部もよい処に眠ることができて……」
庭を見たままの式部が、流れてきた涼風に目を細めて言った。行懐はその横顔から視線を外さない。深い愁いを含んだ式部の姿には、出家した者さえ惹きつけずにはおかない、何かがある。
「式部さまがここえ参られることは存じておりました。お話のできる機会がきつと来ると」
「お待ちになっていたとおっしゃいますのか……」
「そうでございます。お逢いして、どうしてもお話がしたくて」
「どのようなことでございますか」
「私めの……」
そのとき、小坊主がお茶を持って現れた。話の出鼻を挫かれた行懐はそれっきり沈黙した。だが、行懐はむしろ話をしないで済んだことに内心ほっとするものを感じていた。
式部もそのことにさしてこだわりも見せず、翌月の命日の墓参を約して寺を辞した。

十四、僧　行懐の告白

それから一ヶ月間、式部はさまざまな思いを逡巡した。
少女の頃、少年の行懐によって知った和歌の世界を、もし毒の花と呼ぶなら、その味わいは何と甘味なものであつたろう。そしてまた、和歌や日記文や物語への執着は、そのことが定められた運命のように、出発のときから一種の頽廃を帯び始めてもいたのだ。
それでも式部は長い間、確固として、成熟した見果てぬ夢を見続けていた。
だがその夢は、帥宮や小式部や道綱までを他の誰かに奪われはしまいかという、稚い嫉妬のようなものからきていたように思えるのだ。なぜ、自分の和歌があれほど〝嘆き〟の色調を帯びなければならなかったのか、今、やっとわかったような気がする。
宮廷内の親友であった赤染衛門が熱い恋で結ばれた夫・大江匡衡の死によって仏門に帰依し、かつて後宮の中を泳ぎ廻るように振舞っていた馬内侍すらも、彼女に引かれるように同じ仏の道に入ったことを伝え聞いた。
また、紫式部も清少納言も宮中を辞して、いずこともなく姿を消したという噂も耳にした。かつて後宮を錦絵のように彩ったそれら才女たちも、臨終の場所を求めてそれぞれの人生に散っていったのだ。
それは王朝の栄華を象徴する女人の群が、夕日に長い影を曳いて歩み行く姿を彷彿とさせる。
自分もまた……式部はそう思うと、ああ、あの寺院は何と静寂をきわめた安寧の場所だろう。一切の夢から解き放たれた今こそあのような処で、過ぎ去った人々への追善供養を日常とする余生を送りたい。
その思いは式部を強く揺り動かして、一刻も早く行懐に逢い、一切を告白して出家を願おうと決意するのだった。
夏も終ろうとする約束の日の夕刻、式部は再び寺を訪れた。
清掃された小式部の墓には花が供えられていた。
前回のように客間に通された式部は、行懐が何となく口ごもる気配を察すると、何気なさを装って言った。
「先日中断したお話を、お聞かせくださいまし」
「おお、それではぜひ、この私めの底知れぬ悔恨と、懺悔の告白を聞いてやってくだされ」
「それで、そのような出家のお姿になられたというような、お話でございますか」
「そのこともございます」
行懐の重い言葉の運びに式部は、せきこむように言う。
「それなら、私も女人として切実な悔恨がございます」
「ではぜひ、式部さまから先にお話くだされ」

式部はここ何日もかけて胸に繰り返した思いを語り始めた。

「ご覧の通り、近頃私にも白髪がめっきり増えました。何年か前、歌合に出かけようと鏡に向かい、顳顬にちらほらと白い髪をみつけましたよ。この時ほど女人の一生をしみじみと実感したことはございませんでした。それは死を迎える予感でさえありました。髪の色が変わってゆくことは、まるで純白の屍衣をまとうような感じさえいたします。若くして逝った小式部はこのような老残の恐ろしさを味わうことがなかっただけでも幸せといえるかもしれませんね。そういいながら私も五十歳半ば過ぎまで生きてきてしまいました」

何の飾り気もない式部の告白であったが、行懐は改めて式部の頭髪をみて、妖しい戦きを覚えた。少し栗毛色がかった髪に、流れる絹糸のようにまじる白髪は、むしろ浮き立つように艶めいてさえいる。

「行懐どのは悟りすまされたご僧侶の身……」

見据えるような式部の呼びかけに、行懐は柄にもなく戸惑い狼狽する視線を式部に向ける。

「それゆえ、この世の六道を巡る煩悩など、全く無縁でございましょうね」

「いいえ、私は未だ三惑未断の凡夫にございます。むしろ五濁熾烈な悪僧とお見定めくだされ……」

「そうであればなおのこと、修羅煩悩の私など、行懐どのにお縋りしたいような……」

行懐は返す言葉を見失っていた。

寺に似合わない少しきつめの香料の匂いが行懐の鼻先に漂い、式部の粘るような言葉が耳朶にまつわりつく。

日よけの簾が庭から反射する眩しい光を遮って、風にゆれる。

「丹後にくだって後の幾歳月が私の髪をすっかり白くしてしまったようです。仏道のことは皆目わかりませぬ。どうか悟りの道をお教えくださいませ」

「めっそうもない。教え諭すなど……そのように大それたことは……」

式部の執拗な願いに、行懐はふと、自分への揶揄なのではないかと感じ、話そうと用意していた言葉を全部飲み込んでしまった。

そして、もっと性急に、隠し持っていたことが不意に口をついて出た。

「ずっとお慕い申しておりました。願いが叶わずば、一生不犯な身であろうとして……」

「そのようなお姿になったとおっしゃいますのか?」

式部の意外に冷静な言葉に、行懐の心はいっそう大胆に傾いた。

それは何のこだわりもなく、ごく自然に行懐の心に吸い寄せられ、じっと見守るような情愛あふれる式部の眸を見たからである。

陽はいつしか影を落として、部屋に薄い闇が漂いはじめていた。

その時、遠くでごろごろと雷が鳴った。

やがて、一瞬、掻き曇った気配があたりに漂い、部屋がにわかに暗くなった。

行懐は立ち上がって蝋燭に明かりを灯した。

肌に滲む汗を拭いながら、

「すっかり長居をしてしまいました。一雨くる前触れでしょうか」

と言う式部の言葉に誘われたように、吹き込んだ強い隙間風に蝋燭の火がゆれた。と同時に、稲妻が光り、雷の音が近くなって、雨が激しさを増したようだ。

それは、瞬く間に、耳をつんざく雷鳴と篠つく雨に変わった。蝋燭の火が消えると、暗くなった部屋の様相が一変して、不気味ささえ漂い、式部は改めてここが寺の中の一室だったことに思い当たり、背筋が冷たくなった。

身を切り裂くような稲妻の閃光が走り、雷鳴が地を裂くように轟くと、式部は手で両耳をふさぎ、その場に蹲った。容赦ない自然の脅威の中で、行懐と式部はなす術もなく沈黙した。

ふたたび鋭い閃光が部屋を切った直後、寺の境内の大木に落雷でもしたような、最後の留めかと思えるほどの雷鳴が轟いた。

その瞬間、行懐が式部に駆け寄り、両腕に抱きしめた。

恐怖に震える式部の柔らかな感触は、一種の悪徳を匂わせて妖麗に息づき、息苦しいまでに行懐を煽動した。

式部は目を閉じたまま行懐に体をゆだねた。そして、声にならない声で、

「帥宮……」

と呟いた。不用意にも式部は常に心の内に在る男の名を呼んでしまったのだ。

一瞬、行懐の表情が歪み、静かに式部から体を離すと、無言で囲炉裏の傍により、そこにあった素焼きの徳利を手にして座りなおした。

式部は自分の洩らした声の意味の重大さに気づき、胸に羞恥以上の戦慄が走った。行懐の視野から身を隠したかったが、少し乱れた着付けを直しながら、黙って俯いた。

「今夜こそ私めの、いや、破戒の拙僧めの話を、とくとお聞きくだされ」

行懐はそう言うと、恭しく頭を垂れた。ただならぬ行懐の様子に、式部は心が騒いだが、

「承りましょう。どうぞお話ください。私も聞き届けていただきたいことがございます」

と、つとめて平静を装って応えた。

「昔、羅城門でお別れして以来、その面影が忘れられずに私は式部さまのお屋敷を訪ねたのでした。心を託した万葉の恋歌の何首かを持って……。

でも取り次いでもらえるどころか、にべもなく門前払いされた私は、身の賤しさを思い知りました。それから以後の私はひたすら出世を願い、奮発いたしました。それこそ死に物狂いで学問に精出して、一応〝従五位、大進〟の位にまで昇進したのでございます。しかし、結局はそこまででした。私のような身分の者にはそれ以上の出世など叶うはずもありません」

式部は思わぬ話の展開に言葉もなく、行懐の言うに任せた。

「そのような折、賀茂の祭りで式部さまと小式部さま、それに帥宮さまの御所車を拝見いたしました。私は夢でもみているような想いで、いつまでもその車について行きましたよ。

その時、混雑する人ごみの中で不意に私の肩を叩く者がございました。見れば藤原一門のさる高官でした。その者から世にも恐ろしい話を打ち明けられた私は、迷いに迷いました。しかし、出世のためにはそうするより致しかたなかったのです。

いや、今にして思えば、余りにも美しく晴れがましい式部さまに、炎のような嫉妬が煮え滾ったからかもしれませぬ」

行懐は大きく溜息をついた。しかし、話をやめようかという迷いもまったくないように先をつづけた。

「都大路に乳色の帳が立ち込めるある夜明けのことでございました。式部さまのおられる南院御殿の方向に強い風が吹いておりました。大蔵の建物に灯油をまく黒装束の男の合図で、震える私めの手で火を点じたのです。十月初めの頃のことでございました……」

話を聞いていた式部は思わず眉をきっとあげると、凍った双眸で行懐を見た。その時、部屋の中がぱぁっと明るくなった。

先刻より弱く稲妻が走り、遠のいた雷鳴がきこえるなか、一瞬、話の内容にひるむ気配の式部に向かい、行懐は、

「式部さま最後までお聞き下され……」

と憑かれたように喋りつづける。

「その後、数ヶ月を過ぎて、私は正四位少納言に任官いたしました。だが、大内裏放火犯という大罪の秘密を握られた私めは、藤原に繰られる存在の自分を知るばかりでございました。

〝われらとはもはや一蓮托生、もう一働きを買っていただきたい〟というさる高官の言葉に抗す術もなかったのでございますよ。まるで坂道を転げ落ちる石のように、一切の感情を捨て去り、私は神泉苑の宴席で平然と、しかも巧みに、帥宮さまの盃に毒を注いだのでございます。お許し下さいませ、式部さま」

行懐はすまなそうに、深々と頭を垂れた。そして、つづける。

「その後、私が道長公の御前に伺候すると、罪の意識に脅える私の心の中まで見すかすように傲然と言われたものです。

〝ご苦労であった。万事が終った。さらに格別の出世を考えぬわけではないが、いささかなりとも大それた秘密を持つ者ゆえ、いかに昇進いたそうとも心穏やかならぬものがあるであろう。されば出離の道をわきまえ、心静かに後生を願うことこそ人の道と申すものでござろう〟

その言葉にはたとえ刀は振るわなくとも拒む者は容赦しない、激しい気迫がこもっておりました」

式部は額に汗を滲ませ、小鼻を震わせ、拳を握りしめて、行懐のこの異常者じみた話を聞いていた。顔を伏せて、恐ろしい告白にじっと耐えるように。

「しかし、私はこの世の底の底では何が邪であり、どんな行いが正しいのか、今でも皆目わからないのでございます。叡山に登ってはみても仏典すら霞んで、己の業火にまみれながら、それでも修業に打ち込みましたよ。ただ、ひたすら無心でありたいために……。

ですが、経典を身口意の三業に心読すればするほど、わが身の無明を知るばかりでございました。無明とはいったい何なのでしょうか。正というも邪というもその判断はどこにあるのでしょうか。

道長公にしたところで権謀の限りを尽くして次々と相手を失脚に追いやり、天下の主君となったのです。しかし、一門の栄達こそ計ったものの、自らの冠位は惜し気もなく捨て去って、諸国受領の昇進さえ叶えてやっているのでございますよ。式部さま、邪が正を生み、正が邪を生むとはこのことを言うのではないでしょうか」

顔を上げて行懐を見る式部は何か言おうとしたが、わずかに口が動いただけで声にならない。行懐はもう少し聞いて欲しいというように両手で式部を制した。そしてつづける。

「五濁悪世の実相真如とは、まさしく無明そのものを言うのではないでしょうか……」

そう言う行懐の目は次第に無限の闇に吸い込まれてゆくようである。

「しかし、あのことだけは本当に悲しむべき出来事でございました。何の因果か小式部さまのお子が私めのいる兵部卿致平親王のお子、永円大僧都の坊に預けられたことでした。それは可愛らしい赤子でございましたよ。私は陰ながら「静円」と名付けられたそのお子が立派に育つお手伝いをすることが、式部さま母娘へのせめてもの罪の償いと思ったのでございます。

だが、数年を経ずして再び一子が送り届けられ、その数日後には小式部さまは儚くお亡くなりになってしまわれました。そのお子は「頼仁」と名付けられたのでございました。二人のお子が生れ落ちたその時から、両親のない孤児として出家の境涯を与えられるというのも常軌

を逸しておりますが、小式部さまも陥穽に落ち、無き者にされたのだと直感したのでございます。

こうして私めはこの世の地獄をわが身に受けつつ、それを見ながら今日まで生き永らえてまいりましたよ。それもひとえに、いつの日か式部さまにお逢いできることだけを念じていたのでございます。お墓に朝夕の回向を行っているかぎり必ず式部さまにお逢いできる、そのことを知ってこの寺院への転院を願い出たのでした」

そこまで話した行懐の頬は削げ、濃い眉の下の落ち窪んだ眸が異様な光を帯びている。

「式部さま、一緒に飲んで下さらぬか……」

行懐はいつの間にか用意していた、生温かくなった徳利から酒を茶碗に注いで、式部に差し出した。

そして、自らも乾ききった唇を潤すように喉を鳴らして飲むと、口からぼれた酒が胡座をかいて露になった毛脛を濡らした。

式部は呆然とその場に蹲って、かけがえのない帥宮を殺された想いは永久に忘れないと、怨念のこもった眸で、痛飲する行懐を凝視していた。

だが、あろうことか、式部は行懐が目の前に差し出した茶碗を手にすると、貪るように一気に飲み干したのである。

その時、行懐はなぜか無言で前屈みになった。

そして、しばらくして沈黙を破った式部の唇から洩れたのは、

「く、くるしい」という苦悶の呻きであった。

結燈台が音を立てて倒れかかり、式部の影が揺れる。

「式部さま、もうすぐその五体に安らぎが、訪れましょう……」

揺れる炎の向うから行懐が苦悶の表情で呟く。

「これは、な、何のことでございますか」

頭の中から胸の奥まで、焼けつくような滾りに身を沈めた式部が微かに問いかける。

「この世は煉獄、絶え間ない呵責が身を責めるばかりの……」

「私は、ああ、く、苦しい……」

式部は息も絶え絶えに胸をかきむしる。

「式部さまが最も恐れる、し、白髪……式部さまの老残は見るに忍びない……。美しいままの五体に毒盃を注いで、式部さまはもう私めだけのもの……」

渾身の力をふりしぼってそれだけ言うと、行懐は息絶えた。

式部は感覚の失せてゆく躯で几帳にとりすがって立ち上がると、よろよろと戸板に突き当たってそのまま庭に転げ落ちた。そして、小降りになった雨の中、泥の地表を懸命に這うのであった。あたかも小式部の墓前にもう一度詣でようとするかのようにー。

都市銀行『爆発物処理班』（六）

宅見勝弘

本作品は、作者の体験に基づいていますが、登場する人物・企業等についてはフィクションです。

【前号までのあらすじ】東西銀行に勤める武神優一に、暴力団組長の射殺事件の一ヶ月後に脅迫電話が架かってきた。半年後に、射殺事件との関係を疑っていたトーキョーファイナンスの社長が死亡した。その一ヶ月後に二百億円もの詐欺事件に巻き込まれたとの連絡があった。

十二、仕手株

「仕手株は危険だぞ。素人が手を出せば、絶対に火傷をするからな。深追いすると、身の破滅だぞ」

金城は優一に向かって強い口調で警告した。

一九九八年四月十一日夜、トーキョーファイナンスから二百億円もの詐欺事件の話を聞いた週の土曜日である。

「別に株を買うつもりは無いよ。新川建設に興味があって、証券マンの君に聞いてみただけだよ」

二百億円もの詐欺事件で、新川建設の株が使われていた。そのことを悟られないように、優一が質問したところだった。

金城の激しい反応に、むしろ優一の方が驚いた。

「それより『してかぶ』って、どういう意味なんだ」

優一は、金城の言葉の意味も分からず、聞き返した。

「銀行員のくせに仕手株も知らないのか。少しレクチャーしてやろう」

金城は、少し相手を馬鹿にするような言い方をする癖があった。

△

その夜、優一は早稲田大学法学部の民法ゼミで一緒だった金城と二人で高田馬場の居酒屋で飲んでいた。二人とも独身で東京都内に住んでいたので、卒業後も誘い合って飲みに行く関係であった。

「俺達のゼミ生は全員が金融機関に就職したな」
金城は当時を懐かしむように話した。
「平成二年はバブル期の採用だったからな」
「司法試験合格と大学院進学の一名を除けば、銀行に入ったのが四名、証券会社に就職したのが四名で、製造業には一人も行かなかったな」
「法学部だけでなく、理工学部の学生の多くも、体育会の連中の多くも金融機関に就職したよ」
「証券に行った四人の中で、俺以外は皆辞めてしまったけどな」
「銀行に就職した鈴木も三月で退職して、未だ銀行にいるのは二人だけだよ」
「俺も辞めたいよ」
金城は証券会社に就職して以来、「辞めたい」が口癖であった。
「実は、僕も銀行から別の業界に転職しようか、真剣に悩んでいるよ」
「辞めろ。辞めろ。それが正解だよ」
金城は自分のことは棚に上げて、囃し立てた。
「正直なところ、今から五、六年後に自分が未だ銀行員をしていることは想像できないよ」
優一も金城に合わせて本音を言った。
(そんな先まで、自分の銀行が現在の状態で続いているとも思えないからな)
声には出さずに優一は心の中で付け加えた。
「うちはトップが山三証券からパラシュートで降りてくるから、俺達みたいなプロパー社員は、士気が挙がんないよ」
金城は、東京都内のみで営業している中堅証券である中海証券の企画部に勤めていた。
「山三証券から内定を貰っていたのに、自分で辞退したじゃないか」
四大証券の一社である山三証券に内定を貰いながら、金城はそれを断り、中海証券に入社したのであった。
「鶏口となるも牛後となること無かれ、と思って、中海証券を選んだけれども、失敗だったかな」
いつも金城の仕事の愚痴を優一が聞いていることが多かった。
「フルコミッション（完全歩合制）で別の証券会社に転職しようかな」
「君が頭の良いのは認めるけど、相手を馬鹿にするような話し方をしているから、営業で実績を挙げるのは無理だろうな」
金城が愚痴を言って、優一が諫めるのが、いつもの展開であった。
漸く金城の愚痴が終わったところで、優一が気になっていた新川建設の株価について切り出した。
「ところで、東証一部上場の建設会社なんだけど、新川建設の株価は何か特別な動きが有るか」
優一は新川建設の株価について何気なく聞いたつもりだったが、金城が答えたのが「仕手株は危険だぞ…」という激しい口調での回答であった。

▽

「そもそも仕手というのは、能や狂言の主役の意味だ。ワキが脇役でシテが主役だ」
金城の話は回りくどくて閉口することが多かった。株式の知識に乏しい優一は我慢して聞くことにした。
「投機的な短期売買で利益を稼ごうとする投資家や投資家集団のことを『仕手筋』と呼ぶ。仕手筋は特定の銘柄に集中的に資金を投下することによって、意図的に相場を操作するようなことを行うのさ。
シテが能面の隠れて姿を見せないように、仕手筋も普通は姿を表さない」
「『仕手株』というのは、仕株価操縦の対象になるような銘柄のことを指すのだな」
優一は、金城の話が脱線しないように言った。
「一般的には、過小資本、万年赤字で、市場に流通している株数が少ない銘柄が狙われる。その方が株価操縦しやすいからな。しかし、資本が大きくて市場に多く流通していても、仕手株にされる場合があるよ。
仕手筋が売り方と買い方に別れて、激しい攻防戦を繰り広げる場合があるが、この戦いを『仕手戦』と呼ぶ」
「仕手株で有名な銘柄は、どこなんだ」
「昔だと、一九七〇年代になるが、政治家の河本敏夫がオーナーの三光汽船だな」
「そんな昔の話でなく、最近の仕手株を教えてくれよ」
「歴史に残るのは是川金蔵の墨田金属鉱山だな。他に思いつくままに上げてみると、日本石油・日本レース・名糖産業・不二家・タクマ・コニカ・豊田自動織機・日本フェルト・本州製紙・福助・日本カーボン・不動建設・蛇の目…」
「そんな有名な企業が仕手株にされたことがあるのか。株の話で無く、本業の方で知っている銘柄ばかりだな」
「最近で有名なのは、九六年の兼松日産農林・九七年の石川製作所だ」
「先程の話だと流通していない銘柄の方が株価操縦しやすいと言っていたが、矛盾するじゃないか」
「流通している銘柄ならチョウチンがつく」
「チョウチンって何だ」
「蝋燭で灯りをつける提灯のことだが、仕手筋が買い上げてる銘柄を追随して買うことだ。闇の中にいる仕手筋を追いかけるのを提灯に喩えたものだ。実際にはチョウチンは一般個人投資家だよ」
「株価操縦で刑事事件に発展したのもあったな」
「国産航測の株価操縦だな。ヒカリ産業の大谷博光が仕手戦を演じていた。結局、大谷氏は株価操縦で逮捕され

た。国産航測事件に関しては、稲町行俊環境庁長官も所得税法違反で逮捕されたよ」

優一は、武神組長が射殺された翌々日にトーキョーファイナンスの本社を山名係長と一緒に見に行った時のことを思い出した。

山名係長が森田弁護士がトーキョーファイナンスの監査役の他に、誰の顧問弁護士をしていたか、質問していた時のことだった（注　まんじ八五号五七頁）。

山名係長に質問されて、森田監査役はヒカリ産業の大谷浩光の顧問弁護士をしている、と優一は答えたのだった。

「日米貿易問題にまで発展した仕手株も有ったのじゃないか」

「八九年の大糸製作所だ。トヨタ自動車系列の自動車部品メーカーだ。大糸の株式がアメリカのピケンズに買い占められた」

「たしか、アメリカ公正取引委員会で、日本の自動車産業における『ケイレツ』問題まで発展したから、覚えているよ」

「仕手株については、銀行だって他人事じゃないよ。大糸製作所の仕手戦は、一井信託銀行が関係している」

「先程のヒカリ産業が起した仕手戦に関しては、不正融資仲介事件で墨田銀行青葉台支店長山上安夫が逮捕されたな。この事件で墨田銀行のドン磯野会長が辞任に追い込まれた」

銀行が関与した事件なので、優一も憶えていた。

「他にも藤井観光の仕手戦には一和銀行が関与している」

「代表的な仕手株というと、国産航測・藤井観光ということか」

「いや、俺の個人的な見解だが、最大の仕手株となったのは、一九八九年の東都電鉄株だろうな」

東都電鉄は地下鉄に相互乗入れしており、優一は地下鉄での通勤時に乗る東都電鉄の車両を思い浮かべた。

「素人考えだが、電鉄株なんて大型株だから、値動きが小さいだろうし、株価操縦しようにも、随分と大変じゃないか」

「証券マンの俺から見ても、かなり強引だと思うよ。ところで、瀬川徹という人物を知っているか」

「新聞記事で見た記憶が有るが」

「広域暴力団岩田組の組長だ。お前に似た名前の武神優組長と並んで、二大経済ヤクザと言われている」

優一は、また武神組長射殺事件のことを思い出した。

「東都電鉄の仕手戦に暴力団が絡んでいるのか」

「業界最大手の村野証券が、全国の店舗で東都電鉄株を大量推奨販売で一般の個人客に大量に買わせた。四大証券というが、実態は村野証券が突出しているから、ガリバー証券村野にしてみれば、株価のつり上げなんて容易なものさ。村野だけでなく、四大証券の興日証券も一緒になって、大量推奨販売をしていたのさ。村野証券と興日証券は関連のノンバンクで瀬川に融資までしている。

たしか、一九〇〇円位だった東都電鉄の株価が、三四〇〇円位まで上昇した筈だ。実際に岩田組長は売却しなかったが、もし売却していれば、三百億円もの利益を得たと言われている。

結局、村野証券の田房社長も興日証券の崎山社長も、この暴力団取引と株価操縦で辞任した」

「大証券会社が暴力団のために一般国民を巻き込んで、仕手戦を演じていたわけか」

下らないブラックジョークを聞いている気がして、優一は酒が不味く感じた。

「もっとも東都電鉄が仕手株というくらいなら、NTT株も仕手株と言ってもいいな。大蔵省が仕手筋なのだからな」

最後に、金城が吐き捨てるように呟いた。

その日は、そのまま別れて、一ヶ月後の土曜日に同じ店で合う約束をした。その一ヶ月の間に金城が新川建設の株で『鉄砲』事件に巻き込まれるのであった。

十三、『鉄砲』（株の売り逃げ詐欺）

「『鉄砲』にやられたよ」

日の周りに深い隈を作って金城が現れた。金城が病気か怪我でもしているのでないか、と優一は思った。前回から一ヶ月後の五月九日土曜日の夜であった。

「新川建設の鉄砲だよ」

新川建設の株価が、一ヶ月の間に最高値二五七〇円に急騰したと思うと、一気に最安値六一五円まで一九九五円も値を下げていた。

仕手株にしても異常な動きなので、優一は金城と会う時に、尋ねようと思っていた。

「シマ（兜町＝証券業界の意味）では『鉄砲が撃たれると、多数の死人が出る』と言われているんだ」

金城が何を言っているのか、優一は全く分からなかった。

「ちょっと待ってくれ。先ず、鉄砲ってどういう意味なのか説明してくれよ」

「鉄砲とは株式詐欺の一つだよ。株の売り逃げとでもいうのが妥当かな」

「何で詐欺が鉄砲になるんだよ」

「シマ（証券業界）では、株のことを玉と書いて玉（ぎょく）と言うのだが、株の玉を鉄砲の弾と掛け合わせて、行って戻ってこない株のことを言うんだよ」

ますます何を言っているのか、優一は分からなくなった。

「具体的に説明してくれよ」

「詐欺の手口としては、架空の買い注文を証券会社に出して、売り注文を他の証券会社に出す。そうして、高値で売買を成立させる。売った株の代金だけ手に入れて、買った株の代金を支払わない。証券取引法一五七条で禁止されている犯罪行為だ」

「架空の買い注文と言っても、事前に金を用意してなければ買えないだろ」

「株式代金の決済は四営業日（休日を除いた日数）後だ。本来は購入代金を確保してから、証券会社は買い注文を出すのだが、現実には守られていない」

「買い注文の代金を払わないというのなら、証券事故として意外と多そうだが、あまり事件として聞かないな」

「証券会社は身内の恥だから、公表しないからな。曖昧な形で揉み消されていたんだ。しかし、公になった事件もあるさ」

「そう言えば、千代田証券の事件で記憶があるよ」

「九一年に東証二部機械メーカーのタカキタ株を巡る取引での鉄砲事件が千代田証券の内部告発で明らかになった」

「その前にも砂糖のメーカーで事件があった気がするが」

「最初の鉄砲の摘発は、八八年に起きた、東証一部上場の台糖の鉄砲事件だ」

「銀行株は無かったかな」

「俺達が入社した九〇年だって、鹿児島銀行や肥後銀行の株で鉄砲が撃たれた、と聞いている」

「しばらくは事件の報道は聞かなかったが、最近また発生したな」

「そうだな。いすず系列の自動車部品会社のＴＤＦと、非鉄金属の東洋金属で、鉄砲事件が在った」

ＴＤＦは東京証券取引所二部上場で、東洋金属は大阪証券取引所二部上場である。

「それで、新川建設の鉄砲にやられたというのは、どういうことなんだ」

優一は、金城が体験した鉄砲事件の話の先を促した。

（一三章『鉄砲』は次号に続く）



黒船（七）

太田和貞

黒船見物

代官所は九月廿七日と十月九日付で、下之割の村々に明俵を合計二四九〇〇俵を供出させていた。

十月廿九日には、さらに八三〇俵の納入を命じた。

前回の「高百石ニ付き、およそ百俵」の割り当てが、「高百石ニ付き、およそ五拾俵」とやや緩和された。さらに集積場所も高輪の如来寺から隅田川の新大橋の下中州と下之割の村々にとって運搬しやすい場所に変更されていた。

しかし、稲作をしていない農家にとって、明俵の供出は一大事だった。

前回までは親戚などに頼み込んで、明俵の材料の稲藁を分けて貰ってはきたが、三回目となると、いささか頼みづらかった。

興之宮村には、「実とらず」といって、稲の実が生熟する前に刈り取って、乾燥させメ飾りをつくることを生業とする農家や草花を栽培して、江戸の町に売りにいく農家が多かった。

その年の天候に左右され、さらに過酷な年貢の取り立てに苦労するよりはと始めた農間稼ぎだった。

現在の江戸川区にメ飾りづくりを生業とする農家やホウズキ、アサガオなどの花卉栽培農家が多いのは、この

ためであった。

三回目の明俵の供出を名主から言い渡されたとき、これらの農家は明俵の材料の稲藁の確保に困った。

ある者は歳末のメ飾りと交換に、稲藁を貰い受け、何度も頭を下げねばならなかった。

ある者は、「草花を届けるから」と言ったそばから、「おらの庭に花はなんぼでも咲いている」と嫌味を言われたりした。

御台場御普請は、黒船による人心の動揺を抑えるのには力があったが、江戸近郊の農家にはいろいろの負担を背負わせる結果となった。

農家に三度も明俵の供出を強いたことは、御台場御普請が難工事だったことを物語っている。

六月三日に黒船が来航したとき、病床にあった徳川将軍家斉は、日本列島が黒船の恐怖に震えたことも、その黒船が六月十二日に退帆したことも知ることなく、七月二十二日に死去した。

通常ならば、禁止される鳴物や普請のうち、「海岸御警衛筋の儀ニ付き、差急候普請」は停止されずに、工事は続行された。

やがて年が明けて、嘉永七年正月二日に代官所より大漁舟、手操舟、押送舟などの舟数の調査が命じられた。

江戸川から遠く離れている興之宮村では、伝馬造茶舟一艘が報告された。

また、正月十二日には、非常の際の御賦飯焚出し用の白米の貯穀が命じられ、必要に応じて提供することが求められた。

翌十三日には臨時人足の用意とその差配のために、触次役が代官所の下役として奉仕すべきことが命じられた。

非常の際の焚出しについての触書を読んで、興之宮村触次役の三郎右衛門は思わず溜息をついた。

これまで対岸の火を見ていた黒船が、いつの間にか戦いという恐怖に変っていた。

池田播磨守様から御台場御普請のお許しがあれば、あの品川沖の御台場築造に汗を流し、御国のために働いているという充実感に満たされていたはずだった。それが、池田播磨守様のお許しが出ないばっかりに、触書の文言に一喜一憂する自分が情けなかった。

(いまごろ、正木勝之進様は、なにをなさっているのであろうか、…。それとも正月休みで郷里に帰られたのであろうか、…)

海風の中で、人足どもを叱咤激励している正木勝之進様の濁声が耳に響いてくるようだった。

「あれも黒鍬組、これも黒鍬組」

と子供がおもちゃを自慢するかのように、三郎右衛門に自慢した正木勝之進様の飾らない人柄が懐かしかった。

(小正月までは、飾っておこう)

床の間に飾られている池田播磨守様から拝領したお羽

織を眺めながら三郎右衛門は、そう思った。

(生涯一人扶持をいただいた仁吉のときには、このお羽織はずいぶんと役に立ったが、御台場御普請を願い出たときには、役に立たなかった)

仇吉に、「お羽織の旦那」と呼ばれたことを思い出して、(仇吉の顔を見たら、こんなくさくさした気持ちも、いっぺんに吹き飛んでしまうだろう)と思った。

三郎右衛門は手を叩いて、おつねを呼んだ。

「触次役の会合があるのをすっかり忘れていました。わしはこれから出掛けますからあとを頼みますよ」

「いってらっしゃいまし。なんのご相談を…」

「なんの相談だって、きまっているじゃないか、黒船が来たときの備えについて話し合いをするんですよ」

おつねに、そう乱暴な言葉を吐いた三郎右衛門であったが、その口調には、どことなく、うきうきした明るさがあった。

嘉永七年正月十四日、七隻からなるペリー艦隊が再び江戸湾に姿を現した。

最新の蒸気軍艦ポーハタン号を旗艦とし、サスケハナ、ミシシッピの蒸気軍艦、それも四隻の帆走軍艦を加えた大陣容であった。

ペリー艦隊は浦賀沖を越えて、江戸湾内に侵入して小柴村沖に投錨した。

翌十五日に三郎右衛門たちの触次役は馬喰町の御用屋敷に呼び集められた。

関東取締出役筆頭の中山誠一郎様の訓示を聞いていて、「おや」と三郎右衛門は思った。

「黒船が江戸湾に侵入した際には、これまで早半鐘を打って知らせるようにしていたが、火事との区別がつき兼ねるので、今後は早盤木を打たせることにする。出火の際には、従来通り半鐘を用いる」

仇吉に会うために、何気なく使った口実が中山誠一郎様の口から達せられて、三郎右衛門は空恐ろしくなった。

さらに、長脇差を帯びた無宿無頼の徒が村に立廻った際には、「切り殺しても差し支えない」と強い口調に変わっていた。

これまでは、「召し捕り、その場に留め置くように」とのお触れであったが、「切り殺しても差し支えない」と文言が変わった。

「謂れなき他出は無用!」

中山誠一郎様は一段と声を張り上げた。

「農民の他出については、名主どもはことごとく承知しておるであろうな」

背の低い中山誠一郎様は爪立ちして、触次役たちを睨め回した。

「不逞の輩、黒船見物に蝟集していると聞く。誠に奇っ怪千万、この非常時にふさわしからざる所業と存ずる。自今以後、黒船見物は厳禁とする」

中山誠一郎様は口早にそう言い切って、胸を張った。
触次役たちは平伏して、しばらく頭を上げなかった。
それは、中山誠一郎様の怒りがおさまるのを待っているかのようでもあった。
平伏しながら、三郎右衛門は弥平次のことが気になっていた。
三日前から、弥平次は行き方知れずになっていた。
弥平次は放浪癖を持っていた。昨年の春も、村からいなくなった。ひと月ほどして、ヒョッコリと帰ってきた。
「浅草寺の境内で、乞食をやっていたんだ。元手いらずで、しかも銭が稼げるなんて、こんなうまい商売はないと、まえまえからやってみたかったんだ」
弥平次は誰彼なしに吹聴して回った。
「しかし、よう。乞食は三日やったら止められないと言うけど、そりゃあ世の中が景気のいい時の話だ。今のように、不景気じゃ、御本尊の観音様を拝んで善根を積もうと思った信心も、おれら乞食を見た途端に財布の紐をギュッとしめちゃうんだ」
相手が、「ほおう」という顔をしようものなら弥平次はさらに言葉を続けた。
「乞食も場所、と言っても貰いのいいところと貰いの悪いところがあるんだ」
弥平次は、ここで言葉を切って相手の顔を見た。
(わかるか、…。わかんねえだろうな)
弥平次は、そんな顔をして見せた。
「観音様を拝んで、本堂からおりてくる階段の根元が最上のショバなんだ。ところが、おめえ、この場所はショバ代が高い、それを聞いておれは驚いたぜ」
弥平次は、あきれたという顔を見せた。
「やくざじゃあるめえしとおれは本当にそう思ったよ。しかし、乞食もショバを仕切る奴がいて、そこはあがりの半分を持っていかれるんだ。それでも、そのショバは貰いがいいので、みんなが殺到するんだ。そのときは、くじを引くんだ。おれは一度だけ、くじを引き当てて、そこのショバにすわったことがある。その日の貰いが、おめえ、五〇〇文だぜ。二五〇文はショバ代に持っていかれるけど、黙って座っていて、一日に五〇〇文になるんだぜ。乞食ほどいい商売はないとおれは思ったぜ」
こんな風におだをあげていた弥平次が、ふっと姿を消した。
「また、浅草で乞食をしているんだべ」
と誰もがそう思った。
江戸川にもやっていた伝馬舟が無くなっていたことに誰も気付かなかった。
三郎右衛門が中山誠一郎様の訓示から弥平次のことを思い出したとき、弥平次は小柴村の浜で黒船見物の客の呼び込みをしていた。
「さあ、さあ。あと三人だよ。せっかくここまできたのに、黒船にさわっていかんのか。それじゃ、みやげ話もできやあしねえ。おれの舟に乗って黒船を見上げてみねえ。そりゃあ、大きいぞ。さわって、見上げて、おったまげて、たったの一〇〇文よ!」
弥平次の呼び声につられて、二、三人の見物客が舟に乗り込んだ。
「お客さん、それじゃ出掛けますが、十人のお客じゃ、わしひとりの力じゃ舟は出せねえ。お客さん、すまんがのう、二、三人降りて舟を押してくださらんかのう、…。」
「客のわしらに舟を押せって、いうのか、…」
「すまんことです。でも、黒船が浮んでいる海の波に着物の裾を濡らしたことは、いい思い出になりますよ」
「いい思い出で逃げられちゃ、かなわないな」
「いや、いや。悪いと思ってますよ。お客さんに舟を出して貰うなんて、わしはなんて運がいいんだろうと感謝しています」
弥平次は客の優越感を巧みについて、笑いを誘った。
舟が波に乗った。舟を押していた客がすばやく舟に飛び乗った。
舟が黒船に近付くにつれて、乗客たちは緊張で押し黙ってしまった。
「お客さんよう。そんなに、ガチン、ガチンにならんでくだっせい。わしはこれでもメリケン語が話せるだ。それで黒船の人たちは、わしのことをヤヘージ、ヤヘージと呼んでくれる。きのうは莨を一箱、黒船から放り投げてくれた。きょうは何をくれるか、楽しみだ」
弥平次の言葉に乗客の緊張もほどけて、
「むこうの人と話ができるのか」
と弥平次を見る目が違ってきた。
「ほれ、黒船が近付いてきた。わしが声を掛けるから聞きのがさんようにな」
弥平次の言葉に乗客は、みなうなづいた。
立って櫓を漕いでいる弥平次にも、黒船が近付くにつれて、黒い船体がせりあがってきて、その巨大さに圧倒されたので、舟に座わっている乗客には弥平次より何倍もの恐怖感をつのらせた。
「わーッ。大きいのう。大島が動いたようだという噂を聞いたことがあるが、わしは納得した。それに黒船となぜ呼ばれているのか、その理由も分かった」
乗客は互いに、そんなことを言い合っていた。
「お客さんよう。わしがこれからアメリカ人に話し掛けるから、聞き逃がさねえようにしてくだっせい。わしのことをヤヘージと呼ぶから、これもしっかり聞いて貰いてえ。ヤヘージとわしを呼ぶ声を聞いただけで、きょうの舟賃の一〇〇文は安いもんさ」
黒船がいよいよ大きく迫ってきた。
「ヘーイ、ジョージ!」
櫓を漕ぎながら弥平次は何度も黒船に向かって叫んだ。

「ヘーイ、ヤヘージ！」
黒船の舷側からひょっこり姿を現わした水兵が、弥平次に盛んに手を振った。
「ヘーイ、ジョージ！」
弥平次は櫓から両手を離して、手を振った。
伝馬舟が波を受けて、グラッと揺れた。
「ウォーッ」と乗客が声を出した。
「お客さん、ご免よ。ジョージに会えて嬉しくなって手を離してしまった。これからは、しっかり櫓を握りしめているから勘弁してくんねえ。お客さん、今のジョージの声を聞いたろ？。おれのことをヤヘージと呼んだ。驚の初音じゃないが、ひと声、千両というところだ」
弥平次は、そう話しながら櫓を漕いで舟を黒船の真下に寄せた。
「ヤヘージ！」
ジョージは振っていた手を止めた。
その手に莨が握られていた。
「ヘーイ、ジョージ！」
弥平次がそう返事をした。
ジョージが力一杯に何かを投げおろした。
赤い物体が一直線に弥平次めがけて落ちてきた。
「ヒェーッ！」
乗客が一斉に、首をすくめた。
弥平次は右手で、その物体をつかんだ。
「ナイス、キャッチ！」
ジョージが両手を叩いた。
「ありがとうさんよ」
弥平次は櫓を巧みにあやつって、黒船から離れていった。
「カムバック、ツゥモロー！」
ジョージはいつもまでも手を振っていた。
小半刻ほど掛かって、黒船見物は終った。
小柴村の浜に帰ってきた乗客に、ジョージから貰った莨を渡して、その匂いをかがせた。
誰もがその匂いをかいで、「ああ莨だ」と満足した。
「船頭さん、きょうはいい黒船見物をさせて貰った。船頭さんが、むこうの言葉を話せるとは思ってもみなかったし、むこうの莨の匂いも、かがせて貰って、村のいいみやげ話ができた。本当に、ありがとう」
乗客は口々に、弥平次に礼を言いながら舟から降りていった。
弥平次は、「黒船見物無用」と立札のある建物に入っていった。
「弥平次でございます。きょうも、えろうお世話になりました。本日のお客さんは三十八人でしたので、一九〇〇文になります。どうぞお受け取り願います」
弥平次は財布から取り出した一文銭を一九〇〇文ずつの二つの山に分けて、一方の小銭の山を監理人に押し出

した。
「いつも、悪るいのう」
「いいえ、いいえ。わしも、こうして稼がせていただいておりますので、お礼を言うのは、わしの方です」
弥平次は、あくまで低姿勢だった。
「それでは、こちらをいただかせていただきます」
弥平次は残った小銭の山を自分の財布にしまった。
「それでは、これで帰らせていただきます」
「これ、これ。お茶の一杯でも呑んでいかんか」
弥平次の背中に、こんな世辞が投げ掛けられたが、弥平次は小腰をかがめただけだった。
（なにを言いやがる。ただ、黙ってて、一日一九〇〇文も日銭が入いりゃ、文句はあるめえ。おれぁ、てえめえたちを偉いなんぞと思っちゃいねえ。おれは、ただ、浅草寺のショバ代のしきたりに従っただけだ）
と心のなかでわめいていた。
羽田沖まで侵入してきたペリー艦隊の武力誇示に屈した幕府は、神奈川駅のはずれの横浜で交渉することに譲歩した。
幕府は儒者林大学頭・町奉行井戸覚弘・目付鵜殿長鋭を全権に任じ、ペリーとの交渉にあたらせた。
安政元年二月十日、第一回の横浜交渉がおこなわれ、二月三十日までの四回にわたる交渉の結果、下田・箱館（函館）両港における薪水・食料・石炭および欠乏品の供給と漂流民の救助・引き渡しを定めた日米和親条約が安政元年三月三日に調印された。
その日は、ちょうど雛祭りの日であった。
現在では女子の祝いの日になっているが、もともとは流し雛といって、けがれを川に流して厄を払うためであった。水に縁のあるペリー艦隊、そのあらゆる厄を払おうという幕府の願いが、三月三日を選ばせたのであろうか。
日米和親条約文の交換がまさに終わろうとしたとき、「われわれは、外国語で書かれた、いかなる文書にも署名することはできない」
と、突然、林大学頭は言い切った。
一瞬、ペリーは虚をつかれたが、反論する間もなく、交換の儀式は進み、やがてすべてが完了した。
このため、条約文の日本語版には林大学頭たちの署名だけ、英文版にはペリーの署名のみで、双方の責任者の署名が揃った条約文は無いという結果になった。
正文を何語にするかとの交渉が行なわれなかったため、双方が自国語を正文と思い込んでいたためであった。
双方が正文と考えた条約文には、自国側の署名のみという皮肉な結果となった。
（完）

体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと（十二）

千坂精一

国分へ還ってきた七〇一空

七〇一空に編制を命ぜられた第二神風特別攻撃隊は、前記八隊五〇名に、十一月六日急遽編制した二隊を加えて一〇隊六一名で、十一月十一日が最後の出撃であった。

そのうち、整備不良で目的を達せず切歯扼腕した生存者は、K一〇二では純忠隊米森一飛曹、宮本一飛曹の二名、K一〇三では神武隊柏井大尉、山崎飛曹長、神兵隊正木飛長（同乗の相田二飛曹は機上戦死）、神崎隊北村上飛曹（同乗者は神武隊の柏井大尉）の四名であった。

こうして、七〇一空の艦爆隊は刀折れ矢尽きて、幹部と一〇名足らずの搭乗員を残すだけになってしまった。

七〇一空は、はじめ北方作戦担当の五一航戦に属して千歳基地にいたのだが、前に述べた捷一号作戦警戒で関東進出を命ぜられて十月十一日香取基地に移動したが、さらに九州方面担当の二航艦に編入させられて、翌日K一〇二は出水基地に、K一〇三は国分基地に移動した。

ところが、この日捷一号、二号作戦が発令されていて、二航艦はすでに台湾へ移動し、九州は三航艦の担当になっていたので、七〇一空はK一〇二を国分基地のK一〇三と合流させると、十四日台東に飛んで摩下に入った。

そして、台湾沖航空戦のあとのフィリピンでは特別攻撃隊に参加させられて、潰滅状態になってしまったのだ。

千歳基地を発進してから僅か一ヵ月後の惨状であった。

フィリピンが陥ちれば本土が脅かされる。大本営海軍部は戦時編制の見直しを迫られ、大改訂して実施した。

七〇一空は九州の三航艦二五航戦に編入され、K一〇三は国分、K一〇二は香取で再建することになった。

国分基地には、先月十四日に台東へ出撃したときに残留させた隊員たちと、訓練中の若い搭乗員たちがいた。

満身創痍で戻ってきた隊員たちは、悠然と噴煙を棚引かせている桜島の長閑な光景をみて、殺伐とした心が慰められたに違いなく、平和そのものに感じられたという。

しかし、再建は急務で休養している暇はなかった。

敵が北上してきて本土に上陸する気配のなかでの訓練は、実践そのものの生死を賭けた激しいものであった。

あらかじめ戦闘指揮所前を目標に定めておいて、高度から急降下しては引き起こす訓練が繰り返し行われた。

加速度のついた艦爆を引き起こすのは難しい。

突入角度が深かったり、引き起こす瞬間が遅れるとそのまま地上に激突して、木っ葉微塵に砕け散ってしまう。

私も殉職者の骨拾集に動員されたことがあったが、広範囲に散乱した骨肉片を拾い集めるのは容易ではなかった。

こうして、伎倆未熟な若い搭乗員たちは、実戦の場にいたらずして猛訓練の犠牲になってしまったのである。

そんな最中の十二月十日に、もういっぽうの香取基地で再建していたK一〇二が七〇一空から除かれて、一航艦の七六一空に編入され、再び台湾へ進出していった。

年が明けて間もなく、十一月十一日に神崎隊一番機で特攻出撃し、突入したと思われていた飛行隊長柏井宏大尉が、組の操縦員北村良二上飛曹とともに帰ってきた。

あの日、途中発動機故障で飛行不能になり、ミンダナオ島のダバオ基地に不時着したとのことであった。

そこから手蔓を得てマニラまで辿り着き、さらに台湾に渡って数日待機していたところへ幸運にも鹿児島基地へ戻る輸送機に出会えて便乗させて貰ったのだという。

K一〇三では、飛行隊長の奇跡的生還に沸き立ったが、柏井大尉本人はおめおめ生き残ったことへの心の葛藤があって、その複雑な心境から表情が冴えなかった。

柏井宏大尉は、大正八年島根県生まれ。海兵六九期であるから最初の特攻敷島隊の指揮官関行男大尉より二歳年長の一期先輩であり、おなじ七〇一空のK一〇二純忠隊の指揮官深堀直治大尉とは一歳年長の同期であった。

前に述べた深堀直治大尉が突入した翌日の十月二十九日に、K一〇三神武隊の指揮官として出撃したが、途中で敵戦闘機と遭遇して交戦になり、同乗の操縦員山崎武男飛曹長が負傷したので、やむなく引き返した。

二番機の吉元一飛曹、坂田上飛曹組は被弾後消息不明になり、三番機は偵察員の池田一飛曹が機上で被弾して戦死したので、吉村飛長が柏井機と同様引き返してきた。

二度目の出撃は、追加編制された神崎隊を率いて十一月七日に出撃したが、視界不良のなかを懸命に索敵したもののついに発見出来ず、三機とも虚しく帰投した。

このときから、操縦員北村良二上飛曹が組になった。

そして、十一月十一日三度の機会を得て出撃したのだが、前述の発動機故障で不時着してしまったのだった。

いかに軍人に仕上がっていても、覚悟のうえの特攻出撃を、途中偶発事故で三度も生還を繰り返したら、生へ

の執着が頭を擡げて葛藤に苦悶するのではないだろうか。
筋金入りの海軍士官柏井宏大尉の強靭な精神力には敬服するが、反面その心情を想うと察するにあまりある。
そんな柏井大尉に、江間飛行長はK一〇三飛行隊の再建を急ぐよう発破を掛けて、懊悩する時間を与えなかった。
ちょうどそのころ、私は練習生教程を卒えてこの七〇一空に配属されたのだが、これまで縷々述べたことなどまったく知らず、内地部隊だとばかり思い込んでいた。

表紙のない雑記帳

私の手許に、B5版横罫の古びた一冊の帳面がある。
表紙がなく、綴じ糸も解れて最早帳面の体裁をなしてはいないが、茶色の糸を縒って紐にした洗濯留めで二箇所を結わえて散逸させずに今日まで大事に保存してきた。
内容はおもに所有者本人がおりに触れて軍歌や流行歌を書き留めておいたものだが、そのあいだに三十人の搭乗員たちが署名入りでこれに倣い、詩や素描なども書いていて、それがこんどの取材で貴重なものだと判った。
私は、この帳面を国分基地でなにかの機会に貰ったのだが、それが誰からなのかまったく記憶がないのだ。
くれた人は、K一〇二かK一〇三の隊員に違いはないが、K一〇二は間もなく香取基地へ行ったようだし、K一〇三は猛訓練に明け暮れていたからどちらか判らない。
これが、蒼い月光の冴える林の中へでも呼び出されて、「これは俺たちが生きていた証しだから持っていてくれ。貴様らも書いておいて散るときは後輩たちに頼めよ」
そう沁々と言われて渡されたものならともかく、そんな劇的な場面はなく、なにげなく受け取ったようなのだ。
だから、気にも留めず、衣嚢の底に蔵い忘れていた。
その後、二十年近くも経って出版された『神風特別攻撃隊の記録』の巻末にある関係資料編の連合艦隊告示のなかに、深堀直治大尉の名があるのを見つけて愕いた。
深堀大尉は、帳面に『抜刀隊』を書いていたのだ。
私は、西南戦争のとき、官軍のなかに内務卿大久保利通が派遣した警視隊がいたことに注目していた。
当時の警官には、戊辰戦争のとき朝敵藩士で軍人になれなかった者が多くいたので、東征大総督参謀だった西郷隆盛に報復する機会を得たことは望外の喜びであった。
その警視隊のなかに第一方面第一分署（後の麹町署）署長佐川官兵衛がいた。元会津藩家老鬼官兵衛である。
官兵衛は抜刀隊ではなく、豊後口警視隊の副指揮長だったが、豊後竹田から阿蘇山麓の白水村を経て二重峠まで進撃したところで薩軍と遭遇戦になり、被弾して戦死した。
その佐川官兵衛の足跡を辿っていて、警視隊で編制された抜刀隊のことを知り、詞を諳んじて悦に入っていた。
たまたま帳面のなかにその『抜刀隊』の詞を見つけて、

一面識もない深堀大尉に親しみを感じていたのである。

抜　刀　隊

我は官軍我が敵は
天地容れざる朝敵ぞ
敵の大将たるものは
古今無雙の英雄で
それに従ふつはものは
共に慓悍決死の士
鬼神も恥ぢざる勇あるも
天のゆるさぬ叛逆を
起せし者は昔より
栄えしためしあらざるぞ
敵の亡ぶるそれまでは
進めや進めもろ共に
玉散る剣ぬきつれて
死する覚悟で進むべし

昭和十九年六月二十三日

深　堀　大　尉

詞の下に、さんばら髪を白鉢巻で結び、右手で抜き身を振り上げている背後姿が生き生きと素描されている。
深堀大尉がなぜ好んで『抜刀隊』の詞を書いたのかは知るよしもないが、察するに同胞の生命と財産を守る使命を課せられた軍人としての意気込みを、『抜刀隊』の詞に託したのではないだろうか。
ついでながら、深堀大尉は、二頁前の馬場助治飛長が『坂本龍馬』の詞を書いたあとにも、崇拝している龍馬の横顔を鉛筆で素描して、深堀大尉画と署名している。
深堀直治大尉は、前述の告示で第二神風特別攻撃隊純忠隊指揮官だったことは判ったが、他の隊員の名は帳面になく、また馬場飛長は純忠隊員ではないので、この帳面は作戦都合の編制で目紛しく離合集散した各飛行隊の人たちが、おりに触れて書いたものだと思い込んでいた。
ところが、こんどこの稿を書くにあたって私の所属していた七〇一空の資料を探し集めていったら、内地部隊だとばかり思っていたのが、北海道、台湾、フィリピンと歴戦した隊であり、摩下のK一〇二、K一〇三飛行隊は特攻で潰滅し、負傷者と搭乗機損失者だけが辛うじて残留者のいる原隊の国分基地に帰還して再建中だったことが判ったが、その資料のなかの特攻名簿を見て愕いた。
深堀直治大尉が『抜刀隊』の詞と、坂本龍馬の横顔を書き遺した帳面に、署名入りで書いた人たちは、すべて深堀分隊長のK一〇二飛行隊の人たちだったのである。
他人の雑記を無断で発表してよいものかどうか迷ったが、すでに半世紀あまりも経過していることだし、好きな軍歌や流行歌の詞を書いただけのことだからと思い直して、ここに哀悼を籠めて発表すると同時に、その人の

最期の出撃を記述して鎮魂としたい思いに駆られた。

帳面の記載どおりに並べればそれが年月順でもあって自然なのだが、なかには間をおいてなんども書いている人もいるし、深堀大尉と馬場飛長のような例もあるし、搭乗割で組になっている人たちは常時同一行動だから、順不同になるがそれらを勘案して並べ直すことにした。

まず、深堀大尉が素描を添えた馬場飛長からつづける。

坂本龍馬

一、緑の夢を驚かす
今日の血染の小夜嵐
男龍馬は勤王の
つばを鳴らして意々又何を斬る

（二～三番は省略する）

馬場飛長

愛染かつら

一、花も嵐もふみ越えて
行くが男の生ける道
泣いてくれるなほろほろ鳥よ
月の比叡を一人行く

（二～四番は省略する）

馬場飛長

馬場助治飛長は、大正十四年生まれの丙種一五期生。

飛行科練習生には甲、乙、丙の三種があることは前に触れたが、これは受験成績区分ではなく資格分類である。

甲種は、旧制中学四年一学期以上が受験資格で、一般兵科なら十二年かかるところを六年で准士官（飛曹長）に任用されるという特別進級に恵まれた幹部候補生。

乙種はいわゆる少年飛行兵で、旧国民学校高等科卒業または旧制中学二年修了以上が受験資格で、進級は早い。

丙種は、一般兵科からの転科で、旧国民学校高等科卒業程度の学力がある二十三歳までが資格で、進級は遅い。

馬場飛長と同年齢の甲飛一〇期生は一飛曹で、二階級上であるから、飛行科のなかで丙種は冷遇の感がある。

馬場飛長が、昭和十九年四月一日付で美幌空（網走郡美幌町）の五五三空K一〇二飛行隊付を命ぜられて着任したときの分隊長が深堀直治大尉であった。

以後、深堀中隊長の第二小隊三番機に搭乗、偵察員熊田功一飛曹と組で北方防衛の任務に精励した。

八月に千歳空（千歳市）の五〇二空に編入され、隊長江間保少佐のK一〇三飛行隊と一緒になり、さらに十月一日両飛行隊とも七〇一空に再編入した。

このとき、それまでの第二小隊長藤本中尉がK一〇三付になったため、深堀大尉の中隊からはずされて第二中隊長松井清大尉の第三小隊三番機に搭乗割を変更された。

いままでの小隊長藤本勇中尉は海兵七一期の操縦員であったが、こんどの飯田日吉中尉も予備学生出身の操縦員で、背が高く浅黒い温和な学生気分の人であった。

それから十日後に、七〇一空は沖縄、台湾方面に敵大機動部隊現わるの報を受けて、急遽総指揮官江間保少佐機を先頭に大編隊を組み、初秋の千歳基地をあとにした。

途中香取基地（佐原市）で増槽（補助容器）を外して二五番（二五〇キロ爆弾）を搭載する作業を終えると、鹿児島県の出水基地へ向けて飛び立った。

馬場飛長は、出水基地で衣嚢と遺書を入れた私物鞄を預けると、国分基地に飛んで先着のK一〇三と合流した。

練習生や傷病搭乗員たちに見送られて、国分基地を発進した両飛行隊は、索敵攻撃をつづけながら沖縄や台湾各基地を転進していたが、フィリピンに敵大機動部隊が現れると、こんどはマニラ周辺の各基地に移動した。

そして、翌二十三日〇六三〇江間少佐指揮の両飛行隊九九艦爆三八機がマニラ東方の敵機動部隊攻撃に発進したが、二十日以来動静を把握していないのと、洋上の天候不良がつづいていて発見にいたらず、虚しく帰投した。

そして、馬場飛長にとって運命の二十四日を迎える。

この日未明、マニラ東方に電探を探知したとの敵情が入り、〇七〇〇マバラカット東飛行場から昨日同様江間飛行長指揮の九九艦爆三八機が勇躍出撃した。

馬場飛長所属の第二中隊の編制は、

中隊長機　（操）松井大　尉　（偵）高橋飛曹長
二番機　（操）黒木飛　長　（偵）石松上飛曹
三番機　（操）久道一飛曹　（偵）大石一飛曹
第二小隊　（操）北畠上飛曹　（偵）佐野中　尉
二番機　（操）小林一飛曹　（偵）肝付一飛曹
第三小隊　（操）飯田中　尉　（偵）橋口上飛曹
二番機　（操）馬場飛　長　（偵）熊田一飛曹

の七機であった。

この日も天候不良で視界が悪く、そのうえ直掩隊が指揮官機の発動機不調で遅れがちになるのをときおり待ったりしていたが、いつまでぐずぐずしてもいられないので、江間隊長は直掩隊に後方を託して単独で進撃した。

馬場飛長の三小隊二番機は七機編隊の最後尾であった。

馬場飛長が、偵察員の熊田一飛曹に伝声管を使って、

「後方の見張り頼みます」

と念を押すと、熊田一飛曹も、

「大丈夫、心配無用。雲量多いが編隊から逸れるなよ」

と互いに励まし合って進んだ。

とにかく断雲また断雲で、雲の切れ間から敵機動部隊を探し出すのは難しく、困難な索敵飛行がつづいた。

焦りはじめたころ、突然熊田一飛曹が伝声管を通して、

「後方からグラマン六機接近」

と怒鳴った。

馬場飛長は咄嗟に翼を振り、熊田一飛曹も手先信号で合図を送ったが、前方機の偵察員は後方を見ていない。

馬場飛長の三小隊二番機も、『七〇一空戦闘詳報』には、〈不時着操縦員戦死（二十四日）〉となっている。

馬場飛長は術後の経過もよく、マニラの海軍病院を経て、十二月八日第二氷川丸で佐世保海軍病院に移され、さらに東京目黒の海軍軍医学校に運ばれて、四月初めに待望の鉄の脚を装着し、歩行訓練、駈足訓練に励んだ。

そのあいだに二飛曹に任官し、さらに一飛曹に進級して終戦を迎え、八月二十二日に仮退院して郷里へ復員した。

「手記」の最後に、

今一年早く敗ければ戦友と兄
散らず吾が足も断たざるものを

と詠んでいるが、これは生き残った者たちの誰もが抱いている共通の想いである。

なお、熊田功一飛曹は、昭和二十年一月十五日別府湾での爆撃訓練時に、空中接触事故が起こり、殉職した。

馬場助治氏は、戦後上京したおりに熊田功氏の安否を気遣って、実家のあるまだ焼野原の横浜を不自由な義足で探し歩いた。

だが、ようやく訪ね当てた熊田家で、家族から熊田功氏が殉職したことを知らされた馬場助治氏は、落胆すると同時に、あのとき自分が自爆を決断していたら殉職ではなく戦死だったのにと残念に思ったという。

しかし、それは結果を知ってからの思い付きであって、瀕死の重傷を負いながらも無傷の同乗者を自爆の道連れにしてはならぬと懸命に帰還したことは立派な行動であり、悔いることなど微塵もない。

それが正しい行為だったからこそ、女神が頬笑んで、馬場助治氏の瀕死の生命を救い、余命を与えてくれたのではないだろうか。

（つづく）



紙透家の人びと（十八）

第六章　第五野戦憲兵隊（父紙透小太郎の手記より）

紙透寛夫

三　アンボン島へ

昭和十八年（一九四三）四月八日。我等の基地アンボン島に上陸した。

このアンボン島は元オランダ領香料群島を包含する重要なる軍事的要衝である。周囲約五十ｋｍもあろうか、中央入り海となっており、海上航空基地としての適地でもある。

昭和十七年二月。早くも、海軍の攻略せる所、現に海軍根拠地隊司令部陸上部隊あり、陸軍は新たに濠北軍第十九軍司令部を設置して、濠洲作戦に備えたのである。従って、我等の部隊（憲兵）も本部を司令部所在地に置くべく設置されたのであった。

本桟橋と石炭桟橋の二つがあるが、我等の船は、石炭桟橋に接岸した。そのころ、敵機の監視は熾烈を極めていたので、接岸と同時に、本部より差し出しの作業班及び他の部隊もともに、隊貨の積み降ろし作業を開始し、三百余個の梱包は、無事、隊本部に引き渡しすることが出来たのである。

本部はアンボン市街の一角、貨物廠の一部を借用、極めて貧弱な原住民の接収家屋にいた。我が沼田分隊もまた、本部の一部に同居し、展開のための地理実査は大多忙を極めていた。

昭南（シンガポール）やスラバヤとは比較にならぬ小都市で、人口は二、三万、癩病（ハンセン病）患者の多い島で、アンボン市に病院もある。

さっそく、翌日より地理実査のため、まずオートバイでトレフ港（アンボン港と反対側の小港）へ通ずる道路の偵察を実施する。二日間にして、大体の状況を知る。

アンボン人はインドネシア中、最も進歩的で且つ精悍な人種で、オランダがアンボン人に日を付け、インドネ

シア懐柔策の一つとして、彼等を傭兵に使用して、これに恩給制度を設けて優遇した。従って、このアンボン島と周辺のサバルア島などには、恩給生活者が大勢居住していたのである。

日本が攻略して、これらアンボン人が反日的な人種となったのは当然のことである。敗戦後、武器を捨てた日本軍が彼等の反感を買い、言語に絶する虐待を受けたことは後日の話であるが、そのころは表面上、穏健を装うておったのだ。だが、全部が全部、日本軍並びに日本人に、反感を持っていたわけではない。多くはインテリ階級におったことは事実だ。

キランに派遣

昭和十八年四月七日、アンボン島内の三か所に派遣隊が出来た。沼田中尉、山口亘利少尉の隊と僕の隊である。僕はアンボン島北部山中のキランに派遣所の開設を命ぜられた。これより先、地理実査のため、本部の中村中尉が大体調査して立案したのである。

編成は佐々木要之助曹長、薄田軍曹、竹村貞己、斉藤正吾伍長、風戸上等兵と、通訳のインドネシア人アブの六名であって、本部から中村中尉と浜田軍曹が同行した。午前七時、大発でアンボン港を出て、地図の上でキランに最短の上陸地点を目標に上陸したが、八キロも離れた海岸であった。そのために、山また山の小道を、しかも炎天下を行軍して約三時間の後、ようやく目的地に到着した。午後六時、さっそく設営にかかり、村長宅を無理に立ち退かせて這入ることにした。あばら屋で古ぼけた家であったが、止むを得なかった。キランはキリスト教部落で人家が五十戸の小部落だが、キリスト教会堂だけは、素晴らしく堂々たるもので、驚き入った次第である。

翌日から、付近の地理実査に出掛けたが、山また山で、道路は日本に見るようなそれと異なり、すべてが山の頂上から谷底へ、谷底から山の頂上へという具合に、骨の折れることお話にならない。

物資はアンボン市に近いのに、何もない。副食にする魚さえ入手困難で、野菜とても極めて貧弱で、豚を殺し、川魚を漁り、野生の南瓜を食う始末であった。豊富であるべきバナナ、パパイアさえ自由にならなかった。後日、分かったことだが、村長等が出し惜しんだためだったようだ。

炊事係は薄田軍曹、風戸上等兵がやったが、両人とも、あまり得意でなかった。醤油ばかり多く使って、辛いばかりで味付けも何も知らない不器用さであった。水の不便さも本当に参った。部落からずっと下った小川から運ぶため苦力を使って毎日運ぶのだが、竹筒で少しずつ運搬するので、シャワー（水浴）さえ思うようにゆかぬ状態であった。僕をはじめ、皆、野戦に無経験のものばかりであったので仕方もない。

単純な生活を約一か月、この山中の部落で過ごしたが、その間、原住民の踊りを数回、見たがすべてが単調で、なんら慰められるものはなかった。古代の出陣踊りを見たが、去勢されたインドネシアの代表的なもののような感じであった。過去三百年、オランダに征服され、強度の搾取政策により、生気さえない状態を見せ付けられ、弱小民族の哀れさを痛切に感じた。海岸へは約一キロ半で、往復がなかなか大変であったが、時々水泳にも出掛けた。

仕事は割合に順調にゆき、原住民工作も効を奏し、隠匿兵器の発見等、他の派遣隊より早く、しかも失敗もなく、大いに認められて、まず一か月の任務も愉快に過ごすことが出来た。この間、アンボンへ二回、事務報告のため出張したが、本部は工作物資や機費を出さず、大いに、癪に障ったものだ。成果よりも階級に支配される高級指揮官の古い頭であった。こうした弊害を除去しなければならない。

四月二十九日、アンボン海軍部隊へ初の空襲があったが、高みの見物であった。B26五機でやられた。天長節（戦後、天皇誕生日と改称）で式をやっていた最中にやられたのだ。海軍もだらしない、形式主義に堕した結果に外ならない。

五月中旬、急にセラム島へ進撃の命令により、一か月でキランを左様ならした。

（そのころに、すなわち昭和十八年四月十八日、連合艦隊司令長官山本五十六がソロモン諸島上空で戦死し、さらに、五月二十九日には、アッツ島で、二千五百名といわれる日本軍守備隊が玉砕したのである）

つづく



漢詩

潮騒錄（卅七）

鯨游海

二宮金次郎之一生・（四）生家復興
平成十四年十二月

勞役得錢陽没歸
生家復興謝恩祈
新田無税爲民利
經世才知愈發揮
押韻・歸祈揮

〈二宮金次郎の一生・（四）生家復興〉
労役して銭を得　陽没して帰る
生家復興　謝恩の祈り
新田無税なれば　民の為に利せしむ
経世の才知　いよいよ発揮す

〔注　解〕

「積小為大」を体得した金次郎は馬車馬のように働いた。そして或る事に気づく。現金収入の魅力である。百姓の仕事は手間が多く金になる迄に時間がかかる上に、過酷な年貢を取られて了う。その点給金や手間賃は無税であった。農作物は五公五民といって半分が年貢で取られるが特例として自から開墾した新田は五年間年貢が免除された。これに目を付け新田開拓に最も注力した。

かくして彼は荒地を開拓して新田とし、又現金収入の銭を貯め少しづつ田や畑を買い増していき、何時の間にか一町四反余の中地主となっていた。人々をも助けた。

弱冠二十四歳にして遂に生家を立派に復興したのである。別居中であった弟友吉を引取り一緒に暮らし始めた。

金次郎は意識的に税金を免がれる仕事に注力した。何よりも効率的であった事に加え「百姓は汗水垂らして働らいて何故半分も年貢を納めなくてはならないのか」という素朴だが近代感覚に目覚めた疑問を持ったのである。

☆こころざし高かる人のひとふりの
鍬深々と土をえぐりぬ

二宮金次郎之一生・（五）服部家奉公
平成十四年十二月

招三顧禮仕家老
臣僕貧窮救策無
案出五常貸金講
幾多相助相被扶
押韻・無　扶

〈二宮金次郎の一生・（五）服部家奉公〉
三顧の礼もて招かれ　家老に仕う
臣僕の貧窮　救うに策なし
案出したり　五常貸金の講を
幾多ぞあい助け　あい扶けらるるは

〔注　解〕

三顧の礼とは諸葛孔明が招かれた際の故事であるが転じて長上から特別の信任・優遇を受けることにも用いる。臣僕は家臣と従僕。五常は論語・仁義礼知信。人が常にふみ行うべき五つの道。

弱冠にして生家を復興した金次郎は小田原藩家老服部家の傅役（子弟の教育係）となり漢学者の四書五経の講義を聴く機会が得られた。更に家臣や奉公人が金に困っている事を知り「五常講貸金」を始め大いに利用された。

☆武士は悲しかりけり今朝もまた
朝餉欠く子に論語素読す

二宮金次郎之一生・（六）櫻町領復興事業〔上〕
平成十五年三月

財政再興君命強
欲辭不得別家鄉
遠來下野櫻町領
田地蓬蓬人道荒
押韻・強鄉荒

〈二宮金次郎の一生・（六）櫻町領復興事業〔上〕〉
財政の再興　君命強く
辞さんと欲するも得ず　家郷と別る
遠く　下野桜町領に来たれば
田地ほうほうとして　人道すさみたり

〔注　解〕

服部家の財政再建を果たした金次郎の力量は、藩主大久保忠真の知るところとなった。忠真はとりあえず分家の宇津家が領する下野国（栃木県二宮町）桜町領の復興を命じた。金次郎は固辞したが、より大きな舞台で自分の力量を試すチャンスだと思い直し終に承諾した。

家財を売り払い一家を挙げて移住したが、そこは痩せ地で作物の実りも悪く、農民は怠惰で気風もよくない。金次郎は覚悟はしていたものの唯茫然と立ち尽くす。

☆はるばると遠き封地を訪ぬれば
人うつろにて草木ぼうぼう

二宮金次郎之一生・(七)櫻町領復興事業〔中〕
平成十五年三月

祿高公稱四千石
實收如何不滿千
驚使君臣守分度
未聞善政領民燃

押韻・千　燃

〈二宮金次郎の一生・(七)櫻町領復興事業〔中〕〉
祿高公称　四千石なるに
実収いかんせん　千に満たず
驚ろくは君臣をして　分度を守らしむ
未聞の善政に　領民燃ゆ

〔注　解〕

前代未聞の年貢の軽減と宇津木家の減俸を藩主に約束させた金次郎は次に村の隅々を歩き廻る。一軒毎に暮しぶりや人柄を調べ、田畑の作業を手伝い、作り方を教えたり排水を改良したりする。更に分度（身分相応の暮らし）を守らせ勤勉を教える。当初冷ややかな目で見ていた村民も金次郎の誠実さや勤勉さに心を開き協力してくれるようになる。効果は現われ復興の意欲も盛り上り二年後には豊作でもあったので余剰米を貯える迄になった。

☆年貢米減らしくるると君はいう
　夢燃えそめて力たぎりつ

贈福田賢司由美兩君華燭之典
壬午・酉月

天産汝材何所由
今當有用福緣秋
賢賢美美比翎鳥
攜手翔乎萬里丘

押韻・由秋丘

〈福田賢司由美両君の華燭の典に贈る〉
天が汝が材を産むは　何の由る所ぞ
今まさに用有るなるべし　福縁の秋
賢々たるかな美々たるかな　比翎の鳥よ
手を携えて翔べや　万里の丘を

〔注　解〕

中央エレベーター工業社長の福田重信氏ご長男の賢司君とNEC部長小河原孝一氏のご息女由美君との華燭の典が赤坂全日空ホテルで開かれた。

世の縁とは全く不可思議きわまりない。ひょんなことから図らずも私が「月下氷人」つまりキューピットとなって了った。主賓で遇され面映ゆかった。その折に差し上げた祝婚歌である。なお転句は論語の如く「賢を賢とし美を美とす」と訓むのもいい。

☆美しくはなやぎおりし新妻を
　眼で追う父に酒をそそぎぬ

泊六甲山嶺東洋賓館詠中學校同窓會懷
平成十五年五月

綠髮辭門再會宵
拍肩執袂憶迢迢
同音同貌唯霜鬢
山莊一隅燈不消

押韻・宵迢消

〈六甲山嶺の東洋賓館に泊し中学校同窓会の懐を詠む〉
緑髪に門を辞して　再会せる宵
肩を拍き袂を執れば　憶は迢々たり
同音同貌　ただ霜鬢
山荘の一隅　灯消えず

〔注　解〕

緑髪＝黒髪をいう。転じて十五～六歳の少女の象徴として用いる。拍肩執袂とは友人同志が久闊を叙して睦み合うさま。迢迢は遥かなるさま。遥や遙と同義。

同音は古郷の訛が昔と変わらないことをいう。貌＝容貌＝顔かたち。霜はここでは白。鬢は頭の左右の毛髪。

同音同貌ではあるが緑髪が霜鬢に変じて了った感懐の叫び、詠嘆である。実に楽しい一宵ではあった。

☆故郷なまり面影とどむ汝が笑顔
　霜ふり払え黒髪いずこ

《漢詩の流れ28》北宋の巨星たち①

唐末から五代十国の争乱を平定し統一王朝を建てたのは趙匡胤である。九六〇年から金に侵攻された一一二六年までの約一七〇年間を北宋と呼ぶ。

唐末の貴族主義体制は崩壊し、皇帝を中心とする中央集権を確立する為、武人を押え文官を重視する文治主義が採られた。官僚は科挙によって選ばれる為、優れた知識人官僚が百花繚乱と輩出した。

一時「西崑体」と呼ばれる宮廷詩人達の詩がもてはやされたが概して難解であり皇帝を頌える空虚なものであったのでやがてあきられ、平淡素朴で理知的、散文的な詩風が主流となる。先ず林逋を挙げねばなるまい。

林逋の後が梅堯臣と蘇舜欽である。更に宋の仁宋から哲宋までの八〇余年（一〇二三～一一〇〇）は天下太平で文人宰相歐陽修が活躍して、文章の改革、詩の革新に成功した。門下からは王安石、蘇軾をはじめ多くの優れた詩人が輩出し、宋詩として唐詩とは一線を画した独特の新風をもって登場、後世の詩に大きな影響をおよぼした。蘇軾を慕った黄庭堅、秦觀、陳師道らが傑出した。

唐詩が主観的、激情的でひたむきな悲壮感を吐露したのに対し、宋詩は理性的で精密に対象を観察し自然にこれらを表現し新らしい価値を創出した。それらは決して現実を逃避した退嬰的なものではなく、極めて進歩的、革新的で強烈な個性を発揮した鋭敏な詩であった。

柳　開（九四六～九九九）字は仲塗。韓愈や柳宗元の文を踏襲、王禹偁、歐陽修らの先駆となる散文作家。

塞　上（さいじょう）

鳴骹直上一千尺　鳴骹（鏑矢）直ちに上る　一千尺
天静無風聲更乾　天静かに風なく　声更に乾く
碧眼胡兒三百騎　碧眼の胡児　三百騎
盡提金勒向雲看　尽く金勒（馬のくつわ）を提めて雲に向って看る

王禹偁（九五四～一〇〇一）字は元之。直諫の官僚。

村　行（そんこう）

馬穿山徑菊初黃　馬は山径をうがち　菊初めて黄なり
信馬悠悠野興長　馬に信せて悠々　野興ながし
萬壑有聲含晩籟　万壑声有り　晩籟を含み
數峯無語立斜陽　数峰語無く　斜陽に立つ
棠梨葉落胭脂色　棠梨葉落ちて　胭脂の色
蕎麥花開白雪香　蕎麦花開いて　白雪の香
何事吟餘忽惆悵　何事ぞ吟余　たちまち惆悵たるは
村橋原樹似吾鄉　村橋原樹　吾が郷に似たり

寇　準（九六一～一〇二三）字は平仲。宰相後貶謫。

書河上亭壁（河上の亭壁に書す）

峰濶檣稀波渺茫　峰ひろく檣は稀に　波は渺茫たり
獨憑危檻思何長　独り危檻（手摺）に憑れば思何ぞ長き
蕭蕭遠樹疏林外　蕭々たる遠樹　疎林の外
一半秋山帶夕陽　一半の秋山　夕陽を帯ぶ

林逋（九六七～一〇二八）字は君復、銭唐の人。梅を妻とし鶴を子として西湖の孤山に隠栖生涯を送った。独身を通し書画もよくした人で江戸期日本人にも愛された。

山園小梅（山園の小梅）

衆芳搖落獨嬋妍　衆芳揺落して　独り嬋妍たり
占斷風情向小園　風情を占断して　小園に向う
疎影橫斜水淸淺　疎影横斜して　水清浅
暗香浮動月黃昏　暗香浮動して　月黄昏
霜禽欲下先偸眼　霜禽下らんと欲して　先ず眼を偸み
粉蝶如知合斷魂　粉蝶もし知らば　合に魂を断つべし
幸有微吟可相狎　幸いに　微吟のあい狎るべき有り
不須檀板與金尊　須いず　檀板と金尊とを

檀板とは歌や音楽の拍子をとる道具。最後の二句尾聯は次のように訳す。

「幸いに私の微吟を梅はかねがね好いてくれているから、いまさら歌舞音曲も宴会もいりはしない」

この詩の頷聯（三～四句）と頸聯（五～六句）の対句は古今の絶唱ともてはやされている。

蘇舜欽（一〇〇八～一〇四八）字は子美。開封の人。

夏　意（夏の意い）

別院深深夏簟淸　別院しんしん夏簟清し（簟は竹ござ）
石榴開遍透簾明　石榴開くこと遍く簾を透して明かなり
樹陰滿地日當午　樹陰地に満ちて　日は午に当る
夢覺流鶯時一聲　夢覚むれば流鶯　時に一声

千篇萬律

☆「天氣晴朗ナレド浪高シ」「敵艦見ユトノ報ニ接シ…之ヲ撃滅セントス」「皇国の興廃コノ一戦ニアリ」以上は日本海々戦に於ける旗艦三笠の参謀秋山真之が作成した文。切迫感、悲壮感、臨場感溢るる機能美に満ちた名文ではないか。次に詩歌をみてみよう。

☆「昔ノ光今何処」「丞相病アツカリキ」（晩翠）「人恋イ初メシ始ナリ」「旅人ノ群ハ幾ツカ畠中ノ道ヲ急ギヌ」（藤村）口語文では到底表わし得ぬ余韻がある。

☆言文一致を唱え実践した四迷や紅葉。文章を大衆化した功は大だが同時に低俗化も免れなかった。惟うに彼らの理想は雅（文語）俗（口語）混交ではなかったのか。事実昭和の半ば迄は文語文も日常的であった。「南大平洋ニ於て戦闘状態ニ入レリ」はNHKの放送で用いられた。雅俗の使い分けによって日本語は表情やリズム、深意や膨みを包臓し得た。文語を再評価しもっと使いたい。

☆朕即位以来茲ニ二十有餘年夙夜祖宗ト萬姓トニ背カンコトヲ恐レ……億兆塗炭ノ困苦ハ誠に國家未曾有ノ災殃トイフベク靜ニ之ヲ念フ時憂心灼クガ如シ。朕ノ不徳ナル深ク天下ニ愧ヅ。…恢弘センコトヲ庶幾フ。

☆孔明の不朽の名文「出師の表」を髣髴させる右の名文は当時宮内庁長官だった田島道治が国民に謝罪せんとした天皇の意を受け著わした詔書草稿。最近田島の遺品から史家加藤恭子が発見したという（文春七月号より）（く）

まんじ　第89号

平成15年8月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道夫（みとおか　みちお）
編集長　鯨　游海（くじら　ゆうかい）
事務局長　鍋屋　次郎（なべや　じろう）

（事務局）〒223-0056　横浜市港北区新吉田町2477－3　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）No.00270-0-64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）大和印刷株式会社
〒332-0031　川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について　宮城正彦画
仲間、継続、積年等をイメージして描いた（宮城）。限りない空想の世界に遊ばせてくれる作品（く）。

まんじ傑作選

90号記念

まんじの会

さ　ち　瀧澤　中　7
きもないさん　鈴木昭三　33
妖花藤原薬子（ふじわらのくすこ）―家門の面目に賭けて―　島津隆子　61
シルヴェスターの夜　森　実与子　81
貸しはがし　中泉聖司　101
白い鳩　千坂精一　133
聖徳銀行秘書室　鯨　游海　161
漢詩　銀行雑詠　六首　鯨　游海　180
俳句　橡若葉　百句　大澤鷹雪　185
散策中に思う・韓国にて　新井　宏　199
奴隷王朝―世界史最大の下克上―　宅見勝弘　227
継体大王の謎を探る　隆　恵　247
芭蕉のこと　青木昭成　285
現代詩　点描より　四編　青木昭成　308
短歌　行雲流水　四十首　石黒修身　311
紙透小太郎の獄中記　紙透寛夫　325
あるキリシタン迫害―若き学僧の思い―　鍋屋次郎　355
阿育王伝（アショカオウデン）　相原精次　377
日本犬物語　宮城克郎　397
霧の村の新任教師　伊澤敏久　413
遠い処へ　太田精一　437
ソクラクレス　三戸岡道夫　461

〈執筆者紹介〉……485
あとがき……497

カバー絵　鈴木國男
「マヤ婦人」より
裏表紙イラスト　宮城正彦

まんじ傑作選

さち

瀧澤中

一

女は乳房を包み込むように、桜色の襦袢を、座ったまま着込んだ。

赤ら顔の老人はその姿を見ながら、

「それっ、持って行け」

と、半紙に包まれた金を、皺の寄った固太りの指に挟んだ。その金を受け取ろうと女が左手を伸ばすと、襦袢の胸元が少しはだけた。

「こっちに来い」

恰幅のいい老人の手は、女のか細い手首を捻るように摑み、自分の膝に引き寄せた。

「あっ」

すでに事は終えたのだ。早く身支度して帰りたい、そう思った女の着衣の様子に、老人は再び欲情を催したのだ。

「おやめ下さい、もう、もう」
その時、「ガチャリ」と音がして、張り替えたばかりの青々とした畳の上に、女の黒漆の守り刀が落ちた。女はさっとそれを拾い上げると、
「それ以上近寄ると、承知致しませぬ」
見事な短刀捌きで刀身を抜くと、女は切っ先を老人の胸に向けた。
しかし、老人は全く動揺する素振りも見せなかった。
「ほう、刺すかね、ワシを。政府の仕事をしておるワシを刺したら、お前だけではない、周りがみんな迷惑するが、それでも刺せるかね」
老人はいわゆる「政商」だった。
幕末、加賀では唯一、倒幕派につながって資金を提供し、その見返りに維新後、金沢での商売を取り仕切っているのだ。
女は大きな瞳にいっぱいの悔し涙をためて、短刀を静かに、い草の薫る畳に置いた。
そして、老人が襦袢の上から胸を摑むのを、ただ受け入れるしかなかった。
二度目の事を終え、女が身支度の最後に帯を締めた時、老人はよほど気分がよかったのであろう、
「なかなかいい帯じゃないか」
と、珍しく女の衣装を誉めた。
紅色の地に、見事な白い鶴が舞っている。

女はただ無表情に、帯の絵柄を隠すようにして、先ほどの黒漆の短刀を胸元に差し、老人の別邸から出て行った。

加賀百万石の城下町、金沢。
藩祖・前田利家からの豪気さを受け継いで、町のそこかしこにきらびやかな匂いが漂う。と同時に、小京都と言うに相応しい繊細さをも持ち合わせている。
「あら、さち様」
紅色の地に、白い鶴の舞う帯を締めた女を呼び止めたのは、小間物屋の女将だった。
女将は店先から飛び出して、さちに声をかけた。
「さち様、ちょっとお寄りなさいまし」
さちは、特徴的な大きな目を少し伏せて、迷惑そうな、それでいてうれしそうな、複雑な笑顔を見せて立ち止まった。
女将の話はわかっている。
新しい櫛が入ったのだ。
小店の女将が武家の女に通りで堂々と声を掛けるなど、十年前、つまりまだ明治と言わず、慶応と言っていた時分ならば、女将の常識を疑われても仕方がなかったであろう。
だが時代はもはや、武家のものではなかった。
否、それどころか、もしかしたらこの小店の女将の方の天下かもしれなかった。

しかし女将は、決して威張った様子もなく、さちを店の中に案内した。まるで、見つけた宝物を早く妹に見せようとする姉のようであった。

さちは、ずっと櫛を集めていた。髪を梳いている時、さちは自分が女であることを強く感じる。櫛はどれ一つとして、同じ梳き心地の物はなかった。

ほんの微妙な櫛の歯の具合で、まるで違う髪を整えているかのような錯覚を起こすのだ。

さちは髪を梳いている時だけ、今の自分を忘れることが出来た。いや、自分のことではない。あの醜悪な老人のことを、忘れることができるのだ。

そして髪を梳いている時、ある人を思い出すことができる。その人のことだけを考えることができる。

さちは、この世話好きな小間物屋の女将を、嫌ってはいなかった。それはそうだろう。女将は昔、さちの家に奉公していたことがあり、幼いさちは、よくなついた。

「さあ、さち様、ご覧あそばせ」

貧しさも限界に近い下級士族の娘を、これほど丁重に扱ってくれるのは、さちの父親が女将を奉公時代に大切にしたからである。

さちは、目の前に並べられた櫛の数々に、目を奪われた。

「まあ、なんて……」

そこには、輪島塗の金や赤をふんだんに使った、見事な櫛の数々が、絹の敷物の上に並べられていた。

伏目がちだったさちの目は、大きく見開いた。

「どうぞ、お手にとって下さいまし」

女将は微笑みながら、さちの驚く様子を優しく見守った。

さちは、おそるおそる、手前から二番目の、金を雲のようにあしらった愛らしい小さな櫛を手に取った。

飽きもせず、いつまでも櫛を眺めるさちに、女将は、

「お茶が入りました」

と言って、櫛の前からさちを動かしてやった。

女将はさちが、櫛を買えないことを知っている。

もちろん、意地悪で櫛を見せているのではない。さちが櫛を眺めているだけで幸せな気分になれることを、女将は知っていたのだ。

女将も出来れば、櫛をさちにあげたかった。が、さちは頑として受け取らなかった。

いかに自分を可愛がってくれるとはいえ、女将にそこまで甘えてはいけない、ということを、さちは当然のこととして感じていた。しかし櫛を眺めることだけは、甘えさせてほしかった。

そんなさちの意地らしい姿を見て、女将はなおさら親切にしたくなるのだ。

「さあ、お菓子もございますよ」

さちは女将の声で我に返り、

「あっ、いえ、もう帰りませぬと」

と言って、櫛を丁寧に絹の上に戻した。
強くすすめても決して「うん」とは言わないことを知っている女将は、
「さち様、いつでもお寄り下さいまし。素通りはいけませんよ」
そう言って微笑んだ。さちは今日初めての笑顔で、
「ええ、是非また」
と応えた。

さちには、思い続けている人がいた。
島田一良（いちろう）と言う。
さちと同じ下級武士出身の、石川県士族である。
さちはただ、思い続けているのではない。島田一良が金沢にいる間は、すべてさちが身近な世話をした。
妻のいない島田一良の世話をしているから、妾、ではない。が、正式な妻でもない。
しかし周囲は、純真無垢でお姫様のようなさちと、直情径行型の島田一良の取り合わせを、「似合いの夫婦」と見ていた。
さちにとっては、手続きなどどうでもいい。
島田一良と過ごせさえすれば、それがさちにとっての「幸」であった。
島田一良との交際は、四年前にさかのぼる。

明治七年（一八七四年）。
すべての話を、ここから始めたい。
何でも、九州の佐賀で、明治新政府に反発した人が乱を起こしたという。さちはその日のことを今でも覚えている。
その日金沢に降った雪は、股の高さまであって溶けず、その溶けない雪を興奮しながらかき分けて歩いていた男がいた。
すでに刀を差さぬ士族もいたが、男は腰の大小を、活きのいい魚の尾ひれのように羽ばたかせながら、ずんずんと武家屋敷の並ぶ町中へ進んで行った。
男はひどく汗をかいていた。汗が、顎から鼻にかけて生やしている自慢の髭にしたたり落ちた。
仲間たちに一刻も早く、佐賀の乱の知らせを持って行きたいが、その前に水を飲みたい。
屋敷の角に、見事な枝振りの松が見えた。
「おっ、長屋だな」
その松の屋敷の向かいから、下級武士たちが多く住む長屋がある。
男の住んでいる長屋とは方角が違ったが、
（同じ士族じゃ）
と思って、のしのしと雪かきのしてある長屋の前に歩いて行った。
「すまん、ごめんっ」
ひどく大きな声に反応したのか、長屋の前の屋根から、どっさりと雪が落ちてきた。

「うわっ」
男はまるで雪だるまのようになった、丁度その所へ、家人が出てきた。
「きゃっ」
まだ十六歳のさちだった。
大きな声がして表に出たら、雪まみれの髭面の大男が突っ立っている。
男は、雪も払わずに、
「私は島田一良と申す。水を所望致したい」
とぶっきらぼうに言った。
さちには不思議と、恐怖心が起こらなかった。
大きな茶碗に水を汲んで渡すと、島田一良はさも旨そうに、「ゴクゴク」と喉を鳴らしながら水を飲み干した。
「かたじけない。また、改めて御礼に参る」
そう言って島田一良はまた、のしのしと刀を羽ばたかせながら、雪道を歩いて去って行った。
数日後、再び来訪した島田一良は、
「御礼でござる」
と言って、捕らえた兎を二羽持ってきた。
その日はさちの家にとって久しぶりの賑やかな夕餉になった。
いつもは父とさちの二人きりの食事で、しかも父はずっと病のために寝たきりである。だがその

の日は、床を上げて三人で兎鍋を囲んだ。
「いやはや、兎めの逃げ足の速いこと速いこと」
病身の父も、無骨な島田一良の狩猟話に腹を抱えて笑い、さちも二人の様子を見ながら、心の底からうれしさがこみ上げてきた。
その日から島田は、病身の父親を一人で養っているさちに、なにくれとなく援助の手を差し伸べた。
カネ、ではない。
薪を割る、さちに縫い物仕事を持ってくる、病身の父親の話し相手になってやる。
さちは初め、年の離れた兄として、そして徐々に、兄弟ではない感情、自分では制御できない思いを抱くようになった。
会うたびに感じる、小さな胸の火照り。
さちは十七になった春の宵、兄と慕った男と、静かに熱く結ばれた。

2

島田一良は、明治維新前後の一時期、石川県士族の中心的人物であった。
幕末の加賀藩は、島田らに言わせれば、
「愚劣」

の一言に尽きた。

前田家に徳川の縁戚者が輿入れしている、ただそれだけの理由で、禁門の変では出兵を拒み、以後、「中立」という名の逃げを打ち、やがて消極的に薩長に与する。

そんな藩の方針にゆさぶられながらも下級武士たちは、多くが勤皇の旗印の下、倒幕軍に参加をした。

島田一良は、北越戦争に倒幕軍として参戦している。

(加賀藩は、たとえ佐幕でもいい、せめて長岡藩のように、見事に潔く戦うべきだった。それを「中立」などとぬかして、保身に走った姿は、醜い!)

加賀藩のような選択をした藩は、他にいくらでもあった。能力の無い者が生き残るためには、中立・傍観、そして「強い方に何となく味方する」しかないのだ。

それを「醜美」で言う島田一良は、政治の何たるかを知らない、あるいは判ろうとしない、純粋な男であった。

薩摩で桐野利秋がある種の尊敬を集めるのに似た、純粋ゆえの人望が、島田一良を時の人にしようとしていた。

明治七年(一八七四年)の秋、佐賀の乱は鎮圧され、士族たちの憤懣が頂点に近づこうとしていた。

「このまま指をくわえて、政府の言いなりになっていいのか!、我々の理想は、こんなものだったのか!」

金沢の私学校の講堂には、千名を越す士族たちが熱気をはらんで島田一良の獅子吼に聞き入った。

島田をはじめとする下級士族たちは、明治の世になってほとんど食うや食わずの有り様で、いったい何が「維新」されたのか、全くその恩恵にあずかっていなかった。

のみならず、武士そのものが消えようとしている。

武士の世が消滅してしまったのである。

消滅をさせたのは、薩摩藩出身の大久保利通に代表される薩摩・長州の藩閥政府だった。

「大久保は、江藤参議の首を刎ね、それを写真に撮り、江藤参議が囲っていた女のいる新橋に、ばらまいたというのだ。こんな人非人を政府の頭として戴いて、我等加賀武士は黙っていてよいのか!」

佐賀の乱を起こした江藤新平の首が刎ねられ、その写真が新橋に出回ったのは事実である。

が、配って歩いたのは、江藤憎しで凝り固まっていた警視庁の川路利良で、大久保利通ではない。

もっとも、川路は大久保利通の直系とも言うべき警察官僚だから、大久保も責任が無いとは言い切れないが。

「今こそ、武を以て起つときである。諸君の決起を要望して止まない」

島田一良は演説を終えた時、満足感をひしひしと味わっていた。

(加賀武士は起つ。必ず起つ)

いま目の前で熱い視線を自分に向けているのは、紛れもない千名を越す加賀武士団ではないか。
しかも、政府に対する憤懣は、加賀だけではない。
(これだけの人数がこの時期に決起すれば、必ず日本中で同調者が出る。そうすれば……)
島田一良は、佐賀の乱が五千人で決起し、すぐに鎮圧されたという事を、この時はまだ知らなかった。だからこそ、目の前に千人もの武士が集まれば、それだけで事は成功したかのような錯覚に陥る。
島田は、集まった全ての士族が、みんな自分と同じように悲憤慷慨しているのだと思っていた。そうとしか思えなかった。
しかし。
この集まりは『忠告社』という政治結社として成立するが、作った島田一良自身が脱退して、雲散霧消してしまった。
何故なら、議論こそ勇ましいが、いざ「決起を」となると皆、二の足を踏む。島田一良は怒りに全身を震わせて、ついに脱退を決意したのだ。
島田は、さちに、
「このままではいけない」
と言い続けた。
何がどういけないのか、十七のさちにはよくわからなかったが、しかし生活の実感としてなら、理解することができた。

父の病が重い。しかし、薬を買う、医者にかかる金もない。
幕府の時代には、毎年もらっていた家禄米が、決して多くはないが、三人の家臣と下僕を雇って余りあるだけのものは手にできた。
明治の世になって、家禄米の代わりに金禄公債という名の紙切れを受け取った。
公債、である。
つまり、利子で食え、ということだ。
大名なら何万円という公債を受け取って、しかも家臣団を養わないでいいのだから、利子だけでも十分に暮らせる。
しかし下級士族は、とてもやってはいけない。
さちは、そんな時、政府が斡旋している「授産場」の話を聞いた。
織物などの仕事をくれると言う。
その事をさちは、島田一良に話した。
「なにっ、『授産場』?。さちは、私が誰と戦っているのか、判っているのか!」
結ばれてから初めて、さちは島田一良に怒鳴られた。
しかし島田は怒鳴ってすぐ、
「すまん。縫い物仕事は私がちゃんと持ってくる。だから、政府の世話にはなるな」
静かに、諭すように言った。

優しく頼もしかった島田一良が、少しずつ変わっていったのは、明治八年の夏を過ぎた頃からだった。

島田一良は忠告社を脱退して新たに結社をつくり、四百名の同志を集めたが、政治というものは金がかかる。

島田一良は、政府に対抗するにはそれなりの力が必要で、その為には意には沿わぬが、金を都合して同志を養うことも必要だと、考えるようになった。

（一良様は、お変わりになった）

さちは決して口にはしないが、島田一良の微妙な変化を、敏感に感じ取っていた。

その変化が実際の形になってさちの前に表れたのは、明治九年の秋だった。

「さち、済まぬが、きょう入った針子の代金、私に貸してはくれないか」

武士を絵に描いたような人、それが島田一良だった。

決して嘘を言わず、虚飾を飾らず、常に誠意を以て雄々しく行動する男。

その武士の鏡が、いま、自分の針子仕事のお金を貸せ、と言ったのだ。

実はそのお金は、たまっている父の医者代として払う約束になっていた。そのことは無論、島田は知らない。

「わかりました」

とっさに、さちは返事をしていた。自分でもなぜ拒否しないのか、使い道を聞かないのか不思議だったが、島田のためならば何を犠牲にしてもいい、という感覚が、さちの判断をたやすいものにしていた。

それからは頻繁に、島田はさちの針子代を借用した。

前原一誠という人が、九州で続いた不平士族の反乱の後、長州で兵を挙げたことが伝わると、島田は再び決起のときと奮起して、同志を募った。

（四百名の仲間すべてが決起するとは思わない。しかしせめて、半分の二百名は参加してくれるだろう）

島田はそう読んだ。以前のように、人をすべて信じるということはなくなっていた。

しかし結果は、百名にも満たなかった。

島田はその夜、さちのもとに帰ると、針子仕事をしているさちの行灯の向こうで、一晩中泣き崩れていた。

3

さちは、針子代のほとんどを島田に提供していたため、父親の医者代が払えず、最初は着物を、そしてそれが無くなると大切にしていた櫛を、一本、また一本と売って行った。

残ったのは、母の形見の帯だけだった。

これだけは売らない、そう心に決めていた。

無論、母の形見ということもある。が、あの無骨でお世辞一つ言えない島田一良が、唯一誉め

てくれた帯なのだ。
父親の遺いで昔の上司の家に行く時に、さちはその帯を締めた。他に、よそ行きの帯がない。紅色の地に、見事な白い鶴が舞っている。
着替えを見ていた島田が、
「さち、それは本当に、お前に似合うね」
そう、言ってくれた。
以来、さちは東奔西走する島田一良が久しぶりに家に来る時は、必ずこの帯を締めた。
しかし、その帯も売らなければいけない所まで、さちの家の状況は逼迫していた。
そんな時、父のかかりつけの医者は、
「割のいい仕事がある」
と言って、ある豪商を紹介した。
それは最初、さちの針子としての腕を見込んで、豪商の妻や娘の着物を縫うという話だった。
呼ばれたのは城下町にある店ではなく、犀川を上って、立山の霊峰が美しく見える豪商の別邸だった。
部屋に通されしばらく待つと、現れたのは妻や娘ではなく、小太りの老人、豪商本人だった。
拒めば、おそらく拒み通せた。
しかしさちは、受け入れた。

島田一良は東京に行ったり、九州あたりまで出かけていて、さちが豪商のものになったことを、気付く様子はなかった。
豪商は、さちが島田一良の妻同然の女であることを知っていた。知っていて、この政商はスリルを楽しんだ。
島田から見れば、政府の御用商人であるこの豪商は、おそらく親の仇よりも憎いであろう。その島田の女を自分は抱いている。
女は金に窮している島田のために、自分から離れることは出来ないだろう。
金で女を買うだけなら、いくらでも出来る。
しかし、女が本来の意思とはまったく逆に、嫌な男と寝なければならないという状況を、豪商は楽しんでいるのだ。
だが豪商は、決して島田の名を口にはしない。
(おそらく、島田の女であることを、自分が知っているということが露顕すれば、この女は死ぬだろう)
何度抱かれても、いくら金を積むと言われても、さちは豪商の囲い者になることだけは拒絶した。
事は十日に一度。その時に決まった額を受け取る。これを守り通した。
そうして半年が過ぎようとしたある日。
さちの父が死んだ。

明治も既に十年。さちは十九になり、島田一良は二十九となっていた。

「鹿児島で西郷起つ」

島田のもとに知らせを持ってきたのは、島田が弟分として可愛がっていた長連豪（ちょうつらひで）だった。

「島田さん、ついに、ついにやりましたよ」

長は興奮気味に詳細を島田に語った。

長はこの年二十二歳。さちより三つ上だが、島田よりもさらに汚れをしらぬこの青年は、さちにとっても実の弟のような存在であった。

島田と同じ、澄んだ瞳を持った青年。

さちは、島田がこんな素晴らしい青年から慕われているのを、自分のことのように喜んだ。

「長さま、ゆっくりして行って下さいね。一良さまは、さちでは話し相手になりませんもの」

そう言うと島田も長も「カラカラ」と笑った。

久しぶりに見る島田の笑顔。

そして、全身から漲っている精気。

さちは、今度こそ、島田が本懐を遂げられるよう、心から祈った。

一〇〇万人。

明治初期の、失業した士族の数である。つまり、西郷の決起を歓迎した人数でもある。

もしもこの一〇〇万人が合わせて決起すれば、否、半分でも立ち上がれば、政府は瓦解した。

しかしそういう計算は、かつての島田一良の計算と同じ、机上の空論である。

西郷には人望があった。

会ったことの無い人までが、

「西郷は人物である」

と言う。

その西郷が起ったのだから、今度ばかりは自分の計算方法、つまり総数の半分は立つ、というのは、空論ではないような気が、島田はしていた。

「さち、すまぬ」

島田はその日から、金沢中の士族を説いて歩いた。そして、さちから借りた金を、使い続けた。

島田一良は、

「即時挙兵の後、京都を襲撃し、東京からの政府軍を迎え撃つ」

と叫び続けた。

加賀は再び、熱を帯び始めた。

人が集まる。議論が尽くされる。

島田は今度の今度こそ、と、成功を確信した。

しかしその確信は、西郷挙兵の知らせを受けた明治十年の二月からわずか二カ月ほど経って、ゆらぎ始めた。

またしても、議論ばかりなのである。

「今は既に、論ずる時ではない。行動すべき時である。鹿児島は、戦っているのだ。西郷軍はこの瞬間にも血を流しているのだ。こんな所で言い合いをしている場合ではない！」

島田は懸命になって、決起を促した。

しかし、結果は惨憺たるものだった。

議論をしている間に、西郷軍は敗れ、世に言う「西南戦争」は九月、終りを告げた。

今度は、涙も出なかった。

能登半島の同志説得中に、西郷敗れるの報を聞き、島田は力なくさちのもとに帰った。

さちは、紅色の地に、見事な白い鶴が舞っている帯を締めて待っていた。

「お帰りなさいませ」

島田は、ふと、間もなく二十歳になろうという、自分の愛する女に、今までに無い色香を感じた。

政治と戦争に明け暮れた、というよりも、政治と戦争をするための準備に明け暮れていて、ろくにさちの相手をしてやれなかったことに、島田はいまさらながら、済まない気持ちになった。

しかし、今日は何も話をしたくない。

(そうだ、せめて一言)

島田一良は優しく微笑みながら、

「その帯、やはり、いいね」

それだけ言うと、あとはさちが何を聞いても答えなかった。

帯を誉めたのが、島田一良のさちへのいたわりと感謝の言葉だった。

4

年が明けて明治十一年(一八七八年)。

さちが豪商の別邸から帰ると、予告なしに島田一良が戻っていた。

「おや、帯」

島田が、自分が帰ってくる日だけ、さちが鶴の帯をしていると思っていたのに、と言った。

「いえ、ちょっと父のお墓参りに」

そう言ってさちは誤魔化したが、何となく居心地の悪い言い訳になってしまったと、自分で感じていた。

その日の島田は、まるで出会った頃のように、優しく頼もしい男だった。

「東京で仕事が見つかりそうだ。警官になる」

そう言う島田を、さちは心から喜んだ。

「一良さまは、正義感のお強い人だから、きっと素晴らしい警官になられます」

さちの言葉に島田は微笑んで、

「そうだ、きょうは、さちに贈り物がある」

そう言ってさちを、奥の座敷に座らせた。
島田は懐から、粗末な木綿の包みを出し、さちに手渡した。
「まあ、何でしょう。一良さまからの贈り物なんて」
さちは驚いていた。
そういうことをする男ではない。しかし、疑っては悪いと思い、木綿の包みを受け取って開いた。
「あっ！」
それは、あの小間物屋で見た、金を雲に模した愛らしい輪島塗の櫛だった。
「どこでこれを？」
微笑む島田は、最初何も言ってくれなかったが、
「小間物屋の女将が、私をつかまえて店に案内されてな。『さち様がご執心だった櫛だ、苦労を掛けているのだから、買ってやれ』、と言うんだ。随分安くはしてくれたがね」
その夜、さちは久しぶりに島田に抱かれた。
三十になった島田の肉体は、はじめて出会った頃と比べ、ひどくやせ細ったように感じた。しかし、島田の情熱は以前とは比べ物にならないほど熱く、さちの心を揺さぶった。
「もう、苦労はしなくていい」
そう耳元でささやいた島田の言葉に、さちは一瞬、戸惑った。
（まさか、豪商とのことを知っていたのでは？）

そんな筈はない。もし知っていれば、島田一良はその事に耐えられるような男ではない。
この言葉はつまり、自分が東京で警官としてやっていくから、正式に所帯を持とう、ということではないのか。そう、さちは解釈することにした。
事実、翌朝になって島田は、
「これから東京に行く。落ち着いたら連絡をする」
と言って出かけたのだ。
ただ気がかりなのは、当座の資金だ、と言ってお金を置いて行ったことと、あれだけ政府に反対していた島田が、警官とはいえ、その政府に雇われることの矛盾だ。
だが、さちは信じることにした。
島田を信じることだけが、豪商によって汚されたさちの心を、支えてくれるような気がしていた。
そう、さちはもう、限界に来ていたのだ。その限界を見透かしたように、島田が自分を東京に呼んでくれるという。
（これを信じないのなら、私は死んだほうがいい）
さちは、ようやく訪れようとする平穏で、平凡な幸せを夢想した。そして、これから何があろうと、二度と豪商の所には行かない、と決めた。
しかし、さちのその決意は、大した努力を要さなかった。
島田が出かけた日の昼頃、犀川の河原で、首の無くなった豪商の死体が発見されたのだ。

さちは、下手人が島田でないことを祈った。
島田が罪人になるのを恐れたのではない。
島田があの豪商を襲ったとすれば、理由は一つ。
それは、反政府運動の一環として豪商を斬った訳ではなく、間違いない、自分との関係を知って、斬ったのだ。
（一良さまは、知っていたのか……）
調べれば、下手人はすぐにわかる。これから警官として奉職する人間が果たして、人を斬って行くものだろうか。
さちは、島田一良が買ってくれた櫛を取り出した。
そして、髪を解き、からすの濡れ羽色に櫛を通した。
櫛の歯に集まる髪に、心地よい圧力がかかる。
（一良さま）
さちは髪を梳きながら、（思うまい、思うまい）と懸命になって心に蓋をしようとした。一良が自分と豪商のことを気づいていた、そんなひどい現実を、さちは到底受け入れることは出来なかった。
平穏で平凡な幸せ。
なぜ神様はそんな小さな幸せすら、さちから奪おうとするのか。
だが、髪を梳けば梳くほど、さちの思いは真実に向かって衣を剝がされていく。

さちは自分でも気づかぬうちに、ポロポロと涙を流していた。
そしてついに心の衣は剝ぎ取られ、さちは悟った。
自分の汚れた身体を島田は許しておらず、だから豪商を殺したのだ、と。そして二度と自分のもとに島田が帰らないことを、確信した。

それから一カ月後の明治十一年五月十五日。東京で大久保利通が暗殺され、その下手人の首魁が島田一良であることが、金沢にも伝えられた。弟分の長連豪も一緒に襲撃に加わったという。
東京では極悪人として島田たちは処刑され、金沢では、島田たちは英雄になった。
さちにとっては、島田一良は極悪人でも英雄でもなかった。ただ、一人の男（ひと）、であった。
呆然と日々を過ごしていたある日、小間物屋の女将がやって来、一通の手紙をさちに渡した。
「島田さまから、預かってました」
島田は櫛を買った後、小間物屋の女将に手紙を託した。
それは、政治や戦争とは一切関係のない、愛する女に充てた手紙である。同志に託せるものではなかった。
「自分に何かあったら、さち様に、とおっしゃって」
その理由は、手紙に書かれていると、女将は島田から言われたという。
女将が帰ってから、さちは手紙を読んだ。
読み終えると、さちは着替えをした。

紅色の地に、見事な白い鶴が舞っている帯を締めた。
そして、島田が贈ってくれた小さな櫛を、髪に差した。
（一良さま……）
さちは手紙に火をつけると、短刀を喉元に充てた。
さちの遺体の側には、燃やされた手紙らしき紙が舞っていたという。そしてごくわずかな燃えかすの中に、さちの帯を誉めた言葉が書かれていたというが、百年以上も昔のこと、いまは確かめる術もない。

きもないさん

鈴木　昭三

「平三書留、平三書留」
続いて店の入口のガラス戸が、がたがた鳴りました。郵便配達にしては随分ぞんざいな振舞いですが、声の主は山下です。彼は小学校以来の口ぐせで、今以って平三の名は呼び捨てです。寝ていた平三はシャッとすててこのまま、はい、はいと返事を繰り返し、ガラス戸を開けました。
「けさは静かなもんだぜ。村中のばばあ共はみんな、もぬけのからだで」
山下は笑いながら、封筒の付箋に捺印しました。村の女性の会は今朝早く、二泊三日の関西旅行に出掛けました。かく言う山下の妻春枝も、平三の妻智代子も、ばばあ共の仲間に参加しているのです。
平三は白い封筒の改まった感じのする書留の赤い判と、その下の端のマッチ箱でも入っていそうな堅い服らみが、少しよう気になって裏返してみました。差出人は東京江東区で甲賀眞由美とありました。甲賀なら海軍航空隊での分隊士だった甲賀武の身内の者だろうと、すぐに察しを付

け、封を切りました。

この甲賀武は昔の海軍仲間でつくる二十二分隊会から、昨年の暮に、この秋亡くなったと知らせがありました。二十二分隊会では早速まとめて香典を送りました。封筒の文字から甲賀眞由美が若い女性とは思われませんから、多分武の奥さんで、香典返しが届いたのだろうと平三は考えました。

封筒の中からは、意外にもそれを服らませていた、和紙でくるんだお守りと、数枚の便箋が現われました。書留という事ですから、二つの中身ではこのお守りに意味があるのかなと、お守りを掌に乗せ改めて眺めました。

お守りの外側の布袋は四隅が擦り切れ、中身の黒ずんだ木のお札の角が露出していました。その袋の布地は、織りの重なった部分にだけは、恐らく素地の色だったらしい紫色がかすかに残っていました。総体的には、黒や茶の染みのついた黄土色と言った感じですが、本来は紫色の綾錦の袋だったと思われます。

裏は縦の縫い目が所どころほつれていて、ビニールテープで補ってありました。

平三は袋の表を眺めている中に、布地の真中あたりに縦横の金色の糸らしい短い線を見つけました。その線を爪先で何度もなぞってみると、どうやら五つの文字らしい事が分かったのです。平三は老眼鏡をかけると日向に出ました。五つの文字はようやく多岐利神社と読めたのです。多岐利神社とは、村では通称おたぎりさんで、平三達の氏神様であります。

驚いた平三は畳んだままの便箋を、急いで広げました。

先ず始めに時候の挨拶があり、夫武が被爆者手帳を持つ身で、かねてより恐れていた白血病で、昨年十一月に亡くなったとありました。この甲賀武とは昭和十九年十二月から翌二十年五月迄一緒でした。

その頃大津の滋賀海軍航空隊にいた平三達甲種十四期飛行予科練習生は、昭和二十年三月に突然繰り上げ卒業となりましたが、その後実際に飛行機を操縦する飛行練習生にはなれませんでした。京都府の福知山近郊の天田郡西中筋村と言う山村に転勤になり、ここで平三達に配られたのは、スコップ、ゲートル、地下足袋でした。村の東端を流れる由良川の、河岸段丘を平らに整地し、そこにマカダム式と称する、砂利に金網をかぶせ押し固める滑走路の作業にかり出されたのです。

平三達の寝泊まりするバラック兵舎の裏山には、川西航空機の地下工場があって、動員された福知山工専の学生達が、局地戦闘機紫電改を組立ていました。夜になると紫電改をマカダム滑走路に運び出して、轟音を響かせてエンジンの試運転をしていました。

平三達のここでの土木作業は、終戦直前の八月の初めまで続いたのです。毎日の労働で体だけは逞しく立派になったのですが、三月末と四月初旬と中旬の三回、新型特殊兵器の搭乗要員の募集がありました。これは所謂水中特攻です。平三達二十二分隊からは合計十二名が採用され、その場で二等飛行兵曹に進級して転出しました。殆んど十日置きに相次いだ特攻要員の募集は、平三達の攻撃機の操縦員の夢を無惨にも砕くと同時に、これからもくるだろう特攻の募集に脅えて、毎日が戦々恐々の連続でした。そんな雰囲気の中にあって、分隊士甲賀武は平三達の良き理解者

で作業の合間などで、特務士官や古参下士官の日を盗んで、分隊員達にはっきり言いました。本心を偽わってまで特攻を志願するな。お前達はあく迄も飛行機の操縦員として教育されたのだ。陛下に尽す道はこれ以外は無いと言い聞かされました。彼は拓大出身の予備学生で、懐かしい姿婆の匂いを残していました。特務士官や下士官達の頑迷さに翻弄されていた平三達には、当面する死の恐怖についても女めしい等とは言われずに、語り合える上官でした。

本日ここに送らせて頂きましたお守りは、武の海軍関係の遺品の中にございました。汚れもいたみもひどく、袋の文字も判読できず、後で木のお札で初めて、多岐利神社というお名前を知りました。かわったお名前で、それとなく親戚や武の知人に尋ねましたがどなた様も知りません。氏神様の富岡八幡宮にもお教えを乞いましたが、多岐利とは九州方面の女神様ではと、それだけでございました。わからないと余計に気になるものでございます。もったいない事ではございましたが、お守りの中を改めさせて頂きました。先程申し上げましたように、多岐利神社の焼き印のある木のお札の他に、とんでもない恐ろしいものが現われたのでございます。桐油紙らしき四糎長さの、ごく細い筒状のものを、鋏の先で切り開きますと、厚手の和紙のこよりのような、爪楊枝三本ぐらいの太さの、堅く巻いたものが出てきました。表面にかすかに、墨の文字らしきものが、透けて見えました。

それを机の上で慎重に巻き戻したのでございます。すると、二糎から三糎ぐらいの、かなりの量の縮れた毛髪が、和紙に平らに貼りついていて、私の吐く息に、その一本一本が、まるで

生き物のようにうちふるえるではございませんか。私は思わず大声で悲鳴をあげてしまいました。暫くして気をとり戻し、再び丸まってしまった和紙の毛髪を恐る恐る指先で一方に寄せました。細い筆の文字がありました。

桑地郡　小田郷村　宮本智代子
昭和四年八月二十六日生

私は呪いにかかったような恐怖心で体が震えだしました。見ているだけでも気味悪くて、すぐに捨ててしまおうかと考えましたが、咄嗟に捨てる場所が思いつきません。物が物だけに、後の祟りがこわくなりました。それに武の身の廻わりに、かような物があった事が、嫉妬以上に、不潔で不快でございます。二、三日たつと、今度はこのお守りのいたみようは、何か特別の理由があってのことではないかと、武から聞いた話を思い出してみました。

昭和二十年八月、武が予科連達の特攻斬込隊と共に乗り組んだ漁船が、日本海で米機に撃沈され多くの死傷者を出しました。

武も瀕死の重傷を負いながら漂流中を、陸軍暁部隊に救助されて、そのままトラックに乗せられ中国山地を横断して、原爆二日後の八月八日の広島市内を走り廻りました。ここで二次放射能を浴び、終戦を岡山の仮病院で迎えたのでございます。この間を、あのお守りは武の数奇な運命を共にしながら、守っていて下さったのだと思います。毛髪の納めてある意味合いなどは今更知りたくもありませんが、この際私と同じ昭和四年生まれの宮本智代子さんを探し出そうと心に決めました。お守りも元通りに袋に納めたのでございます。

一週間前、古新聞の整理中の事でございます。武が購読していました海軍関係の海朋という新聞の本年の元旦版に各県別の会員の賀正の挨拶欄がありました。その中に宮本智代子さんと同じ桑地郡の川村平三様のご尊名を発見いたしました。而も軍歴に甲飛十四滋賀空とありました。武の遺品の中から滋賀空十四期の分隊員名簿を調べさせて頂きました。なんと川村様は宮本さんと同じ小田郷村ではございませんか。早速に川村様にご連絡させて頂いたわけでございます。もう半世紀も昔の事でございますが、宮本智代子さんのご消息をお分りでしたら、例のお守り袋、ご迷惑は重じゅう覚悟の上、よしなにご処分の程お願い申しあげます。尚、厚かましくは存じますが、宮本さんと武との当時の関係、お分りでございましたら、お教え頂きたく存じます。

読み終えて平三は、大きく溜息をもらしました。全く忘れ果てていた多岐利神社のお守りが、半世紀もたって平三の手許に届いたのです。驚いたことに、現在妻となっている智代子の毛髪がその中に入っていたのです。平三は夢の中にいるような気分でした。平三はともかく、自分の出征の時の多岐利神社のお守りについて、思い起こしてみました。

平三の出征は、昭和十九年三月二十九日の朝でした。家の前には近所の人達が日の丸の小旗を持って見送りに集まってくれました。出発の時刻も迫り、平三の送別の挨拶が始まると、多岐利神社の神主の奥さん、山向井若女が、息せき切って駆けつけました。若女を待っていた平三の母と二人で、平三の両脇から、国防色の中学校の制服のボタンを勝手にはずし、襟元を広げ、多岐

利神社のお守りを納めた小さな紫色の巾着を、シャツの下に押し込みました。若女の掌は膚が荒れていて、平三の首筋や胸に触れる度に、ペーパーでこすられるような痛さでした。彼女は本職が助産婦で、七十歳を越した当時も現役でした。彼女の取り上げた村の男児で出征する者には、霊験あらたかな多岐利神社のお守りを必ず授けたのです。若女は平三の母に告げたそうです。

「平三みたいな飛行機乗りは、命がいくつあっても足りやせん。おたぎりさんはちゃんと平三を守ってくださるから、安心しな」

平三は入隊してから、巾着の中にはお守りが三つ入っている事に気づきました。

さて、平三がこのお守りの一つを甲賀武に渡したのは、昭和二十年五月の始めだったのを思い出しました。

その日は朝からの霧で十米先は全く見えませんでした。ここ丹波でも由良川流域の川霧は今でも有名だそうです。霧は立ち籠めると言いますが、実際は絶えず流れていて、上下左右斜めと方向を変えます。霧の粒も大きくて肉眼でもはっきり見えました。

平三達二十二分隊員は他の分隊員と共に、山陰線石原(いさ)駅のプラットホームに並び、略帽も作業服も、霧で雨のようにびっしょり濡れながら、甲賀分隊士が分隊員の一人一人に別れの言葉をかけながら、歩いて来るのを待っていました。霧の中からは、間近かに雄雉子のけたたましい鳴き声がしました。今朝の分隊員は霧のせいばかりではなく、気分は滅入っていました。今まで三回の特攻は、飛行機ではなく、特攻兵器ではあっても曲りなりにも搭乗員と名がついていました。今回の斬込みは、志願ではなくて、どのような理由からか、命令で決まりました。兵器はごぼう

剱一本で、敵陣に突入するらしいのです。当時の海軍がいみ嫌う陸戦で、その上特攻が付く以上は、これは全く玉砕そのものです。下士官の一人が、平三達分隊員をさも軽べつしたようにほざきました。

「ええ、甲種予科練も落ちたもんだよ」

出発を待っている、二十一から二十六分隊迄の中から選ばれた、約三十名の斬込要員に対して、この下士官の言葉は甚しい侮辱であります。死者に鞭うつに似ています。更にこの特攻要員の引率者が、日頃特攻を批判していた甲賀分隊士に決まったのです。分隊長や下士官達の作意を、平三達は噂し合いました。

甲賀分隊士は平三の前で停ると、改めて平三の姓を呼びました。彼はこの五月一日に少尉に任官したばかりで、三種軍装の襟章の桜が、霧に濡れ、銀色に輝いていました。平三は咄嗟に首から吊るしていた巾着の中の、多岐利神社のお守り一つを、摘まみ出しました。

「分隊士、餞別です」

甲賀分隊士は一瞬、驚いた風でしたが、お守りを胸のポケットに納めると、飛行兵長の平三に真顔で挙手の礼をして言いました。

「靖国神社で会おう」

この言葉は当時の流行語でした。

京都行きの列車のデッキで、甲賀分隊士は最後の笑顔を見せました。甲賀眞由美からのお守りは、この時のものだったのです。

このお守りの他に、未だ二つのお守りが倉にある筈で、平三はこの際三つ一緒に見ようと思い立ちました。

平三は倉にある長持の蓋を何年ぶりかであけてみました。この長持ちの中には、昭和四十年まで生きた母の志まが、古い書類や手紙などから、子供の学用品に至る迄、使用したり関係の深い家族の名に、簡単なメモを記した絵符をつけ、木綿の風呂敷に収めてありました。例えば父正平の場合、彼は生来の筆まめで、思いつくままに書き留めた日記や感想文などを、志まは根気よく年代順に纏めました。

当時は戦争中で、日記などと称しても、あり合わせの藁半紙や障子紙の切れ端だったりで、それをこよりで綴じました。まあ大福帳の体裁で、志まの筆で、村内一日瞭然帳その一などと表紙をつけてありました。風呂敷の絵符には、正平、瞭然帳、昭和何年から何年と記してありました。この一日瞭然帳は、正平が亡くなった昭和三十五年まで続きました。

志まは平三に事あるごとに、口癖のように言い続けました。

「平三や、たまには瞭然帳を読んでおくれ。昔の事、村の事、我が家の事、それにお前さんの事、なんでも書いてあるだよ。一読すれば小田郷村の物知り博士さ。読まなきゃ、罰が当たるよ」

長持の中は、正平瞭然帳の絵符の付いた風呂敷包みが、中ば以上を占領していて、その傍に押しやられたように平三海軍の包みがありました。平三海軍を持ち上げようとした時、正平瞭然帳も一緒に摑んでしまいました。それは昭和三十二年から三十五年と絵符に記され、正平の最晩年のものでした。その頃の正平を知りたくなり、二つの包みを持ち出しました。

平三は部屋の窓際の、机の前に座ると、平三海軍の風呂敷包みを広げました。東郷元帥や乃木大将の肖像切手の付いた葉書や封書や、朱文字の軍事郵便の判のあるものなどがかなりの厚さで重なり、一番下の底の方に、目ざす巾着がありました。

平三は巾着から紫色の織りの荒い綾綿のお守り二つを、机の上に置きました。海軍での約一年半の平三の汗と脂が染みこんで、少しよう汚れはありましたが、多岐利神社の金文字は未だ目新しく輝いていました。

平三は先ず痛みのひどい甲賀眞由美から届いたお守りを開けました。多岐利神社の焼印の木のお札を机の上に置き、次いで擦り切れて外からもすけて見えた筒状の桐油紙を出しました。

甲賀眞由美の補強したビニールテープを、鋏の先で慎重に切り裂きました。棒のように固く巻かれた桐油紙と中身の和紙とを、両手の指先でその巻きを戻しました。

現われた毛髪は手紙通りに、和紙にへばりついていました。それは真っ黒ではなく、やや茶がかった太めの縮れ毛で、板状にはりついた一方の端は、櫸の枝先のように弧を画いて広がり、他方の端は切り揃えたような感じでした。甲賀眞由美の手紙にもあったように、毛髪は本数が数え切れない程の多さでした。

和紙の巻き癖を片手でおさえ、指先でそっと広げました。

桑地郡小田郷村　宮本智代子　昭和四年八月二十六日生

手馴れた毛筆で、やや走り書き風の小さな文字でした。

平三は暫く見つめている中に、うーんと一声うなりました。毛髪も署名の文字も半世紀以上も

経っているとは言え、妻の智代子の今のものとは明らかに違っていました。

続いて巾着の二つのお守りの中身を取り出してみました。やっぱり棒状の桐油紙に毛髪が納まっていました。

桑地郡春桐村　染葉良子　昭和二年四月五日生

その毛髪は宮本のよりかなり細く、光沢があって、縮れはなく、しなった釣り竿のように湾曲していて、数は五本でした。

桑地郡駒沢村　山上あき　昭和二年十月十日生

毛髪は黒く細く、その上ひどく縮れ、一円のアルミ貨ぐらいの面積の中に、毛糸のように絡み合っていて、正確な本数は分りません。恐らく五、六本ぐらいだと思われます。

平三は染葉良子、山上あきの二人の女性を全く知りません。平三の出征の朝にこのお守りを授けてくれた山向井若女も、母の志まもお守りについては何も話しませんでした。

平三は虫眼鏡で三人の毛髪を覗いてみました。肉眼で見たのとさして変わりはありませんでしたが、染葉と山上の毛髪には、その片端に点のような白いものが、かすかに附着していました。平三はそれを毛根ではないかと想像しました。無理に引き抜いたと考えれば白い点は根に当ります。抜く時の痛さを考慮すれば、本数の少なさも当然の事だと思われるのです。

宮本のは、本数も多くて、その毛の先と本もはっきり区別がつきました。本の方は束ねて刈り取ったように揃い、白い点などは見当りません。この夫ぞれの毛髪は、部屋の中の空気の流れにも、平三の吐く息にも敏感に反応して、繊細に動くのです。それは甲賀眞由美の言う通り、全く

生きもののように見えるのです。平三は三人の女性と向い合っている様な錯覚にとらわれて緊張してしまい、しまいには少し息苦しくなりました。甲賀眞由美は気味悪さを感じたようですが、平三は毛髪が何かを訴えている様な気がしました。

平三は毛髪を夫ぞれのお守り袋に入れて、元の古巣の巾着に納めました。

「ありがとうございました」

平三は極く自然に、人間に対するようにお礼の言葉が口をついて出ました。

元来三つのお守りは、死の確率の高い飛行兵の平三一人の命を守る為のものだったわけです。これを授けてくれた山向井若女は、平三の危機を三回ぐらいと計算したのかも知れません。所が三つの中の一つ、宮本智代子のお守りは、甲賀武に渡してしまいました。このお守りは彼を守ってくれたのだと思います。

平三を守ってくれたのは、染葉良子と山上あきの二つのお守りになるわけです。一年半の海軍生活の中で、危機は二度あったと、平三は今でも、そう思っております。

その一つは、昭和二十年五月で、斬込特攻の甲賀武と別れたすぐ後でした。本隊の滋賀空から転勤して来た兵員の輸送にかり出された時でした。兵員満載のトラックの荷台の最後尾の囲いの縁に平三はしがみついていました。

トラックは西中筋村の由良川の橋を渡り、川添いの道路が大きく右にカーブする所で、前輪が路面から川の方にはみ出てしまいました。車体の床は路面に激突し、その反動で荷台の兵員も平三も宙に投げ飛ばされました。トラックはそのまま、飛ばされた兵員と共に二十米下の由良川の

淵に落下しました。

二十五名の乗員の中で二十名近くの死傷者がでました。平三が宙に舞って、落ちた所は、トラックのいなくなったばかりの道路上で、而も兵員達の衣嚢の上だったのです。無傷だったのは平三を含めて五名だけでした。

二つめは、同じく二十年六月でした。暴風雨の接近で、平三達二十二分隊の課業整列していた広場は、雨雲が低くたれこめ、その雲の中からは敵味方不明の爆音が絶え間なく聞えていました。突然あちこちの拡声機から、空襲警報発令、総員退避の号令が鳴り響きました。隣にいた整備の雁部隊は、平三達に退避、退避と叫びながら近くの林や防空壕に走り始めました。二十二分隊だけは、午後の課業の予定を聞かされていました。雲の切れ目から超低空のグラマンが二機、横に並んで平三達の隊列めがけて機銃掃射をしかけました。一機のグラマンの操縦士は風防ガラスをあけていて、サングラスの顔には白い歯がのぞいていました。百五十名の隊列は乱れ、グラマンの反転してくる数秒間に、三十米離れた桑畑目ざして一目散に駆けこみました。

再びグラマンの爆音で、空気の振動は物体のように激しく平三の全身を打ち、銃弾の列は、平三の傍の桑の老木を次ぎ次ぎに裂きました。畝のくぼみに並んで伏せていた中年の整備兵が、泥のはねた平三の顔を見て、うふっと声を立てて笑いました。続いて二回めの爆音が近づき、彼は笑ったまま背から撃ち抜かれて、泥まみれの作業服の上衣の裾から、内臓が赤い蛇のように流れ出ました。この整備兵と同じ列で伏せていた兵士達の殆んどが負傷しました。彼等を襲った弾列は、平三からは僅か二十糎ぐらいしか離れていませんでした。

グラマンが去っても、平三は暫くそのままいました。傍で呻吟する負傷兵の身の廻わりには、肉片や血が飛び散り、腸内から流れ出た食物や糞便などの混ざった異臭がただよい、平三は嘔吐をくり返しました。雁部隊の兵士が担架を持って、死傷者の収容に現れた時、一発の銃弾も受けていない平三まで同じ様に運ばれてしまいました。

今朝の甲賀眞由美の手紙は、平三には思いもよらぬ所からくらった不意打ちのようで、久しぶりのショックでした。平三は上体を後に倒すと、目を閉じました。手紙に触発され、予科練志願の頃の事が、色いろ蘇りました。

志願に大反対だった正平は、連日翻意を平三に促しました。平三は正平の願いを聞き入れませんでした。

「おれはもう直き死ぬ体だ。平三までが死んだら、この川村家は、どうなるんだ」

結核だった正平は興奮すると顔を真っ赤にして咳き込みました。正平四十五歳の時でした。後年平三も息子を持つようになって、正平のやる方なかった憤懣を察する事が出来ました。平三は正平の包みに手を伸ばしました。

村内一日瞭然帳、その七十。表紙をめくると、次は正平の右肩上がりの癖字の罫紙でした。

今夕小学校教頭村上氏現ハレ　町村合併ニ伴ウ村内分校廃止ニテ　瓜カ崎分校取リ壊シ中　教員室ノ戸棚ヨリ出シ生徒ノ綴リ方アリ目ヲ通スモ一興ナラント置キテ帰レリ

この罫紙の下に子供の文字の原稿用紙が綴じてありました。

「おかあさん」　　岩間十九

先生のくれた題はおかあさんで、母のない者はおとうさんでもよいとゆわれましたが、ぼくはかあちゃのことを書きます。かあちゃは二年前、東京のおやくにゆきました。みかわ島とゆう所で汽車がひっくりかえり大ぜいの人が死にました。しんぶんにも出ました。それから一しゅうかんして、ちゅうざいさんのしらせで、かあちゃが死んだことをしりました。この間となりのひろしがゆいました。

「とくのおっかさは、きもないさんだで早く死んだだよ」

うちにかえって、おとっちゃにきもないさんてなんずらかとたずねてみました。おとっちゃはおこりだしてゆいました。

「そんなたわいもないことゆったやつは、だれだ」

ぼくはおっかなくなり、外に出てひろしに聞きました。ひろしはきょねん死んだおばあだとゆいました。きんのうお宮のそおじでねぎさまにきいてみました。

「きもないさんてなんずらか。どうしてかあちゃは早や死にしたずらか」

「うーん。とくよむかしきいた気もするが。とくがおとなになったらおもい出すよ」

ねぎさまはへんなことを答えました。かあちゃは汽車で死んだだに、なぜきもないさんだで、早く死んだってゆわれたのですが。先生おしえてください」

余白に赤インクで女文字の批評があります。

「先生はきもないさんなんて、はじめて聞きました。ほかの先生がたにたずねても、だれもし

りません。ひろし君のおばあさんはなにかかんちがいをしていたのでしょう。

山下」

きもないさんというおかしな言葉を戦後、平三は正平と志まの二人の話で耳にした覚えがありました。その時は意味は分りませんでした。

岩間十九の母親の死は、単なる偶然の事故死ではないようです。十九の父親、隣りのひろしの婆さん、おたぎりさんの姻宣さんの三人は、母親がきもないさんと言う名のもとにいつかは死ぬ運命にあった事を知っていた風です。綴り方で女文字での批評している山下は、郵便配達の山下の妻春枝だったと思われます。春枝は小学校の教員で、たしか瓜が崎の分校に勤めていた事がありました。岩間十九の綴り方が分校の戸棚にあったと言う事は、十九に返さなかったわけで、その文中にあったきもないさんが、分校の教員の間で話題になり、誰かが何かの参考にと、保管して置いたのだと、平三は考えました。平三はお守りの三人が気掛りになりました。瞭然帳の正平の晩年のものより、昭和十九年三月二十九日前後のものを見たいと思い、長持から昭和十八年から十九年に跨がるその三十四を見つけました。

吾等夫婦ノ説得懇願モ空シク　本日平三遂イニ海軍第十四期甲種飛行予科練習生トシテ　奈良県山辺郡丹波市町ノ三重海軍航空隊奈良分遣隊ニ入隊セントス　私情トハ申セ　敗色濃厚ナル戦場ニ　未ダ稚キ平三ヲ送リ出スハ不本意ニシテ　身ヲ切ラルル思イナリ　今ハ只祈ルノミ

多岐利神社の山向井若女刀自並ビニ愚妻志まノ努力ニ依リ頂戴セシ献髪ノ　御霊移シノ効アラタカナルヲ　隣リ町ノ女学校生徒　四年生染葉良子　山上あき　二年生宮本智代子ノ三嬢ニハ只只深謝　御礼ノ言葉ヲ知ラズ　坐シテ傍観スルノミノ己ガ身ヲ恥ズ　今朝ノ多岐利神社ノ御霊移シ　密ナリト雖モ　万ガ一他人ノ知ル所トナリシ時　三嬢ノキモナイサント　後指ササルルコトナキヲ祈ル　キモナイサンハ誤解ニシテ悪罵ナリ　過ギシ日露ノ役ニ　郷土ノ連隊緒戦ヨリ苦戦ノ連続　カノ橘大隊長モ戦死セリ　ナレドモ小田郷村出身ノ兵士五名全員　五体満足ニテ凱旋ス　之偏エニ　多岐利神社ノ多岐利姫命ノミタマヲ宿セシ毛髪ノ御加護ノタマモノナリ　コノ戦役中　村内ニ於テ　偶二嬢結核ニテ没ス　村内一部ノ口サガ無キ無分別ノ輩　妄リニ曲解ナシ　亡クナリシ二嬢ハ献毛ノセイナリ　己ノガ生命ヲ毛髪ニ託シテ　兵士ノ生命ノ身代リトナリシト村民ニ吹聴ス　生キナガラニシテ生命即チ肝ヲ失フ故ニ　キモナイサンナリト　生還セン兵士五名ナレバ　二嬢ハスデニ亡ク後ノ三名ノキモナイサン　余命イクバクモナカラント　無知蒙昧無礼ナリ　多岐利神社の御神体ハ姫神様ナリ　荒ブル武運ノ男神ニアラズ　子ヲ思ウ御慈悲ノ御心ハ　神ニシアレバ　人ノ母親ノソレニ　イタク勝レリ　日露ノ役ニ兵士ノ所持セシ毛髪モ　平三ノ頂戴セン三嬢ノ毛髪モ　姫神様ノミタマノ　御宿トナレリ

正平はここできもないさんの存在を否定しています。毛髪は既に元の女性とは縁が切れていて、宿っている魂は、多岐利姫の命（みこと）の魂だと言っていますが、岩間十九の婆さん流に言えば、染葉、山上、宮本の三人はやっぱりきもないさんと見られても仕方ありません。

平三はこの際、宮本智代子こと妻の智代子には内緒で、染葉と山上の二人の消息を確かめようと考えました。それには、戦後桑地郡内の郵便局と小学校に勤めていた山下夫妻に頼むのが一番手っ取り早いと思いつきました。

夕方、平三が一人晩酌をしていると、村の診療所の医師から電話がありました。一週間前の胃の検診の結果が、予定より一日早く分るから、明日来るようにと言いました。診療所で胃カメラを購入して、最初の患者が平三でした。どうせお義理の診察でしたから、大した事もあるまいと、平三はビールを飲み続けました。ともかく今日一日は、精神的に重い日だったと、平三はつくづく感じました。

翌日平三は村の診療所の診察室のモニターの画面の前で、いとも簡単に医師に胃がんを告知されました。医師は意気消沈した平三の肩を何度もたたきながら、早期発見だから、心配しなくてよいと慰めてくれましたが、手術は早ければ早い程よいと、当り前の事を言いました。平三は妻が明日旅行から帰るから入院の事は、二人で相談して返事すると答えました。早期発見は運が良かったとしてもがんはやっぱり重大事です。平三は診療所からの帰り道、巾着に納めた三つのお守りはもう、平三を守ってはくれないのかと、薬にもすがる思いでした。旅行から帰った智代子に診療所でがんを告知された事を敢て淡たんと平三は語りました。智代子は予期に反して、驚きもせず、日常の会話のように受けました。平三には意外でした。

「おれは冗談を言ってるんじゃあないぜ。がんだから、死ぬかも知れんのだぞ」

少しいきり立った平三の言葉をさえぎるように、智代子は大丈夫よと笑いながら、話し始めました。要約するとこんな話でした。

今朝京都の宿を出て、青蓮門院御所の前あたりでバスを待っていました。すぐ近くに、日本人の人名を網羅したかの様な、大きな板のおみくじがありました。平三と智代子の名前のおみくじを買いました。平三は大吉で全てよしで、この分なら、胃の検診の結果もよいとひと安心でした。彼女自身のは余り芳しくありませんでした。すると、不意に二人の雲水姿の尼僧が彼女の前に現われて、その年かさの尼僧が、柔和な笑みを湛え、どこのお方か存じ上げまへんけど、えろうご長寿でと言うと、智代子がびっくりしている間に、二人は足早やに智恩院の方向の、徘徊する観光客の波の中に姿が消えたそうです。隣りにいた仲間が、おみくじのさくらかもと笑ったそうです。智代子は帰りの名古屋で昼食時に、村の診療所に電話をしてみました。明日の主人の結果は、どんな具合かと尋ねてみました。医師はもう分っているよ。がんはがんだけど早期だったから、手術をすれば百とは言えないまでも九十九パーセントは大丈夫と請け合ってくれたそうです。

「だから、大丈夫、大丈夫って言ってるの」

平三はその三日後に、隣町の病院の大部屋に入院して、それから一週間は胃カメラを手始めに検査の連続でした。智代子は洗濯物や身の廻り品を持って、毎日一時間ぐらいいてくれました。平三は自分の病気の先き行きは勿論心配でしたが、智代子には言えないお守りのこと、きもないさんのことも頭から離れませんでした。山下が見舞いに顔を出してくれるのを願っていました。

入院十日目の午後、付き添っていた智代子と入れ違いに山下が初めて現われました。平三は同じ階のティールームに彼を誘いました。

平三は先日山下に配達してもらった甲賀眞由美の手紙から、宮本、染葉、山上のおたぎりさんのお守りのこと、父正平の一日瞭然帳での、岩間十九の綴り方、正平のきもないさん論まで一気にしゃべりました。

「今日は平三の遺言を聞きに来たみたいだ」

山下は笑いながら、きもないさんに就いて、いつだったか彼の妻の春枝から聞いた覚えがあると言いました。それに戦時中の女学校の動員先の工廠の寮では、二年生の春枝と智代子は四年生の染葉と山上と同室だったそうです。彼女達の出身地の春桐村と駒沢村の郵便局には山下が若い頃勤務していた事もあるから、昔のつてをたぐれば、二人の消息はすぐに分るつもりだと、よい返事をしてくれました。

それから二日後の事でした。担当の若い医師が改まった口調で平三に言いました。

「あなたの検査は全て終了しました。手術に支障をきたす箇所はありません。明日の午後予定通り手術を行います。今夜家族を病院に呼ぶ事。今日と明日は安静な気分でいること。夜は睡眠剤を出します」

いよいよ来るものが来たと、平三は智代子に電話して廊下に出ると、山下が遠くから手を上げました。平三は山下とティールームのソファーに並ぶと、ちょっとおどけて切腹の真似をしました。山下も一瞬表情をこわばらせ、後はなんども頷いてみせました。平三は山下の表情から、安静な気分になれない話を持って来た様な予感がしました。

「この間の岩間十九の綴り方、赤インクの批評は、やっぱり春枝だったよ。きもないさんは分校

でもセンセーショナルだったそうだよ。年配の先生の言うには、きもないさんは、名前自体が誤解だって。その先生はおたぎりさんの禰宣さんに会って話を聞いたそうだよ。禰宣さんは、村の衆が勝手におもしろ、おかしく歪めた作り話で、多岐利姫の命を侮辱するもので許せんと怒ったそうだよ。お前のおやじの説と同じだよ」

山下はここでゆっくりと唇をなめました。

「ところでと、染葉良子、山上あきの二人は、工廠の防空壕で、死んでいたよ」

平三は息をのみました。山下の折角の前置が、とたんに空虚な言葉に思われました。

「二十年の六月で、直撃弾だったんだ。数十米四方に飛び散った三十人の女学生の、肉も骨も作業服も、血に染まった石も土もみんな、スコップで寄せ集めて、茶毘に付したそうだよ。他の壕で命拾いをした智代子さんも春枝と泣きながらそれを見守ったそうだよ」

昭和二十年六月は平三がグラマンで恐い思いをした月です。岩間十九の婆さん流の見方をすれば、平三は染葉と山上の二人の生命即ちきもを糧として、生きていたわけです。知らない事とは言え、この半世紀余りを無頓着に、のほほんと送った人生の、とんでもない辻闘さを、どのように償ったらよいものかと、考えただけでも身震いしてしまいました。

「平三はきもないさんに取りつかれてるな。あの壕の中で死んだのは、染葉、山上の二人だけじゃないぞ。あの工廠じゃ、女子挺身隊員だけでも二千人近く死んだそうだぜ。くどいようだが、あの二人だけが特別に平三の為におかしな宿命を背負って死んだとは思えないよ。しっかりしてくれよ平三」

翌日平三の手術は予定通り済みました。

手術後も順調に回復し、食事も五分粥になった頃、山下春枝から分厚い封書が届きました。要点だけ記してみます。

昭和十九年三月初旬、山向井若女が女学校の動員先の工廠に、献毛の要請に現われました。寮の春枝の室では、献毛できたのは四年生の染葉良子と山上あきの二人だけで、二年生の宮本智代子と春枝の二人は奥く手で、できませんでした。二人は兵隊さんのお役に立てないと泣きました。舎監の若い女教師の遠山先生は、心配しないでと言ってくれ、献毛の件はそれで終ったと今迄思っていきました。

所が今日友人の話では、その後があったのです。遠山先生は山向井若女を、寮の舎監室に呼び入れると、自分でモンペを下げ、私も処女ですと、手にした鋏みで毛髪を一気に切り取ると、和紙に二人の名前と、生年月日を毛筆で記したそうです。戦後遠山先生は上京し、安保闘争では積極的に活動したそうです。

昭和三十六年一月、闘争仲間だった彼氏と冬山で結婚式を挙げるんだと、同僚八人も谷川岳に出掛け、天候急変で皆夫ぞれビバークしていた時、先生と彼氏の二人だけ雪崩にやられたのです。同僚の八人は無事下山し、春になり、何んとかの倉沢に二人の捜索に出掛けたのですが、発見できず、その後も見つからないで、二人はそのままです。同僚の一人は、雪崩の直前にぱーんという音を聞いたそうです。遠山先生の実家は神奈川県の秦野で、姉が一人ですんでいると聞きました。

春枝は親戚の用事を兼ね、近日中に亭主と二人でその実家に寄る積りだそうです。

平三は春枝の手紙で、不審を抱いていた宮本智代子の毛髪と署名の謎が解けました。

春枝も智代子と同じ様に、言うなれば、きもないさんもどきだった事も分りました。

手紙から五日日に山下が病院に現われました。平三は山下をティールームに誘いました。

「遠山家は昔煙草を栽培していたそうで、あのあたりでも資産家だったそうだよ」

山下が撮ったという写真には、農家の立派な門口に老女が一人写っていました。

「遠山先生の姉で、九十歳だって。春枝が彼女に大きな声で献毛の話をしたんだよ。彼女は耳が遠いのか、目はあらぬ方を見て聞き流している風だったよ。帰るおれ達が庭に出て車に乗ると、門口で見送っていた婆さんが、突然駆け寄ってきて、車のドアのガラスを掌でたたきながら、お願い、お願いって、声を張り上げたんだ」

山下は急に話をやめました。ティールームの入口には、顔馴染みの村人が数人、こちらを向いて立っていました。山下は平三の肩をたたいてソファーから立ち上がり、どうぞ、どうぞと村人に声を掛けて部屋を出ました。

平三の退院がまじかになると、午後一時からの面会時間を待ち構えていたように、見舞客が続き、その応対での同じ言葉の繰り返しに智代子も平三も全く疲れてしまいました。見兼ねた看護婦は機転を利かせて、平三の顔に酸素マスクをつけてくれました。

四時を過ぎ見舞客は途絶え、智代子も帰りました。平三は五時半の夕食迄ひと眠りする積りで目を閉じました。

ふと人の気配を感じ目を開けると、平三のベッドの足の方向に立っている、七十歳中ば過ぎの見知らぬ男が、頭を下げました。襟足も、上げた四角な顔も日焼けしていて、膚の小皺が黒く光っていました。平三はあわててベッドに身を起しました。男は仁義でもきるように右手を前に出し、そのまま、そのままと平三に声を掛け、脇に黒鞄を挟んだ左手で丸椅子を引きずりながら、平三に近づきました。

彼は丸椅子に腰を掛けると、畳み皺のついた紺のスーツのポケットから、御見舞と印刷され、名前のない袋を平三の膝頭あたりの毛布の上に、黙って置きました。

「お初にお目に掛かります。この度はご入院で大変でございましょう。私、春桐村の染葉虎太郎と申します」

張りのある大声で、部屋の患者達が一斉にこちらを向きました。染葉と聞いて、平三はこの大部屋ではまずいなと心配になりましたが、染葉虎太郎はすでに、抱えていた黒鞄を平三の足首あたりの毛布の上に置いてありました。

「実はその。ええと、実はそのお。私は良子の兄であります。実はその、何んと申し上げてよいやら。山下さんとは村の郵便局の時からの昵懇の間柄で。お電話を頂き、不思議な御縁で、早速川村さんに参上して」

染葉虎太郎もさすがに衆目の中では、献毛の件を言いよどんでか、額に汗が滲んでいました。

「良子さんも動員では残念な事で」

「はい全く。防空壕の直撃で、女学校を通しての遺骨も、どなた様の物やらと、亡くなった両親

がいつも嘆いておりました、はい」

虎太郎はスーツのポケットから取り出した畳んだままのハンカチで、目頭を押えました。虎太郎の仕種はどうも芝居がかって見えました。

「川村平三さん」

涙でむせんでいた筈が、突然の大声でした。

「今の今まで、出来っこないと諦めておりました良子の事です。そのお、口にするのもはばかる事で、この際ですから、思い切って、ざっくばらんに申し上げます」

平三は慌てました。ざっくばらんなどとは、とんでもありません。毛髪の事をしゃべり出されては、困ってしまいます。

「染葉さん、もうちょっと、お静かに」

「分りました。そのお、良子の。そのお、あれです、あれ。あれを頂きたいのです。山下さんから、全てお聞きしております」

ここで虎太郎は突然、平三の伸ばしている両足の毛布の上に、腕立て伏せの形で彼の上半身を折り曲げたのです。将さにベッドの上の土下座のようです。平三の両足は鰐にでも押え込まれた塩梅で、重たくて、痛くて身動きも出来ません。

「川村さん、お願いです。ぜひ良子のあれを。これ、この通りでございます」

「はい、はい分りました。染葉さん痛いですけど。染葉さん、足が」

「早速にお聞き入れ下されて、有難うございます。両親も念願叶って、草葉の陰で」

虎太郎は余程うれしかったのか、長い口上がぶつぶつ続きます。平三は足の痛さをこらえ切れず、両手を伸ばし、毛布の上の虎太郎の白髪頭を持ち上げました。酒の香がぷんとにおいました。

虎太郎は良子の命日は六月だから、その前の五月にはあれを欲しいと言いました。平三はもう直き退院する積もりだからと告げました。

染葉虎太郎は黒鞄を小脇にかかえ、丸椅子から立ち上ると、上半身を正確に四十五度に折りました。彼は軍人上りだなと平三は直感しました。

「お兄さんは陸軍ですか」

平三にお兄さんと呼ばれて、虎太郎は身内にでもなったつもりか、黄色い歯をむき出し初めて柔和な笑顔を見せました。

「はい大正十五年寅年生まれの志願兵、陸軍歩兵伍長であります」

虎太郎の唾が平三の顔に降りかかりました。

虎太郎は平三に挙手の礼をすると、正確に廻われ右をして、靴音を床に響かせ部屋を出ていきました。平三の周わりのベッドから、小さな笑い声が洩れました。虎太郎は廊下からの足音が消えない中に、再び部屋に戻って来ました。

「忘れてました。隣村の山上あきの弟一郎を同道いたします。その節は私同様にあきのあれを一郎にお渡し下さい」

染葉虎太郎が去り、静寂が戻ると、患者達は平三に笑いかけました。

平三は洗面所で髪と顔を石鹸で洗いました。

平三は鏡の中の顔をタオルでゆっくり拭きながら、先日ティールームで途切れた山下の話での、遠山先生の姉のお願いの叫び声は、染葉虎太郎の願いと同じだったんだと、やっと気付きました。

退院の日の午後、ベッドの廻わりの片付けをしていた看護婦が、床に落ちていたと、多岐利神社のお守りを拾ってくれました。お守りは智代子の持ち込んだものだなと思いました。京都で尼僧に長命だと予言された智代子の事ですから、お守りの中身は覗くまいと心に決め、荷物の入った鞄の外側のポケットにそっと押し込みました。

染葉良子と山上あきの毛髪は、訪れた虎太郎と一郎に夫ぞれ渡しました。宮本智代子実は遠山先生のそれは、山下春枝に頼んで、神奈川県の秦野の姉に、郵送して貰いました。

平三はやがて体力が回復したら、染葉良子と山上あきの毛髪の納まった墓には、真っ先きにお参りする積りでいます。

今回のきもないさんの一件は、未だ知らない筈の妻の智代子には、年甲斐もなく面映ゆい気持もあって、口にしにくい事です。その点よい塩梅に世話になった山下春枝もいる事だし、いずれおしゃべり好きの同級生同志、いつかはこの話も通ずるのではないかと考えております。

さて、話の発端を持ち込んだ東京の甲賀眞由美には、どのような返事を書いたらよいものかと、目下思案中であります。

妖花　藤原薬子（ふじわらのくすこ）
―家門の面目に賭けて―

島津　隆子

一、藤原四家の成り立ち

藤原薬子の生年は不詳だが、出身は藤原家である。この「藤原」という姓名は元来、神と人間の中を取り次ぐ臣下という意味の「中臣」（なかとみ）に由来する。つまり古代において祭祀をもって大和朝廷に仕えた氏族である。

大化改新の際に中大兄皇子（なかのおおえのおうじ）（天智天皇）に協力して絶大な功績のあった中臣鎌足が始祖である。日本の代表的な四つの氏名、源・平・藤・橘の一つである藤原の姓が鎌足に下賜されて藤原家が始まったのだ。そして、鎌足の子藤原不比等が古代の法典、大宝律令や養老律令を主宰して、二人の娘が文武天皇妃、聖武天皇の皇后、つまりあの有名な光明皇后となってから、中央政界に有力な足場を築いて、藤原家台頭の契機となった。

さて、不比等には四人の男子があった。それが藤原四家、つまり南家・北家・式家・京家に分派して、互いに勢力を誇示しながら競い合うことになるのだ。

薬子は式家の系統に属していた。

薬子の父藤原種継（たねつぐ）の官職は従三位の一公卿に過ぎなかったが、桓武天皇の寵臣であった。その父は平城京（奈良）から長岡京（京都府）への熱心な遷都推進論者だったので、長岡京造営の建設長官になっていた。

だが、ここで思いもかけない事件が突発した。

長岡京の建設が着々と進んでいた延暦四年（七八五）九月のある夜のことである。

わずかな供を従えて工事現場を巡視していた馬上の種継の姿が、松明（たいまつ）の火に映り出された時、どこからともなく不意に一本の矢が飛んできて、種継の胸板を刺し貫いたのだ。種継、四十四歳のあっけない最期であった。

寵臣を喪った桓武天皇は怒りに震えて、即刻、犯人の割り出しを命じられた。

そして、近衛兵二人が逮捕される。この兵士の口から暗殺事件を指揮したのは、名門大伴家の有力者である大伴竹良（たけよし）と継人（つぐひと）だと判明するのだ。

さらに事件の真相を辿ってゆくと、大伴家の他に、藤原家と対立する佐伯家など、多数の者が加わっていたことがわかってきた。そして、なお調べてゆくうちに、この事件の真の立案者として意外な人物が浮かび上がってきた。驚くなかれ、それはあの万葉歌人として名高い中納言大伴家持（やかもち）だったのである。

天皇の下した判決は厳しいものであった。

直接の仕立て人である二名の兵士はおろか、これに関係した者ことごとくが死罪、または流罪となった。だが、家持はこの時点の一ヶ月前に病死していた。しかし、生前に受けた一切の官位は剝奪され、財産は没収、家族は流罪の憂き目をみた。

さらに、藤原式家と仲が悪く、大伴、佐伯両家と親密であった天皇の弟君早良（さわら）親王も幽閉先で餓死してしまった。

こうして長岡京遷都は挫折し、代わって和気清麿の発議による平安京（京都市）の建設が推し進められることになる。

延暦十三年（七九四）、平安の都が完成した。

以後、政治の中心が鎌倉に移るまでの約四百年間、平安京は咲く花の匂うが如き王朝の栄華を誇ることになる。また、明治二年（一八六九）東京に都が移されるまでの約千年間、日本の帝都としての命脈を保ちつづけたのである。

平安京遷都が成った翌年の正月、踏歌の節会の席上、次のような寿歌が披露された。本歌は漢文体のため、詩人三好達治の訳詩を記すことにする。

居るによし　山城は　住まふによしと伝へいふ
大宮づくり　ここにして　宮づくり成る　うららに
道は平らに　野は広ら　四方（よも）の山々うつくし
川の鳴る瀬も　ささやかに

よき都　平安楽土　春とこしへ
今を春べと　野も山も　氷れる沢も
やわらぎて　ほめうたおこる　天（あめ）が下（した）
げに治まれる　おほみ世の　都の春を
とこしへに　つかへまつらん　大君の庭
よき年や　平安楽土　春とこしへ

しかし、この王土楽土の裏では血腥い政権抗争が繰り広げられていた。

ところで、薬子の父種継の不慮の死は、藤原家に対抗する有力な政治勢力の大伴・佐伯両家を脱落させるのに大いに役立った。だが、その勢力が取り除かれると、藤原一門の激しい暗闘が表面化してくるのだ。

こんなところから、実は種継暗殺は、藤原一門のしめし合わせか、ある特定の人物の仕業ではないかと推理される。まず桓武天皇の覚えめでたい種継を血祭りに上げて、一門の対抗勢力を除くことが手始めであった。そして、巧妙なトリックで大伴家の看板的スター家持が、格好の真犯人にされたのではないだろうか。藤原一門ならいかにも仕組みそうなことに思える。

さて、その藤原一門のうち京家は、これといった人物も輩出せず、はじめから不振であった。南家には故右大臣継縄（つぐただ）が出て家柄を誇り、北家には俊敏な切れ者である右大臣内麻呂が現役で控えている。しかも、その勢力は著しかったので、式家にとって種継の死は手痛い打撃であった。

種継はこの時、式家の女子二人を后妃に送り込み、天皇家の外戚としての立場を着々と固めている最中だったからである。

このような勢力関係にある時、またしても一つの事件が起こった。

桓武天皇の崩御によって、皇太子の安殿（あて）親王が平城天皇として即位したその翌年の秋のことである。

故桓武天皇の第三皇子伊予（いよ）親王が北家の藤原宗成にけしかけられて、兄君である平城天皇の玉座を狙っているという噂が、まことしやかに流れたのだ。

これを耳にした南家の大納言藤原雄友（かつとも）は大きなショックを受けた。それもそのはず、伊予親王の母親は自分の妹吉子である。痛く動揺した雄友は一門の出世頭、北家の右大臣内麻呂に相談の形で事の次第を告げた。そして、それは内麻呂から天皇に報告されたのである。こうして噂話はおのずと大きな陰謀事件の様相を帯びてしまった。

藤原宗成は即刻、捕らわれの身となった。

伊予親王は急ぎ宮中に参内して、身の潔白の弁明にこれ努めた。しかし、親王こそ自分に陰謀を持ちかけた首謀者であると、宗成は主張して止まないのだ。

即位したばかりの平城天皇は、自らの権威を示すよい機会とばかり、弟の伊予親王とその母親を大和の川原寺に監禁してしまったのである。そして、暗に自決を勧めるように、満足な食事も与えない仕打ちに出た。どこまでも事実無根を哀訴する母と子だったが、捕らわれてから七日目、共に毒薬をあおって死んで逝った。

ここで注目したいことがある。噂話を相談しただけの大納言雄友や、同じ南家の中納言乙叡とその親類縁者などが、厳しい処罰を受けて失脚したのに反し、陰謀の当事者であり、親王と同罪に問われるべきはずの北家の宗成は、単に左遷されるにとどまったことである。

ところが、実はこの事件の真の首謀者は、もっと別のところにいた。

何食わぬ顔で、平城天皇の背後に平然と控える式家の仲成と薬子の兄妹である。

ともあれ、この事件によって藤原一門の中で有力だった南家と北家に一大汚点がつき、落ち目の式家が、勢力を盛り返したことは間違いない事実であった。

二、野心の芽生え

藤原薬子は同じ式家の中納言縄主の妻として、三男二女の子宝にも恵まれ、平凡な生活を送っていた。縄主は六道観察使として、中央から派遣されて地方行政を監察する役職にあった。仕事がら家を留守にすることは多かったが、いわば中級官吏として実直に務めを果たしていた。

この平和な日常に倦怠を感じながら、懶惰な日々を送っていた家庭に、思わぬ幸運が舞い込んだのである。

皇太子である安殿親王の妃として、長女の後宮入りがかなったのだ。

美貌で知られる薬子の娘だけに、その美しさは見る者の目を惹いた。

さらに、退屈な日々を送りながら、薬子の内面に燻っていた、華やかな世界への憧れを満足させるかのように、薬子の宮中入りもかなったのである。

宮中での薬子の官命は東宮宣旨といって、皇太子の側近くに仕える女官の役であった。

ここまでは世間によくある玉の輿ともいえる話である。しかし、それどころか、薬子にとっては妖しいまでの官能の世界が待ち受けていたのだ。

皇太子夫妻の介添役として、日の前に現れた薬子の姿を一目見るなり、安殿親王はすっかり魅了されてしまった。それ以来、親王はわれを忘れて薬子に夢中になり、薬子の虜になってしまったのだ。はるか年上の母性的な魅力、まだ衰えを知らぬ貴婦人然とした容貌、五人の子供を産んだとも思えぬ膚の瑞々しさ。

生まれながらの皇子であり、天皇へのコースが約束されている坊ちゃん気質の親王のことである。もはや薬子の娘であり花嫁でもある妃など眼中にない。夜な夜な薬子の豊麗な肉体を抱きしめて離そうとしない。

女というものは自分の美しさのゆえに犯される行為ならば、それがどんなに悪徳に満ちていても、自らを許してしまうものなのか。こんな思いがけない偶然に誇りを感じないわけがないのだ。薬子とて例外ではなかった。

もともと体力に恵まれた方ではない親王は病弱であった。他の何人かの側妾も近くに侍らせておくだけであった。しかし、薬子に巡り会ってからの親王は、まるで人が変わったような入れ込みようだった。それなのに薬子を評して、「その性情は淫なり」と史書は後世に伝えているが、それは御用学者が皇室の美風を正当化したにすぎない。ともかく親王から薬子の色香に溺れていったことは紛れもない事実のようである。

「縄主殿は仕事がら地方へ出向かれることが多いと聞き及んでいるが……旅から帰るとどのように求めるのかな」

若い親王は人妻の薬子が顔を赤らめるようなことを聞いては、甘美な刺激を求める。

相手の女が過去にどんな男を、何人愛したかなどと空想をめぐらし、架空の男に漠然とした嫉妬を感じることが恋愛の兆候の一つであるならば、親王も夫を持つ成熟した薬子に対して、好奇心に満ち溢れていた。そしていっそう執拗に薬子を求めた。薬子は独り呟く。

「ただ、私の娘である花嫁がかわいそう……でも、生きてゆくのに、何もかも手に入るとはかぎらない。拾うものがあるなら、棄てるものがあっても仕方のないこと。娘は無かったものと諦めよう」

美貌と才智を持ち合わせた薬子でも、ひとたび火を点じられると、甘美で激しい恋を恋として内奥に留めておくことはむづかしい。しかし、薬子の心の奥底には、

（この機会にこそ！）

というもっと大きな野心が芽生えていた。

薬子は目覚めた野心の第一歩として、また、親王への愛の証として、親王の耳元で甘く囁いた。

「ねぇ、中納言までしか出世できない夫なんて嫌い。あんな人、私たちの許から、どこか遠くへやってしまって下さいませ」

薬子の願いどおり、それから程なくして縄主は遠く九州へ転勤させられていった。

だが、娘を嫁がせた母親薬子と、その婿に当たる親王との関係は醜聞（スキャンダル）として外部に洩れないはずがなかった。しかし、そんな外聞より、母親に夫親王を奪われた花嫁の悲嘆はあまりにも深く、入水（じゅすい）自殺してしまったのである。

さすがに娘の死は、薬子の胸に痛い悔恨の情を刻んだ。何度も親王への情念を断ち切るべきだと思い悩んだが、夫も娘もすっぱりと棄てた身は、もう引き返すべき時も処も逸していた。

賢帝の誉れ高い桓武天皇はこれら諸々の事実を見聞するに及んで、

「父親の種継はめざましい働きをした予の寵臣であった。こともあろうにその娘であり、皇太子妃の母親であるお前が、予の皇太子を堕落させるとは、何とも見苦しい限りである！　淫猥な女めがっ！」

と吐き捨てると、薬子を宮中から放逐してしまった。

藤原式家がこうむった手痛い汚名である。

しかし、薬子に深く執心な親王は薬子を別邸に隠して、夜陰にまぎれて通いつめた。

そのことを察知した天皇の再三再四にわたる警告にも、親王は耳を傾けずに〝闇の棲家〟へ足を運んだ。だが、薬子が日陰者に堕ちたことにはちがいなかった。

（ああ、こんな年若い男性と恋などするんじゃなかった。夫を追い出し、娘の夫を奪った罰かしら。それでも私はわが式家と一族を、何としても藤原一門のトップの座に押し上げたい！）

切なる願望と野心は、まだ薬子に味方をしていた。

三、束の間の実権を手中に

大同元年（八〇六）三月、安殿親王と薬子にとって目の上のコブともいうべき桓武天皇が崩御された。七十歳まで天皇の位を去らなかった口やかましく頑強な帝王も、先に死に追いやった早良親王の亡霊に祟られたり、恋の病に取憑かれた親王に心を煩わされながらの他界であった。

それから二ヶ月後の五月、親王は第五十一代平城天皇として即位した。

（ああ、やっぱり忍耐した甲斐があった）

薬子は宮中さし廻しの牛車に乗って、晴れて後宮入りを果たしたのである。

「もうこれからは誰に憚ることもなく、お前を抱きしめることができる。よくがまんした」

三十二歳男盛りの新天皇は薬子を膝元に引き寄せる。

「うれしい……帝」

薔薇色に染めた頬を新帝の胸に埋める薬子は初々しくさえみえる。形式上はどうあれ、実質的な皇后らしく気品のある香気を放って、新しい生命を吹き込まれたような薬子の風情である。しかし、その見果てぬ夢の浮橋こそ、やがて二人の命取りとなる、渡ってはならない橋であることを、この時の帝と薬子は知る由もなかった。

黄昏時になると、磨きぬかれた鏡板に向かい、寝化粧をする薬子の姿がある。それは妖しいシルエットだ。黄昏は人を煽情的にする。寝室には、麝香がたちこめている。

かすかに開いた唇から暖かい吐息を繰り返していた薬子は、半身を起こして帝の背後に寄り添うと言った。

「ねぇ帝、私の願いをきいて下さいまし」

「何でも申すがよい」

「私の家門を取り立てて下さいませ。うだつの上がらぬ兄を宮中へ召しかかえていただきとうございます」

「それぐらい、たやすいことだが」

帝の言葉に、薬子は一気に胸中を吐露する。

「嬉しゅうございます。私はこのたび帝の亡き父君からたいへんなお叱りを受けて、家名を傷つけてしまいました。それに、父もあのように不慮の死を遂げて、式家はいかにも南家や北家に見劣りいたします。何かと敵対視する両家を、地に這わせていただきとうございます」

「ふむ……」

帝はすぐには言葉がなかった。薬子はたたみかけるように言う。

「帝を妬む陰謀のお噂はご存知でございますか」

「ああ、知っておる。しかし、それは単なる噂であろう」

「お噂が本当であろうとなかろうと、帝の弟君の伊予親王さまと、その母上である南家出身の吉子后（きさき）さまを葬って下さいまし。それに、お噂の当事者である北家の主な人たちもでございます」

恋の次には野心が、野心の次には貪欲が芽生えるというが、今や薬子は臆面もなく貪欲を露（あらわ）にしだした。帝は苦笑を浮かべながら薬子のわがままをさりげなく聞き流そうとする。

「そちも大それたことを考える女人よのぅ」

「いいえ、これは私事のためばかりではございませぬ。帝にとって伊予親王さまの失脚は忍び難いことでございましょうが、即位して間もない帝の威名を保つにはそうなさることが必要でございます。また、一門の者たちの政界への口出しが著しいこの時こそ、帝の威厳を天下に示されるよい機会と思われまする」

怖ろしい薬子の言葉である。さながら鎌首をもたげた蛇に巻かれるように、彫像さながらに硬直した帝の体に、薬子の白い腕がからむ。そして、帝の耳元に熱い息使いを送りながら、不吉な願い言を繰り返すのだ。

「ねぇ、お願い。これからも私を愛して下さるのなら……」

甘く妖しい薬子の言葉に、とうとう気押されてしまった帝は、

「それを、そちが欲するならば……」

と魂の抜けた王者のように言葉した。

今や宮中における実権は薬子と兄の仲成が握っていた。

仲成は従四位下の参議に過ぎなかったが、薬子の威光をバックに思うがままに権勢を振るうことができる立場にいる。

帝は余りにも激しい薬子との愛欲の日々を送ったためか、病気がちになり、保養のために各地を転々とした。もちろん身に影のごとく寄り添う薬子がいつも一緒であった。

しかし、帝の病状ははかばかしくなく、しばらく政務から遠ざかるため、旧都平城京に落ち着くことになった。

この有様を見て取った藤原北家の敏腕家右大臣内麻呂は、平安京で留守を預る仲成を、言葉巧みに呼び出して丸め込んだ。そうしておいて、故桓武天皇の第三皇子であり、帝の異母弟に当たる皇太子神野（かんの）親王を強力に後押して、帝に退位を迫ったのだ。

「何をバカな！」

薬子は憤ってみたものの、帝の病状が回復しないとなれば仕方のないことである。平安京に帰って政務を執り、帝に万一のことでもあれば、それこそ薬子にとって致命傷である。

「神野親王さまがそのお気持なら致し方ございませぬ。でも、帝の位は譲っても、実権は決して渡してはいけませぬ」

薬子は帝にそうアドバイスして、在位わずか三年にして神野皇太子の申し出を呑んだ。

五十二代嵯峨天皇の誕生である。

依然、政治の実権を掌中にしておくための薬子の狙いは、平安京から主な高級官僚を引き抜いて、帝に院政を布かせようと考えたところにある。つまりそれは帝が平城上皇になることを意味していた。

ここに平城京の平城上皇―薬子（式家）ラインと、平安京の嵯峨天皇―藤原内麻呂（北家）ラインの二つの朝廷が並び立って、一触即発の様相を呈してしまったのだ。

この二派閥の対立は実質的には式家と北家という藤原家の暗闘であることはいうまでもない。長い間くすぶり続けていた一門の内部抗争が、皇室を巻き込んで是が非でも雌雄を決しようと、

大きな賭けに出たことを意味する。

嵯峨天皇即位の翌年九月六日、平城京の上皇方が先制攻撃を仕掛けていった。もっとも攻撃といっても兵力を用いたわけではない。天皇方の意志がどの程度のものか試してみたのだ。もちろんその成り行き次第では兵火を交えることも辞さない覚悟であつた。

それは上皇が再び天皇の座に戻りたいと重訴した上で、都を自分のいる平城京に移すように命じたのである。

かねて不測の事態を予期していた内麻呂は、すかさず反撃の態勢を整えた。

天皇をして、巨勢野足（こせのたり）を蔵人所頭（くろうどのかみ）に、坂上田村麻呂を造営使に、そして、自分の子冬嗣（ふゆつぐ）をその両方に任命した旨を上皇方に伝えてきたのである。

蔵人所というのは皇室の機密文書や重要文書の一切を取り扱う役所である。造営使は都の建設、改修等を検分し実施する役人であるから、この伝達は上皇に対して痛烈なパンチとなった。

「役所は文書に始まり、文書に終わる」ものだから、その機関の長が天皇の息のかかつた者や、内麻呂の子に独占されたとあっては、上皇方の執政は明き盲に等しくなってしまう。

さらに、都を平城京へ移せといっても、それを実地に調査し実行する役人が天皇に任命された人物とあっては、結果は知れたものである。これはまさに天皇方にとれば見事な効果といえよう。

「ううっ……憎き天皇と内麻呂めがっ！」

地団太を踏んで口惜しがる上皇と薬子に、その四日後、さらに追い討ちが加えられる。

二帝が並び立ったことや遷都の風聞で、不安におののき動揺している人心を鎮めるため、という大義名分を立てた平安京方では、兵士を大動員して近江、伊勢、美濃の重要な関所のすべてを固めさせた。上皇方を袋の鼠にするためである。

その上で素早く、宮中に厳戒令を布き、そのドサクサに紛れて仲成とその一派を逮捕してしまった。その中には勇将の誉れ高い文室綿麻呂（ふんやのわたまろ）も入っている。

「何もかも正直に白状すれば国司に任命してやってもよい。それに妹薬子の命も助けてやろう。お互い藤原一門ではないか。天に二つの日輪なく、地にも二つの国主なしという。天皇の下に国政が統一されてこそ、天下万民の安泰や幸せもあるというものじゃ。無益な戦乱など避けて、今こそわれら一門が手を握り、上皇や天皇や万民の期待や信頼に応えようではないか。仲成殿、すべてを話してはくれまいか」

雄弁な内麻呂の口説に、単純な仲成は呪縛にかかったように一切を自白してしまった。

これで一挙に大勢が決した。

仲成の自白を証拠として、さっそく次のようなことを天下に公表したのである。

―このたびの人心を惑わすこと夥しい平城京遷都問題は、上皇をそそのかし野心を逞しくする藤原仲成・薬子兄妹による陰謀であることが判明した。よって、仲成は佐渡権寺に左遷、首謀者薬子は官位、尚侍正三位を剝奪の上、宮中追放を命ず―

というものであった。

さらに、上皇側近の高級官僚たちも遠国の国司へと左遷を命じられた。

自分の意向を全く無視した一連の大人事異動に上皇は色を失い、怒りの余りにほとんど理性を

喪失して、放心状態に陥った。

「この上は、一戦お覚悟を！」

薬子の励ましに上皇は気を取り戻した。

翌早朝、上皇は畿内一円と紀伊に挙兵を促す檄文を発した。そして、自らは付き従う官僚兵士の一団を率いて、急遽、東国に向って出発したのである。これは百三十八年前、大海人皇子（おおあまのおうじ）（天武天皇）が壬申の乱の際、屈強な東国の武士の参集を呼びかけた行動に習ったものだ。

だが、天皇方は内麻呂の迅速果敢な処置によって、激変するここ数日間に、すっかり態勢を固めてしまっていた。

蝦夷征伐で勇名を馳せた坂上田村麻呂を総司令官の征夷大将軍に任命し、美濃から上皇を迎え撃つべく待機させていたのだ。

田村麻呂は武門の誉れ高い坂上一族の中でも、特に傑出した人物である。身長一メートル八十六センチ、胸の厚さ三十六センチ、髪や鬢は金色の毛髪が燃え立つばかりだ。鷲のように鋭い眼光で睨めば、猛獣すらたちどころに卒倒するといわれるほど、天性の剛勇の士であった。

「征夷大将軍」といえば養老元年（七一七）元正天皇から任じられた多治比真人縣守（たじひのまひとあがたもり）が第一号といわれる。第二号がこの田村麻呂であり、その後、後鳥羽天皇の時代木曾義仲がこれに任じられた。以後は政権を執った幕府の主宰者の職名となったのである。つまり、源頼朝、足利尊氏、徳川家康などが、この栄冠を得ている。

田村麻呂は勇ましいばかりでなく、ひときわ優れた智謀者であった。この時も天皇に頼んで、上皇方第一の勇者である文室綿麻呂を牢獄から召し出した。そして、味方になるなら特別の計らいで官位昇進を叶えようと感動させて、共に行軍することを誓わせてしまった。

これは田村麻呂の大ヒットで、綿麻呂が天皇方に寝返ったという報せは、上皇方の兵士を怖気づかせ、浮き足立たせることに功を奏した。闘う前に早くも脱走する者が続出する始末であった。

独り哀れを留めたのは藤原仲成である。すべての自白後、もう何の役にも立たないとばかり、その深夜、衛兵の放つ十数本の矢によって、射殺されてしまった。

四、終焉

六月十二日、平城上皇、薬子の一行が平城京を出発した。

しかし、川口道より東へ向おうと郊外まで来たが、それより先へは一歩も進むことができない有様となっていた。奈良から諸国に通じる道という道は蟻の這い出る隙もないほど天皇方の兵士で塞がれていたのだ。味方の兵士はほとんど逃亡していった。保身を第一の身上とする役人の多くは、そこで一雑兵に向ってさえも哀願をし、天皇方への恭順を誓うのであった。

折から降りだした村雨の中に上皇と薬子は呆然と佇んでいた。

かつて、あれほど気高く典雅に満ちていた二人の容貌は、痛ましく憔悴している。

以前は、目にも眩しいほどの衣装を身にまとっていた二人であったが、今、身に着けた旅装は、悲哀に沈む喪服を思わせる。薬子は力なく呟く。

「私、上皇さまが捕らわれ、引かれてゆくお姿など、見たくございませぬ」

すべてが過ぎ去った嵐の後の重い涙を堪（こら）えている誇り高くもの憂げな薬子の両の眸。ふと、これは蒼白なバラの花にも似ている、と上皇は思う。そして、

「予とて同じ思いである」

と、最後の威厳を保つかのように言った。

それが二人の永遠の別れであった。

上皇は急ぎ平城京に引き返すと、剃髪して恭順の意を表した。

上皇に対する処罰は何もなかったが、上皇は後に弘法大師空海に従って出家したのである。そして、孤独のうちに五十一歳の生涯を閉じられた。

上皇と別離した薬子は村雨の中をただ独り彷徨（さまよ）いつづけ、とある小道にあった農家の廃屋に入った。そして、用意していた毒薬を呑んで息絶えた。

死の寸前、薬子の脳裏に浮かんだ映像は、三年前、悲憤のうちに毒薬をあおって死んだ伊予親王母子の姿であったかもしれない。また、母親に親王を譲って死んで逝った娘の面影だったろうか。

そして、因果応報というが、平城上皇の第一皇子高岳親王は皇太子を解任されるのだが、この一連の出来事を通して世の有為転変、無常を悟り、父上皇と同じく空海に従って出家した。そして、唐に渡り、さらに遙か遠くインドをめざして姿を消していった。

この政変で最も輝かしく栄進したのは言うまでもなく藤原北家の一族で、内麻呂の死後、従一位太政大臣の位が追贈されている。その政治的手腕は群を抜いて優れていたのだ。

桓武、平城、嵯峨の三帝に仕えること十余年間、一度として失敗がなかった事実はお見事と言う他はない。

薬子が命を賭けて築こうとした藤原式家は衰退の一途を辿り、北家に取って替わられたのである。その意味で、薬子にとって北家は好敵手（ライバル）どころか、全く歯が立たない悪い相手だったといえるだろう。

内麻呂の子冬嗣がこの後、左大臣となって、北家の基礎は完璧にかたまった。そして、その子良房の時、人臣で最初の摂政となり、二百数年後の道長に至って、藤原北家は全盛期を迎えるのだ。

敗北はしたものの薬子は、「薬子の乱」または「薬子の変」を起こした歴史の代表的悪女として、後世にその名を留めている。天皇に熱愛されつづけた薬子にすれば、それもまた本望かもしれない。

シルヴェスターの夜

森　実与子

大晦日、何をしようか——。

毎年、絵里はあれこれ考えてはどこかへ出かける。

恋人と一緒に、スキー場で無邪気に年を越したこともある。何年間か、ある一人の男の許におせち料理を届けたこともあった。

好き嫌いが多いその男は卵焼と太巻き寿司が唯一の好物だったから、絵里は三〇日の夜から料理にとりかかり、この二品と黒豆やクワイ、百合根の煮物、栗きんとんとか、お正月らしい料理を小さなお重に詰め、大晦日の夕方、いそいそと車でででかけた。都心の閑散とした道路を走り抜け、ある大きな寺のところまでくると、男の家はあと少しのところにあった。その寺の前を通り過ぎる度に、絵里は年の終わりを実感した。そして男の部屋で、持参したおせちを酒の肴に乾杯して、往く年を惜しんだものだ。それなのに、どこか秘密めいたその男とはどうしても踏ん切りがつかなくて、結局別れてしまった。

今、絵里は誰にも束縛されない自由の身だ。だから一年の最後の日に、大掃除をしたり、おせち料理の用意をしたり、しなければならないことなど何もない。海外に出かけようが、スキーに行こうが、カウントダウンのパーティーに行こうが、なんだって思うままだ。

今年は——。突然、絵里は映画が見たくなった。それも胸に突き刺さるような、強く心に刻まれる映画が見たいと思い立った。

大晦日に映画を見るのは、何年ぶりのことだろう。

かれこれ二〇年近く前になるだろうか。確か、銀座あたりの映画館で、ボーイフレンドとスタンリー・キューブリック監督の「シャイニング」を見た覚えがある。スティーヴン・キング原作の、身も凍るような恐怖映画だった。その後、もう一回ぐらい行った記憶があるが、誰と行ったのか、何をどこで見たのかもよく思い出せない。その頃、三一日の映画館はかなり空いていたけれど、あれから年月がたった今は、どうなのだろう。最終回はなく、早めに終わるのは今も変わらないようだが。

夕方、絵里は車で渋谷の映画館に向かった。デパートに隣接しているため駐車場は混みあい、ビルの周りをぐるりと車の行列が囲んでいる。足早に慌しく行き交う人たちを横目でみながら、しばらく列に並んだが、時間の余裕をみて出てきたおかげで、開演時間よりかなり早く着いてしまった。

映画館で配られた整理券の番号は十三番。時間に絶対遅れないように、満席で席がないなんてことにならないようにと、映画を見たい一心で駆けつけたのに、絵里はなんだか拍子抜けしてしまった。やはり、今も昔も大晦日に映画を見ようなんていうのんきな人種は、少ないらしい。案の定、上映時間になっても劇場はガラガラで、一五〇席余りの客席に、観客はわずか三〇人ほどだ。しかもそのほとんどは女性で、絵里のように連れもなく一人の女もいる。従業員も手持ち無沙汰らしく、わずかな観客のために働いている人たちに対して、何だか申し訳なくなってくる。きっと早く帰りたいだろうに。

（世の中に、寂しい女って案外多いものなのかしら。でも、これはなかなかいい。貸し切りみたいな状態で映画が見られるなんて、こんな快適なことはないじゃない。いい年の締めくくり方だわ）

絵里は、密かにほくそえんだ。

さて、選んだ映画は、「デュラス——愛の最終章」。

絵里の好きな作家マルグリット・デュラスの、晩年を映像化した作品だ。デュラスは、作品はもちろんのこと、彼女自身の生き様が文学に他ならない。絵里はそこに、一番惹かれていた。だから現実のストーリーを描いたこの映画を、どうしても観たかった。

デュラスの熱烈なファンであるヤン・アンドレアは、五年間、彼女に手紙を書き続けた。多い時には日に何通も。しかし、デュラスから返事は来ない。ある時ヤンは、デュラスのもとを訪れ、それ以後、彼女が死ぬまでの十六年間をともに過ごしている。ヤンは六六歳のデュラスより三八歳年下の、ホモセクシュアルだ。

フランス、トゥルーヴィルにあるデュラスのマンションをはじめて訪ねたヤンは、まだ若くて

初々しい。なのに、どこか孤独や絶望の影をひきずっていて、死の予感さえ感じさせる。

デュラスにとっては、書(エクリール)くことが生きることであり、ウイスキーや赤ワインを浴びるほど飲み、アルコール中毒で入院しても、ひたすら書くことだけに執念を燃やし続ける。いい構想や文章が浮かぶと、途端に顔はバラ色に輝き、もう一度デュラスはよみがえるのだと、うわ言のように繰り返す。その情念たるや、鬼気迫るものがある。

「聞いて。世界一美しいシャンソンよ」

ある夜、二人はかつて大ヒットした「カプリ・セ・フィニ」のレコードを聞く。ヤンが彼女の肩をやさしく抱き、二人は黙って耳を傾けている。

「もう決して行かない／君が愛を告白した場所に／僕らは、もう行かない／カプリは、もう終わり」

軽快なメロディなのに、絵里は不意に胸を衝かれ、涙がとめどなくあふれてきた。どうしてこんなに悲しいのか、自分でもわからない。二人が淡々とシャンソンに聞き入る姿が、歌の詩が、それとも音楽自体が物悲しいのか、よくはわからないけれど、どうしようもなく切ない場面だ。スクリーンのなかのデュラスも、こみあげるものを抑えている。

その夜遅く、すでに寝入っているのに、突然、デュラスはヤンの部屋に入って彼を叩き起こすと、

「さあ、出て行って！　今すぐ。もう顔も見たくない。耐えられないわ」

牙を剝いてヤンを追い立てる。窓から道路に向かってヤンのトランクやレコード盤を放り投げ、

狂った獣のように豹変している。そして、家から追い出され砂浜で野宿したヤンは、それでも翌日、砂まみれになって彼女のもとに戻って来る。

「あきれた男ね。戻ってくるなんて。誇りもないのね。哀れな男」

もはや行き場のないヤンは、デュラスのもとに帰るしかないのだ。

ヤンに対して、デュラスは時には嵐のように荒れ狂い、毒づき、時には優しい愛情を傾ける。作家の凄まじい生そのものが炸裂し、燃え尽きていく。ヤンはそんなデュラスの愛人、口述筆記の秘書、運転手、介護人として、彼女の人生にとことん向き合い、やがてヤン自身も、デュラスと自分との物語を書きはじめるのだ。

デュラスを演じたジャンヌ・モローの表情に、絵里は魅せられた。

いつもは口の端を下げ、気難しそうな顔をしているのに、笑うと途端に、親しみ深く味のある笑顔に変わる。それは若い頃から変わらない、彼女の一貫した個性だ。昔から、単なる美人女優の枠ではくくれない、ファム(運命の女)・ファタル(の女)のような、妖しい存在感があった。大きな瞳から放たれる鋭い眼光、男に媚びない毅然とした物腰……。老いた今、美醜をさらすことに躊躇しない潔さがさらに加わり、それがデュラスと二重写しになったのだろう。だが現実のデュラスとヤンの関係は、映画とは比較にならないほど壮絶で、ドロドロしていたに違いない。

大西洋に面したトゥルーヴィルの海辺の眺めもすばらしかった。絵里も、いつか訪れてみたいと思った。寄せては返す穏やかな波の動きがなめらかな旋律を奏で、砂浜で遊ぶ子供たちを優しく撫でる。空も美しい。オレンジや紫色の柔らかな光の帯が水色の空をほんのりと染め、優美に

きらめく。いつまでも見ていたい遥かな空の彼方へ、デュラスは一人、飛び立っていったのだ。

登場人物がほぼ二人だけの濃密な映画は重く、見終わった後、絵里はかなり疲れていた。席を立つと、映画館もその回りの施設もクローズし、すでに帰り支度を終えた従業員たちに促されるように、そそくさと劇場を後にした。入る時はあれほど混雑していた駐車場も、空いたスペースばかりが目につく。

車を動かして外に出ると、人も車もまばらで、街そのものがまったく違う様相である。海辺に引き潮が訪れたように、回りのすべての騒音や動きが遠のいてしまったようだ。普段の雑然とした雰囲気が、突然、とりすました貌に変わり、妙によそよそしい。まあ、年に一、二度ぐらいは、こういういう日があってもいいだろう。

車のライトの流れも途切れがちながらんとした夜の道路を、車はスムーズに走る。

時折、枯葉が風に舞い、空気が一段と冷えている様子が伝わってくる。大晦日にふさわしい静けさと冷たさが広がる。

いつも若者が闊歩している代官山の街も固く閉ざされ、薄暗い照明に浮き彫りになったショウウィンドゥのマネキンが、無言の一人芝居を演じている。オレンジ色のほのかな街灯に照らされて、建物と、枯木となった街路樹が闇のなかに黒く浮き彫りになっている。まるでここは現実の世界ではなくて、影のなかを走っているみたいだった。両側にびっしりと車が止まり駐車の余地もない道路が、今日はきれいさっぱりとしている。

絵里はお気に入りの「カフェ　ミケランジェロ」の前で車を止めた。

ここだけは、今晩も深夜二時半まで営業しているはずだ。

だがカフェの入口の戸は閉まり、外から見ただけではやっているのかどうかよくわからない。古木に囲まれたガラス張りの空間は、店内のランプと店の看板だけがこうこうと輝き、未知の世界からやってきた宇宙船のように見える。

道路に楽々と車を止め、身を引き裂かれそうな冷たい風に追われるようにして、絵里はカフェにかけこんだ。入口のドアを開けると、突然、温かい空気に包み込まれ、店の給仕たちがにこやかに迎えてくれた。

（ああ、やっと人のぬくもりが感じられる）

死んだ街のなか、この密閉された空間だけが、唯一、細々と生命を保っているみたいで、絵里はほっと安堵した。

暖房のきいた店内には石油ストーブも置いてあって、とても暖かい。通りに面した席に腰を下ろすと、ガラス越しに向かいの屋敷の大木が、黒い森のように迫ってくる。ドームのような屋根にも覆いかぶさるように古木が伸びている。そんなどことなくクラシックな雰囲気を、絵里は気に入っていた。

店内を見回すと、チラホラ客がいる程度である。二、三人で談笑する若者や、一人でじっとコーヒーを飲んでいる中年男もいて、思い思いの大晦日の夜が更けていく。外の丸テーブルの上で、風にゆらめく白いキャンドルの炎を見ているうちに、絵里はふと、二年前の大晦日のことを

思い出していた。

絵里は、ドイツ・ハンブルグの街にいた。

ドイツ人の友だちマリーとともに、二十世紀と二一世紀の境目をハンブルグで過ごすため、前日の三〇日、列車でやってきたのだ。数年前にイタリアで知り合って以来、マリーとは、一年か二年に一度、一緒に旅行している。

「大晦日のことをドイツ語で、シルヴェスターっていうのよ」

歩きながらイタリア語で会話をしていると、突然マリーが言った。

「あの映画『ロッキー』の俳優シルヴェスター・スタローンの、シルヴェスター?」

「そう」

「じゃあ、あの大男は、一年中、大晦日男っていうわけね。おかしい……」

二〇歳で結婚して子供を二人生み、早々に離婚して一人で子供を育て、仕事に励みながら気に入った男性と暮すマリーは、絵里と同い年とは思えないほど堂々としている。ドイツ人らしいがっしりとした体つきのせいもあるが、原稿書きに明け暮れ、子供も家庭も持たない孤独な絵里と違って、マリーはいろんなものを持っているからかもしれない。

毎年必ず、マリーは絵里にクリスマスカードや誕生日プレゼントを送ってくるし、細細とした近況報告も欠かさない。

昨年、自分の家を買った時には、うれしさのあまり、新しい家の図面をFAXで送りつけてきた。さらにお給料のいい職場へ転職したとか、それまで一緒に暮していた年下の男と別れ新しい

男ができたからと、大学生の子供も交えた家族四人の記念写真を送ってきたりする。

わざわざ遠く離れた日本の絵里へ、マリーがどうしていろんな報告をしてくるのかわからないが、案外マリーも、心のなかは寂しくて孤独なのかもしれない。マリーと自分とは、国も生き方もまるで違うけれど、実は表裏一体なのではないか。絵里はそんな風に、勝手に解釈していた。ともかく何の縁だかわからないが、二人の間には奇妙な友情が成立している。

「いつか、ハンブルグでシルヴェスターを過ごしたいと思っていたの。だから絵里がドイツに来るってきいて、真っ先にここに来ようと思いついたのよ」

ドイツを南北に流れるエルベ川が北海に注ぐ、河口近くのハンブルグは、観光はもとより、エンターティメントや夜遊びには事欠かない国際的な貿易港だ。南ドイツ、バイエルン地方の田舎に住むマリーは、都会に憧れている。これまでも、二人で一緒にベルリンやミュンヘンの繁華街を訪れたが、今回はどうしてもハンブルグに来たかったのだという。

ハンブルグは、街の至るところに劇場があり、ほとんど毎晩のようにミュージカルやバレエ、コンサートが上演されている。その夜二人は、ミュージカル『オペラ座の怪人』を見た。マリーは何ヶ月も前から、この日のために切符を買っておいてくれたのだ。

ドレスに毛皮をはおった女性がタキシード姿の男性にエスコートされながら、続々と劇場にやってくる。クリスマスの名残の巨大ツリーや、さりげなく壁にほどこされた赤いバラの装飾など、日本と比べものにならない華やかな劇場に、絵里は眩暈を感じた。マリーもこういう場へ来たのははじめてらしく、目をぱちくりさせている。

（こんな優雅な劇場とわかっていれば、毛皮とドレスの一着でも持って来たのに……）

ジーパンにセーターのみすぼらしい自分の姿に、少し引け目を感じながらも、豪華な衣装のドイツ人たちに負けじと、二人もロビーでトロピカルドリンクを飲み、ミュージカルを楽しもうと溜飲を下げた。エレガントな舞台は想像以上にすばらしく、絵里はしばし、夢の世界に陶酔することができた。だがマリーのお目当てはここではなく、歓楽街レーパーバーンに行くことだった。

古くからの自由貿易港ハンブルグゆえに、レーパーバーンには、ナイトクラブ、ディスコ、カジノ、ストリップ劇場、セックスショップといった風俗店が密集している。二人が泊まるホテルから、歩いて一〇分ほどのところにあるこの界隈に、マリーはどうしても行きたいという。

「夜、女性同士で行っても、危険はありません。警察もあるし、観光バスもここに立ち寄るんですから」

ホテルのフロント係の太鼓判に、マリーはすっかり有頂天だ。

行く途中、フェンスで区切られた〝飾り窓〟の一画があった。近くの階段の上から中を覗き見してみると、女性禁制のこの区域は奥深いらしく、窓の多い建物が建てこんでいる。やがてフェンスの隅にある小さなドアから、男二人が様子を伺うようなそぶりで出てきた。女を買ったあとの男の姿はちょっと哀れっぽくて、絵里たちは、思わず顔を見合わせて吹き出していた。

レーパーバーンに着くと、赤やピンク、オレンジ色のけばけばしいネオンの花が咲き乱れ、昼間以上にどぎつく光る。若きビートルズがデビューを飾ったナイトクラブもあるというが、大通りにも裏道にも風俗店が連なり、老いも若きも闊歩している。まさにネオンに輝く不夜城の一帯

だ。ところどころにビキニ姿のなまめかしい女性の看板があったりして、新宿の歌舞伎町を彷彿とさせるが、陰湿さは微塵もなく、明るく開放的だ。しかもどこか品があると感じてしまうのは、外国びいきの絵里の気のせいだろうか。

絵里たちは、有名なテーブルダンスショウの店に行った。店の外に行列ができるほどの混み様で、薄暗い入口を抜けると、老若男女の客がひしめき合い、グラスを片手に談笑したり音楽に合わせて踊ったりしている。若く、はちきれんばかりのボディの白人の男女数人が、テーブルの上でスポットライトを浴びて踊り、体をくねらせながら、一枚ずつ、薄皮を剝ぐように服を脱いでいく。それは一昔前、日本でも流行ったディスコのお立ち台のような感覚で、少しもいやらしくなく、お酒のおつまみみたいな健康的なストリップショウなのだ。

ボリューム全開の音楽が、絵里の頭にガンガン響いてくる。十二時を回り、絵里はかなり疲れていたが、マリーはすっかりここを気に入ったようで、音楽に合わせて体を揺すりながら悦に入っている。帰る気はなさそうだ。絵里が腕時計を指さすと、

「これからショウがあるのよ」

マリーの言う通り、一時を回って、ショウタイムとなった。

日つきの鋭いスキンヘッドの男を中心に、ビキニ姿のショウガールとボーイが舞台上に颯爽と登場する。喝采と歓声の渦のなか、鎖で体を縛ったり、ロウソクをたらしたりのハードなSMショウがはじまった。楽しそうに見入る観客を横目で見ながら、絵里はドイツ人のブレイクぶりを実感していた。マリーもそうだが、大真面目で朴訥なくせに、どこか大きくたかがはずれてい

かれている。

（こんなショウが、そんなに面白い？　たいしたもんじゃないと思うけど……）

ショウの刺激にも無感覚で、妙に醒めている自分を絵里は感じた。

ホテルへ戻った時は、もう三時を回っていた。

幸運なことに、ホテルは港の真ん前にあり、部屋は海に面している。だから世紀の境目のカウントダウンは、外に出かけずにホテルの部屋から見守ることに二人は決めた。

前日遅くまで夜遊びしたため、大晦日の昼、マリーと絵里はゆっくりと街を散策し、港を一周するクルーズに参加した。川とは思えないほど広い河口の港には、コンテナの積荷が並び、韓国やスカンジナビアなど、世界各国の大型船が停泊している。

しかしさすがに北の街だ。葉を落とした木の枝は骸骨のように痛々しく、川沿いの遊歩道には冬枯れの景色が連なる。朝方、みぞれでも降ったのか、道路は凍結し油断するとすぐに滑って転びそうになるし、太陽の光も消える寸前のロウソクのように弱弱しく、三時過ぎるともう夕方のようである。それに比べ、昨夜の歓楽街はなんとパワーに溢れていたことか。

夕方六時近く、空腹を覚えた二人は、一旦ホテルに戻ってから食事をするために外に出た。

ホテルのレストランは、もう予約で満杯だった。不思議なことに、港の辺り一帯は、前日の賑やかさとはうって変わってしいんと静まり返っている。桟橋近くや観光船のレストランは、固くドアを閉ざして人気がなく、

「貸し切りパーティー。八時スタート」

どの店のドアにも同じ様な貼り紙が貼ってある。なるほど中を覗くと店内はリボンや花で飾られ、パーティーの準備万全である。今年は、特別な世紀の変わり目だ。きっと八時頃から真夜中にかけて、完全予約制の盛大なカウントダウンパーティーが催されるのだろう。灯りがついて開いている店は、ドイツ風のビヤホールやパブだけだ。予約なしの自分たちは、この大晦日の夜に、まともな食事に預かれないのかと、絵里は不安になってくる。

「どのお店も予約で一杯みたいね。どうする？」

絵里の言葉が耳に入らないのか、マリーは一心不乱に歩き続ける。気温はマイナス二度。川を渡る風は冷たく、吐く息が煙のように白く長く漂っている。寒さに弱い絵里は、冷気のなかをさまようのにうんざりして、

「やってるのはビヤホールだけよ。どこか適当なところに入りましょうよ」

と声をかけた。だがマリーは納得がいかないのか、強い口調で言う。

「いやよ。ビヤホールなんていつでもやっている。今日は特別な日、シルヴェスターよ。そんなところで食事するのはいやよ」

「でも、どこもやってないじゃない」

「いいえ、必ずどこかはやっているわ。私は魚が食べたいの。寒くて歩くのがいやだったら、一人でホテルに帰れば」

その言葉に、絵里はカチンときた。

ドイツ語がまるでわからない絵里は、お店に入ってもメニューが読めない。しかもこの記念すべき夜に、一人で帰れとは、なんて言い草なのか。ドイツ人特有の頑固さというか、妥協しないマリーのかたくなな態度に、絵里はかっとなり、思わず日本語で、

「信じられない！　こっちは外国から来てるっていうのに、なんて言い草。自分勝手な人ね」

と口走っていた。

「何？　何がいいたいの？日本語じゃわからないわ」

「あんたは……」

こういう時、なんて言えばいいのだろう。咄嗟に絵里の頭のなかを、イタリア語と英語の貧困な単語が駆け巡る。

「あんたはね、……あんたは、エゴイストなのよ！」

「ヘッ、ヘッ、ヘッ」

マリーは怒りもせずに、ヘラヘラ笑って、絵里の肩に手を回した。

「今日はシルベスターだもの。おいしいものを食べようよ」

さすがにマリーは大人だ。絵里の雑言に少しも動じることなく、落ち着いている。絵里は彼女になだめられたような格好になり、それからまだしばらく、二人は暗い道をさまよい続けた。

あちこちで爆竹が大きな音をたて、閃光にきらめきながら真っ暗な空に向かって飛んでいく。爆竹好きのドイツ人は、すでに昨夜からさかんに爆音を響かせていたが、真夜中まで待ちきれない若者たちが、早くもエキサイトしているのだろう。

「またレーパーバーンへ行く？」

レーパーバーンは港の反対側の内陸部にある。いくら歩いても灯りがついている先はビヤホールだけだが、レーパーバーンまで行けばまともなレストランにありつけるかもしれない。マリーは行きたそうだが、

「今日はいやだわ」

絵里は乗り気ではなかった。再び、川沿いの人影もない暗い道をあてもなく歩く。

（きっと今ごろ、多くの人たちはカウントダウンのパーティーを目指して、お召し替えでもしているんだわ。まったく、大晦日に食べ物を求めてさまようなんて、なんてついていないの。こういう時に予約もしてないなんて、マリーはほんとに田舎もんだわ）

一時間近く歩き回った挙句、やっと、予約制でない一軒のレストランにたどりついた。絵里は、まさに天のお恵み、奇跡が起こったという心境だった。

「私たちは友達よね」

席に着くなり、マリーはウインクしながらいう。

「そう、あなたはいい友達だわ。……だからここは私のおごりね」

絵里も笑って答え、ぎこちなかった空気がなごみはじめた。

気丈なマリーは、決して自分の信念を変えない粘り強い女だ。自由に生きる彼女の生活ぶりを見れば一目瞭然である。一時が万事で、食事でも買物でも、どんな些細なことにも自分を曲げない一途さは、頼もしくもあり滑稽でもある。そんなマリーを、絵里は今、とてもいとおしく感じ

ていた。

「私の住むバイエルン地方は、滅多に魚を食べられないの。海は遠いからね。だからハンブルグで、思う存分魚を食べたかったのよ」

マリーの言い分はもっともだ。いつでも好きな時に魚が食べられて、すぐに繁華街に遊びに行かれる東京とは、まるで暮しぶりが違う。

あらゆる国の食べ物が溢れ、娯楽や遊びに事欠かない国は、世界中探したって日本のほかにないだろう。ドイツといえども、日本に比べればずっと田舎で不便な暮しなのだ。こっちの人間はきっちり休みをとるから、日曜にはほとんどの店がクローズする。バスや鉄道などの公共交通も、普段からそれほど頻繁には走っていない。だがそれが、人間本来の素朴で豊かな生活だと、絵里はドイツを訪れるたびに思う。

都会の便利さや刺激のなかで生きている自分は、もうマリーのような新鮮な感嘆を感じなくなっている。心も体も不感症に陥って、麻痺しているのかもしれない。だからこそ、マリーの見せる飾り気のない驚きや喜びに、絵里は惹かれているのだろう。

マリーが望んでいた魚料理の店で、日本の数倍もボリュームのある魚のローストと、ジャガイモ、スープ、シルヴェスターにふさわしい御馳走を口にして、二人は互いに満足の笑みを浮かべた。来た時は閑古鳥だったが、帰る頃になってテーブルは満席になり、レストランはようやく活気づいてきた。どうやらスタートが早すぎたらしい。いよいよこれから、世紀の変わり目へと突入するのだ。

ホテルに戻るとパーティーたけなわで、ロビーや廊下を、ドレスアップしたドイツ人たちが行き来している。絵里の羨ましそうな眼差しにマリーも感づいたのか、

「こんなに寒いんだもの、部屋で過ごすのが一番よ！　ねえ、窓の前に椅子を持ってきましょうよ。こんな特等席はないわよ」

部屋に戻ってシャワーを浴びると、二人は窓の前に椅子を置き、すでに前日に栓をあけたシャンパンを飲みながら、カウントダウンを待った。

三階の部屋からは、港の様子がよくわかる。桟橋のレンガ造りの建物と時計台、川、川向こうのコンテナ船などが、すべて闇のなかで一つになり、オレンジ灯だけが宝石を散りばめたように光っている。次第に、ホテルのすぐ横にある地下鉄の駅から人が掃き出され、続々と港に集まってくる。十一時を過ぎると、ホテルの前も、駅から港へつながる歩道橋もあふれんばかりの人の波となり、爆竹と花火の煙で空気が澱んでいる。エキサイトする群衆を見越して、あらかじめ救急車数台が待機しているほどだ。

早くもシャンパンを開けてしまった二人は、すかさずホテルのボーイを呼んで、もう一本頼んだ。

「一緒に飲みませんか？」

マリーが若いボーイに声をかけると、満更でもなさそうだ。

「いや、仕事中なもんで……。一時に仕事が終わるから、その後ならいいけど」

「とにかく乾杯よ！」

ボーイにも一杯飲ませて乾杯すると、マリーも絵里もすっかり心地良い酔いが回っていた。

やがてクルージング中の船数隻が港に戻り、湾内を旋回しはじめた。ライトアップされた船が動きを止め、ぐるりと並んで暗闇に浮かぶと、一瞬、絵里はあらゆるものが静止したような感覚に陥った。そして十二時ジャストに汽笛が一斉に鳴り、夜空に打ち上げ花火の閃光がきらめき、爆音と人々の甲高い歓声が響き渡る。

「乾杯！　新年、おめでとう」

抱き合ってシャンパングラスをかち合わせたマリーと絵里は、窓から身を乗り出して、外にいる人たちに手を振った。なんてすばらしいんだろう。熱狂的な興奮の渦のなか、新しい世紀を、知らない街の大勢の人とこんなに盛大に祝えるなんて、夢のようではないか。マリーと一緒にここに来られたことが、絵里は心からうれしかった。……そして感極まって酔いつぶれ、しらないうちにベッドに倒れこんでいた。

あれからマリーとは会っていない。今年のシルヴェスターは、どうやって過ごしているだろうか。過去に引き戻された絵里が甘美なノスタルジーに浸っていると、注文したケーキが運ばれてきて我に返った。この店の大ぶりのケーキは、絵里の好物だ。酒に浸したスポンジには、おおぶりのナッツとチョコレートの破片が入り、こってりと舌にからみつく。まさに官能的な味わいといっても大袈裟ではないだろう。

その時、若い男が一人、フラリと店に入ってくる。

「今日もいらっしゃるとは思いませんでしたわ」

常連客なのだろう。女の給仕が応対している。

ケーキを味わっていると、何やら後の方でガチャガチャと音がする。振向くと、一人でコーヒーを飲んでいた中年男と、今しがた着いたばかりの若い男の二人が、将棋盤に向かってゲームに興じている。

（大晦日にカフェでゲームなんて、おかしな人たち）

絵里はクスリと、小さな笑いを洩らした。

今年も、もうすぐ終わりを告げる。当たり前のことだが、もう何十回となく、大晦日を体験してきた。一年ごとにさまざまな思い出があって、一つの出来事が忘却に葬られていく一方で、また新しい巡り合わせがやってくる。その繰り返しはいつまでも続くような気がするけれども、案外、自分で思うほど多くはないかもしれない。あと何回、絵里に大晦日が訪れるかはわからないが、確実に回数が減っていることだけは確かだ。そんなことを大真面目に考え出すと、恐ろしさで頭がこんがらがってくる。

（帰って、シャンパンでもあけようかな……）

シルヴェスターの宵を感じながら店を出ると、絵里は愛猫の待つ家へ向けて再び車を走らせた。

貸しはがし

中泉　聖司

（一）

「わたしはここには居らへんのや、ここには存在しまへん！　支店長は本部！　猫田は本部に行っとりまんねん！」

いつもの出勤時間より一時間早めて山田がQ銀行の青山支店に入ってきたとき、支店長の猫田は電話を握った若い行員に向かってまくしたてていた。

「断りなはれ、わたしはあの二人には会いまへん！　三日まえからみんなに言ってますやろ」

席に到った山田を見ると、

「山田！　副支店長！　しっかりしいや！　わたしの方針が部下に徹底してまへん！　副支店長の責任だっせ！」

山田の顔が曇った。

支店長の脇役として尽くさねばならない立場にある役職であることは充分承知をして、猫田の

指示を受けて仕事はこなしていたが、最近になって最悪な上司に巡りあったものだと内心、自分の不運をなげいていた。

今日は年度末最終日だった。山田は取引先の担当行員に、出勤時間を一時間早めるように昨日指示を出していた。出勤していた彼らは、早朝から険悪なムードがただよっている店内の雰囲気に、出鼻をくじかれたように押し黙ったまま猫田支店長の様子を伺っている。

毎年やってくる三月三十一日は、大切な日で緊張するものだとわかっていたが、今年は格別だった。

直属の上司とソリが合わない、肌が合わないというような単純な好悪ではない。

今朝も濁り水を飲まされているような不快な気分を味わっていた。

支店長が避けている二人の男とは、建材卸販売会社D商事の藤田社長と小山専務だった。

昨日まで猫田支店長は本部に出かけている、と居留守を使い、支店長が行員の背後に居ても〈出かけていることにしなはれ〉と言わせて電話を受けない。ウソが言えなくて返答に窮しうろたえている行員を横目に見ながら平気な顔をしている。

「まったく鈍感な男や！　朝、はようから出てくる気持ちはありがとおまんが、きょうが今期のどんな日であるかがまるで分かっていはらへん……あほかいな」

隣席に座った山田副支店長に、投げつけるように言っている。前支店で赴任していた大阪弁が言葉のはしばしにでてくるのを聴いているが、山田はその心底を知っているだけにその話しかたがうとましい。

「山田君、私はまもなく出かけまっさ。社用車が帰ってきたらすぐに連絡してや……」

声をかけると、素早く二階の支店長室に向かって行く。

「未熟だすな、みんな、まだまだや……」

側に聴こえるように濁声でつぶやいている。

猫田の目には、不器用で不忠な行員のすがたにしか写らなかったのだろう。

昨日までの早春らしい暖かな日和とうって変わり、朝から肌寒い小雨模様。

開店と同時に雨の匂いが店内に満ちてきた。

山田の動きには生気がなく、顔の表情は暗かった。

彼の気持ちが暗くなっているのは、この雨の所為だけではない。

猫田支店長の対応は銀行マン、否、人間としておかしい。さすがに今日は、なんとかしなければなるまい、このままではD商事が倒産してしまう。

「青島くん！」

山田はパソコンのキーボードを操作している若い行員に声をかけた。

「支店長は今日も逃げて行くつもりだ。今こそ話そうと思う、キミも来てくれるかい」

「はい！　当然です。わたしが担当ですから」

山田は意を決すると、青島と支店長室に入って行った。

窓の下を覗いていた猫田がいきなり怒鳴ってきた。
「おい！　社用車が遅すぎまっさ！　Sシステム社の横山社長との約束に遅れまんねん！山田君！　定年前の運転手だからといってあまり甘やかしたらあきまへん」
雨滴を垂らしたガラス窓の反射を受けた猫田の青白い顔が引きつっている。
「すみません。雨で車が渋滞しているのではないかと思います。まもなく帰ってくると思いますが」
山田が甘やかしているわけではない、猫田の命令で朝一番に虎ノ門に赴任した新支店長へ猫田からの昇進祝を届けさせたからではないか。顔が強張ってくるのを感じる。
「少しお話があります。是非聴いていただきたいのです」
「なんだんねん、そんなおかしげな顔しなはって……」
まずは支店長の気分を治めなければなるまい、話を聴いてもらうためには。意識的に笑顔をつくる。
「青島君ちょっと、ガレージを見てきてくれませんか」
D商事担当の青島が不安そうに山田の目を伺っている。
青島はD商事の手形決済がうまくいくことを何より心配していた。今日こそ自分からも支店長に融資の継続を進言するために支店長室に同行していたのだが。
「いいから行ってくれ、わたしが支店長にご説明するから、すぐに車を回して下で待たしておきなさい。後で上がってくればいいから」

支店長室に直立した副支店長の山田は、藤田社長と小山専務から依頼を受けている内容を説明しはじめた。
居留守を使い始めた猫田支店長に代わって、何度も苦渋の言い訳をするために面談しなければならなかった立場上、今、彼らの真意を伝えようと思っている。
「D商事の新しい経営改善化計画書を見ていただいたかどうかを、藤田社長がたびたび聴いてきております。来期は全社で総力をあげて売上を倍に増やすと言っています」
その計画書は、一ヶ月前から支店長席の右隅の箱に入れられたまま、猫田は無視してそれを今日まで見てもいない。それを知っていた山田の気持ちは重かった。毎日のように電話や訪問を受けてはいたが、自分の口から事実を言えない辛さに心を痛めていたので、半ベソをかいた子供のように声が泣いていた。
「売上増加と、言ってはりまんの……それは絵に描いた餅だす。あの書類は本部に回してあることにしておけばよろしい、結論はとっくに出てまんねん」
「支店長がお約束をしました三億の融資を、本日、実行して欲しい、と言っています」
山田は懸命に続けた。
「来期の資金計画も立て、協力して欲しいので至急、お会いしたいと、何回も社長と専務が支店にお見えになり、懇願をされています」
「山田君……キミも承知でしゃろ！　あの融資の約束は繰上げ返済を迫るための口実にすぎませんん！」

「……」

「四十五億もあった融資残を十五億まで減らしましたやろ！何も知恵を使わないでこれが出来まっか……、ウソも方便と言うじゃおまへんか、ことわざを知りまへんのかいな」

予期していた返答ではあるが、その言質は違う、これは裏切り行為だ。山田が教えられた〈ウソも方便〉は相手が悲しんでいる心情を察して安どの領域に相手を導く、人の愛情心からでるべきものなのだ。

猫田支店長が豹変するまでの光景が山田の脳裏によみがえっている。

「資金が不足した時には、いつでも融資します！ですから一時的でも債務を減らして金利負担を軽減したほうが経営は楽になりますよ。」

対外的にはできるだけ関東言葉で丁寧に話すようにしているから、話の本質にウソがかくされていようとは思いもしない。

猫田の提案を誠意で受けとった藤田は、これに応じて余裕資金のうちから何の疑念も持たずに十五億を返済した。

一ヶ月後に試算表を見て、

「まだまだ余裕資金があるようですね。」

「いえ、これは運転資金に回さないと、何か手形の事故でもあったときの為に残したい資金です」

D商事の小山専務が不安そうに拒否したこともあったが、

「そのためにメインバンクがあるのではありませんか！　私に任せてくださいよ」

その都度、猫田はしつこく食い下がり、手を擦りながら、やさしい声で何度も融資の約束を繰り返していたのだ。

ついにD商事の手持ち資金は返済に次ぐ返済で、もはや自己資金は底をついていた。

今月は三億の融資を受けなければ、一部の手形が落とせなかった。そのためにD商事は猫田が要求した新経営計画書を提出して融資の継続を信頼していたのだが、その提案は融資の打ちきり宣告を年度末ギリギリまで延ばす口実でしかなかったのだろう。

この男はウソ八百を並べてD商事の余裕資金を吸い上げたのか！　人の心を食い散らす二重人格者だったのかと考えながら、猫田の口の動きを山田は唖然として見ていた。

「わが国の金融政策、すでに知ってはる通り、当時と今では事情は一変していまんねん。金融監督庁の考査基準の通り、当銀行の査定によってD商事に来期はありまへん。あの返済を求めたときから、今日この日がくることも見えへん経営者に用はありまへん。このまま存続させると煩わしさだけが残りまっさ。情状酌量は将来、我々に災難をもたらすだけでおます！」

出てくる言葉を受けている山田は冷水を浴びているような気分になり悪寒が全身に被ってきた。

猫田は自分の言葉に確信を深めているのだろう、細身ではあるが胸をそらして山田を威圧する。

そのとき青島が靴音を響かせて上がってきた。

「おう、やっと車がきましたか……出かけまっさ！」
「今日の手形決済分の融資だけは必ずお願いします。実行しない訳にはいきません。支店長！　約束を守らねばなりません」
学生時代にラグビーで鍛えた山田の体が猫田の前に出た。
「長い間、当行がお世話になった取引先です、お願いします。貸金が多くなったのは当時、D商事にとっては貸金が不要な時代に当行がお願いして借りていただいたのです。当行が株式の上場を指導して資産を増やせ、と、言って資金を貸し、不動産を購入させるために、あの当時、無理なお願いを受けてくれた会社だと聴いています！」
山田は声を絞り出して低頭した。温厚な山田がはじめて精一杯の抵抗をしている様をみた青島も猫田の前に進んで頭を深々と下げて言った。
「支店長！　お願いします。助けてください。資産は多い会社です」
猫田はその前を塞がれてムッとしたが、すぐに声を荒げて言った。
「その結果が今の日本の不況をつくったのではおまへんか！　資産デフレ、その見極めができずに過剰債務をひきおこしてきたのではありまへんか！　キミは何という頭の弱い男だっしゃろ！　アホなことを言う奴だっせ！　先輩が淘汰されはったようにキミたちもポジションを失いたいのでっしゃろか！　まあ、今の話は、ここだけの話で、わたしは聴かなかったことにしまひょ、出世したければ二度とそんなことを言ったらあきまへん……」
青島が絶望的な表情をして猫田を注視している。

「青島！　あんさんは今日からD商事に行かなくてよろしい。担当をはずしまっさかい……、山田君！　もう、D商事の話はしてはなりまへん、どんな話も私には取り次いだらあきまへん」
「しかし……」
「そこをどきなはれ！　じゃまでんがな！　今の時代は知恵を使うのだす。まったく、大男……知恵と文殊は……まわりまへんか！」
山田の脇をすり抜けるように出口に向かいながら、
「もう、キミらは今日をかぎりに電話に出なくてもよろしい！　きょうかぎり二人に会わなくてもよくなりまっさ！　らくになりまっせ」
山田は赤く顔を染めてうな垂れている。猫田はドアを開けて振り向きざまに、
「もう、キミとの話は終わりだす！　これは支店長命令だっせ、キミも副支店長として的確な処理をしなはれ！　融資は打ち切る！　あとはキミの任務として二人が来たら最後の宣告をしなはれ」
D商事は当支店始まって以来の顧客で、前支店長から今までの恩義を大切にしてお付き合いをするように、と引継いでいた取引先のひとつである。
この落差はをどう説明したらいいのか、果たして、こんなやり方で良いのか。
「支店長……D商事は倒産します……」
「そうゆうことだす！」
D商事への融資話の打ち切りを副支店長の山田に最終宣告の役割を押し付けると、猫田は青山

支店を逃げ出すように支店長車に乗り、九段の靖国通りを抜けて新興企業のSシステム社に向かっていた。

「バカな奴らだな。激動の世の中なのに！いつまでも改革のできない企業には明日はないものを……人情だけで融資はできない」

猫田支店長は車窓から小雨にけむるオフィスビル群を見ながら、当分の間は建設ラッシュの時代は来ないだろうと判断していた。当然、建材商社に将来性はないと決め付けていた。

D商事株式会社の藤田社長も小山専務も今もって、猫田の真意を知らないのだ。

猫田の顔がまた、苦しそうに歪んだ。

これまで、偽計を用いて回収を進めてきた自分の判断と行為に一抹の罪悪感が湧いているのだろうか。自分の良心に呼び覚された憂鬱な気分を振り切れずにもがいているのだろうか。

猫田は咽喉の奥を鳴らしながら小声で呟いた。

〈融資の打ち切りが罪になるとは銀行業始まって以来マニュアルには書かれてはいないぞ。企業に金がなくなれば倒産するしかなかろうに！　俺は今更何に怯えなければならないのか、俺は本部の貸金回収マニュアル通りに判断したのだ。金融監督庁の指示に背いているわけではない。オレは今、日本の産業構造の改革に寄与しているのだ。いま人情を入れてD商事に金を入れ、貸金の残高を増やして失敗すれば支店長としての責任を問われ、役員への昇進時期が遅くなる。自分がQ銀行で満開の花を咲かせる時期が遅れるだけのことだ、絶対に同期の連中に遅れをとりたくないぞ〉と。

歪んだ目尻、それは猫田が論理を詰めていくときのクセなのだ。

「桜の花は遅れても……」

思わず大声をあげて次の言葉を飲んだ。

それとも知らず運転手がその言葉を受けて答えた。

「遅れる……今年の店内の花見は、いつになりますでしょうか？」

「そうだね、花見でっか！　去年はどうでしたかな？」

猫田は苦笑いを押し殺して答えた。

「青山墓地で花を見て、〈N寿司〉でパーテーをしましたよ……」

嬉しそうに老運転手が答えた。まもなく定年を迎える老運転手にとって、花見会はすべての行員と歓談できる数少ない機会なのだ。転出して行った懐かしい行員らとの和やいだ光景が胸に浮んでくる。

猫田はムッとして黙った。支店の花見会などどうでも良かった。

猫田玄一は今年四十一歳、T大の経営学部を出て入行、関西地方の支店を歴任し三十六歳で本部に帰り、審査部から融資管理部次長になり、一昨年から青山支店長に抜てきされて赴任、二年目の春を迎えていた。行内のうわさで入行同期の出世がしらと言われるのを聴いて、エリート意識が常に胸の内でうずいている。

今年は、花見に浮かれて飲んでいる時期ではないな、本部の役員の手前……。

そういえば去年は〈N寿司〉で宴会をし、幹事から会費の足りないことを相談され超過分は新

任支店長の自分が身銭を切ったものだ。

その記憶に呼び覚まされた怒りが、猫田の右目の下に陰のようにある卵大のシミをふたたびゆがませた。あの時は、赴任した早々だから部下のために仕方がないとあきらめたが、今になって見るとこんな役立たず行員の多い店だとは思わなかったからだ。仕事はハンパなくせに、遠慮もなく甘いっぱい飲む奴ばかりで、俺の為にロクな仕事も出来ない。今朝もそうだ、情に流されてオレを説得しようと企んでいた山田と青島、奴らのために二度と身銭はきれるものか！　と結論を出して、

「今年はやめだ！　今の時代にそんなバカなことをやって浮かれている会社は倒産しまっさ！見ときなはれ！　これからは倒産の嵐が吹き荒びまんねん！　潰れた会社の花吹雪きで春が来る、ちゅうことだす！」

運転手は黙った。信号機が青に変わったのを確認しながら、今度の支店長には青い血が流れているのではないか、と言う行員のヒソヒソ話を思い出していた。

嫌な気分になった運転手は、ようやく花びらを付け始めたそめい吉野に目を移した。

幾十年を重ねてきたのだろうか、濡れた老木が寒そうに小雨の中で震えているように思えて、自らの背中を凍らせていた。

Sシステム社の横山社長と来期の計画を練り、横山にさそわれて昼食にでかける。酒もくみ交わして、料亭での食事を終えた時は、午後二時を回っていた。

いつのまにか雨は上がっていた。薄日の差し始めた日比谷通りを抜けると、猫田は年度末の挨拶をかねて財務省の友人に会うために霞ヶ関に車を向けさせる。

携帯電話のメールを確認する。山田副支店長は支店の応接室で藤田社長につかまっているとメッセージで訴えている。

「女々しい男だすなあ！　あほかいな、ほんまに！」

運転手がギョッとして振り向いた。

「何でもおまへん！　君とは関係おまへんのや。今朝、あれほど厳重に指示を出しといたのに……うちの山田も支店長にはなれまへん！　それどころかリストラ要員のナンバーワン候補でんな」

わたしが指示をした通りに早く結論を言えばいいのだ。支店長の指示に背いて未だに引導を与えていないのが憎らしいのだ。携帯電話で山田副支店長を呼びだす。

「いつまでぐずぐず言わしておますのや！　朝の打ち合わせ通り、融資の打ち切りを宣告しなはれ！　本部の決定だとね」

支店長決済では無くて融資審査部の方針にすりかえて言わせる。

「私が逆恨みされたらイヤでおますさかいに！　私か？　いまから財務省の友人を訪ねる、が、山田君……」

ふと、ある発想が電光のように猫田の脳裏をかけ抜けた。

汗をぬぐっている。次の一手が思い浮かんで思わず掌にも汗が滲んだ。

「山田君、もうひとつ、これから指示することがありまんねん……」
（……はあ……なんでしょう）
「D商事の普通預金残、いま現在の正確な数字を教えなはれ……よその銀行からも振り替えさせた分もね！」
（しばらくお待ちください……）
外苑通りへでると車が渋滞していた。年度末だからしかたがない。
（お待たせしました。……ええと七億六千二百八十五万円です。）
「それを融資残にぶつけて、一括相殺しなはれ！　社長の預金、定期預金、専務のも全てを相殺勘定で消すんだっせ！」
（エエッ！……そこまでやるんですか）
「とん馬な声を出しなはるな！」
「ええか！　良く聴きなはれ！　M建設の債務をD商事が裏保証している五億がこげ付いておまっしゃろう……。今まで、これは棚上げしてきたが、すでにD商事のすべての債務は期限の利益を喪失してまんねん。法的になんら問題はありまへん。ほかで使われる前にやるんや！　一括相殺をするんや！」
山田副支店長の受話器を持つ手がぶるぶると震えて声が出ない。
「山田！　キミも銀行マンだっしゃろう！　今の世の中には人情はいりまへん！　この世は食うか食われるかでっせ！　人情を絡めればワテがつぶれます。そのまえに銀行が潰れまんねん！

命令だす！　川口専務の了解も取っております。心配はいらへん……やればお前も出世できまっさ！　オレが保証するさかい！」
山田は声も出ないほど衝撃を受けていた。日本の金融界に変革の嵐がきていること、それに連動して会社の方針は日々変動し厳しい指令が出ていることを知らないわけではなかった。
自分の出世などはどうでもいい！　この支店長の口からでまかせのウソ八百は現実だった。そのせいでD商事は破綻する、それ以上に自分がいかに無力であるかが思い知らされ悲しかった。
命令には従わざるをえない。自分の一存で金を出せば不正行為で解雇され、損害賠償を受けることになるだろう、その結果は悲惨な人生が待っている。家族を地獄の縁まで道ずれにすることができるだろうか。
支店長の猫田は、恐ろしい男だと思う。が、どう足掻いてみてもこれに同調するしかないのだった。
「D商事の取引先、すべてに通知を出せるように手配をしておきなはれ、D商事の売掛金はぜんぶ当行に支払うように連絡をするのだす。倒産した会社に支払わせてはなりまへん。D商事の相手先の資料はすでに取ってあるさかいに、それを利用しなはれ」
想像もしなかったあさましいやり方に山田は声を飲んで、猫田に返答ができない。
電話は一方的に切れた。
これを実施しても法的な手続が残ることはわかっていたが、猫田は満足していた。完璧だ、と考えた。当行は無傷で逃げることが出きるだろう。

間もなく三時がくる。支店のシャッターが降りて行く光景が瞼に浮んでいた。
決着だ！　自分の才覚で不良債権が膨らむことなく幕をおろしていく、明日には栄光の舞台の幕が開かれる。今日の悪徳は一瞬の幕間にすぎない。
本部役員の川口専務、丸井常務の機嫌のいい顔を思い浮かべ猫田の眼にかすかに笑みがこぼれていた。
今夜はこの前楽しんだところで女でも抱きたいな、それくらい良いだろうさ！　いい仕事をしているんだから。

（二）

午後六時、D商事の藤田社長、小山専務は地銀のT銀行麻布支店の応接室にいた。
藤田社長が俯いて豊森支店長に頭をさげている。
「私共に入金を頂いていた御社の売上金も無い……全部Q銀行行きですか！……」
豊森が深いため息を吐いた。
小山専務がQ銀行の指示で今日の午後一時にT銀行に振り込まれた売上金の三億四千万をQ銀行に送金したのだった。小山が掌の汗を拭いながら平身低頭した。
「御社とは先代からの長いお付き合いですから……なんとかしたいが、今となってはわたしの力ではどうにもならない」

「私が……Q銀行の猫田支店長にはめられた！　全て責任は経理担当の私にあります！」
顔を上げた小山の眼が真っ赤だ。
「専務、もうそれはいい……何もかも僕の方針だったから」
社長の藤田が小山を遮ると、
「長年、お世話になりました。豊森支店長さんをはじめT銀行さんの皆さんには誠に申し訳ありません。Q銀行の融資は始めから予定に無かった……。そんなことにも気が付かない私が経営者として失格です。今となりましては、二回目の不渡りが公に出た後の対策についてお話をしておきます。」
応接の本棚の中には、去年発刊し贈呈したD商事の五十年史がみえた。
すでに亡き先代を称えて自分の企画で出したものだ。華やかなパーテーを思い出したが、すぐに空虚なものが身体に流れた。
「出来るだけ取引先の皆さんに迷惑をかけない方法をとりたいのですが、豊森支店長さんにも色々とご迷惑をかけて申し訳ありません……」
豊森支店長もD商事の五十年史に眼をやり、悲しそうな表情をみせた。
「御社の社是、〈誠意〉がアダになるとはね……時代とは言え、やりきれませんね！　そのまま分割返済されていれば何でもないものを、無謀な一括返済を求めて企業の体力を削ぎ落として計画的に抹殺するとは！　冷酷すぎるよ！　私たちには出来ない！」
金融資本が企業や人を育てる時代は終わり、将来性の無い企業を潰す時代にあることを、この

経営者たちは本当に気づかなかったのだ。

豊森支店長も藤田社長に世間並みの人員削減を進め、企業の体質を強化し財務内容の健全化を計ることを提案したこともあったが。

ところが藤田は〈人が財産〉です。縁あって会社に来ていただいた人には一生のつき合いをしていきたい、との社長の信念を聴いて、豊森はこの会社の伝統を理解したので、伊豆下田への社員旅行、ゴルフを通じて交流を深め、心情に触れ、語りあい、さらに人間的にこの二人と温かい社風が好きになったのだった。

いま何かこの二人に出来ることはないのか？

すでに数億の支援は今では遅すぎる。本部と掛け合っても一回目の不渡りを出した企業には融資の道は無い。

せめてこの二人だけに五百万づつの無担保融資くらいは手配できる。支店長の職をかけて。

「とうざ、生活の凌ぎくらいにしかならないが……」

と説明して、ローン申込書を行員に持たせようとした。

「ご心配をいただいて、有難うございます。これ以上どなたにもご迷惑はおかけできない……」

小山専務が社長の言葉に頷きながら豊森支店長の好意に涙を落した。

「これから社員の皆にお詫びをしなければなりません。豊森さんのお気持ちはこれからも忘れることはありません。……本当にありがとうございました」

二人が肩を落として出て行く。

支店のロビーを通らずに通用口まで豊森が一人で送った。

花冷えの夜風が通用口に吹き込んで、今度は二人とも無言で深々と頭をさげた。

豊森支店長は、二人の心中に思いをはせ胸が痛かった。

倒産劇の背後に潜む、これから避けられない死にもの狂いの激務が待ち受けていることを知っており、何か二人にできることはないかを模索しながら路地に消えていく二人の背中に無言で熱いエールを送っていた。

（三）

四月四日、午後八時、D商事の藤田社長と小山専務は伊豆の川名にある会社の山荘にいた。

JRの伊東駅からタクシーで山を登って来た。

「今年は暖かいから……もう満開です。桜は毎年満開が来ますがね、あるとき花の咲く頃景気が良くなるなんて言った政治家がいましたがね、景気はいっこうに花開いてこない……」

世間話で老運転手がグチをこぼしている。

「もっと、悪くなるんでしょうかね、わたしらにいまさら痛みを受けろと言われてもねえ、これまで良い時が無いんだから、われわれにはもう、死ねということですわ」

毎年景気の予測は大きく外れている。それでも政治は国民に痛みを求めてでも構造改革をすると言う。

「痛みに無縁な連中もいるだろうが……」

猫田と同じ類を想像して、二人は顔を見合わせて苦笑しながら、満開になった桜並木までくると運転手にチップをはずんでタクシーを降り、花を眺めながら歩いて別荘地に着いたのだった。

仕出屋から花見料理を取り寄せて、備付の温泉で身体を流した後に二人は和室で酒を酌み交わしていた。

「ここ二週間くらいは、まともに食事も取っていなかったが、専務には苦労をかけたな……」

藤田が小山に冷酒を注ぐ。

「そんな！　……社長こそご苦労様でした。……経理担当の私の不手際で、こんなことになってしまった！　いまに奴を殺してやろうと考えています！　それで勘弁してください」

小山専務が深々と頭を下げて黒檀のテーブルに額をつけた。

「オイオイ……小山ちゃん、物騒なことは考えるなよ！」

「あんな奴、青山に赴任してきたときに殺しておけばよかった。強盗殺人犯より始末が悪いやつだった。一度、豊森支店長が言われた時に繰上げ返済をやめるべきでした。わたしが強力に反対しなかったから……」

「それはわたしが判断したことだ。出会いと誠意を大切にしてきたから、相手も同じ誠意を持った人だと信じてやってきた責任は私にあるのだ」

「これまですばらしい歴代の支店長に出会い、いつでも麻布支店の豊森支店長のように人間的に接してくれる人ばかりであったのに、あいつだけは人間じゃないです」

「日本が変わってきているのかも知れない。我々は日本にはもう必要のない人間なのかもしれないな」

農耕を主としながら自然と共生をし、家族、友人、師弟で結合してきた民族の精神は、最早、不要なだけではなく害悪だとして疎外されなければならない時代になっているのかも知れない。

「日本は、いま劣後してきた産業や企業を、不要なものとして区分して切り捨てる政策をとっている。それが構造改革という明文をうたって変革を求めているのだろう。それは私も知ってはいたが……わたしの経営の失策で、人に迷惑をかけ、先代が長期にわたって創り上げてきたものを一瞬に壊してしまった。私の誠意が足りなかったのだ。それによって会社の信用が崩れてしまったことが何より口悔しい」

藤田はそう言って頭をごんごんと両拳で叩いている。

「……やっぱり奴を殺す！　そうしなければ死んでも先代に顔向けができません……。わたし一人くらい刑務所のご厄介になろうとも……」

小山はテーブルに伏して泣いた。頭を上げない。

「おい！　その格好は、まるで花見料理を狙ったトドみたいだぞ！　顔を上げて！」

藤田も胸に突き上げてくる熱いものを飲み込みながら、掌で小山の頭を撫でている。

思えば先代の時期から四〇年近く謹厳実直に勤め上げてくれた男だ。猫田に裏切られてさぞかし無念なのだろう。

「さあ、飲もう……今夜は飲み明かそう！」

「わたしのこの頭がトドですか、トドのつまりが金詰り……」
小山は涙を指でぬぐいながら笑った。
「うまい！　……座布団一枚あげよう！」
静かな部屋に笑いがこぼれた。

この山深い別荘の庭園にも一本の山桜が植えられていて、いまライトに浮かびあがっている。風にふれて、庭石の上に小さな花びらが一つ、二つと音もなく舞いおちている。
その向こうから闇を割って、取締役の田村の顔が浮んできた。
三月三十一日夜、役員会の情景が眼に浮んでくる。会社破産の報告をして小山専務とともに床に土下座をして謝ったのだが、五名の取締役のうち田村だけが二人に喚き散らした。
「退職金もないのか！　冗談ではない！　娘を売ってでも金をつくれ！　それが君らの責任だろう！」
藤田社長は、その場景を思い出したのか苦痛に顔が歪んだ。
娘を売れ、とは！体中に打撃を受けた。今、ふたたび情けなさが身を包んだ。
「ごめん！」
今度は藤田が卓上にひれ伏したまま顔をあげない。
「苦労をかけて、申し訳ない！」
「今度は社長がトドですか！　トドのつまりは飲みましょう！　今夜は」

二人はあふれる涙を拳でぬぐい、笑いながらグラスを合わせた。
「わたしも良い花の時期もありました。良い想い出ばかりです。本当に感謝しています」
藤田と小山は酒を一気に飲み込んだ。
藤田は立ち上がると庭に面した窓をあけた。堰を切るように冷え冷えとした早春の夜の空気が流れてきた。
遠くに霧笛の音が聞こえている。伊東湾に霧でも出てきたのか？
春先に庭師をいれて手入れの行き届いた、白い山桜を囲む樹木を薄闇に見ながら、明日は想い出の下田で夕日を見たいなと思っていた。

翌朝、小山が別荘の掃除を終え、出支度が整っていた。
小山が庭に出て、昨夜の残飯を庭木の根元を鍬で掘り起こしながら撒いている。庭木に肥料をやる職人のようにせっせとその上に土を盛り上げていた。
「まもなくいい芽を吹くだろうよ！　その肥やしが効いて……」
藤田が声を掛ける。小山が腰を折り曲げて垣根の方を見ている。
「もう野良猫が来ている……。すごい臭覚だ！」
シッシッと追い払っている。
「猫もエサに飢えているんだよ！　少しは分けてやれよ！」
「猫は嫌いだ！　特にアイツはあの野郎に似てやがる！盗人猫のくそったれ！行け！行け！お前

なんかに誰が食わせるもんか！　野垂れ死にしろ！」
小山が物置からシャベルを取って返すと、更に厚く土を盛り上げて残飯を隠している。
フーと息をついて安堵の色を藤田に見せたが、ガサッと音のする茂みをにらみ、
「あの猫！　目の下が黒斑（ブチ）になった奴で、油断もスキもならない奴！」
何ごとかブツブツとこぼしながら、手を洗い部屋に上がってきた。
「小山ちゃん！　見て、あれを見て！」藤田が笑う。
黒斑の猫が、小山がさっき架けた土を掘り起こしている。盛んに両手を交互に使って黒土を跳ね飛ばしていた。
「コンチキショー！」
小山が真っ青な顔をして駆け出そうとしたが、すぐに藤田が小山の肩を引き止めた。
「猫田じゃないんだ！　奴はただの野良猫なんだから、食わせてやれよ！　俺たちと同じで住家がない連中だぜ」
小山もそれは解っていたが、無性に腹が立っていた。Q銀行支店長の猫田の顔が脳裏に絡んでいた。卑しい顔だった。半年前までは猫なで声で〈貴社の融資は前面的に応援します。今は銀行も手持ち資金が苦しいので企業の余裕資金を貸してください。その後に御社のために返済金に見合う融資枠をつくるのは当たり前ですから。御社とは長いお付き合いで全幅の信頼関係がありますから！　いつでも必要な時にお申し出ください〉
小山は両耳を覆って頭を振っている。

苦しいのだ、やっぱり当分は心の傷は治るまい、と藤田は思った。小山が帰した妻の古里の農家に潜ませて、しばらく養生をさせよう。わたしは父母の眠る下田に行こう。
「生き延びるには、あの猫のようにならねばならないのだろうか！」
藤田はやり場の無い悲しさに襲われていた。油のようにひかる下田の海の波面を思い起こして、父母の姿を重ねていた。
「オヤジは不肖な息子を怒っているだろうか……。もう一度、オヤジに会いたいな、母のやさしい声が聴きたい……」
カエデの老木に与えたゆうべの残飯が、猫の知恵と生きるための執念で食われている。
老木はこれを拒む術を持たないし、自分を犯す何ものにも恫喝を与えるための声もでない。
それどころか猫は魚の小骨が絡まった老木の毛根までも噛み砕いているではないか。
もう一匹が現われた。互いに威喝を始めた。またその後から黒いのが一匹来ている。
冬場の山中で、どこでどうエサを獲ってきたのか、いずれも丸々と大きい。
「殺してやりたい！　こいつらめ！」
小山の声でビクッと顔をあげて、しばらくいじけた眼で人間を警戒していたが、本能的に危害を加える人ではないことを感じとったのか、猫同士が争いはじめた。威嚇の声を荒げて夫々が交互に飛び掛り、逃げながら掘り起こしたエサを食い合う様は畜生そのものの世界を映し出していた。
残飯の争奪戦はすぐに終わった。何も食い物がなくなると猫らは消えていった。食い尽くした

後は黒土が散乱し枯葉や小枝が撒き散らされている。
庭に出た小山が箒でそれを刷き寄せながら、まだ怒っていた。
「恩義も何も知らない猫らだ……」
「犬は一生、猫は三日とよく言うじゃないか。一食一飯の恩義をうけた犬は生涯なついて人を裏切らないが、猫にはいくら尽しても三日で恩義を忘れられてしまう……」
「猫田らのグループと一緒ですねえ、社長！　あいつらに真心を尽すべきではなかったです」
藤田は苦笑した。むしろ野良猫に自分の姿を重ねて考えながら、
「猫も環境によって変るのさ、環境がすべてを狂わせているのだろうよ、日本のゆがんだ仕組みが節操のない野良猫の集団をはびこらせてきたのかもなあ……」
日本の産業界の中でも狩猟民族の真似をした野良猫集団が増殖してきたし、これを是とした時代がとうぶん続くのかもしれない。営利のためには義理や人情は必要としないのだ。それがドラスチック経営手法として持て囃されている。
結局、自分も小山も時代に取り残された忠犬ハチ公のように忠誠精神だけの未熟経営者だったのだ。今となっては、まさしく犬の遠吠えだとおもっていた。

（四）

別荘にカギをかけて外にでると二人は深々と頭をたれた。石畳に朝日を背にした二人の影が小さく折れて揺れた。
そして藤田は、小山を横席に座らせて4WDを運転して伊東駅に向かった。
ソメイヨシノの大木が爛漫の花に煙って見える。
曲がりくねった道の両手の山肌には乳白色や萌黄色の木々の新芽が今にも吹き出そうに命を膨らませていた。
後部座席に二本の掛け軸の箱が積まれていた。藤田が別荘から持ち出してきたものだ。父親が蒐集した古物だった。
「小田ちゃん、駅に着いたらあれをあげるから持っていってくれ。親父の形見だけど、古物商に見せれば何百万位にはなると思う。今はお宝ブームだから」
「……」
「万一、ガラクタだったらごめんよ！オヤジにとっては自慢の代物だったがね……」
藤田の笑い声は空しく消えて、沈黙が残る。
「……私は社長にお供します！もう帰るところはないんです！」
すでに帰するものは解っていた。社長の子供の時から、小山は藤田の家族の一員として過ごして来たのだ。小山には、いま社長の腹の中にあるものはすべて読めていた。
「いまから猫田を殺しにいく、と言えば許しますか」
「それは猫田と同じ道を歩むことになる……。悲しいことだ」
藤田の胸には針を刺されたような痛みが生まれ、苦痛の表情に顔が歪んだ。しばらくハンドル

に顔を伏せてうめくように言った。
「……死ねるか？」
「当然です！　たいした未練もありません、この世に……」
「専務を死なせたくない。犬死になる！　三面記事でバカにされて終わるだけだぞ、専務には責任はないことを、わかってくれる人もたくさんいる。豊森支店長や山田副支店長は協力してくれるだろう。善良な債権者を守る、後始末を専務に頼みたい！」
「きれいごとで処理するのは簡単ですが、非常識が常識としてまかり通ることになります。社長の魂は死んでしまいます」
死ねば債権者集会にもでない弱虫の男だと罵倒されるだけだろう。死んでも責任意識もない経営者と非難を浴びるだろう。しかし生き長らえて、今の仕組みでどんな後始末ができるだろうか？　たしかに多勢が非常識を常識として通用させて、時代を歪めている。今は死をもって無勢の魂を生かすことしかできない。いつの日にか誰かが歪んだ日本を検証する時節が来ることを二人は確信していた。

伊東から下田にきた。下田港に車を入れて藤田はいつまでも迷っていた。
小山を道ずれにするのが辛かった。連れて来なければ良かったのだが、他所に居てもいずれこの忠誠な男は、経済戦争で敗北した城主の死を聴いて、猫田を殺し、戦国武者のように腹を切るだろう。

夕日が太平洋に落ちていく。
藤田は紅く染まって揺らぐ海面に思いをはせる。
想い出が波のように次から次へ脳裏に押し寄せては消えていく、通り過ぎてきた人生を思う。それは長く、また一瞬の出来事のような気もする。いま故郷で母の胎内に帰っていくのだと自分に言い聞かせている。
小山の表情は菩薩のように落ち着いて見えていた。横顔に笑顔さえ浮んでいるように見える。死に直面した藤田は自分のほうが怯えているようで、小山に心底を悟られてはいないか、心細かった。
防波堤に一本の道ができている。約二百メートル。両サイドにテトラポットがガードして先端まで巡らされている。いまは釣り人がテトラポットの上や舗道に釣りをたのしんでいる姿が見えていた。
いま車のエンジンはニュートラルに入って静かに回転している。
夕闇が迫り一人、二人と切り上げていく釣り人を追いながら、ウイスキーを交互に飲んでいるが酔いがこない。
「怖いか？」
「怖いです」
小山は答える。
「おれも怖い！」

「遺書は書いたの？」
「いりません。余計に苦しむのは、妻も息子も同じです。でも、さっき猫田には手紙を出しました。やがて殺しに行くから待っていろ、と……」
「因果応報ですか……やがて彼も苦しむときがくるだろうがね」
「目いっぱい叱ってやりました！」
フフフ……藤田の口から笑いがこぼれた。
「無駄なことをしたのでしょうか……」
「無駄なことをさせてしまった。ゴメン……」
たった一人いた釣り人が防波堤を歩いてきた。走行先で事故に巻き込む人がいないように、と考えて車の横を抜けていく人影を二人の眼が確認しはじめていた。
「いくか？」
「行きましょう！」
二百メートル先が俺たち人生の終着点だ。エンジンを吹かしてゆっくりと防波堤の道に進入していく。
そのとき黒い羽のような影が右のドアサイドに近づいてくるのが、ハンドルをにぎった藤田の右翼の窓ガラスに見えた。
瞬間、大きな海鳥が車のライトの明かりに寄ってきたと二人は考えた。
バシッと音がして、その物体が窓に当たった。

何だ！　二人の眼が硬直した。
バン！　バン！　と激しく打つ窓ガラスに人間の手の拳が見えた。
やめろ！　やめろ！　と男の声が響く。
さらに車によじ登ってフロントガラスを叩きはじめた男の顔の形相、その顔を一瞥した二人はアッと声をのんだまま息を止めた。
それはT銀行麻布支店長、豊森の顔だった。
豊森はすぐに車の前に出て両手を広げて叫んだ。
「この先には希望はありません！なにもありません！　止まってください！　お願いします！お願い……」
更に後方に伸びる白い道を指差して、
「藤田さん！　小山さん！　あの道に帰ってくれ！　もと来た道に戻らねばなりません！　今の日本は間違いだらけだ！　あの日、あの日まで来たみなさんの道にこそ本当の未来があります！」
藤田はエンジンを止めた。豊森はゆらりと膝を折ると、両掌をコンクリートの舗面について号泣しはじめた。

この作品にはモデルはありません。登場する人物や企業名、場所等すべてフィクションであります。

白い鳩

千坂　精一

（ひょっとして、会えるかも知れない）

そんな思いが、ふと脳裡を掠めた。

今年は例年より桜の開花が早く、まだ彼岸まえだというのに十六日に開花宣言が出た。

昨年より七日早いということだったが、たしか昨年の開花宣言のときも、前年より一週間早いといわれて、おどろいた記憶がある。

ここ二年のうちに半月も早まったことで、温暖化現象が実感された。

暑さ寒さも彼岸まで、といわれているが、今日は冬服では汗をかきそうなので、彼岸入りに合服に着替えて出掛けることにした。

外出仕度をしているうちに、

（会えるかも知れない）

という思いが、漠然とではなく本当に会えそうな気がしてきた。

（あれからもう五十七年か）

指折り数えるようにしてあらためてそう思うと、懐かしさよりも果たして憶えていてくれるかどうかのほうが心配になってきた。

あの日訣れてから五カ月後に異変が起こり、突然解散命令が出た。

身の回り品と当座の食糧を入れた衣嚢を担いで台地を下り、湾岸の小さな町へ行ったが、駅舎は帰郷する人たちでごった返していた。

長時間待ったあと、やっと到着した列車目掛けて殺到する人々の群れに捲き込まれてどうやら乗車出来たものの、行く先々で鉄路が寸断されていて、そのたびに降りて歩き、折り返し列車のくる駅舎に辿り着いてまた乗ることを繰り返していたので、南端の町から九州を縦断してようやく関門隧道を抜けたのは三日後であった。

家族は南信濃の母の従姉の家に疎開していたので、本州へ入ってからさらに四日かかったが、携行した乾パンと罐詰でどうやら飢えは凌げた。

二月から文通禁止になっていたので、母は私の消息を心配していて不意の帰宅に驚いたようだったが、こちらも帰郷出来ることなど信じられず、支線に乗り換えていよいよ目的地に近づいたころになって漸く親許へ帰るという実感が涌いてきたのだった。

こうして、いちおう家族の疎開先に落ち着いたのだが、そこは小さな町で、出入りは最寄の駅を利用するしかなかったから、余所者のくるのが目立った。

そこへ、一見それと判る風体の見知らぬ少年が大きな袋を担いで降り立ったのだから、好奇の

眼で見られて忽ち噂が広まった。

所在なく、退屈紛れに町中をぶらついていると、いつも物珍らしげにじろじろ見詰められるので不快だった。

そんなある日、警察署のまえを通り掛かったとき、たまたまそこにいた警察官に呼び止められて、冠っている略帽を注意された。

他意はなかったが、終日冠っているのが習慣になっていたので、無帽だと頭に風が当たって落ち着かないのだ。

「軍国主義の象徴を身に着けていてはいかん」

私は、その言葉を聴いて耳を疑った。

昨年の四月、まだ入校日までに一カ月余りあって自宅待機していたある日、退屈紛れに歓楽街へ映画を観に行き、入れ替え待ちの列に並んでいたとき、巡回の警察官に見咎められて、交番へ連行されたことがあった。

狭い区画にひとつだけ置かれている机の前に立たされて、

「この非常時に、学業を怠けて映画を観るとは、なんたることか」

と、いまにも食い付きそうな形相で威丈高に怒鳴り散らされたあとで、あらためて住所、氏名、学校名を問い質された。

私が、海軍の学校に入校前の待機中であることを詳しく説明して、肌身離さず持っている合格証を取り出して鼻先に突きつけると、それまで胡散臭そうにしていた警察官の態度がさっと変わ

り、顔を強張らせて、

「お国のために志願されたとは日本男子の鑑(かがみ)です。武運長久をお祈りいたします」

そう紋切型の挨拶をすると、あのときは直立不動の姿勢をとり、挙手の礼をして煽てたではないか。

終戦の日まで軍国主義国家の片棒を担ぎ、陸軍の憲兵と一緒に治安維持に躍起になっていた警察官が、一夜にして変貌し、GHQ（連合国総司令部）の手先になっていることに呆れ果てて、

（この追従野郎）

と真底肚が立った。

（俺たちは、国家に殉じようとしたんだぞ）

国家ぐるみの精神統制(マインドコントロール)で筋金入りの軍国少年に育てられ、国土防衛の楯となり、死して護国の鬼となるよう嗾(けしか)けられて一命を捧げた。

それが、世の中引っ繰り返って、それまでの価値観が全面否定されてしまったのだ。

これからどう生きたらいいのか。極限状態に追い込まれて死を達観していた先輩たちは、衝撃から立ち直れず、憤懣遣る方ない思いで錯乱状態に陥り、暴れ廻る者たちが出てきたために、報道機関(スコミ)に無法者、厄介者の烙印を押されて忌み嫌われた。

そのため、まだ先輩たちの予備(スペア)にすぎなかった私たちまでもが、御多分に漏れず一味同類扱いされてしまっていたのである。

警察官に楯突いたことが知れ渡ったのか、町で行き交う人々の視線が明らかに蔑視と判るようになってきた。

私は、町ぐるみで忌み嫌われているような被害妄想に陥って居心地が悪くなり、こんな偏見の町から脱出したい思いに駆られた。

さいわい、東京の西郊にあるわが家は戦災を免れていた。

年が明けると、元旦に天皇の神格化を否定された人間宣言があり、四日にはGHQから軍国主義者や団体を追放する指令が出た。

軍国主義を標榜して国民を操ってきた指導者たちは、敗戦とともに戦勝国から抹殺されたが、筋金入りの軍国少年に育てられて国家に殉じ、従容として死に就く覚悟を固めた者たちは取り残されてしまい、これからさきどう生きて行けばいいか途方に暮れた。

骨の髄まで叩き込まれた価値観を全面否定されてしまっては、このさきなにを目標にしてどう生きていけばいいのか皆目見当がつかず、虚しい感情を抱いたままずるずると生きるより仕方がなかった。

東京へ戻ってからは、海軍の服装をしていても特に関心を持たれることはなかった。

戦時中も中断することなく文通をつづけていた北陸の都市へ疎開中の学友に頼んで、使い古しの教科書や辞書、参考書などを送ってもらい、受験勉強に精出した。

海軍の学校に入るまでは教師を志して師範順路(コース)にいたので、復学しようと思って当時の担任教師を訪ねたが、呆れたことに軍国主義の指導者だったのが反戦論者に変身していて、

（侵略戦争の片棒担ぎ）

と言わんばかりの冷淡な応対だったので、反省も懺悔もない無節操なその態度に不信感を抱き、復学を抛棄して一般校を受験することにした。

ところが、なんたることか、そこでもまた疎んじられた。

面接で海軍航空隊にいたことが判ると、筆記試験を受けずともいいと言われて帰された。

終戦直後に海軍兵学校、陸軍士官学校の生徒や予備士官たちが無試験で東大などへ転入学した、という報道（ニュース）を聴いていたので、当然特権を与えられるものと思い、なんの疑問も抱かずに待機していたのだが、結果は案に相違して入学を拒絶されてしまったのだ。

これは最近になって知ったことだが、このころGHQは『軍学徒進学制限令』を出して軍関係出身者の大学や旧制高校への進学を極度に絞らせたという。

軍隊のなかでも航空隊員は、徹底抗戦の急先鋒と看做された風潮があったから、ことに睨まれたのであろう。

そんな事情（こと）は知るはずもなく、新国家建設に好ましからざる者との烙印を押されて、国家ぐるみで忌み嫌われていると思い込み、

（頼まれても、入学してやるものか）

と不貞腐れて、ますます荒廃した気分になっていった。

そのころ、新宿駅の東口に、尾津組と野原組の闇市場（ブラックマーケット）があった。

陸海軍からの放出物資や隠匿物資などの架設売り場と、屋台の食堂とがあって、献立（メニュー）は高価

な銀シャリ（白米）の〈握り飯〉のほかは、うどん粉の団子を実にした汁の〈すいとん〉、薩摩芋を煮汁にした〈汁粉〉、内容物のよくわからない〈雑炊〉といった粗末なものばかりであった。

奥の路地には、間口一間、奥行一間半ほどの飲み屋が狭い道にずらりと口を開けて並んでいて、通称ハモニカ横丁と称（よ）ばれていた。

ここで飲めるのは、酒粕を原料にした密造焼酎〈カストリ〉、軍隊から闇取引で仕入れたアルコールを葡萄酒で割った〈葡萄割り〉、メチルアルコールの〈爆弾〉といった如何わしいものばかりであった。

ことにメチルは毒性が強く、失明したり目脂（めやに）で見えない状態になる虞れがあったが、安価ということで危険を冒して飲んでいた。

それは、酒を娯しむというより、アルコールで憂さを晴らそうとする自棄（やけ）飲みである。

私がその闇市場に初めて足を踏み入れたのは、映画を観た帰りであった。

新宿へは、映画館以外に用事がなかったから、そうに違いない。

その時観た映画は、松竹の『大曽根家の朝』か東宝の『わが青春に悔いなし』のどちらかであった。

というのは、松竹の木下恵介、東宝の黒澤明の両監督に魅せられていたからだ。

私は子供の頃から、よく叔父たちに映画を観に伴れて行ってもらっていたが、おもに活劇といわれたちゃんばら映画であった。

だいたいが悪党を征伐する筋書き（ストーリー）で、単純類型（ワンパターン）だったから、子供にも解って面白かった。

そのため、いつか時代劇俳優たちに親近感を抱くようになっていった。
それが、戦時色が濃くなると戦記物が増えていって、淋しくなってしまった。
山本五十六連合艦隊司令長官が戦死して国葬が行われ、岩田豊雄の『海軍』が出版されたことに刺激されて、勧められていた海軍受験を決意した年であるから昭和十八年に違いないが、その年二人の新人監督が登場した。『姿三四郎』『花咲く港』という戦記物でない作品だったので新鮮に感じたのだが、その監督が黒澤明と木下恵介だったのである。
そのことが記憶にあって、両監督の作品が懐かしく思われ、上京して初めて新宿へ行ったのだから、闇市場を覗いたのはその映画を観ての帰りだったに違いない。
もう夕暮れ近かった。
市場の人混みのなかに入ってゆき、当て所なく彷徨い歩いているうちにいつか薄暗くなってきた。
帰ろうとして駅への見当をつけて歩きはじめたとき、不意に背後から声をかけられた。
振り向くと、飛行服を着た不精髭の青年が立っていた。
「貴様、どこにいたんだ」
第三種軍装といった薄緑色の開襟略服に略帽姿だったので、海軍出身と知れたのだろう。
私のほうも、海軍の飛行服だと判ったので、
「七〇一空です。鹿児島県の国分にいました」
「国分にいたのか。そうか、国分か。ちょっと話を聞かせてくれよ」

そう言って、横丁の屋台を囲ったような飲み屋へ伴れてゆかれた。
そこでカストリを振る舞ってくれようとしたが、私が飲めないと断ると、無理強いせずに握り飯とすいとんを注文してくれた。
「俺は、甲飛十一期の佐藤だ。百里原空の艦爆乗りだった」
佐藤は、宣伝された飛行科士官養成の誘いに乗せられて志願し、土浦航空隊に入隊したという。ところが、士官養成なら少尉候補生で卒業のはずが、後輩の乙飛とおなじ二飛曹だった。
そのことが憤懣遣る方なかったようだ。
私も、問われるままに話しはじめた。
昭和二十年四月一日、連合軍が沖縄本島に上陸を開始すると、大本営陸海軍部は全飛行隊の特攻化を決定して〈菊水第一号作戦〉が発令された。
だが、私たち七〇一空所属の二隊は、このときすでに全機突入してしまっていた。
三月十七日に硫黄島守備隊が玉砕すると、敵機動部隊は南九州に点在している航空基地を襲撃してきた。
鹿屋の五航艦（第五航空艦隊）司令部は、急遽第一国分、第二国分基地の七〇一空一〇三、一〇五両飛行隊に特攻出撃を命じた。
二月に五航艦が新編制されたとき、司令長官に着任した宇垣纏中将から、
「全員特攻」
を命ぜられていたので、覚悟は出来ていたが、緊急出撃になったためまだ特別攻撃隊に共通す

る隊名が付けられていなかった。

そこで、とり急ぎ本土決戦のおりに発令されるはずの〈菊水作戦〉の『菊水』と、飛行隊所有の艦爆『彗星』とをとって、『菊水部隊彗星隊』と命名された。

七〇一空は、この十八、十九、二十日の特攻出撃で、保有機の大半を喪ってしまった。

私はこのとき、国分の町の背後にある標高三〇〇メートルの台地十三塚原に急造されたおなじ七〇一空の第二国分基地に配置転換になっていたので、飛行隊は一〇三から一〇五に替わっていた。

三日間つづいた慌ただしい特攻出撃が終わると、この滑走路一本の小さな基地は忘れ去られたように静かになった。

ところが、月が替わるとどこからともなく九九式艦爆が十数機飛来してきた。

それが、佐藤元一飛曹がいたという百里原空の神風特別攻撃隊であった。

その隊は、戦艦大和率いる水上特攻艦隊が沖縄本島を目指して徳山を出港した四月六日〈菊水第一号作戦〉発令の日の午後、二隊に分かれて出撃していった。

九九式艦爆機は、六年前に採用された固定脚機で、開戦時から活躍をつづけてきていたのだが、引込脚の新鋭機彗星にとってかわられてからは九九棺桶と軽蔑されていた。

「貴様は、戦友たちの最後の出撃を見送ってくれたんだな」

佐藤元一飛曹は、当時を思い出して胸が詰まったのか、声を震わせていた。

「俺たちの隊の特攻名は正統隊といった。四回出撃していったはずだ」

（そうか、四回もきていたんだ。それで百里原の名を記憶しているのだ）

自分の隊でもなく、同期がいるわけでもないのに、なぜ百里原の隊が記憶にあるのか不思議だったが、四回もおなじ隊の出撃を見送ったのだからそれで憶えていたのだった。

「俺は、第五正統隊に選抜されていて、六月に出撃するはずだったのだ。それが突然中止になって、帝都防衛にまわされたんだ」

沖縄防衛の菊水作戦は、四月六日から六月二十一日まで十号発令され、その間に出撃した特攻機数は海軍八六〇機、陸軍六〇〇機の大量投入であったが、それでも上陸を阻止することは出来ず、非戦闘員の島民を捲き込んでの凄惨な激戦は八十四日にも及び、六月二十三日に第三十二軍司令官牛島満中将が自決して、ようやく戦闘が終熄した。

佐藤元一飛曹の沖縄特攻出撃は、こうした戦況からもはや起死回生の望みなしと判断されて中止になったのであろう。

私が、第二国分基地で百里原空の特攻出撃を四回も見送ったことを知った佐藤元一飛曹は、親近感を抱いたらしく、現在どうしているかと心配してくれた。

私のほうも、皇国の不滅を信じて悠久の大義に殉じようとした同志の先輩だ、ということで心を許し、従姉の嫁ぎ先の出版社から予約注文受付票作成の仕事を廻してもらっていることを話した。

佐藤元一飛曹は、

「それだけじゃ生活も楽じゃないだろう。俺たちの仕事を手伝えよ。いい稼ぎになるぞ」

預貯金はあっても新円切り替えで封鎖されてしまっていて、頼みは新たに得る収入だけであった。

「なにをやるんですか」

「食料の運び屋だよ」

佐藤元一飛曹は、私の耳許に顔を近づけると、低声でそう告げた。

私は、体力には自信があったので、翌朝指定された時刻に新宿の指定場所に行ってみた。

そこには、佐藤元一飛曹のほかに数人の仲間がいた。

紹介されたあと、彼等と一緒に中央線の列車に乗って長野県の農村まで行った。

手分けをして農家をまわり、米、麦、野菜などを調達した。

私は、佐藤元一飛曹に従いて廻り、端切れを継いでつくった袋に入れた食料品を回収して歩いた。

帰路は目立たぬように乗車駅と列車を分散して、三々五々東京に戻った。

東北地方まで遠出するときは、往復とも夜行列車だった。

帰路の車中で仮眠していると、密造の濁酒が熱気と振動で醱酵して、紙を丸めて押し込んだだけの栓を飛ばして勢いよく吹き上げ、頭から被って折角の貴重品を台無しにしてしまうことがよくあった。

そんなことがなくとも、途中で経済警察官の一斉取締りに遭遇すれば没収されてしまうから、注文主に無事届くとは限らなかった。

そこで、貴重な食料品をむざむざ敵の手に渡さぬように、防衛策を講ずる。

どこの駅で一斉取締りをやっているかは、下り列車で買い出しに行く仲間には判るから、列車が擦れ違うときに白い布を振ってくれる。

それを確認した上り列車の一行は、予め定められている地点を通過するときに窓から抛り投げる。そこには仲間が待機していて回収し、難を逃れるというわけだ。

ところが、たまには双方の見落としもある。

そんなときは、ホームの階段を上がって行った仲間が脱兎の如く逃げ降りてくるのを合図にして、走り出した列車にふたたび飛び乗る。当時の列車の乗降口は手動であり、蒸気機関車は徐々に速度を上げてゆくから、こういう離れ業が出来た。

町の中で不審尋問されて、言い逃れ出来なくなったときには、健脚を活かして遁れる。

私はこれまで二度も権力を笠に着た警察官の横柄な態度に口惜しい思いをしてきたので、取締りを振り切って、

「ざまを見ろ」

と叫ぶときの快感は、得も言われぬものがあった。

佐藤元一飛曹のやっていることは、事業といえるほど組織化されていた。

復員軍人は全国に散在しているし、あらゆる職業を網羅していた。

農業や漁業の人もいれば、商業や飲食業の人もいる。つまり生産者とそれを仕入れたい人がいるのだから、その両者を繋ぐ人がいれば固定した流通経路が完成する。

その構想をもとに、手蔓を求めて趣旨に応ずる三者を探し出し、運び屋役の販売員が固定の生産者から仕入れて固定の得意先に販売するという、闇物資の流通経路が実現した。

もと軍人同志の集合体ということで、仲間意識が強く団結していて、敏捷であり、活動力に満ち溢れていた。

私は、佐藤元一飛曹という販売会社の営業部員といったところであった。

だが、そうしているうちに、世の中の混乱は徐々に治まり、正常化していった。

すると、骨の髄まで叩き込まれた価値観を全面否定されて、戦後の急変した社会をどう生きて行けばいいか見当がつかず、取り残されて自棄糞になり、暴走しているものだけが目立って、報道機関はそれら二十歳前後の元飛行兵たちを評して、

「予科練くずれ、特攻くずれ」

といい、悪の代名詞にした。

佐藤元一飛曹は、自分たちのやっている闇物資の運び屋稼業は社会が求めているものと自負していたが、私は警察が取締りに躍起になっているということは、佐藤元一飛曹がいかに正当化しようとも犯罪行為であり悪行なのだ、と思うようになっていった。

そして私は、国家防衛のために醜の御楯となって悠久の大義に殉じ、従容として死地に赴き散華した純粋な若者たちを、生き残った者が軽挙妄動で汚してはならないと自戒した。

やがて、闇市場が閉鎖になって、運び屋の仕事が下火になっていった。

そのころ、私は従姉の嫁ぎ先の出版社からの紹介で、中央競馬の出馬表をガリ版で切る仕事を

引き受けていた。

朝早く本郷の寺へ行き、開催日の出馬組み合わせ表の原稿を貰ってきて、鑢板の上に蠟を引いた原紙を置いて鉄筆で切るのであるが、これがかなり力を入れて書かないと切れないので肱が痛くなる。

だからといって、たびたび手を休めているわけにはゆかない。

正午までに書き上げた原紙を届けなければ、謄写版で印刷したものを夕刻までに各駅の売店に並べるのに間に合わないのだ。

そんな仕事をつづけているうちに、私の鑢板で切る文字が読み易いと思われたのか、学者の分厚い論文などを依頼されるようになって、週末だけとはゆかなくなり、いつか新宿の待合場所へ行くのが間遠になっていった。

それでも、私のほうから辞めさせてくれとは言い難くて、極力顔を出しつづけていたが、そのうちにいつか佐藤元一飛曹のほうが現れなくなって自然消滅したので、ほっと胸を撫で下ろした。

戦後の混乱が鎮まって、世の中が平静を取り戻してくるにつれて、私の精神状態もどうやら落ち着いてきた。

書籍予約受付票作成と、ガリ版書きは相変わらずつづいていたが、それ以外はこれといった仕事を持っていなかったので、暇潰しに懐かしい新宿へ出て町中をぶらついていた。

恰度、帝都座で長期上演していた空気座の『肉体の門』を観たり、薔薇座や軽演劇の常打ち劇

団ムーランルージュを梯子したりしているうちに、演劇にのめり込んでいった。
ムーランルージュは月替わりの休館日がなく、翌月の上演作品は月末近くの数日間夜の部が跳ねてから稽古をしていた。
私は、いつかこの劇団に馴れ親しんで、稽古場にも入り浸るようになっていった。
当時は暖房設備などなかったから、楽屋から毛布を借りてそれでも震えながら観ていた。
そんなある夜、駅からのバスが終わってしまっていたので家まで歩いていると、途中に不良少年が屯(たむろ)していて呼び止められた。
これまで、なんどか町で見掛けたことのある連中だった。
「海軍さんよ」
そう声をかけて近づいてきた一人に、いきなり略帽を奪われた。
「返してくれ」
と言うと、
「欲しけりゃ腕ずくで奪(と)れよ」
と挑発してきた。
(この野郎――)
と頭にきたが、ここで暴力を振るって警察沙汰にでもなれば、国家防衛のために一命を捧げた人たちの名を汚すことになると思い直して耐え忍び、ひたすら下手に出て、略帽を返してくれるよう辛棒強く頼みつづけた。

拍子抜けした相手は、
「弱虫兵隊、だから戦争に負けたんだ」
と悪態をついて、略帽を投げてよこした。
私は、屈辱に堪えて略帽を拾うと、黙ってその場を立ち去った。
そのことがあってから、嘗て醜の御楯の象徴だった軍帽が、いまは自分を卑屈にさせる原因(もと)になってしまっていることを覚って未練を断ち切り、略帽と潔く訣別することにした。
特攻という体当たり攻撃を敢行することによって、自分の生命と引き換えに幾多の同胞の生命を護ろうとした先輩たちの崇高な精神を、後輩の軽挙妄動によって汚してはならぬと、そればかりを胆に銘じて、価値観を全面否定された挫折感と劣等意識を引き摺りながら、まるで犯罪者のごとく目立たぬように心掛け、俯向いて歩いてきた。
その虚しさを今日まで支えてくれたのは、練習生時代から冠りつづけてきたあの略帽だったのだが、片時も離さなかったその略帽と訣別したからには、これからいったいなにを支えにして生きていったらいいのか。
いま、無聊を慰めてくれているものは演劇だった。
正規の教育機関から入学を拒絶されていたから、新しい時代を習得出来ぬまま投げ遣りに生きてきていたのだが、そうだこれからは本腰を入れて演劇を学び、それを新しい心の支えにしようと思った。
演劇学校は、前歴に言い掛(が)かりをつけることはなく、学科試験もなかった。

つまり、希望すれば誰でも入れて、将来活躍出来るかどうかは本人の能力次第という実に大らかなもので、さすが芸術の世界は抱擁力があると感心した。

演劇の基礎講座を学んでいるうちに、戯曲を書くことに興味を覚えた。

俳優座がチェホフ物だったので、その戯曲集を手に入れようとして、まだ陳列の乏しかった書店を探し廻っているうちに、あるとき『新潮』という雑誌が眼についた。

現在のようなカラー刷り表紙の分厚い立派なものではなく、仙花紙に刷ったものを重ねて金具で留めた程度の粗末な雑誌であった。

そのなかに、太宰治という作家の『斜陽』という作品が掲載されていた。

文学の素養などまったくなかったのだが、華族制度の廃止によって生きる方向を見失った没落家族を描いたその作品に、月日の経過とともに虚しさが増してゆく特攻行為が重ね合わされて、読みすすむうちにいつかその緻密な表現力に惹かれ、演劇よりも文学に魅せられて、太宰治の『晩年』、『パンドラの匣』、『薄明』、『冬の花火』、『ヴイヨンの妻』などの作品集を古書店で探しては読み耽った。

その太宰治が『グッド・バイ』という作品を執筆中に愛人と玉川上水に入水自殺して、『人間失格』、『桜桃』の作品集で終わってしまってからは、物語作家（ストーリーテラー）といわれた井上靖の叙情的、叙事的作品にのめり込んでいった。

だが、精神的拠り所（バックボーン）になっているのは、七〇一空所属の飛行隊が特攻出撃していった三月十八日、十九日、二十日のうちのいずれかに、毎年靖国神社に参詣することであった。

当時の特攻隊員たちのあいだには、

（もしもあいつが征かなかったら、俺が逝ったかも知れない）

という連帯感があった。

だから、神前に詣でるたびに、あの尊い犠牲によってわれわれは生き残っているのだ、という思いを新たにして、なにごとにも耐え忍べる活力を与えられているのだった。

靖国神社については、政治的にとやかく言われていて、周辺でも意見がまちまちだが、私は曽祖父の霊が祀られているということで、子供の頃から祖父に伴れられて詣でていたので、思想も理屈もなかった。

曽祖父は、戊辰戦争のとき、奥羽越列藩に同盟して会津藩を護ろうとしたことで、賊軍藩士扱いされたが、西南戦争では、官軍の一隊として鹿児島に遠征し、その地で戦死した。

会社勤めをしていたころは、毎年三日間のうちの都合のいい一日を選んで、昼休みにタクシーで坂下まで駆け付け、坂道を徒歩で上って参詣していたが、定年退職後は郊外の自宅から電車を乗り継いで行っていた。

あれは、五十回目の参詣のときであった。

彼岸の入りだというのに、朝から雨で気温が上がらず、溝（みぞれ）になりそうな気配だった。

防寒と雨仕度をして家を出たのだが、九段下で地下鉄を降り、人気のない階段を上って地上へ出たらさいわい雨はやんでいた。

降りがはげしいとこの急坂は雨水が滝のように流れるので、用心して雨靴を履いてきたのだが、大降りにならずさいわいだった。

春寒と氷雨のせいか人通りは疎らだ。

靖国神社の境内に入ると、いつもは戦友会らしい老人の集団を見掛けるのに、今日はまったく人影がなく、雨に濡れた大村益次郎の銅像がぽつんと淋しそうであった。

いつものとおり大手水舎で手を清め、第二鳥居と神門を潜って拝殿の前に立った。

参拝者が誰もいなかったので、時間をかけて五十回目の礼拝をすませた。

踵を返して拝殿の鳥居を潜り、神門に向かっていたとき、突然真っ白い伝書鳩が数十羽一斉に降りてきた。

一万羽に一羽しか生まれないという珍らしい白鳩で、靖国神社の境内にもこの神門から拝殿までの狭い区域にしかいない。

神木の枝に止まっていたり、地面を歩いているところは見掛けていたが、いちどに降りてきて周辺を囲まれたのははじめてだった。

おどろいて眺め廻すと、白鳩たちもじっとこっちを見据えていた。

すると、一瞬その数十羽の白鳩が、特攻で散華した先輩たちの蒼白な顔貌に変わった。

それは、あれから半世紀ものあいだ黙して語らぬ生き残りたちに業を煮やし、白い鳩に姿を変えて叱咤しにきたのかも知れなかった。

白い鳩の群れは、いつまでも身辺に纏わり付いて離れようとはしなかった。

そのことがあってから、それまでの伏し眼勝ちだった生きざまを反省した。

(俺たちは、侵略戦争の先兵だったんじゃない。国家防衛の楯になって、同胞の生命を護る使命に殉じたのだ)

悠久の大義に生きるはずだったのが、途中で大義が消滅してしまったために途惑い、生きる方向を見失ってしまっただけのことだったのである。

そう思ったとき、それまで脳裡にどっかと腰を据えていた重い蟠りが雲散霧消して、五十年ぶりにすっきりした気分になれた。

(先輩たちの死を風化させてはならない)

国土防衛のために、自分自身の手で自分の生命を絶つ特攻という酷い戦法を強制されて散華した、数多の人たちの犠牲があって今日の平和と繁栄が築かれたのだということを、語り継いでゆかなければならないと自覚した。

だが、半世紀もまえの戦争話に耳を傾ける人は少なかった。

時代が極端に変わり、当時の国家体制を理解することの至難が厚い壁になっていて、それからさきがどうにもすすまないのである。

煩がられて心を閉ざされたり、特攻隊を美化していると誤解されては逆効果なので、問わず語りを慎み、素養のある人や関心を抱いている人々から問われたときだけ、

(死んでいった人たちの思いを伝えるために生かされているのだ)

とおのれの立場を確認しながら、逸る心を抑えてしずかに語り部の役をつとめた。

例年より季節の経過が早いせいか、戸外はもうすっかり初夏の陽射しであった。
日曜日ということもあって、この東京西郊の町も彼岸の墓詣りに行く人と花に浮かれて出掛ける人とが重なってか、なんとなく人出が多かった。
九段下で地下鉄を降りると、人々がおなじ方向へぞろぞろと纏わりついてくる。
いつもは、九段坂へ出る階段を上る人は疎らなのだが、今日は様子が違っていた。
私は、急ぎ足で行く人たちの背後から、一段一段悠くり拾うようにして上っていった。
いつもこの階段を踏み締めながら、今年もまた一年遠去かってゆくことを確認する。
眩しい陽光を手で遮って地上に立ったとき、華やいだ光景が視野に飛び込んできた。
両側の歩道を花見の人々が往き来していた。
この坂道を、こんなに人が歩いているのを見掛けたのは初めてだった。
遠望する田安門のあたりは、白雲が漂っているかのように満開の桜が咲き誇っていた。
人々は、そこから千鳥ケ淵沿いにつづく桜並木を見物にきているのだろう。
私は五十七年まえのこの時季には、所属航空隊の特攻出撃を見送ったのをはじめとして、百里原、宇佐、名古屋など各地から飛来してきた特攻隊が、燃料を補給し、機体を整備して、あらためて出撃して行くのを毎日のように見送っていた。
桜を見るとあのときの場面が鮮明に甦るので、これまで誘われて重い腰を上げる程度で、積極的に出掛けることはしなかった。

だから、今日も花見にきたわけではない。所属していた七〇一空の一〇三と一〇五の両飛行隊が特攻出撃した命日なので、例年どおり参詣にきたのである。
それが、今年はたまたま異常気象だったため、まだ彼岸入りだというのに早くも桜が咲いてしまっていたというだけのことなのだ。
だが、開花したことで、ひょっとしてと思う夢が膨らんだのだから、迷惑しているわけではなかった。

貴様と俺とは　同期の桜
離れ離れに　散ろうとも
花の都の　靖国神社
同じ梢に　咲いて会おう

出撃前夜、先輩たちは搭乗員宿舎で車座になって訣れの酒を酌み交わしたあと、肩を組んでそう唄い再会を誓い合って散華したのだ。
それが、今年珍しく命日に桜が咲いた。
ひょっとして、境内の桜並木のうちのどれかの梢に咲いて再会を悦び合いながら、後輩が参詣にくるのを待っているかも知れないという、一縷の希望が涌いてきていた。
そんな思いがあって気が急くせいか、坂を上る足取りがいつになく軽くなっていった。

坂を上りきったところで、神社前の雑踏に圧倒されて思わず足を止めた。
田安門と千鳥ケ淵のほうへ行く靖国通りの歩道橋が混雑しているだけではなく、靖国神社の境内への出入りも賑わっていた。
大鳥居の手前両側に大石燈籠がある。
石垣の上の石柵の中に金木犀と五葉松に囲まれて立っていて、左が『照闇』右が『揚輝』と書かれている。
その大石燈籠の写真を撮っておこうと思ってカメラを持参したのだが、人通りの切れ目がないので断念した。
まず境内の左側の桜並木を丹念に見て歩いたが、どの梢にも先輩たちの気配はなかった。
拝殿に詣でて、今日はひょっとして会えるかも知れないと思ったことを告げた。
花見の序(つい)での参拝者が多くて、いつものように悠くり懐旧に浸ることは出来なかった。
今日は、いつも神門と拝殿のあいだにいるはずの白い鳩が見当たらなかった。
あまりの人出におどろいて、姿を隠してしまったのであろう。
能楽堂から遊就館のほうへまわり、いつもは足を向けたことのない相撲場のほうまで行ってみたが、桜木がひっそり並んでいるだけでなんの気配も感じられなかった。
神門に戻り、帰路は参道の反対側を歩いて木々の枝を満遍なく見て歩いたが、やはり先輩たちが集まっている気配はなかった。
境内にはソメイヨシノと山桜が千本もあるというから、先輩たちのほうから呼び止めてくれなければ探し出すのは至難であった。

だが、冥界と現世の交流など出来るはずはなく、たとえ出来たとしても、五十七年も齢(よわい)を重ねていては誰だか判ろうはずはない。
私のほうは、あのときの先輩たちの姿がはっきり眼に焼き付いているのだが、幽冥界を異にしていては見付け出すことが叶わず、
(ひょっとして――)
と思った夢想は泡沫(うたかた)に終わった。
坂下のホテルのティーラウンジで一時間ほど小憩して、もういちど参詣することにした。
さっきは拝殿前が立て込んでいて慌ただしかったので、参拝し直すことにしたのだ。
もう夕刻に近く、九段坂は帰路に就く人たちの流れに逆らって上らねばならなかった。
境内は、花見の宴席の設営がはじまっていて、見物客もまだ残っていたが、第二鳥居から先は人影も疎らになっていて、いつもの静寂を取り戻していた。
先日、あるところで話をしたとき、関連で特攻のことに触れたら、鋭い反論があった。
レイテ沖海戦で連合艦隊が全滅したところで敗戦を認めて終戦交渉に入っていれば、その後の東京、大阪大空襲をはじめ沖縄、広島、長崎の大惨害は避けられたのに、特攻隊が無駄な抵抗をしたばっかりに数十万人もの犠牲者を出してしまったのだ。
特攻隊員は犬死にしただけでなく、一般国民をも捲き込む悲惨な結果を招いてしまったではないか。

と難詰してきたのである。

先輩たちがそんなふうに思われているとは衝撃だったが、甚だしい誤解に肚が立った。

無謀な戦法を強いられ、国家防衛の楯になって尊い生命を捧げた人たちを、悪し様に言われては黙って引き下がれなかった。

あの先輩たちは、押し捲られ、敗色濃厚になって面子の立たぬ首脳部の焦りから、

「一命を賭して、体当たり攻撃をかけろ」

と命ぜられて、生きたいと希う妄念を断ち切れずに踠き苦しみながら、国家の安泰と同胞を護る使命に殉じ、僅か二十歳前後の若い身空で散華したのだ。

無駄な抵抗をつづけたのは首脳部であって、特攻隊員たちは彼等の常軌を逸した戦法の犠牲にさせられたのだ。と縷々弁明した。

つまり、首脳部の失敗の尻拭いをさせられたわけで、特攻という窮極の体当たり戦法までやっても挽回出来なかったのだから仕方がないと、国民の理解を得て諦めさせるための手段に使われた、と勘繰りたくなるのだが、そこまで言ってしまっては、散華した先輩たちがあまりにも惨めになってしまう。

先輩たちは、体当たり攻撃で挽回出来ると信じて逝ったのであるから、それが徒労に終わり祖国は無条件降伏しました、と報告するのは残酷であった。

拝殿の鳥居を潜って出てきたら、桜木に止まっていた白い鳩が一斉に啼き出した。

私は、その啼き声に先輩たちの叱咤激励を感じながら、白い鳩の群れを見上げて、今朝外出の

仕度中に突然取り憑かれたあの幻想について考えた。

あれは、最早忘れ去られようとしている先輩たちのことを、断じて風化させてはならないと自らを励ます心の表れだったのではないか、と解明して思いを新たにした。

大鳥居を出たころには、坂下に拡がる平和な町にぽつぽつ明かりが灯りはじめていた。

新春ユーモア小説

聖徳銀行秘書室

鯨游海（くじらゆうかい）

第一話　頭取の秘密

二〇〇二年九月始めの晴れた日の午後であった。聖徳銀行秘書室の電話が鳴った。秘書役の泉ピン太郎は徐ろに受話器を取り慇懃に応えた。

「ハイ。聖徳銀行秘書室でございます」

「鎌倉の島津京子と申しますが、聖徳頭取さまをお願いしたいのですが……」

しっとりと落着いた中年女性の美しい声であった。時折かかってくる馴みの料亭のおかみ達の何れでもない。

（はて、どなたであろうか。今迄聞いたことのない女性のようだが……）ピン太郎は声の主の品格に気後れしたのか年甲斐もなく狼狽し思わず、

「ハイ。只今おつなぎさせて戴きますでございます」

と珍妙な丁寧語を使って了った。

およそ二〇分もたった頃であろうか。上機嫌の聖徳太平がハナ歌を口ずさみながら頭取室から出て来てピン太郎の傍を足速に通り抜けた。その後ろ姿はまさに欣喜雀躍という言葉がぴったりするように軽ろやかであった。

秋が深まり山々が紅葉に染まったのも束の間で、慌ただしく歳末も過ぎ二〇〇三年の正月を迎えた。

例の女性からの電話はその後も月二回程のペースで続いていた。平常は五～六分で済むが時には三〇分近くに垂とすることもあった。

（頭取に愛人でも出来たのかな……）ピン太郎としては立場上凡そのことを承知しておきたかったが直接聞く訳にもいかず、今一つ釈然としない想いであった。

太平の日常には是といった変化は見られない。会議や来客の応接、年末年始の主要顧客への訪問等を精力的にこなしていた。忘年会や財界の賀詞会等ホテルの会合も欠席することはなかった。

時節柄、一昔前のように新橋、赤坂、向島での夜の宴席はめっきり減ってはいたが。

太平の趣味は漢詩を詠むことと漢籍を精読することであった。ゴルフは殆どやらない。休日は自宅でもっぱら静養に充てる。狭斜の巷を流連するのを好んだ前頭取と較べれば眞面目で家庭サービスに努める方であった。

そう。太平は恐妻家であった。

ピン太郎は太平の妻である頼子夫人の陽気な顔を思い浮かべ（あらぬ波風が立たねばよいのだが……）と心を痛めた。

そんなある日、デパートから贈物の包みが秘書室に届けられた。形から察するにネクタイであろう。包装紙に貼られた宛先には見事な女文字で「聖徳太平様」、贈り主は「鎌倉市浄光寺町××番地・島津京子」と書かれていた。

ピン太郎は気を利かして、これを自分からではなく部下の森佳子嬢に届けて貰った。

程なくドアが開き太平が現れた。

「ちょっと三越まで買物に行って来る。ついては森君に手伝って貰いたいのだが……」

ピン太郎と森佳子は思わず目を見合わせたが、彼女が軽く頷いたので、

「かしこまりました。でお時間はどれ位で」

「うむ。三〇分もあれば十分だ」

三越は日と鼻の先であるが、一応車を手配してそそくさと出掛けて行った。

（ははあ。先程のプレゼントのお返しの品定めであろう。いよいよ怪しい……）

やがて帰社した佳子は、

「只今帰りました」

といって会釈したものの余計なことは一言もいわず静かに机に向かった。ピン太郎は何を求めたのかを尋ねてみたかったが端たないと思い直して慌てて口をつぐんだ。（佳子嬢は流石頭取秘書に選ばれただけあって嗜みのあるお嬢さんだ。頭もいいしセンスもいい。さぞや電話のお相手である島津京子さんとやらに気に入られる品を選んだことであろう……。それにしても八雲のば

あさんにバレなければいいのだが……）と思った。

八雲のばあさんとは聖徳銀行を創業した宗家で大株主。この人には太平も頭が上がらない。

その時、けたたましく卓上の電話が鳴った。ピン太郎はギョッとして受話器を取った。

「広報室長の川口ですがちょっとご報告して起きたいことがありまして……」

「ハイ。秘書役の泉です。それでどんなことでしょうか」

「実は月刊誌のAと週刊誌のB、それに経済雑誌のCから近日中に取材したいとの依頼がありました。情報開示は積極的に行うとの方針通り応じようと思ってますが、その内容というのが三誌とも期せずして聖徳頭取の個人的なことについての取材をしたいとの申し出であります。勿論判る範囲で答えておきますが、さしさわりがあるような微妙な質問に関しましては、秘書室を煩わせることになるかもしれませんので予めお知らせしておこうと思いまして……」

「ウグッ」

ピン太郎は思わず奇声を発した。ABC三誌は暴露記事を売り物にしていてセンセイショナルな誇張したゴシップ記事で人気があり発行部数も多い。ピン太郎は目の前がまっ暗になった。

《公的資金を受けている都銀頭取に愛人発覚》《大銀行頭取が鎌倉婦人と不倫》等の毒々しい見出しが脳裏をよぎった。

（ああ已矣乎。名門聖徳銀行もこれで大変な信用失墜だ。もう駄目だ……）と頭を抱えた。

（株価急落→頭取の引責辞任→当局の意向による吸収合併→リストラ→失業……）ピン太郎は悪い予感に戦き手のふるえが止まらなくなった。そして鶴亀副頭取に報告しておこうかどうかで迷い途方に暮れて了った。

一九八×年×月×日。神奈川県横須賀市を出身地盤とする国会議員中泉聖一郎は新横浜駅からひかり号のグリーン車に乗り、明日大阪で講演する『マル優の改正並びにグリーンカード創設に関する法案』を読み返していた。

次期通常国会で審議される法案であった。読み終えて所在なげにくつろいでいた中泉は突然隣席の同年輩の紳士から声を掛けられた。

「失礼ですが国会の中泉先生でいらっしゃいますか」

「ええ。そうですが」

「私はこういう者ですが」

と名刺を出された。そこには『聖徳銀行大船支店・支店長××××』とあった。

暫時たわいない会話が続いた後、中泉は眞顔で支店長に問いかけた。

「今マル優制度の改正が論じられていますが、現場の支店長さんとしてはどのようにお考えでしょうか」

「あんな不公平な手数のかかる制度は即刻廃止すべきです」

と明解に断定した。

「ほほう。改正ではなく廃止とおっしゃる」

「預金の利子は不労所得でしょう。これに二〇%程度の源泉課税は当然だと思います」

「なる程。然し少額の預金者には課税を免除しようというのがマル優の趣旨ですが」
「本来は少額預金者の為の制度なのですが現実はお金持ちへの優遇となっています」
「と申しますと」
「三百万円の限度が守られていないからです。今三千万円の預金者がいたとします。利子は五%なので一五〇万円となりますね。その二〇%三〇万円が課税される筈です。
所が殆んどの大口預金者は家族や親戚、従業員、ひどい例では電話帳から拾い出した名前と住所を使って三百万円の預金証書を十件作りマル優の恩典を不正に受けています。
銀行は三千万円一件を作ればよいものを十件も作らねばなりません。おまけにマル優の申込書や限度額申告書等一件毎に三枚の書類が必要で三〇枚にもなります。つまり十倍以上もの事務量となりこの負担が大変なのです」
「なる程」
「一方普通のサラリーマンは定期預金があってもまあ百万円位でしょう。利息五万円の二〇%で一万円の恩恵に過ぎませんし、預金のない人にとっては恩典は皆無です。片一方で三〇万円もの恩恵を受ける金持ちがいる。これはどう考えても不公平といわざるを得ません」
「不正使用はどうして起きるのでしょうか」
「銀行が本人確認を厳正にやってないからです。預金欲しさに不正を奨めているといった方がいいかもしれません。加えて税務署が人手不足で限度額のチェックをしていないからです。従ってバレる心配は先ずありません。現実に正しい申告をしている人は一割いるかいないかでしょう」

「不正防止の為グリーンカードを創ってチェックする案を考えていますが」
「無駄の典型です。新たに特殊法人を作り何億もの税金の無駄使いとなることは目に見えています。カードの貸借り、いわゆる名義借りが今以上に横行するでしょう。元来が不労所得なのですから一律に源泉で課税した方が余程すっきりします」
正論であった。現場の実情を中泉は始めて知り愕然とした。（マル優の制度は官僚と政治家が頭の中だけで考え出した典型的な悪しき例の一つであろう。弱者を援ける制度のように見えるが実際は全く逆ではないか）
中泉は支店長の明解な説明に納得した。それにこの人は自行の利益だけを考えず、天下国家から論じられる方だなと思った。また自分達が如何に現場の実情に疎いかを反省し（早速大阪では廃止論に立って講演しよう）と心に決めていた。
大阪から帰京した中泉は財政金融委員会で孤軍奮闘し、成立しかかっていた改正法案を老人等弱者だけは除き制度そのものを廃止することで纏めて了った。実情を把握している正論に反論出来る委員は一人もいなかった。
以来中泉は度々大船支店長に電話し金融の実態に詳しくなっていった。同時に官僚や政治家が如何に現実離れした無駄の多い施策を行っているかを知った。
中泉が郵政の民営化、郵貯や簡保の縮小、特殊法人の整理縮小論者に変身していったのはこの頃からである。そして徐々に政界与党の中堅のエースとして頭角を現していった。
時は流れた。中泉は厚生関係の委員に転じ何時とはなしに支店長との連絡が途絶え、二〇年の

歳月が流れ去った。

日本はバブルの崩壊があり、それから立ち直れず呻吟していた。デフレによる不況は長びき回復の兆は見えず期待されて登場した総理は次々と失脚し、終に二〇〇一年に中泉が総理となった。

二〇〇二年九月の初め中泉総理は考えあぐねていた。竹内経済財政担当大臣と柳井金融担当大臣の政策がまっ向から対立したのである。財務省は竹内を、日銀は柳井を支持し与党内の意見も相半ばしていた。

不良債権の処理が先か景気回復が先か。ペイオフは実施か延期か。減税か増税か。公的資金投入の可否。総じていうならハードランディングかソフトランディングか。

財界や金融界、学会や言論界も両派に別れ侃々諤々の争いが続いた。国の政策論議でこれ程意見が正反対に別れ、而も両派が拮抗したことも珍しい。それ程日本経済が未曾有の困難な局面にあったといえよう。

中泉はふとあの時の支店長を思い出した。

(そうだ。あの方の意見を聴こう。但しマスコミに悟られないよう隠密裡にやらねばならない)

中泉は藁をも摑む思いだった。

直ちに総理秘書官の一人島津京子を呼んで次のように指示した。

「聖徳銀行に昔——といっても二〇年ばかり前のことだが、当時大船の支店長をやっておられた方がいる。その方を探して欲しい。何としても連絡をとりたいのだが……。

なおくれぐれもマスコミに知られないように。先様に迷惑をかけてもまずいから、私からといわずあく迄君の名前で連絡をつけるようお願いしたい」

「かしこまりました」

島津京子は早速聖徳銀行人事部に電話し何とその人が頭取になっていることを教えられた。

大手町の皇居の畔、聖徳銀行頭取室から遠望する正月の富士は朝日に映え白銀に輝やいていた。太平は今自分がこの国を動かしている緊張感と充実感を味わっていた。昨年秋以降総理が決断し実行したうち成功しつつある施策は全て太平が進言したものであった。更に先日具申した乾坤一擲の秘策が間違いなく景気回復に役立つことを確信していた。それは『孫子の兵法』から学んだものであった。

太平はこの日も総理から贈られた瀟洒なネクタイを締めていた。そして、自分と総理の間を仲介してくれている島津京子が(スカーフを気に入ってくれているだろうか)と未だ逢ったこともない麗人のことを想った。

(そうだ。一度夕食でもご馳走して差上げよう。むむ、その折りはスカーフを選んでくれた佳子嬢にも同席して貰おう)。太平は少年に還ったように心のトキメキを覚えるのだった。

(後日譚がある。グリーンカードが廃案になった時点で、某社はその成立を見越して既に基本ソフトを完成していた。これが後年「住民基本台帳」に転用され、二十年ぶりに陽の目を見たので

ある。これを総務省に売り込んだのが某社取引行の聖徳太平であった。住民基本台帳新システム誕生の秘話であるが知る人は稀である」

第二話　頭取の秘策

「帯に短かし襷に長し」

と聖徳銀行頭取の聖徳太平はつぶやいていらいらしていた。

聖徳銀行は来年創立百周年を迎える。これを記念して文化事業をやろうと計画しているのだが妙案が浮かばないのだった。提案されてくる企画は二番煎じのものや花火のように一回きりのもの、あるいは多額の費用ばかりかかって効果がいまイチのもの等ばかりで聖徳頭取が理想とする（世の中の役に立ち、人々に喜んでもらって而も長続きする事業）が見当たらなかった。

師走も押し迫りもう直ぐ新年を迎える。正月早々には案を固めねばならない。

そんな雰囲気をいち早く察して、秘書役の泉ピン太郎は（雷が落ちねばよいが）と息をひそめていた。

というのは、先日も新商品のパンフレットの文章で、こっぴどく叱られたばかりだったからである。

聖徳銀行ではこの度シルバー層カストマーズをメインのマーケットとして、シニアアカウントをセールスすることに致しました。シニアアカウントはあなたさまをロングランにサポートするナイスリターンなプランです。スペシャルレートの適用はもとよりポイントバンクと

コミットすることによりエムエムエフやスーパー定期よりはるかにメリットがあり……、

「これ、ピン太郎」

「ハイ」

「これが日本語といえるのか。読んで貰いたいなら、ちゃんとした日本語に書き直しなさい！」

「はあ……」

この文章は業務企画部が作成したものでピン太郎秘書役には責任はないのだが、叱られるのは身近かにいる秘書役と決まっていた。（そうした役目を引受けるのも秘書役の給料のうちかもしれない）とピン太郎はあきらめていた。

文章にうるさいのは太平が孔子に私淑し、論語に心酔しているからであった。その証拠にこれ迄に論語に関する太平の著書は「わが輩は論語である」「論語とエロス」「限りなくバイブルに近い論語」などと数多くあり、学会からもその権威の程は一目置かれていた。

すると丁度その頃、皇室で愛子親王がご誕生になったのである。

「うむ、これじゃ、これじゃ」

太平の両眼はパッと輝やいた。

「これ、ピン太郎秘書役、すぐ参れ」

聖徳頭取が機嫌の好い時は呼び捨てでなく『秘書役』がついた。秘書室で息をひそめていたピン太郎はほっとして、

「なにかご用で……」

と急いで頭取室にかけつけた。

「用があるから呼んだのだ。いいテーマが見つかったぞ」

「ハイ、どのような？」

「来年の聖徳銀行は『お客さまに愛を』という経営方針にしようと思うのだ」

「えっ。お客さまに愛を……？　何でございますか。それは」

「愛子さまじゃよ、愛子さま。皇室に誕生された愛子さまじゃ」

「愛とは、愛子さまの『愛』で……。なる程聖徳銀行も皇室の瑞祥にあやかろうという訳でございますな」

「そうじゃ」

「さすが聖徳頭取……ご賢明……」

「そう持ち上げるな」

「愛というとキリストですな」

「そうじゃ。そして論語でいえば『仁』なのじゃ」

「うぐ」

ここではじめてピン太郎は、愛と論語が結びつき納得した。

「最近は景気も低迷し、銀行の預金金利も安くなって了った。お客さまに金利を差し上げられない代りに愛を差し上げようという訳だ」

「大賛成です。いいアイデアです。最近の人々は心が不安で愛を求めています。聖徳銀行百周年のいいメセナになりましょう。ですが、頭取、愛といっても愛には形がありません。どうやってそれをお客さまに差し上げるのですか。まさか頭取が十字架を背負ってロビーに立ってお客様と握手したり、また孔子のように長いヒゲをはやしてお客様を一軒一軒訪問する訳にもいかないでしょう」

「勿論だ。だが、それには秘策がある。楽しみに待っておれ」

「うぐ」

これ以上太平の秘策とやらに巻き込まれない方が無難だと、ピン太郎は大急ぎで頭取室から退散した。

ピン太郎がいなくなると太平はやおら受話器を取り上げ、あちらこちらと何やら長い電話を掛け始めたのだった。その相手とは一体誰だったのであろうか。

年が明けて正月四日。

仕事初めのこの日、ピン太郎秘書役は緊張した面持で銀行の正面玄関に直立し初出勤して来た聖徳太平頭取をうやうやしく出迎えた。

「あけましておめでとうございます」

「ああ、おめでとう。ピン太郎秘書役、早速だが直ちに全役員を会議室に集めてくれ。お客さまに愛を……、聖徳塾、聖徳塾、聖徳塾のスタートだ！」

「えっ、いま何とおっしゃいました？」

「いや、何でもない、ワッハッハ」

やがて全役員が揃うと新年早々の異例の役員会議が始まった。

「皆さん、おめでとう。さて今年は記念すべきわが行の創立百周年に当ります。そして懸案の記念事業のことですが、『お客さまに愛を差し上げる』という事業を展開したいと思います」

「え、え、えっ……。お客さまに愛を……？　それと銀行とどういう関係があるのですか」

「愛なんてものをどうやってお客さまに差し上げるのですか」

役員一同開いた口がふさがらないといった具合いであった。が、太平は自身たっぷりで「愛といっても直接お客さんにラブレターを出したり、またロビーで抱きついたりする訳ではありません。学習塾を開くのです。塾の名前は聖徳塾……」

「聖徳塾？　そこで一体何をするのですか」

役員一同は悲鳴をあげた。

聖徳太平はますます自身たっぷりに、

「最近のリストラでわが銀行の支店の二階や三階の会議室は空いています。そこを教室として地域の皆さんに開放しようという訳です。希望するお客さまに週一回程度夜間に論語を講じるのです。これを聖徳塾と呼ぶ訳です」

「なる程、平成の寺子屋ですな」

「面白いかもしれません」

一時は口あんぐりだった役員達も太平の説明を聞くと少し話に乗ってきた。

「論語は宇宙第一の書といわれる程面白く為になる。だからこそ二千年来読みつがれ語りつがれて来たのであって、バイブルと並び古今東西のベストセラーであることはご存じの通りであります。論語の究極の思想は仁です。仁とは人に対する限りない愛であります」

然し趣旨はよいとしても（今や英語が国際語だというのに論語なんて古い、古い）と腹の中で疑問を持つ役員も未だいた。そんな空気を感じつつも太平はかまわずに述べた。

「当行の名前は聖徳銀行であるが、徳ある聖人とは孔子のことに他ならぬ。聖徳を名乗る以上世間に恩返しをしなければなりません」

そこ迄いわれたのでは反論する余地がなかった。鶴亀副頭取が一同を代表して、

「ご趣旨はよく判りました。預金金利の代りに愛を……、これで聖徳銀行の一段のイメージアップは間違いありません。大賛成です。ですが頭取、各地の支店で塾を開くと致しますと一体誰がその講師になるのでしょうか。幾らバイタリティがあっても、頭取自からが各店の教室を駆けずり廻る訳にもいきますまいに……」

「あいや、その点については全く心配はない。既に手は打ってある」

「といいますと」

「当行が親しくしている大松漢文大学の学長の伊東仁斎文学博士に既にお願いしてある」

聖徳銀行が昨年の暮にピン太郎秘書役との打ち合わせの後あちこち長電話していたのは、この聖徳塾の講師の依頼だったのである。

「伊東仁斎先生は日本漢文学会の会長もされており、私はかねてからご昵懇にさせてもらっておりますが電話でお願いした所心よく引受けて下さいました。最近の大学はオープンキャンパスとかが盛んで社会人を対象にして都心で夜間の講座なども開かれている。大松漢文大学でもそんなものを検討している矢先だったので、期せずして両者のニーズが一致しご賛同いただけたのです」

「大松漢文大学が力を貸してくれるのなら鬼に金棒ですな」

「その上伊東仁斎先生は大阪の懐徳堂大学、京都の古義堂大学、また九州の咸宜園大学にも呼びかけ協力してくれることになっているから、講師の心配は全くありません」

こうして昨年来、太平を悩ませていたメセナの計画が決定し、早速準備がすすめられた。

そして春四月、凡そ全国五十ケ店で『聖徳塾』がオープンしたのである。

聖徳塾は予想以上の盛況であった。

不景気が長引き八方閉塞感の中で人々は心のいやしを求めていたからであろうか。或はテレビの低俗番組に飽き〳〵していたのであろうか。それとも東洋の聖人孔子が平成の日本人を魅了したのか。どの会場も聴講者で溢れていた。

普段着の主婦、会社帰りのサラリーマンやOL、商店主や店員さん、ガソリンスタンドのお兄さん、隠居の老夫婦、中には中学生や高校生の姿もあった。

聴講者の表情は一様に輝やき、眞剣で然も楽しげであった。

夏に入ると各地の新聞がニュースに採り上げ始めた。市区や町によっては文化施策の一環として後援を申し出てくる所もあった。

各教室の聴講希望者は増える一方で、その為未開設の近隣の支店でも急拠塾を開く支店が続出した。全国に論語ブームが起り、各書店で論語の解説書が売れに売れた。

一年が過ぎようとしていた。聖徳塾は全国で八十ケ所に及び、総受講者数は、一万人になろうとする有様であった。各出版社は論語関係の本の増刷に追われた。

聖徳頭取はテレビに出演し、文部科学大臣と《社会教育をどう実践するか》という題目で対談した。

巷の噂では、今年度の企業メセナ大賞は聖徳銀行だとささやかれ始めた。

聖徳銀行の人気と業績は急上昇し、株価も低迷する他行を尻目に高値を更新した。

その年愛子さま誕生を記念して愛綬褒章というのが新設され、太平がその第一号に選ばれたのは勿論であった。

「頭取の秘密」は平成十五年正月号、「頭取の秘策」（改題）は同十四年正月号の銀行新報（銀行新報社）に掲載された作品である

漢詩　銀行雜詠六首

鯨游海

叱咤大銀行

嚴正無比大銀行
發足朝來誤簇生
天下囂囂要路嘯
容量超過莫規程
雜踏に我れ何処にか行くべきや迷路さ迷い岐路で泣き濡る

〈大銀行を叱咤す〉

厳正無比なる　大銀行
発足朝来　誤り簇生す
天下囂々たるに　要路嘯ぶく
「容量の超過は　規程に莫し」と

糾問銀行

至言歡極足哀情
感得秋風漢王聲
驕慢不知名句意
一朝將撼大銀行
石壁の厚きにあらずいにしえの詩ごころこそ厚きいしずえ

〈銀行を糾問す〉

至言なるかな「歓極まりて　哀情足し」とは
秋風を感じ得たる　漢王の声　（※漢武帝）
驕慢知らず　名句の意を
一朝将に撼がんとす　大銀行

悵望銀行

常盤橋畔青淵像
君不見無乾淚痕
遺恨百年世將綻
金融鎖國尚溫存
王朝は亡ぶるものと知りしかど秦漢隨唐宋元明清

〈銀行を悵望す〉

常盤橋畔　青渕の像　（※渋沢栄一の号）
君見ずや　涙痕の乾くことなきを
遺恨なり百年　世まさに綻びんとし
金融の鎖国　なお溫存したるとは

督勵銀行

往事銀行經世雄
近年迷走怒濤中
合縦漸了潮流好
解纜揚帆向疾風
帆を揚げよ纜を解け黄金丸波高けれど潮はかないぬ

祝銀行新報創刊五十周年

知命論調魁世紀
銀行新報任金融
更鳴木鐸貫斯道
雲去春來送緑風
木鐸を鳴らし来たりて五十年怒濤のさ中緑風を聞く

題日本銀行之壁

獨吟憂國詩
伏翼鳳凰姿
石壁蘚苔密
鐵門禽獸奇
老嬢誇倜儻
法王念荊茨
四海風雲急
超然征所思
風はやし四海の波は高けれど今こそ励め日出ずる国

〈銀行を督励す〉

往事銀行は　経世の雄たりしが
近年迷走す　怒濤の中
合縦漸やく了えて　潮流好し
纜を解け帆を揚げよ　疾風に向えかし

〈「銀行新報」創刊五十周年を祝う〉

知命の論調　世紀に魁がけ（※論語・使命を知る）
「銀行新報」は　金融に任じたり
更に木鐸を鳴らして　斯の道を貫ぬき
雲去りて春来たりなば　緑風を送らん

〈日本銀行の壁に題す〉

独り吟う　憂国の詩
伏翼せる　鳳凰の姿
石壁　蘚苔密に
鉄門　禽獣奇なり
老嬢　倜儻を誇り（※1英中央銀行の俗称　※2俊才）
法王　荊茨を念う（※3総裁の俗称　※4ペンペン草）
四海　風雲急なれど
超然として　思う所を征け

前頁の二首は平成十五年二月号の銀行新報（銀行新報社）に掲載された作品でる

俳句橡若葉　百句

大澤　鷹雪

夜桜の艶（えん）につつまれ道まよふ

清流の藻に隠れ去る山女*かな

薫風の中に逝く人ありにけり

さみだれや野宮（ののみや）参りの赤い傘

緋毛氈に黒の塗り盆心太

河童忌や藪の中にも宇宙あり

*ヤマメ＝魚の名

噴水にカラスが不意を打たれけり
新しき御霊運ぶや茄子の牛
赤黒き空が予兆の野分かな
こほろぎの寝返るたびに止みにけり
黄落の林揺らして風の道
直*哉忌や小僧も神も遠くなり
立冬に扇子あふぎ世紀末
枯野ゆく童の影の武者のごと
湯豆腐や貴妃温泉に入る如く

*志賀直哉の忌

*ふろふきの熱きいのちを喰ひにけり
短日や走る男の髪白し
左義長(*さぎちょう)や吉凶ともに炎上す
笹鳴や気付きし人の声弾む
お汁粉を汗と涙とすすりけり
生き方も死に方もあり西行忌
初蝶を追うて泥濘(ぬかるみ)避けきれず
黄のパンジープランターよりあふれけり
番犬のめざめて吠えし遅日かな

*風呂吹大根

*正月のどんど焼きの行事

房総の鱶味の淡きかな

憧憬（あこがれ）のひとに会いけり春の月

丘一つ占めし雲雀を聞きにけり

いづこより来りし異邦人（エトランゼ）ぞ復活祭

桐咲くや父の命日告ぐるごと

雨風も物狂ほしく夏に入る

草矢射つ幼なじみに孫がゐて

冷索麺皿の上なる小氷河

梅雨晴間座すや洛北円通寺

濁り鮒子にせがまれて掬ひけり

夕顔や月食の夜も無事に過ぎ

鈴の音も神に捧ぐや山開き

なによりと言ひつつ喰らふ衣*被

いつの間にか俳句に嵌まる子規忌かな

けものみち抜けて出湯の薬喰

日向路の山の神楽や秋日和

熊手のみ大きくなりぬ酉の市

大根干す乙女の顔の赤きかな

*きぬかつぎ＝里いもの皮つきの煮物

お茶の花咲いて地境明らかに
実万両攫ひし鳥の憎さかな
木枯しに向ひて丸き背が二つ
顧みる間もなかりけり年の夜
紅蓮（ぐれん）の火凍るその日や震災忌
冬凪の波に漂ふ凶の籤
墨滴らし紙漉く人の目を想ふ
歩みゆく道を決め来て春浅し
かのひとの香を断つや沈丁花

日の永し乗合バスは女のみ
あらばしり旨き酸味は知らざりき
紙漉の皮膜を剝がす手練かな
大阿闍梨*満行近し春の水
朝寝など犬に喰はせよ月曜日
葱坊主園児の対（むか）ふ門高し
神々のそこにおはすや風光る
子等去りて磯巾着の安堵かな
夕桜別れを惜しむ男女あり

*比叡山延暦寺の千日回峰の行

生命燃え生命消えゆく五月かな

柏餅父の墓前に供へけり

ご懐妊の号外を読み藤の花

夏風邪のなほ抜け切らず桜桃忌

ひとすぢの鉄路に裂かれ麦の秋

訪ねきし古都にゆかしき岩たばこ

木苺の歯を食ひしばる旨さかな

朝勝負くぬぎ林のかぶと虫

*新松子（しんちぢり）男の意地を通しけり

*秋に実る青まつかさ

戦闘機秋風の空圧しけり

曼珠沙華一気に咲きて子規忌かな

二度となき逢瀬の如き新酒かな

*敗荷（やれはす）やさらに落ちたる我が視力

白露の消えても結ぶ命かな

大正の父の形見の冬帽子

残菊を愛でる母の背高く見ゆ

旧友の野辺の送りや雁渡る

羽子板市イチローここも席巻す

*破れ蓮（やれはす）＝蓮の葉の残滓

しづけさや木霊（こだま）も黙す冬木立
数へ日を数へぬままに五十路越ゆ
吐息して寒紅艶を増しにけり
*姫始（ひめはじめ）韋駄天無念の襷かな
襟巻きの老爺往来眺めをり
多喜二忌や蝦夷地の海の猛吹雪
篠笛に射す陽の淡く日脚伸ぶ
大太鼓連翹（*れんぎょう）呼応するごとく
うぐひすや去年の鳴癖そのままに

*飛馬（ひめ）始め、火水（ひめ）始め、密事（ひめ）始め等諸説あり

*モクセイ科の落葉低木

やはらかく木の芽の林広がれり
卒業や一期一会の女子袴
縺れたる話のあとの新茶かな
連れ立ちて家族のごとく松の芯
テニス靴履きし娘の春日傘
曇天を照り返しけり柿若葉
白玉やワールドカップの話題のみ
信長忌下天は夢幻黙禱す
虹立つや未だ黒雲残れるに

愛憎の毒雪ぎたし沙羅の花
甚平や痩せ老人を粋に見せ
箱庭や宇宙の基地も名勝も
浜木綿や気骨の刑事職を辞す
葉の刃風に研がるる芒*かな
平壌より帰る友あり小鳥来る
十六夜や「月の砂漠」を笛で吹く
山門の扉の秘する紅葉かな
柿ひとつ残して生家壊さるる

*芒＝穂先、のぎ

手酌して待てど来ぬ人そぞろ寒
行ひが善しと自賛の小春かな
小夜時雨笛に託せし思ひあり
鴨*を吉兆と聴く目覚めかな
童心を誘ふ鯛焼待ち切れず
冴ゆる夜の星辰我を律せしむ
水鳥の指揮官は誰(た)ぞ漂へる

*ひよどり＝鳥の一種

散策中に思う・韓国にて

新井　宏

平成十三年の初めから、韓国の国立慶尚大学で金属工学を教えながら、趣味の古代史や考古学の研究を続けている。その間に韓国を散策しながら思ったことを『まんじ』に四編ほど書いているが、その内の二編は、私の趣味の研究が大進展した事情を自己陶酔しながら謳い上げたものである。頁数の関係で一部割愛して載せたい。

誤解から始まる（平成十四年五月）

今度のドラマもまたいつものように誤解から始まった。

奈良に似通う新羅千年の王都慶州は四方を山に囲まれた小さな盆地にある。その中央部の南側に位置する半月城は東西千メートル程に三日月状に拡がった台地で、四周に堀を廻らせ、内部に王宮があったと伝えている。慶州を散策するときには、ここに立ち寄ってから帰るのを習慣とし

ていた。その日も朝から佛国寺と石屈庵を歩きまわり、足裏にはまめが出来始めていたが、散策の仕上げのつもりで、慶州国立博物館の側から道のないところを半月城によじ登った。半月城の外周部は二重、三重、四重の木立になっているが、内部は広場になっていて、初夏の陽射しが照りつけていた。日陰を求めてちょっと歩き難いが木立の中の瓦礫石を伝い歩いている内に突然ひらめいた。

たしか尹武炳の論文にここから見下ろす南北路のあたりに新羅王京の朱雀大路があり、その幅が百二十メートルだと報告されていたはずだと。それなら大変なことになる。三十年来の私の学説が『三国史記』の古文書で検証されることになる。

……今頃こんなところをのんびり散歩している場合か……すぐに資料に当って見なければ……でも資料の多くは日本に置いてある……それなら金海空港に直行しようか……いやもう今日の飛行便はない……韓国の大學の図書館にだって資料があるはずだ……。

私は永年にわたって、古代の朝鮮半島と日本に共通する古韓尺と名づける二十六・七センチの尺度が存在していたことを主張し続けている。研究論文も多数書き、研究書も出版している。その結果、一部の学者には積極的に認められ、韓国ではその本の海賊版が出ているほどであるが、世の中の常で従来学説とぶつかるところもあるため、無視し続けている学者も多い。それは、私の学説が主として考古学的な遺構とか遺物などの間接的な状況証拠に依存していて、古文献の裏づけなど直接的な証拠に乏しいためである。

……決定的な証拠がない限り、従来学説に忠実にしていれば間違いはない……第一いままでに従来学説に則って多くの論文を書いてしまっている……アマチュアの学説にうっかり乗っかって笑いものになったら大変だ……。そんな声が聞えて来るようであった。

だから、私の学説が『三国史記』の記事で裏付けられれば、仮説が定説になる。はやる気持を抑えきれない。かくして、今度のドラマも突然のひらめきで始まった。

しかしそれが誤解であったことが間もなく判明する。美しい誤解はいつも醜い現実によって覆される。

突然のひらめきとはこういうことであった。

慶州には昔から方格地割が残っていて、この方格の単位が約百六十一トルだとする説が考古学的な調査が進むにつれてますます確実になってきた。その事実と朱雀大路が百二十メートルであることを組み合わせると『三国史記』の「王都、長三千七十五歩、廣三千十七歩、三十五里、六部」という記事がうまく説明できるのである。

すなわち「王都長三千七十五歩」の記載は王京が百歩単位の方格に区切られ、中央に七十五歩の朱雀大路を持っていたことを意味しているのではないか。それならば、百歩が百六十メートルで、七十五歩が百二十メートルに対応し、一歩は百六十センチ、一尺は二十六・七センチと計算される。それは、遺構から求めた古韓尺そのものの長さに他ならぬではないか。……もう間違いない……。

はやる気持で次の文章を見れば、「廣三千十七歩」とある。この十七歩すなわち百尺は古韓尺で計算すれば二十六・七メートルで、これも今までに発掘された古代道路幅の十三・四メートルのちょうど二路分である。ますます確実だ。高揚する気持を抑えきれない。

しかしこの美しい誤解は成立たなかった。百二十メートルの朱雀大路が存在していたとする尹武炳の学説が、その後の発掘調査で否定されていたからである。それに良く見れば、「長三千七十五歩」とは王京の長さを南北に測った時のことで、東西に走る朱雀大路がその長さに含まれるはずがない。その上、私の見た『三国史記』にミスプリントがあり、「広三千十八歩」の誤りであった。

単に夢から醒めただけなのに虚脱感が漂う。

……それにしても良い線を行っていたのに……発掘調査の理解が間違えているのではないか……長を幅の意味で使った例だって探してみればどこかにあるのではないか……。失ったものが大きかっただけにいつまでたっても夢から立ち去りがたかった。

しかし私には確信に似たものがあった。かっても誤解から始まって深い失意を味わいながら、もっともっと厚みのある着想に至ったことが何回もあったではないか。平坦な道で得た着想にはない深みがないが、挫折の後に得た着想には何人も到達しえない豊かさがあるではないか。

そして間もなく本当にもっと素晴らしい夢を見ることになる。美しい誤解が醜い現実に覆された挫折の後に、想像もしていなかったほどの広々とした世界が拡がっていたのである。

心がふたたび高揚するが、いまは伝える言葉を知らない。この感動を伝えるには、ただただ自己の研究遍歴を語るしかあるまい。

ものさしの研究というニッチな世界に日を向けるきっかけとなったのは、森浩一の岩波新書『古墳の話』を読んだ昭和五十年頃のことである。そこに出ている古墳の大きさとものさしの関係に釘付けとなってしまった。古墳の大きさを測ると中国の晋尺（二十四センチ程度）で完尺を得ると言うのである。

そして古墳の一覧表を眺めている内に誤解が始まった。数字を見る限り、晋尺よりももっときれいに当てはまる尺度があるではないか。なぜ著者はそんな簡単なことに気付かないのだろう。私ならもっと合理的な方法で最も良く当てはまる尺度を求める方法を知っている。それは統計学とそれに基くコンピュータ計算ではないか。私の出番がやってきたのではないか……。折から、コンピュータが一般企業にも普及しはじめていた。

しかし、着想自体は優れていて誤解とばかりは言えなかったが、古墳の大きさが規則正しく山来ていると思ったのがそもそも間違いであった。第一、文献によって古墳の大きさがかなり違うし、どこを起点に測った数値かもわからない。無数にある古墳のどれを対象にすべきかも大きな問題であった。数学的な解析方法は開発できたが、肝心の古墳のデータはとても明解に尺度を語るにはほど遠かった。いくら試行錯誤して見ても満足行く結果は得られない。

折から専門の学者を含めて、古墳の設計や尺度について多くの学説が出され始めていた。しか

し、どのアプローチも主観的、恣意的に過ぎていて納得の行くものではない。一日も早く自説を発表したいと思いながらも、すっかり行き詰まってしまった。ただただ、いつの日にかコンピュータを使った解析方法が脚光をあびることを信じて、余暇を見つけては全国の古墳の計測図面を集め続けていた。しかし四十歳代のサラリーマンが自分だけの時間を持ち続けることは難しく、いつのまにか情熱も醒めてしまった。

それからちょうど十年近くたった昭和五十八年のことであった。仕事上で責任を取る形で研究部門を担当することになった。左遷の意味が込められていた。

しかし、この職場が私の人生に幸運を呼び込むきっかけとなった。美しい誤解が醜い現実に覆され、そしてもっと大きな夢を育む。そんな研究の世界がよほど体質にあっていたらしい。ヒットが出始めた。

そして仕事上で博士号を必要とするというので、取り組んでいた研究で、全く期待もしていなかったような理論を編み出すことに成功した。神仏を信じない私が神仏の加護を感じた瞬間であった。

仕事が再び順調にまわりはじめ、精神的に多少の余裕が持てるようになり平成と年号が変わる頃から、また尺度の研究を再開しようという気持が高まった。

ひとつの突破口となったのが、古墳ばかりでなく、古代宮殿や古代寺院にも目を向けることであった。そこで出会ったのが、かの有名な「法隆寺再建・非再建論争」である。

実は、この大論争も一部の学者の美しい誤解が始まりであった。『日本書紀』には天智九年（六七〇）に「一屋あますことなく焼失」と書いてあるにもかかわらず、建築学者の関野貞が明治三十八年これを推古朝すなわち飛鳥時代の建築であるとして「非再建論」を唱えたのである。それは様式論からすれば尤もな主張であった。どう見ても唐の文化が大量に流入した白鳳時代以降にこのような古風な建物が建てられるはずが無かったからである。

この関野貞の「非再建説」は日露戦争で高揚したナショナリズム的な世論に熱烈に受け入れられた。例え再建であったとしても世界で最も古い木造建築であることには変わりがないが、国民感情としてはもっと古くなければならなかった。聖徳太子の創建した寺そのものでなければならなかった。

これを強力に支えたのが美術史家の平子鐸嶺であった。古籍に通じるこの新進気鋭の平子は様式論とともに史学の面からも「非再建論」を次々に立証した。あたかも「非再建論」が完全に受け入れられたかの様相を呈した。

これにびっくりしたのが文献史家達であった。すくなくとも大化以降の書紀の記述には信を置く彼らにとって、書紀の書かれるわずか六十年前の出来事が間違いであって良いはずがない。それまで一度も法隆寺を訪れたこともなかった若き日の喜田貞吉が「非再建論」に戸惑う恩師小杉温邨に代わってするどい反論の筆をとる。これが大論争の始まりであった。

この誰にでも判る「燃えたか燃えなかったか」と言うテーマは、専門学者ばかりでなく、多く

の歴史フアンを惹き付け、以降三十年以上に渡って延々と繰り広げられることになった。

しかし昭和十四年に実施された若草伽藍の発掘調査により、この問題は突然幕が下ろされてしまう。若草伽藍の一部が、法隆寺西院伽藍の一部に重なっており、「非再建説」が成り立たないことが判明したからである。美しい誤解は醜い現実によって覆されてしまった。

ところでこの論争において、非再建論者が一貫して主張したのは、法隆寺が高麗尺（三十五・五センチ程度）により造られているという点であった。それは、法隆寺の建物を詳細に測ればすぐに判ることであるが、この建物が七世紀中頃以降の公式尺すなわち唐尺（二十九・七センチ程度）で作られたとは到底信じられなかったからである。ここに高麗尺が華々しく登場した。

もっともその頃、高麗尺と言う尺度の証拠があったわけではない。平安時代の書『令集解』や『政事要略』に、それらしき記事があり、大化以前に唐尺より二割長いものさしが存在していたと考えられることと、それが中国の東魏尺に近いことが最大の根拠であった。そして高麗尺を、法隆寺の建物に当てはめて見たところ唐尺よりも良く合ったのである。

たしかに有力な論拠であった。しかし法隆寺が高麗尺すなわち東魏尺で作られたと言う説も今となってみると美しい誤解であった。

それは東魏尺が唐尺の二割増しではなく、唐尺と同じ程度の三十センチであることが今の中国では定説となってしまったからである。

しかし一度信認を得た東魏尺は、日本や韓国の学者たちを惹きつけ、未だ東魏尺に基く考察が

相次いで行われている。旧石器捏造に乗って大合唱をしていた考古学界と同じ構造で、皆で渡れば恐くない。

法隆寺建築に高麗尺を当てはめて見ると良く合う場合があることは確かであった。しかし全てがうまく合っている訳でもなかった。高麗尺に捉われなければもっと良く合う尺度がある。それが古韓尺である。古韓尺なら建物細部にいたるまで実に良く一致するのである。しかし古韓尺などと言う記録はどこにも無いし、法隆寺にだけ適合してもそのことだけでは誰も認めるはずがなかった。

それからは夢中になって古代寺院の寸法を渉猟した。そして法起寺も法輪寺も古韓尺に良く合っていることを知った。しかしまだまだ不十分だ。そして発掘調査に目を向けると日本最初の寺院、飛鳥寺遺蹟も古韓尺に良く合っている。その他の飛鳥・白鳳寺院遺蹟も正確な寸法を得ることができなったけれど、古韓尺なら矛盾がない。古墳の研究とも良く整合する。ますます確信が深まる。

しかし、尺度問題の恐いところは「そう思って見るとそう思える」ところにあった。恣意的な解釈なら誰にでもできる。誰でも納得できる客観的な判定基準でなければ、いわば水掛け論に終わってしまう。これを如何にして乗り越えるか。そして想い至ったのが古墳の尺度を論じる時に開発した統計学利用によるコンピュータ解析法であった。しかもかってはコンピュータを個人で使うことなどなかなか望めなかったが、パソコンが簡単に使える時代が始まっていた。

例え不正確であっても数多くのデータを解析すれば真の姿が浮かび上がってくる。それが統計学の教えるところである。法隆寺のように品質の良い測定値はこれからはいくら望んでも簡単に手に入る訳ではない。しかし、不正確で良ければいくらでもデータはあるではないか。発掘調査報告書を求めて国会図書館通いが始まった。そして当然の帰趨として朝鮮半島にも目が行った。時が熟していた。この頃から韓国では古代寺院の学術調査がいわば国の威信をかけた形で行われ始めていた。その中でも慶州の皇龍寺跡の調査は絶好な資料を提供してくれた。東大寺を凌ぐこの巨大寺院跡には、礎石を残した九重塔、金堂、講堂や廻廊が残っていたからである。そして古墳や宮殿、寺院の膨大なデータが手元に集まった。さあどうやって料理するか。

とにかくデータをコンピュータで解析し、その結果を時代・地域別に並べて見ることにした。そして驚いた。古韓尺が色濃く浮かび上がってきたのである。

いつのまにか五十路に入り、相変わらず仕事と格闘する日々であった。時間の余裕があるはずがなかった。しかしサラリーマン生活にも波があり、失意を味合う時に、あたかも代償を求めるかのように夢中になって論文を書き始めた。心の中では、博士論文の時の「柳の下の泥鰌」を再び狙っていたのかも知れない。書き出しは順調であった。

しかしそんな時に限って、仕事が順調に回りはじめ、時間が足りなくなる。朝早く起きて書き進めるしかなかった。もう勢いは止められない。それが例え美しい誤解であっても、もう後ろ戻

りはできなかった。そして三篇の論文を書き終えて、それをもとにして『まぼろしの古代尺』という研究書を脱稿したのが、平成四年のことである。

もともと本として出版することが前提であった。地味な研究誌にアマチュアの論文を発表しても専門家からは無視される。だから研究成果は本として紹介しなければならなかった。それも歴史や考古学の世界で権威ある出版社でなければならなかった。しかしそんな願望を簡単に受け入れてくれる出版社があるはずがない。

失うもののない者の強さであった。とにかく迷わず第一希望の吉川弘文館に誰の紹介もなく草稿を送ってみた。

人生にはつきがある。編集者が高麗尺に疑問をもった経験のある方で、とにかく出版を検討してくれるという。吉川弘文館と言えば、専門の学者でさえそこで本を出せば勲章になる出版社であった。定説にもなっていないアマチュアの本など余程のことがなければ引き受けるはずがなかった。それが本にしてくれると言う。有名な歴史考古学者坂詰秀一先生が新聞書評でも取り上げてくれた。神仏の加護を再び感じた。

出版が終わってしまえば一段落と思っていたのが大間違いであった。背伸びをし過ぎてしまった。いたるところに美しい誤解が満ち満ちていた。そのことにはまず自分で気がつき次に読者が教えてくれた。自分ではこれしかないと思った論理も冷静になれば、別の見方もあった。使ったデータがミスプリントだった場合もあった。晴れがましい本を開くのが恐いと思う日もやって来

た。しかし基本的な間違いではない。何とかしてもっと自論を強化したい。世の中にはそんな資料が必ずあるはずだ。

またデータとの格闘がはじまった。突破口があるはずだ。それを求めて毎朝五時には起きだして机に向う日々が続いた。段々深みにはまり、朝鮮半島の中世から近世にかけての計量史や土地制度史の研究、それに中国の土地制度研究史にまで手をひろげるようになった。

その結果、生まれたのが、中国・朝鮮半島・日本にまたがる壮大な土地制度史の構想であった。主観的には個々の構想を繋ぎ合わせれば、自然に出来上がる構想であるが、他人に説明するには肝心の古韓尺がもっと直接的に検証されなければならないし、古韓尺による土地制度の証拠が見つからなければならない。そのミッシングリンクをいかにして探すか。それはかならず朝鮮半島にあるはずだ。韓国に行きたい。

そんな姿を見ていた妻が言ってくれた。……早く会社を卒業して、韓国に行っていらっしゃい……。この一言が決定的であった。

私たちには武という知的障害を背負った子がいる。この子が果たして、ひとりでバスに乗れるようになれる日が来るであろうか。それが、初めて異常に気づいた時の想いであった。その武が今では、社会福祉法人の工場でお給料を貰って働いている。ゆっくりではあるが確実に一歩づつ進んでいる。その進歩を見る度に、私たちふたりは喜び合ってきた。夫婦の気持ちがひとつになるのはいつも武のことであった。だから、その子を置いて韓国へ行くことなど願望にすぎなかった。しかし武のためにも良いかも知れないと妻は言ってくれる。嬉しかった。

アマチュアとして研究していると、アマの良さ悪さが良く判ってくる。それと同時に何かとプロをけなしながらも、専門家の本当の凄さも判ってくる。だから、自分の学説を本気で専門家に認めさせるには強固な証拠を見つけるか、または専門家の内に入って同じ論理で発言して行くしかない。そのためには、日本でも韓国でもいいから大学院に入学するのは妙案である

……いやもっと妙案がある……大学の先生になってはどうか……もちろん、歴史や考古学の世界で、大學の先生になれるわけがない……あるとすれば金属工学の分野だが……。

たまたま博士論文の時に見出した理論は金属工学の分野ではちょっとした勲章となっていた。これに民間会社出身ということを逆手に取ってアプローチすればチャンスは十分にある。

そうこうする内に、平成十一年には会社卒業が現実のものとなった。しかも非常勤顧問と言う願ってもない待遇をしてくれると言う。いよいよ古韓尺学説の完成を目指して動ける環境が整った。

ところが現実は皮肉であった。もうひとつの趣味、金属考古学の研究が目前に大きく拡がってきたのである。会社卒業までは職業としての金属を表に出した活動は無意識の内にひかえていたが、制約がとれた途端、蓄積があっただけに、いきなり一軍入りしてしまい、引くに引けなくなってしまった。それだけに成果も面白いほど上がった。古韓尺の研究に比べれば、何をやっても論文に書ける気分であった。

そんなある日、韓国で講演をして欲しいという話がふたつ飛び込んできた。チャンス到来である。講師の略歴を送るようにとの連絡に、「待ってました」とばかりに送ったのが、私の特製履歴書である。

韓国語で書いたその履歴書には、巧みに自己宣伝を織り込んでおいた。韓国の歴史や考古学にあこがれを持つ日本人としても、金属工学の専門学者としても、高度成長期を生きぬいた企業人としても、どの点から見ても関心を持ってもらえるように作り上げた履歴書であった。あわせ技で一本というのがあるが、てらいもなくそれを狙ったものであった。

それが慶尚大学の日本文化研究所名誉教授姜東湖先生の目に留まり、金属工学科の許甫寧教授に手渡されたのが幸運であった。平成十三年の初めから韓国での生活が始まった。

韓国では早速古韓尺の研究を始めるつもりであった。しかし初めは、金属考古学分野を優先した。書くべきテーマがたまっていたし、折から韓国の慶州で開かれる金属考古学の世界会議にも論文を二件提出する予定があったからである。それも一ヶ月ほど前に終わった。その慶州がまた私の古韓尺研究に火をつけることになった。

『三国史記』や『三国遺事』の記載が古韓尺の文献的な証拠になるという確信には変わりがなかったが、尹武炳の朱雀大路説が否定されていたのは痛手であった。なんとか敗者復活の道はないかを模索し続けた。そして思い付いた。

『三国史記』の「王都、長三千七十五歩、廣三千十八歩」に出てくる七十五歩と十八歩は共に九の倍数になっているではないか。すなわち七十五歩は四百五十尺で五十尺の九倍、十八歩は二歩の九倍であり、それぞれが九本の道路幅を意味しているのではないか。それなら王京三千歩を一里（三百歩）ずつに区切った時に必要な九本の道路と一致する。古韓尺の五十尺は発掘遺構の大路十三・四メートルと完全に一致するし、二歩はその四分の一で小路の単位だ。

そう気がついた途端、全てが見えて来た。『三国遺事』にある「京中　三百六十坊　五十五里」の意味は京が三百六十坊と五十五里で成り立っているということだ。計量史を知らない学者は里を距離のことだと思っているから、さっぱり判らないだろうが、里が一里四方の面積を意味するのは常識であり、これは町が距離の単位であると同時に一町四方の面積を意味したのと同じことなのである。

そうであれば王京は方三千歩すなわち方十里であるから面積が百里である。だから王京の総面積百里の内五十五里が村落であり、残りの四十五里の内に三百六十坊が出来ていたことになる。後は簡単に、里の中に方百歩の坊が九つあったことが判る。すなわち三百六十坊は四十里分である。この四十里と五十五里を合わせると九十五里で残りの五里は王宮分に違いない。

そこまでの考察は一本道であった。この結果一坊すなわち百歩が百六十メートルとなり、その尺度は古韓尺と同じ二十六・七センチとの結論がでる。……うまくいった……うまくいった……もうこれで十分だ……。

……でも待てよ、それなら里と坊は王京のどの位置を占めていたのだろうか……確か『梁書新

羅傳』には王京の中心部に坊の部分があると書いてあったはずだ……それに『三国史記』には『三国遺事』とは異なって五十五里ではなく三十五里と書いていたではないか……。

これらの疑問が結局最終的に王京復元図に左右対称の美しい配置図をもたらすことになる。そのプロセスを紹介したいが煩わしすぎる。……とにかく美しい復元図だ……その上これらの復元図が従来の学者たちが道路遺構の観察や発掘調査から作っていた復元図に完全に一致するではないか……。また神仏の加護があった。

かくして古韓尺が文献的な証拠を得ると同時に中国・朝鮮半島・日本を結ぶ壮大な土地制度変遷史の神秘のミッシングリンクも見つかった。そして夢中になって論文を書き始めた。

……論文を書き上げない内に飛行機が落ちては絶対に困る……出来上がったらどこの学会誌に載せようか……急ぎたいが安売りもしたくない……それに中国・朝鮮半島・日本の壮大な土地制度変遷史も書かねばならない……土地制度変遷史は計量史ほどニッチな世界ではない……歴史学の根幹部分だ……大満足だ……大満足だ……妻に感謝する……。

崔致遠の碑文（平成十五年二月）

良港にはかならず島と山がある。釜山は島と山に取り囲まれた超過密都市である。その西側には、金井山から九徳山まで断続する南北の山脈が連なり、洛東江が釜山に流れ込むのを峻拒している。一方、東側にも機帳から萇山に続く南北の山なみがあり、そのふたつの山脈にはさまれ細長く広がっているのが釜山の市街地である。

しかもその市街地にも、島のような小山が散在しているので、平坦な土地はほとんどない。だから四周の山々の中腹まで超高層アパート群が立ち並ぶことになる。

そんな釜山を地図も持たずに良く歩き、中心部はもうあらかた歩き尽くしてしまった。残るのはふたつの山脈の外側に広がる広域市街地である。

海雲台は釜山の中心地から東部にやや離れた萇山の南海岸にある名勝地である。昨年末のある日、思い立って釜山の海岸線を歩こうと、東萊のバスターミナルから歩き始めた。鉄道が見え隠れする幹線道路を二時間あまり歩くと海雲台に着く。韓国の鉄道は完全に時代から取り残されていて、めったに列車は通らない。いきなり自動車社会に突入してしまったからである。

かっての海雲台は海辺特有の飲食店街が雑然と立ち並び、その周りに屋台がひしめいていたように記憶しているが、今は完全に再開発され、周辺には大型の観光ホテルが林立している。ワールドカップに向けて整備したのであろうか、道路も広く、屋台等はテント村に集約されていて、国際観光地の風情である。

その海岸のはずれに、「釜山港へ帰れ」に唄われた冬柏島がある。もとは独立した島であったが、今は陸続きで、頂上に統一新羅末期の大学者崔致遠の銅像が建つ。

わが畏友、漢詩人の鯨游海氏との酒肴にでもなればと、周囲に記された崔致遠の漢詩を読もう

とするが歯が立たない。しかし事績についてはハングルなので何とか判る。

それによれば、崔致遠は十三歳で唐に入り、十八歳で科挙に合格、詩人として名を挙げ、役人として出世し、黄巣の乱では「討黄巣檄文」を書いて大功を挙げたという。まるで阿部仲麻呂のような経歴であるが、異なるのは二十九歳の時、故郷に錦を飾り、新羅の王朝に仕えたことである。

しかし当時の新羅は既に朽ち落ちる寸前であった。彼の意見に耳を傾けなかったばかりでなく、迫害さえ加えるありさまで、彼は結局すべてに絶望して伽耶山海印寺に引きこもってしまった。

冬柏島に崔致遠の銅像が残るのは、彼が伽耶山に入る途中、ここを通り風景の美しさに感動して、島の南端の岩に「海雲」と刻んだとのいわれによる。海雲は崔致遠の号のひとつである。

崔致遠の事績を読んでいる内に思った。管原道真と全く同時代に生きているし、阿部仲麻呂よりも百年ほど後の人物であるが、経歴が実に良く似ている。これは『まんじ』のテーマになりそうだ。さっそく大学の図書館で調べてみようと。

それが私の研究に大幸運をもたらすことになった。崔致遠の記した「崇福寺碑文」に出会ったのである。そこには、大変なことが書かれていた。

……ついている……ついている……本当についている……。

人生にはつきがある。そしてつきを意識するとまた次のつきを呼びこむ。崔致遠の崇福寺碑文に出会ったのも、そのつきの連鎖の一環にちがいない。

思うに、今度のつきの連鎖を辿って行くと、どうもすべてが初めての韓国旅行に行き着くようである。

妻と初めて韓国を訪れたのはもう十年以上も前になる。五十代半ばのサラリーマンしては最多忙な時期に、やっとの想いで纏め上げた「古韓尺」の研究結果が、幸運にも吉川弘文館から出版されることになった。それを機会に、文献だけで知る韓国の遺跡、特に慶州の皇龍寺址はぜひ見ておきたかった。五月の連休を利用してのあわただし小ツアー旅行、たしかひとり当たり二十万円以上かかったように記憶している。今思えば随分割高な旅行であったが、それが私たちで一緒に出かける初めての海外旅行であった。

世の中には不思議なことがたくさんある。この韓国旅行がそうであった。わずか六日間の日程に過ぎなかったのに、その時の出会いが古韓尺の研究にいつも不思議に絡んでくる。この海雲台の崔致遠もそうであった。とにかくすべての出来事が不思議な糸で結ばれ、私の研究を後押ししてくれている。

私は永年にわたって、古代の朝鮮半島と日本に共通する古韓尺と名づける二十六・七センチの尺度が存在していたことを主張し続けている。しかしそれは間接的な状況証拠の積み重ねによるものであり、直接的な証拠に乏しいため、無視し続けている学者も多い。

なんとか古韓尺の決定的な認証を得たい。その思いで、韓国にやってきた。

そして二年が経過した今日、崔致遠の崇福寺碑文に出会ったお蔭で当初の目的を二百パーセント達成した気分でいる。とにかくついていた。いやつき過ぎていた。出るはずのない牌を次々に引いてきて連続して九連宝灯で上がった気分である。

それがすべて最初の韓国旅行と関連しているように思えるのである。こんな具合である。

第一日目は公州や扶余の観光拠点となる儒城温泉に泊った。韓国最大のこの温泉地は、その翌年に開かれる大田科学万博の工事で殺気立っていて、道路を渡るにも決死の思いであった。そんな雑踏をさけながら、朝早く妻と散歩をしている内に、たまたま大学らしいところに行き当たった。それが百済文化研究の名門、国立忠南大学であった。もちろん大学の名前はよく知っていたが、宿のすぐ近くにあることなどまったく予期せぬことであった。……ああ、きっとこの大学に何か縁がある……。

そんなぼんやりとした予感がその後に次々と実現して行く。

まず忠南大学の百済研究所から古代製鉄技術についての講演の依頼が舞い込んできた。それは、韓国での生活を始めてから一年ほどたった一昨年末のことであった。会社を卒業してから書き始めた金属考古学関係の論文が目に留まったらしい。私の講演のために、一日の日程を準備してくれるという。

韓国の考古学や古代史の関係者と知り合う絶好な機会である。講演時間も十分にある。それならば古韓尺の研究についてもぜひ紹介したいと申し出たところ快く受入れてくれた。

企画者は私をたんに金属考古学の研究者としか知らなかったようであるが、講演会場には、古韓尺の研究を通じて知り合った関係者が多数やってきていた。その関係で、忠南大学の百済研究所との繋がりが深まり、昨年夏には論文「〈三国史記・遺事〉記事による新羅王京の復元と古韓尺を『百済研究』に載せてもらうことになった。

この論文が古韓尺研究の決定打になるだろうということは、私には良くわかっていた。とにかく十分過ぎるほどの手応えであった。これで永年の夢が百パーセント達成できる。それを『百済研究』に紹介できるのも、最初の韓国旅行の奇縁のように思える。

しかも、その論文の主舞台となった新羅王京すなわち慶州には第三日目に泊っている。奈良に似通う静かな古都で、その東側に念願の皇龍寺址がある。奈良東大寺をしのぐ巨大寺院で、その詳細な発掘調査結果が発表されたことによって、古韓尺説がどれほど強力な支持を得たか計り知れない。その皇龍寺址をぜひ見てみたいというのが、旅行の主目的であったが、もちろん観光コースには入っていない。

翌朝早くタクシーの運転手に皇龍寺址と告げて目的地に向かうが、場所が良く分からないらしい。世界的に有名な遺跡でさえ、観光名所でもなければ現地の人々は関心がないのであろう。それでもなんとか地図を頼りに広大な発掘現場に辿り着いた時には、もう太陽が昇り九重塔址の礎石群が朝露で光り輝やいていた。あこがれの地を踏むことができたという思いで、金堂址、講堂

址、回廊址、そして中門址とむやみに歩き回った記憶がある。

その皇龍寺址の発掘調査は今も続いていて、皇龍寺周辺の王京條坊の様子が次第に明らかにされ、従来から有力であった百六十メートル方格説がますます確実なものになって来ている。この方格地割と『三国史記』や『三国遺事』の記事を対照すれば、一方格が百歩であることが明らかであり、そこから一歩は百六十センチすなわち一尺は二十六・七センチと計算される。ここに古韓尺が待望の文献資料によって裏付けられることになったのである。

そして第四日目には釜山に入り海雲台に泊った。そこで出会ったのが、崔致遠の銅像である。崔致遠といっても、その当時は名前を知っている程度で、特に関心があった訳ではない。ただ新羅の歴史に登場する大学者に、朝の散歩で出会えたのが嬉しく、妻との会話も弾んだ。そしてその思い出が私を再び海雲台に向かわせ、崔致遠の崇福寺碑文に巡り合うきっかけとなったのである。日韓の古代土地制度を読み解く貴重な記録を発見する端緒であった。

日本では大化前代に代制という土地制度が行われていた。しかし、その起源については高麗尺によるとする学説が有力ではあったものの、疑問点を提出している学者も多く、いわば良く分かっていない状態であった。それが崔致遠の崇福寺碑を解析することによって、代制と朝鮮半島の結負制が完全に同じシステムであると明らかになったのである。そして、その基礎に古韓尺があったのはいうまでもない。それは日本と朝鮮半島の土地制度が同時に解明された瞬間でもあった。

私はもともと前回の「新羅王京」の論文を書けたことで十分に満足していた。そのことによって、古韓尺が状況証拠ばかりではなく、文献的にも裏付けられ、学説としての確固たる基盤を築くことができたからである。

しかし、日本の代制と朝鮮半島の結負制が同じシステムにあったことが判明したことは、古韓尺の認知を求める立場を超えて、日本の古代史に大きな影響をもたらすはずである。大化の改新をめぐる歴史論争のひとつの焦点である代制から町段歩制への移行についても、新たな観点からの論議を呼ぶことであろう。

私は古韓尺の研究を進めるためには、朝鮮半島の土地制度史の研究が不可欠だと考えてきた。しかし朝鮮半島の土地制度については、高麗末期以降については、かなり詳細にわかっているが、高麗以前の制度については、むしろ日本よりも判っていなかった。

わかっていたことといえば、朝鮮半島では、土地の実面積を示す頃畝制と、同一収量を基準とする結負制が並行して行われており、新羅時代には結と頃の面積がほぼ同一であったことぐらいで、肝心の頃や結の実面積については諸説あるものの、まったく定見が得られていなかった。

それは、高麗時代の土地制度を記述した『高麗史』文宗量田法（一〇六九年）の記述に誤りがあり、その復元をめぐって諸説が提出されていたからである。

文宗量田法というのは、量田尺の三十三歩の方格すなわち千八十九平方歩を一結とする全く奇妙な制度であった。ただし、それが間違いでないことは、金石文の記録などから明らかにされていた。問題はそこに記載された量田尺がどんなものであったかである。そこにはこう書いてあった。

六寸為一分 十分為一尺 六尺為一歩

これをそのまま素直に読めば、基準尺の三十六尺が一歩になる。しかしそれではどんな基準尺を持ち出しても、一結の面積があまりにも広くなり過ぎて実状にあわない。

そのため多くの学者達は「十分為一尺」の、分か一か尺の部分に誤りがあると考えた。そうするといずれの場合でも結局は六尺で一歩になる。しかし六尺一歩なら通常の制度そのものであり注記を必要としないし、文章的にも冗長すぎる。その上、六尺一歩であれば、どんな基準尺を持ち出しても、同時代の宋人徐兢が、宣和五年（一一二三年）に書いた『宣和奉使高麗図経』の記録に合致しない。

そのような状況から、高麗中期の結の面積でさえ定見が得られず、ましてや新羅時代の面積については、議論を深めることができなかった。

ところが私には私だけが知っている貴重な情報があった。古韓尺の研究を通じてである。

頃畝制とは古代中国の制度で方百歩すなわち一萬平方歩を一頃とする制であった。これを古韓尺で計算すると二万五千七百平米になる。一方、朝鮮時代前期の世宗代に定められた頃の面積も

二万五千七百平米で完全に一致するのである。しかも古韓尺の百歩を方格とする古代地割遺構は新羅王京をはじめとして、南原小京や尚州邑城にも残っているし、文献的にも方百歩をもって頃あるいは結と伝える事例がいくつもある。だから朝鮮半島では頃の面積は長い間変わらなかったのである。

この事実を知ると、見えるものが変わってくる。文宗量田法の錯誤は「十分為一尺」の部分ではなく最初の部分の「六寸為一分」にあったのではないか。そう気づけばあとは一本道である。六の部分が二、三、四、五のいずれかの誤りであったとするならば、文章としての意味も十分に通る。

これを徐兢の記録に照らしてみれば、周尺を基準として

四寸為一分 十分為一尺 六尺為一歩

と読むのが最も合理的である。すなわち量田法の一歩は周尺の二十四尺になる。ところで周尺の八尺が一歩であるから、二十四尺は通常の歩で云えば三歩のことである。しかも周尺の一歩と古韓尺の一歩は実長が等しいから、文宗量田法を古韓尺の歩で示せば、三歩×三十三すなわち方九十九歩になる。何の事はない結は方百歩のことなのである。

しかしそれならばなぜ量田尺による方三十三歩などというややこしい制度を持ち出す必要があったのであろうか。この疑問を解く鍵が崔致遠の崇福寺碑文の中にあったのである。そこにはこのように書いてあった。

東俗 以五畝減石弓為結

これは、東俗（新羅）では方百弓すなわち一万平方歩の面積から五畝すなわち千二百平方歩の面積を差し引いたものが結であると解説した文章である。計算して見れば八千八百平方歩が結の面積になる。しかしこれは頃や結の面積を方百歩すなわち一万平方歩としていたことと異なるではないか。結と頃の面積が等しかったとする定説に誤りがあるのであろうか。

そこで重大なことに気がついた。もともとは、結は頃と同じ一万平方歩ではなく、九千平方歩すなわち〇・九頃だったのではないか。なぜならば、面積の里は九頃であり、十結が一里であったとすれば、結が〇・九頃と簡単に導き出せるからである。もともとは結と頃は異なった単位だったのではないか

そう気がつくとすべてが見えてきた。三国時代に、百済では結負制が行われ、新羅では頃畝制が行われていたのではないか。結は百負、一負は十束であるから、基本単位の束は九平方歩すなわち方三歩になる。だからこそ、三歩を量田歩にすればその一平方歩が束であり計算が容易になる。ここになぜ三歩を量田歩とする奇妙な制度が始まった理由があるに違いない。

しかも統一新羅の時代になると、当然のこととして、新羅、百済、高句麗の土地制度がバラバラであっては不便である。そこで結を頃に合わせてしまったのではないか。そうであれば、方三十三歩すなわち千八十九平方歩を一結とする制度がなぜ始まったかについても明快な説明を与えることができる。

すべてがひとつに収斂した。美的とも云うべき結果である。煩わしいのでいちいち示さなかったが、この分野の研究者達を納得させるための傍証も豊富にある。心が躍る。これで高麗時代以前の土地制度研究が大きく進展するし、古韓尺も万全になる。

しかし本当に喜ぶのはその後の結論を導いた時であった。百済の結負制の面積を計算してみると、その一結は二万三千百平米であり、一束は二十三・一平米である。一方、大化前代に日本で行われていた代制ではその五百束代が後の一町歩であり、そこから一束代を計算すれば、二十三・一平米になるではないか。日本と朝鮮半島の土地基本単位が名称も面積も完全に一致している。しかも束の下位単位の把も共通である。こんなことが偶然に起こるはずがない。日本の代制は百済の結負制に源があるに違いない。

今までの学者達は代制の起源を高麗尺に求めていた。しかし実際は古韓尺による結負制に起源があった。

……勝った、勝った、勝った……完勝だ……。

……みんなで渡れば怖くない……。

みんな高麗尺に乗っかって大合唱をしていた。誰かが、ある遺跡について高麗尺で設計されたと報告すると、詳細な検討もなく次の研究者はそれを引用する。みんなが引用するから、おそらく正しいのだろうと次の研究者もまた引用する。それに異を唱える者には冷笑を浴びせる。

誰かが言っていた。軍隊と研究は多数決がなじまないと。私も想う。研究は最も高尚な遊びだと。いうなればアルバイトをしながら、売れない小説や絵画を書いているようなところに研究の醍醐味がある。だから職業的な。研究者は自戒すべきだ。本来は高尚な遊びなのだから、研究費

も自弁すべきものなのに、給与さえ貰っていると。それがアマチュアの研究に冷笑を浴びせるとは何事かと。

いつか職業的な研究者に向かって、こんな文章を書いて見たいと思っていた。しかしよほど幸運に恵まれないかぎり、それが現実になるとは思ってもいなかった。とにかくついていた。

そして学んだ。とりとめもない偶然の出来事に心が弾む時、つきが生まれ、つきがつきを呼ぶことを。山歩きの知人に、成田空港でばったり出会ったりする。東欧旅行で一緒だった方を、ナイル河のクルーズ船上に見つけたりする。どうしても見つからなかった資料を、たまたま手にした本の裏表紙に発見したりする。そんな時には心が弾む。そして偶然の出来事を楽しんでいるとまた次の偶然がやってくる。それがつきだ。

崔致遠の崇福寺碑文がもたらした成果については、「結負制の復元と代制の起源」と題して一気に論文として書き上げた。いまそれを韓国語に翻訳している最中である。願望としては、日本と韓国で同時に発表したいが、プライオリティを優先する学術誌にあっては、それは許されまい。さあ、どうしようか。

いずれにしてもまた来週にでも釜山の海雲台を訪れてみよう。まだまだつきが続くような気がしている。これを逃してなるものか。

奴隷王朝

―世界史最大の下剋上―

宅見　勝弘

世界の歴史の中で最も劇的な下剋上は、何であろうか。

奴隷が王様になる奴隷王朝という王朝が世界史に存在する。この王朝名は俗称でなく、高校教科書に記載されている正式な名称である。

人権すら認められていない筈の奴隷が、王朝を築き、自ら国王として君臨した。歴代の国王も奴隷がなっていた。国民も奴隷が自分の国の最高権力者となることを受け入れていたのであった。むしろ、奴隷でなければ、国王になれなかったのであった。

一　下剋上の日本チャンピオン

日本史において、下剋上の代表的な人物と言うと、北条早雲・斉藤道三・松永久秀などが挙げ

られる。

北条早雲は、京都辺りから小田原に流れ着いた素浪人であった（鎌倉時代の北条氏とは全く関係が無い）。足利将軍家の堀越公方を滅ぼし、小田原をはじめ、関東の大半を支配した。

斉藤道三は、諸国を回っていた油売りであった。最初に仕えた長井家の当主を殺し、守護代の斉藤の名を騙り、守護大名の土岐氏を追放し、美濃の国を奪い取った。

松永久秀は、出自が不明であるが、将軍の家臣（細川氏）の家臣（三好氏）の家臣であった。主君の三好家の嫡子を殺し、将軍足利義輝を殺し、幕府の実権を握った。

三人の人物のように、下剋上というと、家臣が主君を裏切って乗っ取るイメージが強い。本来、下剋上は、社会的地位の下の者が実力で上の者に克（剋）ち、自らの地位を上げて行くことである。

豊臣秀吉は水呑百姓の出身から天下統一を果したのだから、社会的地位の下の者が上の者に克つという意味では、下剋上の覇者である。生れた時から死ぬ時までの社会的な地位の格差は日本人の中で最大であろう。主君の織田信長を裏切っていないので、下剋上の代表と言われることがあまり無いのである。

秀吉個人だけでなく、十六世紀末の日本と世界との関係を考えても、下剋上の覇者に相応しい。秀吉の野望は日本統一で留まらなかった。誇大妄想であろうが、本人の野望はアジア制覇・世界制覇であった。

秀吉は朝鮮出兵の時に、唐（当時は明）を手に入れる、と妻への手紙に書いていた。また、天皇を北京に置き、天竺（インド）を支配する、と養子の秀次への手紙に書いていた。

世界の中では、日本は未だ地位の低い辺境の野蛮な国ぐらいの認識しか持たれなかった。

当時、世界を支配していたのは、スペイン王国のフィリップ二世（フェリペ二世）であった。十五世紀末に、地球を東西に二つに分けて、発見した土地をスペインとポルトガルで山分けする、というトルデシリャス条約が結ばれていた。日本はその境界線上にあったのである。

十六世紀末にスペインはポルトガルを併合したことで、フィリップ二世は全地球が自分の所有物と思っていたであろう。ヨーロッパは他の国があったが、南アメリカの諸国を征服し、イスラム世界を征圧していた（晩年はオスマン＝トルコに敗れる）。

アジアにおいてはフィリピンを支配していた。（フィリピンの名前はフィリップ二世から名づけられている。）

そのフィリップ二世に対して、秀吉はスペインを開城せよ、との手紙を送っており、マニラを通じてスペインに届けられた。その前にも、秀吉は天下統一した手紙を送っているが、フィリップ二世の手元に渡っている。

まさしく、日本という下位の国が世界を相手に下剋上を試みようとしたと思う。

秀吉の外国侵略に対しては、非難すべきであり、多くの人を犠牲にした罪は責められるべきであろう。

しかし、善悪の問題を置けば、下剋上の日本チャンピオンは豊臣秀吉であると思う。しかも、何のシード権も無く、一番下からトーナメントを這い上がり、世界チャンピオンを目指した。そ

の点で、豊臣家を滅ぼした徳川家康よりも日本チャンピオンの名に相応しいと思う。

二　奴隷から首相になった日本人

日本は、奴隷制度という非人間的な制度が浸透しなかった世界史上でも珍しい国である。卑弥呼の時代から「奴婢（ぬひ）」がおり、江戸時代にも「えた・非人」がいたので、人間扱いされない、身分の低い人間はいた。しかし、西洋のような奴隷制度は無い。

しかし、奴隷から首相になった日本人が存在する。

大正時代に首相になった高橋是清（これきよ）である。

原敬（たかし）首相が刺殺されたために、急遽、高橋が首相になった。なお、高橋は五・一五事件で犬養（いぬかい）首相が暗殺された後に形式的なものだが、臨時首相にもなっている。

高橋は、首相よりも七回の大蔵大臣の方で活躍しており、また農商務大臣も歴任した。大臣になる前は日本銀行総裁としても活躍し、その前は横浜正金（現東京三菱）銀行副頭取も経験した。

八十三歳で大蔵大臣在職中に、二・二六事件で陸軍青年将校に惨殺された。

もし、高橋が奴隷のままで、政治や経済の世界に登場しなかったら、かなり日本の歴史は変わったであろう。

原首相が暗殺された後は、次の首相が決まらなかったかもしれない。

銀行の取り付け騒ぎが発生した金融恐慌を、高橋が大蔵大臣として支払猶予令（モラトリアム）や日銀特融によ

り静めなければ、大混乱になったかもしれない。

その後に発生した世界大恐慌（昭和恐慌）で、日本が国家破産したかもしれない。

それ以前に、日露戦争において、日銀の高橋が戦費の半分以上にあたる巨額の外債による資金調達ができなければ、日本は戦争に負け、ロシアの植民地にされたかもしれない。

二・二六事件で暗殺されたのが高橋で無ければ、陸軍のクーデターは成功し、軍国主義が進んだかもしれない。「だるま宰相」として国民や天皇に敬愛されていた高橋が殺されたことで陸軍の支持が得られなかったと思う。

高橋是清は、いつ、どこで奴隷になったか。

高橋が奴隷になったのは、江戸時代末であり、アメリカのサンフランシスコにおいてであった。

高橋は十四歳で、仙台藩から派遣されてアメリカに留学した。そこで騙されて、奴隷として売却されたのである。高橋は英語が分からずに奴隷契約書にサインしたのであった。

一年で奴隷から逃れて、明治維新後の日本に帰国したのであった。

三　中国は下剋上の歴史

中国史にも日本と同じく戦国時代はあるが、中国は多くの王朝交代が下剋上であった。

紀元前十五世紀ごろ殷（いん）王朝が誕生したが、前十一世紀に、殷の暴君・紂（ちゅう）王を周（しゅう）の武王が倒した。

この中国の王朝交代のことを「易姓革命」と呼ぶが、天命が革まって王の姓が易る、つまり、天命を聞いたと言えば、誰でも下剋上ができるのである。

前八世紀に周が衰えて、春秋の五覇と呼ばれる五王が覇権を争う春秋時代に入った。前五世紀に、戦国の七雄と呼ばれる七国が覇権を争う戦国時代になった。春秋戦国として五世紀も続く戦乱の時代であった。

前三世紀に、戦国の中国の天下統一を果したのは秦の始皇帝であるが、秦朝末期に陳勝・呉広の乱が起こった。「王侯将相いずくんぞ種あらんや」という下剋上を表す言葉は、陳勝の言葉である。

この反乱の時期に楚の名門の項羽を倒して、漢王朝を築いたのは、農民出身の劉邦であった。漢王朝は前三世紀末から約四世紀も続くが、途中の十五年間、皇后一族の王莽が新を建てたので、一時中断している。

漢の次は、魏・呉・蜀の三国時代である。後漢から帝位を引き継いだ魏（曹操・曹丕）、蜀（劉備）、呉（孫権）の三つ巴の覇権争いであった。魏が蜀を滅ぼすが、魏の将軍・司馬炎が国を奪い（形式上は禅譲）晋を建てた。その後、晋は呉を滅ぼした。

四世紀初から、五つの民族と十六（実際は二十以上）の国が興亡を繰り広げる五胡十六国の時代が一世紀以上続いた。

北部は北魏が統一した。北朝は北魏含め五王朝が、南朝は四王朝が短期間に興亡する南北朝時代が一世紀半続いた。

六世紀に北周（北朝最後の王朝）の外戚の楊堅が帝位を奪い、隋王朝を開いた。南朝を滅ぼし、天下統一をしたが、三十年で滅びた。

隋の滅亡後、一時的に群雄割拠になったが、李淵（高祖）が隋の帝位を奪い、唐を建国し、次の李世民（太宗）の時代に統一をした。

唐王朝は七世紀から約三世紀も続くが、途中の十五年間、皇后の則天武后が周（武周）を建てたので、一時中断している。則天武后は自分の子供を殺し、当時の皇后に罪を着せる等して、自ら皇后の座を奪い、遂には中国史唯一の女帝になったのであった。

則天武后が老いると息子の中宗が復位して、唐が復活した。しかし、皇后の韋后が中宗を殺し、独裁化した。韋后を殺した玄宗が唐を立て直したが、晩年は政治に興味を失った。節度使（地方の軍団長）の安禄山が反乱を起こし、鎮圧されるものの、皇帝を名乗った。

十世紀初に唐を節度使の朱全忠が滅ぼし、皇帝の地位を奪った。朱全忠の建てた後梁を含め、半世紀の間に華北で五王朝が交代し、十あまりの国が興亡する五代十国の時代になった。

十世紀末に五代最後の後周の将軍・趙匡胤（太祖）が帝位を奪い、宋を建国し、次の太宗の時代に統一した。しかし、宋は軍人による反乱を恐れ、文人を重用したため、文弱になり、武力は衰えた。

十二世紀に北方異民族の女真族が建てた金が宋を侵略した。南へ逃げた宋をチンギス＝ハンが率いるモンゴル帝国が滅ぼした。

十三世紀にモンゴル帝国が四つに分断すると、中国は元と称した。元はモンゴル人を頂点とし、

次いで色目人（インド・アーリア系人）、第三身分が漢人（金の住人）、最下層が南人（南宋の住人）とする身分制度を定めた。

南人の乞食であった朱元璋（洪武帝）は明を建国し、モンゴル民族を北方へ追いやって、異民族の支配から脱した。明の支配は三世紀続いた。

十七世紀に李自成が率いる農民の反乱で明が滅びると、女真族の後金が侵略して、国号を清として支配した。清も明と同じく、三世紀続いた。

その後は、中華民国、中華人民共和国となり現在にいたる。

中国史の中で、金・元・清は異民族による侵略王朝であるので、成立の過程が他の王朝と異なる。

しかしながら、皇帝から家臣が奪って建てた国や、戦乱の中から身分に関係なく実力で天下統一を果した国が大半を占めている。

戦乱時代の諸国の他にも、周・漢・新・晋・隋・唐・宋・明は、下剋上により成立した王朝である。

四　下剋上の無い西洋史

もし、前一世紀のローマ帝国における、剣闘士奴隷スパルタクスの反乱が成功していれば、下剋上による国家が誕生していたであろう。

当時のローマ市民にとっての娯楽の一つが、円形闘技場で二人の剣闘士奴隷を死ぬまで戦わせるという残酷な「殺人ショー」であった。

ローマ市民は、ほとんどの労働を奴隷にさせていたので、「ローマの休日」は年間二百日以上あった。その持て余した休日をより刺激的に楽しむために生み出した娯楽である。

残酷な制度に耐えかねた七十八人の奴隷がスパルタクスを中心にして反乱を起こした。その少数の反乱がローマ軍を破り、多くの奴隷が加わって、十二万人もの反乱になった。

奴隷達は自由を求めて、当初はイタリアを北上し、アルプスを越えようとした。その後、南へ転じて、アフリカに逃れようとした。しかし、最後はローマ軍に破れ、全滅した。

スパルタクスは制圧した土地を平等に与えたというが、もし国王になっていれば、搾取の無い理想的な国家になっていたかもしれない。

スパルタクス以外にも、西洋の歴史上に奴隷の反乱は存在するが、成功した例は無い。

ロシア・ローマノフ朝において、十七世紀のステンカ＝ラージンの反乱、十八世紀のプガチョフの反乱といった農奴が起したものがあったが、二つとも鎮圧されて、農奴制が強まった。

独裁者を倒した後、別の独裁者が誕生した例は、多くあり、代表的な例が「革命」である。

十七世紀イギリス清教徒（ピューリタン）革命後のクロムウェル、十八世紀フランス革命後のロベスピエール、二十世紀ロシア革命後のレーニンが挙げられる。

日本史では下剋上の例として「山城の国一揆」「加賀の一向一揆」等、国一揆や一向一揆も含めている。戦国大名の毛利元就は安芸の国一揆のリーダーであった。

一揆は、一個人によるものでなく、下の階級が上の階級に克ったものである。一揆が下剋上であれば、革命も下剋上と言えるかもしれない。

しかし、革命は権力者が交代する際に政治体制の変革を伴うものであるため、一揆とは性質が異なる。革命後の独裁者は、支配者階級の交替の後に、その支配者階級の中で誕生したと考える。

五　イスラムは劇的な下剋上の歴史

イスラムでは、スパルタクスが国王になったような、中国よりも劇的な下剋上が存在する。

イスラムの奴隷制度の特徴は、奴隷の対象が成人でなく子供である、ということである。異教徒・異民族の子供を拉致して、奴隷として成人になるまで育てた。奴隷にしたのは五才から十四才までの子供であった。

男の子は軍人奴隷として育て、女の子は愛人奴隷等として育てた。家畜並の扱いということであれば、男の子は番犬代わり、女の子は愛玩犬代わりであった。

異民族・異教徒の子供を奴隷として育てる制度は、一時的なものでなく、千年以上に渡って、二十世紀まで続いてきた。

イスラム奴隷は、ローマの剣闘士奴隷やアフリカ黒人奴隷と比べると、かなり性格が異なる。しかし、家畜同様に生殺与奪の権限は主人が持っていたし、人権も無く、売買対象の「物」であった。歴史学上も、明確に「奴隷」ということで定義している。

イスラム世界で、奴隷が活躍する歴史を四つ紹介し、考証する。

第一は、十世紀のアフガニスタン。アフガニスタンで最初に国家を興したのは奴隷である。

第二は、十三世紀のインド。インド史における最初のイスラム王朝は「奴隷王朝」である。

第三は、十三世紀から十六世紀までのエジプト。マムルーク朝と呼ばれるが、マムルークは奴隷であり、訳せば奴隷王朝である。

第四は、十三世紀から二十世紀までのトルコ。オスマン＝トルコ帝国は、皇帝が奴隷の息子であり、奴隷が支配する帝国であった。

六　奴隷から誕生したアフガニスタン

アフガニスタンは、その地域単一で成立した国家が少なく、周辺国の一地域として侵略され支配されていた。

前六世紀はアケメネス朝ペルシア帝国の支配下に置かれていた。

前四世紀はギリシアのアレクサンダー大王に征服された。アフガニスタン第二の都市カンダハルはアレクサンダー大王（ペルシア名でイスカンダル）から名付けられた。なお、ガンダーラも同じ語源である。

前三世紀から約一世紀の間、アフガニスタン北部に、バクトリアというギリシア人によるギリシア国家が存在した。

その後、代表的な支配者を挙げると、九世紀がサーマーン朝（イラン）、十三世紀がモンゴル帝国、十四世紀がティムール帝国（中央アジア）、十六世紀がムガル帝国（インド）である。

十九世紀から二十世紀に入ってからは、イギリスとソ連との間で三次に渡るアフガニスタン戦争があった。一九八十年代はソ連のアフガニスタン侵攻が続いていた。そして、米国同時多発テロ後のアメリカ軍の空爆である。これだけ、他国から蹂躙された国家というものは他に無いかもしれない。

しかし、十世紀に現在のアフガニスタンを大きく包み込むような版図を築いたガズナ朝という独立国家があった。

ガズナ朝は奴隷が興した国である。ガズナ朝の初代国王アルプテギンは、イランのサーマーン朝の奴隷であった。

アルプテギンはトルコ人で、奴隷兵として活躍し、国王の親衛隊長になった。その後、失脚して、インドへ向かう途中で、アフガニスタンにガズナ朝を興したのであった。

スプクテギンはイランとトルコの混血で、アルプテギンの奴隷であった。武勇に優れ、ガズナ朝の王位を継いだ。

現在のアフガニスタンは海に面していないが、ガズナ朝はアラビア海まで版図を広げた。

十二世紀に、ガズナ朝をイラン系のゴール朝が滅ぼした。ゴール朝は、奴隷が建てた国でないが、後にゴール朝の奴隷がインドに奴隷王朝を築くのである。

アフガニスタン建国以前に、この地域に固有の国家が建てられたのは、ガズナ朝とゴール朝だけである。なお、ガズナ・ゴールという都市は現在も残っている。

七　インドの奴隷王朝

奴隷王朝は、奴隷が王朝を建てただけでなく、「奴隷の奴隷」、さらに「奴隷の奴隷の奴隷」も国王になった。宮廷の高官等の支配者階級も奴隷が占めていた。そのため、歴史学上も「奴隷王朝」と呼ばれている。

アイバクは少年の頃、トルキスタンのトルコ人の両親から誘拐されて、奴隷として売られた。若い頃は、商人や司法官の奴隷であった。その後、転売されて、ゴール朝の宮廷奴隷となった。

アイバクは、武将として優れており、ゴール朝のインド侵略軍の指揮官として活躍するようになった。ゴール朝の国王が暗殺されると、アイバクはインドで独立して、インドで初めてのイスラム王朝を建てたのである。

イルトミシュはトルコ人有力部族の首長の息子であったが、親兄弟から奴隷として売られた。奴隷として転売されて、最後にアイバクの奴隷になった。つまり、奴隷の奴隷である。

アイバクが落馬事故で急死すると、イルトミシュはアイバクの息子と争って勝ち、王位を継いだ。イルトミシュはチンギス＝ハンの率いるモンゴル軍の侵略に抵抗し、奴隷王朝の安定政権を築いた。

イルトミシュは娘のラジーヤを国王の後継者に選んだ。ラジーヤはイスラム史上唯二人の女王

の一人である。国王が女性であることに不満を持つ家臣により暗殺された。バルバンは同じくトルコ人であったが、青年になってモンゴル軍に捕らえられ、奴隷にされた。各地を転々としていたが、最後はイルトミシュの奴隷になった。つまり、奴隷の奴隷である。

バルバンは、イルトミシュの息子である国王を毒殺して、自ら国王になったという説がある。奴隷王朝は、バルバンの次の代で滅ぼされ、同じトルコ系のイスラム王朝であるハルジー朝に取って代わった。

奴隷王朝を含め三世紀以上続くイスラム政権の五王朝はデリー＝スルタン朝と呼ばれる。すべての王朝が、インドのデリーを首都とし、北インドを支配した。

デリー＝スルタン王朝は別名でパターン朝と呼ばれるが、パターン人とはパシュトン人、つまりアフガニスタン人のことである。実際にアフガニスタン人が支配したのは、最後のロディー朝だけである。

八　エジプトのマムルーク朝

マムルークは奴隷の意味である。つまり、マムルーク朝を訳せば、奴隷王朝である。

マムルークは女奴隷で無く、男奴隷を指している。人種は黒人でなく白人（正確には黒人以外）である。民族的にはトルコ系が多く、スラブ系、モンゴル系、ギリシア系、アルメニア系等

がいた。農民奴隷でなく、軍人奴隷である。奴隷の中でも白人奴隷兵と訳すのが元の意味に近い。しかし、マムルーク朝の最初の王は、男奴隷で無く、女奴隷であった。

マムルーク朝の初代国王になったのは、アイユーブ朝国王サーリフの愛人として飼われた女奴隷シャジャルである。

歴史書によると、シャジャルは美貌の少女であった。トルコ人ともアルメニア人とも言われているが、幼い頃に誘拐されたのか、経緯は不明だが、奴隷となった。シャジャルは奴隷につけたニックネームであり、初代国王でありながら、本名も親兄弟も分からない。

その美貌のため、エジプトを支配していたサーリフ国王へのプレゼントとして、与えられた。国王に愛人奴隷として可愛がられ、国王の子供を生んだ。

奴隷とはいえ、国王の息子の母親である。やがて、彼女はその地位を利用して、政治的な権力を手に入れていった。

当時はアイユーブ朝の支配地エジプトに、フランス王ルイ九世の率いる第七回十字軍が侵略していた。この十字軍とアイユーブ朝との戦争の最中にサーリフ国王が病死してしまった。

シャジャルは国王の死を隠し、筆跡を真似て命令を出し続けた。アイユーブ朝の軍隊は十字軍を破り、ルイ九世を捕らえた。

シャジャルの息子は早世しており、継子のトゥーラーンシャーが即位した。しかし、トゥーラーンシャーはマムルーク軍を弾圧しようとして逆に殺され、アイユーブ朝は滅びた。

シャジャルが政治的・外交的手腕を発揮したので、マムルークの信任を得て、正式に国王に推

戴された。こうして、奴隷が支配するマムルーク朝が誕生したのである。

イスラム世界で女王となったのは、シャジャルと奴隷王朝のラジーヤだけである。シャジャルの次に王位を継いだのが、アイバクである。奴隷王朝のアイバクと同名であるが別人である。

アイバクはトルコ人奴隷であり、サーリフ国王に仕えていた。サーリフの息子トゥーラーンシャーを殺害し、エジプト軍の総司令官となった。

そして、シャジャルと結婚すると、その妻から王位を受け継ぎ、第二代国王となった。

アイバクは七年間、王位に就いていたが、別の女性にプロポーズすると、シャジャルに殺された。シャジャルも夫を殺した三日後に女奴隷によって殺された。

アイバクの死後、その息子（シャジャルの子でない）が一時的に王位に就いたが、奴隷のクトズが王位を引き継いだ。そのクトズを殺して、奴隷のバイバルスが次の国王になった。その後も、歴代の国王の多くは奴隷であった。

一時的に王位を国王の息子が継ぐことはあっても、マムルーク朝では、原則として世襲は認められなかった。王位を簒奪（さんだつ）した者か、奴隷の中から推挙された者が国王となるのである。

マムルーク朝はオスマン＝トルコ帝国に滅ぼされるまで、約二七〇年続いた。

九　奴隷帝国オスマン＝トルコ

十三世紀から二十世紀までイスラム世界に君臨するのはオスマン＝トルコ帝国であるが、ほとんどの皇帝はキリスト教徒女奴隷の息子であった。

オスマン＝トルコの君主は世俗的君主（スルタン）だけでなくイスラム教の最高権威（カリフ）を兼ねるので、皇帝と訳される。つまり、単なる君主でなく、イスラム教の最高権威者が異教徒奴隷の息子である。

男性が多くの女性を侍らせていることを「ハーレム」と呼ぶが、皇帝の周りには三百人ほどの性の相手をする女性がいた。

オスマン＝トルコでは、皇帝は正式に結婚をしなかった。妻が敵の捕虜になることで国難となるのを避けるため、とも言われる。

皇帝が性の相手をする女性は、奴隷であった。イスラム教徒のトルコ人を奴隷とすることは許されなかったので、奴隷のほとんどがキリスト教徒の非トルコ人（主にヨーロッパ人）であった。奴隷はイスラム教に改宗する必要もなかった。皇帝の母親がキリスト教徒のままであったので、母親の葬式をキリスト教式で行うこともあった。

オスマン＝トルコ帝国では、皇帝は息子が世襲するのが一般的であった。

四代皇帝のバヤジット一世以降、新しく皇帝が即位すると、皇帝の兄弟皆殺しにするという慣習があり、法律にも定められた。皇帝の座を脅かす存在は早めに抹殺するというのが理由である。

皇帝の息子は、自らが皇帝にならなければ、殺されるのである。実質的に一夫三百妻であるから、兄弟はかなりの人数になり、皇帝の息子が生き残るのは至難の業であった。兄弟が即位すると自動的に殺されるという境遇を考えれば、奴隷よりも悲惨かもしれない。

七代皇帝メフメト二世がビザンツ（東ローマ）帝国を滅ぼした。メフメト二世が最初の奴隷の息子で、以後は最後の皇帝まで三十代に渡り奴隷の息子が即位した。

九代皇帝セリム一世の時に、マムルーク朝を滅ぼした。つまり、男奴隷が国王となる国を女奴隷の息子が皇帝となる国が倒したことになる。

十代皇帝スレイマン一世の時に、ウィーンを包囲する等、ヨーロッパ世界に対抗し、地中海を支配していた。なお、スレイマン一世が最も可愛がった奴隷はロシア人であった。次の皇帝セリム二世は、ロシア人ハーフである。

十四代皇帝アフメト一世以降は、兄弟皆殺しでなく、牢屋に一生閉じ込める方法に変わった。

オスマン＝トルコ帝国では、ギリシア人などのキリスト教徒の子弟を奴隷兵として育て、キリスト教国と戦わせた。イェニチェリと呼ばれる最強の奴隷軍団である。

イスラム教に改宗させるのであるが、イェニチェリ軍は皇帝に対する忠誠心と、死を恐れない勇敢さのため、キリスト教国の軍隊が恐れ慄いたと言う。

なお、イェニチェリ軍に入るには、武勇に優れていることだけでなく、美少年であるという絶対条件があった。皇帝が同性愛を好む場合に備えていたためとも言われている。

結婚することも一切の娯楽も禁止され、親兄弟からも隔絶された社会で育った元キリスト教徒

にとって唯一信頼できるのはイスラム教の皇帝であった。皇帝のためには多くのキリスト教徒を殺すことができたのである。

宰相をはじめ、多くの高官が奴隷で占められていた。つまり、皇帝は奴隷女の子供で、軍人も宰相も奴隷出身という奴隷帝国であった。

十　イスラム世界の支配者

奴隷が国王になる仕組は、どのようになっているか。マムルーク朝を例にして考証する。

虐げられた人間が反乱を起こして、国を乗っ取ったのではない。むしろ、奴隷の主人である国民が、奴隷が国王になることを受け入れたのである。そして、歴代の国王は、奴隷から誕生するのである。

奴隷であるから、もともとは畏敬の対象となる要素は、ほとんど無い筈である。人格を認められず、「物」として売買される存在である。

しかも、彼らは幼い頃に連れ去られた外国人（非アラブ人）であり、国民（アラブ人）の代表でない。イスラム教に改宗させられるが、元は非イスラム教徒である。

マムルーク朝は二七〇年近く続いており、けっして一時的な王朝で無い。マムルークという奴隷の制度は、九世紀から千年も続いている。（オスマン＝トルコ帝国は六二〇年以上続いている。）

十三世紀のエジプトは、東からはモンゴル帝国に侵略され、西からは十字軍に侵略されていた。その当時、他国の侵略に対して、国民自身は兵役を嫌い、国家防衛のために戦うことができなかったのである。自分たちの国と国民を守ってくれるのは奴隷しかいなかったのである。

自分の命を守ってくれる者であれば、異教徒出身の外国人で人格の無い「物」であっても、畏敬の対象となる訳である。

なお、国王になると、奴隷身分から解放されるし、その前に解放された者もいた。

マムルーク朝を例にしたが、他の王朝でも同様に、他の文明圏との侵略・被侵略の時代に誕生している。

ガズナ朝は、イスラム世界がインドへ侵略する途中で、独立したものであった。奴隷王朝は、モンゴル帝国から侵略されていた。オスマン＝トルコ帝国は、東ローマ帝国やスペイン等のヨーロッパ諸国との間でお互いに侵略戦争が続いていた。

戦乱の時代であれば、生れた身分が高貴であるか、は全く関係ない。自分の国や文明を防衛し、拡大する者が、支配者になるのである。

イスラム世界は、米国同時多発テロ事件という一部の侵略行為の加害者であり、アフガニスタン空爆・イラク戦争という西洋文明諸国の侵略行為の被害者となっている。

イスラム世界の支配者は、宗教文明を背景として、戦乱時代の要請として誕生してきている。

イスラム世界の次の支配者は、奴隷のような最も虐げられた人の中から誕生するのではないか。

奴隷王朝というイスラムの歴史が、その可能性を示唆している。

継体大王の謎を探る

隆恵

（はじめに）

日本の古代史の研究は、江戸時代の国学に始まり、明治維新から終戦の昭和二十年までの約百三十年間は皇国史観という政治の介入によるブランクがあったが、戦後の純粋な文献学上と考古学上の研究成果、また朝鮮半島の遺跡発掘もあり、着実に解明されつつある。

特に近年、吉野ヶ里遺跡・三内丸山遺跡・高松塚古墳・藤の木古墳・キトラ古墳など画期的発掘が続出したことにより、我々庶民レベルでも古代史ブームが続いている。

昨年暮れのマスコミ報道で、大阪府高槻市にある今城塚古墳の発掘が進展して、六世紀初頭の継体天皇の陵墓であるということが確実視され、一方北朝鮮による拉致問題と核開発の懸念が大きな話題となっている。

北朝鮮の領土は、はるか昔の四世紀から七世紀にかけて高句麗が支配しており、その国威は隆盛を極め百済の王を殺害して百済を圧迫し続け、七世紀初頭には中国の大帝国の隋が高句麗征伐

の失敗による内部崩壊で滅亡するなど、高句麗は唐に滅ぼされるまで大陸・半島・列島を含めて東アジア全体の混乱の源であった。

倭国は、記紀によれば任那と称する半島における権益を長年保持していたが、五世紀後半から高句麗の南下政策に起因した新羅と百済の半島南部の伽耶諸国の侵略が相次ぎ、倭国は防戦一方の末に終に五六二年任那が滅亡としたと記録している。

わが国の古代史の解明には、国内の文献として八世紀編纂の記紀等があり、国外では大陸の記録が重要な手がかりであるが、五世紀は宋書、七世紀は隋書・新旧唐書があるのだが六世紀は大陸にその記録がない。従って六世紀はわが国の国家体制が形作られた重要な時期にもかかわらず、手がかりは記紀中心とせざるを得ず、この記録の信憑性に難があるため謎多き時代である。

この六世紀の統治者は継体天皇・欽明天皇と記録されているが、この両天皇が謎だらけの人物である。特に継体天皇には次のような謎がある

① 応神大王の五世の孫というが本当か
半島の渡来人（百済・伽耶・新羅）という異説があるがどうなのか

② 出身地が近江とか越前というが本当か
単身招かれたようにいうが、越前王朝が飛鳥王朝を征服したのではないか

③即位後二十年間飛鳥入りせず、枚方市・京田辺市・向日市に宮をおいた真の理由は何か

④ 支持した豪族は誰か。
継体崩御後突然歴史に登場する蘇我氏との関係はどうだったのか

⑤ 任那の四県の百済割譲等は本当か
半島政策の真実はどうだったのか

⑥ 筑紫君磐井の乱は一地方豪族の反乱だったのか
倭国の覇権を賭けた大和勢力と九州勢力との戦争だったのでないか

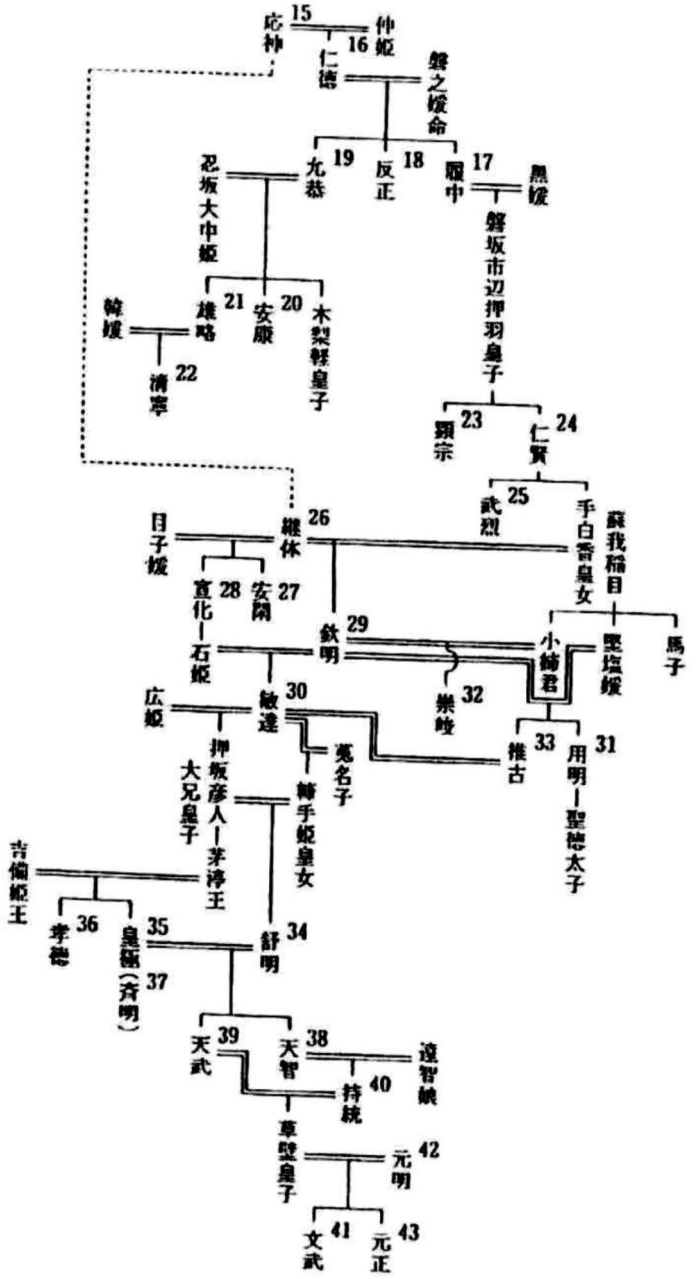
⑦ 欽明は本当に継体の嫡子だったのか
欽明がクーデターで大王位を簒奪したのではないか
継体は欽明に暗殺されたのか

⑧ 継体の陵墓だけが何故単身摂津にあるのか
皇后と3人の庶子・嫡子の後継大王の陵墓はなぜ飛鳥・古市にあるのか

この謎の解釈には学者の見解が分かれ、巷間の研究家も交え議論が錯綜している。そこで、文献学者および考古学者の見解を念頭にこの謎解きに迫ってみることとする。

なお「天皇」と「日本」と言う呼称は7世紀末の天武天皇以降使われるので、これ以前は「大王」および「倭」と記すのが常識のようなので本稿もこれに従う。

資料3.　継体大王の関係系図



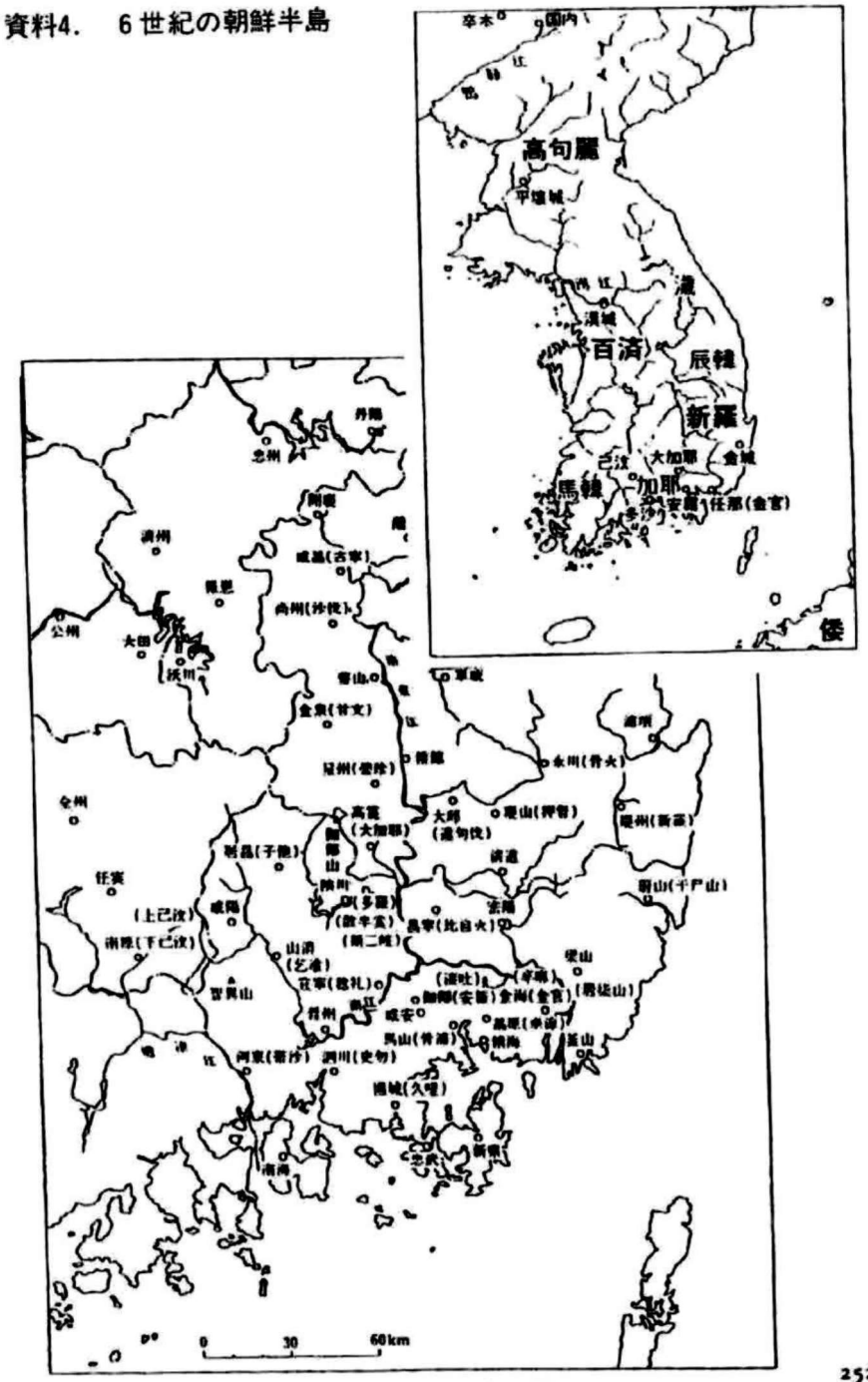
資料1.　概略年表(原則　日本書紀に基づく)

西暦年	干支	大王	年令	備考
455		雄略　元		
471	辛亥	17	稲荷山・江田船山古墳「ワカタケル大王」	
478		清寧　元		
483				
484		弘計　元		
487		億計　元		
498		武烈　元		
507		継体　元	58	葛葉の宮
511		5	62	筒城の宮遷都
512		6	63	任那4県の割譲
518		12	69	弟国の宮遷都
526		20	77	磐余玉穂の宮遷都
527		21	78	磐井の乱勃発
528		22	79	磐井の乱鎮圧
531	辛亥	25	82	崩御
531		空位		10ヵ月後藍野陵に埋葬
532		空位		金官国新羅に併合
534	甲寅	安閑　元		武蔵国造笠原氏の内紛
536		宣化　元	70	安閑崩御
539		4	73	宣化崩御
540		欽明　元		
562		23		任那滅亡
571		32		欽明崩御
571		敏達　元		

資料2.　継体大王の妃一覧

出身地	名前	父	備考
大和	手白香皇女	仁賢大王	皇后
尾張	目子媛	尾張連草香	元妃
近江	稚子媛	三尾君角折の妹	
	広姫	坂田君大俣王	
	麻績娘子	息長真手王	
	倭媛	三尾君堅批	
	広媛	根王(坂田君)	
大和	夷媛	和邇臣河内	阿倍之波延比売
河内	関媛	茨田連小望	(古事記)

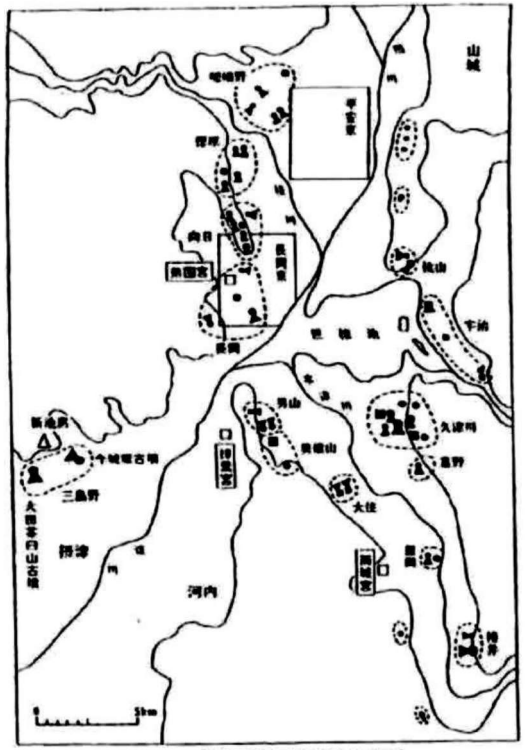
資料4.　6世紀の朝鮮半島



加　耶　諸　国

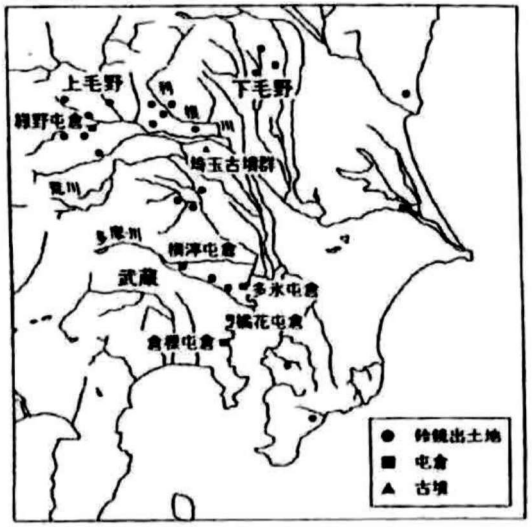
○は現在の主要地名.（ ）内は古地名. 出典は一定していない.

資料5.　北河内の概略図



継体の王宮と山城の主要古墳群

資料6.　6世紀の関東略図



6世紀前半の東国

I. 五世紀の倭国と半島情勢

1 倭国の状況

五世紀の倭国は、記紀によれば神功皇后・応神天王から雄略天王という英雄たちが活躍した時代であり、考古学上では日本一の規模を誇る仁徳陵等の中期大型古墳時代と称され、有名な宋書倭国伝の倭の五王の時代である。

（1）倭国の領域

○半島

魏志倭人伝によれば、半島の最南端に位置する狗耶韓国今日の金海地方が三世紀前半には倭国の領地であったとあり、倭国王武が南宋に上表して賜授された鎮東大将軍の称号の六カ国には高句麗を除く半島全域を含めている。確かにこの上表文は誇大宣伝があると思うが、半島に何らかの権益を持っていたからと推定して間違いはない。

倭国の半島における権益は、任那という国が存在したわけではなく、伽耶諸国に散在してあった複数の屯倉の総称を任那と称し、これを誇大に国と記したと考える。

○列島

雄略末期には、九州の中北部から中国の吉備を服属させ、尾張・紀伊・毛野・越という関東以西は服属化させたというのが定説である。

その統治支配体制は、中央集権的な統治形態ではなく、各地の豪族即ち王たちが同列的に結びついた連合型の大王に過ぎなかったと解されている。

しかし、大和周辺では土着の大豪族である葛城氏・平群氏の一族を粛清して完全に服属させ、近畿では大王的な権力を持ち始めていた。

（2）君臨した大王

五世紀の応神王朝は、時代区分として十五代の応神から二十一代雄略の最盛期と、二十二代清寧から二十五代武烈の末期とに大別し得る。

考古学上からも、埼玉県の稲荷山古墳の鉄剣銘および熊本県の江田船山古墳の太刀銘の「辛亥の年、ワカタケル大王」が「四七一年、雄略」を示すとされ、大和朝廷の支配権が及んでいたというのが定説である。

仁徳陵をはじめとした巨大前方後円墳の被葬者たちとされている。

「倭の五王」

中国の史書によれば、四一三年から五〇二年の間に都合十三回も倭国王が使節を派遣したとなっている。五王とは「讃、珍、済、興、武」と記録されているが、これらの王をどの天皇に比定するかで学説は混乱していて定説はない。但し異論の少ないのが「武」は「雄略」であるという点である。

なお、古田武彦氏のように倭の五王とは大和朝廷の天皇ではなく、九州王朝の王たちだとする興味ある説もある。

2. 五世紀の半島情勢（参照　資料）

（1）中国の情勢

五世紀前半の中国は南北朝時代といわれ、北部は五胡十六国の乱立の時代を四三九年に北魏が統一王朝を作り、南部は宋が支配していた。

（2）半島の情勢

○高句麗

高句麗は広開土王と長寿王の時代の隆盛期で、北魏の登場後は中国北西部への領土拡張は難しくなったため、半島の南下政策が行われ辰韓および新羅を服属化する一方、百済への圧迫を強める。

○百済

四世紀に馬韓五十余国の一つであった伯済国が発展して百済と号して勢力拡張する。伯済国は帯方郡帯方県がおかれた地域で、四世紀初頭に帯方郡を駆逐して徐々に勢力範囲を拡張し、半島南部の馬韓・伽耶地方及び東部の濊も領域を拡大し、一時は高句麗王を敗北死させるなど急速に隆盛を極める。しかし、四世紀末に高句麗の広開土王に大敗してからは長期間に亘って常に圧迫され、四七五年には王都漢城が陥落して滅亡の危機もあった。その後南部の熊津に遷都して、馬韓地方南部と伽耶諸国に領土の拡張を目指す。

○新羅

新羅の前身である斯盧国は元々六か村であり、高句麗の属国として成長する。四三四年には百済と通交して独立色を強め、四八一年には高句麗の攻撃を受ける羽目となる。新羅の大発展は五一年に智証王が即位してからで、国号を新羅と改め、律令制をしき中国史書には旧斯盧国のほかに五十二の国を従えたと記されている。

○伽耶諸国

弁韓の地域に長年小国が連合して、倭・百済・新羅の大国に対抗していたので大伽耶連盟と称する説がある。

この大伽耶連盟は、中国の南朝に朝貢して冊も受ける程の主体性を示した時もあるが、百済・新羅のような強力な国が育たず、結局両国の草刈場となり、その存続を賭けて倭・百済・新羅の大国に擦り寄りを繰り返す。

II. 継体登場直前の政情（参照　資料）

1　雄略崩御後の混乱

継体大王が登場する重要な背景につき、記紀の記録をやや詳細に述べる。

○清寧大王

雄略と妃の葛城韓媛（雄略により粛清された葛城円大臣の娘）との第三皇子で、雄略の崩御の前年皇太子となる。

雄略は遺言で吉備稚媛との間になした星川皇子の大王即位は不可と言い残したが、雄略崩御後星川皇子が大王位を狙って大蔵を襲い、母の実家の吉備上道臣の援軍が遅く、大伴室屋大連（金

村の祖父）に征伐される。

そこで皇太子の清寧が即位するが、この清寧は生まれたときから白髪で、沢山の皇子の中で特に不思議で変わったところがあったと記録されている。

清寧二年、継嗣がいないとして嘆いていたところ、播磨国明石郡の縮見に潜んでいた、雄略に殺された市辺押羽皇子の息子たちの億計・弘計兄弟を発見、兄の億計を皇太子とし、弟弘計を皇子とする。

清寧五年一月崩御。しかし次の王位をめぐって兄弟が譲り合って大王がなかなか決まらない。

○忍海飯豊青尊（飯豊皇女）

そこで実姉である飯豊女王は、この様子を見かねて忍海の角刺宮で仮に朝政をとり、自ら忍海飯豊青尊と称し、この角刺宮の立派さは歌にも読まれた。しかし清寧崩御後十か月でこの女王も逝去する。

○顕宗大王（弘計）

結局、弟の弘計が即位し、播磨の国から見出してくれた山部連と吉備臣を厚遇し、即位三年で崩御。

○仁賢大王（億計）

雄略が和珥臣深目の娘となした春日大娘皇女を皇后とし、一男六女を設ける。

第三皇女の手白香皇女は継体の皇后となり、その妹たちが継体の子息である安閑・宣化の皇后となる。在位十一年に及ぶが治世の記録は皆無である。

仁賢七年嫡子の武烈を皇太子とし、十一年に崩御。

○武烈大王

武烈は皇太子時代に、国政を専らとして王位を狙っていた平群真鳥大臣と息子の鮪を、大伴連金村の進言を入れて、金村に平群一族を粛清させる。

この大王は、過酷かつ暴虐な仕置きが多く、群臣達は恐れおののく。在位八年で崩御。

2　この記録の解釈

この約三十年間（古事記によれば二十年間）については次のような解釈がある。

①雄略が死去した後約三十年間内乱状態であったとする説。

この説は、清寧・顕宗・仁賢・武烈は創作人物とし、大伴氏の伝承を基に創作したとする。

②顕宗・仁賢の「おけ兄弟」は同一人物とする説。

③飯豊皇女は雄略の後即位し、その後仁賢に譲位したとする説。（古事記の記録）

④武烈は創作人物で、継体が暴君の悪政を正すため登場したとする即位の正当性主張上の創作説。

私は、この三十年間は次の様な内乱状態と考える。

即ちこれらの大王たちは全て創作上の人物で、実態は雄略の直系子孫と雄略に謀殺された市辺押羽皇子の子孫との相克が続いたのであろう。その象徴として清寧に対する顕宗・仁賢・武烈という大王名で記録したと考える。なお、飯豊皇女の記録は短いが具体的記述があり、内乱状態の収束方法としての邪馬台国の卑弥呼・台与の共立を髣髴とさせ、実在した感がある。

この混乱に乗じて越前の豪族の継体が、大和の大伴金村と手を結び、継体王朝を創設したというのが史実だったのであろう。

この三十年間の記録を通じて読み取れるのは、大伴氏のキングメーカー振りであり、雄略期の玉田系葛城氏の粛清における大伴室屋の暗躍、孫の金村の武烈期の平群氏の粛清、および倭彦王及び継体推戴の首謀者となるなど豪族の中で際立っている。

但しこの大伴氏の活躍の記録も穿った見方をすると、継体推戴の首謀者を先の王朝の権臣であったとして、継体の王位簒奪の正当性主張のための脚色の可能性もあり、もしかしたら大半が創作で大伴氏は単なる大豪族に過ぎず、継体と連携して初めて歴史上の重要氏族として登場したのかもしれない。

III. 出自と出身地

書紀では単に応神大王の五世の孫で、父は彦主人王で近江高島郡の三尾に別業していて、越前坂井郡三国の美人の誉れが高い垂仁大王の七世の孫である振姫を妃として、継体が生まれたとしか記録されていない。しかし、鎌倉時代末期作成の釈日本紀に上宮記一云という推古時代に作成された古文書が引用されており、これには系図が示されている。

1 五世の孫の真偽

上宮記一云に基づく系図は、その信憑性を疑問とする見解が定説である。この「五世」という表現は、記紀の編纂時の七〇六年に皇統譜が改定され、皇籍をそれまでの三世・三代から五世・五代に変更しており、この五世と言う表現は継体が大王位の継承資格者であるという意味を込めて創作したというのが通説である。

継体に白羽の矢が立つ前に倭彦王を丹波に求める記録があるが、この人物も仲哀の五世の孫となっている。

2 雄略の子孫の王位継承適格者の存否

雄略と兄の安康は、王位に近い近親者を数多く殺戮して王位を獲得するが、抹殺されていない皇子も記録に残っており、清寧は雄略の数ある子供の中から即位したという記録でもある。にもかかわらず、応神の父親である仲哀の五世の孫の倭彦王を招請しようとして失敗し、次に応神の五世の孫である継体を招請するという遥か遠縁の皇子の担ぎ出しの記録は、記紀が創作であると白状しているのと同じである。

要するに、継体と応神王朝との血の繋がりは無かったというのが真相であろう。

3 出身地・成育地

古事記は近江とし、日本書紀は近江で生まれ後は母の実家の越前三国で育ち、五十八才で即位したとしている。古事記では継体の崩御は四十三才としているので、その即位は十八才前後とい

うことになろうか。

通説は日本書紀の記録を信用して、生誕地近江、成育地越前としている。父の彦主人王の別業があった湖西の滋賀県高島町は三尾君の地盤とするのが通説だが、三尾氏の本貫地を越前の丸岡・松岡とする説もあり、更に三尾君の本貫地を能登とする見解もある。特にこの丸岡・松岡地区は母の実家があったところであり、このあたりは大首長クラスの立派な数多くの古墳が発見されている。

少なくとも継体は越前の寒村の育ちという考えは成り立たないということになる。

現段階では推測の域を出ないが、三尾君は父の一族であり、欽明紀の「道の君」と同一なのかも知れず、三尾氏の本貫地は越の国の可能性が高いように感じる。即ち父も母も越の豪族であり、たまたま近江の別業で生まれたに過ぎない可能性もある。

この事を推測するため継体の妃たちの出自を調べてみる。

古事記は尾張一名、近江四名、大和二名の七名、日本書紀は尾張一名、近江五名、大和二名、河内一名の九名となっている。

通説は、近江出身とする豪族の本貫地を、二名の三尾君が湖西の滋賀県高島町・安曇川町、息長氏は滋賀県米原町・長浜市、二名の坂田氏は滋賀県長浜市としている。妃に越の豪族出身者はいないとしながら、書紀の越前成育説を諒としており説得性がない。

私は、三尾君の倭媛との間の椀子皇子は三国公の祖と記録しており、少なくとも一名の三尾君は越前出身と考えてよいと考える。

尾張連の娘の目子媛を十五才前後に妃に迎えるが、おそらく越前にいた時に妃としたと考えられ、少なくとも十五才前後から五十八才まで越前にいたわけで、当然越前の豪族たちの子女を妃としていたとするのが素直な解釈である。

記録されていない理由は、継体の権威付けのために古来の名族でない越出身の妃は意図的に抹殺したからに違いない。目子媛は越の豪族の姫であった可能性も大いにあり得え、目子媛の実家は江沼氏（越）かもしれない。その根拠は、尾張氏は継体紀および安閑・宣化紀にも一切その動静が語られておらず、元第一王妃を出したにしてはどうも釈然としない。

有名な桜の古木で樹令一五〇〇年と言われる岐阜県根尾谷の「淡墨桜」の伝承に、継体が即位のためにこの地を離れるのを惜しんで植樹したという謂れがあるそうで、もしかしたら牟義都氏（美濃）が目子媛の実家なのかもしれない。

4　出自の異説

継体の出自の曖昧さと、その親百済政策および百済の王族の倭国との頻繁な交流から、渡来人説が一部に散見される。しかし現状ではいずれも仮説の域を出ず、空想小説としては面白いが学問的には全く不十分としか言いようがない。

小林恵子氏のエフタル人説、沢田洋太郎氏の百済の昆支王説、石渡信一郎氏の昆支王（応神）の弟（仁徳イコール継体）説等がある。

Ⅳ. 主要地盤と支持勢力

1　継体の主要地盤

○近江

まず記紀の出生の記録と妃の実家の多さから近江は主要地盤の一つである。三尾君以外の妃三名の存在は、継体が越前に移住後に神功皇后を輩出した名族との婚姻による箔付けと上洛に際する隣国の服属化が狙いであったと考えたい。この推測は、近江地方の古墳の規模が六世紀すなわち継体が即位してから大規模化するという考古学者の見解にも一致する。後世の信長の尾張に対する美濃に相当する存在が近江だったのではないか。

○越

この越前という表現は編纂時の国名であり、約二百年前は若狭・越前・加賀・能登の日本海側一帯を「越」と総称していたようだ。越前という表現は母の実家の記載と、大和朝廷の迎えの使いが出向いたときの「越前坂井郡三国に侍臣をはべらせ、ゆったりと床几に腰掛けていて、既に天主の風格があった」の二か所だけである。

通説は、大和朝廷の大伴・物部氏が辺境の地にいた継体を探し出して大王位に就けたとするので、越の経済力・軍事力は歯牙にもかけていない。

しかし最近の考古学者や高名な上田正昭氏・森浩一氏は、

この越国は半島・大陸との海上交易が盛んだった事が明白となった。

南部の若狭・越前は百済・伽耶と、北部の加賀・能登・佐渡は新羅・高句麗等との交易は盛んで、船の航海術また騎乗用の馬の存在は、越国が未開の小豪族の群雄割拠の地域であり、大きな政治勢力は存在しなかったという先入観を払拭する必要があると唱え、書紀の解釈に重要な示唆をしている。

黒岩重吾氏は、古事記の阿倍之波延比売（あべのはえひめ）の記録に注目し、阿倍氏を越の大豪族と推定して、継体の挙兵のときに親衛隊長として活躍したとの仮説を立て、同属の膳氏（かしわで）・宍戸氏（ししど）も越の豪族と推定している。後世の道の君への説論また阿倍比羅夫が蝦夷（えみし）・粛慎（みはせ）征伐に活躍するのも故地の越の国の先住民の蝦夷に通じていたからであるとし、定説である大和・甲賀本貫地説を別業だったのだとする傾聴に値する説を提唱している。

私は越前に本拠を置きつつ若狭から能登までの「越」という広大な領地を支配し、あるいは美濃も支配下においていた可能性もあると考える。

2　継体の支持勢力

○尾張氏

第一王妃に尾張連草香（おわりのむらじくさが）の娘目子媛を迎え、その子安閑・宣化が即位しており、尾張氏が即位前から支持勢力だったことは明らかとするのが定説である。越と尾張の交流は考古学上確認されて

おり、継体が大豪族の尾張氏と連携していたことは十分予想されるが、即位後の尾張氏の活躍記録が一切ない事が大きな疑問点である。

私は、第一王妃の実家との記録しかなく、積極的な支持勢力であったかどうか疑問に感じており、目子媛の実家記録さえ疑う立場から、継体擁立にはほとんど関係しなかったのではないかと想像している。

○大伴大連金村

継体推挙の首謀者であり、継体期一貫して主導的働きをしているから間違いない。

○物部大連麁鹿比

物部氏は大和朝廷建国あるいはそれ以前からの名族中の名族である。

物部氏の継体支持については、直木孝次郎氏は絶対的支持の大伴氏とは違い、消極的肯定の立場であったとする。その根拠は、百済への任那四県の割譲の際に消極的立場を採ったことにあるようだ。

○河内馬飼首荒籠

北河内を本貫地とし、即位以前の継体と知り合いで遂巡する継体を説得した人物であり、また河内氏の地盤に最初の葛葉の宮を置いていることから有力支持勢力であった。

この馬飼とは、単なる牧場の馬飼ではなく軍事力としての騎馬軍団、および平時は越とか尾張の海産物等の運搬という重要な地位を占めていた氏族と指摘するのは森・上田両氏である。

継体に妃を出している茨田氏は、この河内馬飼氏の一族とも言われ、現在の門真市・寝屋川市が支配地である。

○山城国息長氏

近江の息長氏と同属で、山城国筒木（筒城）が本貫地であり、継体の二番目の宮が設けられていることもあり、支持勢力と考えられる。

3　継体の反対勢力

古来の名族であった和珥氏、葦田宿禰系葛城氏、平群氏、吉備氏らは反対勢力であったというのが通説である。

総括すると、継体の支持勢力は越・近江・美濃・（尾張）といった地方の豪族と、中央の大和では大伴を中心とした比較的新興の氏族であり、大和古来の名族である葛城・物部・和珥・平群・吉備の氏族は消極的姿勢であったということになろうか。

蘇我氏は、雄略期に粛清された玉田宿禰系葛城氏の領地跡の屯倉の管理に満智が登用され、その後韓子・高麗・稲目と続くが、未だ歴史の表舞台には出てこない。

V．四回の遷都と大和入京の遅延（参照　資料）

在位二十五年のうち二十年を北河内・山城で過し、大和入京五年で崩御という記録である。この二十年間を流浪と見るか、それとも継体自身が北河内こそベストと考えて本拠地としたのかで

学説は二分されている。この問題は、継体王朝の本質即ち一部の大和勢力の招請による「傀儡政権」と見るか、それとも主体性を持った「本格政権」と見るかによって、結論が変わってくる。

1　継体王朝は新王朝か

結論から言うと、征服王朝即ち新王朝説が定説化しつつある。

水野祐氏の新王朝説を端緒として、直木氏は近江と尾張を地盤として二十年の動乱を統一したとし、岡田清司・水谷千秋氏は近江を地盤として王権を簒奪したとし、吉村武彦氏は近江と越・尾張を地盤として新王朝を開いたとしている。また、森氏もやはり征服王朝を唱え、特に葛葉の宮で大伴金村が鏡と剣を捧げたという記録に着目して、継体に大和政権が降伏した証拠であるとしている。

更に森氏は大和に入京したという記録さえも否定して、大和には別業を置いただけで、終生北河内を都としたとする注目すべき見解を提唱している。

2　応神王朝への婿入り婚の真偽

婿入り婚による旧体制との継続性即ち継承の正当性を主張する例は多々あるが、この継体も仁賢大王の皇女を后とし、嫡子欽明を設けたとしている。更に息子たちの安閑・宣化も仁賢の皇女を后とし、嫡子の欽明は仁賢の血筋を引いているにも拘わらず、異母兄の宣化の皇女二名を妃にするという重畳的な関係を持っている。定説は、継体と安閑・宣化がその正当性と継続性を主張

せんがため、応神王朝の婿入り婚の形式をとったと解釈する。

継体が手白香皇女を皇后にしたときは即位の年と記録しているから、継体が五十八才のときでの入り婿記録はフィクションと考えるのが素直な解釈であろう。

あり、その後嫡子欽明の誕生は六十才頃となる。当時の寿命等からどうも納得性が乏しく、継体即ち嫡子とされる欽明とは血族ではないという結論になる。

3　北河内・山城長期滞在の理由

通説は、大和の旧勢力の抵抗が強く大和入りが難しかったので、支持母体の河内馬飼氏・茨田氏、山城の息長氏の領地を転々としたとする。

通説に従えば、皇太子の安閑は飛鳥に居を構えていたという記録があるから、継体一人が北河内を流浪していたことになる。

なお、山尾幸久氏は安閑の皇太子宣命のとき即ち継体即位七年には大和入りしていたとする。しかし森・上田両氏は、半島情勢の緊迫化を控えたこともあり、意図的に難波津を控えた淀川沿岸を都としたとする。

私は、継体陵墓のみが摂津にある事の解釈とも絡み、森・上田説を支持したい。

4　継体の陵墓のみが摂津国にある理由

通説は、継体陵墓の孤立の理由を、長年都とした北河内の摂津国三嶋郡に父に繋がる大きな地

盤があって、先祖に習って陵墓が作られたのだとする。

私は、森氏の「継体は北河内を意図的に選択し、更には終生北河内に本拠を置いた」とする説に賛同し、かつ継体が己自身の基盤である北河内に寿墓を造ったと考える。

子の安閑が崩御十ヵ月後に藍野陵に葬ったとあるが、後述するように辛亥の変で安閑と宣化を暗殺した直後の欽明があのような壮大な陵墓を築造したとは考えにくい。

即ち継体陵は寿墓であり、大王位を簒奪した欽明が継体王朝との融和政策上、抹殺した安閑・宣化を飛鳥・古市に埋葬したのであろう。

なお、継体の皇后陵は手白香皇后ではなく別人の欽明の実母の陵墓ではないかと思う。

VI. 半島政策（参照　資料）

1日本書紀の半島の倭国の権益関連記録の真偽性。

継体紀・欽明紀の大半は半島の記録である。

なぜこんなに紙面を割いて、半島での複雑な物語を記録したのであろうか。

定説は、任那とか百済を属国化した記録は、半島側の資料に一切記録がないことから、まった くのフィクションであるとする。従って定説の帰結は継体の半島政策などは一切なかったという事になる。

確かに針小棒大、且つ、荒唐無稽の記載が多いが、全てフィクションと言うのも極論過ぎる。

継体が即位する前の半島権益の衰退期（五世紀）を総括すると次のようになる。

①倭国と百済国の仇敵は、一貫して新羅である。

②百済は高句麗の南下により都の漢城を占領されて国家の存亡の危機を迎えていたので、南方の伽耶諸国への領土拡張は最重要政策であった。

③一方、伽耶諸国に任那と称する宮家を持つ倭国としては、伽耶諸国を順次併合して膨張する新羅の抑止が緊急かつ最大の政策となった。

④百済とすれば、新羅の東進政策による圧迫もさることながら、伽耶諸国の併合を目論でおり、にも拘わらず新羅が急速に伽耶諸国を併呑して行くため、新羅の拡大の抑止という点で倭国とは利害が一致した。

あくまでも百済の狙いは伽耶諸国の併合であった。

⑤伽耶諸国の方は、長年弁韓時代のままの小国分立で生き残って来たが、気が付けば二大強国に挟まれている状態となった。そこで自主独立を模索して、新羅・百済・倭という大国に擦り寄りを繰り返していた。

次に継体紀・欽明紀の半島関連記録を整理してみる。

①継体時代に、倭国から百済に朝貢し、百済の任那四県の割譲要請を承諾する。

②更に、伴跛国の反対を押し切って、己汶と帯沙の二県も百済に割譲する。

このため伴跛国は親新羅・反倭の政策をとり、倭国と交戦状態となる。

③継体末期には、新羅征伐のため六万の軍勢を派遣、筑紫君の妨害などもあるが、百済の加羅国

内の多沙津（帯沙と同じか）割譲要請を了解したため、加羅国が激怒して新羅との同盟に走る。

倭国は任那王の要請を受けて、安羅で新羅・百済を相手に旧任那領の回復交渉行うが、失敗。

④任那王が任那駐留の近江臣毛野の更迭を要求、その要請を断ったため任那は新羅と百済に援軍を要請し、近江軍は両国と交戦する。

⑤欽明時代には、百済国は倭国からの任那復興支援要請に基づき何回も会議を開く。倭国は安羅国内の百済の占領地の返還を迫るも拒否され、一方百済は任那駐在の倭国の使節の更迭要求をするなど、倭国と百済は複雑な外交上の駆け引きを行う。

⑥結局、百済国と倭国の思惑の相違、および伽耶諸国独自の存続策の模索もあり、敵国新羅を目の前にして仲間割れとなり、五六二年任那は滅亡する。

この記録の流れを大局的に判断すると、その権益の実態は伽耶諸国全域という広範囲なものではなく、また後世レベルの国とか県とかの広い領域でもなく、「村落」程度の規模の屯倉が十数か所程度伽耶諸国に散在してあったと解釈できるのではないか。

その屯倉は所在する各国の王の統治下にあり、屯倉全体の管理組織としての宮家即ち「任那府」とか「日本府」と称するものが大伽耶国か卓淳国に存在していたのが、新羅の度重なる侵食により南下を余儀なくされ、この継体期には安羅国に移転していて、その長官が「国司」とかで表現されていると解釈したい。

2　継体の半島政策

（1）継体期の任那の状況

継体期には、新羅及び百済による伽耶諸国の併合、即ち諸国に散在してあった屯倉の消滅が加速化していた。その象徴が四県の割譲及び追加の二県の譲渡という表現である。実態は放棄であり、強弁しただけである。

（2）半島政策

継体の半島政策を親百済一色だとする説が多いが、実はそんな単純なものではなく、新羅が全く交渉余地のない明確な敵対国であったのに対して、百済の方が少なからず交渉余地があると考え、百済を懐柔しつつ権益の保持を狙ったのが継体と考える。

この政策遂行あたっては、百済王族の人質記録は虚構と思うが、百済・伽耶人らの親百済思想の渡来人たちの意見具申が、政策判断の重要ファクターになっていたであろう。従って、百済が一方的に屯倉を占領して返還を拒否するという無礼な態度に出ても、辛抱・我慢しつつ何とか権益の保持を目指そうとするが、結局妥協・容認そして後退という結果となる。

しかし、その僅かな友好関係の維持の見返りが、五経博士・薬博士・暦博士等の来日、また欽明期の仏教伝来などの文化・技術の輸入であった。

結局、継体崩御の翌年に昔の狗耶韓国であった金官国の新羅併合で、宮家・屯倉は全滅する。

Ⅶ. 筑紫君磐井の乱

日本書紀の記録を整理してみる。

①近江臣毛野の六万の軍隊が新羅征伐のために任那に赴く途中に、新羅と連携して磐井が反乱を起こし、

②このとき磐井は、筑紫・豊・火の国を配下にして立ち上がり、

③磐井は毛野に「昔は同僚だったのに、今は朝廷の勅使だからといっても指図通り動かないぞ」と逆らった

④大和朝廷は大連の物部麁鹿火を派遣して、一年半の歳月をかけてやっと磐井を殺し、（古事記は大伴金村も派遣されたと記す）

⑤息子の葛子（くずこ）が糟谷を屯倉として献上したので、これを許したとしている。

尚、福岡県八女市の岩戸山古墳が磐井の陵墓とされ、筑紫国風土記の記録と合致し考古学上からもほぼ間違いないとされている。しかしこの乱についての記録は国造本記等もあるが日本書紀の記録の域を出ない。

1　この反乱の真相

定説は一地方豪族の反乱とし、応神から雄略にかけて全国を統一した過程の終末期の揺り戻しであったとする。

山尾氏は、

事件は、新羅征伐による度重なる軍役負担と半島との外交・交易利権の回復を狙った筑紫の国造が、五二九年の高霊の大加羅国の救援要請を受けて継体が近江臣毛野の軍隊を派遣した際の軍役負担が直接引き金となり、新羅の誘いもあって五三〇年に反旗を翻したとし、五三一年欽明がクーデターで継体・安閑を殺して、磐井の討伐を行った。

と解釈する。

森氏は大和王朝と九州勢力との戦争と考えているようだが、古田氏は更に踏み込んで九州王朝即ち磐井王朝と継体王朝との覇権戦争だとする。その論旨は、

①磐井の陵墓である福岡県八女市の岩戸山古墳は、規模・格調の高い様式から単なる一地方豪族の域を遥かに超えており、九州のほぼ全域を支配していた大王と見るべき。

②九州地方に、「九州年号」とも表すべきものが大化以前から七〇一年まで存在していたことが、江戸時代の古文書に残っており、これは大和朝廷とは違う権力が存在していた証拠である。

③倭の五王という宋書の記録が、記紀等大和朝廷の資料に一切ないのは己の王朝の事柄ではなかったから無視したのである。

倭の五王とは、九州王朝の王たちであったと考えると、大和朝廷側の記録にない理由が氷解する。

等々である。

岩戸山古墳の近隣にある江田船山古墳の太刀銘の「辛亥年、ワカタケル大王」の解釈を通説は

「四七一年、雄略大王」としており、従ってこの筑紫国は一応雄略時代には臣下の礼を執っていたとなる。

もっとも、少数説の「五三一年、欽明大王」説に立てば、磐井の乱で初めて服属してこの太刀を拝領したとなる。

私は、継体が物部大連麁鹿比を将軍とする際に、（長門より東のほうは自分が治めよう。筑紫より西はお前が統治し、賞罰も思いのままに行え。一々報告することはない）との一節が、筑紫以西の統治を行っていなかった事を示唆しているように感じる。

この場合の江田船山古墳の太刀銘の「辛亥年、ワカタケル大王」の解釈は、「五三一年、欽明」説の方に説得性がある。今後の研究課題としたい。

2　この事件の歴史的意味

①対外的には、五三二年の新羅による加羅（金官）併合を招き、新羅・百済の伽耶諸国の併呑の動きを加速化させた。

②国内的には、大和朝廷による従来の同列的地方豪族を完全支配への契機となり、各地に屯倉が多数設けられ、朝廷の財政的基盤が確立する。

③ところが皮肉なことに屯倉創設により、その管理に蘇我氏の起用したため、蘇我氏はその配下の秦氏・東漢氏という有能なテクノクラートを駆使して、莫大な財力を築いて大王家以上の実権を握り、乙巳の変（大化の改新）の遠因となる。

Ⅷ．辛亥の変（参照　資料）

書紀によれば継体崩御九年後の五四〇年即位となっているが、上宮聖徳法王帝説及び元興寺縁起の記録によれば何れも欽明の即位は五三二年としている。

また継体紀の末尾に謎に満ちた文章があり、これをどう解釈するかという問題もある。

（継体二十五年二月磐余の玉穂宮で崩御された。同年十二月藍野陵に葬った。

ある本によると、天皇は二十八年に崩御としている。それを二十五年崩御としたのは百済本記によって書いたのである。

その文に言うに「二十五年三月、進軍して安羅に至り、乞屯城を造った。この月高麗はその王、安を弑した。また聞くところによると、日本の天皇および皇太子・皇子皆死んでしまった」これによって言うと辛亥の年は二十五年に当たる。後世調べ考える人が明らかにするであろう）

1　継体の崩御年

編纂者は、辛亥の年崩御とする百済本記を採用するので継体二十五年崩御とした。その結果、安閑は継体崩御の同日に即位したと記録する一方、安閑元年を五三四年とする矛盾した記録となっている。二十八年の甲寅年崩御説を貫いていれば、安閑即位までの空位問題は発生しなかったのである。

この解釈についての山尾説は、

二十八年説で一旦は書紀が完成したが、最後の校正の段階で二十五年説の有力資料が出てきて、

急遽この崩御年を二十五年に書き改め、一部修正一部修正せずとしたのであろう。その修正をした例が、筑紫君磐井の乱を三年繰り上げた五二七年の記録であり、真相は繰り上げ前の五三〇年から五三一年の鎮圧の最中に欽明のクーデターが起き、継体・安閑を排除して最終鎮圧したのは継体ではなく欽明であったとしている。

定説は継体二十五年の辛亥年の五三一年崩御としている。

2　辛亥の変の存否

欽明の即位は五三二年で学説に異論がない。

その根拠は、書紀の記録の矛盾、上宮聖徳法王帝説及び元興寺縁起の記録、支持勢力ががらりと一変したこと、即ち蘇我稲目が欽明の即位直前に大臣に登用され、欽明即位二年には稲目の娘二人が妃となり、一方前政権の大立者の大伴大連金村は即位した年に失脚している。物部氏も継体期より政権の中での重要度が増している等々である。

そうなると安閑・宣化の大王たちの存在をどう考えるかという問題が起きる。

学説は、概ね次の二説に分かれている。

A．平安末期・南北朝時代のように二朝が並存していたとし、五四〇年欽明に統一されたとする。

一部に欽明朝に対する安閑・宣化朝のうち安閑は創作人物とする説もある。

B．五三一年継体崩御と同時に安閑皇太子・宣化皇子を抹殺して、欽明が大王位を簒奪したとする。

私は二朝並立などなかったとするB説を基本的には支持したい。

その論拠は、

①編纂当時に百済本記を信頼すべき相当信憑性の高い資料ないし伝承が他にあったと推定すべきである。

②即ち百済本記の「天皇・皇太子の同時死去」とは「安閑大王と宣化皇太子の同時死去」を示唆する資料があったに違いない。

③安閑紀・宣化紀の九年間の内容の乏しさ、安閑即位と安閑元年の二年間の空白記録は全くの創作を想像させる。

④九年間も狭い飛鳥を舞台に両派が争ったというのは納得性がない。

⑤欽明紀の冒頭の秦大津父（はたのおおつち）の予言は、九年間の内乱の終息を意味するのではなく、宣化の皇女二名を妃とすることでの安閑・宣化側との和解を暗示していると解する。

3　蘇我氏の登場・飛躍

記紀は、欽明大王を格別の大王と記録し、通説もこの欽明期に大王による中央統治体制と朝廷の財政基盤の確立が成し遂げられたとしている。その一方で、蘇我氏の突然の登場とその権勢振りは特筆すべきものがある。

その人物は蘇我稲目であり、息子の馬子の天皇を凌駕する記録の影で歴史上やや影が薄いが、

実は稲目こそ欽明を戴いて継体王朝を滅亡させた張本人ではないかと考える。

そもそも大王単独の力で天下を取ることはありえず、大軍団を率いる腹心なくして永続的な権力の保持はできない。

蘇我氏の発展の源は、雄略期の玉田宿禰系葛城氏の跡地の屯倉の管理に端を発して、継体期・欽明期の全国各地の屯倉の大半に稲目が携わり、そこから大きな財を私腹化したのであろう。また大王と国家の財布の紐を一手に握ったことから、単なる国庫の管理だけでなく、群臣・地方豪族たちへの徴税にも辣腕を振るったに違いない。

任那滅亡の年の大伴狭手彦（金村の子）の高句麗征伐の戦利品を持ち帰ったとき、（七織帳を天皇に奉り、蘇我稲目には鎧・太刀・銅鐘楼・五色の旗・美女の媛と従女を送り、稲目は二人の女を召しいれて妻として軽の曲殿に住まわせた）という大王以上の土産品を稲目に献上したとの記録であり、稲目の実力が群臣たちに如何に大きかったかを示している。

因みに、蘇我氏の支族の大半は稲目を始祖としており、特に大和国の支族は全て稲目が始祖であり、都の大和国中心部の過半をこの蘇我氏それも稲目の一族が占拠して、後の大王家を凌ぐ権勢の背景となる。

（あとがき）

武蔵国造笠原氏の内紛の真相について述べてみたい。（参照　資料）

欽明即位三年西暦五三四年に武蔵国造の笠原直使臣と小杵が国造の地位を巡って上毛野小熊を巻き込んで騒乱となり、大和朝廷が周旋・鎮圧して解決したと記録されている。そこで先ず通説および有力説を紹介する。

1　笠原氏

石渡信一郎氏によれば、先住民は毛野氏でこれも継体期に毛野氏の勢力が大き過ぎたので上毛野氏と下毛野氏に分割させられたとし、笠原氏は崇神大王の支流を先祖としている出雲臣と同祖であり、欽明大王のときに関東に進駐した氏族としている。

そして稲荷山古墳の有名な「ワカタケル」大王の記載がある鉄剣銘の「ヲワケ」とはこの使臣と推定し、本貫地を鴻巣の笠原に置き、上毛野氏に対抗して武蔵を統治したと解釈している。このヲワケ即ち使臣の墳墓こそ埼玉古墳群最古の稲荷山古墳としている。

2　笠原氏献上の四屯倉の所在地

当時の笠原氏の支配地域は、埼玉県・神奈川県と東京都の南武蔵で、朝廷に四箇所の屯倉を献上したとされ、その屯倉とはこの鴻巣・行田周辺とする説が多いが、伊藤循氏は横淳現在の府中近辺、また橘花現在の鶴見近辺、また倉巣現在の横浜市戸部近辺、および多氷現在の品川区大井周辺と推定している。

3　荏原古墳群・多摩川台古墳群

東急目黒線の多摩川駅至近に全長百七米の亀甲山古墳、百米の宝来山古墳という前方後円墳がある。群集墳を含めたこの古墳群は多摩川沿いに上野毛までに五十以上が集積している。大田区の資料によれば、宝来山が四世紀前半、亀甲山が四世紀末から五世紀前半の築造としており、この笠原氏の内紛の時代より約一世紀前の築造となる。これらは笠原氏の小杵一族の墳墓と推定している。

［仮説］

これらを整合すると次のような仮説が成り立つのではなかろうか。

○五世紀半ば頃までは関東地方の大半を毛野氏が支配していて、その本貫地は多摩川下流の城南地域に置いていた。宝来山古墳・亀甲山古墳はこの毛野氏の墳墓であつた。毛野氏は、この古墳が大和朝廷の独自の文化とされている前方後円墳であるところから、臣従はしていなかったが同列的な地位にあった。

○五世紀の半ば即ち雄略大王の時代に大和から大王家の一族が進駐し、毛野氏を関東平野の北部に追いやり、俗に言う武蔵国を統治した。その本貫地を鴻巣の笠原としたので後に「笠原氏」と名乗った。

○笠原氏は、笠原を本拠地とする「使臣」を名乗る一族と、多摩川下流の毛野氏の跡地を本拠地とする「小杵」を名乗る一族が対峙していた。

○欽明期に「国造」を任命することになり、この国造の地位を巡って同属の使臣と小杵が争い、上毛野氏は故地の復活を狙ってこれに介入して小杵の肩入れをして使臣を排除しようとする。

○これに対して使臣は大和朝廷に支援を依頼し、小杵を滅ぼすことに成功し、その見返りに小杵が支配していた多摩川流域から四つの屯倉を献上する。

○上毛野氏は、贖罪として緑野を屯倉として献上して落着となる。

○荏原・多摩川台古墳群の被葬者は、五世紀半ばまでは毛野氏であり、五世紀後半以降は笠原氏小杵の先祖であり、小杵が殺戮された後は勝利者使臣の派遣司令官おそらく使臣の支族（笠原氏）であろう。

主要参考図書

日本書紀　宇治谷　孟訳
古事記　三浦　佑之訳
継体大王と渡来人　森浩一・上田正昭編
継体大王とその時代　枚方文化財研究調査会編
葛城と古代国家　門脇禎二著
古代史の謎を探る　黒岩重吾著
ワカタケル大王の秘密　石渡信一郎著
継体・欽明朝と仏教伝来　吉村武彦編

出典資料

塚口義信氏の「継体天皇と遷宮の謎」
田中俊明氏の「六世紀前半における東アジアの動向と倭国」
吉村武彦氏の「新しい王統の成立」
伊藤循氏の「筑紫と武蔵の反乱」

尚、掲載資料は塚口義信、伊藤循、田中俊明の各氏の資料を一部修正してある。

芭蕉のこと

青木　昭成

(一)「白し」考

石山の石より白し秋の風

春おぼろの深川を舟で発つ。秋風が吹くころには、奥羽から越後をめぐりおえた俳諧の行脚も、いよいよ加賀にはいる、つつがなければ……。芭蕉は「おくのほそ道」の旅（元禄二年旧暦三月～旧暦十月）を、当初からそんなふうに心組んでいたにちがいない。

冒頭の発句は、その旅の九月、那谷（石川県）での吟である。しかし、この句が芭蕉作とされる九百八十余の発句のうちで、とりわけ秀でているとの評釈は聞かない。私の受けとり方も、その初め同様であった。「おくのほそ道」の紀行文中に、これと前後して書きとめられている発句ほどに、この句が内省的でないことも、私たちに一層あっさりした印象を与えている。だが、芭蕉の感覚は、おそらくもっと深く沈潜した意識のなかにあったであろうと推察される。

句は文中に、それぞれ俳文を前書として、つぎの順序でかかげられている。

むざんやな甲の下のきりぎりす

石山の石より白し秋の風

中山や菊はたおらぬ湯の匂

発句だけを、こんなふうに単純に羅列するとき、たとえ、それが蕉句（芭蕉の発句をこの略称でよぶことには、やや逡巡するが）であっても、どれだけかの予備知識なしでは、その一語一句の意味が、いたって希薄な小品になってしまい、心にしみるものがない。とりわけ「石山の」の句には、その感が強いと、私には思われる。

その石山の石を、近江（滋賀県）石山の白瑪瑙をさす、とする説がある。俳人加藤楸邨はそれをとらない。「秋は方位からいうと西であり、色に配すれば白である。然しここはそこまで考えなくてよい」として、その句意を「眼前の岩山の石は白いが、吹きあたる秋風は、この白さよりもしろじろとした感じがする」とすなおに解しておられる。

もっとも、近江の石山は、芭蕉にもゆかしい地名である。かつて紫式部が源氏物語を執筆した、と伝えられている石山寺、その地の、陽に晒された岩石はきらめく白さである。芭蕉がこのとき、やがて訪れるはずの江州白山に想いを馳せてのものかどうか、は知る由もない。が、いずれであっても、「より白し」と芭蕉は言い切ったのである。それは那谷の奇岩のおくの小堂に、しずかに安置されている観音の御姿や、それにまつわる史実への敬虔な思いなくしては、とうてい成りえない一句、とみたい。

それだけに、芭蕉の那谷についての俳文なしに、この句に出会うとき、私たちは、いかにも平

板な比喩をそこに感じてしまう。白風と呼ばれる秋の風は、石山の石の白さよりも白く清澄であると言っている写生の句にすぎない、と看すごしてしまいそうである。つまり発句は、発句だけをとりだせば、創作の動機をおしはかることなしに、鑑賞者のまったき鑑賞をゆるさない危険を、つねに内在させている詩型である。

発句が、俳句と呼ばれるようになってもう久しい。だがこの日本固有の短詩は、俳諧を起点として成立したとは言いながら、その伝統とはまったく無縁に創られるようになってからも、この危険を是非もなく宿命のように負っている。現代の俳句もまた、この桎梏から解放されていない。孤高や独善、あるいは仲間うちにしか通用しない合点に陥りやすい気質は、その極小の詩型を意識すればするほど頑なになるに違いない。こう気楽に観察できるのは、まったく句作にかかわらない人間の僻目、それとも不遜になるだろうか。

ただ私は、それを私なりに、発句の源流にさかのぼるような気持ちで、いわば芭蕉学の初心者として、もう少し探索してみよう。それが何であるか。たやすく回答が得られる質のものではない。しかし、これは己の美意識を見つめなおすよい機会であり、やってみる甲斐のある作業でもあると考える。

そこで「石山の」の発句について、私が受け止めているもう一つの、それはややカテゴリーの異なる感覚について、考えることから始めてみる。率直にいって、この句に初めて接した印象は、「じつに調子がいい」であった。そして、それに「白し」の色彩感覚が「きわだっている」でもあった。そして、それは結局、【i shi】【i shi】【shi ro shi】と取り出して、納得したわけである。

繰り返される【ii】の母音がかもし出すイメージは、まったく透明な「白」であり「秋の風」である。それに日本語のリズムは本来「いし、やまの、いし、より、しろし、あきの、かぜ」と分解されてよい。それは日本人の私がまさしく生まれながらに耳にしてきた和太鼓の音律でもあろう。遠い郷愁にも似た安堵を我が身のうちに回帰させてくれるのかもしれない。

ところで芭蕉には、制作年代がおなじく元禄二年、と伝えられるつぎの句がある。

石山の石にたばしる霰かな（元禄二年・冬）

この石山は、まさしく近江の石山である。共に元禄二年だが、季は前者が秋で後者が冬である。いずれも「石山の石」で始まるが、むろん、単におもいつきの語呂あわせの発句ではない。二つの句の違いは自然な感覚で使われている「白し」と「たばしる」の語感の異相にある。

では芭蕉は生涯を通じて「白」をどういう性質の色彩として捉え、扱っていただろうか。寛文年間（一六六一～）から天和年間（一六八一～）にいたる発句を推定制作年代にしたがって挙げれば、

餅雪を白絲となす柳かな（寛文七年・冬）
白炭や彼の浦島が老の箱（延宝四年・冬）
藻にすだく白魚やとらば消えぬべし（同九年・春）
ゆふ顔の白く夜の後架に紙燭とりて（天和二年・夏）
花にうき世我が酒白く飯黒し（同三年・春）

句意や主題がどうあるかを別にすれば、三句は物の呼称の白、つまり名詞として使われ、後二

句は形容詞の連用形として、使われている。貞享年間（一六八四～）に入ると、その用法はしだいに変化し、たしかに白は主題ではあるが、それはもはや、たんなる名詞でも形容詞でもない。

白芥子や時雨の花の咲きつらん（貞享元年？・春）
曙や白魚白きこと一寸（同元年・冬）
海暮れて鴨の声ほのかに白し（同）
梅白し昨日や鶴を盗まれし（同二年・春）
白罌粟に羽もぐ蝶の形見かな（同）
月白き師走は子路が寝覚かな（同・冬）

第一の句の、春の白芥子の花弁の白は、秋の暗い長雨への瞑想につながり、第二句の白魚の白は、一寸と呼ぶ尺度となることで、うそ寒い曙の風情をうきあがらせる。第三の句の白は、鴨の低い音声となって、薄暮をいよいよこちらへ引き寄せる。しかし、第四の句以下の白はそれぞれ、林和靖の故事、弟子杜国への情念、孔子門下の子路の人となり、等々の予備知識をたくわえることなしに本当の句意を解するにいたることは、なかなかといわざるをえない。これは勿論、傾向としてとらえた蕉句変遷のほんの部分であり、だが、とりわけ選別したものではない数句にも、第四の句以下のように、故事や来歴や詩歌を下敷きとした発句があったのは、どんな経緯、また意図からだろうか。これも発句独立の歴史にかかわる問題として、蕉句評釈の延長上で解明してみなければならない。

ただ一つ言えることは、芭蕉の時代には現代の私たちが持っていない、それは教養としての文

学が、俳諧を嗜む人たちにはそれぞれ広く深く身に備えられていたのではないかと言うことだ。勿論、全ての俳諧師がそれを我がものにしていたとは限らない。芭蕉が取りだしてみせたある部分は、当時の人びとには当然の常識として、また、ある部分は芭蕉の権威として、納得されていたに違いない。

と言うのも、芭蕉に後れること一世紀の芭蕉研究者である蓑笠庵梨一（一七一四～一七八三）が、その著書「奥細道菅菰抄」で「おくのほそ道」注釈のために、和・漢・仏にわたり駆使した引用書目が百二十三部におよぶという事実がある。それをただ衒学的と呼ぶには、あまりにも自然な成り行きであり、刻苦の結果、と考えられるからだ。現代にあって芭蕉のすべてを咀嚼することがいかに困難であるかも推測される。

芭蕉の「白」は、この時期をすぎ貞享二年（一六八六）から元禄二年（一六八九）にかけては、その句作の多さにくらべて極端にすくないことに気づく。

鮎の子の白魚送る別れかな（元禄二年・春）
石山の石より白し秋の風（同・秋）

そう言えば「自嬰粟の」がそうであり、「鮎の子の」がそうであるように、芭蕉にとって「白」は、ある時は「別離の悲哀」の代名詞でもあるようだ。

芭蕉の晩年である元禄三年（一六九〇）から、終焉の元禄七年（一六九四）にいたる芭蕉の「白」の傾向は、どうやら再び元の姿に回帰しているように、みうけられる。

白髪抜く枕の下やきりぎりす（元禄三年・秋）

水仙や白き障子のとも映り（同四年・冬）
その匂い桃より白し水仙花（同・冬）
白魚や黒き目をあく法の網（同五年・春）
白露をこぼさぬ荻のうねりかな（同六年・秋）
家は皆杖に白髪の墓参（同七年・夏）
白菊の目にたてて見る塵もなし（同・秋）

第一の句は、文字どおり素朴な秋の境涯の句とみればよいだろうが、第二の句・第三の句は本来の発句、つまり挨拶の句としての性格をわきまえなくては、なかなか理解がゆかない。ことに第二の句では、茶室に招かれての、あかり障子、活花、掛物などの取り合わせや作法を思いえがく必要があり、「とも映り」の字句の解釈がさまざまに分かれる理由もそのあたりにある。第三の句の、臭覚の視覚的な表現は、「海暮れて」の聴覚の視覚的な表現とおなじように、現代に引写しても、なお斬新な手法である。第四の句は、唯一、蚊子和尚の故事をふまえた畫讃の句であるが、この白魚も、以降の白露や白髪や白菊もすべて、物の性質をあらわす「白」を冠した名詞である。

だが、ここに至っての芭蕉の暮らし、あるいはその心象は、往年の肩肘はった情趣からは、はるかに遠く、淡々と、しかし自在に、その場の雰囲気をくみとりうる境地に、到達していると言えよう。

処で、伝えられる芭蕉の発句は、芭蕉の境地とは関わりのないことながら、その語彙、句形に、

不同のものの流布がいかに多いかに、驚かされる。それは人口に膾炙されているものほど、と考えてよい。芭蕉自身が、句形を落ち着かせるまで、たびたび推敲を重ねたと知られているものは、芭蕉の結論として、納得すべきものだが、その他のものはすべて出典の異同による、当時の原始的な出版の事情が一因でもありましょう。あるいは、それ以上に芭蕉の工夫した、句作の手法、語彙の用法、などが時代を抜きんでていて人々を戸惑わせ驚かせたと考えるほうが、妥当なのかも知れぬ。

芭蕉は詩の実作者ではあったが、文字どおりの理論家ではなかった。思想という概念や客観とよぶ観念など、言葉として持つ必要のなかった時代である。だから、おおくの序跋、畫讃、書翰など、それに紀行文は残したが、著作としての俳論はついに残さなかった。

現存する『三冊子』、『去来抄』、『旅寝論』、『俳諧問答青根が峯』などの俳諧論・発句論集はすべて門人の手になるものである。しかも、それは俳諧の実践の場での、芭蕉の発言を、弟子たちが忖度し書き留めたもの、に過ぎない。だからそれらに、まったく完全な芭蕉の思想の再現を求めることには無理がある。

したがって現代の私たちが、芭蕉の日指したところを日指し、求めたところを求めてみたいと望むならば、それはあくまでも芭蕉の作品に、正面から挑んでみるしか道がない。ところがいまや、それはますます容易ではない。三世紀をへだてて、いかなる先入観もなしに、芭蕉に対峙することが許されるわけがないだろう。

明治以来の、もっとも著名な芭蕉研究者であり、また俳人でもある一人に子規がいる。そこから一世紀、いやとくにここ四半世紀の間に、芭蕉が歴史上の偉大な俳人として、商標のように貼られてしまったレッテルがいくつあるだろう。それを制作したのは現代に活躍する、当の俳人たちであり、国文学者であり、評論家と呼ばれる人々である。

いわく「旅の詩人」、「漂白の俳人」、「風狂の人」、「風雅の誠の人」、「余情の詩人」など、世人を惑わすのに充分な数である。そのいずれもが、当を得ないものという積もりはない。だが、そのいずれもが芭蕉の理解を邪魔していることも否定できない。それは何故か。それらの言葉がすべて仮説の上に成り立っていることを、人々に忘れさせているからだ。仮説はあくまでも仮説であって真実ではない。仮説は人々の恣意によって気ままに変転する。まして芭蕉の姿は、先入観という一本しかない刷毛を用いて、描き切れるほどに矮小ではない、というのが理由だ。

そのへんの情況を、詩人嶋岡晨は、「世界最小の詩型といわれる俳句を、最初に、高い文学的価値をもつものに到らしめ、独特の日本的美学（さび）そして倫理性（まこと）を、そこにたっぷりと熟成せしめたことに、芭蕉の〈不易〉のよみがえりがある、といえるだろう。」と圧縮した言い方で述べている。

これはたしかに概論である。それはそれなりに舌足らずであることを免れ得ない。勿論こうした、しかるべき文章のその一節を摘出すること自体がすでに明白な不都合である。ましてや、それらしい短いフレーズをもって人物像を象徴しようというのは、自説のプロパガンダを狙う無謀な行為となってしまう。

その芭蕉には、蕉門の十哲と呼ばれる代表的俳人をはじめ、後世にその名を残す門人たちが、

その数、三百人とも二千人とも『堀切実著・芭蕉と門人』かぞえられている。だが、その多くの門人たちはおそらく、芭蕉という偉大な光源なしには、この世に照らしだされることも、叶わなかった連中にちがいない。

そして、その「偉大な」とは形において、どこまでも深く、色においてあくまでも静かな、ひとりの実在の人物を、意味してくれるのでなければならない。

ところで俳句は詠むとか歌うとか、と言うよりも「ひねる」が適切であると、初めて唱えたのは柳田国男であったろうか。それとも山本健吉であったろうか。その山本健吉が著書のなかで述べるところは、「ひねるに俳句の持つ寓意（アレゴリイ）性、また滑稽（ユーモア）性が宿る」であり「俳句の本質は象徴詩でなく寓意詩である」であった。

一方、小林秀雄は〈表現について〉のなかで「表現するとは己れを圧し潰して中味を出す事だ、己の脳漿を搾る事だ。芭蕉にはそう言う意味で一句として単なる思いつきによる作句はない」と断言している。

どうやら、作品をとおして芭蕉の本質に迫ろう、発句をとおして芭蕉の実像に至ろう、という試みは、芭蕉にあって他の俳人にないもの、他の俳人になくて、ひとり芭蕉にあるものは何かを知ることのようである。

芭蕉にしかないもの、それは芭蕉の選びだした言葉であり、その詩であり、その句そのものであろう。そこで私は、私なりに大胆な仮説をここに試みてみる。

「芭蕉、この翁の職業は俳諧師であった。その地位は俳諧の宗匠であった。その人格は脱世俗の

隠者であった。その資質は詩人そのものであった。だから、翁のバックボーンは詩人の美学そのものであって、そのモラルが翁の行為を決定付けていた」と。

いや、これは私の単なる遊びかもしれぬ。私は、さまざまな「芭蕉論」から、それらを安易に引き出してみたに過ぎない。だがそれが、たとえ借り物であったとしてもそれが私の仮説から、やがて真実に変わることを期待したい。それは私にとって芭蕉のいかなる伝承に頼るよりも、芭蕉の作品そのもので、実証してみるしかない。

それにしても、芭蕉がみずからを「芭蕉」と号し、世人から「翁」と呼ばれだしたのは、三十八歳（天和元年・一六八一年）のころからと伝えられる。当時の、歴年齢としてもいかにも若すぎる。何故だろう。それがまた、私の仮説とどのあたりでどう交差するかは、さらに芭蕉の生涯と関わってみなければ、決して芭蕉の生きざまの輪郭をこの手で描くことは出来そうにない。

芭蕉の辞世の句は、

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

である。この句の成立は、子考や其角の「芭蕉翁終焉記」に詳しい。実にさまざまな解釈の生まれるところである。芭蕉五十一歳、たしかにおのれの病の危篤を、十分に承知したうえで成した最後の句である。多くの門人に看とられながら、余人の窺い知れない哲学をもち、余人にすぐれた解脱の精神を秘めながら、しかもなお、枯野をかけめぐる凄惨な、芭蕉の想いとは、いったい如何なる想念であったろうかと、どう推察すればよいのか。

西行七十三歳、宗祇八十二歳、雪舟八十七歳、利休七十一歳、この歴史上の偉人たちの享年を

ここに並べることは、かならずしも当を得ないかもしれない。しかし、芭蕉が、この先達たちの生きざまや生涯を遠望し、その長寿を、わが身に比肩しなかった、とは言いきれまい。また、西行や長明や兼好など後世にその名を遺した隠者たちが、ゆうゆう辿ったであろう我が道を、芭蕉もまた肯定的に歩こうとし、歩きつつあったことも真実ではなかったろうか。

芭蕉がその発句のなかに、つねにポジティブに表現しているように見える詩美とは、つまり信仰にも似た、それら先達への憧憬を根幹として、芭蕉のなかでごく自然に生まれた人生観であったかもしれない。だからこそ、旅に病んで芭蕉の魂はなお、枯野をかけめぐりつづけた、と私は理解したいのである。

(二)「ひねる」考

ある紙上で、詩人大岡信が「折々のうた」と表題して日々、詩歌の寸評をこころみられていた。白魚は仮名ちるごとく煮えにけり（阿波野青畝）

氏は、この「西湖」所収の句を採るために、

白魚の小さき顔をもてりけり（原　石鼎）

白魚を煮る酒の香や細雪（水原秋桜子）

の二句を引例して、「白魚には多くの佳作がある」としながら「しかし青畝のこの句は格別な味のする秀句だ」と説かれている。また、「〈仮名ちるごとく〉とはよくもいいとめたもの」とも

評し、「曲線の多い仮名文字が、まさにばらまかれたように散っていて、それが白魚である。言われてみればその通り。だが、言われるまでは誰もそう見なかった。」と率直に結んでおられる。

この断章にはその短さから、まったき鑑賞やまったき評釈を、汲みとらせようとの意図はないだろう。詩人もまた、限られた紙面でのこの企画が、舌足らずにおわることが避けられないのを承知していて、極めて暗示的に寸評をおわらせている。

けれど私は、ふと何気なく期待する。これらの解釈の奥底には、句作の秘密にいたる何か、俳句の源を探る何かを、言外にしていてくれるのではないかと。

詩人がおのれの感覚で捉えたものを、おのれの言葉で書き留められているのに接するとき、その胸の奥にある感動を、私もおなじ位置に並んで享受していると、おこがましくも考えるのである。すでに私は、芭蕉の発句の「白し」にかかわって、

藻にすだく白魚やとらば消えぬべし（延宝九年・春）

曙や白魚白きこと一寸（貞享元年・冬）

鮎の子の白魚送る別れかな（元禄二年・春）

白魚や黒き目をあく法の網（元禄五年・春）

を芭蕉の一連の発句のなかからあげている。後の二句はともかく前の二句は、芭蕉の置かれた時代との隔たりを意識させない、まさしく「言われて見ればその通り、だが、言われるまでは誰もそう見なかった」の類にはいる「白魚」を主題の発句である。

現代人の悪癖か、そのあまりにも透明な詩的直観に出会うと、他にもっと何か隠された意味が

ないかと探したくなる。しかし、ここにあるのは実にあざやかな、芭蕉の「白魚」のみである。表現するとは、こうした無双の比べられたことのない感覚を、眼前にとりだしてみせる「行為」を言うのであろう。

なるほど即物的である。が決して即興的ではない。それを指摘できるほど軽いものではない。ひらめきや直観は、すぐれた作品の創造には欠かせない要素の一つかも知れぬ。ただ一般的には、即興がそのまま完璧であることは稀なのも事実である。俳句はまさしく十七字、極小の詩歌ゆえに、これに即興を載せ詩想を盛り込むとしたら、叙述はとうぜん省略を余儀なくされる。そのうえでその詩美は、矛盾や破綻を見せることなく完結していなくてはならない。俳句が暗黙の内に、季や切字を必須の手法として取り込み、文語をもちい、「て、に、を、は」を大切なキー・ポイントとしてきた歴史、また比喩や象徴をともなう所為が、思われるのである。

それは、句作の苦悩、そのところを大岡信は、〈「仮名ちるごとく」とはよくも言いとめたもの〉と指摘する。「よくも言いとめたもの」とは面白い言いまわしである。もっとも土芳の（三冊子）あたりには、この「留め」という言葉はよく出てくる。例えば、「又句作りに、師の詞有。（くろそうし）と言うようにである。ならば句評では、あるいは常套の語句であろうか。それを、もうすこし卑近な表現をかりれば、詩人は「言い得て妙である」と書き留めたかもしれない。でもその言いまわしは、あまりにも人口に膾炙しすぎて、氏の趣意には添いにくいものであったかもしれない。

しかし、先に進ませてもらえば、「いいえて妙」は「いいおおせて妙」つまり言うことが叶って満足である状態を指すばかりでなく、事象を一言で言いあらわせて過不足がないとの同感の念と、その巧緻への驚愕の心がこめられている。「言いとめる」とは、そういう境地を指すのではなかろうか。もっとも、単に「いいおおせる」ことと「妙」であることの二つを揃えて、言うならば身近にある「標語」さえそれに該当しよう。

近年では絶え間なく耳目にとどく「宣伝コピー」の喧燥がある。いや、様式を俳句とまったく同じくする「川柳」もある。ただし、そこから私たちが受け取り得るのは、あくまでも比喩や説得であり、ときには単なる駄洒落である。決して心が波立つような「感動」とは言い難い。この差異はなにか。それは一点、そのものが私たちの感性と共鳴し、響きあえる創造的な作品でないことだ。

私の内部に感動を与えてくれるもの、それが私には詩であって、同時に詩は私の中にあたらしく生まれた一つの世界、一つの秩序である。それを美しいと感じるのは私の美意識でありモラルである。そして、詩は「言いとめる」、言いかえれば「言葉」によって、詩は一つの世界を構築してみせる。もう言い古されてしまったが、現代の詩人たちはこれを、心象と呼ぶ。詩作品が言葉を素材として、小宇宙のような存在であることを、自覚しなければならない瞬間でもある。

さて、こう考えることで初めて、私のなかで俳句には「ひねる」が適切であるとの、先人の言葉が納得される。俳句を作るという行為が、「ひねる」と言う積極的な作業に置き換えられる。

その作業は作法を離れては成り立たない。定型を外す行為ではない。俳句革新をこころざす向きの意にはそわないだろうが、そのことが俳句を俳句たらしめている根源であり、真実であるからだ、とも考える。

「その弁皆理屈なり」芭蕉ならば此処で一言、そう声をかけるに違いない。だが、もう少し勝手を言わせてもらおう。

日本の短詩型のなかで、短歌つまり和歌は「みそひともじ」、それはまさに「三十一文字」と呼ぶのにふさわしい叙情の詩型である。だが、俳句は「十七文字」と数えるよりも、むしろ「十七音」と言ってしまったほうが、その本質にぴったりくる。俳句では、一字・一音が決定的にその詩としての性格を方向づける。ことに助詞や助動詞のはたす役割は、受け取る側の感覚に予想外の変化をひきおこす。それは、あたかも音楽における転調のような作用である。メロディーのなかの一つの音の音程の跳躍（移動）が、長調から短調へ、短調から長調へと、その曲のなかの調性を変幻させてしまうのに似ている。

一方また、短歌は叙情詩として、その創作活動のありようを表現する語彙に「詠む」とか「うたう」がある。そうした意味では、同じ叙情詩でも俳句には「ひねる」しかない。俳句は「詠む」ではおもすぎる。俳句は「うたう」ではみやびすぎる。「作る」にはそれを浮かびあげさせるニュアンスがない。やはり「ひねる」があって、言いおおせて妙になる。

俳句を「ひねる」とは、語彙をただ「ねじまわす」ことではない。ましてや「やっつける」ことでもない。「考えをめぐらす」ことや「工夫する」ことを含めて、俳句の原点にたち返って考

えてみる必要があろう。俳句はあくまでも俳句的方法によって俳句であり、それ以外のものではない理由を、芭蕉の発句にたち返って尋ねてみなくては、と考える。

ここに、一九八九年発行の一冊の対談集がある。題して「芭蕉を読む」。国文学者遠藤嘉基の編になるこの書物の発行年代を、ことさらに明示した理由は、対談の行われたのが昭和十九年（一九四四年）の秋、この年代を心にとめて話をすすめたいと願うからで、その事実は同博士によって実証されている。しかも、座談集会の中心は、俳諧研究の泰斗である穎原退蔵博士、かこむ面々は京都在住の国語・国文・中国・ドイツ文学の当時はまだわかい学者たち、それに吉井勇・湯川秀樹をくわえた方々である。この一冊に採りあげられた対談の対象は、つぎの三つの蕉句、

菊の香や奈良には古き仏達（元禄七年筏日記他）
草臥て宿かる頃や藤の花（元禄元年猿蓑他）
白露をこぼさぬ萩のうねり哉（元禄五・六年翁草他）

一見して何れにも共通する事項が三点ある。

㈠　芭蕉晩年の元禄年間の作である。
㈡　出典により大きな異同がある。
㈢　句のイメージが絵画的である。

対談が、この三点のそれぞれについて、示唆しているわけではない。その考証は、専門家の集まりであるだけに、充分ゆきとどいたものであって、芭蕉的方法をさまざまな方向から眺めるこ

とで、むしろ解釈の多様性をかずかず見せてくれる。イメージが絵画的であるとの見方は、わずかに第三句において、「うねり」が絵画の抽象性をみせるという意味で出てくる。だが、私はこの三句とも、はっきりと絵画的であると受け取る。あるいはそれが、世に言う「余情」というものかもしれない、とも考えるがそれはあまりにも、印象主義的な鑑賞にすぎるだろうか。

第一句、「菊の香」は空間の広がりを想像させ、「古き仏達」はすぎし時の流れ、「奈良」はそれらに一つのシチュエーションを設定する。一句のなかの三つの名詞は、効果的なしかし最小の助詞をもって連ねられ、一幅の絵画となることで、永遠の生命をあたえられている。

第二句、「宿かる頃」はうつつの時を明示し、「藤の花」の花房が、ふじいろの空間の奥行きをひろげ、「草臥て」の歩きつづけ辿りついた安堵感がシチュエーションを確かなものにする。垣根越しにか、それとも縁側に腰を下ろしてか、暮れゆく春がやるせない一幅の絵画として写し込まれている。

第三句、「白露」は一個の点に過ぎないが、それは無限の空間の広がりを予感させ、「うねり」はその波形がえがく線描のゆえに時の流れを留めない。こうして「萩」はなにひとつ「こほさぬ」静けさに占められ絵となり動かない。

以上は、あまりにも性急なこじつけの句解の試みかもしれぬ。私は思わず興奮していたのだ。感激が私をこの対談の文字をなぞらえるよう仕向けたに違いない。そのうえ、出典により如何に異同が多いか、それは何故か、異同による句の表情や詩想の変化はどうであるかなど、おぼろげながら知り得た。ただ、どうして元禄年間の三句が選定されているのかには触れずしまいだが、

私の目的がそこにないのを理由に、措くことにしよう。

私を動かしたのは結局、「芭蕉を読む」の一巻のなかにある「静けさ」であった。その静けさ、その静謐の正体は、いったい何だったろう。昭和十九年を生きた人間ならば、誰でもがこの一巻を読みすすむにしたがい、気づくはずのものである。

時勢は戦争の嵐のさなかにあった。外洋を吹き荒れる風雨、しかし、ここは高い防波堤にかこまれた港の、内側の平静がたもたれている。何が、熾烈な動乱から人々を隔絶してくれていたのか。これを韜晦ととり、回避とうけとることは容易であろう。だが、時と処を選ばずに、古典を古典として鑑賞できる精神の強靱さを理解せずに、それを言うのは許されまい。幸いなことに、ここに復刊という形が、半世紀余の昔日に隠れようとしていた諸家の精神のあり方を、如実に甦らせてくれている。そして、それはまさに芭蕉という偉大な詩人の遺業の確認であり、再発見である。これを芭蕉の普遍性と呼び、芭蕉の永遠性と唱えて総括するのはたやすい。が今、私が為しうることは、ただただ、その作品に立ち還ること。これ以外では芭蕉に近づき、諸家の域にせまることは叶えられないであろう。

ここで再び、「一句ひねる」に返り、芭蕉の時代に帰ることとしよう。わが芭蕉は「ひねる」を、どう捉えていたか。

俳句は、その発生の道筋から、連歌の一体である俳諧の連歌の、発句（すなわち第一句）が分離独立したものである、との見方がいまは常識である。もっとも俳諧の長編のものを連句とも呼ぶが、その歴史のうえで最盛期とされる室町の、心敬（一四〇六～一四七五）あたりでも、すで

に発句は独立にも作られていたと言う。ただし、今日のように俳諧が、ジャンルとしては、もはやほとんど意識にあがらなくなった時代では、今日的な意味で、発句が連句の部分からまったく切り離され独立に創作されるにいたったのは、天明の蕪村（一七一六～一七八三）あたりと考えるのが妥当であろう。

この独立の文学様式となった発句を、「俳句」の名で呼称しはじめたのは、明治の子規であった。つまり、子規は連句の非芸術性をとなえることによって、あらためて発句の文学的な性格と言うものを主張し、自らもその様式のなかに、自らの文学理論を実践し唱道した、最初の人物であった。

その子規に、『古池の句の弁』の論考がある。

「古池の句の意義は一句の表面に現れるだけの意義にして、復他に意義なるものなし」「芭蕉自ら此句を以て自家の新調に属する劈頭第一の作となしたるがため後人相和して亦……云々」と極論し、また『俳諧大要』では「作者の理想は閑寂を現すにあらずんば、禅学上悟道の句ならんか、」「それは只只其儘の理想も何も無き句と見る可し。」と記している。この解釈は、それまでの芭蕉の発句理解の伝統にたいする子規らしい反論、また彼の理念にふさわしい詩論の展開と受け取ることができる。だが彼以降、今日にいたる芭蕉理解の方向は、いかにも多岐にわたる。ことに芭蕉没後三百年を越して、近年、その上梓の数は枚挙にいとまがなく、その論旨の理解も容易ではない。

戦後、現代俳句にたいして華々しく展開された攻撃に、「第二芸術」の論議がある。しかし、

その論者桑原武夫も、「そもそも俳句が、附合いの発句であることを止めて独立したところにジャンルとしての無理があったのであろうが、」『現代俳句について』との俳句の性格にたいする考察があり、むしろ率直にその慰戯性を自覚し、宗因にこそ還るべきだと結論している。また、中世詩人芭蕉を知らず知らずに実感とか、体験とか、自我とか、そういう近代文学の背景をもつ言葉をむりに持ち込むからである、とも言っている。

だが待てよ、と私は考えこむ。それからもう半世紀余、子規からはすでに一世紀余、俳句文学のうえに、なにか特筆すべき変化が起こったろうか。なにも起こらなかった気もする。日本の社会は依然として俳句をうけいれ俳諧は無視されたままである。わずかに特定の詩人たちの、連歌復興の試みがあったが、これとて研究の一助であり、慰みの域を出ていない。と言いつつ、だが一方では、恐ろしいほどの変革が起こった、との思いもある。それはメディアの変転に伴ってである。かつては想像することさえ不知であった肉体の深奥や生命の秩序についても、カメラは自在に暴いてみせる。だがそれはあくまでも、映像としてであり、幻の体験にすぎない。時間の速さで走り去った画像が、私たちに残してくれるものが何かあるか。明かりが喪失した瞬間に、幻は消え失せるのである。そして、私たちは「言葉」による以外に、それを手元に引き留めておく術を知らない。短歌や俳句がいまなお、日本の社会で文学として命脈を保ちつづけている理由の一端は、ここにあると私は考える。

さて、本筋にもどろう。曲折を経ながらも私が道筋を辿ってみようと計ったのは、結局これらの諸問題の中心に、つねに芭蕉の作品が、なぜ中心におかれているのか、の解明である。それは、

わが芭蕉の発句が、そうした近代風な解釈をうむであろう可能性を、三世紀を隔ててなお、しっかりと包含している、と言う事実だけだろうか。芭蕉による蕉風確立の経緯は、子規の「自然の妙」の説をまつまでもなく、さまざまな附会や伝説にいろどられながら、一般的には「古池の句」成立の事情のうえに、象徴的に物語られている。

代表的な研究者のうち、山本健吉は「古池の句の歴史的価値は〈蛙飛ンだる〉のような俳言による俳意の強調や〈山吹や〉のような季語による情趣の強調を離れて、自然に閑寂な境地をうち開いた……」『芭蕉』と言い、加藤楸邨は「子考の如く蕉風の眼を開悟したのはこの句であるというような大業な言い方は認めないが長い間求めて来た真実感合の態度がついに熟して来て、この句に自ら発するに……」『発句評釈』と述べている。これらは何れも子考の（俳諧十論）あるいは（葛の松原）によっての所説であるが、閑寂な境地と言い、真実感合の態度と言い、共にその評釈は、蕉風理解にいたる一般的な傾向を暗示している。

こうした伝承を積み重ねた知識の故にか、私たちも芭蕉へのアプローチを、まずこの発句の理解から始める。だが、それはまさしく独立の「俳句」としてであり、「古池の句」が俳句と呼ばれる文学形式の、典型的な性格を具現していて、俳句についての初歩的な、けれど根本的な理念を与えてくれているとの安心感、あるいは自明な常識の上に立ってであろう。

この点を小宮豊隆は、俳句の翻訳の難しさに絡めて「句眼は無論、古池に蛙が飛び込んだ〈水の音〉にあるが、諸家は〈水の音〉そのものを表すことに気を奪われて、〈水の音〉の暗示するものを表現することを知らない。」と言い、その上に古来から〈切字〉とか〈てにをは〉の工夫

があるので、それは殆ど翻訳を許さないと述べている。

こうして私は、一句「ひねる」が俳句の真実をあらわすものと考える一方で、必ずしも日本語だけでなく、その国の言語がもつ固有の伝統の奥にある感覚は、たぶん翻訳のわくの外にそれぞれ有るのではないか、とも考える。

そして、芭蕉の一句「ひねる」姿こそこの翻訳の対象にならない何かであって、この何かが芭蕉の語句が推敲や異同を経たのちに垣間見せる実像ではないか、と推理するのである。

現代詩　点描より　四編

青木　昭成

谷　間

トンネルを通りぬけた人々の
手は急に山峡の会話のなかに融けてしまう
彼等の心理をすっと追いこす風は
はるかな谷間の木立をせりあがり
生きるという呼吸を
美しいスキ間にすぎなくしてしまう

橋の上

まれに人が
退屈な星の姿をして橋の弧のうえにいる
夕陽をあびた胸には　嘘もなく真実もなく
だだ　かた方の頬に対岸など写し
かた方の頬に靄をたなびかせて
まれに人が
比喩をみうしなった顔をもてあましている

夜の陸橋

夜の陸橋の下を轟音がゆさぶっていた
そう　人の肉体の疲れを通過して
火花を散らしながらゆくのは列車
そう　瞬間のはやさで魂をうばい
いま奔りさったのはうつつの時刻
だが蒼い踏切にゆっくり入ってくるのは
メタファーの電気機関車だ

貯木場にて

疵つき積みあげられた広場から

ラワン材が曳きだされてくる
人はその時　己に遠く己に近い
ひとつの声をきかねばならぬ
命をなくしたものの饐えた臭いしか
もはや漂わさない　あの木口に
永久の年輪のゆくえを問わねばならぬ

短歌

行雲流水　四十首

石黒　修身

凡庸で有漏の身なりし来し方を
いま愛しみ古稀を迎えん

気がつけば晩照の中に吾は佇つ
ひと世の収支償わぬまま

職退きて自適の暮したいらぎぬ
忽忙の日々今は眩しく

健診に異常なかりしやすらぎか
花鉢買い帰る妻の笑顔は

齟齬ひとつ胸に残して帰る道
堆りし落葉かさこそと踏む

内視鏡呑みし診断明日になる
今日は狭庭の草をむしらん

独り居てドイツリートを聴き乍ら
もの想うとき吾の至福ぞ

「冬の旅」聴きては心さすらえり
老いし楽師の落魄のさま

杳き日に短歌（うた）に憧れ買いおきし
「昭和萬葉集」書架に古りたり

鳥となり亡母（はは）は飛び来ん吾がもとへ
民話は伝う「小鳥前生」

吾が生れし北の都に沸き返る
「ヨサコイソーラン」汝は何者

「摩周湖を見て死ね」と言いし作家（ひと）あり
一陣の霧去りて晴れたり
註　八木義徳

深紅なる雲海のごとし洛南の
古刹の庭を埋める紅葉は
註　京都東福寺通天橋

明日葉（あしたば）とうその名明るき菜を食む
ここ早春の椿咲く島
註　伊豆大島

桜花(はな)はゆる天主望みて鶴ケ城
一期一会の酒酌みかわす
註　会津鶴ヶ城寮歌祭

桜咲き吾が姓(な)にひとしき札掲ぐ
武家屋敷あり美(は)しき角館
註　秋田県角館石黒家

この年の歌会初の召人は
「周平」描く殿の裔なり
註　酒井忠明氏は荘内藩主の末裔、藤沢周平の時代小説に出る「海坂藩」は同藩がモデルと言われる。

自省せよ矛をかざして示威をする
傲れる思想パクスアメリカーナ

大義とて攻め入る国は心せよ
アラブの民のルサンチマンを

何月(いっ)何日(いっ)が食べ頃と書きおけさ柿
今年も届く荒海越えて

はらからの訃に急げども連絡船
とめて吹雪は佐渡に渡さず

京風の訛やさしき従兄(あに)の通夜
雪霏々と降り佐渡は更けゆく

去年逝きし従兄(あに)が年毎送り来し
おけさ柿届く今年の秋も

おわら節胡弓に合せ踊る男女(ひと)
八尾の夜は更けて風の盆

風の盆舞台となして描きたる
小説(ふみ)はさながら絵巻のごとし

註　高橋治著「風の盆恋唄」

恋唄につづられし町の風の盆
胡弓嫋々乙女らは舞う

註　なかにし礼が作詞した演歌が石川さゆりと菅原洋一により歌われている。

鎌倉の禅寺に建つ碑にありき
「男の顔は履歴書である」と
註　瑞泉寺　大宅壮一

鎌倉の小町通りの何処にか
通人集う酒場ありとう

ネッカーは眼下（まなした）にあり杳き日の
追憶（おもい）はアルトハイデルベルグ

中世を今に遺せる石だたみ
騎馬が駆けゆくローテンブルグ

麦畑チャペルの裏に小径あり
ゴッホ描ける幽（うすぐら）き小径

ゆくりなく寄りし書店に「川端」の
訳本を見きカルチエ・ラタンで

この先は来る日なからん懐しき
パリの舗道(いしみち)往きて戻りぬ

ファドとう哀しき唄聴く酒場かな
リスボンの夜は「サウダーデ」

海辺にて鰯を食みしナザレ湊
「暗いはしけ」の舞台とぞ謂う

註　ポルトガル、ナザレ港、アマリスロドリゲスの唄

「ここに地果て海始まる」と碑にありて
ロカ岬では嗚呼地球

註　ポルトガル国民詩人カモンエスの詩の一節

杖曳きてバッハの像にひたと寄り
しばし動かぬ老いし女(ひと)あり

註　ドイツ、ライプツイッヒ

古都プラハモルダウ川とカレル橋
そよ風に乗りスメタナの交響曲(うた)が

カリブ航(ゆ)きキューバかすめばその彼方
「老人と海」の光景(サイト)偲ばる

ユーゴとコクトーが賞でし「グランプラス」
囲む館は今も荘麗

註　ベルギー、ブリュッセル、グランプラス広場

紙透小太郎の獄中記

紙透　寛夫

前書き

豊島区東池袋三―一―三には、終戦後から昭和三十三年（一九五八）五月までの十三年間、戦犯（戦争犯罪人）収容施設の巣鴨拘置所―巣鴨プリズンがあった。その後は東京拘置所と名をかえ、一般受刑者が入所していたが、小菅刑務所に移され、昭和四十六年四月から翌年三月の間に、これらの建物は全部撤去され、すっかりその姿は消えてしまった。

そしてその跡地には、現在サンシャインシティーが建っている。

私の父、紙透小太郎(かみすきこたろう)は第五野戦憲兵隊副官をしていたため、戦犯として、この巣鴨拘置所（巣鴨プリズン）に収監されていた。長い間、父は獄窓で呻吟(しんぎん)し、家族は娑婆(しゃば)で辛酸を嘗(な)めていた。

ある日、私は父に面会するため、巣鴨プリズンを訪れた。正門入口はアーチ型のSUGAMO PRISONとなっており、その両側には二重の鉄条網がはりめぐらされ、門の左には鉄やぐらの

監視塔があった。機関銃を持った哨戒兵が私を見おろしていた。

受付を通り、面会室に入ると、太い鉄格子と、さらにその両面に細かい金網が張られていた。あれでは、蟻も通れないだろう。父が入ってくると同時に、自動小銃を肩にぶらさげた監視兵が後ろの方の席に腰掛けた。あれやこれやと、積もる話で、三十分の面会時間は、たちまちのうちに終った。監視兵が、

「ヘイッ」

と言うと、父は立ち上がった。

面会室を出る時、私が父を見送ると、上着の背中に、なんと、Pと大きくプリントされているのが目に付いた。父の後ろ姿を見た途端に、

(なんて、かわいそうに……悔しい!……)

私は涙をこぼしてしまった。Pとは囚人を表わす記号に間違いない。その後、毎月一回として、無慮数十回は面会に行ったのである。

いま、サンシャインは華やいでいるが、私はそのころを忘れたいので、あまり行かないようにしている。

昭和二十九年二月十日、父小太郎は減刑仮釈放された。家に戻ったとき、私は、

(どうして、戦犯にされたんですか)

と何度も聞こうとした。しかしその都度、

(父は厭わしい過去を忘れることはできないだろう。しかし私としては、そんな過去は少しでも忘れて欲しい。だから過去を思い起こさせるような事を聞いてはいけない)

と思い、とうとう聞かずに終わってしまった。

父は昭和二十一年七月から、翌年七月までの一年間、フィリピンのルパオ収容所へ、そして昭和二十二年七月から昭和二十九年二月までの六年七カ月間を巣鴨プリズンへ、合計七年七カ月(年齢でいうと四十三歳から五十一歳までの間)の長い間収監されていたわけであるが、その間、父は丹念に日記をつけていた。父の死後、遺品のなかに手記やその日記などが、いろいろと見付かった。私はこれらを読んで、父の戦中戦後の来し方や概要を、知ることが出来た。

その中の比島(フィリピン)のルパオ収容所にいた時の父の姿と、その後の巣鴨プリズンに入所してからの父の姿を、その獄中日記によって、しのんでみたい。文中の(　)内は筆者の注であり、また、続柄は、父小太郎との関係を示す。

第一章　フィリピン・ルパオ収容所の獄中日記

昭和二十二年(一九四七)二月十三日

判決の日

今日、マニラ米軍戦犯裁判所大法廷において、余(われ)等七名にそれぞれ判決あり

憲兵大佐　中村通則　死刑　絞首
〃　中尉　紙透小太郎　無期
〃　曹長　市橋重男　無期
〃　軍曹　笹倉林治　死刑　絞首
〃　軍曹　一條幸真　死刑　絞首
〃　軍曹　岡崎和明　無期
兵長　風戸文之　死刑　銃殺

公判開廷は一月二十四日から、約十五回開廷されたが、その結果遂に右の判決があったのである。即日、死刑囚人舎、無期以下有期刑囚人舎に、それぞれ収容せらる。ここルパオ収容所はマニラ郊外約五十粁南方の地にある。隣接して容疑者約五百名収容せられあり、逐次、マニラにて取り調べ、それぞれ起訴、不起訴せらるるものなり。

昭和二十一年四月十日、本事件により、セレベス島のマカッサル、マンダイに収容せられ、同年七月十七日、同地より比島マニラに押送、マニラ収容所に往復すること三度なり。通訳戸田氏、小田原の人、多謝。本日まで、マニラ法廷における判決者は死刑七十四名、内執行三十六名、無期以下八十一名、うち内地還送六十一名。

余等の判決がかく厳罰なりしは、隊長の根本方針を誤れるに基因する。すなわち軍司令部より命令の主張不確認に終わる点、憲兵なりし点、被害者が米軍搭乗員なりし点、被告人並び証人の証言申し立て一貫せざりし点、要は根本方針を誤りし結果に他ならず、有為の笹倉、一條、風戸

の極刑は余りにも残酷なり。今はただ再審減刑あるを希求するのみ。運命なる哉。

二月二十四日　月曜日

死刑執行。平川、横田、進、板井の諸氏。合掌。昨年十月二十八日を最後としありしが、今年に入りトップ、あゝ。

三月三十一日　月曜日

一、永田兄（紙透亀松・横浜）第一信。茂登子（妻・静岡県周智郡山梨町）第二信。
二、内地移送のうわさあり、来週中。
三、死刑執行。長浜、戸塚、加藤、大塚の諸氏。嗚呼。天皇陛下万歳を奉唱しつつ、悲壮なる哉。
（長浜　彰　東京都出身。憲兵大佐。銃殺刑。五十一歳）
長浜　彰氏の辞世
桜花南のはてに散り行くも　咲き還りては国を興さん
聖断無量停戦ノ勅　我捕投獄死迫
痛恨無限大和魂　笑登二刑壇一奪二漢魄一
（戸塚良一　静岡県出身。陸軍中佐）
（加藤　実　宮崎県出身。陸軍少尉）
辞世の歌

うつし世の覇者権勢のいたづらと　笑って死なん　大丈夫（ますらを）の友

（大塚則行　熊本県出身。陸軍少尉）

四月一日　火曜日

死刑執行。ボルネオ関係、海軍山口、菅原、田鋤氏。

山口氏以下、天皇陛下の万歳を三唱しつつ、従容として刑場に向かう。嗚呼、なんたる悪日ぞや。

（山口専太郎　京都府出身。海軍中尉）

（菅原亥三郎　山形県出身。海軍上等兵曹）

（田鋤清人　福岡県出身。海軍少尉）

四月五日　土曜日

一、風評によれば、明年三月より平和会議開催、秋終了後、戦犯者は一斉に釈放さるるならんと？

二、山梨の父へ通信を書く、第一信。（しかし、義父鈴木義平は、既に昨年死亡していた）

三、来月初旬、内地へ移送のうわさ頻（しき）りなり。

四月八日　火曜日

一、煙草（タバコ）喫し尽くし、本日をもって無し。明日より禁煙か。早く配給を希望す。同囚もほとんど無からんも、皆何（いず）れかから入手してくるは手腕なる哉だ。

二、明日からまた炊事当番か。入所以来三回目だ。稲垣氏からよろしくといわれたが、当方こそお願いする組だのに。まあ一生懸命やろう。

三、おお、今日は御釈尊様だ。寺の大玄先生は元気だろうか、ずいぶん老年になられたことだろう。

四月十五日　火曜日

一、入所　無期五名　現在員四十名

二、（南條正夫　宮城県出身。昭和二十二年九月三日マニラにおいて刑死。二十七歳）

南條中尉の親父（おやじ）作

鳥となりとんで行かなむすべも哉
　我子の心や　一目逢（あ）はむと
戦犯と消ゆる恨みはいと深き
　国の柱と思ひあきらむ
戦犯と嘲（あざけ）る人もあるならん
　知る人ぞ知る国の捨石
比島より帰る人ぞときくごとに

ちぢに心はくだけゆる哉
国のため身は砲弾にさらせども
思はざりけり戦犯の露

四月二十日　日曜日

茂登子へ四信発信。追憶に追憶を重ぬれども更に書き送るべきこともなし。社会は如何に我を見るも、妻（茂登子）のみは信じてくれるであろう。子供達も又しかり、かく信ずるとき、彼等の多幸を祈るのみ。

四月二十四日　木曜日

死刑執行　河野中将、三上少佐、藤井中尉の諸氏。合掌。
（河野　毅　東京都出身。陸軍中将）
（三上孝衛　東京都出身。陸軍少佐。三十二歳）
（藤井　一　広島県出身。陸軍大尉　三十八歳）

五月八日　木曜日

弁護士レビー、減刑に就き来訪、レビー、マーチン両氏連名の嘆願書をマッカーサー司令部及び比島、琉球方面最高指揮官あて提出済みにして、全員若しくは一部を除き、減刑確実性ありと。

レビー氏、近く米に帰国するとの事。

六月九日　月曜日

死刑執行　宇内中尉、吉田曹長　石坂伍長、何れも憲兵。合掌。
（宇内文次　山口県出身。憲兵中尉）
（吉田忠志　福岡県出身。憲兵曹長）
（石坂　巖　福井県出身。憲兵伍長）

六月十一日　水曜日

茂登子よりはがき五月二十六日付け、寛夫（長男、筆者）二信五月十七日付け受領。永一（甥、名古屋高射砲隊で）、重一（義弟、サイパン島で）、戦死の件。毅氏（始一義兄の）養子の件。叔父仙吉氏（東南海地震で）死亡。山梨の父二一・七・二八、病死。平八郎（弟、横浜）ペンキ屋に転向、厳しく変わるものなり。敏子（次女）は始一兄の許へ、淑子（長女）は見付（義母の実家）へ（食べていけないので、それぞれ、口数を減らすために預けられた）。寛夫の消息知りたし（筆者も、すでに市川市の始一兄に預けられていた。のちに、三女久代も取手町の末男義弟に預けられた）。

六月十七日　火曜日

一二一名のクリヤー内地に向け出発。

六月二十六日　木曜日

巣鴨拘置所移送のため、ルパオ出発、マニラ港に向かう。乗船十二時出発、十四時ごろマニラ到着、直ちに乗船す、船は米国陸軍用船アドミナル号二二、三八〇屯、速力二二節、優秀船なり、船艙兵室に収容されしかど敢えて苦痛なし。食事も兵食にして立食なり。明二十七日、マニラ港一一・〇〇出港、横浜港へ直行、七月一日に到着予定なりと。我等一行既決四十三名、大杉氏はマカッサル行きのため残留。ほかに容疑者七十余名。

（小太郎の手記の一冊に、つぎの歌が書き写してあった。この時、父は故国の土を踏まずして、散るであろう上官、戦友達にどんな感慨を持ったのであろうか）

比島の桜……死刑囚の歌

一、あゝ敗戦の秋の風　散るべき命永らへてマニラの湾に嵐吹き　虚偽と不正の裁き受け今じゃ獄舎の死刑囚

二、あゝ大丈夫の微笑は　芙蓉の雪か山桜　此の身は比島にくちるとも　我に誠の心あり　邪悪の栄えた　ためしなし

三　あゝカランバの夜は更けて　獄舎の庭に月させば　万歳の声残しつゝ、たゞお先にと戦友は行く　笑顔に武人の誇りあり

「海ゆかば　水漬く屍　山ゆかば草むす屍　大君の辺にこそ死なめ　かへりみはせじ」

四、あゝマキリンに雲わきて「ラグナ」の湖は騒がしけれど　虜囚の願ひひたすらに　故国におわす大君と我がはらからの栄えのみ

五、あゝ先だちし我が戦友よ　暫し待たれよ我もまた　神州日本の再建を　祖国の空に誓ひつゝ、君が代守る人柱

六月三十日　月曜日　曇

坐礁

〇一・〇〇ごろ、一大音響とともに坐礁、停船す。場所は横須賀沖ならんか、横浜着二時間半手前。いつ、巣鴨へ到着するやら不明。

七月三日

十八時巣鴨（拘置所）着

横須賀上陸→金沢→磯子→横浜→東京→入所十四号室に入る。同室者、伊藤〇三郎、市橋重雄、今田勝實、布施田金太郎、江藤博之の五氏、皆愉快な青年なり、煙草四本をもらう。部屋は約十二畳なるも便所あり、四囲鉄窓にして居心地まことに悪し。

（ルパオ収容所から、巣鴨プリズンに入所した日までの日記は、ここで終わっている。次に巣鴨プリズンでの獄中記が続いている）

第二章　巣鴨プリズンの獄中日記（その一）

七月二十四日　木曜日　晴

中島氏に面会者、面会のトップ。寛夫面会に来る。良い若者となった。身体も丈夫そう。山梨の方もどうやら元気でやっておるようだ。

八月七日　木曜日　曇

内地で戦った人は皆『終戦まで内地部隊の部隊長級以上の軍紀・風紀は悪かった。とくにある地方では、芸妓どもを陣地に連れ込んだ、そして下級者には戦え戦えと強要した。しかし、外地ではそんなことはなかったろうと信ずる』という。

外地から帰った、九死に一生を得た人達は皆『内地もそうであったか、外地も同様だ。むしろ、それ以上であった。戦争犯罪裁判ともなれば、命令者の軍司令官、参謀長、参謀は俺達は、そんな命令はせぬ、彼等が勝手にやったのだ、と逃げて、そ知らぬ顔という、真か偽か？』

みな、真実だ。

九月十九日　金曜日

村野の奥さんから来信。村野もまだ帰らぬようだ、俺と運命をともにするとは、よくよく可哀想な奴だ。思えば良い男ではあった。男らしい男、村野晋よ、しっかりやれ。

親友の妻　秋田の月は身にしむに
我を泣かしむ　便り来れり
近く出獄　飲みに行くぞよ　酒肴
支度せよと　我は書くなり

十月十日　金曜日

判決確定を達せらる。風戸に二十年、他は判決通り。（小太郎と同一ケースの裁判で、風戸文之兵長が銃殺刑から二十年に減刑）

十一月八日　土曜日

斉藤例三郎氏より来信、引き揚げ後の生活苦、同情。ラムネの配達をやっておるとの事。

十一月十日

刑死者南條中尉母の歌
御国に捧げし吾子なれど
思わざりけり　戦犯のつゆ
（ルパオでの日記の四月十五日に書いた人の母の作）

十二月二十五日　木曜日

クリスマス。KP（炊事当番）第五日目。昼食に、りんご、ようかんのご馳走あり、やや、平日と異なる。夜は音楽会、これも平凡感激なし。

十二月二十八日　日曜日

茂登子、久代九信を受信。市川の兄（始一）より補助金三千円の件。奥野山和子（姪）結婚の件。身体に変異ありと？

親切心のあると無いのと、頼まれても一時も延ばそうとして苦心する人、困るのを案じて陰になり陽になり援助してくれる人、兄弟でも様々だ。他人の心、推して知るべしだ、頼るは自己のみか。

（と、父小太郎はいっても、獄窓のなかにいては、なに一つ家族の生活難を救うことは出来ない。まして、自分は終身刑だ。ここからは生涯出られない。一縷の望みは、講和条約、そして戦犯の釈放しかない。一体、いつになるのだろうか。小太郎は、あれを思い、これを思い、心は千々に乱れていたと思う）

十二月三十一日　水曜日

午前中、石炭作業。午後休み、平日と変化なし。麻雀、本年百五回戦。南三局にて休戦、就寝。

昭和二十三年　元旦　木曜日

年改まるも、巣鴨の元旦依然として寒し。同室の高橋氏曰く「良き年となるを祈念せん」と、我も同感なり。

朝の献立。餅二切れ、みかん二個、きんとん、海老、里芋、人参の旨煮、蓮根、ごぼう、大根千切りの酢の物なり。酒好家の外山氏曰く「湯飲みに一杯の酒あらば可なり」と、我もまた同感なれど、敢えて酒を欲せず。朝食後、大西老人外山氏囲碁の打ち初め、のち麻雀一戦。昼食は小鯛、しらすの酢の物。夕は塩さけ、数の子、蓮根の酢の物汁。やや正月らしき馳走、されど『かんぴん』の無きを如何せん。夜映画。

（正月だからといっても、量が少なかったとしても、巣鴨の塀の外よりは、ずいぶん豪華である。筆者は父小太郎の食事について安心したが、同時にうらやましくも思った）

一月二日　金曜日

一、作業初め

二、面会者許可申請書提出。寛夫・始一兄・竹内（時雄、義弟）。

一月十六日　金曜日

斉藤例三郎氏より来信。何時に変わらぬ親切な人、利害を超越した親身の人とは氏の事だ。数通出しても返事もくれず、しかも、家族に温情も寄こせぬ、他人より劣る奴もいる。

二月六日　金曜日

中村通則、笹倉林治、一條幸真氏消露、嗚呼。二二・二二・二九。

（小太郎は同一ケースの裁判で、死刑の判決を受けていた三氏が、昭和二十二年十二月二十九日、マニラにおいて刑死したことを、この日、巣鴨で知ったのである）

（中村通則　熊本県出身。憲兵大佐）

（笹倉林治　富山県出身。憲兵曹長。二十八歳）

笹倉林治の遺書

前文御免、其の後何の変化もありません。私達裁判の再審も終り同一ケース死刑四人、内風戸文之君が懲役二十年に減刑、中村隊長、小生、一條幸真君が減刑なく残され、覚悟は出来てゐるもの、故郷に残る老母と女子供の行先が案じられてなりません。米軍搭乗員処刑事件に問はれし我々は、米軍のでたらめ裁判にては、公明な立場を認められる迄は死に切れない思ひで居ります。然し乍ら持って生まれし宿命と心静かに覚悟は出来て居りますから、母上様、私の亡き後御健在を御祈り致し、尚、公明な立場を必ず以て御天照様は明るみに出して下さり、必ずわかる事と確信して死に行きます。運命とは申し乍ら祖国日本の為に戦った我々が、而かも名誉の戦死を遂げ護国の鬼となるは此の上なき光栄なるも、戦犯囚人の汚名を着て死に行く此身、八つ裂きにされしよりもつらく死に切れず、然しいくらもがきても如何ともなし難く、母上の御永寿を祈りつつ。さらば。

嵐吹き桜の花は散り行くも
我が魂魄は国を守らん

（一條幸真　福島県出身。憲兵曹長。三十二歳）

一條幸真の遺書

拝啓時下降雪寒冷の候、父上始め御壮健の事と推察致して居ります。小生国敗れて異国の地に在りて皆様の幸福を御祈りして居ります。此度は再度故郷の地を歩むこと不可能の事と思ひます。元より覚悟の事故、将来の事に付き一筆申し上げます。

記

一、家督は弟康雄に相続願度事。
一、妻子は離婚戸籍削除の事。
一、長女、長男は、それぞれ康雄相続に支障なき様戸籍削除の事。
一、親戚、村内各位殿に宜しくお伝えの事。
一、和泉の家にもよろしく。

於　マニラ　幸真

父上様

（この二人の遺書は『世紀の遺書―巣鴨遺書編纂会』の六〇七ページと六〇九ページにそれぞれ収録されているものを転載した。なお、この本は当日から約六年後の昭和二十八年十二月一日に

発行されて、父小太郎も編集委員の一人に名を加えられている）

第三章　巣鴨プリズンの獄中日記（その二）

昭和二十三年　七月三日　土曜日

一、巣鴨入所一周年
二、死刑執行八名（巣鴨プリズンで）

八月二十二日　日曜日

戦犯死刑執行　二十一日午前下記十名嗚呼。（巣鴨プリズンで）、都子野順三郎、相原一胤、道下政能、頴川幸生、中島祐雄、平松貞次、川手晴美、木村保、吉沢国夫、村上宅次の諸氏。
（都子野順三郎　陸軍大尉。四十四歳）
（相原一胤　陸軍伍長。三十七歳）
（道下政能　陸軍曹長。三十歳）
（頴川幸生　海軍上等兵曹。三十八歳。家族七人は長崎原爆にて全滅す）
（中島祐雄　陸軍大尉。四十五歳）
（平松貞次　陸軍兵長。三十二歳）
（川手晴美　陸軍軍属）
（木村　保　陸軍軍属　三十歳）
（吉沢国夫　陸軍軍曹　三十歳）
（村上宅次　陸軍大尉）

十二月二十三日　水曜日

A級死刑執行。絞首刑を宣せられた左記七氏は、午前零時一分より三十五分の間、刑を執行せられた。場所巣鴨拘置所内死刑場。
東条英機　松井石根、土肥原賢二、広田弘毅、木村兵太郎、武藤章、板垣征四郎。横浜久保山火葬場で火葬。
東条英機　辞世（六十四歳）

あすよりは　たれにはばかるところなくミダのみもとで　伸び伸びと寝む

土肥原賢二　遺詠（六十六歳）

踏み出せば　狭きも広く　かわるなり　二河白道も　かくやあらなん

板垣征四郎　辞世（六十四歳）

大神の　みたまの前に　ひれふして　ひたたすら深く　罪を乞ふなり

昭和二十四年　一月二十七日～二月四日

支那（中国）より戦犯既決者二百五十一名、巣鴨入所、うち無期六十名なる由。（そのため）

部屋替え。6Bより2C11へ、同室五氏。

（巣鴨拘置所の監房は、三階建て六棟あって一階がA、二階がB、三階がCフロアーとよばれ、フロアーごとに部屋番号がつけられていた。したがって、小太郎は第二棟三階の十一号室に移ったと、いうことになる）

（処刑されたA級七人、若いBC級二十七人の計三十四人の最期をみとった巣鴨教誨師、花山信勝は、二月に辞職した。そして、六月に、大正大学教授の田嶋隆純が二代目教誨師となった。田嶋は、戦争犯罪という、あいまいな罪と……受刑者を前にして、

「私はみなさんと、ただ、お祈りするしか、なにもできない人間です」

と泣いて、受講者の前にひれ伏し、就任した翌月から、戦犯の助命嘆願運動をはじめたという。服役者たちから評判がよくて、『巣鴨の父』とあがめられた。小太郎が出所後、巣鴨関係をまとめたアルバムの一ページに、田嶋の福々しい笑顔の大きな写真があった）

昭和二十四年　五月三十日　月曜日

巣鴨劇場、こけら落とし。歌謡曲コンクール、浪曲劇、時代劇等盛り沢山。

（このころから、巣鴨プリズンの所長がハンドワーク大佐から、プラダリック大佐にかわり、大幅に自由が保障されたようである。映画も野外や獄棟廊下ではなく、約三百人が収容できるこの劇場で上映されるようになり、のちには石井漠舞踊団や、渡辺はま子、淡谷のり子ら歌手、笹川

鎮江の琵琶と詩吟、三門博、東家浦太郎、柳家金語楼といった浪曲師や落語家も慰問するようになった）

昭和二十四年　六月九日　木曜日

笠間高雄君、和蘭戦犯として、三月一日に死刑執行せられたと新聞は報じた。

（笠間高雄　千葉県出身。憲兵曹長。昭和二十四年三月一日、クーパンにおいて刑死。三十二歳）

笠間高雄の最後の手紙

拝啓　いよいよ永別の秋が参りました。私は明三月一日の朝六時頃南の果チモール島クーパン郊外の刑場に於て十名の射手により銃殺され短い一生を終ります。

昭和二十三年六月二十三日蘭印軍々法会議より死刑の判決を受けて以来、八カ月余兵営内の独房に於て苦しい生活をして居りましたが、二月二十七日の朝八時頃係官が訪れ、四十八時間後の三月一日朝刑の執行をする旨申渡された次第です。―中略―

戦争間自己に与へられた任務遂行上やった事ですし、帝国の軍人として又日本人として、私は少しも愧づる点はありません。

日本人らしい態度で笑はれぬ様死んでゆく覚悟です。只残念なのは、戦争間不幸死所を得ず、終戦三年半の現在死することですが、総べて私に与へられた運命と申すべきでせう。

母上並お前に対しても苦労のみさせ何等報ゆることなく、先立つ私を何卒許してくれ。誰を恨

むこともない。敗戦といふ国家の重大時に際しての礎石なのだ。大東亜戦争は敗れたりと雖も、決して無意義なものではないと信ずる。小塚原で三十歳の若い身を以て斬罪に処せられた吉田松陰先生などを考へたら、喜んで死んでゆくべきだと思ふ。国家のため死することは戦争中でなくとも変りない。

決して悲しまず強く生き、母上に孝養し、洋子を立派に育てて欲しい。私には何の財産とて無く、毎日の生活にも苦しんで居ると思ふが、生活の為にはどんな手段方法に依るも差支えないから、母と洋子の幸福を目標として、自己の信ずるまゝに進んで欲しいと思ふ。

ただ元憲兵の妻として、世間から笑はれぬ様身を持して呉れる様希みます。

判決を受けて以来、現在迄、毎日皇室の御繁栄と国家再建の早からんこと、並にお前達の幸福を祈りつつ、死生一如の死生観に到達する如く、毎日信仰の生活を続けて参りましたが、お蔭で死を前日に控えた今日、何等平常と変らぬ心境で、此の最後の便りを書いて居ります。

又一部のオランダ人並にインドネシヤ等も我々の立場に非常に同情し、戦争に起因する事柄とは言ひ乍ら、誠に気の毒だと言って色々親切にして呉れ、且慰めてくれたのが非常に嬉しかった。

希望事項あらば申し出よとの話だったので、死刑の現場に於て、

一、国歌の奉唱　二、陛下の万歳三唱　三、目かくしと施縄をせぬこと

の三項目を希望したら許可された。其の他、タバコ、マッチ、ウィスキー、バナナ、菓子、香水等を若干宛希望したら、すぐ許可されました。又此の紙、封筒も総て蘭印軍側からくれたのです。

昔の陸軍用紙は兼々遺書用として、自分で準備してをったものです。明朝私達二名が死んだら、クーパン在住のキリスト教徒の一部の人達が集まりお祈りをした後、私達の死体を埋葬して呉れ、キリスト教式の墓標も建ててくれるとの話です。申し遅れましたが、私も二年前精神的に苦しみを無くしたいと思ひ、勧められる儘にキリスト教（新教）宣教師の教へを受けて居りましたが、信仰は、何の宗派に依らず良いものだと思ひます。私の法事は昔の仏教で可。

静子並に洋子の宗教は、自由意志で良いと思ふものを信仰して下さい。

共産勢力が支那に入り、蔣総統がアメリカに亡命したと言うラジオニュースを死刑執行の通報を受けた夜、内密で話して呉れた人がありますが、東西両勢力の間に於ける祖国の前途も益々多難だと思ひます。

御厄介になった人の中でも、置村さんは絶対忘れられぬ人です。私が死ぬ時、着用する白褌（ふんどし）、猿股（さるまた）、ワイシャツ等、総て置村さんから頂いたものですし、収容所では私を弟の如く面倒を見て呉れた恩人です。——中略——

サアそれでは時間も迫ったから、此の位で私の一生の最後の鉛筆を置きます。亡き後の事は宜しく頼む。私はお前が遺志を守り立派に生きることを信じて居る故、もう細部に関しては言ふ必要がない。

お母さん、静子、洋子、永久にさようなら。南の果チモール島に於て永遠に幸福を祈りつづけます。

辞　世

再建の早きを祈りはるかなる
　南の果てに我は散りゆく
七度も生れ替りて国の為
　尽す心を紅に染め逝く

笠間高雄

笠間静子殿

（この遺書は前述した『世紀の遺書』の一七四～一七五ページに収録されているものを転載した）

第四章　巣鴨プリズンの獄中日記（その三）

昭和二十四年　十二月三十一日　土曜日

二十四年、良くなかった。この一年も無意味に過ぎた。サア、来年はどうだろうか。新聞は盛んに講和は明年七月以降あるだろうと報じて居る。サテ、我々の釈放は明年早々朗報があれば、先ず大丈夫であろう。巣鴨日記も中途半端となれば幸い、否、是非そうならなければならない。和蘭戦犯も七百余名、一月十二日頃には巣鴨へ送られる様子だし、先ず来年は明朗な年となるだろう。では来年を待とう。良き年よ来れ。

昭和二十五年　十二月三十一日　日曜日

家族（は）、敏子を除き、他は元気。殊に寛夫の努力により、大いに生活も活気を呈しあり。又、市川（始一）兄、末男（弟）達の同情により、来年は家屋も出来るらしい、余等の出所も先ず、来年中にはどうにかなるであろう。

昭和二十六年　十二月三十一日　月曜日

巣鴨の二十六年も将に暮れんとす。部屋部屋からは、ガラガラポンポンと麻雀の音、騒々しく、自棄に三十一日を送らんと聞こゆ、あるいは碁にラジオに。どんよりと曇った一日は、部屋の空気を尚、悪くするため厭な日だ。来年よ、良い年来たれ。悪い年は早く去らなければならない。

昭和二十七年　四月二十八日　月曜日

講和（条約）発効したけれども、巣鴨の空は暗雲に覆はれている、どうなることやら。

（条約発効後、巣鴨プリズンの名称は巣鴨拘置所にもどり、日本側に管理権は移譲されたが、監督権は依然としてGHQ―連合国最高司令官総司令部にあった。面会室の金網は取り外され、収容者の協力で建てた病棟には、日本赤十字社から看護婦を入れたり、慰問団を招いたり、いろいろと改善された。が、しかし、肝心な戦犯の釈放は、遅々として、はかばかしくなかった）

昭和二十七年　十二月二十六日　金曜日

今年も、あと五日を残すのみ。五月には、茂登子の大手術で、えらい目に遭った、本人ばかりでなく、子供達まで。来年は、少し変ってくれればよいが。寛夫も二十四歳になった。昔流ならば、色々考えて居るのだろうが、俺が出なければ、どうにもならない、気の毒だが仕方がない。

昭和二十八年　七月二十二日　水曜日

比島（モンテンルパ）より戦犯者全員（一〇八名と加賀尾秀忍教誨師）帰国。無期組だけ巣鴨入り。他は横浜で解散。

（歌手渡辺はま子が歌った『ああモンテンルパの夜は更けて』は、獄中で、死刑囚代田銀次郎憲兵中尉が作詩し、同じ死刑囚伊藤正康大尉が作曲した。この歌の流行とともに、日本国内の助命釈放運動は、急に拍車を加えていった。最近、もうこの歌はほとんど聞かれないが、歴史のひとこまとして、次に掲げておきたい。

モンテンルパの夜は更けて
つのる思いにやるせない
遠い故郷しのびつつ
涙にくもる月影に
優しい母の夢を見る

燕（つばめ）はまたも来たけれど
恋しわが子はいつ帰る
母の心はひとすじに
南の空へ飛んで行く
さだめは悲し呼子鳥

モンテンルパに朝が来りゃ
昇る心の太陽を
胸に抱いて今日もまた
強く生きよう倒れまい
日本の土を踏むまでは）

昭和二十八年　八月八日　土曜日

マヌス島（濠州関係）より戦犯一四七名帰国、巣鴨に入る。二十時頃。

（昭和二十八年も、巣鴨拘置所からは一月に二名出所。三月に五名、四月に十一名の仮釈放。六月に三十一名が釈放されたが、このように五月雨釈放のうちに終った）

昭和二十九年（一九五四）　二月四日　木曜日
仮釈放の内命あり。（裁判が同一ケースの）岡崎和明、風戸文之両君も、ただ残念なのは市橋重雄君のないのが、本当に口惜しい。全部で十一名。

昭和二十九年　二月五日　金曜日
洗濯やら荷物の梱包（こんぽう）。引続き、引き揚げ援護庁からの係来所、未復員などの手続きを了す。

昭和二十九年　二月七日　日曜日
橋本〇一（マイ明）君に巣鴨最後の理髪をしてもらう。今日は一日中よく寝た。

昭和二十九年　二月八日　月曜日
午前九時三十分、法務省川添事務官来巣、十日九時出所と決定。一棟挨拶（あいさつ）回り。

昭和二十九年　二月九日　火曜日
仮釈放決定日。各棟へ挨拶回り。荷物最後の片付け。

昭和二十九年　二月十日　水曜日　晴
九時出所式、九時三十分出所。

寛夫、久代、末男、茂登子、敏子、幹郎（三男）、忠（四男）、平八郎、巣鴨まで出迎えてくれた。十一時三十分弘明寺（ぐみょうじ）（横浜市）着。神奈川新聞が来て、いろいろ聞いて記事にした。十四時、家族全員八名の記念撮影。後、永田へ行き母（紙透ソメ、八十八歳）に挨拶。帰って平八郎・いつ子（夫妻）達と会食。二十三時、帰宅の一夜を過ごす。
（この日で、小太郎の長い長い獄中記は終わっている）

第五章　その後の父小太郎

それから四年後の、昭和三十三年五月三十日、最後のBC級戦犯十八名が出所し、巣鴨拘置所は閉鎖された。

前述した『世紀の遺書』によれば、連合国によるA級のほか、米国、英国、濠州、和蘭、中国、仏国（フランス）、比国（フィリピン）七カ国の、それぞれ異った軍法によって、大陸、南方諸島五十余カ所の法廷で、慌ただしく、ずさんに、多くは理不尽に裁判された。そして、戦犯の汚名を着せられた日本人は四千人、戦犯死没者は、一、〇六八名にのぼった。

広島・長崎への原爆。東京ほか諸都市にわたっての非戦闘員と、その住居に向けられた無差別爆撃など、大量の殺戮（さつりく）をした戦勝国側は一人の戦犯者も出さなかった。これは、うなずけない。

つまり、戦勝国は、敗戦国民に報復裁判をした、と言われても仕方ない。

その後、父小太郎は生涯、弘明寺町で過ごし、平成四年、八十九歳にて没した。近くにある弘

明寺観音（坂東巡礼第十四番札所）の公園と、大岡川の川端の桜は毎春、見事に咲く。筆者は、ここの桜を見ると、戦犯死刑囚伊庭治保元陸軍大尉（二十九歳）の遺書のなかにあった次の一句を、なぜか、思い浮べる。

散る桜　残る桜も　散る桜

あるキリシタン迫害

――若き学僧の思い――

鍋屋　次郎

慶長一七年（一六一二）三月、ここ数年キリシタンを黙認していた江戸幕府は、突如としてキリシタンに対する弾圧を強め、江戸、駿府、京都でキリシタン迫害の嵐が吹き荒れた。

ことの起こりは、三年前の慶長一四年（一六〇八）、肥前日之江城主有馬晴信が家康の了承の下にポルトガル船マードレ・デ・デウス号を撃沈、これに対する恩賞として有馬氏は旧領肥前三郡を元通り自分に戻して欲しかった。これを知った老中本多正純の与力岡本大八が、幕閣に働きかけると言って密かに有馬氏より多額の賄賂を取った。それを信じた有馬氏の行動から江戸幕府の知るところとなり、調べて行くと、有馬晴信も岡本大八もキリシタンであることが判明、更に、有馬晴信は時の長崎奉行長谷川左兵衛からも不穏な人物と睨まれていたことも重なって、結果として重罪に処せられ、有馬晴信は流刑地の甲斐で死罪、岡本大八は火刑に処せられた。

この事件は、策謀者二人がキリシタンであったことから、驚いた家康はお膝下の江戸・駿府でのキリシタン調査を行なった結果、江戸城内大奥の中に女性キリシタン（洗礼名ジュリア他数

名）がいることが判明、ジュリアには棄教を命じたが拒否されたことから伊豆大島に配流。このように安心し切っていた江戸城内にもキリシタンがいたこと、加えて、女性の身で、全てを捨て信仰を守った強さを見せつけられたことから、キリシタンへの恐怖を感じた家康は、江戸は勿論のこと、彼の居城である駿府、及び京都でのキリシタン弾圧を厳命、その他、領主自らがキリシタンであった肥前有馬領内での徹底した弾圧を行なわせた。

家康の居城駿府で禄高六千石を有していた小笠原権之丞は、六年前に洗礼を受け（洗礼名ディエゴ）キリシタンとなっていた。彼は城下に天主堂を建設、バテレン（司祭）とイルマン（修道士）各一人を常駐させ布教していた。当時駿府には、小笠原家中の三百人を初めとして千人近いキリシタンがいたと云われている。この突然の弾圧に対して小笠原権之丞は、身分・領地よりも信仰を守ることを選んだ。そのため直ちに、彼の領地は没収され追放の身となった。家の解散にあたっては、小笠原家の全財産を分配して家中一人一人に別れを告げ、夫人と二歳になる子供と三人で西国に下っていった。

この小笠原家の家中に木下喜作がいた。彼は主家の解散後、安倍川奥の人跡希な山中に樵小屋を建て、そこに隠棲した。駿府城下でのキリシタン弾圧は、家康の居城下でもあることから特に徹底していて、一人を捕まえれば、知っているキリシタンの名前を言わせるという「芋蔓式」の摘発を行なった。喜作は時折、夜陰に紛れて駿府城下に出掛け、迫害下の信徒の情報を得ていた。

そしてこの樵小屋を、逃れてくる信徒の一時の隠れ家として提供していた。

バテレン・シモンは、弾圧の直後は駿府城下を離れ、漁村御前崎の信徒の家に隠れた。しかし、駿府城下の信徒のことが気にかかり、身の危険を顧みず、喜作の樵小屋にやってきて、雨の夜に限って駿府城下に行き、密かに信仰を守り続けている信徒への訪問を始めた。

しかし、いつの間にかこの樵小屋も役人の知るところとなり、危険を感じたシモンと喜作は信仰に関係する物の殆どを山中に埋め、お互いに京部に出ることとし、京都では、キリシタンに理解がある伏見の古着問屋越後屋を連絡場所とすることを申し合わせ、別々の道を通って東海道を上ることとした。

喜作は東海道を上って、掛川から秋葉街道を進んで、戸綿から太田川を渡って遠州森町に入ろうとしていた。

太田川を渡って土手の上に立つと、やや西から北に連なる山並みは、京部洛北を思わせる何とも言えない優雅な静けさを漂わせ、そこに流れる太田川の清流とその山並みとの調和が、まさに遠州の小京都と云われるに相応しい景観を呈している。

二町ほど先に、小高い山を背にして、朱塗りの大門が晩秋の夕日に輝いている。天台宗八形山蓮華寺の山門である。喜作は土手の端に腰を下ろし、その大門を眺めながら一時の休息をとった。既にこの時刻になれば、秋葉山参詣の旅人の姿もなく、彼の目の前には静かな秋の夕景が広がっ

ていた。

喜作は三カ月前の雨の夜、突然樵小屋を訪ねてきた蓮華寺の学僧沿海のことを考えていた。その夜は雨風が強く、シモンは駿府城下の信徒の家を訪ね歩いていて、喜作は、小さな灯の下で、シモンの口述を書き綴った旧約聖書イザヤ書五十三章を読んでいた。ゼスズ・キリストについての預言書である。

「駿府から捕り手が来た」

と思い、急いで灯を吹き消し息を潜めていると、気配から、捕り手ではなく、旅の道中困っている人のような感じがした。用心深く護身用の四尺余りの「棍棒」を手にして入口をそっと開けた。そこにはずぶ濡れになっている若い、いかにも修業中と思われる、しかし品格を感じさせる僧が丁寧に頭を下げて立っていた。見れば、僧衣は云うに及ばず下着までずぶ濡れ。兎に角小屋の中に招き入れて、挨拶しようとしている僧に自分の着古した下着を出して着替えさせた。

聞けば、この僧は昨年春、喜作の旧主小笠原権之丞に会って、キリシタンのこと、その教え、バテレンが万里の波濤を乗り越えてやってくる死を恐れない布教活動、そして我国の庶民の末端に至るまでの、身分の上下を分け隔てしない優しさ、等を聞いたことがあった。その時に小笠原権之丞は、

「沿海様、私も貴方様もお互いにお日に掛かることは立場上容易でない。キリシタンのことがお知りになりたければ、当家中の木下喜作を訪ねられるが良かろう。彼はキリシタンとして、また

家中の者として最も信頼できる人物の一人です。私からも木下に申しつけておきましょう」

と教えられ、喜作のことはずっと沿海の頭の中にあった。昨日、駿府城下で偶然喜作の居場所を聞き訪ねてきたのであった。沿海は喜作の差し出した水を一口飲んでから、

「木下様、拙僧は天台の修業中の身。もしも、キリシタンのことを学びたいと言うことが表向きになれば、理由の如何を問わず破門されるでしょう。しかし、天台の祖、伝教大師最澄はその昔、一部特権階級の学問であった仏教を多くの人を救う教えと考え比叡山に入りました。しかし、今日ではキリシタン・バテレンが一般庶民の魂の救済に、死を恐れず活躍しています。是非、拙僧にキリシタンのことを教えて戴きたい。また、機会を見てバテレンにもお目に掛からせて欲しい。ずっと以前、織田信長が行なわせた様な仏僧とバテレンの論争を行なうことが目的ではなく、キリシタンの活動の精神的根源であるところの教えを知りたいのです。同じ宗教者としてキリシタンの真髄を知りたいのです」

と、朝まで真剣に語り続け、喜作が作った粟粥を美味しそうに食べ、まだ半乾きの衣類を身にまとい樵小屋を後にしていった。その時、彼が残していった「天台宗八形山蓮華寺学僧沿海」の名が記されている書状は、蓮華寺山門通行許可証の役目をするものだった。

喜作はやがて立ち上がり、山門にやって来た。山門を潜って暫く歩くと門番小屋があり、

「どこへ行くのか」

と問われた。喜作は丁重に沿海の書状を差し出して、

「はい。お召しにより沿海様の僧坊に参りたいと存じます」

と言うと、門番はチラと喜作に目をやり、差し出された書状に目を通した。そこには、
「この者は、世俗の中にあって天台の教えを熱心に学ぶ喜作と申す者である。訪ね来た場合は拙僧の僧坊までご案内あれ」
と書かれている。その書状を喜作に戻しながら、門番は沿海の僧坊への行き道を丁寧に教えてくれた。奥へ行くと荘厳な本堂と、見事な鐘楼があり、そこを右に折れて裏山に出て、小さな沢を少し下ると前方林の手前に素朴な造りの僧坊が目に入った。沢の中の石の上を、小さな沢蟹が動いていた。
僧坊は杉木立ちの入口にあり、着いたときは既に日は西に落ち、山の冷気と共に夕闇が迫りつつあった。入口に立って声を掛けると、
「おー」
と言う声と共に沿海が顔を出した。喜作の樵小屋で会った沿海とは見違えるほど、明るい風貌の中に品格を備え、いかにも、「名僧知識」と言った感じであった。沿海は、突然の喜作の来訪にも拘らず大変喜んで招き入れた。
「良く来てくれた。暫くここに留まり愚僧の相手になって欲しい」
と笑顔で言ってから自ら茶を入れて、
「喜作さん、疲れたでしょう。あの時は、お世話になりました。今夜はゆっくりお休みなさい。明日からいろいろと教えて戴きたいことがあります。明日、早朝勤行の時に、愚僧から貴方の宿泊を届けておきます。食事はここで戴くことにしましょう」

と言って、その後は暫く喜作が、駿府でのキリシタン弾圧の様子や、江戸での凄まじい取り調べと仕置があったことなど話し、僧坊の小部屋で薄い蒲団に包まって横になった。
喜作は沿海の僧坊に十日間滞在した。沿海の質問はキリシタンの本質を問う厳しいものであった。例えば、
キリシタンの神はいつから存在したのか？
キリストが十字架に架かって殺されたのは何故か？
キリシタンは、十字架に架かった犯罪人を如何なる理由で神と崇めているのか？
パライソ（天国）とはどんな所か？
その他まだまだあり、沿海は特に、我国でのキリシタン迫害に対して、阿弥陀キリシタンの神は救いの手を差し伸べないのか、それにも拘らず信徒が命をかけて信仰している強さはどこから来ているのか、など色々な角度から鋭く質問し、喜作は、十分どころかほんの少ししか答えが出来ない自分に恥じていた。
この八形山蓮華寺は慶雲元年（七〇四）文武天皇の直願によって行基菩薩が開創したもので、天長八年（八三一）、後に比叡山延暦寺第三世座主となった慈覚大師の頃、一山三十六坊を備え、郡には希な名刹であった。
沿海は延暦寺から派遣された学僧であり、来春には延暦寺に戻り、更に上の学問を究めること

となっていた。延暦寺には彼の親しい学僧の秀慶もまた、初めて出会った異色のキリシタンに魅かれ、何とかその本質を知りたいと思っていた。二人とも天台宗の世界では究めて優秀な学僧で将来を属望されていた。従って、彼らがキリシタン探究についての情熱を持っていることは、天台宗組織の中では誰も想像すらしていなかった。

別れ際に、沿海は、

「喜作さん、自分は来春には延暦寺に戻らなければならない。そこには同輩でキリシタンについて探究している学僧秀慶がいる。ここに書状を書いたから、これを持って、バテレンを連れてきて戴きたい。出来れば貴方が尊敬するシモン師をお願いしたい。延暦寺は僧が大勢いるから誰に見られるか分からない。人目に付かない場所を用意するので、前もって連絡して下さい」

と言って書状を渡した。

翌年五月、喜作は京都にいた。

沿海の僧坊を出てから、彼は駿府でのキリシタン狩りとも言うような嵐が鎮静化したのを見定め、京に上り、かねてシモンから教えられていた京都伏見の古着問屋越後屋に身を置いていた。

越後屋主人は、旅の途上発作的に疝痛を起こし、旅籠で痛みに苦しんでいたときに、たまたま同宿していたバテレンから薬を貰い、やがて痛みも治まり帰宅することが出来た。聞けば、その

バテレンは遠い南蛮の自国を出るときに、彼自身の身を守るために大切に持っていた薬であった。感激した越後屋主人はその後、その恩に報いるため何度かバテレンを自宅に招き、路銀を調達したり、宿泊させたり、表面に出ることなく裏で援助を続けていた。今、このような迫害下においては、現代風に言えば、地下組織のアジトでもあり、情報拠点としての機能も果たしていた。

京部でも、キリシタン弾圧は益々激しくなっていた。

これは、幕府のお膝下の江戸城内からキリシタンが発覚したこと、加えて幕府に強い影響力を持つ高僧の圧力があったことによるもので、慶長十八年（一六一三）十二月には京都所司代に対して京都在住のキリシタン名簿作成を命じ、また翌年、慶長十九年（一六一四）一月二十七日には、新たにキリシタン禁令を発し、その内容は、全国諸大名はその領内にいるバテレンとイルマンを尽く長崎に送り、領内の天主堂は全て破壊し、キリシタン信徒は全て棄教させよ、と言うものであった。

これらの幕命を受けた京都所司代板倉勝重は、伏見、大阪、堺の三奉行に対して、その命令を忠実に実行し、信徒で棄教しない者は死罪とする方針で対処するよう厳命した。

この命を受けた伏見奉行所は直ちに伏見天主堂を閉ざし、キリシタンと目される家を虱潰しに探索を行ない、家の中からロザリオや十字架、またはキリストや聖母マリアの肖像画などが出てくれば、家族全員がキリシタンであると断定し、その場で棄教の証文を書くことを迫り、その場

で書かないときは、一日の猶予を与え、それでも書かないときは、奉行所に引き立てて拷問を加えた。

伏見天主堂にいたバテレン・オルガチーノは、幕命に従って長崎に行けば生命は安全であったが、伏見天主堂に連なるキリシタン信徒を見捨てることが出来ず、かねてキリシタンに好意を寄せていた堺の豪商播磨屋に身を隠した。

越後屋に身を置いている喜作は、堺のオルガチーノと伏見キリシタン信徒の間の連絡を一手に引き受けていた。

キリシタンの「芋蔓式探索」によって、伏見の町は恰も死の町のような様相となり、夜は全くの闇であった。その中を、越後屋の裏木戸へ、伏見の指物職人留吉が喜作を訪ねてきた。何事かと出てみると、

「喜作さん、大変なことになった。今日夕方、奉行所の役人が三人来て、『お前達はキリシタンだ。証拠は挙がっている。白状して棄教証文を書け』と迫られ、私と女房はやむなく、形の上のことと自分に言い聞かせて書きました。誰かが告げたのですね。しかし、その後で『お前の知っているキリシタンの名前を言え。言える筈だ』と言われたのですが『知りません。知らないものは書けません』と拒むと、その場に居合わせた娘、十五歳になるお袖に手を掛けて『明日までに二人以上の名前を書いておけ、それまで娘を預かる』と言って、泣き叫ぶ娘を連れていきました。私も、女房も半狂乱になってお役人様にすがりましたが連れて行かれました。私たちはたとえ殺されても、同じ信仰を持った方々の名前は言えません……。お袖を取り返す方法はないでしょうか」

と涙を拭いながら語った。黙って聞いていた喜作は、言葉が見当たらず、

「留吉さん、祈りましょう」

と言って短く祈ってから、

「留吉さん。こうしましょう。既に奉行所に連れて行かれたり、貴方がたのように便法で棄教した人の名前を三人分書いて、それを持って明日朝奉行所に行ってください。ゼスズ・キリスト様もそれならば許してくださるでしょう。そして娘さんを返して貰ってください。その時、奉行所のお役人が、これでは駄目だ、と言ったときは、それ以上は知らない、と言い張りましょう」

と言って、喜作が知っている三人の名前を書いて渡した。留吉はそれを押し戴く様に受け取って、

「喜作さん、娘が無事でいるように祈ってください」

と頭を下げて、外の闇の中に消えていった。

留吉が帰ってから、喜作は余りの酷さに一人で奉行所に娘を取り返しに行きたい衝動を感じて、怒りに震えていた。しかし、就寝前にはいつもの静かな祈りに加えて、お袖の無事も祈ることが出来た。

翌朝、留吉は奉行所に出掛け、お袖を取り戻すことが出来た。奉行所も、留吉夫妻が棄教証文を書いたこと、既に奉行所が知っているキリシタンではあるが三人の名前を書いて来たことを認

めて、お袖を返したものであった。

その日昼前には、留吉の娘お袖が昨夜奉行所に連れて行かれたことがキリシタン信徒間に伝わり、衝撃は大きかった。噂の中には、お袖が犯され傷物にされて帰ってきた、と言う尾鰭までついていた。

奉行所としては、キリシタン信徒の間に強烈な衝撃を与えたことで、お袖を連行した目的は達したものと満足していた。

年頃の娘を持った信徒は動揺した。喜作達がバテレンと共に奥比叡に隠れ家を用意したことを知っている信徒達は、喜作の所へ、娘をそこへ匿って貰うよう頼みに来た。

翌日には、喜作は通称奥比叡と言われる所に用意した藁葺小屋に、伏見のキリシタンの娘二人を匿った。小屋は五棟出来ていて、一棟に五人まで収容出来る。資金は全て越後屋が出して建てたものである。

そこにはシモンが常時滞在していて、避難して来た信徒を助けながら、朝夕は勿論、昼も祈りと学びの時を過ごし、恰も往時のセミナリヨ（神学校）の再現か、と感ずるような充実した日々を過ごしていた。

駿府でもそうであったように、伏見でも一通りのキリシタン狩りが終わると、街は活気を少し

ずつ取り戻していた。棄教証文を書かなかった信徒も、伏見奉行所単独の計らいで、二度とキリシタン信仰をしてはならない、と言う説諭で釈放された。棄教しなかった者について京都所司代板倉勝重の「死罪」の命令は、伏見では実行されなかった。伏見奉行所役人も、意識して血の殺戮を避けたものである。しかし、見事な洋式建築であった伏見天主堂は既に取り壊されて跡形もない。

信徒の娘達も、全員奥比叡から自宅に戻っていた。

この一時的とも言える無事平穏な時、シモンと喜作は比叡山延暦寺の学僧秀慶に連絡を取り、秀慶と沿海、シモンと喜作の四人は、比叡山から更に奥に入った廃寺に籠もった。と云うのも、秀慶にしても、沿海にしても、バテレンと会っていることが露見すれば、天台からの破門は歴然としている。天台の組織は絶対に認めない。あくまで内密な個人の学究であった。

約十日間、この廃寺で、先に沿海が喜作に質問した事項を中心として、二人の学僧の質問に対して、難解な言葉は喜作の通訳でシモンが答えると言う形で行なわれた。内容は宗教上の神仏概念の違い、キリシタンの人生観・価値観、死後の世界観、キリシタン教理の本質などで、連日の様に夜を徹して続けられた。

この学びを通して、お互い宗教者としてのありかた……万民救済……の点で一致した。それだ

けに二人の学僧は、バテレンが、自己を犠牲としてその為に尽くす行動の自由を持っていることに羨望を禁じえなかった。

その年の秋、慶長十九年（一六一四）九月には、京・大阪などから長崎へ集められたバテレンやイルマンなど百四十八人は、マニラやマカオに追放になった。その中には高山右近も含まれていた。しかし、京・大阪には潜伏しているバテレンも何人もいて、極秘に連絡を取りあっていた。堺の播磨屋に身を潜めているバテレン・オルガチーノもその一人である。弾圧の嵐が治まると、キリシタン達は互いに励まし合い、密かに連絡を取り合った。京都所司代板倉重勝はこれを見逃さなかった。キリシタン情報蒐集のため、新たな手段として、伏見、大阪、堺の三奉行に対して、「キリシタン情報を提供し、それによって捕縛できた場合は、身分の上下に拘らず報奨金を与える」旨の高札を立てることを命じた。

高札には、バテレン　銀二十枚、イルマン　銀十枚、キリシタン　銀三枚　と書かれていた。

伏見の越後屋と堺の播磨屋との間を何度も往復し、夜になると市中に出没している喜作は、見界隈に屯している無頼の輩に睨まれていた。と言うのも、喜作は旧小笠原家中では五指に入る剣の達人であり、奥比叡からキリシタンの娘達を連れ戻して帰る途中、無頼漢数人に囲まれ、と絡まれたとき、持っていた六尺余りの樫の棍棒で七人全員を叩き伏せてしまったことがあった。

堺の播磨屋も伏見の越後屋も、巷ではキリシタンに関係があると噂されていたが、奉行所に対して相応の儀礼は欠かさなかったので、証拠がない限り奉行所は立ち入らなかった。

ある夜、伏見ではいち早く棄教した、元キリシタン信徒の小間物屋八蔵が喜作を訪ねて来て、

「喜作さん、もう一度キリシタンに戻りたい。バテレン・オルガチーノ様に執り成しをして欲しい」

と頼みに来た。喜作は、八蔵がどこまで本心で言っているのか色々と質問をした。八蔵があまりにも熱心に頼むので、執り成しを承諾した。

ところが、喜作に恨みを抱く無頼漢の一人、通称カラスが喜作のところに出入りする人間を見張っていて、越後屋裏木戸から出てきた八蔵に、

「おい、お前は今、越後屋にいる喜作とか云う者に会ってきたのか。お前もキリシタンだろう」

と凄んで睨みつけた。胸倉を摑まれた八蔵は怯えて言葉が出なかった。睨み続ける相手の形相に恐れをなし、

「喜作に会ってきた。俺はキリシタンではないが喜作はキリシタンだ」

と言ってしまった。カラスは、ついでに越後屋についても聞いたが、八蔵は知らないことでもあり、

「知らない」

と答えた後、カラスは八蔵の住まいを聞き出し、
「おい、小間物屋。今から後は、俺が呼び出したら必ず出てこいよ。いいな」
と念を押し、やっと八蔵を放した。

無頼漢達はカラスの報告を聞いて、
「喜作はキリシタンである」
と奉行所に訴えるだけでは、うまく行っても銀三枚にしかならない。バテレンを一人でも加えればそれに銀二十枚が加わる。喜作の行動から、越後屋か播磨屋にバテレンが潜んでいるに違いないと、目を付けていたが証拠がない。
しかし、無頼漢達はカラスを使って、
「堺の播磨屋と伏見の越後屋にバテレンが潜んでいる。越後屋に寄宿している喜作と言う男が、その間を連絡に走っている」
と、伏見奉行所に訴えさせた。
伏見奉行所も、何か臭いとは思っていたが、証拠がないので踏み込むわけには行かない。と言って訴えを放置するのも、京都所司代の耳に入ったらまずい。そこで、伏見奉行所管内の越後屋だけを家宅捜査することとした。
伏見奉行所内部で越後屋の家宅捜査を決めた翌日、一人の侍が越後屋の正面入口に立った。越後屋主人嘉吉は丁重に挨拶した後、奥座敷に通して酒肴を出してもてなした。その侍は、世間話

の後、
「主、三日後に伏見奉行所が、キリシタン匿いの疑いで当家に家宅捜査が入る。心して用心するように。邪魔したな」
と言って立ち上がった。
嘉吉は素早く侍の着物の袖に手を入れた。金子の重みに頷いたのを見て取った嘉吉は、
「何のおもてなしも出来ませんが、またどうぞお越し下さい」
と丁重に挨拶して表玄関から送り出した。

その日から三日後の朝、今で云うと午前十時頃、伏見奉行所の役人七名が越後屋の店先に立った。番頭が慌てふためいて奥座敷にいる嘉吉に知らせた。店の土間に平伏した嘉吉に対して、役人の頭である鵜飼吉右衛門が、
「その方が越後屋の主嘉吉が。訴人があって、キリシタン匿いの疑いで家中を調べる。神妙に致せ」
と探索目的を告げた。嘉吉は平伏したまま、
「私の不徳と致すところ、お役人様のお手を煩わせ誠に申し訳ありません。家の中、如何様にも隅々までご検分下さい」
と答えてから立ち上がり、中腰で奥へ案内した。
一昨日と昨日の二日間、キリシタン関係と思われるものは全て処分し、シモンと喜作の持ち物

の全ては、庭の片隅にある土佐犬の成犬三匹が入っている大きな犬小屋の下に埋めて、犬小屋を元通りにした。当然、シモンも喜作も姿を消し、離れにいた形跡は見事に消されていた。

検分は、嘉吉の居間の文箱から仏壇の中に至るまで綿密に行なわれたが、キリシタンの形跡は同一つ見つけることは出来なかった。

正午近く、七人の役人は全員奥座敷に集まり、徒労に終わったことで安心もし、また不審にも思っていた。嘉吉の妻女がいち早く酒肴の用意をした。嘉吉が、

「お役人様、昼時となりましたので、粗飯でございますがお召し上がり下さいますようお願い申し上げます」

と云うと、頭の鵜飼吉右衛門は、

「心配かけるな。有り難く頂戴しよう」

と云って、他の役人にも馳走になるよう促した。

鵜飼吉右衛門は、出された酒杯を片手にして、座敷の隅に畏まっている嘉吉に、

「主、つかぬことを聞くが、喜作と申す剣の使い手が当屋敷にいると聞くが、今でもいるのか。姿が見えないが」

と言った。嘉吉はその場に平伏して、

「はい。最近まで当家で使い走りをさせておりましたが、前歴に不審がありましたので暇を取らせました。なんでも東国の男だそうで、今はどこへ行ったか分かりません」

と答えると、鵜飼は、

「左様か、主は目が高い。喜作にもキリシタンの疑いが掛かっている。もし、今後顔を出すようであれば直ちに連絡するように」

と云ってから、

「主、今日は店の者の数が少ないようだが、如何いたしたか」

と痛いところを突いてきた。嘉吉は平伏したまま、

「はい、このところ、休みなく働かせましたので、今日は休みを与えております」

と答えた。実は三日前から一般の使用人は休ませて、親戚筋の者と番頭で徹底的な証拠隠滅作業をしていた。

酒肴を平らげた鵜飼吉右衛門達は、

「主、邪魔したな」

と立ち上がりかけた。嘉吉は平伏して、

「お役人様、私の不徳と致すところでお役人様方のお手を煩わせましたことをお詫び申し上げます」

と挨拶した後、素早く顔を上げて、

「鵜飼様、厠はこちらでございます」

と声を掛けて、鵜飼を厠の方へ案内した。他の役人の目の届かないことを確認して、鵜飼の着物の袖口に手を差し入れた。ずしっとした重みを感じた鵜飼は、そのまま正面入り口に向かい、

「主、邪魔したな。これから我らを煩わせないよう心して励め」

と言って去っていった。

翌日、無頼漢達は奉行所の結果を知るために、カラスを奉行所に行かせた。結果は、

「でたらめな訴えをするな」

と役人から散々灸を据えられ、銀何枚の期待は儚く消えてしまった。

しかし、高札の効果はゼロではなかった。その後、小間物屋八蔵は無頼漢達に何度も家に押し掛けられ、

「キリシタンの名前で、知っていることを全て話さなければ、妻女と娘は無事では済まされないい」

と脅され、妻も娘も真っ青になって怯えている。それを見て八蔵は、無頼漢達が喜作に散々な目に遭わされた時に、喜作が連れていた娘達は、全てキリシタンの娘であったことを喋ってしまった。

そのことは、喜作が剣の使い手であることを噂で聞いている京都所司代が、何時の間にか知るところとなり、京都所司代の指令により、伏見奉行所を挙げて摘発が行なわれた。その結果、信徒四家族十四人が捕縛された。

伏見天主堂のバテレンであったオルガチーノは密かに喜作と会い、

「今度こそ処刑を免れない信徒達を、少しでも心安らかに天国へ旅立たせたい。ついては、自分

も自首して信徒達と共に縛につきたい」

と云ったが、まだまだ都には隠れた信徒が居り、バテレンが一人でも居なくなっては、残された信徒達の信仰面で寄るべき核がなくなってしまう事から、喜作はオルガチーノに自粛を願った。

そして、逆に喜作はオルガチーノの反対を押し切って、自ら奉行所に名乗り出て、自分は旧小笠原家の家臣であり、キリシタンであることを告げ、十四人と共に処刑してくれるよう申し出た。

京都所司代は、今回は見せしめのため、棄教の申し出を受け付けず、十五人全員を市中引き回しの上、四条河原で処刑することとした。

処刑の日、処刊の様子を一目見ようと、多くの群集が竹矢来で囲んだ処刑場の周りに集まった。その群集の中で、今朝、小間物屋八蔵が首を吊って自殺していたことが噂されていた。

高手小手に縛られたキリシタン達は、河原に立てられた十五本の柱に次々と括り付けられて行く。泣いている者は一人も居ない。男も女も、柱に括り付けられるとき、お互いに顔を見合わせ

「パライソで」

と声を掛け合って、むしろ笑顔をさえ見せている。

これを見た喜作は、

「パライソへ凱旋しようぞ」

と一声大きく叫んだ。

竹矢来から少し離れたところに、深編笠を被った二人の若い僧が立っていた。両手を合わせて低い声で経を唱えている。

この地上の旅を終えるに当たって、まだ誰も見たことのないパライソを信じ、むしろ喜んで、希望を持って、そこに凱旋しようとしているキリシタン達を目の当りにして、二人の僧は同じことを思っていた。

「この処刑は間違っている。あの人達はどんな悪いことをしたと言うのか。お互いに助け合い、人を分け隔てせず、職業に励み、死後の天国を仰ぎ見て、喜んで日々を過ごしている立派な人達ではないか。キリシタンの教えが政治体制維持に邪魔なために、処刑のための理屈として、謀反を計画しているとか、神社仏閣を否定するとか、いろいろと権力者に部合の良い理屈を付けている。もっと、キリシタンの人々の言い分に耳を傾ける必要があるのではないか」

「我々の仏法が万民を救済出来るのでなければ真の仏法ではない。我々はどうすれば良いか。人間の魂の救済とは何か。仏に仕える身として、この問題を生涯の課題として庶民の幸せのために尽くすよう、仏に仕え、人に仕えて生きていかなければならない」と。

参考文献

日本切支丹宗門史　レオン・パジェス著　岩波書店

日本史小百科キリシタン　太田淑子編　東京堂出版

蓮華寺文書

阿育王伝（アショカオウデン）

相原　精次

昔、ガンジス河流域の沃野に都を構え、インド全域を統治するマガタ国という国があった。王子アショカは父王ビンビサーラが病没するとすぐ、兄のスシーマをさしおいて、大臣アマーティアの後押しを得て即位した。

その頃、兄スシーマは父王ビンビサーラの命を受けて遠征の最中だった。父王は、この遠征を果たして帰った日、兄のスシーマに王位を譲ろうと、そのことを楽しみにしていたのであったが、にわかに病に倒れ、その夢を果たす前に没したのであった。

父王は、二人ある兄弟のうち兄のスシーマが美しく素直である一方、弟のアショカが醜く生まれつき、性格にもひねくれたところがあるのを感じて、何ごとにつけても兄の方を優遇した。当時のマガタ国においては、王位継承の順は必ずしも長兄が第一のものとは決まっていなかった。国王ではあっても議会を無視することはできなかったのである。とはいえ、国王の発言力が強かったことは言うまでもない。ビンビサーラ王は議会を考慮して、日頃から何かにつけて、兄ス

シーマを高く評価して周囲の関心を兄の方に向けさせるように心がけていたのであった。

アショカは、自分の醜く生まれついたことをのろい、かつそのことをもって冷たく当たった父王を恨み、全てに優遇されていた兄スシーマを憎んでいた。とりわけ、かつて自分が遠征を命じられた時、満足な武器も与えられずに出されたことがあり、父王が自分の死を望んでいることを感じとって以来いつか機会を得て自分が王位につき、父王や兄に対して鼻をあかしてやりたいと機会をねらっていた。

そんなとき突然父王の死に合って、アショカは有力な大臣を自分の味方に付け、兄の留守を幸いにして強引に即位式をおこなったのであった。

その後、父親の急を聞いて遠征先からもどってきたスシーマとの間に激しい戦いも行われた。しかし、王城を占め、既に王位を得てしまっていたアショカの優位は決定的だった。遠征疲れとアショカの策略にあって兄スシーマは敢えなく敗れ去った。そして、王宮内にあったスシーマ擁護派も一掃し終わってアショカはここに、名実ともに広大なマガタ王国の王となったのである。

王位についたアショカは、これまでの鬱憤を晴らすかのように自由気ままな生活をするようになった。まず、大臣アマーテイアと手を組んで議会を骨なしにしてしまったのである。アショカは自尊心だけが異常に強かった。何はともあれ自分を軽蔑したり侮辱したと感じた者があると、それは老若男女にかかわらず処刑した。人々はそんな王子をチャンダ＝アショカ（暴悪阿育）と呼んでおそれた。

王がとりわけ好んだことは狩猟であった。大勢の兵を引き連れ、野に出て手当たり次第動物を殺し、宮殿へ持ち帰るとそれを肴に大酒宴をすることはたびたびであり、狩猟が興に乗ると捕獲するものは鳥獣だけではすまず、目にした女は誰であれ捕らえさせ連れ帰るというありさまであった。

王としての位置が安定し、その生活に慣れはじめ狩猟にも飽きてくるようになると、アショカは、父王が財力をつぎ込んで建設した都をそのまま引きついでいることが気に入らなくなるのだった。そして、自分を疎んじた父王の思い出につながる遺構をつぎつぎに破壊させた。しかし、それでも飽きたらず、自分がいかに偉大な王であるかを示すために新しい都を営みたいと強く思うようになった。

アショカは大臣アマーティアに命じて新しい都を営む土地を選定させた。アマーティアは、これまでより少し北に当たるパータリプトラに新しい都を営むことを進言した。そこはガンジスの河畔により近くなり、肥沃な土地は作物にもめぐまれ、河を伝っての南北への交通もいたって便利であった。

アショカもこの土地に満足した。さっそく大都建設の手始めとして、ここにこれまで見たこともない大宮殿を建てるようにと命じたのである。宮殿の南北は、「十里を超える大きさであること」というのが王の言葉であった。アマーティアは王命に背けばどういうことになるか十分承知していたので、すぐに諸国に触れを発し、各地から一級の技術者を駆りあつめて、さっそく王宮の建設に取りかからせた。

王位について以来贅沢に慣れきり、かつ、あらゆることに飽きてしまっていた王は、自分の命令によってできる新しい宮殿の工事が着々と進んでゆく様子を、毎日珍しいものを見るように眺めつづけるのだった

アマーティアは大宮殿を造ることに王がこれまでにない関心を示していることが嬉しかった。この新都造営の間は王の無理難題も影をひそめそうに思えた。王の気ままにこれまで幾たびとも言えないほど泣かされてきた大臣は、そんな王の姿を見て少なからず心を休めたのであった。

それだけに大臣アマーティアの技術者に対する注文は厳しいものであった。王を喜ばせるため、部屋部屋の飾りは一つとして同じものを許さなかったことはもとより、柱という柱には超一流の浮き彫りをほどこさせた。これには、飽きやすい王の目も百年間は持たせることができるであろう、というほどの力の入れようであった。

アマーティアの努力により王の関心が新宮殿に向けられるようになって、四年の歳月が流れた。

初めの一年は、これまでに見たこともない人数の技術者が宮殿建設のためにひしめく様子を、王は珍しいこととして眺めていた。目もくらむほどに石が積み上げられ、宮殿の偉容が日を追って形づくられて行く。北と南の、端から端を見ようとしても先はかすんで見ることのできないほど広大な宮殿が、日々形を整えて行くのが王にはもの珍しかったのである。

つぎの年は、何千にも及ぶ多くの部屋部屋がそれぞれの用途に応じて飾られて行く様を、一つ一つ、目を見張りながら楽しそうに見て回った。さらにつぎの年は、一本一本の柱にバラモンの

教えを中心とした古い話から題材を得た彫刻が施されて行く。王はその作業ぶりを毎日毎日見て回るのを楽しみにした。そして四年目、いよいよ工事は最後の仕上げにさしかかっていたのだった。

王は、既にできあがっていた自分の居室に寝起きしながら、新しく焼かれた土の香りを楽しんだ。また、多くの部屋部屋にお祝いとして貢がれた諸国自慢の美女たちを配し、これまでにない充実した思いを味わっているようであった。

ところが、王宮の完成を見る頃になって、ある日を境にして王の顔つきが険しくなって行くのをアマーティアはめざとく感じとっていた。各地から来た女の中で、遙か西方のロータルの地から来た女が一言「私の地方の宮殿の壁には美しい絵が描かれています」と言って以来アショカは不機嫌になっていたのである。

いらいらしながら王は大臣アマーティアを呼びつけた。

「何と殺風景な宮殿ではないか」

いやな予感を感じながら王の前に進み出たアマーティアは、全く思ってもいなかった王の言葉にあわてた。

「これまでのどの王宮にもなかったあらゆる技術をこらしておりますが」

「こんなものは既に見飽きてしまった。即刻、この建物を取り壊せ！」

「しかし王様…それはあまりにも……、長い歳月を費やしてようやく完成の日を迎えようとしているところでございますのに」

「ええい、うるさい。こんなものは先のビンビサーラ王の時代の宮殿と、ちっとも変わっていないではないか」

「いいえ、宮殿の大きさといい、彫刻の技術といい、全くこれまでにないものばかりです」

「いいや、わしの目には何の変わり映えもしない。即刻とり壊せ」

「それはあまりのことでございます」

「わしの言うことが聞けぬのか」

「いいえ。そういうわけではございませんが、もう一度お考え直しのほどを」

王はしばらくして再び言った。

「よし、それならおまえに免じて、とり壊しはやめることにしよう。その代わり、この宮殿中の壁という壁全てに絵を施せ」

「絵でございますか」

「そうだ」

部屋の壁、回廊の壁、宮殿を取り巻く塀の壁、ありとあらゆる壁に「すき間なく絵を施せ」。これが王の意志だった。アマーティアはさっそく、また全国に向けて「絵師は新都の宮殿に集まること」という触れを出した。そして、王の命令に従って諸国から集まってきた絵師たちに絵を描くことを命じた。

絵師たちはマガタ国中はもとより、ある者は遙か遠いネパールやカシミールからも、幾つも山と川を越えて新都パータリプトラまでやってきた。またある者は、岸沿いに船を進め、さらにガ

ンジス河をさかのぼって、南のカリンガやチョーラといった海辺の地方から百日以上もかかって来た者もあった。

絵師たちは都に着くとすぐ一定の壁面をあてがわれて、そこにいろいろな絵を描いた。自分たちの地方の風俗を描く者、神話を描く者、自分の家族を描く者、さまざまであった。

大臣のアマーティアは、つぎつぎに訪れる絵師たちに対して絵の描かれていない壁面を手配することで毎日が明け暮れた。一方、アショカ王は大きな宮殿が絵で埋まり、様子の変わって行くことが珍しかったのか、既に描き終わった絵、今描かれている絵等々、毎日毎日、飽きることもなく見てまわるのであった。

こうして数年が過ぎ、さすがに遠い国から到着する絵師もまばらになった。その頃になると都合よく、宮殿の壁は余すところがないほどに絵で埋まっていた。

アマーティアは事が終わりそうになるにつれて、また心配になってくるのであった。もし、壁という壁がいよいよ埋め尽くされてしまったとき、王がまた新たな難題を吹きかけてくるのではないかと思えたからである。

全ての壁が絵で埋まったと思ったある日、アショカ王がアマーティアを呼びつけた。大臣は何を言われるかと、はらはらしながら王の前に進んだ。

「この間抜けめ。城門の上のひと壁がまだ残っていることに気づかなかったのか」

アマーティアは顔色を変えた。いちいち見回った上で「全て終了」の報告をしたばかりだったのである。その頃新たにやって来た絵師には、「既に用はなくなった」と言って国元へ帰したり

しているところであった。大臣はあわてて王の指摘した城門へ行ってみた。
確かに門の上部、ほんの一部分に絵の描かれていない空白が残っていた。「あの部分は最高の絵師のために敢えて残しておきました」と大臣は口から出まかせの言い訳をしてその場を逃れた。その部分を任せるはずの絵師の心当たりなどあるはずもなかったのではあるが。
「そうか、ここの絵はどこよりすばらしいものになるんだな」
王はそう言って納得した。
アマーティアの悩みは深刻になった。そんなある日、見るからに疲れきった旅の者と思われる老いた男が大臣に目通りを願ってきた。大臣は会うことにした。この男は遠く北のヒマラヤの麓の村、パルパからやって来た絵師であるという。大臣は見るからに絵師として力のありそうに見えるこの老いた男を見て喜んだ。アマーティアはさっそく「久しく待っていた最後の絵師が到着致しました」と王に報告した。そして、絵師には、「この場所は王様が最も関心を持っているところだ。他の場所以上の絵に仕上げるように」と命じた。
老いた絵師は、城門の前にすわりこんだ。長い旅の疲れが今出てきたのである。しかも与えられた門の上の空白部にはどんな絵がふさわしいか、全く見当もつかなかったのである。ざっとひとわたり見たかぎり、思いつきそうな絵は全て他の絵師が描いていた。誰のまねでもないすばらしい絵、と言われても全く予定が立たないのだった。絵師はその場でウトウトとしてしまった。
絵師は長かった旅のことを夢の中で思い出していた。自分の国、パルパを出て何日かたって通りかかった池のある小さな村の風景を、夢の中でたどっていた。池の中にたくさんの蓮の花が咲

いていた。その池の畔に、一人の若くて美しい女の人がたたずんでいたのだった。老いた絵師は、自分が若かった頃、あこがれるように恋しながらも、思いが遂げられず、長い長い間、胸の奥に秘めていた人に再び逢えたような思いがして、しばらくの間、その女人と池の蓮を眺めたのであった。そして、はからずもその懐かしい人に今また、夢の中で逢えたのである。
この平和で懐かしい夢にひたっているとき、老いた絵師は大声で怒鳴りつけられる声に目を覚ました。
「何をしておるか！　どれほど進んだのかと来てみれば、眠り呆けているとはどういうことだ」
老絵師はまだ眠い目をこすりながら大臣の顔を見た。大臣は再び、ここに描かれる絵がどんなに大切なものであるか、また万一、変な絵であれば大臣として自分が王からどんな仕打ちを受けることになるか、ということをくどくど述べ立てて、一刻も早く描きはじめるようにと言った。
「よいか、王様は間もなく見に来るぞ。そのとき少しでも手がついていなければ、おまえもどんな目に合うかわからぬ。よく承知しておけ」
そう言って大臣はその場を立ち去った。
老絵師は再び壁の前に座り込み、どんな絵にするか考え込んだ。たった今見ていた夢のことが忘れられなかった。座ったまま、再び夢の続きを見るかのように、池と、蓮の花と、優しい面立ちの女の姿を頭の中に思い描いた。それからしばらくして現実にもどった老絵師は、その風景とその人の姿を絵にしようと決心した。いったん思いこむと、行き詰まった胸のつかえは消し飛んだ。一刻も早くそれを描き上げたいという思いに心ははやるのであった。この年になるまで知ら

なかった力が内からわき上がるのを感じながら、老絵師は残されていた空白の壁に立ち向かった。
夕方になって大臣の案内で王がやって来た。絵師は一心不乱に絵を描いていた。王も、いかにも立派な絵師らしい風貌の老人が、しきりに絵筆を動かしているのを見て安心した。
以来、来る日も来る日も、王はその城門の壁の前にたたずんだ。最後の絵がどのように描かれ、どんな絵が完成するのか楽しみにしているようであった。
一日ごとに絵が見えてきた。木々が生い茂り、池には蓮の花が咲き、そしてその池の畔に美しい女人が浮かび上がるように描かれはじめていた。瓜実顔の中に大きく見開かれた瞳はあくまでも澄んでいた。髪は、額の真ん中で二つにわけられ、その面差しを見ているだけで心が洗われてゆくような思いになる。すばらしい絵であった。
絵師自身も、これまでに味わったことのない感覚にひたりながら制作に当たっていた。全く自分の意志を超えて絵筆が動いているのであった。
十日になり、二十日になり、アショカ王のこの絵に対する関心はさらに増していった。老絵師の、技術を超えて描き出される絵の中から不思議な力が発散して、王の心を捉えていたのである。何と、王は、絵の中の女人の姿がはっきりしてくるにつれて、まるでその人に会いに行くような胸のときめきを覚えながら絵を見に出かけていたのであった。
絵もほぼ完成に近づいたある日、アショカ王は老絵師に尋ねた。
「おまえはこの絵を、想像しただけで描いているのか」
王から直々に言葉をかけられ、どぎまぎしながら絵師は答えた。

「いいえ、全てこの目で見たことのあるものを、できる限りありのままに描いております」
「ではこの女も、実際にどこかにいる人だというわけだな」
「はい」
「どこの、誰だ」
「よくわかりません」
「おまえは今……」
王は、老絵師の要領を得ない話しぶりにいらいらしながらも、ようやく、絵は、名もないような山あいの村の風景であり、この女人はそこに住んでいるはずであることを聞き出したのであった。
「アマーティア」
「はい、何でございましょう」
大臣は、再び難題が吹きかけられる恐怖にドキドキしながら王の前に進んだ。
「わしは、この女に会いたい。即刻宮殿へ呼んで参れ」
国々から集められたあらゆる美女を見慣れていた王も、この絵の中の女のように内から発散する美しさに包まれた人をまだ見ていないと感じた。もしこれが実際にいる女なら王城の全ての財宝を与えても惜しいとは思わなかった。
大臣アマーティアは、一度言い出したら実現するまでおさまらない王の心を知っていたので、この絵の女を捜すことにした。絵の完成するのを待って、老絵師を伴い、何人かの付き人を従え

て絵の中の村を訪ねるため、旅に発った。

老絵師も、一度通り過ぎただけの村であったため、なかなかその地に一行を案内することはできなかったが、ようやくここだと思うところまでたどり着くことができた。そこには確かに絵で見たことのある森と池があった。あと、池の畔に例の女の人さえ立っていれば全てが絵のとおりだった。

大臣は王の希望に添えそうなのを喜んだ。胸が高鳴った。こうなれば一刻も早くその女の人を捜し出すだけである。絵師の手にする似顔絵を頼りにして、家々をくまなく尋ね歩いた。ようやく一軒の家に手がかりを教えてくれる人がいた。一行は教えられた家を訪れた。

奥から出てきたのは捜していた女の両親だった。大臣はさっそく二人にアショカ王の意志を伝え、娘に会わせてくれと頼んだ。

「何かのお間違いでないとすればありがたい仰せとは存じますが、娘はもうこの家にはおりません」

「なに！　もういないと？」

「はい、隣の村に嫁いでおります」

大臣は既に嫁いでしまっている女など連れ帰って王が喜ぶかどうかと迷った。しかし、このまま引き返せば、今日までの努力も全て無になってしまう。嫁いだ女に会うことにした。

大臣は、女に王の意志を伝えた。またその夫には、その意志に反したら王はどんな仕打ちに出

るかわからないと、諄々と説いた。大臣の話を静かに聞いていたその夫が、誰よりもその女を愛していたことは言うまでもない。しかし、男は王の申し入れがどんなものかもすぐに理解し、逆らうことはできないと悟って妻を自分の身元から離す決心をした。

この夫は、日頃から信仰心の篤い人間であり、ブッダの教えを深く信奉していた。妻と別れることになった日、男は涙を流しながら、心から、王の底なしに業の深いことを哀れみつつ、妻にはいつまでも元気であるように陰ながら祈っていることを伝えた。男は、そのとき既に一つの決心をしていた。それはこのことを機会に、俗世間を捨てて出家し菩薩の道をめざそう、ということであった。

その女は、大臣に連れられて王の前に進んだ。大臣はおそるおそる、この女が既に嫁いでいたことなどを説明した。

王は一目見てこれが絵の中の女であることを納得した。そして、大臣が心配した既婚の身であることなどは一向意に介さなかった。大臣はそれを知って胸をなで下ろした。

王は、じかに女を見て、この女にはこれまでのあらゆる美女たちの持っていなかった言うに言えないやさしさが備わっていると感じたのであった。王はそれを感覚的に受け止めた。そして、既にその中に包み込まれていたのである。王はさっそくこの女を王妃の位にすえた。

その日以来、王は、この女が自分の身近にいるだけで苛立つことも忘れ、幸福な思いを味わったのだった。それは王のこれまでの生涯では全く知ることのなかった思いだった。

大臣は、この女が来て以来王の様子がすっかり変わったことを喜んだ。まず、怒り狂うことがなくなった。当然ながら国の中で処刑される人の数が減った。人々がこのことを歓迎したのは言うまでもない。王は幸福な日々を過ごすようになった。

しかし、そんな幸せがつづいた後、ふと、王の心に不満の陰が兆すことがあった。美しい妃を迎えて幸せを感じる度合いが増すごとに、一方で、自分が醜く生まれついたことを思い出すことが多くなってきたのであった。巨万の富をもってしてもこれはどうすることもできなかった。そして、すばらしいこの女が、自分をどう思っているのか気になりだしたのである。人の思惑が気になるなどというのは王にとって初めてのことだった。

そしてある時、王妃が前の夫のことを思い出すかのようにこっそり泣いているのを見た。王は、そのことをすぐにとがめ立てせずに、王妃の心を慰めようと努力するのだった。そして、王は大臣に命じて、世にも珍しい芳香を放つ花を探し出させて王妃に与えた。ところが、王妃の部屋にこの花の香りが満ちるようになって、王の意図に反して王妃は涙を流すことを隠そうとはしなくなった。王はそのことに堪えられなくなって、初めてこの王妃に向かって大きな声で言った。

「わしの心を何と思っている。こんなすばらしい香りが満ちているのに、なぜそんなにおまえは泣くのだ」

王妃は、日頃の王の自分に対する誠意を十分感じていることを述べた上で、この花が前の夫を思い出させるのであると答えた。この花の香りが前の夫の体から発散する香りと同じだったので

ある。

王は、王妃の口から前の夫の話が出たことにムッとした。そして耐え難い怒りが全身を走るのを感じた。男の身体からこんな香りが発散するはずはない。王は「わしの醜さを嫌っているな」と思った。こんな言い訳も、そのために思いついた嘘にちがいないと感じたのである。「男にこんな臭いがしたというのか。その言葉に嘘はないな」そう尋ねながら王は決心していた。この女の嘘を暴き、それが確認できたときは、この女ばかりかその村中の人間を八つ裂きにしてやろうと。

王は大臣のアマーティアを呼んだ。この女の前の夫を王宮に呼んでくるように命じたのであった。

大臣はあわてて随兵とともに山あいの男のいる村へ向かった。

男は、その家にはいなかった。その家の者が言った。

「あのお方は奥様を王様にとられてすぐに、両親の許しを受けて出家してしまいました。今は高い徳の備わった聖者としてあがめられています」

大臣は僧院のある場所を聞いて、そこへ向かった。

巌を登りつめた場所にある僧院はいかにも聖者のいるところらしく、静かで荘厳の気が満ち満ちていた。大臣は、その雰囲気に圧倒されながらも連れて帰らなかったときの王の怒りを想像し、聖者に会ったのである。

大臣は男を見て、以前会ったときの面影を感じながらも、全く別人とさえ思えるその姿に驚いた。聖者の無言の重々しさに魂は気圧される思いを感じながら、ようやく「王宮へ赴いてもらいたい」との意志を伝えた。聖人は無窮の奥から響いてくるような声で静かに言った。

「わざわざお越し頂きましたのに、今の私には王様にしてさし上げられることは、何もないと存じます」それを聞きながらも大臣は王室まで足を運んでくれるようにと何度も繰り返した。

聖者は、大臣のその様子に何か容易ならないことが王宮にありそうなことを感じた。そして、一緒に行くことを承知したのだった。

大臣は聖者を伴って道を急いだ。旅の途中、大臣は聖者の身体からいつも、得も言われぬ香りが漂っているのを不思議に感じていた。

王は王妃を八つ裂きの刑に処す準備を整えて大臣の帰りを待っていた。大臣が男を連れてもどったとの報告を聞いて王は、男をいったん牢へ入れるように命じて、怒りのおさまらないまま、残忍な思いを胸にしてその男のもとに向かった。

男のいる牢屋の方から王妃の部屋にある花の香りと同じ香りが漂ってくるのを感じた。その香りは王の鼻を刺激した。王は一気に逆上した。そして近くの衛兵に命じた。

「この男は人を惑わす詐欺師のような男だ。わしはごまかされぬ。この男を熱湯につけよ。そして身体をくまなく洗い流せ」

王は、この香りが男の身体からしみ出てくることに我慢がならなかった。人を惑わすために身

体に香料を塗りたくっているにちがいないと思ったのである。

心のおさまらない王はさらに考えた。当然、つぎにすることは、王妃と、この男を向かい合わせた上で八つ裂きにする処刑のことであり、小隊を発して、この男と女の生まれ育った村の人々を皆殺しにすることだった。家来にその準備も命じた。

聖者は訳も分からないまま手荒く括られ、王妃の見ている前で熱湯のたぎる釜の中に放り込まれた。王妃はむごい光景を目の当たりにしてその場に泣き伏すのだった。ところが聖者は全くあわてる様子を。見せなかった。ただなされるままに熱湯の中で瞑目した。それからややあって、王の命令で湯からあげられた。しかし、どうであろう。その男の身体から香りが消えるどころか、今まで以上に芳香はあたりに広がったのであった。さすがに王もそのありさまを見て、この男が計り知れない力に支えられているのであることを認めないわけにはいかなかった。あたりに漂う芳香と、男の揺るがぬ態度の荘厳さに威圧された王は、思わずその場にひざまづき、両手をついて、しばらく声も出ないでいた。

王は、ようやくの思いで、聖者に向かって言葉を発した。

「あなたは、どうしてこのようによい香りを放っておられるのですか」

聖者は、胸全体が共鳴箱であるかのような奥深く、重い声で語った。

「私は、幼い日に、夢の中で、仏に従って菩薩が法を説いておられるのを聞いたことがありました。それが単に夢の中だけのこととは思えなかったので、うつつにおいても頭の中にその菩薩を思い描いて、手を合わせてみたのです。そうすると、心の底から喜びがわき上がることを知りま

した。以来、私の心にはどんなときにも菩薩をあがめる気持ちが離れなくなりました。菩薩を拝むとき、常に芳香の漂う花を掲げておりました。それがいつの間にか、身体の底にまで染みついてしまったのでしょう」

王は、ただこの聖者の声を聞いているだけで、いつの間にか頭が下がって来る思いを感じた。それはこれまでの生涯に経験したことのないものだった。

聖者はさらに言った。

「王様、あなたが兄の王子に代わって王様となれたのは、あなたに力があってのことではありません。巡り合わせに過ぎません。遠征から帰った兄の王子と戦って勝ったのも、あなたが強かったためではありません。武将の戦略と、兵士の力によるものでした。そして、そういう武将や兵士を持てたのは、全て、仏様のなさったことです。自分を偉いと思ってはいけません」

聖者はさらに続けた。

「これまでのあなたの所業の数々は、実は、比類なき聖者を育てようとの仏様の深い計らいによるものでもあったのです」

王はその声に、生まれて初めてハラハラと涙を流したのだった。

このことがあって以来、王は全く人が変わった。これまでの思い上がりを悔い、同時に国中の人々に対して、一切、生類を殺害することを禁じた。当然、自らにも不殺生の戒を課した。自分の意のままだった財力を仏塔を築くために振り当てた。それは民衆の心の拠り所を造りたいがためであった。そして、国々に数知れないほどの寺院を建て、僧侶を敬った。

人々はそんな王を、チャンダ＝アショカ（暴悪阿育）と呼ぶのをやめて、ダルマ＝アショカ（法阿育）と呼ぶようになった。

この王は、マガタ国マウリア王朝三代目の阿育王として、歴史の中にも名高く、今日に知られている。

日本犬物語

宮城　克郎

その一　三本足の犬

子どもの頃、私にも小さな夢がいくつかありました。その夢の一つが、犬を飼うこと、日本犬を飼うことでした。

「どうして日本犬？」と問われると、まず、その姿ですね。

竹を削いだようにピンと立った三角の耳、切れ長な澄んだ奥深い眼、力に満ちた深く逞しい胸、ぐっと巻き上がった太い尾、また、尾根より背に覆いかぶさったような表現豊かな差尾（尾が巻かず前方に傾斜する尾形）――私の内の、日本人の血が騒いだからでしょうか。

本質と表現は、表裏の関係にありますが、日本犬保存会が昭和九年に制定した〈日本犬標準〉によれば、日本犬の本質とその表現は次のように示されています。

「桿威に富み良性にして素朴の感あり、感覚鋭敏、動作敏捷にして歩様軽快弾力あり。」

内からあふれる凛とした気力、迫力。精悍、素朴、野趣は、私の心をとらえた〈美〉でありました。

思い出の犬といえば、昭和二十年代、八幡谷の上山退助さんのお宅に飼われていたハチという日本犬です。体高四十センチ位だったでしょうか。小型犬ながら、四国犬（中型）を代表する名犬〈楠〉のような味わいをもっていました。キリッと立った小さい三角耳、色素の濃い鋭い眼、冴えた赤毛の剛毛、贅肉のない引き締まった体躯、まさに歩様軽快弾力あり。近づくと低く唸り、私を釘づけにしました。しかし主人には従順で、私の家に退助さんの弟さんと来た時、藁しべ（藁しぼ）一本で繋がれていましたが、弟さんの行動に合わせ、たよりない藁しべを切るという ことはありませんでした。といって、主人の顔色を窺うといった迎合的な態度は微塵もなく、私と話している弟さんの横で、前足をつき、キッと前方を見据えたまま、静かに座しておりました。

話は前にもどりますが、どんなに犬を飼いたいと夢見ても、小学生である子どものこと、親の許しなしに飼うことはできません。貧乏人の子沢山、そのうえ、犬など全く興味も関心もない父親、私の夢が実現したのは、職についた昭和二十四年、二十歳の時です。

群馬の十石柴犬は、狸のような匂いのする、赤胡麻の野性味あふれる犬でした。

二年経ってまた学生になり、一時、犬から離れましたが、二十代の後半から四十代の前半まで、柴犬、秋田犬、四国犬、紀州犬と飼い続けました。そして四十代の後半からいっそう多忙になり、ましたので、いたしかたなく犬とご無沙汰しましたが、退職後また柴犬、そして甲斐犬と暮らし、現在、柴犬一頭、甲斐犬二頭。日本犬で飼わないのは北海道犬だけ。全く日本犬バカで、家族に

も随分迷惑を掛け、肩身の狭い思いをしています。と、述べてきましても、日本犬の大小等、イメージできない方もあろうかと思いますので、一寸参考に日本犬の分類について話します。

日本犬を大別すると、小型、中型、大型に別れます。そして、小型は柴犬。中型は産地別に、紀州犬、四国犬、北海道犬。大型は秋田犬を指します。南アルプスの猟師部落に繁殖されていた山梨の犬、甲斐犬は、体高が小型と中型の間にあるので、大、中、小のいずれにも属さず、甲斐犬として独立した存在になっています。

さて、前書きはこの位にして、十何頭と係わった犬の中で、特に心に残った犬たちを紹介しましょう。

三本足の犬といっても、生まれながらにして三本足だったのではありません。

生後二か月で知多の犬屋から送られてきた子犬は、ほかほかした淡赤の毛に覆われ、葡萄色の眼をした上品な犬でした。体重二キロ余、呼べばすぐ跳んでくる、明るい人おじしない子犬でした。二月の日射しにキラキラ輝いていました。そのうえ素直で、「座れ」「待て」「来い」「伏せ」「持ってこい」は勿論、「登れ！」といえば、梯子に登ることさえできました。ただ残念だったことは、日本犬の象徴である三角耳が、六か月経っても、キリッと立たなかったこと、つまり半立ちだったことです。またテツは綿毛が少ない。日本犬は、針毛（表面の毛）と綿毛（内面の毛）の二重被毛になっていて、この内面の綿毛によって針毛がピンと立つわけですが、綿毛の少ない犬は寝た毛になり、力強い表現が半減します。

この〈テツ〉と名付けた中途半端な日本犬は、実は愛知県の知多の犬屋から、最高の中型犬子犬として購入しました。

知多の犬屋というのは、『少年倶楽部』などにも大きく日本犬の広告を出し、日本犬についての著書もあり、参議院選にも出馬した人で、子ども心にも尊敬し、信頼していました。裏切られた思いで、手紙できつく問い合わせたのですが、あいまいな返事しか来ず、後味の悪さだけが残りました。

ほんとうのところ、私が夢見た純粋な日本犬は、昭和のはじめ頃から絶滅に近い状態になっていたのです。甲斐日本犬愛護会が、昭和八年に、鳩山一郎文部大臣に提出した〈天然記念物指定申請理由書〉によれば、「甲斐日本犬は、人車馬共に交通至難なる山間僻地にのみ産し、その中芦安村に産するもの優秀にして其の数また比較的多きも、僅かに猟夫間に飼養せられて残存するに過ぎずして、総数三十を越えざるべし。」とあります。そして末尾に「甲斐日本犬殊に虎毛犬の絶滅の日近かるべきを憂慮するのあまり敢て甲斐日本犬を天然記念物としてご指定あらんことを申請する所以なりとす」と、天然記念物指定申請理由を述べています。

このことは、甲斐犬のみならず、すべての日本犬にいえることでありました。

戸川幸夫という動物文学者がいます。『高安犬物語』で直木賞を受けましたが、その作品の中で、

「チンは、高安犬としての純血を保っていた最後の犬だった、と私はいまもって信じている。高安犬というのは山形県東置賜郡高畠町高安を中心に繁殖した中型の日本犬で、主として番

犬や熊猟犬に使われていた。――中略――。犬張子を思わせるがっちりとした体つきの戦闘的な狩猟犬だった。熊を追って幾日も幾日も雪山を彷徨出来る強い耐久力と、相手が斃れるまで食い下がる激しい闘魂、鼻を捥ぎとるような寒風の中から熊の体臭を嗅ぎわける鋭い感覚――こういった類のない特徴を持った狩猟犬だった。だがその優秀な血も怒濤のように押し寄せてくる垂耳犬の血で次第に崩されてゆき、昭和の初めごろにはもう高安犬の発祥地である高安付近では、耳は立ち尾は巻いていても、どことなくバタ臭い犬で充満し、あの美しい古武士のような重みのある高安犬の姿は見られなくなっていた。」と嘆いています。

知多の犬屋氏が、「純粋日本犬ここにあり」と、宣伝これ努める犬の中に、テツのような犬が混じっていても不思議ではなかったのです。

といって、テツには全く関係ないことで、好運寺山で、私の投げる松かさを拾っては、何度も山の斜面を駆け登ってくるテツに、私は声援を送っておりました。

生後十か月の時でした。四十三年も昔の、八月のはじめです。今なら引き綱をつけないで運動するということは全くないのですが、その頃はおうような時代でありまして、また私に油断、甘えがあり、ついつい放したまま運動に連れ出したのです。それも私が自転車に乗って。テツは低く唸ったり、ペタルを踏む私の足をくわえたり、前足をズボンにからませたりして往還に出ました。

田舎といっても、往還です。オートバイ、トラック、バス、ジープ。もうもうたる砂ぼこりです。テツは尾を下げ、立ち止まりました。

（テツがあぶない）私の胸に不安がよぎりましたが、なんと、「テツ、テツ」と呼びながら、そのまま、自転車を走らせてしまったのです。

私が振り返った時、テツは道の真ん中に立ちすくんでいました。

（しまった！）電流が私の体を貫きました。引き返そうとしましたが遅かったのです。警笛を鳴らして疾走してきたジープは、テツの「キャイン」という苦痛の悲鳴を残して砂ぼこりの中に消えていました。

左足を砕かれたテツは、ヒイヒイ泣きながら砂利の上を這い回っています。

人間に吠えつくことも、他の犬と喧嘩することも知らなかったテツは、その日を機に別な犬になりました。

獣医の手当で足の痛みもとれたテツが、三本足ながら駆け回れるようになった頃です。

隣部落のブチがひょっこり訪ねてきました。柿の実の美しい午後でした。

ブチは尾を振り、クスンクスンと鼻を鳴らしながら体を擦り寄せてきます。と、テツの肩の針毛がサッと立ちました。尾の先をユラユラ動かし、体を固くしてスッと身をかわすと、ブチの後ろに回りました。そして警告なしにブチの尻にパクッと咬みついたのです。とっさのことで、しかも後ろから、そのうえテツは友達です。ブチは、「ギャイン」と痛みと驚きの声をあげましたが、しばらく何のことか分からないというようにぼうぜんとしていました。それをよいことに、テツはまた咬みついたのです。ブチは耳を反らし、唇を歪め、尻を地面に固くつけ、「ギャイン、ギャイン」と泣き叫びます。歯が怒りと苦痛と悲しみでガチガチ鳴っています。

「コラッ！」私は大声でテツを叱りつけました。するとテツは、ブチから離れ、五メートルほど西の椿の木にシャッと小便を振り掛けました。

逃げるのは今だと思ったのでしょう。ブチは、テツを横目で見ると腰をそっと浮かしました。テツの目が光りました。待っていたのです。三本足ながら猫のような身軽さでした。

不意打ち、闇討ち、全く卑怯という外ありません。三本足のテツが考え出した悲しい戦法でした。

今度は人間が相手です。

私が道端で友達と立ち話でもしていようものなら、もういらいらして、——テツの狙うものは腰に下げた手拭です。

横道にそれますが、腰に下げた手拭というと、若い人たちはけげんに思われるでしょう。今男性なら、手を拭うハンカチはズボンのポケットの中に畳まれて入っています。腰に手拭を下げた人は見掛けませんが、昭和一桁生まれの私たちの若い頃には、腰に日本手拭は珍しい風景ではありませんでした。

さて、イライラしたテツは、音もなく友達の後ろから手拭を抜き取り、掘り返された田へいっさんに走ります。そして前足でパッパッパと軟らかな土を掘り、窪地に顔を突っ込み、手拭を口にくわえたまま待っているのです。怒り心頭に発した人間が息せき切って走って来るのを、そ知らぬ顔で、意地悪く待っています。

「こいつメ」、血相を変えて走っていったって手拭を奪い返すことはできません。テツはトット

と逃げていき、途中で思わせぶりに立ち止まり、くわえた手拭をピタピタ振りたくってみせるのです。

「チャッ、チャッ」、鶯が笹鳴きしています。

テツを悲しい犬にしたもの、それは誰でもない私です。

その二　心にしみる秋田の犬

「悍威に富み、良性にして素朴の感あり――」、秋田犬〈アキ〉は、まさに日本犬中の日本犬でありました。

道端にコスモスのそよぐ十月、神戸在住の弟から送られてきた四か月の秋田犬の子犬には、〈秋の里〉という、力士のような名前がつけられていました。秋田犬には、雷電号、荒鷲号、竜王号、金剛号といった、剛勇な犬名が多いのですが、秋田県湯沢市の京野兵右衛門氏は、『秋田犬の歴史』の中で、

「日本が戦乱の幕を閉じて、国情が安定した慶長年間羽州六群の大屋形、佐竹侯が津軽、南部両藩への押えの使命を命ぜられて、この地に居城を構えることになったこの頃から秋田犬の歴史が始まるのである。この地方に闘争の強い今の秋田犬の祖先がいたわけで、その犬がいつ出現したかの起源については不明とされている。この何代目かの殿様にことのほか、闘犬を好まれた方があり、いわゆる『犬公方』の出現となった。古来この土地の士民は剛健素朴をもってなっていたので、勇敢な犬を愛するようになったのも当然のことである。――中略――維新後この伝統的闘犬精神が民衆化し、大館を中心として付近数か町村にひろまって非常な盛況を呈するに至った。その頃の語り伝えによると、村の豪農や旧家を始め、およそ犬を飼いうる家には、必ず一、二頭の猛犬を飼い、仏事その他親類知人の寄合うときは、必ず愛育の犬をつれてゆき、行事がすむと山や適当な場所へ集って、各自の犬を戦わせて、老若男女を問わず、それを見て、アカが強いのクロが勝ったのといって楽しむ風習があったといわれている。このようにして楽しんでいるうち、土地の有力者の尽力により、明治十八年に初めて官の許可をえて、市の西郊外、根下戸野に闘犬場を設置して一般に公開することができた。そのときは実に盛会であって、無慮二百頭近くの犬が集まり、その多くは純和犬であったように推定されている。」

と述べられています。

強い犬、強い犬への願望が生んだ名前ということになりましょうか。

さて、〈秋の里〉は、〈アキ〉と呼ばれることになりますが、生後四か月で私のところに来た頃は、ジステンパーという恐ろしい病気からやっと抜け出した病後犬で、鼻鏡は、黒々と潤おっていなければならないのに、灰色に乾いていました。耳も半立ちで、黒虎毛の被毛も艶なく、体重も十五キロ程度。〈アキ〉は、発育不全の子犬でありました。が、さすが名犬〈大衆号〉の血を引く秋田犬、引き運動で尾を下げることも、他犬に会って吠えついたり、じゃれたりすることもなく、飼い主にとって、心配のない、手の掛からない犬でした。

手が掛からないといっても、成犬になれば体重が四十キロ近くにもなる犬ですから、まず食事、そして運動です。食事といっても昭和三十年代の前半、安月給の私にぜいたくな食事は与えられません。そこで考えついたのが農業協同組合で肥料として売っていた鰊（にしん）です。その鰊を俵（たわら）で買ってきて、味噌汁をかけた麦飯の上にのせて食べさせました。

次は運動です。五か月位までは、人や自転車、自動車、オートバイ、また光や音響のような外界の刺激に慣らすために排便かたがた散歩する程度でよいのですが、五か月を過ぎたら、朝夕引き運動をしなければならない。だんだん距離をのばして朝夕で二十キロ位運動させたでしょうか。南は河東、北は応声教院から堀之内駅までいったこともあります。月の夜、私の前を黙々と黒々と胸を張って歩み続けるアキの雄姿が今も浮かびます。といっても勤めの身、運動できない時もありますので、中学生の弟に一日一円、月三十円、大変安い報酬ですが、毎日五キロほど運動してもらいました。

寒さの残る三月のはじめ、確か日曜日の朝だったと思います。アキの運動に出ました。表に出ると困ったことに、日町内会の〈キチ〉と顔を合わせてしまいました。キチは体重二十キロ余の中型日本犬で、気性の激しい犬でした。また、誇り高く、人間と出会っても一歩も譲らず、悠々と通り過ぎていくといった肝の太い犬、喧嘩も強く、アキに出会わせてはならない犬でした。

アキは、秋田犬といっても生後九か月の未成犬、まだ鼻の乾いている病後犬、筋肉隆々とした成犬のキチに攻撃されてかなうはずはありません。私はキチを刺激しないように引き綱を短くして、その場にじっとしておりました。キチはちらっと私の方を見ましたが、そのまま速足でわが

家に向かいます。ほっとして、心に油断が生まれたのでしょう。思わず、「キチ！」と呼び掛けてしまったのです。するとどうでしょう。キチはくるりと向きを変えて、すさまじい速さでもどってくると、猛然とアキに咬みついてきました。とっさのことでどうすることもできません。あっと思う間に犬たちは二本の足で立ち、組み合っています。驚いたことには、アキがキチの左耳をガッキとくわえていたのです。二頭は組み合ったまま足を滑（すべ）らせ、冷たい溝の中に倒れました。上になっているアキが咬みついている左耳を左右に振りました。キチがグッと声をもらしました。その声を聞くと、アキは何と、くわえていた耳を放したのです。それで闘いは終りでした。キチは濡れた体のまま、一目散にわが家のある東へ向って駆けていきました。

九か月の犬がキチに勝つ。ほんとうに驚きでした。また、相手の犬が声を出せば即座に闘いを止める。その潔さに感服しました。もうキチは、アキには闘いを挑まないでしょう。アキは優しい犬、自分から闘いを仕掛けない平和な犬です。

このことは、何頭かの犬によって証明されます。

新道の横町に小型犬を飼っているお宅がありました。スピッツだったでしょうか。元気のよい犬でアキの運動中、槙の間から首を出して盛んに吠えたてました。アキは何時もそ知らぬ顔で、全く相手にせず、さっさと通り過ぎてゆきます。

夕方の運動中のことです。堤の通りに出ましたら、放れていたセパードが、唸り声をあげながら突進してきました。二頭の犬がぶつかり合った時、何という素早さでしょう。セパードは左耳を咬まれ仰向けにされていたのです。左耳を振られたセパードは、「キャイン」と悲鳴をあげま

した。アキの口が当然のように放れました。セパードは起きあがると尾を股間に巻き込み、家の庭に逃げ込みました。

学校が夏休みに入った頃です。T町内会のCさんから、「家の虎と咬み合わせてみないか」といわれました。Cさんの虎は日本犬とセパードの混血で、体重も三十キロ位あったでしょうか。檻の中にいる虎は実に猛々しく、無気味に唸り、私を威嚇します。

体高は、アキが優るのですが、何しろ十か月に満たない未成犬、相手は獰猛な今を盛りの三歳犬、とても勝ちめはないと思ったのですが、反面、キチとのこと、セパードのこともあり、もしかすると、そんな思いもよぎりました。今なら、犬を咬み合わせるなど承知するはずはありませんが、血の気の多い二十代、その申し出を受けることにしました。

夕陽が堤の草にチロチロ燃えています。引き綱から放されたアキは、はしゃぎきって、うさぎのように青草の上を跳ね回っています。誠に無邪気なことで、警戒心のかけらもありません。

あっ、放された虎がはやてのようにアキの背後から襲ってきました。

「アキ！」私が大声をあげた時には、キチの場合と同じように二頭の犬は後ろ足で立ち、アキは虎の左の耳をくわえていました。

「ちくしょう！」、Cさんは拳を固く握りしめ、引きつった顔でいい放ちました。

アキは、左の耳を咬んだまま自分の重みを相手の体に掛け、虎を仰向けにし、前足でグッとおさけつけてしまいました。虎は後肢でめちゃくちゃにもがき、体をよじらせて起きあがろうとしますが、アキの力にはかないません。ヒイヒイ、笛のような息をもらしています。

病後犬の若犬が、一瞬のうちに勇敢な虎を組み伏せてしまった。

「アキはさすが秋田犬、ほんとに強いよ。組みついた時には、もう耳をくわえていたよ」

上擦った私の言葉に、物好きにも、犬の喧嘩を見物にきたAさんとKさんは、棒立ちになっているCさんを気の毒そうにチラッと見て、軽くうなずきました。

虎が弱々しい声でヒイッと泣きました。

アキはその声を聞くと虎から離れました。

それからしばらくたって、夕闇が迫った川原で、二頭は仲良く水を飲んでいました。

ほんとうにアキは安心のある犬で、犬にも人間にも敵対せず、実に静かな犬でありました。

ただ、小学校五年の末弟が運動している時は、別な犬になりました。人間が近づいてくると低く唸り、寄せつけません。新道のYさんの赤毛の中型犬が、家の前で吠えついてきた時、アキは容赦なく耳をくわえ、前足で押さえつけてしまったそうです。たまりかねたYさんが、火箸で何回殴りつけても、赤毛の犬が泣き叫んでも、アキはくわえた耳を放さなかったそうです。つまりアキは、自分より弱いもの、下位と感じている弟を守ろうとしたのです。犬にとっては、飼い主一家の構成員なら、群れの仲間。アキの行動は群れを守る本能からきているのでしょう。かつて犬が野生だった頃、生きていくためには群れに所属するしかなく、群れを守ろうとする本能が、家畜化された今もアキの中に生き続けているのです。

平穏に暮らしていたアキに痛ましい出来事が起こりました。

七月の初めの日曜日の午後の事、四十七年も昔になります。

アキの運動がてらK山に登り、お稲荷さんから茶畑が続く道を通って、墓石の並ぶ小道を降りると、そこはK寺の境内です。突然、庫裏の北側の物置小屋あたりから、犬の甲高い鳴き声がしました。その声を聞いて、K寺に狐色の牝犬がいることを思い出しました。急いで山門から出ました。青田を通った涼風が頬に快く、目を細めましたが、次の瞬間目を見張りました。Hさんの垣外に、あのキチがいたのです。キチは私の予想に反して、キッとこちらをにらみ、それから、ほんとうに疾風のようにK寺前の道を走ってきました。

二頭は、後ろ足で立ち、アキはまた、キチの耳をくわえていました。これでキチは、前の時と同じように逃げていくだろうと思いました。そこで私は、

「アキ、いけない！」と、力いっぱい綱を手許に引きました。アキの口が離れました。その時、キチの目が光りました。キチが今度は、アキの耳をくわえたのです。私が綱を強く引いた為にアキに透きができ、賢いキチはその透きを見逃さなかったのです。

キチは、目を血走らせてアキの耳を深く深く咬んでいきます。血がアキの耳から滴り落ちます。アキは泣きません。キチは目をむき、懸命に咬みついています。アキは泣きません。（しまった）、私は心の中で叫んでいました。K寺はキチのテリトリー（縄張り）です。しかも、K寺には、キチの愛する牝犬がいます。キチが恐ろしいほど強くなったのも、そこにあったのです。勿論キチは、相手（アキ）が強い犬であることは体で知っています。耳を放したら最後、自分がどうなるか、そのことは、キチの血走った吊り上がった目が物語っていました。

アキは引き綱につながれたままの、全く不利な状態にあります。私は引き綱を放しました。自

由になったアキは、耳を咬まれたまま、青田の中に入っていきました。水の張られた青田は二頭の犬で無惨な姿になりました。

「こんなところへ連れてきちゃあ駄目じゃあないか？」Tさんの怒声が聞こえました。Hさんの弟さんです。

Tさんと二人でやっと二頭の犬を離した時は、私たちも泥んこになっていました。アキと私の外も内も惨めでした。アキの左耳は、血で重く垂れています。

私の犬認識、状況認識の甘さから生まれた悲劇。何時来たのか子どもたちが、私をとがめるように立っていました。私は打ちしおれ、深い悔恨の中でうなだれていました。

その夜、私はHさんと、青田の持ち主であるAさんの家にお伺いし深謝しました。未熟な、幼ないままの自分をただただ恥じ入るばかりでした。

縁の下の柱につながれているアキは、一週間ほど縁の下に入ったままでした。私の差し出す卵の黄身をなめる程度で、じっと痛みに耐えているのでした。深い傷を負っても、一度も泣き声を出さなかったアキ。傷口の癒えるのを時間に任せているのでした。

霧の村の新任教師

伊澤　敏久

(一)

中央アルプスの四季は輝くように美しく、絵の様な山並みがつづき、県境の山裾にある小さな中学校は、平和な歌声がこだまする、のどかな毎日であった。

夜になるとその村は深い霧に包まれた。そして村にある中学校へは、毎年四月になると、大学を出た教師希望の学生が教壇に立った。

大橋俊男はこの三月、四国の大学を卒業すると、この中央アルプス県境の山裾の中学校に配属された。

俊男は赴任する電車の中から、移りゆく窓外の景色をぼんやり眺めながら、

(考えてもみなかったこんな山の中へなぜ来てしまったのだろうか)

と思った。

俊男は高知県の小さな漁業の町で生まれた。父は漁師で、小さな漁船を持ち、室戸岬沖のカツ

オ釣りで生計を立てていた。

俊男は子供の頃から父に船に乗せられ、イルカが船を追うのを見たり、南十字星を眺めたりして、漁師の生きざまを肌で感じて育った。しかし近年は魚も少なくなり、若者も減り、生計に変化が生じてきたので、父の仕事を継ぐよりも公務員がよいと考えて、教師を志願したのである。

俊男は菊子町という小さな駅で、電車を降り、バス停まで行って、

「東河内村へは、どう行くのですか」

と尋ねた。

「ここからバスで二時間くらい行って、そこでまた聞いて下さい」

バスで二時間と聞いて、明るい内に目的地につくだろうかと、俊男の心に不安がよぎった。

バスの中には客が数人しか乗っておらず、登り道の森の田舎道を走り、やっと俊男は人家のないバス停で下車した。そしてそこでまた目的地を尋ねると、ここからは山の中の道なので、自転車で行くとよいと教えられた。俊男は中古の自転車を付近で買うと、山道を登って行った。

誰にも逢わないひっそりとした狭い山道を、一時間も行った。木の間から鳥の飛び立つ音が耳をついた。

(こんな山奥に学校があるのだろうか)

山また山の細い道を、休んでは登っていった。やがて山際の夜空に星が見えはじめ、まさかこんな時間になるとは思いもよらなかった。幸い暗くても道はぼんやり白く見え、一本道なので、安心であった。しかし、所々に切りたった岩があり、また道の下は崖であったりして、不安はつ

きなかった。自転車の明りだけが頼りであった。

時計が午後九時を廻ったころ、ぼんやりと山の間から灯りが見えた。それに勇気づけられ、橋を渡ると、道より百メートルばかり登った所に、やっと小さな家があった。声を掛けたが、返事はない。もう一度戸を開け、声を掛けたら、しばらくして、奥の方から老婆が出てきて、

「何か用かな」

「この辺に中学校がありますか」

「ありますがね。今頃学校へ行っても誰もおらんよ。どこから来なすったんだ」

「私は、この村の中学の教師になって今着いたばかりです」

「先生か、こんな山の中へよう来ておくれたな」

老婆は、先生と聞いて安心したのか、

「この先には宿屋があるから、そこへ泊って、明日、学校に行ったらどうかな」

「ありがとうございました」

登った道をまた下り、月明かりをたよりに暗い道を、再び荷物を持って自転車でしばらく行くと、左側に一軒の平家があった。

多分これが宿屋だろうと思い、よく見ると、屋根は藁ぶきで、軒先は長く、石垣が家のまわりを取り囲んでいた。

小柄な丸顔の五十歳ぐらいの男が出てきて、主人だと言い、一人で宿屋をやっているが、ほとんど客はなく、この村で米や野菜を作り、自給自足だという。

その夜、俊男はこの宿屋に泊めてもらい、翌日の早朝、宿屋を出た。下の方を見渡すと、雲が早く流れるのが見えて、雲の上とはこのことか、と思った。

坂道を五十メートルほど行った所で、渓谷にかかったぐらぐらする釣橋を渡り、坂道を登ると、中学校の建物が見えた。

その建物は一棟、四部屋と思われ、裏側に廻った所に門があり、霧降中学校と書かれていた。

校舎に入って、廊下づたいに歩いていくと、一人の作業着の男に出会った。

「お早うございます」

と挨拶すると、

「お早う。どなたですか」

「今度この学校に赴任してきました大橋俊男です」

「私は校長の高山です。遠い所から御苦労様です。どうぞこちらへ」

案内された部屋は、本箱によって仕切られた校長室で、片方には、特別教室の教材道具がごた ごた置いてあった。

「高知県から連絡を受けています。大変な山の中へ来たと思われたことでしょうな。私も、長野県の砂川町から来たのだが、来た当時はいろいろなことがあり、びっくりしたものです。でも、三年目ですので、少しは慣れたところです。だが、ここに来た以上は、自分の思うようにやって下さい」

正午近くまで校長と話をした後、宿屋に帰ると、宿の主人から思いがけないことを聞いた。

「昨年の四月、東京から来た女の先生が、六月の初め、霧の深い日に学校から帰ったきり、戻ってこなかった。その代わりに静岡から女の先生が来たのだが、その女の先生も今年の三月、小雨降るある日、学校へ戻らなかった。そこで、この四月にさらに新しい先生が来ることになっていたのですが、今度は男の先生じゃでのう、女の先生よりも、長くいてくれるだろうな」

俊男はだまってそれを聞いていた。

しばらくして自分の部屋に戻り、寝ころんで、黒くくすんだ天井を見つめ、両手で頭を支え、

(本当にそんなことがあるのだろうか)

と思った。そして、

(とんだところへ来てしまった)

という思いと、

(こんな所で生活してみたい)

という気持ちが、交錯した。

(二)

俊男は四月三日、午前八時、学校に行き、校長室に案内され、職員の登校を待った。しばらく待つうちに教師全員が揃ったので、校長は三人の新任教師を紹介した。

「山梨県から来ました教頭の藤崎幸治先生、こちらは四国から来られた新卒の大橋先生です。もう一人は九州の大学を卒業し、この方も初めて教壇に立たれる桑原真知子先生です」

俊男は、他県からの教師がよくもこんなに集まったものだと思った。

午後になると、俊男は、校長から下宿を指示された。それは学校を出て、釣橋から大分はなれた、山の下にある、小さな消防小屋の三畳間二間で、「むしろ」が敷いてあった。桑原先生は校舎近くの家庭室に寝泊りすることになった。結局、この中学校は校長の高山、教頭の藤崎、金子先生、中山先生という四人に加えて、新卒の二人が加わった六人で構成されることになったわけである。金子、中山先生は、学校から大分はなれた山の中の家から通勤しており、校長と教頭は、ともに単身赴任なので学校内にある小さな一間六畳の職員住宅に住んでいた。

教頭の藤崎は金ぶち眼鏡を掛け、眼が鋭い小柄な男なので「山猫」、金子先生は大柄で何か悠々とした感じの「マンボウ」、中山先生はホダ木の色に似ているので「ホダ」などと、俊男はあだ名を考えてみたりした。

女教師の桑原先生は、福岡のある小児科院長の娘で、眼鏡を掛け、小柄なふっくらしたかわいい感じのする女性で、よく笑顔を見せていた。

「マンボウ」の金子先生は今年が十年目で、「ホダ」の中山先生は六年目だという。このような土地にそんなに長く勤務ができるのはどうしてだろうかと、俊男はふと疑問に思った。

四月五日からは全員登校である。俊男の食事は学校の炊事場でとるようになっていたが、学校近くの老婆が準備してくれるという。

俊男は、教壇にはじめて立つ日なので、緊張して、学校に向った。

早朝の山の下を深い霧が覆うのを右手に見て登校すると、小さなグラウンドで山うさぎが数匹

ずつ、あちこちで草を食べていた。

そのうちに校長が来て、

「お早う、早いですね　印象はどうですか」

俊男が黙っていると、校長はグラウンドを見ながら、

「子供たちが行っても、山うさぎは逃げませんよ」

この中学校は生徒が二十一人の学校だった。

生徒等の往復の道のりは、山道を二時間はかかるという。家庭訪問でもすれば、こちらが行方不明になりそうで、往復すれば、半日以上かかるという。

雨が降って岩でも崩れれば、町へは絶対行けず、霧の村にとじ込められた形になる。

ここでは、仕事と、自分の身を、如何にして守るかを同時に考えなくてはならないと俊男は感じた。そういう意味で、この四月は、俊男にとって、生活の大転機であった。

俊男の大学の同級生は、殆ど四国に就職したようで、彼等とは恐らくこれから会うことも出来ないと思った。

校長は単身赴任で、食事は老婆が準備していたが、酒が好きで、茶のかわりに、酒を飯によく掛けて食べていた。

学校が終わると、いつも校長を囲んで話がはずんだが、必ずそこには酒があり、そのためか金子先生や中山先生も酒が強く、終わることを知らなかった。

金子先生と中山先生が、なぜ何年もこの地にいるのかということについて、聞いたことはな

かった。

俊男は酒を飲まないため、一人で消防小屋へ帰る日が多く、そのあじけなさのため、山の生活に疑問を感じはじめていた。

桑原真知子先生も、仕事以外は話すことはなかった。

五月に入った頃、久しぶりに霧がなく、雲が山の下に見え、緑が美しく映えた日、数学の時間であった。俊男が教室に行くと、

「先生、数学を美術にして下さい」

と子供たちが話しかけてきた。四月から霧が深かったので、これまで写生が出来なかったからである。俊男は、

「わかった。美術にしよう」

子供たちの喜んだ笑顔は、初めてといってよかった。

学校を出て、小高い所に登ると、五月晴れで眼が冴えるような山の緑に、何か人間らしさを取り戻したように俊男は感じた。

見おろすと、眼下に、一軒、二軒と家が点在するのが見えた。校長の、

(思うようにやってください)

とは、このような授業のやり方のことをいうのだと思った。

消防小屋近くの子供が、にぎりこぶしの倍もある「オハギ」をいくつも持ってきて、

「先生　くえよ」

と差し出した。俊男はその大きさに当惑した。

翌日、俊男がその「オハギ」を半分、桑原先生に持っていくと、

「あら、ありがとう」

と、にっこり笑った。その笑顔が妙に鮮明に俊男の頭に残った。

その後も、霧のないよい天気の日には、子供たちと山に登ったり、山菜を採ったり、「竹の子」を掘ったりして、自然を身近に感じた毎日だった。

桑原先生は「お嬢さん」のためか、学校が終われば部屋に帰り、料理ばかり作っていた。俊男は、老婆の作る副食より桑原先生にもらう料理の方が好きだったので、そのうち、老婆は「ストライキ」をおこし、何も準備しなくなってしまった。俊男は小屋に帰って、どうしようと思案にくれた。近くの町に出ようとしても、山道を二日往復しなければならないので、食料等の買物も思うようにはいかず、雨のために山くずれでもあれば、道は通れず、復旧するまで村から出られなくなってしまう。

心配していたことがついに起こった。六月の梅雨で、山道がとざされたのである。

俊男は前もって用意しておいた「にぼし」と「罐詰」が、副食に代った。そして、老婆に再度準備を頼んだ所、ようやく了解したものの、五月からは「竹の子」ばかり食わされたためか胃の調子がおかしくなり、故郷の四国で魚ばかり食べていた頃が、懐かしく感じられた。

俊男が学校を休むと、桑原先生が消防小屋に俊男との連絡のためにやってきて、長話をしたり、医者の娘らしく色々な薬を持って届けてくれたりした。そんな二人の生活態度について、「マン

ボウ」の金子先生や「ホダ」の中山先生が、いろいろと噂しているようであったが、これも山の生活の一頁だと、俊男は割り切っていた。

(三)

七月の初め、村の教育懇談会が計画された。数年ぶりだという。

二時間余りの山道を行った会場で行われる。そこまでは谷あり、崖ありの道で、その日は休校だった。

早朝六時半の出発であった。相変わらず深い霧で、もちろん懐中電灯持参である。

山の坂道を登り下りしはじめると、朝霧の動きは早く、服が水気で重くなり、五メートル先は道がはっきりしなくなった。六人は金子先生を先頭に、声を掛け合いながら歩き続けた。最後尾を中山先生が歩いた。

一時間ばかり過ぎた頃、太陽の光が霧を通した時の美しさと静寂さは、四国の海では見られない神秘な感じがあった。

桑原先生が思わず、

「わあ、すてき」

と大声を上げたので、皆は大笑いした。見えない谷川の流れの音が、かすかに静寂を破って聞こえてきた。ウサギが道しるべの様に出てきては、姿を消し、また出てきたりした。

午前九時近くなり、霧が少し晴れた頃、やっと会場に着いた。

山の中には珍しいわら葺きの二階建ての、大きな家で、一人の美しい着物を着た女が、家の中へ案内してくれた。霧でぬれた服を、着物に着替え、二階の奥の間に案内されると、十人近くの若い女が着物で着飾って座り、その前に二列に料理が並んでいた。

「いらっしゃいませ」

俊男はびっくりした。教育懇談会というのに、どういうことなのか。今まで何も話を聞いていなかった。

しかし、金子先生と中山先生は、平然としていた。

右側に、校長、教頭、金子先生、左側に中山先生、俊男と桑原先生とが、言われるままに座った。すると着飾った女達が一人ずつお酌につき、俊男の所へは二人来て酌を始めた。まるで料亭を思わせる思いもよらぬ事態に、俊男はとまどい、なぜと聞くすべもなかった。

「俊男せんせ、どうぞ」

自分の名も知っているとは、教育懇談会は一体どうなっているのだろう……。

二人に酌をされているうちに、俊男は、三月の大学でのコンパ以来飲んでいない、飲めない酒をついつい飲んでしまった。

「あなたの名は」

「私はね、松島康子よ」

「あたしは、杉山良子。二人の名前覚えておいてね」

俊男はさらに、

「家はどこ」
「集会所のすぐ裏なの、遊びに来てね」
と良子がいうと、
「自分は四国から来たんだけど、この村の様子がさっぱり分からない。あなた達は、なぜこんな席にいるんだね……」
「私達はね、お婿さんを探しているのよ」
と康子が笑いながら答えた。
俊男が思いもかけないことを聞いて、驚いていると、他の娘たちも俊男の所に来始め、
「一つ、どうぞ」
俊男は再び飲まされ、浦島太郎のようないい気分になってしまい、「山猫」「マンボウ」「ホダ」も、大変な御機嫌である。しかし、桑原先生を見ると医者の娘らしく、きちんと座って料理を食べていた。
年の上らしい女の一人が、歌い、踊り出した。聞きなれない歌である。

あなたのきた里　霧ある山よ
春の小鳥も雲の上
つつじ椿は夜の花
旅ははるばる恋の夢

空にほんのり三日月様よ
恋の命も忘れはしない
雨の匂いは紅ざくら
乙女心が君を待つ

踊り終わると、俊男の所にきて、
「私、高野美由紀って言うの、よいこと教えてあげましょうね。実は、金子先生と中山先生の、今の奥さんはね、ずっと前の懇談会の時に、口説かれていっしょになったのよ。ないしょよ。俊男せんせ、今日は私がせんせを口説いてあげましょうか」
俊男は、「マンボウ」と「ホダ」が、この山村で、長く勤務している理由がこれで初めて分かった。
美由紀は話を続けた。
「この村の教育懇談会というのは、先生を接待することなのよ。村の役員の方たちから、今年は私達がお願いされたの。光栄でしょう。ここに居る女の人の中には、たくさんの山を持っている人がいるの。金子先生も中山先生も、山と、娘にほれたのだわ。私の家には、そんなに山はないけど、愛の山は一番高いわよ。二人の先生がこの村に長くいるのがわかったでしょう。せんせもその様にしたら……」
美由紀は俊男の手を握りながら、顔を紅潮させ笑顔で話した。

俊男はうつらうつら聞きながら、
（面白いこともあるものだ）
と思い、隣を見ると、桑原先生も聞いていたのか、くすくす笑っていた。
「マンボウ」と「ホダ」は、昔の話題に花を咲かせているらしく、高笑い声が聞こえてきた。
校長と「山猫」は、横で、高いびきで眠っていた。
（大変な懇談会だな。もし婿にでも入れば、本当に、浦島太郎となり、白髪になって、四国に帰ることになるだろう）
と、俊男は思った。
だが、そのうちに眠くなり、横になってしまった。
桑原先生に起こされ、気がついた時は、すでに午後三時を過ぎていて、帰る仕度をしていた。
俊男も、急いで身なりを整え、外に出た。すると、娘たちは見送りに戸口の前に並んでいた。六人は土産の山菜を受け取り、彼女たちは手を振って六人を送った。
山の道は木の繁みで、はやくも薄暗くなり始め、歩く山道の下の谷川が霧でかすんだ。しばらくすると霧が六人を包み、足もとを注意しながら六人は歩いた。
こうして俊男は、この地方にこんな因襲的なことがあることをはじめて知ったのであり、
（これは、どう考えたらよいのか）
と、「山猫」に聞いてみたが、何も答えはかえってこなかった。
桑原先生は、

「なにか煙に包まれた様な感じだわね」
と歩きながら俊男にささやいた。

（四）

八月に入ると台風が来て、俊男の下宿の消防小屋の雨戸が、飛んでしまった。夜中に小さな二つの部屋は停電したり、風雨で大荒れとなり、生活用具などが吹きとばされて、大変な夜であった。
俊男は校長と村の人に相談し、部屋が出来るまで、学校近くの家に下宿することにした。
下宿の主人は岡村竹五郎と言い、山持ちで、村の資産家だった。家にはイロリが作られ、柱や天井は黒光りがして、部屋数も多く、野武士の首領のような家であった。俊男は一番奥の六畳間に寝泊まりし、通勤することになった。
その家には娘が三人いた。一番下の娘を豊子といい、南の町の高校三年生で、町に下宿していた。しかし、休みには家に帰って、山仕事をしている父の弁当を昼に届けたり、俊男の弁当も用意してくれた。人好きのする丸顔の女性で、そのため俊男は、消防小屋の修理がおそくなるのを願ったくらいだった。
山の中でも、夏の夜は暑く、虫の声が耳に入り、月の明るさが、俊男の故郷の四国の海上の月を思い出させた。
村の家々では、昔から、夜明けまで、戸締まりは一切しない習慣で、暑い夜には、戸を開けて

床についていた。

ある夜、俊男が奥の間で眠っていると、夜半過ぎに人声が聞こえてきた。何気なくふすまを開け、暗い部屋をのぞいてみると、月明かりに、二、三人の男の人影が、娘たちの部屋に居るのが見えた。

部屋からの話し声は聞きとれなかったが、人影と娘たちとの低い笑い声が聞かれ、俊男は不思議な思いをした。

翌朝、豊子の母親に昨夜のことを話すと、母親は別に深く聞き返すでもなく、聞き流していたので、さっぱり様子が分からなかった。

そこで、俊男は、弁当を豊子から受け取る時に、

「豊子さん、昨夜、誰か部屋へ入って来て、話していたようですが、何かあったのですか」

豊子は笑って、黙っていた。すると、傍にいた姉の節子が、

「先生、聞こえましたの。そんなに大きな声で話したつもりはなかったけれど……」

「昨夜来た人達は誰なのですか」

「男の人に話すようなことではありませんが、先生だからお話ししましょうか。誰にも言わないでね」

「言わないよ」

「この村で、以前から行われている風習なのよ」

と、節子が豊子と目を合わせると、豊子も首を縦にふった。

「夜中に、若い男の人が、親や他人にわからないように、娘の寝ている枕元にきて、そっと話し掛けるの。場合によっては、いっしょに夜明けまで過ごし、深い霧の中へ出て行くこともあるのよ。二人は親が認めてくれれば、結婚できるのよ。その入ってくる男の人のことを「霧中光人」っていうの。霧の深い夜、月の光を頼りに、そっと女の部屋に入り、好きな女と思いを遂げようとする人のことよ。私も初めは知らなくて、友人が話しているのを聞いて知ったの。霧中光人が来れば、自分は男の人に好かれていることが分かるわけよ。山の中では、こんなことでもなければ、男と女は会うことができないのよ」

俊男も、

「そうかもしれないね」

と話を合わせ、

「昨夜はどうだったの」

と聞くと、節子は、

「私の家は、夜は真暗なので、男の人が入ってきても、月の光だけでは誰の顔だか、分からないの。その上、三人で寝ているので、誰がどこに寝ているのかも分からないでしょ。私なのか、豊子なのか、姉の初江なのか、霧の夜の月明りだけでは、分からないわよ。三人が誰も話しかけないで、黙っていたら、出て行ってしまったの。三人であとで大笑いしたの。その笑い声が先生に聞こえたのかしら、……」

と笑った。俊男は、

（若い男が娘の所に夜中に来ることを喜んでいるなんて、この村には、ほんとに色々なことがあるものだ）

とつくづく思った。

桑原先生にこのことを話すと、

「ほんとにこの村には考えられないことが多いのね。でも、私の部屋にも霧中光人が来るのかしら」

と、複雑な笑いを浮かべて、俊男の方を見た。

八月下旬、ようやく俊男の消防小屋の修理も終わり、俊男は再び元の下宿へ戻った。

（五）

十月の半ばとなり、窓から見る月が冴え、虫の声がひときわ秋の静寂さを感じさせ、俊男の郷愁の念をかきたてた。

霧の流れが、月の光をぼんやりとさえぎるときがあった。

その夜、俊男は夜半まで静かに読書をした後、床に入り、四月から今日までの、思いもよらない様々な出来事を思い出し、眠りに入ろうとしていた。

そのとき、雨戸を叩く音を耳にした。しかし、風の音か、気のせいかと思い、起きようとはしなかった。しばらくして、再び叩く音が聞こえた。

（こんな夜中に、誰も来るわけがない。おかしいな）

と思って、布団から起き上がろうとした時である。女性が入口から小声で、

「俊男先生、俊男先生」

と呼ぶ声がした。俊男はとっさに、「女の霧中光人」が来たかと思ったが、どうも聞きなれた声である。

「わたしよ。真知子よ」

俊男は、びっくりした。

俊男は急いで入口を開けた。すると、上着を頭からかぶって立っていたのは桑原先生であった。

「一体こんな夜中にどうしたんですか」

聞き終わらないうちに桑原先生は部屋の中に入ってきて、

「わたしのところにも霧中光人が来たのよ」

俊男には、さっぱり意味が分からなかった。

「今夜、寝ていると、雨戸を叩く音が聞こえたの」

と真知子は息を切らせながら言った。俊男は、

「風の音か、うさぎでも入口に来たんじゃないですか」

「私も初めはそう思ったの。でも、しばらくすると、また雨戸を叩く音が聞こえるの。私、気味が悪いから、じっとしていたら、間を置いて、また聞こえるの。確かに叩く音なの。でも、戸を開けなかったら、そのうちに音は聞こえなくなったので、そっと雨戸を開けて、様子をみたの。すると誰もいなかったの。どこかへ行ってしまったのかもしれないわ。それでわたし一人でいる

のがこわくて、月の明かりを頼りに、俊男さんの所に来てしまったの。ごめんなさいね」
「ほんとですか」
俊男は、困ったことになったと思い、
「それでは送って行って私が様子を見ましょうか」
と言って、懐中電灯を持って外に出ようとした。しかし、真知子は外へ出ようとせず、部屋の中に座り込んでしまった。真知子は、思いがけないことに出くわしたので、気が動転したのかと、俊男は思った。
俊男は仕方がないので真知子に、
「では、しばらく休んで、気持ちが落ち着いたら帰ったらどうですか」
と言って戸を締めた。しばらく二人は向かい合い、黙って座っていた。
長い時間が過ぎたように思った。
霧を通して月の光が窓から入り、あたりはますます静寂になった。
夜の時間は長く感じた。
遠くから鳥の鳴く声が聞こえた。
そのうちに霧が深くなり、月の光がかすみ始めた。時計の刻む音のみが耳に入る。
しかし、なかなか真知子は帰ろうとしなかった。
「明るくならないうちに帰った方がいいのじゃないのかな」
「いやよ、帰らない。霧中光人に会うと怖いもの」

「霧中光人なんていないよ。この村の人の描いている幻だよ」
すると真知子はじっと濡れたような瞳で俊男の方を見ていたが、
「俊男さん、あなたが、わたしの霧中光人になってくれればいいのに……」
と訴えるように言った。
「えっ、僕が……」
俊男が驚いて、返事に窮していると、真知子は、足を二、三回ばたばたさせていたが、急にくるっと入口の方に顔を向けると、
「あら、そろそろ明るくなってくるわ。わたし、帰るわね」
そう言うと少し乱暴に立ち上がり、戸を開けると霧の中へ出て行った。
彼女は霧の中を、自分の下宿に戻ったんだろうと俊男は思ったが、だが少し心配だった。
翌日、始業時間になっても、真知子は登校してこなかった。校長は俊男の所に来て、
「桑原先生はどうしたのか知りませんか」
「かぜでも引いて寝ているのではないでしょうか」
と俊男は答え、昨夜のことは話さずにいると
「私が下宿に行って来たんだが、戸締まりはしてなくて、部屋にも居なかった……」
「おかしいですね」
俊男も首をかしげた。
その日から、桑原先生の姿は無く、校長の忙しさが目立ち始め、俊男には、空しさが感じられ

る毎日になった。
十二月に入ると校長は、
「不思議なこともあるものだ」
とつぶやきながら、桑原先生の代わりの先生が来る準備を始めた。
そして、年が明けて一月に入り、花村雪江という先生が愛知県から来た。
花村先生が見えた日も、深い霧の日だった。
冬の寒い日、何も知らない花村先生が、グラウンドで、子供たちといっしょにウサギとたわむれているのを見かけることがあった。
そして、再び春が来た。
谷川に沿って紅桜が美しく咲き乱れ、鳥の声が耳に聞かれる頃、俊男は父の漁師をつぐことに考えを変えた。そこで三月末で学校をやめて、故郷の四国に帰った。

(六)

それから十数年余の歳月が流れたある日、思いがけなくも、中山先生から手紙が来た。読むと、中山先生は静岡県の浜松駅で、女医姿の桑原先生を見かけたと書いてあった。
俊男は思い切って真知子に、簡単な自分の消息を書き、彼女の九州の実家の方に出した。返事が来るとは思っていなかったが、すると便箋一枚の返事がきた。それには、
「月日の流れは早いものね、霧の深い月の夜は夢の中だったわね」

と、だけ書かれ、現在住んでいる真知子の住所は書かれていなかった。
もう俊男は父親と船にのり、南の沖にカツオを釣る毎日で、一人前の漁師になっていた。
船の甲板から見る空は青々と高く、時折、飛び魚が、船にぶつかる音が聞こえてきた。
じっと海面を見つめていると、霧に包まれた山の村が思い出され、十数年まえの霧の中のことは、「夢」のように思えた。
真知子は、ほんとうに医者になっているのだろうか、と思いをはせた。
その時、
「俊男、カツオだ、急げ」
見張りの父の声がした。
俊男はカツオを釣り上げる手にぐっと力を入れた。
カモメが船をかすめる。海の色は紫色に見える。
海の上には霧もなく、太陽がまぶしい。
マンボウが悠々と泳いでいるのが船から見える。
今月も大漁だろう。

遠い処へ

太田　精一

(一)

閃光が走り庭の大きなマンゴの木が、闇の中に浮かんでは消えている。

雷鳴が地響きを立て、鉄格子の嵌まったガラス窓を震わせた。低くたれ込めた雲が辺りを覆い滝のような雨を地表に叩きつけている。轟音と共に電気が消えた。近くに落雷があったようだ。

桂木裕介は、時計を見た。すでに夜中の十二時を回っている。読みかけの調査資料を閉じ、ベッドに入った。

このところ夕方から夜半にかけて雷をともなった強い雨が降る。年間降雨量六千ミリ。七月のドアラは、雨季の真只中である。

(これだけ降ったんだから、明日は晴れてくれるだろう)

豪雨の後に時々見られる抜けるような青空を桂木は期待した。

彼がジェトロのドアラ駐在員として家族を伴い、西アフリカのカメルーンに赴任したのは、一

九七二年八月であった。

赴任が決まった時桂木は、フランス語をほとんど話せなかった。大学時代に第二外国語として二年間勉強しただけで、成績も芳しくなく、再試験を受けてやっと合格した。それから十年になるがその当時の苦い想い出がトラウマとなってフランス語に対する苦手意識を払拭出来ないままでいた。

「カメルーンは、英語も公用語となっているから何とかなるだろう」

桂木の上司は、こともなげに言った。好奇心が旺盛で、積極的な性格の桂木は、言葉には自信がなかったが、持ち前のチャレンジ精神で（何とかなるだろう）と思い始めていた。

「家族も一緒に連れて行きたいと思いますので、一両日中返事を待って下さい」

そう言ったものの桂木は、たとえ妻が一緒でなくても赴任の意志を固めていた。

（旅行好きで何でも見たがる妻の由美が一緒に行かない筈はない）

桂木は、そう思いながら赴任の話を由美に切り出した。

「ロンドン、パリもいいけど、日本人にあまり知られていないカメルーンもいいわね」

答は桂木の予期した通りだった。

由美は、前途にどんな困難な生活が待ち受けているか深く考えもしないで、即座に答えた。

（あれから三年近くになる。フランス語もなんとか話せるようになり、現地の生活にも慣れた。カメルーン人を始め、フランス人、ギリシャ人、インド人、中国人の友人も出来た。着任した時には、一台の日本車も走っていなかったが、今では、街のあちこちに見掛ける。貿易額も増加し

た）

桂木は、ベッドに横たわり、雷鳴の遠ざかる音を聞きながら、厳しかった駐在員生活やカメルーンに着いた当時の事を想い返していた。

機上から眺めるドアラの街は、緑の原生林の中にあった。市街地の北側に、水量豊かな河が悠然と流れている。街の中心には、三、四階建てのビルが道路沿いに、まばらに見えた。

ドアラ空港に着いたのは、夕暮れも近い午後五時頃である。タラップを降りた途端に汗が吹き出た。熱く湿った風が、ねっとりとシャツを通して肌に纏い付いて離れない。空港内は、到着した乗客を出迎える人で溢れ、独特の臭いがする。先進国の空港とは違って雑然としているが活気に満ちていた。

空港には、桂木と交替する前島勇が出迎に出ていた。前島は、挨拶もそこそこに桂木の家族を車に乗せ、ドアラ市内に向かった。椰子林の影に沈む夕陽が、刻一刻とその姿を変え、大自然の森の中に消えて行く。

ドアラに住む日本人は、水産会社の駐在員二人とジェトロの前島勇の三人だけであった。カメルーン全体でもビジネス関係者は、首都のヤウンデにあるココアバター製造会社の社員とその家族を含め十人余りにしか過ぎない。その他の日本人と言えば、ナイジェリアとチャドの国境近くの北カメルーンで、現地調査を行っている二人の文化人類学者を数えるのみであった。

そんなわずかな人数の中にあって、この三年近くの間に水産会社の駐在員もココアバター会社

の社員とその家族も、カメルーンから引き揚げて[redacted]った。残る日本人の駐在関係者は、桂木裕介とその家族だけとなった。

三十年近く経った今でこそカメルーンは、サッカーの強い国として知られ、首都のヤウンデには、日本大使館も置かれている。だが一九七五年当時の日本には、馴染みの薄い国であった。旅行者も少なくカメルーンのどの街を歩いても日本人の姿を見掛けることは、ほとんど無かった。

仏、英両国の植民地から独立して十五年しか経っていないカメルーンは、国家組織も未整備だった。有力部族だけでも二十以上を数え、二百以上の異なった言語が飛び交う多部族国家で、国家よりも部族の利害が優先されていた。このため他の部族とのコミュニケーションは旧宗主国の言語が使われている。

元来ドイツ領であったカメルーンは第一次世界大戦後、フランスと英国に分割統治された。それによって仏領圏はフランス語、英領圏は英語と宗主国の言葉が話されるようになった。独立後もその影響を受け、二十一世紀になった今日でもフランス語と英語が公用語となっている。

旧宗主国である仏、英の影響力はきわめて強かった。政治、経済、軍事、外交のあらゆる部門に仏、英両国から派遣される国家顧問が、アドバイザーとして国の運営に参画していた。

一九七五年当時の人口は六百万人。旧仏領ブラックアフリカ諸国の中では、最大の人口を擁し、面積も日本の一・三倍ある。熱帯雨林帯から草原の乾燥地帯まで地形は変化に富み、多様な植物と多くの野性動物が生息している。

赤道に近い南部は、密林に覆われ、バンツー系の部族が住んでおり、人口の約半数はキリスト

教徒である。北部はスーダン系の部族が多く、ムスリムが多数を占めている。

通貨は、旧仏領アフリカ圏共通のCFAフランを使用している。フランス政府が五十対一の割合でフランス・フランとの交換比率を定め、CFAフランの価値を保証していた。そのためCFAフランは、国際的な交換可能通貨として先進国でも認められていた。（現在は、フランスフランとの交換比率は一〇〇対一に改められ、二〇〇一年のユーロ発足により通貨発行量は、欧州中央銀行の許可が必要となっている）

（二）

桂木の期待した通り翌日は晴れた。雨季の晴れ間は、気温、湿度とも低く清々しい。日本の十月初旬を思わせる爽やかさだ。昨日の雨で舗装道路のあちこちに水溜りが出来ている。桂木は、その水溜りを避けながら、車を運転して事務所に出勤した。事務所は、ドアラの中心街リベルテ通りに沿った四階建てのビルの二階にある。アパートの一室を改装したものだ。

突然予期しない日本語の電話が掛かってきた。

「もしもし、桂木さんですか。私アラン・ムベングです。覚えていらっしゃいますか。三年前桂木さんが名古屋でフランス語の会話講座を受けておられた時の講師です」

「ああ、あの時の先生ですか。大変ごぶさたしております。お元気ですか。何時カメルーンにお帰りになったのですか」

桂木は、赴任が決まって慌てて朝日カルチャーセンターのフランス語会話講座に通った。その

時の先生であることを思い出した。
「桂木さん。今お忙しいですか。もしよかったら、そちらにお邪魔してもよろしいでしょうか。私の家から歩いて十五分位ですので十五分から[redacted]十分後ぐらいに着きます」
「いいですよ。今日の午前中は来客もないようだ[redacted]本の様子などお聞かせ下さい」
桂木は、三年振りに会うムベングの温厚で、憂いを秘め[redacted]浮かべた。

ムベングは、一九四四年にドアラで生まれた。第二次世界大戦の末期で、ドアラは仏領ブラックアフリカの重要な拠点であった。その頃のドアラの中心街は、フランス人、ギリシャ人などのヨーロッパ人によって占められ、大多数の黒人は街を囲む森の中で暮らしていた。街に住む黒人は、ボーイ、港湾及び小規模工場の労働者などに限られていた。
ムベングの家系は、先祖代々ドアラ族の中の有力部族の長であった。ムベングの祖父はドアラの街造りのため、わずかな補償金を貰っただけで、フランス人に土地を提供させられた。彼は、その後、部族長としてこの土地に残り、部族の人たちの世話役として一生を過ごした。父も祖父の跡を継ぎ部族長となった。
カメルーンの独立運動が盛んになった。それにつれ独立後の国の運営を委ねられる人材の不足が叫ばれるようになった。父は息子に期待した。ムベングをフランスに送り高等教育を受けさせて、カメルーンのリーダーに育て上げようとした。
ムベングは八才の時パリに住む父の友人の許に預けられることになった。父の友人に手を引か

れ両親から引き離されムベングは大西洋を渡った。八才の子供には、あまりにも悲しく辛い旅である。船の中では、ほとんど口を開かない毎日が続いた。
ムベングの小学校時代は、楽しいものではなかった。入学当初は、故郷の森や両親のことを思い校舎の片隅で泣いたことも一度や二度ではなかった。
冬の朝などは、熱帯育ちのムベングには、特に辛かった。寄宿舎の冷たい水に手がかじかんで霜焼が出来、痒くなって夜も眠れないことも少なくなかった。
また、学校では肌の色の違いによる差別を受け、友達も出来ない。教室の隅でひっそりと座っているムベングの姿には、いつも孤独感が漂っていた。
だが、成績は常にトップクラスだった。そのためか白人の子供の仲間には入れて貰えなかったが、いじめられることはなかった。
ムベングは、こうして差別と孤独に苛まれながら少年時代を過ごした。
父は、息子をパリに留学させ政治家か法律家にしたかった。だが、成長するにつれムベングの心は、政治や法律の世界から遠ざかって行った。

ドアーボーイのピエール・ブーリーがムベングの来訪を告げた。桂木は、入口のドアーの近くまでムベングを出迎えた。彼は、ムベングを執務室に案内し、ブーリーにコーラとスプライトを持って来るように命じた。
栓抜きが見当たらない。桂木が困った顔をしているとブーリーは、白い歯を剝き出し瓶の蓋に

当て、その蓋を無造作に開けた。桂木はコップに飲[redacted]を注ぎながら、ムベングに言った。
「ムベングさんに会話を習ってからもう三年近くなり[redacted]す。毎日ここでフランス語を喋っているのですが一向に上手になりません」
「いやいやそんなことはありません。相当うまくなったよ[redacted]います」
「何時までこちらにご滞在ですか。ムベングさんからお父さ[redacted]会うように言われましたので、一度お会いしようと思っていたのですが、何時もバタバタしていてまだお会いしておりません。お父さんはお元気でいらっしゃいますか」
「はい、元気です。町の世話役として張切っています。それから、私は当分の間ドアラに居るつもりです」
「確か結婚されていたと思いますが、奥様もご一緒ですか。お子様は……」
「妻は、もう暫く子供と一緒に日本に滞在する予定です」
桂木は、ムベングが伏目がちに家族の話をする様子を見て、これ以上立ち入って聞くことを憚られた。
「実は……」
しばらくして、ムベングはためらいながら話を切り出した。
「当分両親と一緒に生活しようと思っているのですが、桂木さん良い勤め先はありませんか。ドアラにある日本の会社で就職出来そうなところがあったらご紹介下さい」
「ムベングさんは、まだご存知なかったかも知れませんけど、ドアラにあった水産会社の事務所

が閉鎖し、二人の日本人は帰国してしまいました。また、ヤウンデのココアバター製造会社も政府系企業に売却し、日本人家族は総て引き揚げました。だから、今カメルーンに残っている出先機関は、ジェトロだけなんです」
そう言って桂木は、気の毒そうに目を伏せ、しばらく考えた後、再度口を開いた。
「ちょうど今バカンスシーズンで、秘書のフランス人のマダムが二カ月休暇を取って帰国しています。まだ五日しか経っていないので、臨時に誰か働いて呉れる人を探していました。彼女が戻るまでの間来て頂ければ、こちらとしても好都合なのですが如何でしょうか」
「それでも結構ですから是非お願いします。現在、日本にカメルーン大使館設置の動きがありますので、将来は在日カメルーン大使館にでも勤務できればと思っております。そうなれば私の勉強した日本語も役立てることができますし、私の好きな日本をいつも身近に感じられ、私にとって大変幸福なのですが……」
ムベングは、元気を取り戻し目を輝かせながら将来の抱負を語った。
「とりあえずここで働かせて頂いている間に、外務省にいる知人に頼んで、職員として採用して貰えるよう頑張ってみます」
桂木は、ムベングの希望が適えられることを心から願った。だが、カメルーンは独立したばかりで、財政状態も芳しくない。そのため、在日カメルーン大使館の設立は、数年遅れるのではないかと懸念した。
「臨時とはいっても、一応東京本部の了解を取り付けなければなりません。すぐ手続きをします

から十日程待って下さい」

ムベングは、その言葉を聞き、ほっとしたような表情を見せ[illegible]所を出た。彼の足は無意識のうちにウーリー河に向かい、気が付いた時には河畔に立って[illegible]真っ赤な太陽が密林の影に沈みかけ、川面は残照を受け、キラキラと光っている。ムベングは、その夕陽を眺めながら、妻と二人で見たセーヌ川の夕暮れを思い出していた。



(三)

パリの街はバカンス前で賑わっている。パリ大学の学生は試験の準備に追われ、図書館は学生で埋っていた。

マロニエの花が咲き爽やかな初夏の風も吹いていた。一九六九年六月初旬のことである。

ムベングは、図書館の中で、一年後輩のジャンヌ・ベルトランを見掛け近付いた。

「今日は、もし前回の近代日本文学概論の講義に出席していたらそのノートを見せて呉れませんか。ちょっと都合があって欠席してしまったので……」

「いいわよ。字がちょっと汚いけどわかるかな」

ジャンヌは、嫌な顔もせずノートを鞄から取り出しムベングに手渡した。彼は、早速必要箇所を書き写しジャンヌに返した。

ムベングは、パリ大学東洋語学日本語学科の三年生になっていた。旧仏領ブラックアフリカ諸国の独立した一九六〇年代の初頭にはリセ（高等中学校）の生徒で、その頃は父の期待に応えよ

うとして、政治活動グループに入り、大学では政治学を学ぶつもりでいた。だが、彼の属するグループは、急進的なアフリカ化を進めようとして次第に過激化し、暴力的手段に訴える傾向を強めて行った。

ムベングは、多くの人々を犠牲にしてまで理想を実現しようとするリーダーたちの考え方に危険なものを感じた。集会にも欠席がちとなり、次第に政治活動から遠ざかるようになった。

多感な思春期を迎えたムベングは、ルーブル美術館をしばしば訪れ、東洋の文化と美術に興味を抱き始めた。殊に日本の美術品の持つ優雅な美しさは、ムベングの繊細な心にやさしく語りかけてくれるようであった。

また、第二次世界大戦の荒廃から立ち直り、経済の興隆期にあった日本の姿がフランスの新聞にもたびたび取り上げられた。ムベングは、伝統的な日本だけではなく、新しい日本にも興味を覚え、日本への関心が次第に憧れへと変って行った。

そこで彼は、日本語を通して日本の文化や社会を学ぼうと考え、パリ大学東洋語学日本語学科を受験、見事合格した。それからすでに三年近くになる。

ジャンヌは、その時同じ学科の二年生だった。リヨン出身で東洋の文化、とりわけ日本の伝統文化に興味を抱き、日本語科に入学した。

日本語を学んで二年足らずであったが、辞書さえあれば、新聞、現代小説の類いはほとんど読みこなすことができるまでになっていた。最近では、近松の浄瑠璃本に取り組んでいる。

「日本語の漢字は、どれ位憶えましたか」

ムベングは、ジャンヌに聞いた。
「さあ、数えたことはないです。でも読める字が五百、書ける字が三百位。卒業までに読める字を二〇〇〇字位にふやしたいと思っています」
「ぼくは、これで三年目に入ったけど読める字が六百、書ける字が四百位だから、あまり変らないね。古典を専攻するわけではないので、そんなに必要ではないかも知れないが、卒業までに辞書なしで新聞位は読めるようにしたいと思っている」
「日本語は難しいですね。同じ言葉でも発音によって意味が違うし、敬語も多い。男言葉と女言葉があるのに、男性名詞と女性名詞の区別がない」
「でも、日本語は私の部族の言葉のように母音で終る。私には、発音し易い。また、自然を表現する言葉が豊富で、言葉を通して日本人の感性の豊かさを知ることができるので学んでいて楽しい」
「卒業したらどうするんですか。日本文化研究所のようなところに就職するの。それとも日本の会社に入るつもりですか」
「ぼくは、卒業後日本に留学したいと思っている。折角日本語を勉強したのだから、もっと日本語を使いこなせるようになって、ジャーナリストか大学の教官になりたいと考えている」
ムベングとジャンヌは、並んで図書館を出た。
ジャンヌは、友達に会う約束があると言って、カルチェラタンからモンパルナスの方向へと歩いて行った。

爽やかな風が頬を掠め、マロニエの木陰で、肩を抱き合っている男女の髪をやさしく撫でている。ムベングの心は、六月の明るい光の中で、たわむれる蝶のように舞い上がり、浮き立っていた。

(四)

ムベングとジャンヌは、キャンパスで会うたびに言葉を交わし、近くのリュクサンブール公園や喫茶店でデートを重ねるうちに、お互いに異性を意識するようになった。
二人は、いつしか愛し合うようになり、ムベングの日本留学の決まった一九七〇年に結婚した。翌年、ムベングは奨学金を得て、京都大学に留学。言語学、文化人類学を学んだ後、日本文化の研究に着手した。
ジャンヌは、卒業すると直ぐ日本に渡航し、京都のフランス語学校で、フランス語を教えながら、文楽と歌舞伎の研究を始めた。京都での楽しい新婚生活を送り、一人の男の子を儲けた。だが、三年目になって、その楽しい生活にも破局が訪れることになる。
三年間の奨学期間も切れたムベングは、日本に残り、さらに研究活動を続けたいと考えた。そのためには収入の道を講じなければならない。大学、研究所、企業などを訪問、就職活動を行った。だが安定した収入の得られる適当な職場は見付からなかった。
ムベングは、名古屋でやっとフランス語学校の講師の口を見付けた。ジャンヌと子供を京都に残し単身赴任することになった。彼は、この学校の他、カルチャーセンターなどでも教え、臨時

収入を得た。だが、家族の生活を支えることが出来る[redacted]の収入にはほど遠かった。京都に残ったジャンヌの生活も楽ではない。フラ[redacted]語学校教師の収入で、アパートを借り、子供の養育費を支出するとほとんど残らない。自分[redacted]研究費を捻出するのに四苦八苦していた。ましてや、服や化粧品など身を飾るものには、とて[redacted]が回らなかった。

ムベングが京都の妻の許に帰るのは、経済的な理[redacted]あって月一回位だった。

京都に帰ったある日、ムベングは思い切ってジャ[redacted]苦げた。

「カメルーンに帰って、就職口を探すことにする。[redacted]得たら君のところに連絡するから来てくれるかい」

ジャンヌは表情を曇らせ、しばらく無言で俯いていたが、やがて顔を上げムベングに言った。

「申し訳ないけど、私はカメルーンで暮らすことは出来ない。この子もやっと日本で友達も出来、楽しく生活している。それに私ももう少し今の研究を続けたい。確かに生活は苦しいけれど、教える時間数を増やせば何とかやっていけると思う」

ジャンヌはカメルーンに行けば、文楽や歌舞伎の研究は中断せざるを得ないと考えた。だが、ムベングの気持ちも分からないではなかった。

(彼がこれ以上日本に居ても生活が楽になるとは思えない。また、仮にフランスに行っても日本文化の研究者として、名を上げたわけではないので大学、研究所、国際機関などに就職することは容易ではない。ましてやムベングはフランス人ではない。旧植民地のブラックアフリカ出身の人間だ)

ジャンヌは悩んだ。ムベングが嫌になったわけではない。だが、ムベングがカメルーンで職を得たとしても、自分の研究を中断して、彼と一緒にカメルーンで生活する気にはどうしてもなれなかった。

「折角、日本語を勉強したのだから、それを生かした生活をしたいと思って日本にいた。だが、カメルーンと日本とは、地理的にも経済的にも遠く、両国を結ぶ仕事を見付けることは難しい。フランスで就職できればとも考えたが、日仏経済関係の中心的役割を担っている企業は、日本企業もフランス企業も自分の国の人間を採用する傾向が強く、私のような外国人の入り込む余地は少ない。カメルーンに帰れば、カメルニゼーション(カメルーン化)で、政府も企業も幹部を必要としているから良い就職先が見付かると思う」

「あなたが、カメルーンで就職すれば生活は楽になるかも知れないけれど、私がこれまで勉強したことをカメルーンで生かすことは、ほとんど無理だと思うの。大使館でも領事館でも、日本にカメルーンの出先機関が出来てあなたがそこで働くようになればいいんですけど……。それを楽しみに日本で待つわ」

「じゃあ、ジャンヌはぼくと一緒にカメルーンで暮らすつもりはないんだね。もしそうならせめて子供だけでもカメルーンに連れて行きたい。男の子だから父親のほうがよいのではないだろうか」

「子供は母親と一緒にいるのが一番いいような気がする。まだ学校にも行っていないわけだから母親がいなかったら淋しいし、それとこうして今でも京都で、私と一緒に暮らしているじゃない。

急に父親のあなたが、カメルーンに連れて行っても環境が変っ[redacted]かえって不幸になると思うわ」

ムベングは、ジャンヌの日本残留の意志は固く、また子供を[redacted]つもりもないことを強く感じた。ジャンヌは、最悪の場合、離婚になっても仕方がないと[redacted]しているようだった。

ムベングは、心に深い傷を負い、後髪を引かれる思いで帰国した。故郷のカメルーン山を機上から眺め、涙が止まらなかった。八才から二十八才までの二十年間のフランス生活、その後の三年余りの日本での生活、総てが幻のように思えて来た。

三年振りに見るドアラの街は、ほとんど変っていなかった。空港に下り立つと懐しい故郷の臭いがした。だが、その臭いも今のムベングには、必ずしも心地良いものではなかった。

両親と手を握り、肩を抱き合い再会を喜び合った。親戚の人たちも多勢集まり彼の帰国を祝って呉れた。だが、ムベングの心に広がる淋しさを消すことは出来なかった。

翌日、ムベングは、ウーリー河を丸木舟に乗って上流に漕ぎ出し、密林の中に分け入った。

(俺は一体〝アフリカ人〟なのか。それとも〝黒い衣を着たヨーロッパ人〟なのか)

ムベングは、自分の存在場所を何処にもとめたら良いのか。丸木舟を漕ぎながら故郷の河に問いかけてみた。

(アフリカの魂を封じ込め、フランス文化の洪水に溺れた一人の男が極東の日本にまで行ってみた。だが、そこにも安住の地はなかった)

ムベングは、ドイツの詩人カール・ブッセの〝山の彼方の空遠く〟を口ずさんでいた。

スコールが襲ってきた。雨が河の水面を叩き飛沫をあげている。風が出た。河は波立ち、丸木舟はゆれ、強い雨がムベングの顔や胸を容赦なく打ちつける。両岸の森の猿は、雨と風を避けるため、木々の枝に飛び移り、奇声を上げて仲間にスコール(はやて)の襲来を知らせている。鰐も水面から顔を上げ、岸に向かって泳いで行った。

ムベングは、本能的に危険を察知し、丸木舟を操って人家のある岸に着けた。少年の頃の野性の魂が蘇ってきたような気がした。

(五)

東京本部からムベングのアルバイト承諾文書が事務所に届いた。桂木は、早速ムベングに連絡した。翌朝事務所に来た彼に早速溜まった資料の整理を指示した。

「ここにある資料を項目別に整理し、優先順位を付け、それぞれ簡単に日本語でコメントして欲しい」

桂木の指示を受けたムベングは適確に仕事をこなし、一週間で溜まった仕事を片付けた。そんな時、桂木は妻の由美と相談し、ムベングを自宅に招くことにした。ムベングは、三年間の日本滞在で、すっかり日本食に慣れ、彼にとっては日本料理は、好きな料理の一つとなっていた。

「本日は、お招きにあずかりまして有難うございます。桂木さんのお言葉に甘えまして、遠慮なく伺いました。大変お世話をお掛けします」

ムベングは丁寧な日本語で妻の由美に挨拶した。
「材料が限られていますので、手の込んだ料理は出来ませんが、どうぞ召し上がって下さい」
由美は、海老と魚の天ぷら、焼鳥、肉じゃが、オクラのすまし汁、タロイモ（里いも）の煮物、ほうれん草のお浸し、胡瓜の漬物、デザートには、西瓜を出した。
醤油、味噌などの調味料を除いては、皆現地で調達した材料を使っている。米は、常にマーケットにあるがほとんどインディカ種である。ジャポニカ種の米は、時々輸入される中国米だけだ。その中国米も石が多く混じっていたため、由美は炊く前に敷物の上に米を並べ石を拾い出す。ときどき白い石がご飯に混じったまま茶碗に盛られることがある。そのため石を噛んで歯をいためることも少なくなかった。
「天ぷらは久し振りです。焼鳥も美味しい。奥さん、これならドアラで日本料理店を開くことも出来ますよ」
「でも、ここには日本人もいませんので、商売にはなりませんわ」
「フランス人は、食べることにかけては貪欲ですから美味しければ少々高くても食べに来ますよ。現にドアラには、ベトナム料理店が三軒もあるじゃありませんか」
「そうですわね。ところでフランス人のマダムに聞いた話ですけど、このドアラに鰐を食べさせる店があって、金曜日に一度鰐料理を出すそうです。鰐って美味しいのかしら」
「美味しいです。子供の頃に食べましたが丁度鶏肉のような淡白な味です」
ムベングは、由美との会話を続けながらふと箸を休め、淋しそうな目をして遠くを見詰めた。

桂木は、日本食の味がムベングの心を日本に残した家族の許へ誘っていると感じた。
「奥様がカメルーンにいらしたらまたお招きします。今度は、奥様とお子様をお連れしていらして下さい」
由美は桂木からムベングの家族の事情を聞いていなかったので、何気ない調子で言った。
「はい。近いうちにまた家内や子供と一緒にお邪魔できればと思っています。両親も孫の顔をみたがっておりますので……」
ムベングは、そう言って、一瞬顔を曇らせた。桂木は、由美の何気ない言葉が、ムベングの悲しみを誘うことになったような気がした。
「今夜は、美味しいご馳走を頂き、本当に有難うございました。お蔭様で日本にいるような楽しいひと時でした。今度は、私の両親が桂木さんのご家族を招待しますので是非いらして下さい」
ムベングは丁重に礼を述べ、桂木の家を辞した。近くの草叢で蛙が鳴いている。月の綺麗な夜であった。

雨季も終わりに近いある雨の日の事であった。ムベングが桂木の事務所で働き始めてから一カ月以上が過ぎていた。
「桂木さん。明日休ませて頂きたいのですけれど……。場合によっては、二～三日になるかも知れません」
ムベングは帰宅準備を始めながら桂木に休暇の許可を求めた。

「いいですよ。風邪でも引かれたんですか。それともどこかへ旅行でもされるのですか」
「ええ、ちょっと遠い処へ……」
「遠い処って、ヤウンデにでも行かれるのですか。ところで大使館設立の話は、どうなりましたか」
ヤウデンは、カメルーンの首都でドアラから飛行機で、約五十分の処にある。
「やはり、二～三年内は無理のようです。財政状態が芳しくないようで先送りとなったと聞きました。だから、設立準備のための職員も、今すぐ必要ないとのことです。それから当分新規採用はしないとも言っていました」
「それは残念です。カメルーンで、日本語を生かせる仕事があれば良いのですが……ぼくの事務所も正規職員をもう一人増やすことは出来ませんので、お願いするにしてもアルバイト程度になってしまいます。もし日本企業が進出して来るような話でもあれば真先にムベングさんにお知らせします」
「桂木さんの処の事情は分かっております。どうぞお気になさらないで下さい」
ムベングは笑顔を見せて席を立ち、事務所を出た。夕日もすでに傾きかけていた。

(六)

翌日、桂木は、平常通りに出勤し、書類に目を通していた。十一時頃、ムベングの従兄と名乗る男が来て、桂木に面会を求めた。ドアーボーイのピエールに案内された従兄は、深刻な顔付きで椅子に座るなり桂木に告げた。
「ムッシュームベングが死んだ」
桂木は、従兄の言葉が何か遠い世界のことのようで、全く信じられず聞き返した。
「ええ！　もう一度言って下さい。ムベングさんが死んだって……昨日この事務所で、彼と一緒に仕事していたのに……。交通事故にでも会ったんですか」
「いいえ、自殺したんです」
「そんな馬鹿な！　また、どうしてそんなことになったんです」
桂木には、ムベングが自殺するなんて、思いも寄らなかった。そこで従兄に自殺の原因を尋ねた。
「何故自殺したのか良くわかりません。家族の事とか就職の事とか悩みはあったようです。しかし、まさか自殺するなんて思ってもいなかったと両親も話してました」
「そういえば、昨日事務所を出る前に、二～三日休暇がほしいと言ってました。どこか旅行にでも出掛けるのですかと尋ねたら、ええちょっと〝遠い処へ〟とのことでした。その時は聞きながしてしまったのですが、その言葉は、彼岸の彼方への旅立ちを仄めかす悲痛な叫びだったのですね。気が付きませんでした」
桂木は、何故あの時にムベングの発した言葉の意味を察知することができなかったのか悔やんだ。
(ムベンクは、私に心の悩みや苦しみを聞いて欲しかったのかも知れない。もっと多くの言葉を

交わすことによって、ムベングの閉ざされた心を[redacted]てあげられたのではないだろうか）

桂木は、ムベングのいた机を撫で、その椅子に座ってみた。彼の温もりが伝わって来るようであった。ふと入口のドアーを見た。すると髭面の穏やかなムベングの顔が、幻のように浮かんで見えたような気がした。

従兄は、翌日埋葬式の案内状を事務所に届けて来た。

「ムッシュー桂木、埋葬式には、是非ご出席下さい。あなたは、家族以外で会った最後の人です。ご両親も会いたがっております。柩に花を供えて頂ければきっとムッシュームベングも喜ぶでしょう」

桂木は妻と共に埋葬式に参列した。ムベングの遺体は、ドライアイスの詰まった柩の中に入れられ、霊柩車で自宅から墓地に運ばれて行く。霊柩車の後には、長い葬列が出来ていた。数十人の女性が、悲しい声を上げ歌いながら重い足取りで、行列の後に従った。

墓地には、すでに大勢の会葬者が柩の到着を待っていた。

神父の祈りの後、会葬者は柩の中に花を入れた。花で埋まった柩は、蓋が閉じられ、深く掘った穴底に降ろされた。土地の有力者や友人などが弔辞を述べる。最後に父親がムベングの生い立ちとその人となりを語り、会葬者にお礼の挨拶をした。

女性たちは声をあげ泣き叫び、悲しみを全身で現わしている。由美は、ハンカチを口に当て嗚咽を押さえていたが、その声は次第に周りの人たちにも聞こえる程大きくなった。

やがて柩は、完全に土の中に埋まり、木の墓標が立てられた。

ムベングの父親が埋葬式に参列した桂木に会葬の礼を述べ、ムベングについて語った。

「息子は、日本が大好きでした。再び日本で暮らしたいと言っておりました。日本語の本がたくさん家にあります。私は、息子にカメルーンの将来を担うような人物になって欲しいと願って息子をパリに送ったのですが、八才の息子にとって、それが負担になったのかも知れません。可哀相なことをしました。

でも、大学で、日本語を学びたいと言った時には、反対しませんでした。結婚の時も、日本に留学する時も、反対しませんでした。息子は、いつも幸福を求めて、旅をしている〝さ迷える異邦人〟だったように思えます。

ただ、私は、何時かは、このカメルーンに帰って来るのではないかと思っていました。帰っては呉れたのですが、それがこんなことになろうとは……。きっとこのドアラの土の精霊が、息子にもう何処にも行くなと囁いたのでしょう」

桂木は、参列者の散ったムベングの墓の前に茫然と立ち尽くしていた。涙が止めどなく流れ、墓の土に吸い込まれて行く。すると突然閃光が走り雷鳴が轟き大粒の雨が降ってきた。

（ムベングは何故自殺したのだろう。そこまで彼を追い込んだものは何だったのだろうか。それは本人にしか分からない。いや本人も本当のところは分からなかったのかも知れない。衝動的な自殺だったのだろうか。少なくとも事務所を出る時には、死を決意していたと考えるべきであろう。それでなければあの〝遠い処へ〟という言葉はなかった筈だ）

桂木は、父親の言ったドアラの土の精霊がグのさ迷える魂を雷雨に乗せて招き寄せたのではないかと思った。雨はすぐに止んだ。
雲の切れ間から顔を出した夕陽が、真赤に燃え、の眠る赤土の墓を照らし、森の中に消えて行った。

ソクラクレス

三戸岡道夫

(一)

会議をやっても最近は室内の空気が汚れない。めっきりタバコを吸う人間がへったからである。
東西銀行の今日の会議は収益増強委員会の第一回目で、二十一階の役員会議室で開かれていた。最近の銀行は儲からないので、収益増強委員会はその対策として設置されたもので、メンバーは専務取締役が一人に常務取締役が二人、執行役員が二人、それに企画部長を加えた、合計六名である。
「いやになるほど儲からないね」
委員長である専務取締役が投げやりな調子で言うと、
「ほとんどの銀行が赤字だ。不良債権に株式の評価損。これでは銀行業なんてやっていない方がいい」
堰を切ったように愚痴がとび出した。

「とくにひどいのが不良債権だな。最近の金融行政は、不良債権、不良債権と、不良債権でないと夜も日もあけない。金融再生とは不良債権の処理のことだと思っているから、困ったものだ。さらに何もわかっていないマスコミが無定見な拍手を送るから、まったく眼もあてられないよ」
「そうだ。不良債権といったって、銀行が不良企業に金を貸したわけじゃない。政府の景気のかじ取りが下手だから不況になり、不況のために企業経営がおかしくなって不良債権になったのだ。だから不良債権の責任は銀行にあるのではなくて、政府にある。責任を問われるのだったら、銀行の頭取ではなくて、政府の大臣たちであるべきだ」
「だから公的資金の投入も銀行などへ入れないで、不良債権先の企業へ直接入れ、その金で銀行の不良債権を返済すれば、銀行の不良債権なんていっぺんに片付いてしまうよ」
「こんなやり方じゃあ、銀行は不況産業……、いや崩壊産業だ。日本の銀行を崩壊させてしまって、本当にいいのかねえ」
「よろこぶのは、それをハゲ鷹のように狙っている外国資本だけさ」
愚痴と不平は果てしもない。だが、その対策という段になると、
「うーん」
委員一同首をかしげるばかりで、いっこうに名案が浮かばず、
「もう銀行は駄目じゃないのかな」
「ギブアップだね」
「でも金融庁が何とかするかもね。銀行がバタバタ倒産というのを、だまって見ているわけにもいくまい」
「何とかするものか。不良債権を検査するしか能のない官庁だもの」
これもまた、ガヤガヤ、ワイワイで、果てしがない。ついに委員長もたまりかねて、
「それでは一つ、若手にプロジェクトチームでも作ってもらって、そこで研究してもらうことにしましょうか。その案が出来た上で、もう一度……」
と提案すると、提案が終るか、終らないうちに、
「さんせい！」
「賛成……」
委員たちにしてみれば、こんな泥沼に足をつっこんだような仕事から、はやく足が洗えればそれでいいのであって、成功、不成功は二の次である。若手チームへの丸投げは大賛成である。
かくしてあっというまにプロジェクトチームの編成が決定されて、第一回の収益増強委員会はめでたく閉会となったのである。しかしこれまでプロジェクトチームなどを検討して、成功したためしはなかった。

(二)

プロジェクトチームのメンバーは本部の各部から、係長クラスの若手が選ばれ、収益増強計画の仕事に専任することになった。
リーダーには企画部係長の梶山が当った。しかしいい知恵があるわけではない。銀行経営が八

方塞がりのなかでは、たとえ若手が知恵をしぼり、ソロバンをはじいてみても、儲かるはずもなかった。

「役員クラスが考えても出来ない計画を、我々に丸投げしてきたって、いい案が出るはずないじゃないか」

「役員連中の責任のがれさ」

「どうやって利益をあげるかだって？　冗談じゃないよ。ただ一生懸命やれば儲かるというものじゃない。ここまでくれば、もう金融行政と、経営戦略の問題ですよ。それを変えなくては、儲からない。決める役員さんたちに、まずそれを決めてもらわなくちゃあ」

せっかく編成されたプロジェクトチームでも、計画のスケッチもできないうちから、愚痴と理論が空転するばかりで、ちっとも先に進まなかった。

(三)

そんなある日、リーダーの梶山は変な怪情報を耳にした。

「内線電話の五〇〇番をかけたことあるかい？」

「五〇〇番？　ないな。だって本部の内線はすべて四桁で、五〇〇という三桁の番号なんて、ないじゃないのかい」

「内線番号になくても、かければ、かかるのさ」

「なにか聞えるのかい」

梶山は、ふと、あらぬ期待を空想した。

「まあ、かけてみろよ」

梶山は言われるままに五〇〇の数字を指で押した。すると、けたたましい音楽が衝撃音のように耳に飛びこんできた。

「混線か……？」

「さあ、どうだか」

……

馬鹿にしないでよ
そっちのせいよ
プレイバック　プレイバック

……

その昔流行した山口百恵の歌だった。

「バーか、カラオケスナックか……？」

「わからない」

こんな電話の混線は、ときたまあることはある。それにしてもバーとはうまい所と混線したものだ。いやそれとも、あのけたたましいミュージックは、カラオケスナックかもしれない。梶山はなんだかたのしい気分になっていった。

そんなことがあってから、梶山はひまがあるとこの混線電話を聞いてみた。受話器を耳にあて、

電話をするふりをして、仕事中に、バーから流れる音楽をたのしんでいるなんて、ちょっと背徳のよろこびがあった。

……

馬鹿にしないでよ
そっちのせいよ
プレイバック　プレイバック

……

そのうち一人だけで楽しんでいるのはもったいないと、チームのメンバーはもちろん、出逢う人ごとに教えて歩いた。人々は受話器を耳にあてると、言いあわせたように梶山の方を見てにんまりと笑った。

だがそのうちに、奇異なことに気がついた。

「この電話、同じ曲しかやらないね」

そう言われてみれば、たしかにそうだった。いつ誰がかけてみても、山口百恵の（馬鹿にしないでよ、そっちのせいよ）の曲ばかりなのである。なぜなのだろう。

最初のうちは、どこかに山口百恵偏執狂みたいなのがいて、くり返し同じ曲をかけているのかと思ったのだが、それにしてもひどすぎる。もう一週間以上になる。一週間以上も同じ曲ばかりということになると、もう気違いである。

だが、もう気違いでないとすると、同じレコードがオートマチックに、くり返し廻っているか、

それともエンドレスの音楽テープがかかっているか、どちらかである。廃業になったバーの暗闇で、はずし忘れたテープだけが空しくエンドレスに鳴りつづけているのかと、想像の翼を伸すと、それは殺人事件のあった無人の部屋で、ラジオだけが何年間も死体の側で鳴りひびいている空想へとつながっていった。

ひょっとするとこの五〇〇番という内線は、どこかの黄泉（よみ）の国に接続されているのではないかと、梶山はぞっとした。

（四）

怪電話の正体は何か。

たんなる混線でないことは、はっきりした。一週間以上もあんな異常混線がつづくはずはない。それを突きとめなければ……。

どこで調べたらわかるだろうか。とりあえず電話交換室に問いあわせてみた。だが若い電話交換手の、

「あら、ほんと、聞こえるわ。どうしたのかしら、いちおう調べてみまーす」

という頼りない返事。あまり期待できそうにない。

本店ビルのメンテナスは管理部の担当だと見当をつけた梶山は、管理部の管理課に連絡してみると、

「それはまったく気がつきませんでした。さっそく調査します」

という課長の返事だった。そして二、三日すると、さすが担当部のことだけあって、その原因はすぐわかった。

「電話交換機を納入したSS電機に問いあわせ、技術者にきてもらったところ、この本店ビルが出来上がって電話交換機を据えつけたとき、技師が当面使用する予定のない五〇〇番という番号に音楽をセットして、通話テストをしたということがわかりました。それがエンドレステープで、百恵ちゃんの『馬鹿にしないでよ』の曲だったのですが、開通のあと、消すのを忘れてしまったものだから、そのまま鳴りつづけていたのです」

課長の説明は明解だった。あまりにすばやい解明は、少しあっけなさすぎた。

機械は馬鹿だから、ストップがかかるまでは、いつまでも鳴りつづけていたわけである。しかし本店ビルが出来て以来、昼となく夜となく、ひっきりなしに歌いつづけてきたのかと思うと、機械とはいえすこし哀れに思えた。誰も気がつかない交換機のなかに埋めこまれたまま、永久に歌いつづけるテープの音は、ビルのセメントの中に誤って埋めこまれた人間が、

（助けてくれ、助けてくれ！）

と永久に叫びつづける亡霊の声のように、梶山には思えてならなかった。

（五）

怪電話の正体もわかってしまえば、なんだ、そんなことだったのか、ということで、管理部の

課長は、

「さっそく音楽は取りはずしました」

と報告してきたが、正直いって梶山には怪電話に対する多少の愛着があって、「調べてくれ」とは言ったが、「外してくれ」とは言わなかった、と言ってやりたい気分だった。残っていれば、まだ知らない人に教えて驚かすたのしみがある。そのたのしみが、なくなってしまった。この近代的な超高層ビルの中には、怪談のひとつぐらいあってもいい。

そう思うと梶山は急にあのプレイバックの音楽がなつかしくなって、もう一度ダイヤルボタンを押してみた。

五〇〇。

しかし、もう、なんの応答もない。

無音。

梶山はがっかりした。

だが、その時、ふと、梶山の頭に別の考えがひらめいたのだった。音が聞えないのは、音楽が本当になくなったのではなくて、前と同じように廻ってはいるのだが、ただ外へ聞えないだけなのではなかろうか……。

この考えはかなりミステリアルで、しかも新鮮な考えだと思った。百恵ちゃんの曲はいぜんとして交換機の中でエンドレスに廻っている。ただ人間の耳には聞えないだけなのだ。今後も誰に聞かれることもなく、永久に百恵ちゃんは歌いつづける……。

そう思ったとき、梶山の頭に収益増強計画についてのアイディアが、突然ひらめいたのである。それはあまりに素晴らしいアイディアだったので、われ知らず、

「あっ……！」

と叫び声をあげたくらいだった。これで利益増強計画がうまくいく……。

そのアイディアを実現するには、コンピューターの使用が不可欠だった。梶山はさっそくコンピューター・システム部から、システム・プログラマーの鳴滝を呼んで、二人でひそかに秘策を練った。

アイディアが素晴らしければ、素晴らしいだけ、コンピューターにのせるソフトウエアが難しい。コンピューター・システム作りには六カ月もかかったが、それでも予定通りに計画書は出来あがり、

「せっかくの名プランだから、いい名前をつけたいね」

「強くて逞しい名前がいい」

「アルギンZ（ゼット）計画というのはどうだろう」

「ずっと昔のドリンク剤かなにかに、そんな名前があったなあ」

「それじゃ、ヘラクレス計画」

「なんだい、そのヘラクレスって？」

「知らないのかい、これさ」

鳴滝はそう言って両腕を上にあげると、たくましく曲げて見せて、

「筋肉もりもりの、強い奴さ。いつか、どこかのコマーシャルでやっていたよ、ソクラテスよりヘラクレス……」

「でも、筋肉だけじゃなあ……」

「それじゃ、ソクラテスとヘラクレスを合せて、ソクラクレス計画……」

「うん、いいね」

こうして計画はソクラクレス計画と名づけられ、利益増強委員会へ正式に答申された。

委員会ではそれを基にして長期利増強計画書を作成し、頭取の承認を得て正式にスタートさせた。それによれば東西銀行の収益は、今後確実に増加する予定であった。

（六）

こうして東西銀行のソクラクレス計画は、順調にすべり出したのである。

計画の内容は、預金の増加、貸出金の増加、貸出金利の目標、手数料収入、不良債権の償却、人件費、物件費など、おびただしく細かい項目の実績と、将来の目標値がインプットされ、それを達成するために全国五百カ所に配置された支店が、一生懸命に働いた。

その結果、東西銀行の業績は順調で、半期がすぎ、決算の数字が出てみると、予想以上の儲かりようで、

「えっ！　こんなに本当に儲かったのかい」

上園頭取も驚くほどの数字であった。
数字はコンピューターから正確に出てくるから、間違いはない。行員たちは、押えても、押えても、こみあげてくる笑いを噛み殺しながら、
「我々は予想外に働いたんだなあ」
「利益なんて、結局、ちょっと頑張れば儲かるものなんだよ。そう神経質になることないさ。なにせ八十兆円の金が動いているんだもの。実行　実行、要は実行力あるのみ。我々の力も見捨てたものじゃないね」
上園頭取以下すっかり自信をつけ、リストラなどは無関係、その年の暮のボーナスはたっぷりと出て、競争相手である他の銀行をうらやましがらせた。プロジェクトチームのメンバーにはボーナスが特別加算され、さらに上園頭取から、一晩、中華料理をごちそうになるという栄誉も与えられたことは、もちろんであった。
さて、こうなると、マスコミが東西銀行を放っておかなかった。東西銀行以外はどの銀行の決算も、不良債権の償却を中心に、大赤字の時であったから、
「不況にあえぐ金融界にあって、唯一、高収益の東西銀行」
とA紙が取りあげると、つづいてB紙、C紙と、先を争うように東西銀行のソクラクレス計画を取りあげ、四大紙が終れば、次はおびただしい週刊誌、雑誌、テレビ番組にと、あっという間にスターダムにのったタレント歌手よろしく、東西銀行がマスコミのどこかに出ていない日はないといった有様。

「奇蹟の銀行、東西銀行」
「二十一世紀の経営を先取りする東西銀行」
「若手のアイディアを経営に生かした稀有な銀行」
こうなるとプロジェクトチームのメンバーたちも、しばしばマスコミの舞台に引きずり出され、上園頭取に至っては、もう経営の神様といった具合だった。
（世の中の経営者はすべからく上園頭取に学ぶべし）
そんなキャッチフレーズが、雑誌、新聞に氾濫し、そうかと思うと上園頭取は経営講演会や経営セミナーの講師にひっぱり出されて、ほとんど席のあたたまる暇もなかった。するとそんな席上でよく質問が出た。
「この難局時に、頭取がセミナーなどでいつも銀行を留守にしていて、よく東西銀行さんは儲かりますな。わたしの所なんて、頭取のわたしが朝から晩までキリキリ舞いしていても、なかなか思うように儲かりませんのに……」
当然の質問である。すると上園頭取はいつも自信をもってこう答えるのだった。
「それがソクラクレス計画の強みです。ソクラクレス計画が動いているかぎり、東西銀行の収益は大丈夫です」
「はあ……？」

（七）

ソクラクレス計画はついに現代の怪物になったといっていい。

しかし若干、合点のいかめぬところがあった。

それはソクラクレス計画をいくら勉強しても、セミナーでレクチャーを受けて帰っても、どの企業もさっぱり儲かるようにならないことであった。

「ソクラクレス計画って本当に効くのかい？」

だがそうした質問に、いつも上園頭取はこう答えた。

「計画はあくまでも計画。その計画を実現させるのが、君、経営者の能力というものさ。ワ、ハ、ハ……」

要はやる人次第というわけである。なんだか、かつて一世を風靡した「紅茶きのこ」のような工合になってきた。

現に東西銀行のなかにも、ソクラクレス計画のうさん臭さに、なんとなく気づきはじめている人間が、二、三いた。まず、梶山といっしょに仕事をしたプロジェクトチームのメンバー達である。ソクラクレスのコンピューターシステムは、梶山と、システム・プログラマーの鳴滝が、二人で極秘に作りあげたものなので、他のメンバーはその内容をまったく知らないからであった。

「おれ達、こんなに誉められて本当にいいのかなあ」

まずそんな素朴な疑問が彼等を襲った。

「そうだなよなあ。プロジェクトチームといったって、おれ達はそれほど大した計画を作った覚えはないよなあ」

「今までの長期計画とくらべてみたって、それほど変っているわけじゃない」

「そうなんだ。係数目標だって、従来のトレンドに若干の意欲を加えて修理した程度で、飛躍的に業績があがるようなものじゃない。だから上園頭取が経営の神様といわれるほど、うまくいってる筈はないよなあ」

「業績は普通なのに、どうして利益ばかりがあんなに出るのだろう」

自分の銀行でありながら、自分の銀行がなんとなく不気味なものに見えてくるのだった。

（儲かっているのだから、いいじゃないか）

と、単純にそう言っていられない雰囲気である。

ソクラクレスとはいったい何物なのか。

（八）

その年の暮れが近づいた。

木枯が吹き荒れ、ジングルベルが鳴り、歳末セールスの垂れ幕が風にはためき、銀行員は収益増強作戦に忙しかった。

しかしそんなあわただしさの中でも、毎晩のように、どこかで忘年会が行われていた。

梶山たちの収益増強プロジェクトームはすでに目的を達し、すでに解散されてしまっていたが、

年の瀬になると誰が言い出すともなく集っては、郷愁のように忘年会をやっていた。今年の会場はすし屋の二階だったが、今夜はまだあまり酔いも廻らないうちから、

「ソクラクレスって、いったい何なんだい」

というのが話題の中心になった。

「ソクラクレス？　わかんないよ。そんなもの」

「自分で作っておいて、わからないってことがあるかい」

「そうからむなよ。たのむから、酒くさい息を吹きかけないでくれ」

だが、それがきっかけで忘年会はたちまち、

「ソクラクレスって何なのだ……」

「ソクラクレスの正体は？」

ソクラクレス一色に塗りつぶされて、いつのまにか一同の視線はまず梶山に集中され、次のその視線を、システム・プログラマーの鳴滝の方に移動させていったが、

「ソクラクレスの正体は、つまるところコンピューターシステムにあるのだろう？」

チームの中で一番勘の鋭い尾花がぴたりと言った。

「最初チームの中にはシステム部の人間はいなかった。それが途中から鳴滝が入ってきた。もちろん最近はなにをやってもコンピューターの手を借りなければ何もできないから、システム部の人間が入っても少しもおかしくはない、いや、入ってむしろ自然なのだが、しかしそれならば、最初から入っていればいいじゃないか。それが途中から突然入ってきて、入ってくると、にわかにソクラクレス計画が出来あがった。そこに謎をとく鍵があるような気がするな」

（さすが尾花の頭は鋭いな）

と梶山は思いながら、尾花の痩せぎすで神経の細かそうな横顔や、よく動くうすい唇を眺めていた。

「聞くところによると上園頭取は調子にのって、今度、経営大学を作ってその理事長もやるっていうじゃないか」

「銀行が出資してかい？」

「そうだろう。自由化、グローバリーゼイションの時代だよ。儲っていれば、何だって出来るんだ」

「いよいよ頭取の本業の方はお留守になるね」

「頭取にそんなことさせておいて、本当にいいと思うのかい」

尾花は酒を飲むと蒼くなる顔をひきつらせて、梶山につめ寄ると、一言、

「梶山、大丈夫、完全犯罪だろうな」

斬るように言った。

（完全犯罪……？）

酒に酔っぱらっていた一座は、一瞬、シンと静まった。

(九)

「完全犯罪という言葉にまともに答えようとすると、ちょっと難しいが……」

と梶山は言葉を選びながら、

「ソクラクレスは犯罪ではない、しかも完全なシステムである、そう言えるだろう」

梶山の言い方があまりにはっきりしていたので、さすがの尾花もすぐにそれに反論する言葉が出せないでいると、梶山はさらに、

「犯罪どころか、それは合法システムなんだよ」

と、くり返すように言い、

「我々プロジェクトチームは利益増強計画なるものを検討した。だが、利益とはそもそも何なのか。決算とは何なのか。改めてそう問われてみると、明確にこれだと言える人間は居ないのではないかな。利益とは、要するに決算の結果をはじき出した、数字にすぎないのだ。たとえば、ここにある徳利のように……」

喋りながら梶山は徳利を持って左右に振りながら、

「利益は形としてはっきり眼に見えるものじゃない。計算されて出てきた、単に数字にすぎないのさ。誰もこれだと言って、摑むこともできない、触れることもできない。ちょうど神様のようなもので、眼には見えない、手にふれることもできない。だから鏡とか宝剣とかを御神体としてにしたがって計算されて出てきた数字を、信ずるほかはないのさ。それが違うといったって、誰もそれを『違う』と立証できやしない。たとえ計算し直してみたって、その数字もやはり計算されて出てきた数字にすぎないのだ。どちらも同じ数字である。どちらが正しいという根拠は、どこにもない。『正しいと信ずること』、それが正しいということだ」

梶山はそう一気に喋りまくった。

かつて梶山はこんな話を聞いたことがあった。その頃は経理部経理課という課があって、銀行全体の収益予測事務をやっていた。まだ銀行事務へコンピューターが入らない頃で、女子行員がソロバンではじいてやっていた。その女子行員がある日、突然、

「貸出利廻りの数字がちがっていました」

と言い出したのである。しかしその時は、すでに銀行全体の利益がその間違った数字で走り出してしまっていたので、期の途中からの大幅な利益修正は大変困難で、上を下への大騒ぎになった。課長は部長から大目玉をくらった。

そもそも銀行全体の収益の基礎となる重要な数字を、一女子行員のソロバンの数字だけに頼っていることにも問題があるのだが、しかし仕事というものは個々の数字をいちいち疑っていたのでは前へ進まない。それからというものその課長は、

「今度は大丈夫かい」

と念には念を入れた。

「大丈夫です」

「絶対……？」
「ええ、絶対に」
だが、その絶対という保証はどこにもないのである。ただその女子行員の『絶対に』という言葉を、信ずる以外にないのである。
この女子行員のことだから、また半年もたたないうちに、
（また間違っていました）
といいかねない危険がある。そうなったら日もあてられない。しかし課長が今やれることといったら、
「大丈夫か、大丈夫か、絶対大丈夫か？」
としつっこく念を押し、彼女が答える、
「大丈夫です」
という言葉を信ずる以外ないのである。
疑っていけば、きりがない。どこまで疑えば正しいのか、無限地獄に落ちるばかりである。かつて女子行員が手で計算していたものを、いまはコンピューターが計算している。だからコンピューターの数字を信用するより外は手がないわけで、それは利廻りであろうと、銀行収益の数字であろうと、同じである。
「すると要は、コンピューターから儲かったという数字をはじき出させる。そうすれば銀行は儲かったということになる、まあ、そういうわけなんだな」

尾花が結論を出すように言い切った。
「さすが尾花だ、鋭い。そうこなくっちゃな。コンピューターにいつも東西銀行が儲かるような数字が出てくるプログラムを組んでおけば、それで我々の収益増強計画は完了なのさ。コンピューターからはその数字しか出てこないのだから、それが唯一絶対の東西銀行の収益……」
「なるほど、嘘の数字でも、それを信用すれば、それが本当の数字ということか」
「そして考えてみろよ、こうした計算が実はコンピューターの一番得意な分野なんだ」
「そのコンピューターシステムを、梶山と鳴滝の二人で極秘に作ったというわけか」
「その通り」
「それでは紛飾決算じゃないか」
誰かが言った。
「だが君、それが紛飾ということを、誰が、何によって証明するのさ」
梶山は自信をもって答えた。
「コンピューターによって正しい数字を……」
「だが正しい数字といっても、コンピューターからは、この数字しか出てこないのだよ」
悲しいことに、人間ではコンピューター以上に複雑な計画を、コンピューター以上にはやいスピードで、計算できないのである。

(十)

何のことはない、マスコミを騒がせている東西銀行の高収益は、コンピューターの計算システムによる架空利益だったのである。しかしそれを誰もが発見できず、そして誰もがそれを信じていれば、それが本当の利益なのである。

「でも一時的にはそれでいいとしても、長く続けていれば、必ずどこかに変な所が出て、ばれてしまうんじゃないのかい」

「そこがシステムの完全なるゆえんさ。たしかに架空利益が累積していけば、どこかにおかしな所が出てくる。たとえば現金勘定が足らなくなるとか、貸出利廻りが低下するとかだ。だが、そうした現象が起きると、すぐにそれをコンピューターは修正してしまうんだ。そうしたシステムが組み込んである。コンピューターは永久にこの修正作業をつづけるのさ」

「ふーん」

さすがの尾花もため息まじりに感心して、

「で、どこから、そのアイディアを……？」

発想の原点に興味をもった。

「ほら、あの百恵ちゃんだよ。馬鹿にしないでよ、そっちのせいよ、プレイバック…」

梶山は歌うように言い、

「例の怪電話さ」

梶山は、エンドレスに歌いつづける怪電話から、永久に嘘を修正しつづけるコンピューターシステムを思いついたのである。

「なるほど。しかしシステムは永久でも、本当に永久にボロが出ないかなあ」

「理論的に言えば、架空利益の累計が銀行の資金量を越えてしまえば、システムは誤解する。いや、実際にはもっと前にパンクするだろう。だが少くとも、百年や二百年は大丈夫だ。少なくとも、おれ達が生きている間は保証できる」

「すると、経営の神様である上園頭取も大丈夫というわけだ」

「だから上園頭取がセミナーで何を大言壮語しようと、ね、ちゃんと儲かるようにコンピューターが作動しているわけだから。安心さ。経営大学でも何でも作ってくれ。少なくとも頭取が死ぬまではソクラクレスのインチキ計算はばれないのだから、上園頭取は一生涯経営の神様でいられるわけだ。そして頭取自身もそれを信じて死ねるのだから、幸福な人間さ」

「いい気なもんだ」

「だが、我々だっていい気なものさ。ソクラクレスのお陰で、給料がもらえて、ボーナスももらえて、そのうえ銀行が倒れる心配もないんだからな」

「そのかわり百年たったら大変だ。ある日、コンピューターが突然故障する。すると狂ったようにおかしな数字を吐きつづける。まるでコンピューターが下痢したような症状になる。調べてみると、びっくり仰天。百年以上にわたって架空利益を計算しつづけてきたので、コンピューターシステムが破裂し、東西銀行の資産内容はちょうど、白蟻に喰い荒されて内部が空洞になった大

木のように、すっかりガラン洞になってしまっていることがわかるんだ」
「上を下への大騒動……」
「でも、そんなこと、知っちゃあいないよ、おれ達の死んだ後のことだ」

忘年会が終って、梶山は一人で電車に乗っていた。
窓の外を冬のネオンが宝石の輝きのように流れる。闇に光るきらめきの集団は、まるで拡大したIC（集積回路）の内部をのぞいたようだった。
コンピューターの心臓部ともいうべきCPU（中央演算装置）の中には、おびただしいICが静謐に並んでいる。人眼の届かないそのCPUの中で、今日もコンピューターはせっせと架空利益を計算している。そしてこれから五十年、百年と、誰にも知られずに、まるで地下水のように計算しつづけて、止むことがないのである。
そのエンドレスの計算を思ったとき、梶山の中に、突然、あの怪電話の音楽がよみ返ってきたのである。

……
馬鹿にしないでよ
そっちのせいよ
プレイバック　プレイバック
……

〈執筆者紹介〉

瀧澤（たきざわ）　中（あたる）

作家・政治史研究家。『政治のニュースが面白いほどわかる本』（中経出版）がベストセラーとなり、以後時事関係、伝記、現代小説、時代小説などを発表。
特に幕末史に詳しく、本編に収める『さち』も三割の史実に七割の想像であろうが、読者はすべて実録であったとして、あの時代を明確に記憶し納得する。動乱の陰に埋もれた明治の一婦人の貞節――最近の日本女性は失って了ったが――の強さに圧倒される佳編。
著書多数。他に月岡兎平（とへい）のペンネームも持つ。（日本ペンクラブ会員）
ホームページ●http//WWW.t-linden.co.jp/book/

鈴木（すずき）昭三（しょうぞう）

庶民の世界に光を当てた、いわゆる「語り」の名人であり、その筆歴はすでに五十年になんなんとする。氏は十数年前、胃ガンの手術をしたが、「ガンの告知」賛否

についてのエッセイが文芸春秋に採用され、紙面を飾った。がそれはエッセイといっても、ちょっと手を加えれば、見事な短編小説に仕上がっていた。「まんじ」には「ねずみ小僧丸楠（マルクス）」という巷談を連載しているが、読者に、次回を、次回をと催促させる面白さであり、本誌掲載の「きもないさん」は、そうした昭三小説のルーツとなる傑作中の傑作である。

島津隆子（しまづたかこ）

幕末の志士への沈魂の作品はどれも面白い。濡れ場も手慣れたもの。共感する歴史上の人物に挑戦することに作家魂が滾（たぎ）ると言う。最近は時代を遡上して日野富子、和泉式部らの女の性に光を当てた。本編もその流れの一つ。詩歌、特に漢詩のもつ「文章では到底敵たり得ない簡素な爽快美」に魅かれるという。作品中に採り入れることで効果を生んだと語る。著書多数の円熟した実力派女流。月刊誌の「歴史読本」（新人物往来社）等にも度々登場する。（日本ペンクラブ会員）

森　実与子（もりみよこ）

珠玉の如き爽やかで味のある中短編を書く。ヨーロッパ、特にイタリアに気軽に

出掛けその度に佳篇をものにして了う。TBSドラマ「世界で一番熱い夏」（青春出版社）を小説に仕立て直したり「聖ヴァレンタイン物語」（三一書房）で愛のストーリーを紹介してくれる。西欧文明の根源たるキリスト教の教養がバックボーンとして確立している人なのであろう。

一方「幕末・明治　美人帖」（新人物往来社）等わが国の女性の歴史にも詳しい。今後メキメキと抬頭することを予感させる未だ若い美貌の紅一点。

中泉聖司（なかいずみせいじ）（本名・中司州俊）

本業は司法書士。脱サラして今日を築いた。ゴルフは何と片手シングルでその道でも有名。

恵まれた体力と智力、経営力と人脈で県内最大手の事務所を経営。体育会系と思いきや文学への夢捨てきれず現代小説を書き始めた。仕事がら銀行との接触多く現下吹き荒れる貸しはがしの実態を抉る社会派の佳作。

もともと脚本・シナリオを好んだ文学青年と自称するが、「まんじ」に発表した処女作は迫力あるハードボイルドで石原慎太郎を髣髴させると絶讃を博した。満を持して放った二作目。

千坂精一

中世から江戸時代にかけての名家に上杉家があり、その上杉家の筆頭家老として、元禄忠臣蔵のときには千坂兵部という名家老がいたが、氏はその末裔に当る。従って上杉家を中心とした歴史への造詣は奥深く、特に江戸時代後半における上杉鷹山の米沢藩改革についてはオーソリティである。「まんじ」には氏の戦争体験を基にした「体当り戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと」を連載し、戦争とは何か、死とは何か、という戦争哲学、人生哲学を追求している。（日本ペンクラブ会員）

鯨游海（本名・池上貞夫）

この国では今や寥々たる漢詩人のひとり。これ迄に発表した詩は三百首を越えたという。最近は漢籍の解釈いわゆる定説に疑問を見出すのが面白いと嘯く。論語の数篇について異論を発表。一面識もない合山究九州大学大学院中国文学系の教授に論考を送りつけ、賛意を得たと独り悦に入っている。

文学開眼は若き日に聴いた犬養孝先生の「万葉集の講義」と広言する。元銀行員。進むべき途を間違えた？　著書「潮哮録（栄光出版社）」他。（日本ペンクラブ、全日本漢詩連盟等会員）

大澤鷹雪（本名・大澤孝征）

弁護士。地検元検事として宮崎のデパート巨額詐欺事件を担当し名を馳せた。TV朝日「警察24時」TBS「ジャスト」「ブロードキャスター」などお茶の間番組に長年レギュラーとして出演、その明解な解説には主婦を始めとする視聴者に人気がある。東京第一弁護士会元副会長。

その超多忙な人が秘かに俳句を詠んでいた。何時作るのかを問うたところ「朝夕の通勤電車の中」という。他に横笛も吹くがこれは車中ではあるまい。

俳句については未だ初心者と謙遜するが月一回の句会には殆んど欠席したことがないという熱心さでメキメキ腕を上げたと俳人戸恒東人が賞讃する。

著書に「犯罪少年（ザネット出版社）」句集に「橡若葉」がある。（マロニエ句会会員）

新井宏

「一度小説を書いてみたい」のが夢。「読者に想像力を膨らませる文学的表現が出来ない」と嘆く。ロマン溢るる多才な人だから一度書けば見事な恋愛小説ものにすると思うのだが……。工学博士ながら少年時より歴史、考古に魅かれ、ライフワー

クとなった独創的な「古韓尺」という尺度の考証に情熱を注ぐ。最近文献上の証拠も発見、日韓考古学会で発表、永年の論争に決着をつけた。本業は金属。会社定年後招かれて韓国慶尚大学客員教授となりなお探究の手をゆるめない。「最高の贅沢は学問すること」が持論。金属、考古関係の著書多数。（日本考古学会、計量史学会等会員）

宅見勝弘（たくみかつひろ）

同人の中では最も春秋に富む三十代。都の西北に学びまた現在も東南（三田）に学ぶという珍しい経歴。都市銀行に勤めて、十四年目。銀行では、融資をはじめ、不良債権処理やシステムの業務を担当。不良債権回収をテーマに「都市銀行『爆発物処理班』」という銀行小説を連載中。デビューは「サラリーマンとしての鴎外」。他に、「世界史の法則」（西洋・東洋文明の八〇〇年交代説）・「邪馬台国沖縄説」・「源平交代思想と謙信・信玄」といった歴史エッセイも書いている。

さて、人生は面白い。同人の大沢鷹雪氏に学生時代遠くから私淑していたが、何と今般図らずも「まんじ」という釜で同じめしを喰うことになり誰よりも喜んだ。

隆恵（りゅうめぐむ）（本名・高橋恵隆）

日本古代史にあくなきロマンを抱く万年青年。音楽（オペレッタやジャズ）や歌舞伎、旅にも情熱を注ぐ多趣味なる教養人。元銀行員。先般「まんじ」87号に掲載の「日本の金融システムへの提言」が識者の目にとまり、竹中平蔵大臣の失政を衝く論考として月刊『金融ジャーナル』誌五～六月号に掲載された才子でもある。本誌では継体天皇の謎に迫る。「まんじ」84号「吉備津路歴史ロマン」も佳作であったのは記憶に新しい。

青木昭成（あおきあきなり）

旧制掛川中学では同人の三戸岡、紙透、鈴木、伊澤、宮城らと同期同窓だったと聞く。証券マンとなり定年退職、詩人として遊ぶ。現代詩は俳句、短歌、漢詩のような定型詩ではないので一見自由で易しいようにみえるが実は一番難しい。リズムを一篇毎に自から創らねばならないからだ。しかし氏の叙情はリズムカルに飛翔する。時に涙が出る程優しく、時には鼓膜に突きささる程厳しく。「まんじ」80号の俳論「蕪村のこと」もいぶし銀の如く忘れられない好篇だったがさて本号の作品は如何。早く読んで見たいものである。著書に「詩集・茄子紺いろの（帝国出版リンデ

ン）」がある。

石黒修身（いしぐろおさみ）

今年六月八日日）の朝日新聞の歌壇、馬場あき子選十五首の中にまた氏の歌が選ばれていた。入選する割合は一％だと聞くが、これで氏の歌は他紙、誌を含め幾首活字になったことであろうか。もともと素質はあったにしても、本格的に始めて未だ数年だというのに。天性の才能が二度大病をして後急に開花したのか。それでも自らは「未だ〳〵推敲不足」と謙遜自戒される。他者への優しい眼指しと素直に歌にして了う感性は流石である。道産子で柔道は講道館三段の元銀行員。

今春処女歌集「時潮の波に（栄光出版社）」を出した。

（歌会「泉」会員「万象」同人）

紙透寛夫（かみすきひろお）

「まんじ」に「紙透家の人々」という長編を連載している。父親が戦時中、憲兵という任にあったため、戦後、戦犯にあい、巣鴨プリズンに囚われていたが、その父

親の戦中戦後の膨大な日記が残されている。当時子供だった氏も、父親に従って家族ともども北朝鮮を中心に任地を転々としたが、その体験と父の残した日記を主軸にして、戦時中の一家の運命をスケール大きく描いている。本誌掲載の作品はその核心となるものである。

鍋屋次郎（なべやじろう）（本名・太田善朗）

隠れキリシタン研究家でその道では有名。著作はキリシタンに題材を求めたものが多いが銀行を舞台とした金融犯罪ものも流石に迫力がある。

銀行定年後、北欧の福祉事情を視察、ボランティア活動に情熱を注ぎ東奔西走の活躍。生来の正義感と行動力、弱者に対する愛情がその誠実な人柄と相まって着々と成果を挙げ今やＮＰＯ法人ニッポン・アクティブライフ・クラブやＮＰＯ法人びーのびーの（子育て支援）の主要幹部として不可欠の人材となった。日本将棋連盟四段の腕前の将棋に一息入れる。

相原精次（あいはらせいじ）

平成十五年三月に定年退職したが高校の国語教師が本職だった。だが執筆者は長

い間日本史の先生と思い込んでいた。神奈川を始めとする遺跡の探索に心血を注ぎ、また東北地方が明治以降逆賊として歪められた政治観によって理由なき冷遇を受けたと力説する。古代から中世にかけての権力闘争にも独特の視点で迫る。著書多数。最近も「天平の母・天平の子（彩流社）」を上梓したが凡そこんなに多数の著書を刊行した教師はそう多くはあるまい。東西の古典にも通暁し今回もその題材である。各地からの講演依頼も多いと聞くが、なる程講義も巧く説得力があり思わず引き込まれる。永遠の文学青年といえば失礼であろうか。（日本ペンクラブ会員）

宮城克郎

子供の頃から大の愛犬家であり、今でもすばらしい犬を飼っている。いつも飼う犬は日本犬に限られている。氏の若さ、バイタリティの源は、愛犬にありと思われる。

長年の教員生活の後、現在は静岡県教育界の重鎮であるが、言葉を愛し言葉を尊び、言葉に命を注ぎ、その文章は、人の心の誠実、魂の純粋さを追求して、読む人の心を打つ。見事に合一した「純粋」の結晶ともいうべき作品である。

伊澤敏久

長年教師一筋に人生を歩んできた。まじめであるが、まじめでない、そういう人柄が、小説の作風に現れている。「まんじ」への作品には、教師の世界と、歴史の世界とを巧妙にミックスした作品が多いが、これは教師でなくては書けない、というよりも、教師であっては書けないというような切り口で書いているところが、とくに面白い。何でも知っているくせに、何も知らないような顔をしている。今回の「霧の村の新任教師」もそうした資質が存分に発揮された佳作である。

太田精一

元ＪＥＴＲＯ勤務でわが国の戦後経済の復興発展に活躍した戦士。世界を飛び廻った国際派。日本人にはなじみの薄い南米、東欧、中近東、アフリカにも詳しい。定年退職後駐在した各地域の歴史と文化を掘り起し、グローバルな視点でそれら地域の世界史に与えた今日的意味を探求。エキゾチックな描写で異質の文明に迫る。英語、フランス語、スペイン語を解す。

ノンフィクションが多かったが、最近は小説にも意欲的で本集も野心作を掲載した。

三戸岡道夫（本名・大貫満雄）

またロングセラーとなった。「二宮金次郎の一生」である。読売新聞では「今何故尊徳なのか」と特集し、栃木知事は「分度推譲立県」を標榜する。映画化も決定し、着々と撮影の準備が進んでいる。主演は俳優座の加藤剛。混沌の時、文学の果たす役割は重い。

二宮金次郎は最近国際的にも脚光を浴びはじめ、北京大学教授が会長となって日中韓英四カ国の研究者で「国際二宮尊徳思想学会」が設立された。勤勉、分度、推譲などの報徳思想を以って農村を導こうとする動きである。火を付けたのが他ならぬ我等が首魁といえばオーバーであろうか。

（日本ペンクラブ会員）

―まんじの会―

あとがき

「まんじ」は仏教が古くから用いる標章で吉祥を表わしたものである。寺院の記号、標識として用いられている。

もともと悟りを開いた仏陀の頭髪や胸に表われた旋毛の相で、仏の慈悲の心の表われであるとされてきた。

仏教では「生きとし生けるものすべてとわれわれ人間はつながっている」と考えられている。そのすべてをいつくしむ心が慈悲であるという。

季刊誌「まんじ」は、昭和五十六年（一九八一年）このいつくしみの心を大切にする十人足らずの仲間によって創刊された同人誌である。発刊以来すでに二十二年が経った。その間に、いろいろメンバーの移動はあったが、いずれも、それぞれの職業分野で社会的に活躍しながら、書くことへの情熱を失うことなく、著作活動を続けてきた。その中には、すでに作家、文筆家として多くの作品を世に送り出し、活躍している人も少なくない。

平成十二年五月のことである。来る創刊九十号を記念して、これまでの傑作を中心に、加えて書き下し作品も含め、「傑作選」の発刊を提唱する声が仲間の中から上った。

メンバーもすでに二十人を超えていた。小説、現代詩、漢詩、短歌、俳句、ノンフィクション

読物、論考とそれぞれ得意な分野で[illegible]ている多くの仲間が賛同し、一年余りの準備期間を経て出版の運びとなった。

今回収録した作品は二十二篇。その内[illegible]説十三篇、論考三篇、ノンフィクション読物、随筆、現代詩、漢詩、短歌、俳句各一篇となっている。小説は、歴史小説、伝記物語、ビジネス小説、ユーモア小説、体験物語などバラエティに富んでいる。いわば全篇完結の綜合文芸単行書といったところである。

異なるジャンルの作品を通して、異なる文芸の視点、発想、表現方法の面白さを感得頂けることが出来たとすればこれに過ぐる喜びはない。

なお、内容、表現方法、仮名遣いなどについては、各執筆者の意向を尊重し、各人の責任において出版したものであることを付言する。

終わりに本書の出版を首唱され、企画、立案に当たられた三戸岡道夫氏、鯨游海氏のご尽力に深甚なる敬意を表するとともに執筆者各位のご協力に感謝申し上げたい。

また、本書の装丁に花を添えて頂いたカバー絵の鈴木國男氏、裏表紙イラストの宮城正彦氏、出版を心よくお引受け下さった栄光出版社社長石澤三郎氏にも厚くお礼を申し上げる。

編集担当　太田精一　記

まんじ傑作選―90号記念―

平成十五年十一月一日　初版発行

著者　まんじの会
発行者　石澤三郎
発行所　株式会社　栄光出版社
郵便番号　一四〇―〇〇〇二
東京都品川区東品川一―三七―一五
電話　(〇三)三四七一―一二三五
FAX　(〇三)三四七一―一二三七

検印省略

印刷　江戸川印刷所
製本　田中製本印刷

©2003 MANJINOKAI
乱丁・落丁はお取り替えいたします。
ISBN 4-7541-0052-2